PL
777
.5
S5

Sharebon daihyosaku shu
zen

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

洒落本代表作集

全

LIBRARY
MAY 0 5 1971
UNIVERSITY OF TORONTO

PL
777
.5
S5

花乃
普賢像
哥麿筆

松葉館
松葉屋若菜
琴
茶
香
尺八
子の日
小松
定紋
替紋

近代日本文學大系　第十一巻目次

異素六帖……………………尤々道人……一
聖遊郭………………………………………四三
遊子方言……………………田舎老人多田爺……六一
郭中奇譚……………………丹岡先生……八五
辰巳之園……………………夢中山人寝言先生……一〇三
南閨雑話……………………夢中山人……一二九
寸南破良意…………………南鐐堂一片……一五五
賣花新驛……………………朱楽館主人……一九三

中洲雀……道樂散人無玉……二〇七
妓者呼子鳥……田にし金魚……二一七
美地の蠣殼……蓬萊山人歸橋……二四三
芳深交話……穴好……二六五
喜夜來大根……梨白散人……二八一
富賀川拜見……蓬萊山人歸橋……二九五
貞女意題……森羅萬象……三一三
世界の幕なし……木膝亭甲平……三三一
和唐珍解……唐來參和……三四五
古契三娼……山東京傳……三六九

吉原楊枝……………………山東京傳…三九五
通言總籬……………………山東京傳…四一三
一目土堤……………………内新好…四四五
白惚鏡……………………振鷺亭…四八一
驛路または風俗廻しまくら……………………山手山人…五〇九
面美多勤身……………………郭通交 同集交…五二五
傾城買四十八手……………………山東京傳…五四一
京傳予誌……………………山東京傳…五六九
文選臥坐……………………山東京傳…五九七
手段詰物娼妓絹籭……………………山東京傳…六一九

富岡八幡鐘……かはきち…六四三
南品傀儡……南海舍主人…六六三
青樓晝の世界錦之裏……山東京傳…六七九
郭の大帳……山東京傳…七〇一
洞房妓談繁々千話……山東京傳…七二三
深泉遊子仲街艶談……戯家山人…七四三
玉の蝶……關東米…七六三
大抵御覧……朱樂館主人…七九五
新宿○學問……紀南子…八一一
石場妓談辰巳婦言……式亭主人…八二一

船頭深話（せんどうしんわ）……四季山人……八七一
船頭部屋（せんどうべや）……猪牙散人……九三九
やまあらし……柳亭種彦……九六五
解題……文學博士　笹川種郎……卷頭一―一三

目次終

解題

文學博士　笹川種郎

概説

洒落本とは、其の性質から云つた名稱で、形からは蒟蒻本と云はれてゐる。花柳界の通と穿ちとを専らとしてゐるから、洒落本と云はれたんで、半紙半截の恰好が蒟蒻の大きさから蒟蒻本の稱がある。尤も大半紙半截のものもないではない。「近世物之本江戸作者部類」に「明和の季の頃より寛政の始めまで、柳巷花街に耽りぬる嫖客のおもむきを、半紙二つ截りたる小冊に綴りて、よく其の情狀を述べたる誨淫の稗史を、世俗洒落本と喚び做したり、其れが大半紙半枚をもてしたるもありけり。」とあるのは即ちこれである。黄表紙と違つて、文章を主とし、插畫は一二葉位ある許りだ。中には「傾城觿」「小紋雅話」のやうな、圖を主としたものもあるが、洒落本本來の性質から云ふと文章が主であつた。天明から寛政の初めへかけて最も全盛であつたが、寛政三年

山東京傳が、其の著『手段詰物娼妓絹ぶるひ』『青樓晝錦の裏』『大磯風俗仕懸文庫』を教訓讀本と稱して刊行し、當路者の忌諱に觸れて、作者は手鎖五十日に處せられ、板元蔦屋耕書堂は財産半分を沒收せられ、以上三書は固より、從來版行の洒落本も絶板せられ、これよりして洒落本は次第に振はずなり、洒落本一變して中本となるに至つた。

洒落本の嚆矢として、『兩巴巵言』『史林殘花』を擧げるものもあるが、これは當らないこと。尤も『飴賣土平傳』を洒落本に加へるならば、此の二書も洒落本と云ふべきことが出來るが、事實は洒落本でなくして、漢文の花街志に過ぎないこ『史林殘花』と『新刻西都妓品』とを合はせて、卷末に吉原及び島原の細見を錄したのを『合刻兩都妓品』と稱するこ『史林殘花』は地理志、藝文志、律曆志に分ち、末に關井世家第二十卷と云ふものを載せてゐる。

揚屋町　王者の都なり。人物野ならず、文ならず、外に曠夫なく、内に怨女なし。聖王仁者の遺風餘流か。客衆は色を爭ひ、女﨟は美を鬪はす、風流花陣の戰場なり。戰はずして相挑むものあり、口舌を以て遊說するものあり、一夜四五城を下すものあり、太平の樂事なり

異素六帖

二卷。寶曆七年正月板。
『義楚六帖』をもぢつたもので、作者は書家の澤田東江である。『唐詩選』の句や『小倉百人一首』の下の句を竝べて、其の詩句に就いて、洒落れた註解を加へたもので、後の洒落本とは、全然違つたものである。

聖遊郭

一卷。大坂高麗橋筋四軒町、堺屋市左衛門梓行。寶曆七年六月板。
作者詳かならず。新町遊郭の事を書いたもので、揚屋の亭主は李白、客は孔子、老子と釋迦で白樂天なども顏を出す。釋迦と假世大夫とが馴落、其の書置が梵字であるなど頗る振つて、遺憾なく江戶平民文學の特色を發揮してゐる。『道行妹脊の送り火』と云ふ淨瑠璃までも添へてゐるところは、此の作者の非凡なる手腕を見るに足るべきである。洒落本の生命とも云ふべき對話の寫生も精妙で、會者定離、臨命終時不隨者を、あふは別れ、しばしのたのしみぢやと訓するなど、頗る洒落のめしてゐる。
此の書、後に『雪月花』と改題した。此の書の二篇として『列仙傳』と云ふのがある。

遊子方言

一卷。田舍老人多田爺作。明和年間板。

田舍老人は多田屋利兵衛の事で、江戸堀江町四丁目に住んでゐた。此の書の再摺本には板元として多田屋利兵衛の名を掲げ、書目に「郭の大帳」「婦美車紫鹿子」以下十數種の書名を載せ、其の中に「遊子方言」の條には「何れもさま御存じ通書の始まりなり。」とある。半可通、息子、客などを出して、其の人物は對話によつて活躍してゐる。發端、夜のけしき、宵の程、更けての體、しのゝめの頃などある中に、夜のけしきは、地の文にて、處々に花や遣手の呼び聲を插み、江戸節の諷ひ聲などをちよつぴり加へて、

[illegible]、[illegible]切、汁子餅、雜煮のあんばいよきその字屋の名も高く、[illegible]の橋ならず、白きを見する名物は、山屋の軒の赤にすむ、[illegible]かりの月[illegible]を、まだなく四つの拍子木も、それかあらぬか胸下駄の、音に色ふくありさまは、實に夜の錦なりけり。

と結べるなど妙手と云ふべきである、此の書の名が「揚子方言」をもぢつたことは云ふまでもないが、後世の洒落本多くこれに範を取つてゐるほどに、名作である。

郭中奇譚

一巻。丹閭先生作。[illegible]江畫。明和六年板。
新奇笑話、弄花怨言、揚息夜話の三篇あるが、揚息夜話の夜鷹買ひは、罪が無くつて面白い。

辰巳之園

一巻。夢中山人、寝言先生作。明和七年板。
深川の岡場所を寫したもので、発端の、掛合ひなどがあり、末には通言、雜穴などを載せてある。

南閨雜話

一巻。夢中山人作。安永二年板。
深川を描いた作者は、又品川を戯したのである。江戸詰の作事役人と、請負方の地元粋、材木屋の息子、大工の棟梁とが、國許より登つて来た重役人を取巻いての遊興を寫したものだ。

寸南破良意

一卷。南鐐堂一片作。安永四年板。

蒟蒻島の情調を、年季者、一座、武左、番頭、職人、息子、きほひ、手代、髪結等の遊興振りに分ちて敍したものである。武左の野暮、職人の無邪氣、息子のうひ／＼しいなど、とり／＼に其の特色を發揮して面白い。

黄花新驛

一卷。朱樂館主人作、桃江畫。安永六年板。

作者朱樂館主人は狂歌師の朱樂菅江のことで、內藤新宿の樣を寫したものである。俳諧師の仲間が打連れ立つての遊興、息子株の嵐與獨り大もての體である。

中洲雀

一卷。道樂山人無玉作。安永六年板。

一種の狂文とも見るべきもので、洒落本としては、甚だ體裁の違つたものである。中洲の繁榮を描いたものには、朱樂館主人の「大抵御覽」があるが、彼此參照すれば、當時の中洲を知るに足りる。

地物、女郎の眞似をすれば、娘、藝者の風俗を眞似、町人は武士を學び、武士は町人の風を作りて洒落れるは、當時の江戸に於ける時代相であつた。

春は上野、飛鳥、道灌山、日暮の花盛り、夏は水邊、秋は菊見、或は紅葉、冬は顏見せ、初雪の趣向には、秋葉、三圍の景色を見んと、眞崎かけて押出す遊興、景色の地算ふるに遑あらずと雖も、わけて月の名所は、外に中洲の涼所と、近來の大賑ひ云ふもさらなり。

とありて、「されば、開茶屋も是れが爲に劣れを取り、兩國さびれて中洲へ引け。」と、中洲の繁榮を地の文にて寫してゐる。

妓者呼子鳥

一卷。田螺金魚作、湖龍齋畫。安永六年板。

天明七年に再刻した時には、「妓者虎之卷」と改題した。

標題　妓者呼子鳥

作者田螺金魚には、『一事千金』『淫女皮肉論』『當世虎之巻』等の著があるが、神田の町醫の子だと云ふ以外に、其の傳記は知れてゐない。此の書の序文に、一天にて女の踊子あれば、地にまたお豐とお富あり、妙音を以て辨天と呼び、容色によつて小町と稱す。（中略）足を偎むるお豐が終始を、どうらく肌に書きつゞけて、呼子鳥とはなづけはべりき。」とあるが如く、橘町の女藝者お豐の噂を題材として、藝者の風俗、魂膽を寫したものである。

濱の貝砂藝者のうちにも、神田のおかね、中村お国、平松町の文字たゞなんどは、それぞれのよきのみなれども、わざと心と音色と、三つ拍子揃うたる、其の香も高き花たちばな、橘町に名にしあふ辨天おとよと聞えしは云々。

とあるが如く、お豐は名うての女であつた。しかし末段の怪談めいた夢話など、洒落本くさくもない。

美地の蠣殻

一巻。蓬萊山人作。安永八年板。

作者蓬萊山人歸橋は、高崎侯の家臣で、河野某と稱する。狂名を犬の鈍金無と云ふ。安永より

天明へかけて、此の人の洒落本、春毎に出て洒落本作者の巨擘と稱せられたが、京傳の洒落本出づるに及んで、此の人の作は稍衰へた。寛政の初めに、主君から命ありて、戯作の筆を絶つたまた草雙紙の作もある。洒落本の板下には、柳生侯の家臣某氏の筆に成ると云ふ。著はす所、「伊賀越増補合羽籠」「家暮長命四季物語」「龍虎問答」「遊婦里會談」「通仁枕言葉」「富賀川拜見」「愚人贅漢居續借金」「閏月合盡合我」「睦見鋼見御太刀」等がある。

此の書は深川の遊里を描いた洒落本中、「辰巳之園」とともに、秀逸の作として名高い。再鐫「遊子方言」の卷末の出版目録にも、「これも何れもさま御存じの書なり。」とある。此の書中に「辰巳之園」の一節の評がある。

「ナンノ辰巳に書いたかそれば町いふ、山東の新左衛門をつれて、此の道連の店おろしをしたが、よく書いたたら、大方是所あかし様を見せてえと云つても、こゝらだらう。しかしな奴分、あんな不通は少ねえよ、おすこなすこといふやつが、引かれ出工面をするのさ」

門人の通人の遊びを寫したのであるから、五分の隙もない。とりわけ琴糸が「おらはな、南はこんな不器用でも、着物の下はぜんまいだ、二本の足の爪先から、本田にまげたはけさきまで、水道の水とにが鹽だ、日に一度ずし引きする。」の御託をぬかしは、助六贔屓である。

芳深交話

一卷。穴好作。安永九年板。
芳町の男娼を作つての深川遊びを寫したもの。

喜夜來大根

一卷。梨白散人作、勝川春朗(後の北齋)畫。安永年間板。
本鄕大根畑の隱賣女の世界を寫したもので、田舍侍や鼻の落ちた大工などを出して、趣を添へてゐる。

富賀川拜見

一卷。蓬萊山人歸橋作、勝川春朗畫。天明二年板。
深川仲町の遊所を寫したもので、辰巳山樂內之段に、道中雙六に擬して、仲町はおりの評をするなど、却々に凝つた、通なものである。

貞女意題

一冊。森羅亭萬象作。天明元年版。

作者森羅亭萬象は、蘭醫桂川甫周の弟で、森島甫齋と云つた。後に氏を中原と改め、名を中良字を實甫と云ひ、桂林と號した。狂名は竹杖爲輕。平賀源内の門に入りて、作名を源平藤橋と呼びて、淨瑠璃の作があり、後に二世風來山人、二世天竺老人と稱した。また芝全交の門に入り、月池老人、築地善好の號があつたが、いづれも其の居所を取つて斯か稱したのである。戲作では森羅亭萬象、竹杖爲輕、萬象亭、善好等の號を用ゐて、述作する所多く、其の中でも從夫以來記は名作二十三部の一である。十八大通の一人として知られてゐる。文化五年十二月一日、享年五十にして歿した。墓は芝二本榎上行寺にある。

芝神明の道中を寫したものであるが、仙臺の國ものの陸野奥右衛門を借用して、盛んに仙臺訛を遣つてゐる。其の爲に、卷頭に國詞の註釋まで示してゐる。

世界の幕なし

一卷。本膳亭坪平作。天明二年板。

元日の光景を書いて、夫婦喧嘩を種にしてゐると云ふ、洒落本にしては變つた題材ではあるが更に面白味のないものだ。

和唐珍解

一卷。唐來參和作。天明五年板。

唐來參和は、加藤氏、通稱和泉屋源藏、伊豆亭と號し、別號唐來山人、狂名は質草少々、作名を參和と云ふ。高家衆の家臣であつたが、天明中、町人となりて、本所松井町の娼家和泉屋の壻となつた。「作者部類」に、「言行共に老實の好人なるに、さる渡世をするは、過世おやしむべしと云ふ人多かり」とある。黄表紙には名作少なからず。「頼廻能名代家」「莫切自根金生木」は名作二十三部の一であり、「天下一面鏡梅鉢」は忌諱に觸れて、絶板を命ぜられた。文化十二年八月五日、六十七歳にて歿した。深川淨心寺に葬る。

長崎丸山へ唐人が通詞、崑崙奴などを連れて來ての遊興、唐音を用ゐての對話はなかなかに凝つたものである。若者がつい袂から落した越中褌を唐人が三兩二分で買ふ滑稽、崑崙奴のゐるふ

ざけ、とゞ鼠を喰つて嘔吐する段などあり、通詞が反閒苦肉の魂膽を敍して、息をもつかせぬ面白味がある。名作である。

書名は和唐珍解をもぢつたものである。

古契三娼

一卷。山東京傳作、自畫。天明七年板。

書名が虎溪三笑をもぢつたことは云ふまでもない。「異素六帖」「遊子方言」など、洒落本の命題には此の種のものが多い。

吉原、深川、品川のそれ〴〵違つた趣を述べたもので、通と穿ちとから成つてゐる。

吉原楊枝

一卷。山東京傳作、自畫。天明八年板。

「こゝに楊枝といへるものは、楊柳觀音の守り給ふ所にして、口中を清らかになすの佛具なり。その器種々ありといへども、其の中に吉原楊枝と號し、ふさの長さ一寸あり、常に傾城の楊枝箱

に住ひては、女郎のあなを知り、居續客に齒を磨かれては、通客の懷に入つて、その人情をさぐり知る。我こそまことはかの吉原楊枝の精なり。」とあるが如く、楊枝の精に託して、傾城買ひの通を並べたものである。

通言總籬

一卷。山東京傳作、山東鶏日(京傳)畫。天明七年板。

吉原情調を寫すに、京傳の當り作『江戸生艶氣樺燒』に出た、京傳鼻の艶治郎、喜之助、志庵等を以てし、風俗と言語と心意氣と掛引、魂膽とを巧みに綴りあはせて、精細を極めてゐる。

一目土堤（ひとめづつみ）

一卷。内新好作、自畫。天明八年板。

作者内新好は小林氏、内田屋新三郎と稱し、初め茅場町に住し、後本所石原に轉じ、晩年神田小柳町に移り住み、帽網商を業とす。別號魚堂、又魚道、新江等。作名は内新好、享和に至り、白銀臺一丸と改めた。黄表紙に、『妹退治』『高漸學早世中』『年生里花色名代の振袖』『急度心鐵鎖祝明花春爲化』

『花紅葉二人鮟鱇』『景清漂泊日記』洒落本に、『假里擇中洲之華美』『學通三客』『怪談愚草』等の作がある。

本所一つ目の辨天町の岡場所を寫したもので、「南國總洲岡場所辨天講と申すは、元町、尾上町をおなぎなされ云々。」とあるもの即ちこれである。

白惚鏡

一卷。振鷺亭作。寛政元年板。

作者振鷺亭は猪狩氏、名は貞居通稱與兵衛、本材木町の家主であつた。鳥居清長の門に入りて畫を學んだ。黄表紙には『十二月晦日五郎 六月晦日九郎 四月八日物語』『大吉屋茂兵衛 大門口三吉 親本浮世繪抄』『丸山權太左衛門 大女大將』『昔大山の瀧上水引草』『昔妻 與五郎新春草紙顏見合』『芝居好家内安全』『天竺時代唐土化物』『しやれけり大夫打掛禮拵治』などの奇拔な命題のものがあるが、彼の得意の作は寧ろ洒落本にある。『白惚鏡』『格子寶語』『御膳曲輪折合曾我』『見通三世相』『東山見番藝妓の口』『白無垢ちや明樓』『傾城人相鑑』『祕事傳授書』『客人女郎取組手鑑』『玉の幃』『大門雜話』『品川八景』『淸談息子氣質』『夜讀物晦日也』等がある。猶此の他にも中本及び讀本を作つてゐる。『作者部類』に、「寛政三四年頃より、淺草寺隨身門外なる水

茶屋の水波娘難波屋喜多、兩國藥研堀なる高島屋のひさを初めとして、所々の煎茶店に、美女を置く事流行せしかば、振鷺は此の茶店の趣を綴らんとて、日毎に處々の茶店に憩ひて、多く錢を費す程に、其の書未だ成らずしてありけるうち、官憲再び嚴重にて、振鷺が用意徒らになりしことゝと見えてゐる。

此の書は息子株、案頭醫者、武左、俠客、色客と遊女とを取組ませて、吉原情調を寫したもので、洒落本のお定まりではあるが、先づ遊女の風姿を描いて取組ませた處に一種の新案がある。

畧路風俗　廻し枕

一卷。山手山人左英作、とよ丸畫。寬政元年板。

内藤新宿遊里の面影を、小春治兵衛に擬して、廻し牀のありさまを寫したもの。

面(おも)美(ひ)多(た)勤(つ)身

一卷。郭通交、同集交作。寬政年間板。

世界は深川の表櫓であるが、客の言を假りて、東海道から伊勢參宮街道の宿場々々の女や名物

の評をさせ、ところどころに芭蕉の俳句などを插んでゐるところが變つてゐる。

傾城買四十八手

一卷。山東京傳作。寛政二年板。

色の諸分魂膽を細敍したもので、精妙なる事實に入つてゐる。京傳は天明五年に『令子洞房』、同六年に『客衆肝照子』、同七年に『通言總籬』『古契三娼』、同八年に『吉原楊枝』『夜半茶漬』『傾城鑑』、寛政元年に『志羅川夜船』『新造圖彙』『郭の大帳』『通氣粹語傳』を刊行し、此の年には、此の書の外に、『繁千話』『京傳予誌』を出し、洒落本界を席捲する勢ひがあり、翌三年『娼妓絹籭』『錦の裏』『仕懸文庫』を出板するに及んで、はしたなくも忌諱に觸れて罪を得たのであるから、此の書出板の頃は彼が洒落本全盛の時代で、また京傳の眞價値を發揮した時である。

畫作 四書 京傳予誌

一卷。山東京傳作並畫。寛政二年板。

四書になぞらへたもので、其の目錄にもある通り、大柴、通川、豐良、中に分れ、大柴には四季

の景物によつて酒色の樂しみを述べ、通用はひど工面の女郎買を說き、最後には江戸藝者の魂膽中には傾城辛苦の情を穿つたものである。「然れども樂は月雪花にきつにとゞむといひながら、つまる所は女色ほどの樂みはなし。」と云ふにしても、其の一斑を知るに足りる。洒落本の極意も亦ここにあらう。

文選臥坐

一卷。狂商、湖舟、谷峨作の三篇を收む。寛政二年板。狂商の『東北の雲談』、湖舟の『北郭の奇說』、谷峨の『河東の艶詞』三編である。大して面白いものではないが、其のうちで『河東の艶詞』のお梅が「かにしてゝんねえ、ほれやした、まよひやした。」のところが、最もいい。

手段詰物（てくだつめもの） 娼妓絹籭（ぶるひ）

一卷。山東京傳作並畫。寛政三年板。梅川忠兵衛の名を假りて、遊女の眞情を寫したもの。京傳一流の精妙な觀察と穿ちとがある。

富岡八幡鐘

一卷。かはきち作、魚屋北溪畫。寛政二年板。

深川土橋の遊里のさまを小春治兵衛を假りて敍述したもの。序文も北溪が書いてゐる所を見ると、作者と畫工とは同一人であらう。

南品傀儡（なんぴんあやつり）

一卷。青海舍主人作。寛政二年板。

自序によると、此の作者は深川萬年橋の西に住んでゐたと見える。品川の遊興を寫した者で、武士あり、僧侶あり、町人あり、其の様々の異なつたところを描いてゐるが、凡作である。

一　青樓晝之世界 錦之裏

一卷。山東京傳作並畫。寛政三年板。

作者に[illegible]、夕霧伊左衞門の名を用ゐて、吉原の晝を寫したもの。

[illegible]中狂言　郭の大帳

一巻。山東京傳作並畫。寛政元年板。
眞崎の景色を芝居の道具と見て、茶番の趣向をする所へ、客人鶴屋が雛妓幇間、女藝者、新造等を引連れて乗り込むより初まりて、郭内の噂のとりどり、ついで丁字屋の遊興、遊女の掛引を例の精細な描寫で敍述してゐる。

洞房妓談　繁千話

一巻。山東京傳作並畫。寛政二年板。
色男と其の女郎とのいきさつから、馬鹿といふ半可通の失敗などを可笑しく寫したもの。

深泉遊子　仲街艶談

一巻。三多樓戯家作、雪華畫。寛政十一年板。
深川仲町の遊里を寫したもの。此の書もまた小春治兵衛の名を假りてゐる。

玉の襟

一巻。關東米作並畫。寛政年間板。

關東米とは蔦唐丸の假號である。

深川各地の岡場所を記したもの、各地の直段附を載せ、また傳に、「至て下司じやうなれど、古市場はふるきにて、なじみの客でなければ、四ツ前から初會をあげず、新市場は初會よりはしをとると心得べし。」などと一々詳しく其の遊び方を註してゐる。

大抵御覧

一冊。朱樂菅江作。安永八年板。

朱樂菅江は狂歌師であるが、「寶花新聞」丸の内の序、題に「舞子宗傳」「郭中奇譚」「販通傳中を語」等、戲作本の著がある。

此の書は田舍の二隠者の問答で、中洲の繁昌を記したもので、中洲を研究する上に最も好いゝ資料である。

新宿 穴學問

一卷。狹部紀南子作、安永年間版。

此の書一名を「馬糞夜話」と云ひ、作者狹部紀南子は平秩東作の假號と云ふことである。内藤新宿の遊里のさまを寫したもの。

石場 妓娼 辰巳婦言

一卷。式亭三馬作、喜多川歌麿畫、寛政十年版。

深川の遊里新石場を寫すに、遊女一人に客二人を以てし、手練手管と魂膽とを述べてある。

船頭深話

二卷。式亭三馬作、春齋畫、文化三年版。

「辰巳婦言」の二編。

船頭部屋

一巻、式亭三馬作、春龍畫。文化年間板。

『辰巳婦言』の三編。

此等三編を通じて觀るに、三馬の寫實は精細で、達筆で、處々に穿つたところが多く、洒落本作家として、彼は成功してゐる。

やまあらし

一巻。柳亭種彦作。文化年間板。

發端の段から初まり、心中の段には淨瑠璃あり、と、圖は次の段に譲つて、工夫を凝らしてゐるある。最後の場面は種彦の畑でないことを立證してゐる。

解　題

[illegible]

異素六帖序

世之在宇宙者也夥矣、陰陽之煦蒸、萬殊之區別、苦樂渾淆、情愛逼迫、悉可勝言乎。故心六合卷、悟密室、蠢動爲牛鳴者、神之至也。故足爲鬼笑者、則之翼也。若夫則至異之所以爲至異、則豈無至異歟。近覽異素六帖、大素可以貝染、前後爲萬々多々之色、抑夫有色則必有想、有想則樂亦在其中矣。二十五有之中、有北鬱單越、又名北俱盧州、勝處勝東南西之三州、大樂長壽無憂、管樂之絕地也。事見寶雲經、當今男女之色者、方樂之界也、於是乎序。

寶曆七丁丑載孟春良辰

毛々道人

序

本邦の色を通曉したるものはおほく、異邦の色を轉飜したる書は鮮なし。今この六帖は、青樓の趣徴と北州の全盛とを折中す。しかもその秋毫の趣をいふすら、實に綾なすの一事たり。こひねがはくは、言辭おりて、和漢の情態おなじき數々をあらはさば、野暮をして、活物たらしめんものか。將軍晨の風塵客上に、傍聞せるものをして、曲廬にうつくふらしめんものかと、中氏嬌鳳自序。

卯のあゆみおそき日のめでたきはじめ

和　亭　主　人

異素六帖　上之卷

中氏嬉齋

凡　例

ふるき諺にもいはれたる如く、一つ釜は寒食の家を焼き、米櫃の中は塵つもりて山鳥に鼠たはるいふべき事しなければ、摺小木も柱にかゝりて、蟲の壁に囀り、野分の外に立ち騒ぐべき人なき、皆之歸て閑なるは、ふたけしやうだにもあらで、いと噴じくいひ詞ひるに、驚きてさし覗けば、髭との男二人ありて、一人は歌學者とみえて、一人は儒者なるやうにて、今一人學者の道にかしこまにて、口を争ひつゝも、心の儘なすて騒がしきも、かくれば調し合川り、流れし身の宿と云ひにけしからぬとて、慰みがはて咲き出しても聞えばこそ、いよ／＼この言種を、重ねて讒れば、儒者がくせものなる氣色にて、いよ／＼今も事す通り、顔篭女色と云ふ事もこそあれ。歌學者標章をのずたりと、こちらのつもりなる、天地開け始まりて、あなうれしとの給ひし、又は出雲八重垣の神詠より、國常立尊自然に宮の色事は、神武まではますせぬ、一字にこそ、あなしと云ふものを、古へ前に語る

給ふ、神國の操ではござらぬ。ハテ澪標の卷にも、「佛者が曰く、「これ〳〵、その源氏物語の戀樂も、皆無常の夢の浮橋となりはてるではないか。」此の間二人も隱におもひ入れあり、「そこだやに依つて、其の色を離れる爲の遊女、お聞きなされ、既に經にも引導衆生令離諸著と御說きなされたは、衆生を吉原へ引連れて、諸くの執着を離れ、彼こそ三昧に入る樣にとの、御心遣ひでござることというて頭の汗を拭ふ。又、「若一日、若二日、若三日、及至七日とあるも、みな居續の事で。」歌學者すひがらおらく叩きながら、「いやもうこなた、それ程賣色御執心ならば、佛者相應によし町へでもござれ。」儒者曰く、「わるい御料簡、私が賣女好きばかりで云ふではござらぬが、無心所著の德は、遊君淺妻のうへではござらぬか。」と疊を叩く、歌學者「いやさそれでは。」佛者「ハテまだ合點さつしやれぬこ歌學者「いえ〳〵。」儒者扇を笏に構へて、片手をあげ「お二人ともお默りなされ、既にかた〴〵やうすかたよらず、これを中と申す。そなた衆の樣に、偏りたがる偏屈では參らぬ。然し遊びと云ふ事を論ずれば、佛道で仰しやる北倶盧州、又北州とも申す樂しみ第一の所、色の中に遊びあり、遊びの中に色ある事、聊か勝れりとも云ふべきか、それゆゑ下に八九は、北々と頷きます、さりながら、遊ぶ事必ず方ありと申して、方角のきはまりてある事でござる。もし鼻でも落つるやうな所は、必ずご無用になされ。」と、すこし分別あり顔なり。歌學者「貴樣のやうに、和かにいはるれば、我等も岩

不にあらざれば、名とは申されぬ。なるほど古歌のうち、北州に叶うたがござらん。」儒者曰く、「ナニ、詩にも我等それのみを、よう覺えて居ます。」佛者鼻をひく／＼して笑ふ。「エヘ、エヘ、、詩歌になくて何といたさう、サア／＼論は無益、先づ承りたい。」儒者いはく、「笙歌日暮能留レ客と申すわ。」佛者曰く、「ア、おつしやるな、郭の景色姿、頓て目の前に見るやうでござる。」歌學者曰く、「身を盡してもも逢はんとぞ思ふ。」佛者曰く、「これはうまい事だ。」儒者曰く、「時々來往主人開。」佛者曰く、「ハハア茶屋、妓館の妻をよう云うた。」儒者、「さりとは貴様のやうに、心を付けて貰へば、お望みやなう。ほんと。」と云ひながら歌學者に向ふ。歌學者うなづきながら、「少女の姿しばし。」と云ひながら、主人にむかひ、「これは太夫の揚屋入りをよませられし歌だが、とても此事に題をきはめて、詩と歌とを引き合はせて見たらばどうござらう。」佛者儒者曰く、「これは至極々々、サア題を出しますぞ。」

六帖目錄　その題のみをしるし、詩歌は總に註釋し次の卷に具ふ

太夫の揚屋入　女郎の被の内
三月の中の町　番頭女郎
年明けの近い女郎　けんたいぶる女郎

かけ落ちしたる女郎
はやる女郎
心中した女郎
俄に客のへつた女郎
性あしき女郎
いやな客に請けられし女郎
工面の出來ぬ女郎
親の爲に勤むる女郎
△初會能くみえる客
ふられし客
早く歸らねばならぬ客
もらはれた客
夜道をこはがる客
無縁法界の客

指を切りし女郎
はやらぬ女郎
心中をいやがる女郎
素性のよい女郎
横に來る女郎
工面のあしき女郎
賣られて來る女郎
お茶引き女郎
初會切りの客
旅へ立つ客
醉ひつぶれた客
喧嘩買ひの客
戸まどひした客
物になつてもいやな客

子を賣りし親心　　　　勤めの身
たまく逢ふ間夫　　　　雨降りの禿
牽頭に揚つた新造　　　　月見の臺のもの
面白く逢ふ夜　　　　夜番
船宿　　　　總雪隱
揚屋の紙屑籠
質を置く女郎　　　　惡い病のある女郎
牀のよい女郎　　　　居ずまひの惡い女郎
牀で骨を折りし女郎
△水上げの客　　　　年寄りし客
△大門の懸行燈　　　　大門の番所
吉原の眞實

といふまでの題にて、二人共に涙ぐみける如くにいひしは、我も聞き覺えし當時に、百人一首の歌にこれありけれ、此の時鬱者感心の涙を流し、合掌して曰く、「誠に黄金の肌をみがき、一つ蒲團にて香團の蓮

蓮に坐し、有縁の衆生を救ひ、夜みせの行燈は迷への衆生を導き、昼となく夜となく、黄金の光たえず、ア、彼の金光明所と説き給ふ事、ことわべなり〳〵といふ時、浅草寺の初夜の鐘、ごん〳〵と響き、表に人の足音おほく、ヤッツ、コレ〳〵と云ふ声繁し。主人は顔を見て、ヤアといはれしにより、各袖頭巾とり出し、皆々頭に打かづき、何れへか出でられし。我ひとり悄然となりて、はじめて筆は硯箱に納まりぬ。

異素六帖上之卷 終

異素六帖跋

百敷や百代の拾遺集には、遊女の歌を入れ、人惜人恨の聖主は、淺妻の咏を遺す。加之、唐紅の中將は、菅原仁志津摩を戀ひ、加古知顏の法師は、江口の君が爲に大悟を得たり。者れば、足曳の大和言葉、諸越の芳野の里に、白雪のつもる文筆も、何れか倡家妓郭の風流に洩れたりと、紛も背の友達の、話を集めて、異素六帖と題し、光融和けき春の日の、閑を助くる物ならんと、其の後に書する事然り。

何遊堂受歌

異素六帖下之巻

六帖五十五段廻計

一、初より三釜盛の威をいへるより、以下の二十一段女のうへを云ふ。

一、二十三より十一段、客の事を云ふ。

一、三十五より十一段、雑事を云ふ。

一、四十六より五段、丈女郎をいうて、秘事をあかす。

一、五十一、五十二、丈客の病を云ふ。

一、五十三より五十五まで總論。

太夫の揚屋入り

紫陌紅塵拂面来

無人不道看花回

少女のすがた

しばし

とゞめむ

紫陌は江戸町に、傾城の太夫の名なり、むかしは、むらさきといひたるとなり、我が朝には花紫、小紫といふて、太夫の通名とする事あり、紅塵とは紅葉の散りしきたる景色、是れも太夫の名とす、我が朝には紅葉のことにて、高尾と名附けて賞す、この詩に紫陌の人は、花を見てかへる心地せりとなり。

女郎の袂の内

冷艶全欺雪　餘香乍入衣

けふ九重に匂ひぬるかな

冷艶とはつめたくやさしといふ字にて、おゝさむなどと云ひながら、夜著きたる雪の肌の、伽羅のかをり、猶更いふべきかたなし。

三月の中の町

名花傾國兩相歡

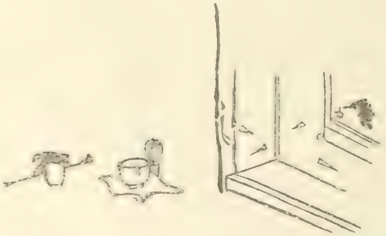
外山のかすみ立たずもあらなむ

名花傾國、或説に曰く、はなとなづくるとよみ、黄金鼻紙の事といふ。又傾國の傾は、傾動の傾にあらずと云々。今曰く、いづれもあしし、たゞ女郎と櫻と共に樂しむとみるべし。

ばんとう女郎

年光到處
皆堪賞

我が身
世にふる
ながめせしまに



年光は、年より出たる女郎の、ひたひ口の薄く禿けて光る、男なれば額の皺の寄る頃なり。年によりて面に光の出づるをいふ。かやうに年ひしき女郎の格別なるを、みな人感ぜしとなり。

年明きの近い女郎

　紅粉楼中数計日

いかに久しき物とかはしる

紅粉楼は、女郎の化粧する所なり。年のあき日を指折り数へといふも、此の事なり。

けんたいぶる女郎

　白眼看他世上人

ふりゆくものは我が身なりけり

白眼はにらむなり。又色目なり。牀柱によりかゝりたるありさま、目前のやうなり。此の詩尤も多情なり。

凋落したる女郎

返照入閭巷
憂来誰共語

あはでこの世をすごしてよとや

返照の照は生なき、生を過去にかへして、冥世界の住居なり。手習の書の意味か、閭巷は町の裏屋なり。あはで此の世、命あるをせめて、客にあはで、此の世を渡るなり。

指を切りし女郎

悲涙南行道
寄身故園流

ながれもあへぬもみぢなりけり

古は指を切り贈りにやりて、南風三の涙を出したるなり。故園は小林を指す。其の田舎ぐらしの

[illegible]下之三

へ出でし廓し捨つるなり。

時花女郎

　　春潮夜々深

　人こそ知らねかわく間もなし

合潮はうしになり。汐時のさすと引くとなり。杯をさすと三絃をひくとを、汐のさしひくとなぞらへていへるなり。

はやらぬ女郎

　　客舎半居絶送迎

　わが身ひとつの秋にはあらねど

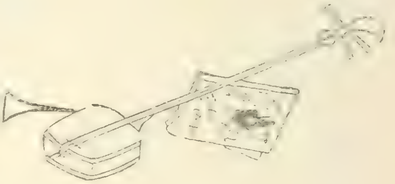
客舎は女郎屋なり。半居は見世にばかり居て、客の送り迎へにも出でざるをいふ。

心中をした女郎

縦死猶聞侠骨香

名こそながれて　なほきこえけれ

侠骨とは、遊里の常談にして、たとへば大きな声にて、コハスキンホンニヨなど、きやうこつにいふ言葉なり。香とは、その言葉の昔語に残るをいへり。名こそ流れて、その身はもとより流れの身にて、又名まで流れるといへる歟なり。



心中をいやがる女郎

異素六帖下之巻

我心渉無際
河上空佛街
人の命の惜しくもあるかな

渉レ心とは、浮気のふらりとある気の事なり。こゝにあるかと思へば、こゝにはゐけでなく、一定ならぬをいふ。河上は中岸と通ず。かくの如くうたふ女郎は、川岸へ出でし商ひすべし。

僅に客のへつた女郎
空山不レ見レ人
但聞二人語響一
りありてなどか人の戀しき

空山は喰ひ殘りなり。僅にはやりやんで不景気になつた女郎は、多くの人の喰うた殘りといふ心なり。あまりて、皆揚げられし中に、ひとり店にあまり殘るなり。

素性のよい太郎

美人天上落

懸にくさな苗名こそ惜しけれ

天上より落つとは、雲の上人ともいふべき筋よき人の、いやしき勤めするは、落つると云ふ。或説に、天上より落つることは、やしき女の腰がぬけねばよいと、案ずる心なりと云々。

性ありしき女郎

郎水東流復向西

身のいたづらになりぬべきかな

郎は男なり、男は[illegible]の東なり、水は陰なり、陰とする女の[illegible]をいふなるべし、[illegible]

ふ、東へ流るとは、流れの中の東の人をもあやなし、西の人をもくるめるを云ふ。

横にくる女郎

　　相見雨不レ厭

　　まつとし聞かばいまかへりこむ

雨不レ厭とは、二人客をにがさぬ偽の謀なり。或説に曰く、不レ厭はお助けの心ありといふ。此の説よろしからず、つとめなればなり。

いやな客に請けられし女郎

　　只有二此山中一

　　雲深不レ知レ処

　　昔はものを思はざりけり

雲深しとは、所謂有頂天之下、暗雲覆ふといふがごときなり。

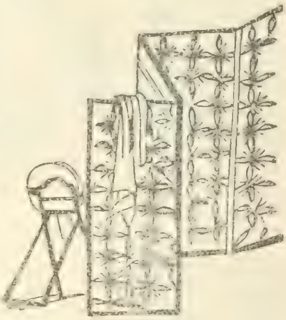
くめんの出来ぬ女郎

妾心正斷絶

君懐那得知

ものや思ふと

人の問ふまで



妾とは女の自稱の詞なり。その初めを考ふるに、徽宗皇帝色を重んじ、艶を專らとし給ふ。女を見ると酒にせう、或は踊にせう、妾々との給ふにより、宮女自身の事と思ひ、自らも妾といひしより、女の通稱となる。君を懐ふとは、客をさしていふ。その身の工面あしく苦しむを、客の知らぬと恨みたるなり。

くめんのあしき女郎

但見涙痕濕

不知心根

人ならぬ身をもうらみざらまし

涙痕は恨への源、日ぶ添ふわくびや、あうげんにて、たゞふほしは

夢に見て來る女郎花

故郷今夜

思千里

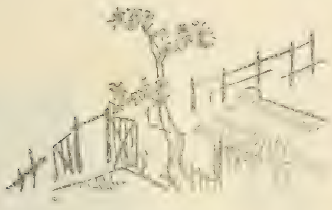
うしと

見し世ぞ

今は戀ひしき

親の爲に勸めする女郎

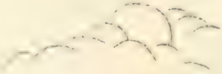
獨在異郷爲異客



毎逢佳節倍思親

うきにたへぬは涙なりけり

異郷異客の身は、花里通商考に曰く、風俗地女國に異なりといふごとし。佳節は紋日なり。その暮しゝごとに、親里を思ひ出すなり。



[illegible]女郎

嘯夢復長嘯

ながくくし夜を

ひとりかもねむ

嘯[illegible]嘘の皮[illegible]事なり。[illegible]いまだ[illegible]なる時、うそのうは皮をむきて、眞實のうそをみがき出す心なり。

初會よく見らるゝ客

呉姫緩舞留君醉

今一たびの御幸またなむ

呉姫は美しきをんなり。呉はほめ詞なり。美服を呉服といひ、若竹を呉竹といひ、食喰ふ物を呉器といふが如し。

初會切りの客

羽客雀歎此地遊

離筵數處白雲飛

行へもしらぬ戀の道かな

羽客は羽が生えて飛びあるく客なり。或書に、四手駕は襦袢の翅を生ふるといふたぐひなり。

ふられし客

深林人不レ知

明月來相照

かたぶくまでの月を見しかな

深林は大きなる林にて、眞柱になるべき大木あれども、人知らずして用ゐる事能はず、くやみたる心なり。

旅へ立つ客

欲レ別牽二郎衣一

郎今到二何處一

今一たびの逢ふこともがな

郎とは男子の通稱、團五郎、助十郎などいふが如し。

早く歸らねばならぬ客

遮莫鄰雞下五更

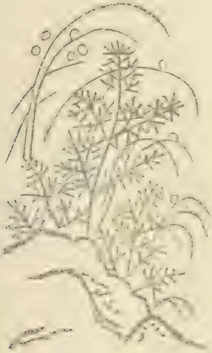
あかつきばかり　うきものはなし

酔ひつぶれた客

醉臥沙場君莫笑

みだれそめにし　われならなくに

沙場は沙利場なり。君は連れさしていふこ



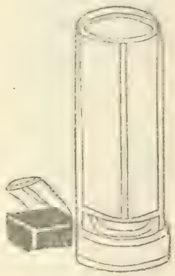
もらはれた客

閨中只是

客細憶

衣かたしきひとりかもねむ

閨は[illegible]、閨は玉と[illegible]字なり、門の[illegible]ある[illegible]、[illegible]ふべし。



喧嘩買ひの客

賊自狂夫不顧家

人に知られし[illegible]

狂夫は鏡なり。きほひ男なり。[illegible]

人の非を取り出すものなり。

[illegible]

夜道をこはがる客
送レ君還二舊府一
明月滿二前川一
有明の月を待ち出づるかな

君は女郎なり、舊府はむかしふるき家来なり。府は夫なり、君が送りて舊夫とかへると訓むべし。

戸まどひしたる客
擧レ頭望二山月一
低レ頭思二故鄕一
雲のいづこに月やどるらむ

擧レ頭は仰ぐなり。低レ頭は伏すなり。戸惑ひして小便に出で、小便するとき首の所作なり。人道の常なり。この情工夫すべし。

無縁法界の客
今夜不レ知何處宿
花より
ほかに
知る
人もなし

鬼になつてもいやな客、
何處秋風至
人こそ見えね秋は來にけり

秋風至は、身に近く秋や來ぬらんなどよみし心ならん。秋風には扇をすつるといふて、客に逢ふ氣も

うとくなるなり。

[illegible]

寒蛩はきりぎりすなり。此の蟲籠にやしなは[illegible]の頃を聞きし、我が子[illegible]籠入になりしを思ひ出でしなり。

[illegible]

[illegible]の法あり、その[illegible]

ハ[illegible]しとなどといふ相言あり

たまくら[illegible]ふ聞た

[illegible]

嘉期とは古誌に、やくそく契約などといふ。[illegible]

[illegible]

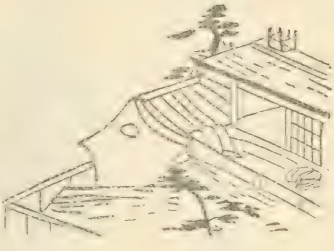
雨降りの秃

寛に合せた長袖一　倚欄干

かけしや

袖の　ぬれもこそすれ

長袖はふりそでなり。長きもののふら／＼するを、すべてふりといふ事、和名抄に見えたり。かけしや、欄干に袖をかけしなり。又懸け出したるともいふ。義つうず。



たいこにあがつた新造

閨中少婦不レ知レ愁

まだ文も見ず天の橋立

闇市は前に註する如く、小椽は新造をいふ。あまつはしだて、あまとは是れも新造なり。格子はしへならべ立て置くゆゑ、はしだてといふ。

月見題のもの

一時回レ首月中看

三笠の山に出でし月かも

回首とは、何の事の如にて、首を回せば月の[illegible]にたり、かへつて座敷に向へば、又月の[illegible]うなり。

面白く逢ふ夜

[illegible]

花開笑語聲

なほうらめしき朝ぼらけかな

[illegible]六[illegible]下之巻

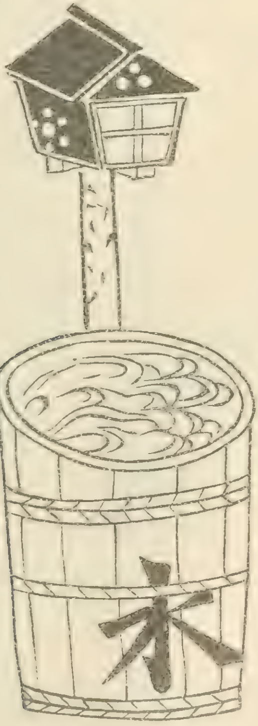
春閨裏とは、花に對するが如き閨中をいふ。花間は、花の前にといふ如く、黃金鼻紙なり。その花をやる時は、座中賑やかにとりはやす故、笑止なる輕口を、無理に笑ひほめる座持を云ふ。

夜番

旅館寒燈獨不睡

白きを見れば夜ぞ更けにける

旅籠は、ひと夜ふた夜泊りに來る人の宿なり。



諸やど

江南江北送客帰

かへりくれ

なるに

水くゝるとは

聴雪隆

黄河入海流

こりぞつもりてふちとなりぬる

黄河とは、黄色の水のながるゝ川なり。肛門関辺より流れ、お[illegible]州に入ると、漢書地理志に見えたり。（漢音書音）

揚屋の紙屑籠

積雪浮雲端

不二の高嶺に雪はふりつゝ

積雪は紙の多くて白きかたちなり。○○○○、ふ、ふ、ふう、ふう、うん〳〵といふうちに、○○の外知る人なき味なり。その端みな此の積雪となる。

質を置く女郎

鎔剣直千金

分手脱相贈

おきまどはせるしらぎくの花

直とは、笄、櫛等の打物、直に金となる事の妙をいふ。分手とは、天窓に今までありし簪を脱きて、何某へもたせ遣るなり。

わるい精のある女郎

年々花落無人見

しづこゝろなく

花の散るらむ

花、異木に鼻に在るは非なり。しづ心なく、しづは賤なり。いやしきやすものをいふ。

味のよい女郎

客心争日月

なかなくもかへと

思ひけるかな

争日月とは、日数月数を掛けて出世せんと、客ごとに争ふなり。

居ずまひのわるい女郎

峨眉山月半輪秋

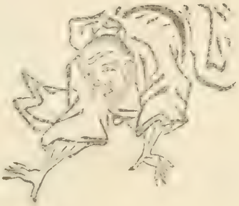
もれ出づる月の影のさやけさ

牀で骨を折りし女郎

孤城遙望玉門關

黄沙百戰穿金甲

みだれてけさはものをこそ思へ



孤城は、一本立ちの城なり。黄沙は、功者と聲通ず、穿金甲は、軍士甲冑を帯し、關中を破らん

として、時をうつし戦ふ有様、考ふべし。

水上けの客、

此夜断腸人不見

わかれても末に逢はむとぞ思ふ

断腸とは、甚だ痛む事をいふ。人不見とは、客の外の人は断腸を知らぬといへるなり。

年寄りし客、

白光不度玉門関

忍ぶる事のよわりもぞする

春光は[illegible]心地に[illegible]、不度といへるなるべし。

大門の掛行燈

雙懸日月一

照乾坤一

ひるはきえつゝ

物をこそ思へ

乾坤とは、二階と下座敷をいふ。

大門の番所

欲問門前客　今朝幾箇來

幾夜ねざめのすまの關守

幾箇來の箇は駕と通ず、或は曰く、荷なりと、駕籠のむかへ、門前に集まるを見たる樣なり。

吉原の眞實　黄金不レ多　交不レ深

やまの　奥にも　鹿ぞ　鳴くなる

異素六帖下之卷　終

異素六帖下之卷

聖遊郭序

天窒し地臺する所、物一等と雖も、又物の等しからざる遊廓とて婦の市あり。此の地を踏めば粹と成る。是れ全く地理の所爲る所以の法なり。纔かを隔てて江南の樹を江北に移せば、忽ちその轉變すること、宛も御月樣と泥龜と準ふるに等し。されば此の書を覧るに、孔老釋の三聖彼の遊廓に遊び、日轉じ夜に叫びて缺をしらず、二人枕のねはんより黄泉の道行、はては漢土の言語に腹を抱へし、寔に靈鷲山一代の說經にも、則ち妙法と說き給ひ、法とは則ち乘るの調聲、妙の字は女の傍に少の字を從へ、女に少し乘の心を示し、後世此の道を知らざれば、人情なく愛なく、土石に成る則んば、自ら五常を失ふ事を考へ、三聖一致に家々の斷果に、釋氏は三界飛脚火宅の斷に假世太夫に逝し、孔子は明德の大道太夫に信鼻毛し、諸分手管に入るの門なり。謀計奇々妙々。里仁爲美、擇不處仁、焉得知とあれば、早く知ある遊廓の里を擇んで、諸分手管を學び明らかにたまへかし。これ時寶曆丑水無月、娘に宿る在日、燈下に筆を馳して是れが端書して、諸君に訴ふるものならん。

揚屋亭主 李白　女房 瀧　中居 なつ もみ　孔子大盡　合方 おまつら 大道太夫
老子大盡　合方 丈室太夫　釋迦大盡　合方 かはよ 假世太夫　右之外客名寄せ
客 五柳先生陶淵明　合方女郎 菊　曹長房　合方女郎 鶴　周茂叔　女郎 蓮
東坡　合方舞臺子 李商隱　韓退之　影子 藍東野　さわぎ客 文殊
さわぎ客 目連　同 賓頭盧　同 阿難
たいこもち 白樂天　同 鐵拐仙人　其外器用之
書置の事　同辭世　種々かりの世 道行
風流酒花　くるわ唐韻　目錄終

聖遊郭

緜蠻たる黄鳥丘隅に止まる、止まる處に止まらざれば、鳥にだも如かじといふ。四角な文字の廉取りて、鳥は木に住む魚は水にすむ、人は情の下にすむと、円つき頭に頭には、これも和國の道ならめ。郭の歌は客の浮氣をたねとして、萬の言葉とぞなれりし。長歌、短歌、旋頭、馬か、たけき武者の心を和らぐるも、ゆかりのつきの一儀ぞかし。されぱこそ西行は撫でても、江口の君のたけぶしには、腰をぬかせし例もあり。爰に聖人の遊びたまへる郭あり。揚屋の亭主は李白とかや。中にも孔子に第一にて、するといはれて粋手ならず、あらごとの帷子に、もんめの羽織を長く、浅黄帯にあは草履、古金買の目利にも、太夫か何とは見えたるし、李白が方へ道人りあれば、▲亭主李白「これはこれはお珍らしい、さてさて嬉へこともてはやす。▲孔子「さてさて李太、この頃は久しいの。無事で珍重珍重」と座敷へ行く。▲李白が居間に逗留はまだ珍しいおそなは。お釈迦はつまみ申していなされました」▲神屋なつて、さしにこさ、この中も精進で御見うけ申しました様、大方お常りなさるであらうと話しました に、よく待たせなさつたの。▲孔子「いや、寄のたかつたけれども、行く時に行によまて、たいへん

と見たゆゑ、太夫にことづてしたかつたけれど、十目所レ視十手所レ指、其の時馬喰町の方へ人が走つたか、何事ぢやと思うたれども、君子は危きに近づかずと、すぐに戻つたが何であつたや。」▲仲居なつ、「その時は馬やがちとやけましたげな。」▲孔子曰く、「人は怪我はせなんだか。」というて、馬はとはず。▲仲居、「イエ／＼けがはござりませなんだ。」▲孔子、「ナ、それは可し／＼。久しう来ぬうちざしきが綺麗になつた。富は屋を潤さん。どうでも李白出来たの／＼。」▲亭主李白、「おまへ様がたの御ひいきゆゑ、だん／＼仕合つかまつりまして、よろこびます。」▲孔子、「ナ、よい事ぢやの。シタが瀧、親父にずゐぶん酒をとめたがよいぞや。酒ははかりなけれども亂に及ぼさず。過ぎぬやうにしたがよい。」▲李白、「イヤモウ朝からばんまで、酒の絶えるまがござりませぬ。」▲孔子、「イヤサ、座敷は勤めにやならねども、終日百杯すれども三杯に過ぎずで、心でひかへるがよいぞや。」▲亭主、「どうでなる口でござりますれば、一杯一杯又一杯、どうでも過ぎます。」▲孔子、「イヤそれが座敷ばかりではない。内證でもたきが顔を見てはのみ、瀧を見てはのむゆゑ、瀧見の李白というて、よう繪に書くぞや。」▲亭主、「ハテわるじやれな。」と笑ひの最中、裏口から廣袖のゆかたに、丸ぐけの帶じだらくに、前にはさんでくるを見れば老子なり。▲瀧、「是れは老子さま、裏口からおこしはお珍らしい。仁さまもお待ちなされてでござります。」▲老子、「ヤアおやぢはさきへ来たか。」と云ふを聞いて、▲孔子、「老子これ

へこれへ。なんとして裏口からおいでぞ。」▲老子「イヤ藏の間の切戸があいてあつた故、是れはさいはひの道があると、裏から仕かけたれば、こゝの久助めが、闇がりから牛の出たやうなと、おれを牛にしをつた。人我を牛といふ時は、我に牛の性ある事を知る。」と、腹をたてぬぞ一德なる。かかる所へ釋迦は、かりの世といふ太夫と相合駕籠にて、臺所まで舁きこませ、▲李白見るより「コレハ釋迦大盡の御來迎、太夫さまとのあひごし。コリヤムマイありがたい。まづ／＼是れへ。」と、かごのたれあぐれば、釋迦は紋紗のかたびら袷に、りんぼうの紋所、金襴の帶に異香くゆらせ立ち出で給ひ「ナント李白まめなの。」▲主「アイお前さまにもお變りなく、いつとても御二人づれ、比翼の中。」とそやすれば、▲釋迦「いやサ何を云やるぞいの。今このやうにつれ立つても、會者定離臨命終時不遁者ぞいの。」▲太夫「かりの世」あれ李白さん聞いて下んせ。あのやうに無常な事ばつかりいうてでござんすわいな。」▲李白「ハテわけもない。仁さまも老さまもお待ちかね。サア／＼奥へ。」と伴ひゆく。▲孔子老子「時に、釋迦ハ、是れへ。」とあいさつあれば、▲釋迦「コレハ御兩所お待ちかね、瀧へ、ちと久しいの。」▲老子「ホヽ、今日は、マアお揃ひなされて、ようお越し遊ばしました。孔子さま、大道さまをおりましたにあけました。老子さま、大空さまを見せましたに人遣はしました。」といふ内に、▲太夫お太に來る「釋迦さまゝ、老子さまゝ、御出で遊ばしませ。孔子さまゝ、今日はよう御越しなされた。」李白瀧へもそ

れぞれのあいさつは、さすが孔子のおひかたとは、かたくろしいで知られけり、かかる所へ大客は座敷へ來り、何の挨拶もなく「老子ス、けふはこち風が吹いたさうな。」といへば、▲老子「けふは少し南風が吹きつけた。」▲太夫「ホヽヽヽどうでそんな事でござんしよ。おまへの所にさかうきがあるさうな。ちつと廻しなんせんか。」▲老子「イヤ今日もまはしはせずにきた。」▲太夫「エヽ、わるこれな人さんぢや。」ト、諸ひもなきあいさつは、老子の好くふうならん。▲主李白は鯉のさしみを「さう〳〵けふは貴方がたのお入りと承り、琴高が方から「鯉をさし上げたい。」と申して、私が方へ持たせてこしました。」と、小皿に入れて前におく。「是れは琴高が志、過分〳〵。」と賞翫あれば、▲主李白「折節此方に酢をきらしました故、となりへ貰ひにやりましたが、酢がききますればようござりますが。」▲孔子「やはり鯉はこくしやうがよいわ、此の酢はきぶい酢ぢや。」▲釋迦は「コレハあまたるい。」▲老子は苦い顏して居給へば、▲李白は氣の毒がり「是れは不加減にござりますか。」▲孔子曰く、「イヤイヤ酢はすいが酢の味ぢや。」釋迦の「甘い。」といはるゝは方便なり「苦イ。」トあるは老子のすねたり。心こゝにあらされば、喰へども其の味をしらず。酢はすいにきはまつたものぢや。」くるわですいもあまいも知つたものをすると云ふは、この時よりぞ始まりける。▲老子「けふは莊子が來る筈ぢやが、ナゼおそいぞ。」▲大道「莊子さんはお前のおつれかえ、ホヽヽヽおきしつかよう似なさつた。なんぢややら、夢に蝶になつてくるわへ來たとやら、

よう寓言らしい事をいふおかたでござんす。」▲仲居文出で、「勝手へ白樂天どのが來てゐられますが、酒のお相手に座敷へ、お呼びなされぬか。」といへば、「是れはさいはひ、樂天が國太夫節久しうきかぬ。これへ〳〵。」といふよりも、白樂さしきへ出で、「何れもさま久しうお目に懸りませぬ。御きげんようござりますか。」▲皆々、「久しう見えなんだがどうぢや。」▲樂天、「されはでござります。私も一生の思ひでに、島原へいてのんで見たいと存じまして、この中夜舟で枚方あたりまで出かけましたれば、何が夜のほのぐ〳〵明けに、八幡山に雲のかゝりし氣色、その面白さ、「白雲帶に似て山の腰をめぐる」こと口すさんで、一杯のみかけましたれば、何處ともなく白髮老人一人小舟に乘つて、わたくしが舟を目がけこぎ付け、「牛房くらへ、酒くらはぬか」と申しましたが、中々呼ぶものではござりませぬ。伏見まで行かぬうちに、挙酒にまけて、道から迯げて歸りました。其の酒にあてられて、此中は寢てをりました。」▲「ハテ大道、「それならむかひ酒に、一つよかろ。」とさす。▲樂天、「お杯は頂きますが、御酒に合りにやお肴しく〳〵」したが此の間珍らしい話を、寄合で聞いてまゐりました。曾長房は御存じでござりますか」といへば、▲客、「それは鶴と懇意して居た曾長房か」といへば、「イヤルネトの親をつれて、かけ落ちてられましたが、京のすゝめで、長崎者めといふ菓子を仕出し、唐人姿で、「ほりほり菊もろうてあまいこと、京中賣られましたけにござります。」▲仲居文、「ごうであらうと思うたこ

やこどの繪本を見ても、鶴に乘つて飛びあるいて、たいていいやらしいお方ではなかつた。」▲孔子曰く、「蓬ばくの人こゝにおいて衆生を誤ると、朱子が湖丹安をしかりしも無理でない。周茂叔は蓮をうけ出したといふがほんかや。」▲樂天、「イヤ／＼、茂叔さんは、「蓮を愛してはござれども、「遠く見るべし、馴れ玩ぶべからず。」とやら、いうてござつて、中を手いけにして見る御心はないやうにござります。柳子はご存じなさつてござるか。」といへば、▲孔子曰く、「柳とは陶淵明が事か。」▲樂天、「アイ五柳樣の事でござります。あなたは菊につい打ちこんで、この中も絃もない琴を彈く眞似して、騷いでござりました。」

▲太夫大夫さら、「樂天さ、此中身なげ心中が有つたといふが、ぢやうかえ。」▲樂天、「イエ／＼、心中ではござりませぬ。美生といふ男が近所の娘と、藍流橋にて出合ふ約束いたしまして、橋の上で待つてゐました所に、なにが此中の大白雨で、にはか水が出て來たに、こゝをさつては心中がたゝぬといふて、やつはり橋の上にゐたげにござります。其の中に上の堤が切れて、水が一時に逆ふだう出て、橋が落ちて流れて死んだげにござります。それを娘が聞いて、そのやうなおろかな男なら、逢はいでよかつたというてゐますげな。」▲太夫大道、「義によつて命をはたすは、人たるものの道なり。美生も約束を變せずして、義のために命を失ひしは、かはいらしい心ぢやナァ。」▲太夫かりの世、「サウトモそ

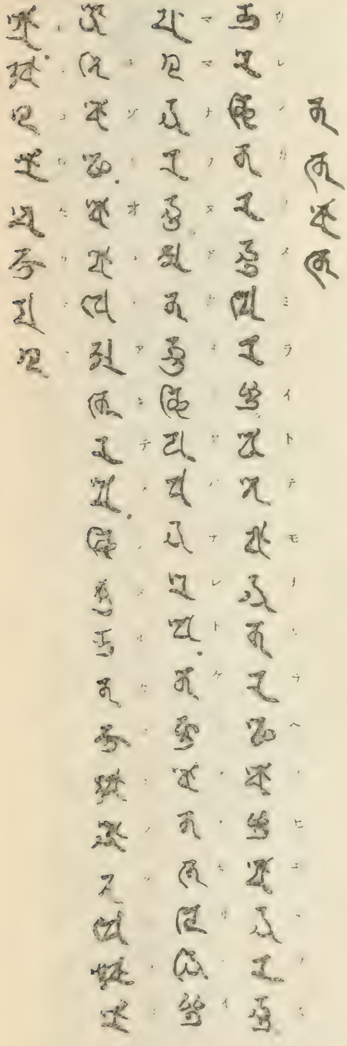
れは昔前世からの約束事、過去の業因でござんすこナウ大こらゝ」▲大客「ナンノイナ、その美生とやらが、せまいきゝの葉のやうな心から、その女子一人に思ひつめるといふがちがひ、其いばんに約束がちがうていやといふたら、廣い世界に澤山な女子、どれなりと合點する女を、女房にしたがよいわいな」三人の評判は、孔子、老子、釋迦三聖の嬉うつりとしられけり

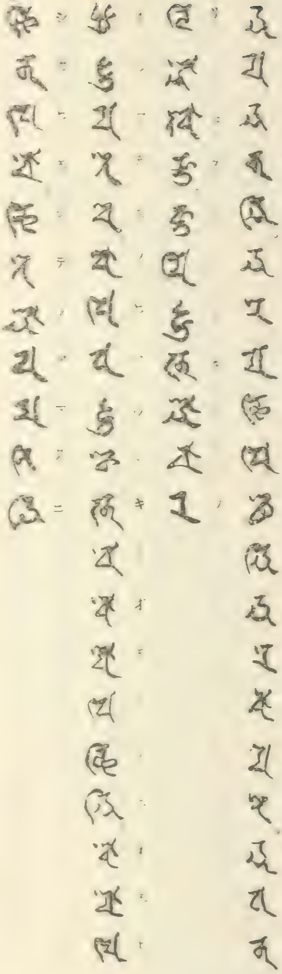
▲樂天「其の美生が河流れを、風流求女塚といふ狂言に、女伊達を取組み、明日から角の芝居でいたしますこ」▲「くろ舟には誰がなるぞこ」▲「忠右衛門には、竹林の祇藤でござるげな。傳藏があをい眼、海老蔵が眼より凄まじいと申す評判。野暮仙人の非人かたき討、きつい當りでござります。東婆さまは李徳推といふ、若葉がにきつい打込みで、花道から李徳推が、馬に乗つて出られましたれば、馬に乗る小人擬實なりといふ聖のことばは、東婆さまでござつたげな。馬を繫いで岸に花落つるを知るといふ春も、其の時つくりて遺はされしとて、それをやはらげて、此がいきぬは花が散るといふ小歌、其の今大分はやります。韓湘子は高東野といふ影子に強い打込みで、藍采雑でござつといふ事がありますと申して評名が高うござりますこ」▲樂天「漢の惠帝も評義のたもとを濡らしも、男色の心中なれ、此の道はふるいものでござるな。老子ここそうな道を好みそうなものぢやと笑ひになれぬ。▲本天、大客こっと笑はれ、脇に控しいたこ衆が出るといふか、竹合ひたんしたが。こいへば、▲本

天」ようしそれは誰が事でやたら」▲大客「イヤ名はきかぬが、目のないかた〳〵のかけ繪をふき出すは
なし」▲樂天「エ、それは鐵拐が事でござりましよ」といへば、▲瀧園「いや是れ、なる程それは、こ
の中此方のお客が手前へつれて見えてでござりました。其の時花の高尾と傳七とを、吹いてでござり
ました」それは〳〵、面白い事いな」▲大客は「なんとそれは、しやほんでしたら成りさうなものでは
ないかいな」▲釋迦はおぶりふり「中々そのやうな事ではない。此方の善導大師が三尊を吹いた時、
きつうおかしい事でやなかつた。紙を帽子にしたり、鼻へ針を入れたりするが、合點のゆかぬものの
おやま」と、臍がすかば老子は大欠。▲瀧は氣をつけ「是れは老子さま、お氣がつきたさうな。あちら
に寐ともらして置きました。大客さん、つれましておいでなされませ」▲大客「イヤ先刻にから、こ
ちらで日がらの事をいへばあのやうに、欠して、紛らかしてごさんすわいな」▲瀧「日がらの事は、
あちらでしつぽりとお約束あそばせ」と、二人を奥へすゝめやれば、▲樂天は氣を利かし「わたくし
も勝手に用がござります、皆さま後ほどお目にかゝりましよ」と、勝手の方へ立つてゆく。▲亭主李
白「此のお倅、まづわたくしが預りましよ」と、とさん持ちそへ入ル。▲瀧はさしきを取りつくろ
ひ「かの世さま、釋迦さまもちと奥へつれましておこし遊ばせ」▲孔子曰く「コレ釋迦ゝ、ねはん
に入つて、寂滅爲樂たのしみ給へ」▲釋迦「コレ大ねわゝ、又おやぢが「男女席を同じうせず」など

といふて、ひぞりかけたるつゝつておかしやれ」と、惡口いふて次のざしきへ入る。跡には孔子と大道さしむかひ、「師をやいたかたくるしい。その顎鬚も見さしやんせんか。ちとお休みなされぬか」▲孔子「寝るにもはだたず。ドレ／＼、其の枕おこし給へ」と、「東北」に寝給ふ。▲大道「お前はこゝの枕になんなさるか」▲孔子も東首し給ふ。「是よ、予が手をさすれ。足をさすれよ」▲大道「さすれなりやわしがさする。コレ お顔に見せる物がある。コレ見さんせ」われもしか心安にこの通りでござんすにと臍をみければ、孔子命といふ大き黒子。▲孔子「ハテわけもない。身體髪膚は父母に受けたり。損ひ毀らざるは孝の始めといふに、いかに嘩へ知らぬとて、やくたいもない事をしやる」▲大道「さればは不孝になつても、おまへ故なら大事ない」▲孔子「ハテ孝弟忠信、其の道わきまへざるは人にあらず」と、口説のさいちうに、▲瀧あわたゞしく走り出で、「まうし釈迦さまの袂より、御手のなるやうに何じましたる袋じたれば、釈迦でござるかなんぞと思ふて進ぜました。御二人の枕もとに、これなものがござりますといふ。▲孔子紐をとく。「これ」▲孝子奉白むつくりとして出る。▲老子、胸中騒いで出る。▲大道へ何事と、書いたものを取り上げて見れば、是れ孔子の まへの世は、やうなる文字は、こちとらが、いかゞせんと前にて見合はす。家がくあればせぬ。かかる所へ、▲ちやんのはのよな白イ氣を持ちやんな、黒いはいたは氣を持たぬ…

ンテンチヤンホラホ、すひつく取りつくすつたかく、いしふしあんれんきりふくりんとんな、すー
ンテト、しやんく、よいくのよい、なとりさわいで、▲阿難、文殊、▲目連、賓頭盧つれだち来る「どうおやく李白はうちにか、北のかたはどこにぞ。今夜もぞめきに出たが、道からしゆかうが付いたこと、どやくとわめき立てる。▲李白、たき「是れはくよい所へ来てくんなんした。趣向どこのおやごちりませぬ。釋迦さんがかりの世さんつかまして、驅落ちたんした。大ていの事ではござりません、皆ちやつと奥へ来ておくれ」▲四人のらかん「これは凄まじいことと驚きざしきへゆく。
▲瀧、「先づ此のかきおきを讀んで見ておくれなされませ」と、あなんにわたす。▲あなんよむ。





「一銭無二銭、欠落所ではない、死ぬる覚悟の遺しぶみ」二人の辞世。サア大事々々といへば、▲老子はお手をひいで頭からげる。▲亭主、うろたへ、「是れはマアなんとせう。」▲孔子、「なんと所か、もう〳〵文殊、どうぞ是れにはよき了簡はないか。」文殊〳〵、「是れはしたり文じゆが見えぬ。もんじゆさんは[illegible]」「[illegible]二人は是れに昔のまだこさういふうとおもうて、鹿島の寝間を見に行きしが、まだ浦島の[illegible]で、昔時も早く手配して、おつ手〳〵」諸国[illegible]より外にふれてつかはし」といひつゝ、[illegible]李白に「▲李白、かうなれば[illegible]その中に一文持つておるや。」▲李白、「わしこまりました、それなら、[illegible]小遣ひ銭[illegible]」▲さつ、小遣ひに持つて来る。▲李白とつて十二文よむ。

其の間に、▲文殊ふところより、はな紙一枚とり出し、十二文のぜにつゝみ、これ目連、貴様は神通の名人なり。こんな時の重寶、急ぎ清明の師匠の白道のかたへ行き、六角の八卦たのんできたまへ。と渡せば、▲目連ぜに受取つて、飛ぶがごとくに走り行く。▲座中みな／＼よこ手をうつて、さてもぬからぬ／＼。さすが文殊の分別ごと、てん手に追手の用意の提灯ごしらへするやら、わらんづのひもすげる内、▲瀧かさいかく、賓頭盧の兩足のふし／＼、こむらおさふるやら、うへを下へともてかへす。

道行妹背の送り火

これはにや釋尊は、かりの契りもかりの世と、深きいもせの中となり、くるわをぬけて只二人、越路のそらを跡に見て、十萬億へと心ざす、道はどこやら後前も、涙の雨の晴間なく、ぬれてかわかぬ沖の石、つれびきにしたその時に、わたしがばちを持ちそへて、いとしいぞやといはしやんした、そのひとことがわすれはし、愛別離苦の世のならひ、あふは別れと口ぐせに、味氣ないこといはしやんす、それでわたしが此のつかへ。天上天下唯一人、おまへならでと思ひつめ、此の世はおろか後の世も、かはるまいぞと六道の、ちまたに逢ふ戀のやみ。これしもけふは文月の、中の六日になき魂を、しやばへ迎へておくり火の、おくれさきだつ死出の道、往來の人の繁ければ、草葉のかげに身をひそ

あ、泣きなみたまふぞいたはしき。かりのよ涙にくれながら、「必ずつま子のある人と、すゑの約束せぬものと、我が身の上に聞く辛さ。やしゆたらさんのさぞやさぞ、わたしを恨みてござんしよ。」と、袂にすがり泣きければ、「ア、おろかな人のくりごとや。色即是空ときくときは、自他平等にへだてなく、共に一蓮たくしやうぞや。アレ〳〵あれを見や。ぐぜいの舟の乘合に、思ひなき身の女たつれ、二世の契りのうらやまし。一むらそびえし深山こそ、つたへ聞きつる劒の山、地ごくの里はあれかとよ。經帷子のなか袖も、偏袒右肩此のまゝに、是れぞ即身成佛の、法のちかひのたのもしく、夫婦は二世の契りぞ」と、手に手を取りてゆく程に、三津の川の舟よそひ、到達得舟のさをさして、彼岸にこそ着きたまふ。

白樂天船中之譚

一を　つうヤといふ　二を　かくヤといふ　三を　たくヤといふ
四を　ますヤといふ　五を　てんヤといふ　六を　ずいヤといふ
七を　しんヤといふ　八を　はいヤといふ　九を　らうヤといふ
十を　さんヤといふ

三味線中之曲

郭そうじて遊所の事をなんくわんといふ

女郎を　にいくんと云　若衆を　れんつう　娘を　にいつう
女を　にいしん　尼を　にいすゑん　亭主を　じうてい
仲居を　にいとう　引舟を　にいはん　火車を　にいくわん
禿を　おふこい　客を　きや　大じんを　くうてき
すゐを　そうちん　色を　きん　ぶすゐを　ほうちん
うそを　へんな　つとめを　すいこ　ほれたを　でいら
交合を　すてき　のいたを　はん　寝るを　すん
おきるを　とう　銀子を　ぼんつう　金子を　らんつう
たばこを　ちやうこ　きせるを　すとん　酒を　ちう
肴を　こん　吸物を　しゆせん　杯を　ちうはん
青を　せた　黄を　ぬく　赤を　めんゑ
白を　ほう　黒を　こう　歌を　かん
三味線を　てんきん　琴を　りきん　こきうを　ちよきん

尺八を　げん　　うつくしいを　ほう　　好いたを　れん
わるいを　しう　　すかんを　けまな　　杯さしたを　めんとん
閙を　ちよん　　おさへを　りやん　　助けるを　ごうてん

此の外委しくは記しがたし、有増をとゞむ。

寶暦七年丑六月吉日

大坂高麗橋筋四軒町
書肆　堺屋市右衛門梓

聖遊郭　終

遊子方言叙

花之美多則多矣。不若花街花之美且精。桃李雖燦然美、不言不語。牡丹海棠雖燦然麗、不笑不歌。此花也、不唯能言語笑歌、其色一過目、則奪精蕩魂。其香一觸鼻、則催心蕩腸。加之霜雪雨露不凋、風雨不損。取之無禁、用之不盡。春秋晝夜、莫不芳年。五色具、草木花無同其情哉。草木花猶且賞之、況於此花乎。北州之遊、嗚呼樂矣。因以序。

田舎老人多田爺謹書

目録

發端 其の出合、舟の中、土手、大門口、揚りの樣子

中の町　　夜のけしき

宵の程　　更けての體

しのゝめのころ

畢

遊子方言

田舍老人多田爺

發端

小春のころ、極ばんで三十四五の男、すこし頭のはげた、大本多すけたび、八端がけと見える袷に、縞の細き縞の帯お太鼓高に、細身のわきざし柄まへ少し汙れ、黒羽二重の紋際も、ちと汙れし小袖、あひ着は小紋縮緬の、片袖ちがひのやうに見え、色のさめた緋縮緬の襦袢、はきにくさうな鼻緒のひく下駄、やまをか頭巾かた手に持ち、鼻紙袋はなしと見え、小菊の四つ折すこし出しかけ、我より外に色男はなしと、高慢にあたりをきろ／＼と見まはして、あてどもなしにぶら／＼と行く。向ふより二十歳ばかりの、人柄よき若衆さうな息子、わきざし立派に黒縮緬の縫入羽織、五つ紋しろ／＼と、丹後縞の小袖、した着に御納戸茶縮緬の襦袢、遠山じまの帯、なかなかよき草履をはき、供にかつぎの風呂敷づゝみと生花をもたせ、扇子かざして來る。通り者「これ／＼色男なる。いやこれは。こうでござるのは、此の間先生に應挾樣申しましたに、先生はござりませぬ／＼。お前どこへ行きなさる

ゐ。女房「私は本所邊へ參ります。」通り者「行かねばならぬ事か。何しに行なさつしやる。」女房「伯父きが病氣でなりまして、見舞にさんじます。」通り者「伯父御病氣ならば、ぐつとたがしたいわい。」女房「なぜでござります。」通り者「おんなりつかあないよい天氣だやによつて、正燈寺とくらはせようと思ふ。」女房「なるほど私も正燈寺へは參りたう御ざりますが、行つて來て本所へ參られませうか。」通り者「行かれます／＼。そして本所は大流しになかしてもよしさ。」女房「なんにもせよ參りますよ。」通り者「そんならぐつと供を歸しがよからう。おれが行つたとても、紅葉が面白くもなんともないわさ。それより内へ歸つてゐた方がらくだ。角平なすとんだ通り者か。これ色男はかまはう／＼。」供角平「それとも、御用がござらばまゐりませうか。」女房「いや行かずともええ。歸つて云はうには、「あなたに道で御目に懸つて、御同道申し正燈寺へまゐるによつて、角平を歸します。必ず御あんじ成されますな。」」供かへる。通り者「あゝええい。これで大きにええい。船中にてだん／＼つもりの話がある。なしい色男が埋木となるによつて、だん／＼おれが傳授で、直に坊のやうな色男を、揚卷の助六がやうにつくり直さにやならぬ。こゝはみんなが乘る伊豆屋といふ船宿だ。毎日おれも乘るところだ。こつから乘らう。かみさん猪牙舟。ちよつきりでゐるくり、はやく出しとしたいわい。」船宿の女房「はい御出でなされませ。猪牙舟はござりますが、も一艘なんとやらおつしやる舟がござりませぬ。」通り者「いやさ猪牙舟は

ばかりでよしさ。」 女房「どつちまでゞござります。」 通り者「どことはどうだ。堀さ〳〵。」 女房「かしへいける
船頭は、今かへりて、やすまうとおもうに、舟をかして付けにゐる。 女房「これ五郎どん。大儀ながらも一挺こいで下され。よよこれさ、
どうぞさしつたか。」 五郎「どうも仕やせんが、腹がへりやした。」 腹もへる筈でござりやす。」 松さきへ
上下を二どこいで、堀へも二はいかせて来やんした。」 女房「そんなら茶づけ一ばいかきこんで、早く
行つてくださいし。急がつしやれ。」 通り者、二人舟有のはせより、もう舟にできたかといはゝ、ときさせるにていける。女房きのどくさうなかほ、「ちとおまちなさ
されてくだされませ。船頭がみんな出拂ひまして、やう〳〵只今かへりました船頭が参りますが、大
ぶ腹がへつたと申して、茶漬をたべて参ります。」 通り者「それはとんだ事ッた。」 女房「さやうで御座り
ますけれど、汐時がよう御座りますから、舟は忽ちで御座ります。」 通り者「そんならま一ぷくのみまし
よ。」 といふて待つうちに、まへの河岸へをかり子二三人のりたる舟着き、男三四人あがれば、通り者またば この存知にでもいれありて、……あおるんは、みなしつた顔のやうなふりをして、わきをいがめけ
れ……二面に出るを、其の中に 通り者「ど、いつもみんな俺が知らない奴だ。おれ弟に知つた顔なやつは、
たつた二人ほつちやない。」 女房「今おまへにだぎしいつた通者さうなが、いは、祈ふしこゝらで見
るやうだの。」 ……あれはおれがなじみしいものでさだ。野暮なやつといさ。かの鎌倉屋木次郎といふやつ
おいらが、前のにた山本をかいさに見たるやつは、甚助といふやつだ。あいつはおれを知つた顔していた
つたが、おらつりせぬ。た事ないに。道面おれを知つた顔したがる人が、あれなる見るにつけても、は

やく行きたい。どうだ」○河岸から　船頭「さあお召しなはりやせ」○〔子供はあがり、あとに舟に乗り〕、船頭「舟をおし出しておくんなはりやせ」○女房二人をおくり、女房「御きげんようおめし成されませ」○〔舟は大川へ出る〕船頭「おたひらにお召しなはりやせ」通人「これ色男、猪牙舟の乗りやうから傳授しませう。猪牙舟といふものは、あぐらをひッかき、うしろへひおかけの、首うなだれの、たゞこにこく/\とくらはせねば、舟が漕ぎにくい。先づ舳頭が嬉しがる。これ/\此のねかのむかうが、それ身をする一類が内だ。いやこれこれいつてゐる内に、肝腎の相談を忘れた。正燈寺へはしよせん行かれないよ。貴様ばかり正燈寺へ行くと思つてゐたか」むすこ「あい/\、正燈寺へはいきさまもうおそう御座りましよ」通人「さあ其の事だ。しよせん正燈寺とはかりの名。よし原へ行かうといふ、かねてたくんだ謀だ。吉原へ行つてもよからうが」むすこ「おいら早く歸りさへすれば、よう御座ります」通人「行くからにや、早いの遲いのといふこつちやない。おれと行くといふと、揚つても早く歸られぬ。野暮なやつらと行ッたとちがつて、格別面白い。其のはずだ。吉原の太鼓持にもとゝれん、其の外みんな廓の通り者やなんかが、おれが行くといふと來る。この中もきかッしやい。來る者に事かいて、野猫そばのむすこまで來てしやれる。このやくぶ骨がおそいわ。そう/\、首尾の松がやないかの」船頭「首尾の松はよつぽど跡に通り過ぎやした」通人「なるほどよつぽど來たの。こゝは此君山ぶしが河岸だ」むすこ「此君山ぶしとは

なんの事ッた御座りません。」五「そこに段々講釋のある事だ。吉原は男ぶりよりも、魂魄がかんじんだといふ事がある。此の河岸に八十ばかりになるまで付けがあるが、これが此岸と大きに色事だ。そこの岸に此世話な客は、みんな指鬘ぶつはらツて、きれた程のこんたんしだ。それをおれが向うてまはして、たゞ一ッ色事をしたが、おれも悪くすると、叶はない事がある。それに付けてもあつたら色雅が、形や作りがどうもさえぬ。吉原へはびる形ぢやない。とかく吉原は黒仕立がよい。髪がとんだ野暮だ。どうぞもう五ぶほど髪をあけて、はけさきをすつとはつこきとしたい。顔をもう多くの事ッちやないが、もう五六ぶ面をあけて、どうぞ形や何かを粋にさつしやい。そして食へて、と出るやうにしたい。」ゆ「ゑい、若い衆か合の時に、ちよとまゐりやした。」五「高輪が合の時にや、よう付かたんだ。すべて此のごろは、通も通て合を大がす。それでおれがせんどの蔵前の蒔繪に、川崎屋の番頭が面で、うんなぶ出たによつて、蒔繪にうらいた。已有からは會えさんたれきさない仲だ。何をいふしれぬが、先に目立しよるだ。顔がないといへば、おれが丸角へあつらへておいた、鼻が高顔がある。とんだいきなきれだ。小は二部も一分けさに帯ってるる。きれは二幽陀のもんあの、貴様見るとふるへ付くとこきれだ。おれが殘りのある時にあつらへて置いた。丸角の亭主が、おれも心やすいによつて、いつでも亭主に逢つてあつらへる。亭主も兩才はたけれど、いまがかしいによつて、とか

い丸角はながい。されども十日ほどの内に、こしらへてやらうといつた。其のうちに皆無子がなくなつたによつて、二十日ほどに成るが、いまに取りにいかん。貴さまいつそ買はないか。出来てあるようおれ」なすこ「そりやどうぞ私が買ひたう御座ります。どうぞお前つれ立つて行つておくれ成されますまいか」通言「おゝつれ立つていこ〳〵。貴様たばこ呑みえないの」なすこ「あい、さやうで御座ります。どうもたばこを呑まんは、わるいもので御座ります。これで此の間するぶん、煙草呑みならはうと存じます。煙管入もこしらへたう御座りますから、どうぞつれ立ッて御出で成されて下されませ」通言「煙草入は堀安で見て置いた。飛んだ、いや良いのがある。それをこしらへさつしやれ。堀安のもおれと一しよに行くと、うとんだ掛値はいひえない。煙管はどうしても住吉屋がえいによ。とんだ能いかたがある」なすこ「せんど折太夫にあひやした。とんだにそうなさせるを見やした。これに小田原町とやら、新場の人とやら来てゐやした。誰れもとんだ大そうなで御座りやした」通言「折太夫といふはなんだ」なすこ「義太夫をかたる」通言「うゝ、なるほど、いや俺がものずきは又違ふ。なんでも、住吉屋をよんで、まあ是れからは何でも、おらが内へ来さつしやい。そつちへ手紙がやりたい事があつても、どうもやりにくい。若い者をそゝのかすやうで、名にし負ふおれが事だから、どうもし悪い。貴様表とくがあるか。」なすこ「あい、どうぞおまへの字を取つて、お付け成されてくだされま

せ」亀「そんなら俺が香箱の香の字を取つて、香具とつけよう。後にや俺がやうに、方々から香具さん香具さんといふやうになる。夫れについて話がある。この中も中の町の松屋の前で、おれがどんできれいな形で、勿論ふとさせんで、煙草を呑んでゐると、その前に浄瑠璃を語る東洲が来て、話してゐると、さる内の奥座敷の女郎が、東洲にあたついた。おれにあだつきたいけれど、俺にはおそれて、居て、おれは此の位な浮気なものだといふ事を知らせたがつて、種々色々な事をして、其の上で東洲に「ぬしの名はなんといふぞ」と、そつときいて、すると東洲が、「ぬしの名をお知りなんせんか。香前さんと申しやす」といふと、香前さんといふ生きさうな顔でつんとして、「これは御無用でなんせん」というて、立つていつた。客が来たさうで、そこで今夜もこの内へいつて、東洲もつとんで、夜ふけ人しつまつて、其の女郎が座へ忍びこみの、口説かすとも、おきにつうしふ調子だによつて、おきに所来ない相来るといふと、しよこの醜道に引きかへて、二ツぶとんのうへ、ひそかに来つつたる朝かして、鼠一ツはいに太鼓が後しの、しのゝめさつと明けわたる時がまでゐて踊る、なんときつい首尾の前を申さいふ、おいらが仲間は、みんなさうした事だ。これは好いのあひにい角だぞ。いやいややうやう着くさうだ。　墨ひとつへ、おいらのたまされやい。あきれたものだつけ、一間口には頭鍮かぶりか、吉野やのきやつめは、うぬばれでいまくしいといはれた。それく此の頃逢つた晴れに。

まだおれを大臣と思つてゐる舟宿がある。」船頭「どこへつけます。」と申し。通り者「そんなら山本のさん橋へつけろ。」船頭「山本屋々々々。」山本屋「はあ、どなたかお出でなさつたさうな。」とさんばし、出むかひ「これはお珍らしい、お出でで御座ります。おあがり成されませ。あゝ、こつちらへ付けさせいよいに。」[illegible]「いや〳〵こちらでよしにしよ〳〵。」とつつとあがる。山本屋「一ぷくまづおあがり成されませ。」○通り者、むすこ二人ともに二階へあがる。山本屋女房「よう御出で成されました。」山本屋「あなたは番町さんといふおかた、せんど朝太道にしまでおしたお客だ。」通り者「これからは心やすく来やんしよ。かみさん、はけさきがそゝけはせぬか。見て下さんせ。」山本屋女房「いゝえ、たんとも御座りません。」通り者「手のごひをちよと熱い湯でしぼつて、下さい。」山本屋女房「はい。」通り者「手のごひおれがやろ。」とあさぎの手のごひを出し、ゆでぬれたるを取、一ぺいつとこれで　しぼりて鬢をふく、鬢ではを大事にふく。　こゝろ持がよくなる。拭かしやらんか。どうもやはな形だぞ。」とて「さあ、まゐりましよ。」と二人は出でる。通り者「さあ〳〵急ぎましよ〳〵。」山本屋女房「申し明あさおより成されませ。」通り者「さあ〳〵、もう土手へ来た。これ〳〵此方だよ。こゝいらにも功者と不功者がある。こちらを通ると格別ちかい。これは土手が大ぶ淋しいわい。小鼻のききへ、つばきをつけさつしやい〳〵。」むすこ「なぜえ。」通り者「いやなぜもつけさつしやい。今に思ひしる事がある。それ〳〵、もう来たぞ。」むすこ「ほんにをかしな匂ひで御座ります。」通り者「こりや死人をやく匂ひだ。おやおや土手でかげば、死人の匂ひもえいものおや

ないか。今夜は大ぶ土手が長いやうだ」といふて、しやんと小づまをとりながら上るりを巧者らしき聲にてかたる「まだいけんを言ひ殘した事がある。うたを習ふはよいが、同じ事なら唄はよさつしやい。今野暮な侍がうたを唄ふ。河東節を習はつしやい。あらが習ふは雛十ほどの、撥次も筆次郎も來るもんだから、謡に習はうもすきだ。それに河東が、此のごろは聲がかれて、あらが内へ來てねてゐる。それに筆次郎は轉四郎と改名した。これら會のたくみがあるから、隨日來る。いや通の者になると、此の會ばかりもうるさいものだ。揃物ばかりも大ぶたまつてゐるぞ。さうかういふうちに見れば衣紋坂、やつにはこゝは古風に、こゝでするぶん衣紋をつくろふがえい。時にこゝから靜かにして行かう。どうも人が見るとみんなが來て、あんまり騷々しくなる。今夜はふつゝりと手まへとされと、たつた二人で遊ぶ事にしませう」といひながら大門をはひり　大「はてかう寂しくては、どうもならねわい。茶屋はどこにしやう。あんまり知つた所が澤山だから、どこへいかうと目うつりがする。それにされは茶屋を定めるがきらひだ。そこは何屋だなう、あんな見せましやい」と「小田原屋といたして御座ります」通り者あゝ又が所か。えゝれいつはあれがなつたな覗いかみる、あゝやつぱりましますか。女房が二の使數で、客には「かゝさん御何でございます」女房さんと、お出でなんし。およそあゝかへりなんし」ト上「ふしまる〳〵」とずつとあがり、見世にこゝろえ坐ふ今夜は鄰かれ。「ゆゑだ、隨分お客の御帰りとする、坐ゝ見いつでも賑やかでよい所

だの。久振りでこゝの内へは来たぞ」トいへども女房は、何かいふわけある顔にて女房「ぶしつけながらお前さまは、お見忘れ申しいたして御座りますが、貴方はどなた様で御座りましたね」通り者「これはどうだ。これは〳〵いかに久しうこないとて、見忘れた顔はないわ。しかしさうであろ、久振りだから。御亭主には、折ふし途中で逢ふが、成るほど内へは久しぶりだ。さして亭主はどつちへ出て御座いす」女房「今日は江戸へ参りました」通り者「あゝ今こゝを出ていつた人はだれだ」女房「あれは竜次郎様で御座ります」通り者「あゝ箕か、おぞおれを見て、見ない顔して行くしらん。成るほど〳〵、ゆうべおらが所へ来るはずで、こないによつてそれで見ない顔したさうな」女房「えゝゆうべあなたへ参るはずで御座りましたが」通り者「此のごろは河東が来てゐるによつて、前にのかうといつたら、それに誰かこないによつて、ゆうべは蝶千が来て、俳諧で夜をあかしたよ」○此の通り者[illegible]女房「今日も河東が来てゐていつたから、吉原へ行く、あそばないかといつたれば、ぶしやうな奴、吉原よりはどうぞ寝てゐたいといつてゐつたけ」女房「河東様はゆうべから、こつちへ来てで御座ります」通り者「河東か」トきをつぶし、きのどくさうな顔にて「はてそれはいやなこと、魂魄ぢやないか。」○女房はあいそをつかし勝手へ立ち、つんとしてかまはぬ。○台所には男どもがさわ「おかみさま、あれは何かをかしなもので御座りますぞえ」大がいに挨拶をして、おかへし成されませぬか」女房「あゝさおれらもさう思ふが、たゞにしろ旦那が帰らしやつたら、えいやうにさつしや

あ。よあそれまでには傍はすにおかつしやい。もし又つとめの茶屋引きたら、必ずさつしやるな。おらは、二階の客人の方へ行くたら、平さんと川さんお御座へ来たら、あの二人をば中のまへ置いて、おれへ早く知らさつしやい」といふ。まあここの女房は、あまり愛想がよくないやうなことを……女房「これは其の事でた。ぜんたいつきのわるい内だ。何か知つても知らないやうな顔してゐる。ここへ今よい女郎が来ればよいに。かうしてゐる内にしてくれしやらうものを」と見えをいふ。いろ〈〈と思ふやうにして客平〈〈、明日は大きに帰りて、宿がよにて羽二重のあたりしを小唄 上御亭主はもう帰られたか」よりは小唄たる由にて、……むすこにては……わかい者の見えますはる。一お、さ。ぜんさいな野郎かた「〇わいいいでには……客人中にたまさか、御出であそばしました」一おい、二階へ通らうか」……とおまをるこれませぬ」……者よ、むこ一お顔みがたは、中の間へ御出で成されて下されませ」女房「さ下さい、吉野来なさいな」これ色男ここへ来なる御楽々な」……たべに、あたた茶情も神、大人「大分お運う御座りました」平「御亭主にまたれ、御神しようはこ」……只今二階にありますれとも申してをりました。早くここへやう申しますこ」平「大分忙がしようだな」亭「いこれ色男、みなの客見さつしやい。あいけぶふられすは、ふらるゝ相はみえないではないか。あゝいふもの見ておいらを見たら、女郎でも惚れるほまた」平「この間ていて、むすこに見えを、一ふぶおおさう御座りました」亭「さうでありましたか。今

日間役の所で少し混雑事で、存ふかけ出としてゐたれば、亭主の見えられてあつた。亭主「左様で御座りました。今日のは急な御用のお客さうで御座りましたによつて、外の者では間違ふ、と申して、自身に持つて参りました。それでもお目にかゝりましてよう御座りました。川様は御出で成されませぬか。」客「これも大かた見えようが、御亭主もう帰られさうなものぢや。もしこれは庭の門の方へまゐるといふ事であつた。」亭主「はい左様で御座ります。いつでも庭の門へ上りますと、永う御座ります。ぜんぜも寄りまして、庭の門の御客様は、此な、御出でなえしたのに、帰りませんで、直に品川へ参りまして、其の間ゆるりと酔りました。しかも其のばんは、忙がしい晩で御座りましたのに、帰りませんから、帰りますと、大きにふり付けてやりゑんした。」客「ほんまいな／＼。さうした實な衆にあひたいものぢや。」亭主「山さんがあらほど實なうへに、其のやうに無んに成されます。」客「されば其の事おやゝ。あいつも氣の知れぬやつぢや。すんど實なやうでもあり、又何やらゑかしなものぢや。いや此のやうな事いはすと、一はい吞みましよ。」亭主「一つあがんなんせ。」といふては客「これはきつい小杯な。今日一日酔つてはゐるけれど、此のやうな小杯では、少しくすゞつたいやうぢや。」側の大物を大物を」亭主「さやういたしませうか。」といふて女房に燗手、作取りにさつ、すひもかを、なで付けさす。客人大分酔つた風情にて、扇子はおゝ／＼ならしある。通り者、むすこにこいゝきこ、挨の内より何かこりに「これかゑさん／＼、ちよつひらあひたい／＼。」亭主「はい、なんで御座ります。

取込みまして誠におかまひも申しませぬ」遣り手「かまはずとも吉野殿、これはさ左衛門なおどに、久しぶりで来たしるし、とかなんとか云ふやうなもの、そつちへしまつて鈴黄に」言上「はいこれはこれは」とばかり立たんとする。遣り手「これ／＼まだ用がある、松葉屋の染之介をさきにやつて下さい」女房「はい」、はい何にて、遣り手「はてど思案して「はい染之介さんは、おいでなさる御座ります。さつき向うの内に御出でなんした」遣り手「はてどこにしようか。丁字屋にしようか」言上「角町に若狭が御座りますか、お出でなんしてござりませぬか」言上「角町はさて／＼こちもさうにもたつたものの色事の所へいかうか」。あゝしんきな買ひでは気がつまるぞ」言上「まあどこぞ御相談なされて御いうじませ」遣り手「なんにもしれん、提灯付けさんしてくんなさい」言上「はい、どれぞおとこしやれに」といふうちに客大将をまつ。言上「提灯はここにおやく」言上「あい只今もつて参ります」といふて大将。言上「さあ／＼これぞや／＼」言上「引き」言上「行く」べ……「言もしふたりで」言上「明朝おまのせなんし」遣り手「あい、おやすみ、若し降るにおいなんしの、晩しぶりでゐつてけうも知れやせん」諸事は今夜の女郎の腹にある事とはいひながら、むすこを少し先にたてゝ行く。「ても大たうな髪でや」言原本多ふうなものに、女房の行儀を見てゐて、女房にむかひ「おつしいのうでな、其様に御礼申す間さをかんでするいい、晴れにこそよいは、領をかいて見るつもりさござる」言上「なさで御帰りますぞ、そいや、向かう後に見てゐたのがある、これへ右衛門はいへ

とたまには、もたせるも面白からうではないか」 女郎「なんさ、それはおよしなんし。私共が大てい難儀いたす事ぢや御座りません。せんどもちよつと江戸町まで、お付合で御出でなんしたのさへ、大ていやかましおつた事では御座りません。あれ〳〵、さういふ内、新造う衆がお迎へに御出でなんしたさうで御座ります。」 息子「おれはかくれるぞ〳〵。」 新造「申し〳〵、わつちを見てなぜ逃げなんすえ。」 息子「いや、にげはいたさん。公のお迎へに出たのおや。さあ〳〵あがり給へ〳〵。」 新造「おや、も、せはしなうおざんすわい」と、いうてこしを椽に半分かけ「おかさんに、おいらんでおつしやりんす。」 息子「成程はゐるりとお目にかゝりんしても、お嬉しうおざんす。米様、お出でなんしたさうでおざんすのに、なぜ早くおとこし申しなんせん。お恨みでおざんすこと」と申したい。「なぜ人をとおこしなんせんえ。」 息子「あいさ、どうでさはつて御出でなんす事を存じてをりんすから、まあのゐるりとさう申してあざんしたと、思うてをりんした。それについてお話が御座りんす。さアさあ、平さんのおつしやりんすには、と仲人の通らとする。平は其前よりも猶よほどに、 息子「左様な事は、廓中にては申さぬ事にて候」 平「そうでもそれも大きな聲はり、大けんきとなりうたる体にて、 息子「大きなものを持ちながら、何ぞ買ひとははゝゝゝ。これはこれだぞよ。」 平「聲が大きいかな。」 はさし合ひぢやの〳〵。」とやかくいはうよりは、早く行かうではないか。今宵は名代ぢやによつて、早く行きたい。」 息子「ねしや大ぶ氣がなほりなんしたね。」 平「いや名代には深い意味のある事ぢや。

早ういかう〳〵」 主「お吸物をお吸ひなんしてお出でなんし。御膳のしたくも致しておきんした」 主「いや〳〵、中々飯所ではない。はやく参りたい」といふて草履を片てんばにはき、かけ出しさうにする主 羽目、挨拶もとげたを、袖ひきながら ここが可笑な、袂まで袖を引きとめ、 新造「いつでもいひ出さつしやるとせはしない。まあ待ちなんし」 主「早くおもやうちんを付けろ。申しおこうのお違ひはいたしませんか」 主「草履どこれではない。はやく行きたい」ことかくか 新造「まちなんし〳〵。」といふてひつ つかい者「此の提灯はわるい。」とみせ つこ来た提灯を、又手に持ちて、女郎は立つ間にて、「早く行かッしやいな」

夜のけしき

いつの間に雪の景色なれど、いづれの物よりもしらべ細かけんすかがきの、軒をならべてひやかしよ、初めてまだのお河岸の、流れてゐる手はすみだ川。むかふの人々、尾張屋に入、こんな〳〵、二階の端を打つて来さつしやいな。いそげゝるい。早く来さッしやいな。新造〳〵といふは、友よぶ声かしら格子の声。わいゝ言うて語りゐすと、座敷へうせあがらないか。すかないかきとをだそよりは、やけるすやらに揉れすかがきの音にうかれて、五ッの鐘の声、いづれあやめと見れば、昔を女とゐ新に欲をかぎては、隣の羽をに迎ひとり見るより恋ふよむ。布を立てまじなへば、悋気に待ち侘、来れる文を手まかしせば、嘘ゐ文を閉じ、それより程にかたたより嘘く、自慢それぞれよ

り。物や思ふと見れば、さゝやきて悦ぶ緑の柳腰紅の下緒、いろ／＼行きかふ人さゞろなる中に、けしからぬ聲の按摩ほか、鮓賣の鯵のすう鰶のすうと、呼ぶもしやれとやいはん。義太夫ぶしは頬を押へてかたり、江戸ぶしは行儀に行く。二人三人友だち左右へ別れ、さぞや無々さぞ今頃はと謳ひ、巻舌にてこッちらへ寄りやれと睦まじきは、其の逢ひ人かと見ゆ。蒲焼、蕎麦切、汁子餅、雑煮のあんばいよき、其の茶屋の名も高く、彼の鵲の橋ならず、白きを見する名物は、山屋の軒の水にすわ、のまちの月やすがきを、まだ付く門々の拍子木も、それかあらぬか駒下駄の、音に色めくありさまは、實に夜の錦なりけり。

宵の程

大勢つきそひ、提灯三張にてはしごをたゝし、新ざう客の後に付き、新ざう「はしごをば静かにおあがりなんせ。」客よほど酔つてゐる。「心得ました。」新ざう「こゝは馬鹿らしうおざんす。人の座敷でおざんす。こつちらへお出でなんし。」客「又せまい所へはひるの。」新ざう「なにせまい所がやおざんせん。せんどおまへの酔ひなんした所でおざんす。」客「あの奥のか。」新ざう「あい、おくのでおざんす。早くお出でなんし。」と廊下を行く〳〵、方々の座敷より名をよばれ〳〵いふ、客うれしさうなる顔見ゆ。客、主「これでまづお目出たう御座ります。御座敷も定りました。」客「全體こよひはおれひとりがおやによつて、此の座敷がよいではないか。」主「さやうで御座ります。」此のうちに杯、てうし、硯ぶた、吸ひもの、菓子や煙草

る。　釜いつ［illegible］の若い者「旦那一つ召しあがられませ。」—　客「さあ／＼座が締つて面白くないではないか。な
んと此のふたでまはさうではないか。」［illegible］「よう御座りませう。」—　客「とかく俺はかわかいつも呑む
かぶさ。おみよやお秀を呼びにやらんか。」［illegible］「［illegible］貝介参る筈で御ざります。」［illegible］「今夜は直にも大ぶ賑
やかに成らうぞ。さつき道で呂州に逢つた。これも来ようといふさ。それで今夜は藤兵衛を呼ばん。
こゝが俺の［illegible］だ。呂州が来てるなに、藤兵衛にうたはせるは、たがひに面白くないよつて呼ばんさ。」
［illegible］成るほど藤兵衛にものすうにお心がお付きなさる。」［illegible］「あい、左様さ。」［illegible］「私はちよつと行つ
てきんだましよう。」［illegible］まゝそんなら一杯のんで行きやれ。今の一杯を進しもせいで。」［illegible］は
ふたゝよます。」［illegible］はこれたがよい。しかし其のやうな事で、酒は呑めるものではない。さあ／＼わし
も呑むぞ。」新ざう「もしえ。もうそれ切りで、かならず呑みなんすな［illegible］これはつれない事［illegible］」
［illegible］おいらんでいひなんすに依つて［illegible］申すな。』といひなんしたによつて、留め申さにや成りん
せん。」［illegible］六人ざわ／＼と　新ざう「御亭さん御出でなんし。兄さんどう
なされた。」［illegible］これはいゝ［illegible］いかない事、寂びとのに［illegible］人［illegible］賑やかでどうも［illegible］
［illegible］前に成つて［illegible］
差したんせ。」［illegible］「いや、呑みなんすか。」［illegible］といふ［illegible］「御出でなんせば［illegible］

すつきと御見えなされぬ。御遠く成りなんしたの。」主「いや、これは／＼、かゝ様ごうぎや／＼。一つ[illegible]給へ
注ぎ給へ。」茶屋をよび、こそびそいふ。茶屋「是れ申し、御しうぎが御ざりましたぞへ。」やりて「はゝはゝおありがたう
御座りんす。私はまあ行つて参りましよ。」茶屋「今のお杯、あげんしよ。」○此所へ肴の物、菓子、重箱なふたをとれば、あなたがたう
たまり、方々より持ちまする。主「さあ／＼、これほど御肴が出た。おさへます／＼。いや、おれもお秀、いやおれ呂
制せ、さあ、御出で／＼。なに今の一杯はゆうおまはし／＼。」ふゐき「兄さん、其の三味線、あちら
へ上げてくんなんし。あれ御亭さん、くるひなんすな。あれ呼びんす。おう／＼。」みな／＼、旦那は大一ぶお騒ぎ
なさつたら休まう中したらよからう。」

更けての體

女郎さし合、名だい廻り部屋、主「あゝ今宵も又此のやうなせまえ所へたうとう入れられた。いッそ此の事はよして
あゝ離へもきめる。あぢな心持に成つた。」ある夜は中々新造にこゝろ、新人をせずに寝入りこそらでして隣座敷かな三味線にてほち／＼とひく
主「うゝゝ、これ／＼三味線をひきやすと、新造「いゝえ、かうして置いておく
んなんし。又叱られんす。」主「其のやうな大きな聲をするから悪い。こそ／＼とあまつと」というて手を取つ
て引つ新造「をかれんすにえ」と、むきに成つていふ。しかたなく手を放し、暫く顔のたつ思入有
ぱる。すつと立つて帯をしめなほし、しばしきり思案して居る。主「これ、
さつきの、どこかへ持つていつてしまつた。鼻紙袋と羽織を持つて来てくれろ。」新造「どうなんす

えゝまゐへるゝ」[illegible]「今ごろつひと歸りなんせんに、なぜ歸りなんす」[illegible]「いやもう七つ過ぎでもあ
れ」[illegible]「いや、まださら程ではおざんせん。今においらんでお出でなんす。主のいひなんすには、
「必ず一寸でも、ぬしをいごかせ申すな」と、いひなんしたから、いごかせ申す事は成りいせん。お
つとしてゐなんし」[illegible]「今に來るか」[illegible]「たつた今お出でなんす。氣を短くせずと、ちつといるがな
なし」[illegible]「うゝでもおまの[illegible]ないぞ。今來るか」ときたまた。[illegible]客は[illegible]、女郎は[illegible]、たわいな
[illegible]、あゝなんとしろ、なに事だと、たばこ盆をいたゞいて、とつて折つてよせと[illegible]これ〳〵、ききなさ
[illegible]ねてゐる手を打つて[illegible]はなれない[illegible]はときまな[illegible]
いまきなすい。[illegible]がある。[illegible]と、火をこはした。お[illegible]いく」[illegible]「こはなんだ[illegible]
[illegible]に[illegible]せ、わつちとおきなさい」[illegible]「[illegible]よくいひなさい」[illegible]「[illegible]
おこしたこ[illegible]やでい。もう七つ[illegible]でもあろ。[illegible]を[illegible]見る[illegible]。[illegible]もう[illegible]聞けたそうな」
[illegible]「いや〳〵、まだ夜は明けん、七つを打つて[illegible]。[illegible]おまへは見なんしたでおさん
すよ。[illegible]と聞けんした」[illegible]「[illegible]もまだ[illegible]。[illegible]は[illegible]ば[illegible]」、す
ん」[illegible]「何かすかねえ」[illegible]「[illegible]の客人の[illegible]ておさんす。いつでもしやれでざ
うもすきんせん。」
[illegible]「[illegible]これ[illegible]、[illegible]いゝてゐる。これ[illegible]」[illegible]なんでおさんす。あんまり[illegible]

うに、大たばに云つておくんなんすな。」通り者「あいさつきの息子を、起して来てくれろ。」新ぞう「今来なんす。」（ちうむすこねむたさうな顔で来る）通り者「色男どうだ。とんださゑないぢやないか。」むすこ（はづかしさうな顔にて）「どうもねかさないで、何がねむう御座ります。」通り者「そりやとんだ仕合だ。此のしんなんざ、宵にちよつきり頬をつん出したまゝ、やう／＼今に成つて来た。もう吉原も再びないわい／＼。」むすこ「又あきつてお出でなさんせんかい。」通り者「なぜ。」むすこ「わたしやあさつて約束致しました。」通り者「すとんだ事つたの。恐ろしいわい／＼。こゝの内はとんだ悪い内だによ。」〇むすこが女郎は部屋持にて、よほど人いちよき女郎にて、ねむたさうにしてやうしたならびゐて部屋持に、しんぞう「すかん。」といふてにらめる。通り者「これ新や茶をいらせろ。」新ぞう「何けへらせろとかえ。」通り者「これさそんなにしやれずと、早く持つて来やな。なう色男。」もつくり茶を持つていこぢやないか。」むすこ「あいよう御座りましよ。」部屋持「もうお帰りなんすのかえ。」むすこ「あい。」部屋持「もちつとゐなんせ。まだ早うおざんす。」通り者「もし、私をばなぜとめなさんせん。」部屋持「おまへをばぬしが留めなんしたから、私がとめ申さずと、ようおざんす。」新ぞう「なに、すかないぬしのやうなものを、とめ申すもんでおざんすか。早く出ていきなんせ、夜があけんす。」通り者「此の新は、おれをば人間ぢやないと思ふさうな。」新ぞう「その新が、宵からすかなくてなりんせん。」通り者「それはさうと、奥座敷の女郎衆に、傳言をしてくれたか。」新ぞう「あい、さう申しんしたなれば、ぬしやア、そんなおかたは知らん。」といひなんした。」

通り者「はて、にくくするの。それでも廊下座敷の女郎衆は、よもやおれを忘れはせまい。」新ぞう「あいこれもさッき、さう申しんしたなれば、おまへの小用にいきなんす時、あとから見てゐなんして、さういひなんした。」どうも思ひ出されない。」と、いひなんした。」通り者「さすれば爺に成つたか。何事もさえぬく〳〵。只々歸りましよ〳〵。」新ぞう「はてさてもちいとお出でなんし。おまへが歸りなんすと、わつちや死にんす。」といひながら廊下へ送り出る。むすこ部屋持あと〳〵残り、床ぢや〳〵はなしをしてゐる。通り者「色男きたないぞえ〳〵。」新ぞう「人の事にかまはずと、早く階子を下りなんし〳〵。」

しのゝめのころ

〔郎〕与「あゝやかましい、宵からの口きゝが、やう〳〵出て行くさうな。さつきからもく〳〵ぐちのあく音で、大ぶのぼせた。」はり、若代の新ぞう入れか、新染の女郎、「おしつけ奧座敷に替りんすと、此のやかましいがよくなりんす。それまでお大體の若勢おやおざんせん。」与「はて探宵からあのほど、俺がいつて聞かせた通り、其の樣に氣がまわくツて成るものか。新ぞうを出すほうは、どう成るともおれがしてやらう。今の座敷の外の事ばかりぞや。それもおれが樣子しだいで、どうともしてやる。」むすこ「さりとはお嬉しうおざんす。」といひていろ〳〵新作り「お前のやうな客人が、もう一人あると、わたしや大體えいこつちやおざんせん。」与「はて、氣の多いやつの。」とつめりてあり、なお身持のー與「ほんにわつちや此のころは、夜も晝も

ねられんせんが、今宵は宵の客人がかへつてから、お前のところへ來んしてから、心がとけてよく寐んした。それでも宵におまへの機嫌のわるうおざんした時には、いつそ怖うおざんした。今度からどうぞ腹を立ててくんなんすなえ。」 平「もう腹に立たん／＼。お許し／＼。時にもうおれは歸らう歸らう。」 女郎「まあ、もちつとゐなんし。」 平「いや、もう夜は明けよう。そこをちよつと明けて見てくれな。」女郎れんじを明ける。夜は明けはなれたり。平「南無三寶さつきから烏がないたらうが、ちつとも氣がつかなんだ。」二階で若い者「若い者／＼。早くはきものを下へやつてくれ。扨ら／＼あの茶屋めが、七ツにむかへをよこせといふて置いたものを、今にむかへをよこさないで。」 茶やの若い者「さきほどおむかへに參りましたに。」 平「奴をこれは。」と歸しゐるうちに、又むかひ一どきにかゑ／＼い。 女郎「必ず後に、逢まつてゐいんすにえ。」 平「いやどうもかへりがおそいから、おッつけんがいかん。さりながらどうぞこよう。」 女郎「そんならわつちや、中の町までは參りんすまい。」 平「そこ所ではない。あゝ、おそく成ッた／＼。」 女郎「必ずお出でなんせえ。」またからす かあ／＼。心しらずや明の鐘。

遊子方言 終

郭中奇譚序

當世男ありけり。吾妻の北の曲輪に居續けして遊び居にけり。此の里にいとなまめいたる傾城住みけり。此の別嬪染みてけり。思ふべきさうあの事に、いといやになりて有りければ、心迷ひにけり。有女郎の著たりける裲襠のそばを離れず、酒を飲みて居る。此の男忍ぶ端の下著をなん著たりける。有日屋の花紫といへるあひかたに、限り知れぬのほの出して、物日も揚げてやりける。面白き事もやありけん。忍びても忍ばれず、誰ゆゑに亂れにし、我なるぞとの日記は心ばへなり。今の人は、かくいちはやき野良をなんしける。此の里よのさとにはまさりける。意氣張り強く、情なん深かりけるのすゞのみにもあらざりけらし。それなかの野良男、うち通ひたらひに通ひ行きて、いかゞのほとりけん。其は彌生の節句、眺しつほりとして、夜著とてもとりもせず、寢させて夜をあかし、春の夜半に一日ものわきさすながの寝し、ついにいとふさ大事となりてけり。其の男云ひけるに、御座敷に下りてのものことて、先づ和歌の道にうとかれず、月花に心をよせ、伊勢源氏をまもなけをうつし、言を書しれ、歌の道をたゞすゝむとして、ゆつて黄表紙内をも手にふるゝ事なくて、今ぶきの小唄を見ては、曲吹の花色にさまねしつたね、聞は知らさずおれがのにせ行といへど、人知らざりけり。只欲に

深かりける。たとひ伽羅の佛にはくおきたるやうな心入れ、かたちも又いつくしき男有りとても、金盛の昔いかで貧乏にたゝみ侍らん。大盡は浮氣なる騷ぎを好まず、おほやうにありていやしき業を愼みぬれば、自ら其の容體高く、まことに傾城通ひとも見えて其の位あらんか。さはありとも人をこなさず、黄金の光を包みて、向うの心をよく察し、言葉をうけてともに其の座の興をなせるを、遊び上手とやいはん、阿房とや申し侍らんとなり。

明和六己丑初冬

郭中奇譚

臼　岡　先　生

船窗笑語

藝者ふたり。［illegible］「［illegible］やんのあかけたか、三むけたか、四ッあくてつはう、五枚んはうのすうホ、ホ、［illegible］ニッさそ。」［illegible］「あと上げやんせう。」［illegible］「まアハ、、、。」［illegible］「おやそサン袖が引ッかかつて有る。」［illegible］、手を出しなさんな。」［illegible］「そし汐が大分はやいやうだ。」［illegible］旦那その椎の木屋敷が見えますぞ。」［illegible］「アヽくさい／＼［illegible］ありやたまらぬぞ。ふわ／＼舟が一ぱいまで。」［illegible］きたない事云ひなさんな。なんのこつたな。」［illegible］「エヽ。」［illegible］「そりや見な、アノ屋かたにおふさ［illegible］、［illegible］ニ、も一人は誰だやら。こッちらの藝者さんで見えぬ。」［illegible］揚げた。」［illegible］「アヽヤおわ［illegible］だ［illegible］手［illegible］「アノあ［illegible］藝者か。」［illegible］顔と衣裳と［illegible］つた。［illegible］緋縮緬もきついもんだ。」［illegible］暗になつてゐたは、［illegible］ヤ萬字屋の女郎さ。」太「ヘエ、わたくしは又四ッ目屋の提灯だと存じました。今年の登籠はどうでご

ござります。御氣に入りましたか。」客「機關だけくどかつた。」此の間暫く話あり。やそこちら「おとめさん今日の髮ゆうてもらひなさッたか。」こち「アイ忙がしくておたしかゆうた。」こち「よくできた。」こち「おやそサンおまへアノ菊のかんざしはどうしなさつた。」やそ「アレハお京サンと萩寺へ行つた時おとした。」こち「私も此のごろ湯屋でおとした。ホンニ伽羅の櫛に銀のふちとつたのがさしてあるが二兩だとサ。お前買ふ氣は無いか。」やそ「わたしやかゝサンに見せなけりやならぬ。お前この模様はよくよくつたぞ。」こち「ホンニおみつサンの色のはなし聞きなさッたか。又おとらサンと仲間われがしたとサ。」やそ「色はアノせのひくい男か。アヽ何とやら、權。」こち「オヽソレ／＼、權八サンサ。それについて大いさかひ」太夫「コレ／＼こそ／＼何を話しなさる。その噺はザッとこれからお還し。」三味「ナレサ、じようだんしなさんな。お前に擦られる膝があると、千住へやてかにになでさせるわサ。」主「トリヤできた。」主「おヤサ強いおてらしサ。旦那モシ一ツお話し申しませう。」客「お仙が話も古い。」主「兩國の浦は。」客「ソレもきいた。」主「ソンナ古い事はこつと流しさ。」太夫「しやれと云ふはらだ。旦那ひぜんの平内左衛門の眞切は、粹しいではござりませぬか。」客「あんまりだ。やッはり極彩色の方がよい。」やそ「錦さんの評判がよい。」主「客サレモ古く語らうとするから重くてサ。」三味「ソンナラお前はどうでござります。」太夫「コリヤ旦那一言もないぞ。」客「ナニ／＼俺でも聲があつて、節を上手に繰

苦するとへ、おめへたに負ける事がやないヨ」やま「ソリヤ誰でもさ、、ハ、、、ヨ」まつ「こんど朧やの宵原の
事きいたかヨ」とへ「荷事さヨ」まつ「イヱノヽ。」宮「露眞と色さヨ」とミ「ソリヤおまへたやの新二郎かエヨ」まつ「ソ
レサ、きついはなりさ、新造出してやるやら、毎晩々々来ない夜はないヨ　その逢の遊への賑らしさ、
どうもいへぬヨ」まつ「こりや怪しからぬ　エ、聞いてきへこふ腹だヨ」とミ「きついやきさヨ」宮「利八、
今日はまだぐたノヽした日合な用きぬナァヨ　大、旦那むごいヨ　これが當世でござります、ヲァおまへ
おたチトお引きヨ　默有無門の色して　「利八どんかにて一ッけんせうかやサ、、ヨ」やそ　たうとうだまつて三味線引くものかと思ひながら。
まづ、あきほどの色のなまだ、潜おせんにたるまいか、チエハチエハノヽヽメサメサ」

癖花厄讀

「コッサイノヽヽコッサイ」ネイ、馬道へ出る、とミ「旦那でシノヽヽヨ」宮「ヲ、やなんだヨ」かご「二三まいで参りました
たこめすると大難が申します」宮「いつではないつものだにヨ」かご「へヱ、それ餘り寒うござります
すずはうへ参ヨ」「ヱ、そ、どうぞ二まいぶりお積み申します」ヤレ一歩いたゞきました同然
でござります」とミ「まいぶりとは二百かヨ」かご「へ、、、旦那おどけなおつしやるヨ　二百づゝいた
だきたうござりますヨ」宮「いやノヽヨ」といふて四百にきはまり大門口へ　かご「清六とお辞は下されませ
いつでもお迎にまゐりますヨ」宮「大儀なヨ」頭巾をふかくきて門の「サレノヽおゆなよりくたびれた」

茶屋亭主「コレハ其遊さまお出で遊ばす。おかごでござりますか。」内儀とよ「オ、其遊さま、此の頃は
どう遊ばしました。」亭「風々。」内「ソンナラマア、おこたつへ。コレきよ、うら口早くたてや。ホン
ニ、夜前仕候さまがお出であそばしまして。」亭「フム、一人か。」内「ハイ初めの處から見付けて、
大いそでござりました。」亭「ソリヤ面白からう。ゆうべ来たらばよかつたもの。」亭「コリヤ喜介、そ
の菓子扇屋へ持つていて、お歸りはおかごか、よく聞きましてこい。」亭「いそがしいナ。」内「コレきよ
よかな介か、中萬字へお知らせまうしや。」客「まて／＼今夜はチット。」亭「まだこりもなされずに。」
きよ、菓子持て出る。内「お一ツお上りなされませ。」亭「この頃富泉は来はしまいナ。」内「イエノ、あなたは深
川ではござりませぬか。」亭「ナニサ、わけありサ。」亭「御新造さまのお角でござりますか。」亭「ナニ
サ、下谷の藝者にきついはまりサ。」亭「悪いこッた。」内「サアお一ッ。」亭「ナ、よいかなだ。」亭「吸
物おかへ遊ばしませ。」此の所しばし杯事あり、おもて女郎花紫来る。亭、きもつぶした顔する。女郎「あにさん、コ
ウ知らしてくれなんした。おとよさんもつまりんせんに。」に下手の者がわらひ／＼として、亭「タッタ今お出でなされ。お知らせ申さう
と存じた所へ。」女郎「そんないひなんすナ。錦戸さんが見付けなんしんと、わきへやり申しなんすであ
らう。」と時分るか、亭「アッ、ノ／＼。」亭「アノマアそッはが、いつの間に見付けをッたやら。」女郎「い
ひなんすか。」といつて亭「ソリヤ風がかはッた。」内「一ッお上りなされませ。」女郎「アイ。」亭「お杯

お誂へ申しませう。」[illegible]ましてぇ木つれ申しや。」[illegible]「おれは今夜チト用が有る。」[illegible]お出でなん

しお出でなんし。」[illegible]「留無三あしつほが取りついた。」[illegible]サヤウナラ、お出であそばしませ。」[illegible]それ

らの羽織よこせ。」「ソレ喜介おはきもの。」いふ女郎内儀に何やらさゝやきこしを一ぬしや、巴やの若イ人によろ

しく頼ておなんす。」「イッソ仕われなだ。」[illegible]「おれをなはしかたにするさうだ。」の様子と[illegible]といふて中の町までおくりて、女郎や、

[illegible]「コレハ暴くなつた。」鏑戸のぞいて、「モシ其遊様、おいでなんし。」[illegible]「よくいゝ付けたい。」[illegible]「な

になさるの。」女郎衆ふ、「末や新さんがいひする」[illegible]「一ッぱいはのたさ。」[illegible]しばらく見付けんしたか

さうしたたつねて見なんし。」[illegible]ひとつ[illegible]ねぬ。」[illegible]若イ者藤介茶屋にむかつて、「お一ッお上げなさ

れませ。」[illegible]かんなどもつと熱くして上げましなさい。」[illegible]ほつ出る二ハ、、、其遊さまお気しうござりま

ます。客うへつく、[illegible]チト上げませう。」[illegible]障のなからおあひ。」[illegible]こつちへ来るまで内に寄[illegible]

つて、[illegible]におくと直に来しませた[illegible]レ待しおきへ[illegible]」[illegible]われたくしも[illegible]で

ござりやす。[illegible]この花[illegible]でまたし上げませう。」[illegible]よもしたくしんもいひ[illegible]杯はいや。」

[illegible]藤介[illegible]ちとおあひ。」[illegible]、つがつてゐやらう。」[illegible]まい

男へ[illegible]花[illegible]でま[illegible]ごさりなす。」[illegible]上げ[illegible]

たゝの座に入ましていかい役に[illegible]、[illegible]お膳[illegible]に[illegible]障子あけたら、[illegible]

[illegible]みて持ちいづる。

ござりませう。」米「さうへとしい。ホンニ月がよくさえた。半七はいかいわに。米「此のごろすきと致しませぬ。ホンニ先日からさやの御亭主が、何やらの題で狂歌を一首、エ、何とやら、何として何とやらの上やら。エ、、、、、、ト下の句は忘れました。」米「ソリやなんの事だ。ハ、、、此のところ時うぐる。」かなる昔ば、らうか　女米「サンザ騒がしい。」半「柴木どのこそバらツしやる。」米「コレ柴木たしなみやな。」「イエ若葉どのがくらがりで、おださツしやるから。」米「エ、誰いはツしやれ。」ホンノ…に嫁がいと、おさつ殿につけるぞ。」客「三歩になるものが、その様にじようだんするものか。」昔「柴木、首めなことに日那に水上げされたりみ申さないけりやならぬ。」半「ニツつらかこ」半「また〳〵また、日が過ぎてどうもならぬ。」下をちら〳〵、…「ドウぞむさしく逢はぬ。此方せい悔くなった。ヤ、誰かんへつれて参ツた時はまだちいさかツたに。」「こんとは芝居へ、つれてあよびなんした。」まつれしまてく。」ちとお茶すけさそんへ上げませう。」米「其の御吸物すへよせて、花紫さまへすゝましや。」米「あにさんおよへあがりなんせ。わツちやこゝで食べんす。しばきはしだしやこ」女…食…を…此の如し。ほゝ出る」何もござりませぬ。コレ顔をおしツて上がまさツしやれ」こいつる。若、茶持ち、米「コレ柴木や、わがみ島之助さん所へいて、アノわツちが申しんすゥ、「お頭痛はどうしなんした。ちとようござりんすか。其遊様がお出でなんしたから、ちと遊びにお出

せなんし」トどなツてきや」柴木立つ、此の間善都 芸「そウ酒も厭になつた。」 客「チト春もでも呼びませうか。」 芸「イヤ／＼、あれがねつ／＼した三勝もあいた。」 客「又ねる口おツしやる。」 芸「そりやかねうツたねエ。」 客「たツたいま打ちよした。」 芸「旦那、チトヤンへ御出であそばしませ。」 客どれ／＼といふて小用に立て。裏の間にはいる。 芸「わたくしはそちおいとま、おかへりはお早うござりますか。」 客「イヤ、いつもの時分でよい。」 芸「あたごさん御休みなんし。おとよさんへ、よく／＼このお済なしてくれなたし。」 芸「花紫様、旦那が、これさへやれ。」と裁縫ってどうもなりませぬ。」トト御意見なされませ。」トいうて帰る。錦の衣行 芸「ありやア、お茶一ツたら。」 芸「すとも。」 芸「マア主にあげ申しや。」柴木がへ日上て花紫さんに、ようおつかひ下さります。其道さんのお出でなんしたにござりますが、ツてまたいふこう御座りますかねエ、後行きよるりんしてお目にかゝりやせう。よいお楽しみでござりますに美しいでるなんすか。」 芸「イエ。」 芸「モシエ、ヤツトこツちへよりなんで。」 芸「大ぶ酔うたそに又昨夜いつも上げました事、あれでこうござんすが。」 芸「何の事か。」 芸「フウ。」 芸「あれでくだがすんにかい、此れはないんだ。」 芸「こりや島之助さまのやりなんす文さ。」 芸「これ／＼よくみてぞ。此の事ばかりだんだれた。」 芸「ほれたが、ほれないんし。」 芸「どうも可愛らしい處があるね。此の顔うれしくなせの事がいきれば、嬉いこッたよ。」女郎文見ていたけ。 芸「これはこれは大事にかけて取っておかうと

思うたに。」 客「よい気味の。」 主「又あいつがひいきしなさる。」 女房「まだそこにゐやるか。其の屏風こちへ引きよせていせなや。」 主「早くねるやうにと呆れなすにおや。」 女房「コレまけがらはしい物はことといふこかんた女 主「アヽ、可愛やうに痛ないた。」 女房「モツト強くなけよう物。」 イヤホンニよく書きなんすぞ おツかるおやうに、エヽかかぬ者もあるに。」 主「ソンナ例のくそが出た。」 女房「わしの所の庭に、わッちが文がたぶすてて有るであらうナ。」 主「イヤ、アヽ、あなたさまのは大事にいたして、肌身はなさず守袋に入れてござります。」 女房「わしの守袋は大きくしたであらう。」 主「イヤ、錦で表持はせにしたのが幾らも有る。」 女房「ソンナラ、肌身を放さぬと云ひなんすが、縁にかけてゐるなんすか。どれ見よう。」 主「イヤこゝにはない。ソレハサウト、おれが居間の向うに守蔵といふが有る。そこで夜も昼も顔見ることがならでながめてゐる。ホンニト強い奮か。」 女房「其の蔵を見にいきんすぞえ。」 主「來るがむつかしくば蔵とも持たせてよこそ。」 女房「わしになぐさまれるとあどがないぞ。」 主「ヤ、守蔵が見せたいわい。」 女房「蔵のついでに、いつやら、俺が所にからくり人形がある。蔵から出してやらうことといつて、よく詐しなんしたの。」 主「ホンニ出させておかうと思うてから忘れた。」 女房「モウいりんせん。」 主「ソレハ近ごろお殘りおほい。」 女房「よくだましなんしたの。」 主「まつそんな物さ。」 女郎「モウ聞きんしない。」といふて胸ぐら取り掛る。 客「南無三、御きげんがそこねた。」 女郎「ナンサ腹立てアしんし

んす」 主「ナゼに」 女主「ハテ心ざし有るかたよりのいつはりは、たか誠より嬉しかりますと云ひやんすか

ら、アア嬉しいのさ」 客「コハ有りがたき言葉のおたとへ、サ、御礼もいふ事だ」 女主「又いひなんす

わこ[illegible]、ほうらてきたよ」 客「アイタ、、、歯に入ッて力が大いに温くなつた」 女主「ぬしも歯に入ッて、大

ぶ口があかれなんしたの」 客「ハアあかつたかりご おれは又やッぱり鼻の下に有ると思うた」 女主「ば

かやめて、今の物をつと持たせてよこしなんせ、いやだよとぶちなんすとつめりんすそれ」 客「イヤ」

女主「アンナラ」 客「イヤ[illegible]」 女主「イヤ半分わかつてるなんすよの、これ

とほこをだしてやろ」 客「コリヤ御覧なさい よこすよ[illegible]いやさきつきの歌はなんとやら、いし

ツレ、心ざし有るかたよりのいつはりはと」 女主「まだなでさるなんすか、そのおれになかし」 客[illegible]つて

時々、客「ナア持たせてよこすといふに、いこの歌を使いうた見とのか、心ざし有るかたよりの」

女主「またいひなんすか。」というて上へのツ 客「これ手が折れように、あぶないよ。」 島之助、ふるき浅葱

またおむつことの[illegible]でござりやんす」 客「只今おなおごとの最中でござりやんす」 女主「島之助さんお

肌でなんし」 客「お[illegible]か、御[illegible]に、[illegible]にござりましたか、お用でかお待ち申して此の[illegible]申し」

女主「[illegible]」 客「[illegible]いしなんしたか、聞きなし

ないによ」 [illegible]許して[illegible]には此のごろ[illegible]てきかせう[illegible]見なさい、此の

際につめられた。」島「花紫さん、氣がよわい。わッちならもッときつくいふに。」客「ソリヤアかたうどか出来た。」島「花紫さん、アノ向うの染川さんが、何やらわるい事しなんして、やり手衆にはだかにせられてしばられなんしたわな。」女重「ソリヤほんにかへ。」客「アヽいつでも人のいふ事爰だと思つて。」女重「チトだまりなんせ。ソシテソリヤいつえ。」島「今のことサ。」客「表へはだしでとんで出ると、だれでも其の通り、よいきみだ。」女重「島之助さん、アノ尤もらしい顔見なんせ。」客「ソレデモ物のふッてある長持と、間夫のない女郎とはないものだ。」島「隣や向うこそじだらくなれ、おツおらの内のやうにかたい内は。」客「ナッット云ふまい。ソレおまへの鼻の両わきに、格子のあとがついて有る。」女重「よく廻る口だ。」客「口でなくて仕あはせサ。」島「オイラが山さんもよくいひなんすぞ。今夜どうして見えぬやら。」客「コレいむッて見なさい。足とこんじやうと鼻の先と一ッにつかたい。さッきに石を投げたが、たしかにあいつであらう。」女重「モウいひなんすな。拜みんす。譃ばッかりいひなんす。」島「其遊さん、さッきの事はなんだ、いッて聞かせなんし。」客「いはうか。」ト女郎の顔を見る。女重「勝手にしなんし。」客「女ばうどもが顔御らうじ。三味せんに振袖のさはッたやうに、びんとして尻目で人をにらみ付ケて、アノ髪のびらとした所あたひ千金なり。」女重「まだ云ひなんすか、しつこいがナ。」トいうて客「ス、イタノ＼、コリヤあつきをつけねばならぬ。コリヤいたくても大事な

いが、そッちのおはぐろがはげやしないか。」 女郎「馬鹿らしいわナ。ヨイ／＼、しかたが有る。島之助さん手つだッてくれなんし ソレそちらの手を持ちなんしナ。」 客「すゝ、こそぐッたい。はなせはなせ。起きる／＼拜む／＼。扨々じゆつないこッた。」息つぎに一杯のまう。此のやうに夜を更かして、其の上にもあそびにされて、あすの身がたまらねヘ。」 島「モウおやすみなんせ。わッちも又一ッかいてねよう。」 女郎「マアエイわネ、遊びなんせ。」 客「どうあッてもおかへりか。ソンナラわざと立ちませうネ。」 島「おさらばエ。」と行く。 女郎小声に[illegible]半分ねたやうな[illegible]して「ム、、、」と云うてにやつく。 女郎「コレ寐なんすな。起きなんし。サア、起きなんし。」 客「ナンゾ面白くさい。[illegible]にはましであらうが。」 女郎さつきの様に云ひなんしたから ○寐なんしたか島之助さんの座敷へいてねなんしナ。」 客「ホットトしたり。」と起きて[illegible] 女郎おさへて「サアいて見なんせ。いて見なんせ／＼。」 強いて笑ッつに持ちうつり、客の顔[illegible]にこたへておきあがり、島「あれッとおなんし。」 客「モウ[illegible]、[illegible]にまつて、今日は大師川で、迎へはまだかい。」 客「まだ早うござりますが。」 客「わつちはおしいか。」 島「ハイ、参じました。夜前のれいに越前屋へさそひまして、[illegible]ござりますが。」 島「[illegible]一ツ[illegible]の[illegible]へつれて行くこといひなんす。だましなんすナエ。」 客「ナニうそを云ふものだ。」 女郎「あにさん[illegible]、おたく[illegible]も

やりもしなんせ。」喜「おれよりわたくしがお供いたします。」客「残らずサ。」女郎「ねしや寒かござんしんか。」客「寒いとも／＼。」女郎「コレドレ、きて行きなんせ。」とねまきの上着ぬいできせる。客「もしおたばこ入。」喜「ドレ／＼」とたばこ入を持ちて来る。喜「ワタシ／＼。」客「ナモきつい霜だ。」喜「今日もお日和でござりますこと」といふて喜「アレハなんだ。」客「アレハ巴屋の岩こすさまでござります。」客「きついことすごし」とて跡を見る。女郎かた法で笑ふ。客「コリヤ、其遊さまのおかへりなさッたぞよ。」内「お早うござりました。」喜、杯を持ち出づる。同じあいさつ。客「おさ酒はよかろ。」女郎「ゆうべすごしなんしたに、モウ呑みなんすナ。」客「イヤ／＼、なかなかッて色い悪いはよくない。チットある。」喜「お寒いにお一ツ。」内「花紫さま、とうふお上りなされませ。」女郎「アイわッちやモウたべんすまい。」客「サアモウどれ／＼。」すぐにたつ。内、わきざし持つて、「是はおせはしない。左様なら明ばんお出であそばせ。」客「ホンニ紫木にすゞきの簪ねだられた。一ツほんおつらへてたも。」といひ出る。「ヒヤア大勢つけてあるは。恐ろしや／＼。」喜「アンハ高尾のでござりますこと。」喜「頼んで裏道から出して貰へばよいに。」喜「エ、さやうな事はなりませぬ。」客「なんしてやなるてや。」女郎「モシエ、あすの晩来なんし。」客「フウ。」大門へ出る。かごへのりしなにあとを見る。喜若い衆二人「さよなら御きげんよふ。」客かごの内より、「大儀／＼。」喜「コレかごの衆、静にしてやらッしやれ。」向夫に行く。女郎、これより客、帰る。「ヤレヤレよくのねぞ。」内「昨夜もイツソ松葉屋へ行きたがつて。」喜「ナニ中三が歯に合ふものか。」コリヤ

草助、金屋のがかへられたら、肴は梅ぼしと鯖ばかりでえいぞ。」男「ソレデモ、三度に一度は水さふするでも。」男「悪い癖になッて今さら、チヨイ。」

掃臭夜話

夜「申し〳〵。」客ではの熊、手拭で頬冠り、日和下駄、襤褸着物にまして、「なアまいだァんぶ〳〵〳〵。」と、熊さんが。夜「オヽ、早く出たナ。ヱヽ、この犬あはいまいましい。」ト下駄で 熊「昨夜はどうしなさッた。外にまいのができたか。」夜「ナニ来ようと思ッたが、トノじやうたこめがふぶ、喰ひにあいべと云ひやがッたから、内に居たァ。」熊「猫のやうなこッた。」ト、ソリヤ、お前の顔や鰹のあたまァ。」夜「なんのこッたい、ばかッつらな。」熊「チヨットへへりねえ。」夜「けへりによるべヱ。」熊「今夜はお月さまがよく冴えさしやった。おめへの今日の髪は高くゆひなさッたノ。」夜「オヽ、けあいつは下手だわナ。」熊「ドレ手拭は買ひなさッたか。」熊「ト三升が紋がついてあるな。」熊「ソリヤ見ろ此の下駄もかッたァ。」夜「いつものよりや背がたかいやうだ。」上「だいたいエヤナ。」其の代にとくがれんだァ。」夜「おらがのも毎晩本所からこゝまでくるのだから早くへるさ。」熊「ナニヤ下駄で思ひ出した。トノお六めに兵蔵めが下駄で首たまほれやがッた。」夜「どうだと」熊「おれもあいつはきえたそ。」夜「ハア、ソリヤアノだアがま。」熊「あごた耶きやァがれと、蟲がはしらなけりやたゝき出すぞ。」ト、ソリヤソウト、その胸の上の虱取ッてくれねエ。」夜「俺をし

「土手をハ、、、。」喜「くそくらへ、」よ「むまくもない物。」喜「アレアノ北のはうから、義太夫うなッてきやがるのは誰だ。ア、宗八めだワイ。宗八やアい〳〵。」よ「ナニサあれぢやない、マツト背がひくいはずだ。」喜「材木の影で見えない。うしやがッたら先へいッたとバッてくれろ。」よ「どこへ行きなさる。」喜「所三けうりに。」よ「はやく歸りなさい。」宗、熊「いきいかまはすいきらごすのま石きる。」あばの宗八跡より「熊やアい〳〵。」熊「おばかア早くこい。何よしてるるざい。ゆでばすのかぎに懸ッたやうに。」宗「あすのばハナ。おときめが所に會が有るワイ。聞きにあいべ。」熊「オ、新八も誘へ。」宗「コリヤ此のまとひ見ろ。持ちにくさうだナ。」熊「ホンニゆうべナ、清助めが角の酒屋で何やら立テ引きしやがッたさうだワイ。」宗「ナンダ立引だ。コリヤもう引が聞イてあきれるワイ。あいつも此の頃仕合が悪いかして、けえに寒さうだナ。」熊「サア來たが、ワリヤ錢があるカイ。」宗「イムニヤ今夜はないわい。」熊「おらもよ。」二人「コリヤ又なんのこッた、いま〳〵しい。」といふても とふ所へ。

郭中奇譚 終

跋

詩曰、有妓子眞情、與雞子方角、則晦日可見月出之光。豈唯妓子哉、遊女之意以請淺矣。於是有郭中奇譚之作。苟悟其趣者皆通人也、如未有信其高者、不足責也。

明和己丑冬十月淡海先生題。

辰巳之園敍

京都辰巳廬社住。江都辰巳有遊樂。夫者宇治山。是者深川。富賀岡之邊。遊情婦之郷也。勤悉々書集。吉原北國之名有。學レ之辰巳之園題。書肆何某任レ望。北國之美君尊不レ顧。如井之内蛙吉原雀閑レ雜。深川參人述レ之。

明和七年林鐘撰レ之。　樽閑街紫樓

大頭枕に華の夢は虚生ゟ五十年の夢とやいはむ

脇頭と同じ枕の花の夢　白弓庵祇葉

辰巳之園自序

富岡八幡宮は、鎌倉鶴が岡をうつし作り、貴賤老若の信心日々に彌まし、四季をり〳〵のにぎやかに、されば茶屋其の外、やうじみせよしづ茶屋等の茶婦は、紅粉をよそほひ、品かたちの美しきを見れば、樂しみは外にあらじとおぼゆる。さるによりて此の土地に樂しむ遊民は、北國の面白さを知らず。美こくの吉原に比ぶれば、九牛が一毛とやいはん。さりながら餅好酒の醉事なぞねみ、酒好は餅のふうみをにくむ。吉原の位あつて靜かなる遊びを知らずして、此所の素人らしき娘風を悦び、又此の土地のわつさりとしたるたのしみを、吉原好は知らずと、深川好北國をにくむ。吉原客は深川をげびなりと笑ふ。いかで爭ふ時は水かけ論とやいはん。吉原に晝三あれば仲町土橋あり。打附あればやぐら下[illegible]島あり。一分二人六寸には、新地入ふね石場三間堂をたとへてこゝにたのしむ。姉女郎あれば年間あり、恋あれば小女郎と云ふあり。花車あれば送迎男あり。たいこ持はげいしやといふ。淺草觀音に比ぶれば、八幡大ぼさつを信ずる、辨天は卽ち永代寺の寺中に有り。九郎助いなりに仲町のいなりをたとへ、松田いなりは黑江町のいなりをいはん。又朝日如來には、永代寺の本尊をなぞらへん。大うんじまへあれば永代寺門前あり。大門あれば大鳥居あり。土手あれば永代橋あり。衣紋坂

にはやぐら下の火の見をたとへん。此の火の見を見てゑもんをつくる。さくらのかはりに山びらきといふ有り。とうろうのにぎやかあれば、八幡のまつりあり。新宿をよぶは、むかうの人をよぶにひとしく、ひけ四ッのしづか有れば、四ッさき、きなといふ事有り。吉原に意氣地あれば、此の土地にたてひきあり。丁に振るといふ事あれば、こゝにてらすといふ事あり。照と降との事にや。姉女郎御亭様のかへ名あれば、茶屋の女房を一統におばさんとよぶ。其の外お針いんきよさんなどの通言あり。ここに畧して末にことかくあらはす。誠にあつれば同じ谷川の水とて、若衆好も吉原好も深川好も、遊びにかはる事はあらじ。爰にいふ、女郎も二階へ上るの道理なり。さりながら此所の売には、はれたる遊里あらざれば、北國より禁するときは、けいどうといふ百日あまりの大紋日あり。されど丁より禁するとも、深川客吉原へはゆかず。世に水なきときは、川水のたすけあり。すでに無事は割りつ世に長詩をたもちしと、聞きつたへしなれど、此の作者は深川のくはしき書きあつめたれば、吉原の日をしのぶ已に而り。あなかしこく。

辰巳之園

夢中山人寝言先生

春風は花のあたりをよきてふけ、心づからやうつろふと見む。上野飛鳥の花ざかり、日ぐらしの興景所々にぎやかなる折から、きさらぎなかばの頃、かやば町薬師如來の參詣おびたゞしき群じゆの中に、けいしや八丈の羽織に、黒つむぎの小袖、八丈かはり縞の下着、八反がけの茶よこ島のおび、はな紙袋小菊三ッ折、丸角屋がほねなりの利久がた、髪は本田にあらず、茶筅坊にあらず、出來ぬにすの男を好と結び、せつたは鼠緒の下り皮、細身のわきざしをさして、伊勢屋が床几にこしをかけ、伊「これは志厚さん、きついお見限りでござりやす。」志厚「此の間は石燕が花の會に、そして以來に泊りあのやりして、きんびく〳〵にわか氣つめでぶら〳〵心、これではいかんとおや玉隱れの、ちよんの間と出かけやしたに」伊「それはきつい御心勞。今日もおさへおへ。」志厚「久しぶりだに、おことゝおらうかと思ひやすに」伊「お早うおかへりなさりやせ。」けなしの髪を大ほんだに結ひ、飛八丈の小袖のすこし汙れたるに、黒ぢりめんのひとへ口に、ほゝせきの帶に、小鰓木小なおとし指しにさして、山岡づき

んをよこちよにかおり、日和下駄をはき、大きなる顏にて來る。志庵「かれさん見ねエ、すごい男だ。」なアまだぬしを知りなんせんか。」如雷さんと云うて、ごエ／＼やかましのぢやござりやせん。」うら門のかたより御國染と見えて、花色小袖に淺葱うらをつけ、あらひはげたる黄むくの下著、黒紗綾の帶に、郡内縞の袷羽織に、甲斐絹の裏をつけ、袖頭巾をひら／＼とかむり、尻をおん／＼ばしよりにして、き木綿の足袋に藁草履をはき、大小を閂ざしにさして、もえぎ羅紗の柄袋を掛けて、楊枝屋の娘の美しきに氣をとられ、傘の澤山なるにきようをさまし、ちよき船の早さに驚き、金魚のかずに呆れ、植木の青々としたるに目をさまし、楊弓のカッチリちりゝんに胸をびくつかせ、からくりの太鼓に氣をぬかれて、大きなる鼻紙袋の落ちたるも知らず、うか／＼と來かゝり、如雷が顏を見るとさよふろ／＼顏にて、袖頭巾を取つて、「貴公にはいつ方へお越しなさるゝ。」如雷「これやア珍らしい。ぬしやアひとりか。」新五左衞門「イヤ下拙も初の出府ゆゑ、方角も存ぜず、藥師とやらが今日はにぎやかぢやつと、福齋老のすゝめに任せ、にぎやかな町を通りぬけて、やう／＼尋ねて參りました。」如雷「そんな事ならつれだつて來ようものを。どうだ、此のにぎやかな事はおそろか。」新五左衞門「いやはや、とつぴやうしもねエこんだアむし。」如雷「主はなんと深川へいく氣はなしか。」新五左衞門「どこへなりと行きますべい。」如雷「そんならもつと身重をして來ようものを。イヽ、知つた奴らに逢つたら、つい隱れのつい逃げにし

ようっもつと用もあれど、用事流しのちよんの間遊びと出よう。船に乗らうか。日本橋へは遠し、江戸橋の田村屋にしようか。但し西村のおさよが所で乗らうか。いや〳〵、此の間大和屋のむすこと乗つた渡場の中村屋にしよう。新さんこつちへきなこもし〳〵。」如雷「何のこつた。」新左衛門「そつちへ行くのかえ。」是より如雷新左衛門をつれて、よろいの渡しの方へ行き中村屋にて せんどう次郎「船か〳〵。」如雷「船か〳〵と他人がましくするな。」すると、次郎、いづれ来る客、なれ〳〵しく、上手者なれば愛染にて「これはお見ちがへ申しました。おつや殿、お茶を上げねエ。」せんどう長吉「そんなら俺はいつて來よう。イヤ稲荷坊は何番が出たな。」次郎「七百二十一と出た。」長吉「なむさん、薬師のもがきを喰ふ。此の頃は七百六百がいいわえ。」次郎「今日はどこへ行く。」長吉「九十九里の旅人のしまひがある。」次郎「早くしまつたがふくりなうたう。」長吉「後に〳〵。」如雷「あいつはどこの船印おや。」次郎「横町の西村になりやす。」如雷「西村の船頭か。あいつも見忘れたさうな。きつい年寄になつたさうな。」女つや茶を持つて出る 如雷「イヤ美しくなつた。久しく見ねエが、とんだ茶釜になりをつた。どうだ、地色でもできたか。」知らぬ客ゆゑ氣味を惡がり勝手へゆけば引きかはり女房出る 女房「ようお出で遊ばしました。先づは日が暮ればしませう。次郎、この船を早くこしらへさつしやい。」如雷たばこ呑み付ける。女房火入に手をあて、女「お火がござりますかな。」如雷「ありやすく。」次郎「かみさん仲町の龜山へのみがありやせう。」女房「今見てやらう。船を早く拵へな。」船頭次郎火縄箱など手にもつて、の方へ行く。女房「是れ次郎どん、くはへさせるはあぶな

いによ。」女房「アイ〳〵」女房この間に勝手へ行つて状指を尋ねる、如雷手拭を出して顔をふく。如雷「新五左、必ずつまらないことを云ふまいぞ。」
新五左衛門「何さ、おれも田舎ものぢやァねえ女郎買だ。今度も輕井澤で遊んだら、峠まで送つてなむし、お歸りにやア、必ず寄らしやりませ。」と、くれ〴〵いうて大もてであつた。」如雷「何の事だ、人が聞く。そんなことは御めんだ〳〵。」女房「船が出來やした。」女房「おいて、船ができました。お出であそばしますか。」如雷「サア何とさんお立ちやせう。」女房「おかみさん、女中に西宮が所の長歌を買ひにやつてくんねエ。」女房「ハイ〳〵。つや、新六さんの所へいつて、めりやすを買つてきや。」如雷ふところより錢をだし「早く買つてきてくれ。木川岸々々。」つやはめりやすを買ひに行く。女房先へ　女房「さア召しませ。」如雷船へのる「新さん乘りやすぞ。」新五左衛門ちよきは初めてのれば、そろ〳〵取付きながら「ア、こりやァ不細工なもんだ。」如雷「ころびでもせまいぞ。一人でころんで濡れるやつと出まいぞ。」女房「うそはねェ。もしおかみさん、紙入をとつておくんなせえ。」女房「先づちつとまちな。めりやすが來る。」下女つやめりやすを買ひ、いそ〳〵走りて來る。[illegible]「臘月と石市庵を買つて參りやした。」如雷「そうか、さよなら、すぐに[illegible]重さはどうでもほだしおや〳〵。」女房紙入を持つて出し「お歸りにおよりあそばせ。」如雷「アイいつてめエりやせう。」女房「イヤ次郎どん、白木屋の補助さんのふみなア。」次郎「それ〳〵、そつから投げておくれなんし。」女房「そんなら投げるによ。それやア。」次郎「おつときやした。」ふみを懷へ入れ、船はようよう出る。次郎「とりかぢ、とりかぢ、やんわりと〳〵。エ、べら棒、おとききを

見て貰はう」 [illegible]「話さう、此の花川戸の藏どもみ見やれ、是れがみんな酒だによ。」 [illegible]「人は
けないものだなア」 [illegible]「是れよりまた、油町の孫兵衛すかしたいらが見せたい。」 [illegible]「孫兵衛とは。」
「[illegible]國でも知つて居る親分がことさ。」 [illegible]「井桁孫兵衛と云つては、手跡はよし、金は潤沢あり、孫兵衛さ
んの事だ。」 [illegible]「もし旦那え頭巾を」 [illegible]「孫さん頭巾をとりねえ。」 [illegible]頭巾
をたゞ取る。」 [illegible]「こゝは緑故のの香蘭だ、見ねえ、くれがたおらに是れに火をとらす。此の橋が永
代橋といふのだ。橋下から見えるが佃島だし、こちらの大きい見の下をはひると八まんの裏、二軒茶屋
やら下など、行つて、」 [illegible]「やぐら下とやらは、網元で[illegible]には、焼けたと聞いたが。」 [illegible]「いや
けたとて、出来ないでなるものか。[illegible]もやけたが直ぐにたつた。やぐら下なども焼けたには違ひな
てあつたが、[illegible]になつてすとんだもんだ。上方では焼けたんだが、丈やけたから焼けほとりと
それで、また立派に出来よう。」 [illegible]「此のあたりでとした所はなんだや。」 [illegible]「是れは八幡宮
の境内さ。」 [illegible]「どうかつゝだ。」 [illegible]「こゝにもあるのか。」 [illegible]「すこゝはおふし茶屋がある。は
風のあるはへきんの[illegible]うのさ。新地も近し、お場もあるけれど、新地などは下卑たやて、なう話しう」
「すこしは[illegible]うにされたくはござりやせん。新地のはのようなどはよく致しやすよ。子供はそうつ
て居るなあ、衣装もよくいゝわやす。ちつとお出でなんしよ。」 [illegible]「こいつはは、ほまやに色があるく、

もうさんでもかぶるなよ。」次郎「つがもねヱ。そんな事するものぢやァござりやせん。旦那どこへお出でなんす。」如雷「されバどこがよからう。仲町にしようか。土橋にしようか。河邊の娘が半四郎をまねるも久しいもんだ。山本にしようか。山本は腹が小さいから、小花屋にしよう。」次郎「いつそ龜山へ御出でなんせ。」如雷「イヽヤ小花屋々々々。」次郎「稻葉やおなじみなら、さきへ御出でなんし。」如雷「さあ新さんあかんねヱ。」新五左衞門「早いもんだ。夢のやうにきた。」如雷「そんなら先へ行くぞ。新さん此所へ來ねえ。」如雷と新五左衞門新道の小花やへ行く。くちよき來り川岸へつく。せんどう忠五「龜山々々。エ、ふけいきな。龜山々々。」やう／＼龜山にて聞き付けて女來り　女「忠五どん御苦勞。蝶鄕さん、おいでなんした。」蝶鄕「此の間は御世話。」女「お蔭で面白う芝居を見やした。」蝶鄕「これはお禮で痛みいりはく。」蝶鄕は女と連立つて龜山へ行く。忠五船をしまひて、忠五「是れ／＼次郎、そ知らぬ顏をするな。」次郎「どうだ忠五久しいの。いい事でもあるか。」忠五「とんといけねヱ。ゆうべも屋形にいいのがあるからいたりや、手ぶりあみ簇になつた。」次郎「おいらも御つきの丁字やで、めくりを打つて六七百負けて、それから表の春岡でこまがあるから廻したら、半分許り負けはかへつた。」忠五「そりやァ先づよかつた。なんとそつちの吉はどこに居るの。」次郎「此の間聞けば、のぶと船をのると聞いたが、ついぞ見かけねヱ。」忠五「あいつもいけねヱたうなすだよ。」次郎「南瓜だか茶釜だかわからねヱ野郎だよ。客がまつてるよう。後にきやれ。」忠五「どのやうな客ぢや。」次郎「な

んだか雨落のきしやご見たやうに、しやれのめすよ。」 忠五「そんな奴もくがい三年と附合つてつとめたがいい。」 次郎「後に〳〵。」 次郎は新道より小花やへ行く。忠五はふねをしまふ。 小花屋娘お中「どうだ次郎どん、きついものだねエ。前のお松どんがゐるねエけりや、龜山許りいきなさるな。」 次郎「こりやア迷惑。客衆さへ来ようといへば、いつでも参りやす。」 長助「譃をつきねエ。」 話のうちに、奥より女きたり 奥「お中さん、忠孝さんのちよつときねえと。」 お中「横座敷でか。」 お中は座敷へゆく、次郎も勝手の火にまたがつてゐる。料理番も客大勢ゆゑ忙がしさうに 料理番「お松殿、硯ぶた持つて行きねエ。奥へはまだ吸物が出るによ。」 客四五人きたる。 若イ者料理番「お中さん、お松どん、お客があるによ。」 女「これは五郎兵衛さん、ようお出でなんした。」 五郎兵衛「今日は座敷からお出で遊ばした。随分そまつのないやうに。」 女「アイ〳〵、さあこつちへ御出でなんし。」 五郎兵衛「だんなお上り遊ばせ。」 客のこらずお座敷へ行。客の風體は、御大名の勝手用人ともいふ恰好にて、御納戸茶羽二重の小袖に、淺葱むくの下著、茶色の帯、りつぱなる大小にて、京扇をぱちつかせ、髪を合はせびんにて、元結を四角にまき、宗十郎づきんを持ちきたる。跡につゞいて二人来る。是れは勝手用人の下役手代といふなりの男ぶりにて、郡内縞の綿入羽織に、小もんの秩父絹の小袖、ひとりは、ふとりの羽織に上田縞の小袖、はゐか跡より、さんとめの脚半に、小はく縞の帯、手に海黄縞の風呂敷を持ち、かつてに居ようとするを、客「これ〳〵長助、酒でも吞みやれ。」 長助「ハイ。」 跡につゞいて行く。是れは勝手用人か小つかひか手習師匠なるべし 五人ながら座敷へ行

く、座さあみんな平らに〳〵。」四人「ハイ〳〵。」（此の間にたゞ二盃ながら出る）客「是れ〳〵、屋敷は屋敷、爰はこゝちや、皆平らにし給へ。」四人「ハイ〳〵。」（女鉢杯硯ぶた持ち出る。）五郎兵衛「旦那一ツ召上られませう。」客「然らば初めて。」（一杯のみて次の男へさす。）次の男「傳六殿お先へ。」（酒をのむ所へ女来り、）女「五郎兵衛さん、お百さんはさしで居なさりやせん。」五郎兵衛「ア、だれこれはねエ。美しいのを揃へて頼みやす。」客「これは殘念びんしけん。五郎兵衛が馴染を見ようと思うたら。」五郎兵衛「又旦那悪口ばかり。」（吸物出る。女郎あね来る。障子の陰より小ごゑに、）女郎「お中さん〳〵。」お中「サアきねエ。」（女郎四人来りてならぶ。客は一杯のんで女に渡す。女杯を上座の女郎にわたす。女郎杯をよこにまげて、ちつと斗りのんで女にわたす。女は次の男へ杯を持ち行く。次の男のんで小ごゑになりて、三人目へと云うて女にわたす。女三人目へ持ち行く。女郎のんで女に渡す。又女三人目の客に杯渡す。三人目の男のんで女に渡す。女三人目の女郎に杯差す。女郎のんで五郎兵衛へ杯来る。五郎兵衛はさしづめ四人目の所遣にきとる。）客「長助々々、どこへなといつて樂しめ〳〵。」長助「イエ御酒はいたゞいたでようござりますこし。」五郎兵衛「西宮の船頭と、堂前のあふぎやへいかんせ。」長助「イエもう。」客「いけ〳〵。」五郎兵衛「サアサア。」（むりに長助をひつたて、船頭と一緒に堂前へやる。）五郎兵衛「にぎやかに藝者を呼びませう。これおまつどん、誰ぞ頼みやれ。」客「羽織にいたしやせうか。男げいしやにしやせうか。」五郎兵衛「梅太夫がよからう。」お中「おまつさん、梅太夫さんを聞きにやりねエ。」客「アイ。」（女は梅太夫よびに行く。跡は女郎と客別々になり、座も少ししらけて居る處へ梅太夫きたる。）梅太夫「これは五郎兵衛さん、お久しぶりで。」五郎兵衛「まちがひ久しうお出會ひもいたさぬ。山で存んだまゝかな。」梅太夫「さやうさ。宮本以来でござりやす。」客「ちかづきのためささう。」梅太夫「是れはありがたう

存じます。」五郎兵衛「なんぞ面白いものを頼みやす。」梅太夫「風流の馬士ぶしをお聞きなさりやしたか。」五郎兵衛「よかろう〳〵。」梅太夫「豊丸さん、てうしをあはせねエ。」豊丸「よし〳〵。」ト梅太夫鼻をかみ、せきばらひなどする。座頭豊丸三みせんにかゝる。梅太夫「エヘン、△うたひは知らず義太夫は、知らぬ我等がふつゝかに、歌はちとよりしらいとの、なにはの。」お中「五郎兵衛さんへ。梅太夫さんに、此の間はやるおいらが狐がはらませたと云ふ歌を、あて身ぶりをさせなんせ。」五郎兵衛「梅さん〳〵、狐が孕ませたにしなさい。」梅太夫「ハイ、こいつはちと辛いねエ。」客「しよまう〳〵。」梅太夫きいなく〳〵狐の身ぶりをする。梅太夫「豊丸さんうたひねエ。ヤ、ヤ、ヤ、ヤ。△おいらが狐がはらませて、御亭になろとはわりしややです。やです〳〵やでもです。しんじつやあてはなけれども、人目恥かしけりやわりしややです。やですと云ふ事はいはねエもんです。夫でもいハヤ。」客「是れは一ッ興〳〵。一ッはいのみ給へ。」梅太夫「是れは〳〵。」お中酒をついで「おつとこゝさんす、おつとござんす。」お中「梅太夫さんのうたひいいもんだ。」梅太夫「いやもうとんと酒がいけやせん。四うても、二見やではまん酒の相手をしたりや、これはだれえなしになりやした。」五郎兵衛「一ッはのみはよからう。」梅太夫「イエ一ッこうございます。」女「五郎兵衛さん、ちとおつかいへお出でなさんし。」五郎兵衛「[illegible]なるほど。旦那もちと御休みあそばせ。」客すこしあれいゝの「ウ、まア〳〵。」お中おまつ梅太夫目鏡つけて「おとしなさませ。」五郎兵衛むすめ客は〳〵床にはいる　女郎「梅太夫さん、つき出しの子と一座しなさつたか。」梅太夫「イ、エ、一座

はいたしやせんが、此のあひだ中川でうしろから見かけやしたっけ」女郎「すかねエ子だねエ」如雪「まだなれねえからさ。」女郎「いけるのぢやァねエ。」太夫「おかんさんのくさすも久しいもんだ。」大勢口をそろへ「アヽらつちもねエ。」みな／＼床へ行、客床にて小座に、客「此のさゝらさつとすてゝ、さゝふらへば、アヽフウ。」女郎来り、客そこねいる。女郎「もし／＼」客「アヽきつく酔うた」女郎たばこのみて、客にのみつけて出す。客「これは／＼」煙草のむ、一座の女郎三人ながら来る。「あなたお休みなんし」おかんさんお休みなんし」女郎「アイお休みなんし」みな／＼床へ行く、おかんなや

翌座敷

らず引き溜して、「まだお寒うござりやすねエ。」客「さればさ、朝晩はまだ寒い。」などゝいひこいろ／＼におもしろき仕打あり　如雪「新ぼう面白いか。」新五左衛門「ゐなかとは違つたものだ。」といひながら山中紙出して鼻をかむ。如雪「是れ／＼、主の紙はそでねエ。小菊にしねエ。小菊を買ふなら、ぼくろ町の紙屋五郎兵衛がところがいい。煙草も南に四斤くらゐのこくぶがいいによ。匂袋のやうなものはな、室町の桐山三可が所から取りねえ。又煙管を張らせるなら、池の端より米澤町の村田がところがいい。主ははいかいもすこやらかしたな。」新五左衛門「国でちつと許りして見たが。」如雪「そんなら宗匠へ弟子入りをしねエ。存儀でも金羅でも、祇徳、左傳なりと、湖十などもよし、菊堂なりと氣の有るにしねエ。皆おいらが心やすくするから、つい出來る事だ。朱肉や唐墨のやうな物は、古梅園が所から通ひでとつてやらう。らふせきを買ふなら、四日市よりおやぢ橋の彌五郎が所で買ひねエ、筆も思恭が流なら、御成小路のせんちんしといふ

が有る。」 新五左衞門「そんなことより三味線が習ひたいものだ。」 通言「そりやなほ〳〵安いこつた。義太夫三絃なら、五八でも富八でも、豐後ぶしなら、文字豐でも文字久なりと、芳町の竹澤園もよし。」 新五左衞門「文字清とやらはどうしたの。」 通言「何文字清か。今では中村秀松が女房になつて、子をもつて內儀株だ。」 新五左衞門「どこにゐるの。」 通言「川岸の富田屋と云ふのがそだ、いまはわきへ越しやした。」 新五左衞門「役者が茶屋をするかの。」 通言「するの段か。高麗藏が內はかうらいやといふ。芳町に人形つかひ西川重三郎がきふしがへやと云つて有る。其の外に中村屋島五郎、萬屋、新萬屋は市松、竹いせやといふは隱居した伊勢太夫が內おやし。鹿の子もちは又太郎音八と兄弟がみせおやす。角の八百屋には大谷廣右衞門、今では人形とにしき繪を賣りやす。いくらもこんな類がある。」 しつた自慢にいろ〳〵の事を話す所へ女郎來る お長「是れおとよさん、ゆうべはねヱ。」 おとよ「面白かつたねヱ。」 通言「どこで。」 お長「梅本でさ。」 通言「梅本はごうせいなもんだ。やぐら下などは皆こちらで梅本の地だ。興津にも店があり、芳町では子供やなり。」 お長「豐岡さんの內だねヱ。」 通言「豐岡をどうして知つてゐる。」 お長「いつぞや、拳角力のとき出なさつたねヱ。」 お長「それ〳〵、梅の紋を付けて。」 通言「豐岡が拳ときてはすごいもんだ。」 新五左衞門「日がくれるだらうねヱか。」 お長「まだ七つすぎでございませう。」 しやうじ引きたて時風かきはし、「おちやうさんお休みなんし。」 [illegible]「下に」 [illegible]「お長さん〳〵、ちよつときねヱ。」 お長「何だヱ。」 お長はしごきの[illegible]なりにて出る

厚さんが來なさつたに」 お長「見通しにかゝ」 女「イ、エ、よその座敷で。」 お長横ざしきへ行く。如雷は氣を廻し、廊下に立ち聞きする。 女「お前はさつき來なさつたおやアねエか。」 志厚「裏の關口に淸兵衛やに忠公が居る故、付合ひに今まで居た。」 お長「又おいかさんをよびなさつたか。」 志厚「おいかはわきへ出た。開きにやるやつさ。」 志厚「歸りさうもねエか。」 お長「武サだからとまりはしやせん」 志厚「そんならおたうらへでも行つて來よう」 お長「何さ、かみさんの部屋にでもねて居なさりやせ。」 志厚「これも久しいもんだ。」 お長「なぜそこに居なさりやす。」 如雷「酒に醉つたから。」ねどころへ行く。すゐぬ「かはいい男に逢ふときは、いかぬとおらがしこなしに」かまつさにて歌うたふ。 又女來りて障子ごしに、 女「お長さん、あけてもよしか。」 お長「なんだねえ、あけねエ」 女「セケントコノヲコヒキノカネケヲトコリキニキツタ。」 お長「イキマカニシキコ、ウリサカンカベエコツテク、ルクカ、ラカソコレケマカテケトイキウカテク、レクナカサカイキ」 女「さういひやすよ。」 女障子引たて歸る。又間もなく來り、 女「お長さん鳥渡きねエ。」 お長「なんだの。」 お長出て行く、如雷てうしの口より酒を呑む。 お長「オヽ、よく呼ぶ事だ。」 といふてお長勝手へ入る、如雷眞面目になりて居る。お長心付いて色々とつとめる お長「たばこのみなさりやせんか。」 如雷返事もせず、睨み付けて居る。 お長「おまへの顏にヤア、何かきつくできやしたねエ。是れにやア和國橋の實路香を付けなさりやアいいに。」 如雷「そりやア色男のする事だ。」 お長ゆびにて如雷が顏をつゝきながら、 お長「お前ほど色男なりやアいい。」 如雷「なんの事った。此のふんばりめは。いいかと思つて喰ひのめすな。」といひながら手をたゝく。 お長「あいく」 如雷「是

れお中さんとやら、此の賣女さげてくんねェ。」 お里「どうなされます。」 如雪「あんまり心いいと思つて、なんのかのと茶にしやァがる。其の上野郎のねつけを見るやうに、ふとんとおれ許りおいて、廊下許りそゝりやァがる」 お里「お長さん、おまへもどこへ行きなさつた。」 お長「どつこへも行きはしやせんが。鄰座敷でたばこのんだばかりさ。」 如雪「何だこいつは、うぬがいゝやうな事許り、ぶち殺されんな。」ト灰ぶたをふり上げる。 お里「お長さん、おまへはあつちへいきねへ。」お長は勝手へ行く。女共來る。新左衛門煙草取りにだかに出る。新五左衛門「どうだ／＼。」 如雪「マァ聞きねェ。ぬしも知つて居る通りだ。其の上今も、鄰でたばこを呑んだり、馬をのんだりと、おれが目をぱこんぺいたうの附目太鼓にしたと思ふさうな。人を附けにしたこ」ト皆口を揃へて「何さ、あの子も其の樣に、惡しくする氣もねェけれど。」 如雪「なんだうぬらまで上へ下手を取るな。」ト次郎かつてより聞き付けとんで來る。 次郎「どうでござります。あの子が氣に入らずァ、外の子でもお呼びなんし。先づ氣直シに一ツお上りなんし。」 如雪「こゝのむだ酒がくらはれるものか。」ト云ひながら立座を蹴り出す。次郎、新五左衛門やうすにあきれ顔。 如雪「ぬしたちはどこへつれてゆく。此の分ぢやァ男がたゝねェ。」 次郎「そんなことをいはずと、つくだりひがしやへでも行きませう。」 新五左衛門「いやもうすぐにかへらう。門がやかましい」 如雪「門がどうするもんだ。ぐらつきはしまいし。」 次郎「それでもぬしが氣をつかつてはりやす。」 如雪「氣をつかつてもいい。打捨ておけ。蝶はさにやァ出る。」 次郎「マァ何でもお出でなんし」

やう〱、とだまし、して船場の方へゆく。二人　若イ者「どうもいけねェ客だ。」志厚「とんだにぎやかな客ちや。」お中「いまもういけるのもおやござりやせん。」ヲヤ二かいへお出でなんし。」ト お中お長志厚を八二階へ行く。お長「お中さん、揃つたとんちきだねェ。」お中「お前が何のかのといひなさるから、わたしやそばで氣をもみやした。」志厚「やらうかひと見える。」ト 有りて お長 松葉「わたしも芳町の侍屋にも居やす。新道の二文字やにも三四年居やしたが、あのやうな若衆買は見やせん。」志厚「ひやうたくれいふ末倒のさゐひだ。」お長お中、をそれに「一「つひぞねェ。」お中お長「志厚さんお長さん、お休みなんし。」お長「もおつとはなしねェ。」お中志厚「後にあそびやせう。」お中お長障子をあけて、お長「忠兵衛さん清兵衛さんは、まだ開口にかゝる。」志厚「今日はおかるとおりゑと一チ座して、むめ太夫でさゑて居た。」お長「お前は誰を呼びなんした。」志厚「誰をよぶものだ。」ト 厚お長志をしたゝかつねりながら お長「サアいひねェ〱。」志厚「アヽ云はう〱。」お長「だれを呼びなんした。」志厚「こゝから行つた大坂女郎さ。」お長「あの子はどこに居るね。」志厚「何屋に居るか。」お長「名は何といふねエ。」志厚「おつるとかいつた。」お長「なに名を忘れるものだ。」などと云うて色々面白きしうちことごとく有り。折から廊下にたゞ〱と 客「どうだ、又きしかな〱。」お中「アイ晝から出て居なさりやす。」客「また出ものか。」お中「おまへは又今までどこに居なさりやした。」客「表やぐらに居やした。」お中「表は永らく屋にかえ。」客「何さあのやうな化物屋敷へ行くものだ。」お中「なに今ちやァ出やしねェ。」客「屋張屋でめつらしいものを呼びや

した。」 お中「たれをエ。」 大吉「此の頃名代の六部女郎さ。」 お中「おつな子だねエ。そしてつれ衆はエ。」
大吉「ほかの者は上橋のつる屋へいつたから、おれひとり来やした。」 お中「そんならたれぞ呼びなんし。」
大吉「藝者を十人許り呼んでくんねエ。」 女「とんだ事いひなさる。よし〳〵、わたしがいゝやうにしよう。」
大吉「お松どんでなけりやァならねエ。」 お松はけいしやを呼びに行く。 大吉「おいせさんはどうしたねエ。」 お中「あの子はね
エ、七さんといふをしてねエ、かぶつて居なさりやす。」 女お松 女「七兵衛さん、かう呼びにやりやし
た。利中さんとしげさんと梅太夫さんが来なさりやす。」 大吉「よし〳〵。」 藝者「豊丸さんこつちだこつ
ちだ。このや七兵衛さんお出でなさりました。」 利中、ざしきへ行くと、ひとりげいしやのまねをする。 利中「すまふ取らうならあらう。」
藝者「かなひ〳〵かなひませんか。めく〳〵めくらにや。」 大吉「とんだことだ。」 とんだ茶釜。 藝者「茶釜茶
釜、かまかまたりの大臣。」 藝者「大臣々々、大臣の所へ毛がはえた。」 利中「はえた〳〵、はえたとは
物臭太郎が嬢かえ。」 大吉「ハヽヽ。」 藝者「お肴に一ツ出ます所が中村の仲蔵。」 大吉「よからう〳〵。」
藝者「若様のこはいきにして、一郎別当とたいにへんしたる左衛門輔常。」 大吉「いよ〳〵秀鶴さんとは恐ろ
しい。」 「藤さん一ツ頼みやす。」 利中「おれが出ませう。工藤兵衛さんが、『お花さん〳〵』といひなさ
つても、お花さんは、『いですよ〳〵』といひなさります。」 大吉「きつし〳〵。」 「開かへ〳〵、エヘヽ。」
「此奴は〳〵、これでやはならしよう事がねエ。」 藝者「旦那の三六は、利中さんのよりは凄いわエ。」

主「ゑゝし七兵衛さん、誰ぞ呼びなんし」七兵「今夜はさへ一通りにしよう」利中「さへ一通りの各々方、ホヽヽヽ」女「よびやすよ」梅太夫「お呼びなさるのさ」梅太夫「よびねエ／＼」女「呼ねすねエ／＼」女、女郎呼びに行く、利中豊丸築梅太夫連ぶしにてうたふ「五たうなすほどの血の涙、落ちてかほちやにやァなりやしまい、ゝきた／＼。客さの素敵の金びら、」女郎来り障子の外より 女「お中さん。」お中「ァノ／＼、きねエ／＼」女郎来る七兵衛さんを呑み上げる 女「ちとお下でまうしやせう」客「まア／＼。」利中「おこうさんには、また私はまちがつて」女「ハイお頼み申しやす」利中「是れは／＼」客「利中さん一ッ拳参らう」利中「サァおもしろやせう」客「コウサイ」利中「ロヤデエ」客「ハヤ」利中「ロヤとつてエ」客「キウヤア」利中「トウライとつてエ」客「かなはぬ／＼」お長小便に行って、座敷にぞつかなれば、そつと見れば馴染の七兵衛なり。名代の女郎居る故に、きつくは知らぬふりにて座敷へゆく、お長「お許しなんし」お中「お長さん呑みねエ」おこう煙草のみはてお長にやる。客杯をもつて向ければ、客「一ッあげようか」お長「ハイ」客「お長さん、中川ではひさしい日にあはせなさつたねエ」梅太夫「何拳か」お長たはこんな事いひ、手でひげをなでるまねしたり お長「何ぞうらねエのさ」お中きかせるふりあげて、お長をたゝくまねした お中「髭なでのきん／＼か」客「いゝいゝ」お長「いつておエりやせう。あなたがたゞと、ねこうさんお中さん、皆さんこれに」お長行く 利中「向ひませう／＼」梅太夫「とはしやれ／＼」利中「刀は」客「政宗」利中「小袖は」客「羽二重」利中「羽おりは」客「ちりめん」利中「男は」客「権左衛門」利中「女は」客「権助、ハヽァまた負けた」利中「どうだ、すこいもの

かご「藤太、ばけんで参りやう」客「来給へ〳〵」藤「[illegible]」客「衣絵は一」藤「やくわんとこ」
男「むすこけい」藤「とつさま」男「かほちやは。」藤「たうなす」客「娘は」藤「いゝさん」客「ハ、」
おそろ〳〵」藤「たゞ〳〵」。鐘なる「ジャン〳〵」客「明けさうな。むかへらう〳〵」次郎お中口「またやもつと
お出でなんし」藤太「帰るのひよこ〳〵」客「ひよこ〳〵」藤太「丸三ひよこ引かけ」藤「六ひよこ七ひよこ八ひよ
こひよこ、丸のひよこのひよこ〳〵しよんがエ」客「帰らう〳〵」藤太、藤太夫「ここにおそ
くはござりやせん」客「いや〳〵帰りやせう」「[illegible]」と藤手に行、お中は客手をはにとつて居
と、お中、藤太「ハイようお帰りなされやし」客は身に[illegible]座敷へ客を立て[illegible]
二階から五郎兵衛をよんでおくれ」女「ハイ、五郎兵衛さん〳〵」[illegible]
けたされましたよ」[illegible]「よしな〳〵、駕籠は来て居るのか」女「アイとうから待つて居やす」[illegible]
「伝六さん、新助さん、帰りやすぜ」客羽織などきて座敷へ出で、[illegible]「[illegible]
て[illegible]をもつてきてくれねエ」客「[illegible]帰らう〳〵」客先に立て行く。[illegible]
おい〳〵わきざしなどさし、かご 五郎兵衛「是れお松どん、長助さんが来なさつたなら、静かに跡からきな
まで居ておくれ」女「アイ〳〵」[illegible]
し[illegible]「もう夜があけた」[illegible]

ならねエ。」お長帯しめて二人廊下へ出で、志厚に羽織など着せて　お長「お帰りなんすか。」志厚「此の間にあエりやせう。」お長「そんなら船をいひ付けやせう」志厚「船ぢやァ目立つから歩行がようごすりやす。」お長「おかへりなんすか。」ざうりをなほす。志厚「是れははゞかり／＼。」志厚出て行きければ、お長何か用有りけに、お長「志厚さん／＼。」志厚「何々。」志厚立かへる。お長及びごしになり、耳に口をあてて、「一寸／＼。」志厚「よし／＼。」「烏啼きカァ／＼、烏の聲に目ざめて残るは枕許りなり。邯鄲は五十年、是れは一ト日一ト夜の樂しみもきえて、跡なき夢と成りにけり。

通言

○にがらしい。　　○うそはねエ。
○ようあてなさつた。　　○どうせうなう。
○けしからねエ。　　○ほんにか。
○あゝらちもねエ。　　○きいてあきれる。
○よくいふものだ。　　○よしか。
○つひぞねエ。　　○おきのどく、鱧のあたま。

上総木綿　　じやうのなき客をいふ。

ひやうたくれ　あしき客をいふ。

とんちき　右同斷。

ゆふでく　おなじものをいふ。

本所(ほんじよ)の穴藏(あなぐら)　しつぶかをいふ。

長竿(ながさを)　あしくすると云ふ事なり。

出もの　右同斷。

ちよこら　辯口にてあやなす人をいふ。

[illegible]　うそつく人になぞらへていふ。

かぶる　[illegible]

いきな男(をとこ)　男に[illegible]だといふ事なり。

[illegible](ぶきりやう)　しやうのわるい事なり。

黒い　役者[illegible]

白い　右同斷、[illegible]の事なり。

蟲(むし)がいい　[illegible]

喰ひのめす　あやなす事、又ばかにするをいふ。

打捨つておけ煤掃には出る　かまはぬと云ふ事、物の見え透時にいふ事をしはすじに用ゐるなり。

右の類事らに用ゐる外に、唐言と名づけし、五音を以ていふ事人の知る所なれど、爰にあらはす。

アカサタナハマヤラワ	此の通りへ	カ
イキシチニヒミイリヰ	此の通りへ	キ
ウクスツヌフムユルウ	此の通りへ	ク
エケセテネヘメエレヱ	此の通りへ	ケ
オコソトノホモヨロヲ	此の通りへ	コ

右の如く、カキクケコの五音の字を付けいふなり。たとへば客と云ふ時は、キキヤカクク、又女などとはねる時は、付字にてはねるなり。女はナコンナと、ナの字へつくコの字をはねるなり。清濁は本字に直に濁るなり。此の外にじ付き付などと云ひて、其の時におうじて一ケ字置きにつけなり。知れざる事をいふ時、はやく此の事を考ふべし。又此の通じ言葉も口付けていふ時は、いか様にも早くいはるゝなり。婦人知る所なれども、知らざるもののたよりとこゝにあらはす。

とんだ茶釜の辨

是れは、谷中笠森にありし、おせんがうつくしきを見て、顔と顔と見合はせ、よきおせんともほめられす、茶釜になぞらへてとんだ茶釜と云ひ出したるとなり。

○同じくやくわんとばける辨

おせん引きのいた後、山下に水茶屋出る。又此のうつくしき女にたとへ、とんだ茶釜がやくわんとばけたと云ふなり。

○ひとりでころんで啼いたといふ辨

これは壮の顔見世狂言に、坂田佐十郎云ひし事なり。これを今もつぱら云ふは、仙藝者、又茶屋、船宿の女房むすめ、女郎の眼をしのびてころぶといふ通言あり。ころといふは、爾を明すと云ふ事にや、くはしくあらはす時は、下からゝりとなる。よつて畧してあらはしける、

夢中山人　寝言先生著

辰巳之園　大尾

南閨雜話序

八文字が作意せる、豆右衛門にはあらねども、我夢中に一ツの樓に登り、閨中を遊行するに、人見て怪しまず、心の欲するに任せて、耳に聞き眼に見るまゝに、愚毫に書記して、南閨雜話と題して、諸君子の一笑に呈す而已。

安永巳夏

東都之濱　夢中山人撰

南閨雜話

夢中山人

入相の鐘も響き渡れば、そゝりぞめきのざや／＼と、馴染のあるは早足に、駕の通路せはしなく、行くも歸るも戀路の闇、茶やが提灯道しるべ、五人の者共打連れて、大「なんと、そつちの酒は、にがくない酒だつ」忠「隨分吟味を仕ります」忠、幸「口廣い申し上げやうでござりますが、大方皆様方の中では、一番でござりますな」騒井「さうであらう」幸「あり難う存じます。扨今晩はどこに遊ばしますな」大「何方なりとも、宜しき内へ御案内」幸「左樣なら忠公が御本陣が宜うござりませう」忠「それは何やだ」幸「山瀧やでござります」大、騒「よからう／＼」忠「是れもまた、能うもござりませぬ。夫れより幸治がゆかりの岡松が宜うござりませう」幸「いやその事に樹坂では、どうでござりませう」忠「イヤ／＼、ちつとも近い、鳥も馴染のある所がよからう」幸、忠「左樣なら、山瀧が宜うござりませう」大「それ／＼、その山瀧々々」忠「いやもう是れでござります」大、騒「まう／＼、忠公御案内々々」と、いひながら、ぞろ／＼打連れ、影見世の尾目にかけ、廊下をぞろ／＼、見通して

行く。 大「その日の出立は、白むくに淺葱のえり、袖口、花色羽二重に、萌黄裏の小袖、茶どんすの袷羽織、つゐ朱の印籠、いんでんの巾著、上野の仁王の眼玉程な緒じめをつけ、扇子はちら〱ならしながら、牀の懸物を見て、なんと澤井氏、此の比は御當地で、大ぶん花がはやるとの噂だが、いよいよさうかの。」 澤「きつい事でござります。」といふ所へ忠治がなじみの女郎里きたる。 里「どなたさんも、能うお出でねんした。いせやさん、お遠々しうありいすねイ。」 忠「久しいものサ。ゆうべはつかり、お目に懸りませぬに。」 里「さうでありしたかの。ホ、、、。」里は忠治が傍へすわり、「ぬし達はネエ。」 忠「御初會だ。」 里「どうせうの。」 忠「お見たてが能うござりませう。」 大せい「それがよからう。サアサア。」 大、澤「しからば。」と頭巾を深に、影見せの前へゆき、端からはしまで、ためつすがめつ、 大「あの三番めの、赤イ着物のは。」 若い者「菊様と申します。」 澤「それから、こつちへ五人めは。」 若「秀様と申します。」 忠「さやうなら、あのお二人。」 大、澤「サア〱、お身達も見立て〱。」 幸、長七「私共はどうでも。」 大「ハテサテ、入らぬじぎぢや。能イのを極めよ〱。」 幸「こつちの方から、六番めのこび茶の。」 若「アイ琴浦様でござります。」 長「その次のは。」 若「どれでござります。」 長「エ、あの淺葱もくめのよ。」 若「ヘエ、、、歌様と申します。」 長「サア〱極り〱。子供衆お茶ヲよ。」

座鋪の體

罷なくてうし硯ぶた、鉢肴、煙草盆ども持ちきたる。里「サア皆様お出でなさりまし。」里「こつちへおはひりねんし。」女郎共ずらりとならび、忠治を見てにつこり。忠「サア是れは、いづれも様方おそろひ。」里 杯をはじめて大じんへとすゝむ。それより段々杯まはりて、琴「ちと、お燗を致させませう。」大ぜい「よからう。」琴「あの子おかんをして。」禿「アイ。」

それより乱酒になりて、琴「モシいせやさん、お近づきのために上げやせう。」里「ハヽヽ、こん晩のおちかづきの印にかえ。」琴「ようすきな事を、いひねんすのオ。」一「ツあがりいし。」琴「そんなら、ちと上げアやせう。」琴「許しねんし。もう〳〵此のごろは、きつい物さ。」忠「なぜえ。」里「なんだか呑むとおきにあたりいすよ。」大 この内、何ぞおもしろき咄しはないかへ。大「なんと澤井氏、一ツけん参らうか。」里「イヱイヱ、貴公には、閉口々々。」大「けんなら、誰なりと。」忠、幸「イエモウ、ねつからからちはあきませぬ。」大「ちとお慰みに、藝者を申し付けませう。」大澤「よからうが、なに藝者がやだ。」大「なにに致しませう。」里「義太夫がよからう。」忠「左様なら、何太夫が宜うござりませう。」大「なにそれ〳〵、それがよからう。」[illegible]「[illegible]て、何でも[illegible]。」すぐに藝者をたのむ。幸「これはどなたさまも、能うお出で遊ばしました。」[illegible]「しばらく來ねへしたが、昨夜は御くらうでありいした。」幸「イエいつもながら大きに酔ひまして、何おやれ、いつもうつゝもねへ事のみでござりました。」忠「貴様せん比いらいで御座りましたに。」幸「さうたゝふたゝの。」大「幸様きつい物でござりますの。」幸「なにが。」太夫「なんぢやか存じませぬ。」

といふ内、三絃　たいこ「何にいたしませう。」たいこ「何なりとも、面白さうな事が能からう。」里「太夫さん
すあげせる。の北野清水が。」女郎衆「ひさんいふ。」里「こちのおすきよふ。」藝者「それがよからう。」太夫 忠臣いふしや、道行をかたり出す。
大夫「ここぞ/\清に、なんでも森太夫は、こちらぞ聞いてはなきうなどとかはなし。 色 このやうな事を聞き付けて、色道なをいひ付ける。ともればとおもひ付きにて、こわいろ三者京治をたらふ。太夫「是れ
は是れは、段々の趣向。」里「サヽ、何ぞと存じましたが、是れは又私が献上。」里「サア/\、是
れは又よからう。」里「モシエ、あなた様方へ。」忠兵衛「是れは、京治と申しまして。」京治「モシ
エ、とんだいい立御口上、出来やした。」太、里「だれも初めて逢ひました。」里「おめを懸けられまして
下さりました。」女郎衆「太夫さん、一ッ呑みねんし。」太夫「もう/\、ゆうべからさつぱり禁酒致しまし
た。」里「なぜに。」太、「あんまりすぎましすぎかいで。」女郎衆「そんなら、又過ぎない様に呑みねんし。」
此の内黒色始まる。 「ウヽ深山に咲きし花の秋の、 チ、チン/\/\/\ツン。 悪七兵衛景清ともす
らう者が。」里、忠「イヨ/\、親玉。」太「あれは、誰がまねぢやの。」里「團十郎さうでござります。」
太夫「何でもこそ/\いつて、茶やへ何とかいひつける。 茶「サア/\、モウ大分お座がふけました。」藝者 皆々三味線ばこへ仕舞ひ、「左様な
ら、どなた様も御機嫌よう。」女郎衆「も一ッ呑んでいきねんし。」忠、里「御大儀々々々。」太、里「どれも、
又その内。」里「あの様う存じます。」女郎衆「御苦労でありいした。」里「左様なら私も、もう是れでお
いとま申し上げます。御迎へは。」太「六ッまへ/\。」里「も一ッ呑んで行き給はぬか。」里「イヱ/\

「大きに遅ぎました。又山の神あが、大ていのおこりではござりますまい。」[illegible]「そんなら今夜は[illegible]」

といふ所だらう。」[illegible]「是わもおつけり、太のへんちきでござります。さてまづ左様ならおのると、どなた様も御覧ふまうしませう。」[illegible]「そんならいきなんすか。おかさんへも、よろしく申してくんなんし。」[illegible]「[illegible]もしまた、左の御方は、新下りの御方でござりますから、御たのみ申します。」

菊、秀「アイおさらばえ。お世話でありいしたニエ。」

部屋の體

とやかくする内に、[illegible]済みて、[illegible]「もし、[illegible]ならへ御出で遊ばしましよ。子供や、お[illegible]や、[illegible]申さっ」[illegible]「[illegible]下でありいすか。」[illegible]「[illegible]と、小便所は。」[illegible]「こゝでありいすよ。」[illegible]「[illegible]行[illegible]「こゝでありいすよ。」[illegible]「こゝは、たが所ぢやの。」[illegible]「[illegible]さんのお部屋でご[illegible]とは[illegible]貴公の奥方か。」[illegible]「[illegible]、そんならまた[illegible]へ、[illegible]たか[illegible]」[illegible]「澤井氏のは、何か美しいものぢや。」澤「イエイエ、貴公のは、餘程[illegible]高尾君で[illegible]」[illegible]「こゝだらう。」[illegible]「むすこの[illegible]は、[illegible]」[illegible]「これがまた[illegible]物ぢやの。」[illegible]「何だ、さやうなやすこうりとはせぬ。」[illegible]「[illegible]よしは、止しやアれな。」[illegible]「[illegible]ば[illegible]」

わたくしも、お燗を致させませう。もう一ッ召しあがりませぬ。」太、皐「イヽエ、もう〳〵大きに酔つた。ちと休まう。皆もまづ休みやれ。又忠治が定めてこんたんをやるだらう。」忠、幸、長「勿論、左様でござりませう。」といふ所へ、里、琴二人来る。「もう、お休みねんすかえ。」太「イヤモウ〳〵まだおやア、まア先づこれへ二人共来さんせ。」里、琴「今に来なんせうに、何は、歌様とやらは。」琴「今おめしをたべて、ゐねんすよ。」太「今に来ようナア〳〵後に〳〵。」忠、幸、長「さやうなら、御機嫌よう。」里、琴「お休みねんしよう。」太「なんと沢井氏、さつき来た芸者とやらは、なかなかだかすつきり、面白うもないものだの。」皐「それでも、わたくしは忠治や幸治が、よつ程勤めましたのさ。」太「それにしては、ア、たいくつな物だやつけ。」皐「扨この女郎共は、どうしたか。」太「ハテ待つも楽しみさ。先づ〳〵貴公も、しばらく休みたまへ。」皐「しからば後ほど。」と別れて行く。若はやう〳〵きたりて、「モシ御休みねんしたかえ。」と言ひながら入る。太「皆さまつまの待ち久しき。」とたはむれ。若はにつこりともせずに、皆にこ色をそむけたるかはりに何かかこつけて口さきで「千鳥や、水を一ッの、持つて来や。そしてその若浦さんの所へいつての、おことづけを申しやす。あした帰参さんへ文をやりねんすなら、わつちも文を上げいすから、いつしよにやつておくんねんし。そして先刻お預け申しいた物を、よこしておくんねんし。」と、早くいつてきやア。」太「コレコレ、あの子、わしに茶を一つ。」千「アイ、いま持つて来てあげいせう。」皐「モシエ、ちつと文を

かきいすよ。」菊「随分ゆるりと。」菊は硯箱を出し[illegible]する　秀「若浦さんのおつしえんす。」能「よう（？）おことづけでござりいす。またあすの朝は、はやァく人をやりいすから、こんにやァ文をよこしておきねえし。そして。」と耳へ口をよせて、[illegible]いふ。何菊「エ、モウばからしいの。」といひながら猶〳〵とした文のぶんしやう。菊「そして、さつきの物の事は。」秀「そりやァ、[illegible]治さんへ、頼けておきいしたよ。」と。菊「あしつぶを、一ッ持つてきや。」

[illegible]ウタと「[illegible]」と[illegible]を[illegible]「コレあの子、秀丈とやらの所は」「お出でねんすかえ。」[illegible]「いかうかと思ふ。」[illegible]「連れ申していきやァ。」[illegible]「サァお出でねんし。」たよ、帯にして羽おりもきずに、きるたばこ入を持ちながらゆく。秀「サァ爰でありいす。」[illegible]「いかゞ〳〵。」[illegible]「ソレでも苦しいかすかの。」[illegible]「少しも苦しからす。今よつて[illegible]」[illegible]「爰に[illegible]」[illegible]な[illegible]に見えます。時に[illegible]のは。」[illegible]付[illegible]た[illegible]。」[illegible]「[illegible]」[illegible]くいやれんし。」[illegible]が見せ[illegible]れんし。」[illegible]

太「部やへ帰ると、やう〳〵出掛ける、文も、うち出して、この文を吉浦さんの所へ持つて行つての、さうなら御覧遊ばせと申しやすから、やつておくれよといつて来や、そして、そこへおいて屏風をずつと立てていきやァ」太夫「文をやられた客衆は、だいじの客しゆかえ」亭「イヽエ、あのやァ外の女郎衆の、客しゆの所へ、ちつと此の比客が有つたから、それで取持つ文さ」太「それなら定メて、面白い客衆だらうこわしらが謀なら、国ふうな人とは、違ふであらうのさ」亭「なんだか知りいしないよ」

伽勤の讖

されは損置き、澤井は面白からぬ上役との一座、その上女郎もやつと来りければ、しやくけとやらにて、さえぬ遊びなれば、座敷あるきをして、鉄が所へ来る。鉄が客は、此の度やしきの普請を請合ひたる、大工の棟りやうなり。鉄が客は、御国にて取り寄られし重役人、それを御横目とかのたの、けふの催し、忠治に畜ありと元締、幸治郎は、材木やのむすこにて、澤井は、江戸詰の作事役人なれば、かねてよりの心安く、様々に手入れをなして、御国の御頭をまかせ催して、忠治、幸治郎、大工の長七もろともに、鉄への遊びなり。

與「どうだ〳〵」菊「エ、此れは、邪魔かいのう」與「何でもう、馬鹿らしい、お目にかかれんか、菊さんは、どうしなさったかい」菊「俺か、こん夜はしやく氣上りのお言」與「ハア、それは、ひよんな事で」菊「どうで今夜は御頭へ御勤めだから、どうしてもいいが、其れはそうと、あの表門の事がよつぽどむづかしい」與「さやうでございます。とかくに御頭の申すは、あなた様でございますが、與なんぞはおれがひいきに思つて、やつぱりあの御頭次第だが、これもよつぽど、何か

つた」菊「ありあの中将と若治郎のは、ずんと能く〳〵氣に入つてるから、是れでいゝといふものだ」與「それがせめてものことでございます。あのむすこも、えてゝな利口ものでございますから、それをの頼りに、とかく遊びに身が入りませんで、おやぢ殿の世話をいたします事でございます」菊「ただばことをてつきり」與「何だ、おと取りに来はしませんか」菊「まあ〳〵そう〳〵、何にしても、此分夜も更けた」菊「今夜でありましょうで」與「そうでございます」菊「それとも、此の上時分を見て御出かけましたれば、私をけふ〳〵しなさいまし、左様ならお暇遊ばしまし」與「晴れ〳〵と」菊「もうお出でなさいませんか」ましたか、それでは御遠慮もございます」與「エ、さや、お構ひなさんし」

菊「わしも、今日は私國人よ」與「あの人はいゝ人だが、どうも氣立てがの」菊「客人の客じゃから」與「エ、あの人がこの間、歌右衛門に御中老だから、それで奥家が気をもめた、といふ噂き

そりやアいいが、主やア先刻、客しゆが來たぢやアなかつたか。」歌「來は來たけれども、かはりを出したから、いいのサ。」長「なぜ、代りを出さずとも、おいらは高で初會だから、勤めるが大のむだ。それけして又どうされたとつて、やしき衆ぢやアあるまいし、何のかのといふをいふ野郎でもなし。それだから代りを出しても、それつきりぢやア惡いから、ちつと行つてやつたがいい。」歌「いいわな。うつちやアつておきねんし。」長「なんと、酒はあるか。」歌「こゝへは、てうしが來ないよ。」長「ア、一杯呑みたいがのう。」歌「そのよしねんし。」長「酒でも呑まないで、なにをたのしみに。」歌「モシぬしやア、八町堀の市さんを、知ッてるんすか。」長「ム、大工のか。」歌「アイ。」長「知つてるわ。あの野郎も、こつちへくるか。」歌「イヽエ、今は來ねんせんが。」長「ぬしの所へ來たか。」歌「イ、エ、外の女郎衆の所へ、來ねんしたよ。」長「そんなら吉らも來たらう。」歌「吉さんとはえ。」長「あいつがつれでの、いきすぎた口を利く奴よ。」歌「エ、そんならあの鼻すぢの通ッた、中ぜいのちつとやせた方の、色の白イ男かえ。」長「それよ／＼。」歌「そんなら來ねんした。しかも染さんといふ女郎衆の所へ、來ねんしたが、能う口を利きねんすとサ。」長「能く知ッてるの、そんなら主もあいつらが、一座へ出たか。」歌「イ、エ、わつちやア出はしいせんが、時さんと言ッた客しゆが、よつぽど久しく、わつちが所へ來ねんしたが、一座ぢやアなかつたが、ぬし達をも知ッて、ゐねんしたが、是れも去年

から来ねんせん。」長「フゥ時か〳〵、来ないぢやァあるまい。やつぱり来るだらう。」歌「ナァニサ、ほんに今ぢやァ来ねんせぬよ。」長「それはいいが、どうぞして飯を一ぱい働山は、出来まいかの。」喜「持つて来てあげいせう」と、かつてへゆき、茶漬でもたべ、盗けつてい、茶碗に茶をくんで来る、喜「モシエ、なんにもござりいしないヨ。そして茶も、いつそぬるくなりいした。」長「よし〳〵、是れは有難山のほうちんたん。」と茶づけにしてさらさらとたべ喜「もつと持つて来てあげいせう。」長「イヤイヤ、もうよしにしよう。腹も身のうちとやら視頼とやらだ。」喜「ようい、ろ〳〵な事をいひねんすぞ。」長「ヤイ似てサ。」喜「だれにえ。」長「兄蔵にサ。」喜「ぬしも、さう思ひねんすかえ。」長「もゥおつ付け八ツだらう。寝る事にしよう。」喜「能うねたがりねんすのサ。」長「ついでに、小便をしてこよう。」喜「知ッてるねんすか。」長「すこしはおぼえ山。」といひながら、大きなあしいうで草履をはき、歌は景猪がいなくて、ぬけ〳〵な事とはおもへども、とうもいはれず、そのうへまかぬおもしろいから懇客なれども、忠治が連といひ、殊にわるいもしたらいかぬと、こはもてに勤める、長「小便所はどこ、暗りはないか、」喜「ござます。」引、さまよあがどうした。」と、御存な。二つ三つの内は、とんだ良い普請だ。そおやすよむつたが、小便所のあかりが、いつそ暗く、なつてるたから、ついころばうとした。そしてもう七分迄だ。」と、とんだ時分までおきて居た。女あすが寒いぞえ。」喜「ぬしやァ能くかゝあ、歩きねんすさうだね。」長「なんにサ。」喜「それでも先刻、忠治さんと噺しねんしたを聞きいした。」長「膝ひろやとやら、ひそかもうやとやらへ料来んで、いきねんすさうだの。」喜「その内ぞへだしよ。」長「稲でまひナア

つきやうやしきの衆がござつたから、こゝらへ來た樣なもの〻、おいらはだたい職人だから、とんだざつだによつて、しよせん大見せへ揚つちやア、ほんの事だけれども、地犬がざしきへ出た樣で、むまがあはず。だれでも女郎衆がたかぶられると、何だかぢきさま、胸糞がわいて來てから、一チがいにたゝきこはしたくなるから、やつぱりうしやア牛つれ、南か新地か五町めへと行くと、むかうでもてうしがあふといふ奴だから、こつちも面白く遊ばれるといふやつよ。」歌「モシエ、大がいに人をもあてねんし。いかに私らが樣な、ざつな者だとつて。」長「そりやアない。ほんの事ッたが、どうしても神明だの宿だのといつては、女郎衆のけんしきが、一ッたい高くつての、おいらがやうな、青梅さんとめ野郎の玉蟲といふ客のあがるにやア、どうでおよびがない。そりやアさうと、ちつと寢よう。」歌「そんなら寢なんし。」長「早くおこしてくんなんし。」歌「どうか、わつちもねると知らねいよ。」

結ぶえにしの體

夫れにはあらぬ、幸治郎が牀のありさま。琴「モシエ、お氣にや入りいすまいが、どうぞ御ふしようながら、こつちへ寄つておよつておくんねんし。ぬしの樣なじやけんな客衆をとると、いつでもう風を引きいすよ。」幸「そんなら、かうするのかえ。」琴「どうでありいすか。」幸「扨もむづかしいわ。」琴「そんならもつと、むづかしくしいせうかえ。」幸「どうえ。」琴「爰へ手をやつて、えりの所のあかな

い様にして、おくんなんし。」幸「アイさやうなら、かう致しやすかえ。」琴「モシエ、ぬしやァ見申した様でありいすが、たしか前にこつちへ来ねんしたかイ。」幸「とんだ事ばつかり。」琴「どうだか知れない。しやうわるだから。」幸「イリヤァきつい迷惑。いつ性悪を致しいしたえ。」琴「だらうといふ事さ。きついお氣に懸りやうだねイ。すねにきずをもつて、さゝはらを走るとやら。」幸「ヤイおかたじけ。能くいい名を付けておくんねした。」琴「アノ菊さんの客じゆは、どこのやしきだえ。」幸「龜の内さ。」琴「なンだかむづかしさうだね。」幸「何サ、あれでも女に懸けては、ばんばり忠在サ。しかし菊さんとやらが、能くしてやつて、くんなんせばいいが。」琴「あの子は、どうもらつと。」幸「どうした。」琴「らつとだから。」幸「とは」琴「らつとうぬけだから。」幸「ム、さうらしいよ。」琴「だれでもどうだらうか。」幸「困つたもんだ。どうもあの衆を連にすると、そんなことが氣に障つて、おもしろくない。」琴「ハテそれで、こんにやァ面白くないのかえ。お氣の毒や。だれでも皆に寄つて、面白い所もあらうけれども。」幸「そりやァない所サ。この上に何が不足で。」琴「ここエ、お氣に入らずば、いらないこと、お客に言つておくんねんし。おなぶりはお許しよ。」幸「此のおよく〳〵らにいつたら、おりはおあるまい。ここでこんにやア、御しんにやアあひすまいが、どこぞの女郎衆の名代と思ひねんして、御ふしようながつて御遊びなんしておくんねんし。」幸「是れはきついおいため。」琴「そして、今度お馴染

の所へお出でねんしてネ、このちうつきあひで、山瀧やへいつたが、あすこのすへた女郎が、かういつた。」「あァいつた。」と、お噺しねんして、お笑ひはお許しねんし。」幸「ヲウ口がまはる事ッさネ。」私どもは、寧そしよしんな替だから、その様にいひねんすと。」琴「どうしねんすえ。」幸「いつそほれるといふことさ。」琴「なにでありいすえ。たいがいにしなんし。」といひさまきせるをふりたける。幸「ア、あやまりした。そんなら今度からほれますまい。」琴「なにでありいすのサ。馬鹿らしうありいす。もう静かにしねんし。」幸「たれが騒がせる。」琴「あのちい／＼もゝんぐわァが。」幸「べらほうではないさまよ。」琴「イわつちやァべらほうサ。べらほうの女郎を、能く見立てねんして、いいおてがらサ。」幸「おてがらだから、もう／＼むだをいはずに、ア、／＼ねむい／＼。」琴「寐かし申す事は、なりいしない。」幸「なせえ。」琴「主やァ寐に来ねんしたかえ。」幸「知れたことさ。」琴「ハァをかしいのサ。わつちやァ又、遊びに来ねんしたかと思ひした。」幸「モウ能いかげん遊んだから、ねるのサ。」琴「ハァ遊びにも、加減があるかねイ。」幸「なくつちやァさ。」琴「なンでも、爰へ寐かし申す事は、なりいしないから、ねたくば、らうかへでも出て寐なんし。」幸「そんなら、さうしやせう。」といひながら、おき返る。琴「ム、、いけあつかましい。起きてどうしねんすのだえ。」幸「らうかへ出て寐るのサ。」琴「寐かしさうな物サ。さあ行つて見なんし。」とのしかゝりて枕をふりたける。幸「譃だ／＼。どこへもいきやしないが、旦那衆の所へ、些と勤

めて來ようと」幸「勧めていゝかげんにしねへしヨ。もういつたと思ひなんへ。そこでもみんなが命なし
たよう」幸「たれでもいゝかげん、丈やかましからう」琴「ほんにしねへし、きつきから能く寝ていねん
したよう」幸「そんならよしにして、おいらも寝よう」琴「人がねれば寝る物かえ。」幸「寝るとよ。」
琴「そんなら人が死ねば、死ぬるのかえ」幸「生きらばもろとも、死ぬ時はてんでんさ。」琴「すきなこ
とを、云ひねへすぞ」幸「マア狼さんとやらは、龍白さんと太郎兵衛だの」琴「すゞ、龍白い太郎兵衛
サ、狼持つてあけいせうかえ。ほんに性悪だらう」幸「それだとつて、にあまいつてまいい切サ
あの見世といふものは、とんだ野暮な、いきすぎな奴だが、こんな夜は、とんだしけるそうなもんだつ
た」幸「狼さんは、わつちらと伝遣つて、上手な幇間だから」琴「ア、ア、ホンニ、あのしの上手な話
かえ。ほんに憎らしい。一体御用心をなく」幸「すう、わつちらは、さのふと言ひきして、伯さんの
顔だから」琴「それでもんや、いつぞやのかえ」幸「なにもかも構はせんからう、ぬしのやうな、上手な者
いたさんは、しこみに逢ひいしたら、よつ程能くなりいせう。もしえ、人にばつかり口を利かせて、
幸なんすのかえ」ト[illegible]ひながら鼻紙を引きさきてこよりこしら[illegible]幸「ヲヤ、ふゝ、エ、わるい事ぞつ、[illegible]
うかんにん〳〵[illegible]琴「この頃ハここそいゝ夜ねえもんでも、月の出るまでも、
ねむくはありますまいけれども。」幸「アレ〳〵、もう鳥が。」琴「なアにサ。ありやア月夜だからサ。」

里「とんだことを、けふは晦日だものな。」花「それでも、女郎に誠があるから。」里「おかいが聞イて呆れる。」花「そりやァおたがひサ。」

やがて表かはぐりがわる/\　春「そりやァこそ、いまその迎へだらう。」梅「ようう早く歸りたがりんすぞ。」春「それはさうと、いつ來ようぞ。」春「わつちらァ閑な身だから、いつでもいいが、こようと言ツて、來ためしがない。」里「有ッたらどうする。」春「どうしいせうか。その時の事サ。」春「そんなら、あすの晩は。」

客しばらくして「いゝかい、いわい。」里「とかく/\いかう。」里「待ちわびんし、まだやしきの客しのも、起きもしなんせ出にことをいひながら、たばこ　客「ハテその少し早い所が勤めだけ。あすの晩はまた、おれが氣儘の遊びにしよう。」里「ほんに、どうぞお出でなんしよ。」客「されば。」里「そんなら、歸さないよ。」客「そうぞ、直に來るノ\。これがまァどうして、來ずに居られよう。」里「エ、こことはいかゞなれ、ふいたタ。」

馴染い體

里はなにやらしこなし姿、夜着引つかけて、里「みどりや、モウ湯はわいたか。」禿「やう/\、沸きいした。」里「そんならノ、その山吹を、よすくはうじて入レや。」禿「どれえ。」里「エ、それこの子は。それ昨日、道さんの所から來た茶よ。」禿「エ、是れかえ。」とたんすの引出より出す。里「ム、それよ、それ

をよく燗じて入れやヨ。」忠治は度々を勸めて來り、忠「す、寒い〳〵、是れみどり、酒を熱く燗をしてくりや。」里「よしにしやヨ」忠「よしおやァない、早くもつてこうよ。」里「それ程醉ッて居て、まだ呑みねんすかへみどりや、てうしをそつちへ持つていきやァ。そして茶は出來たか。」忠「もう出來いした。ヲヤあがりいし。」忠「まだ茶を嬉しがる年でもないのさ。」里「ヲレ聞きやナ。茶をせんじねいけりやァ、せんじねいとつてこごとをいふ。煎じればまた何のかのと。そんなァにも人が苛めたいものかねへ。」忠「おいてくれろ。やい人遣ひだもう。道とやらが來た時にやア、茶でも煎じて吞ませたがいゝ。おいらにやア酢花よでいかずとも、出來合のお茶でも、ちつとつよ過ぎる位だ。」里「ヲレおまへも、あんまりなことを云ひねえすぞ。いかにこつちで、自由にされて居るとッても、そして又、こゝに寐すまい、こゝへ寐ておくんねえし。」と手を取つて引きずる。忠「アイ〳〵、まだ腰がけにもなりやアしいせん。あがつても能ッぱ、布團のうへでもやねのうへでも、あがりいせう。」里「みどりや、あんどうをそつちへやつて、こんおへすみをついで、いつて寐や。」忠「ヲレ〳〵みどり、茶を一ッくりやァ。」忠「コ、そり、先刻に年寄ぢやァなし、茶は厭だと云ひねえしたから、なりいしないい。」里「能ッ言ッた能ッ言ッた。そうだぞ。」忠「その時はその時よ。をかむふに、だんだんと浸んでくれろよ。」忠「そんなら、あやまりねえんしたかい。」忠「ハヤまつたよ。」忠「ハ、でも、おいらんが、まだいがりねんすまいか。そんな

ら汲んで、あげいせう。」忠「やかましくきたへまとも、はやく汲んでくれろよ。」ト茶を汲んで来て二そばになおやすみれんし。ト、障子をたてこゆく。男「コレ忠さん。なぜマア此のごろは、久しく来ねんせぬ。そして又こんにやア、なぜあんなアに、大勢つれて来ねんした。」忠「しげ／＼通へばお客がじやま、つれを連れて歩くはしやうばいうへ。それでお気に入らずば、来ない許り。よしやきたとつて、おさきに許り遣はれて、さのみなこともないものサ。」男「なンと云ひねんす。いつぬしをおさきに遣ひいした。サアいひねんし。」忠「いつだか、そつちにも覚えが有りさうな物サ。」男「せんだの晩の事か。」忠「夫れ許りでも有ルまい。」男「その外にやアないはなだが。その晩の事は、腹をたちねんすが、もつともの様だけれども、能々つもつて見ねんしよ。」忠「つもるのつもらないのと、今おやア有るまいし。どうで御しやうばいうくだから、隨分銭のある人を大じにして、おきなひをたんとなすつて、御部やの御機嫌の能いやうに、なすつたがいいのサ。」男「コレマア能ク聞きねんしよ。わつちが身にも、ちつとはなつて見ねんし。」忠「お安い御用だが、今おやア生まれ替られまいし。」男「道さんは面白くなくつて、わつちがいやで逢ふ事は知つて居ながら。」忠「ハアおいらは、逢つて見ないから、面白いか、悲しいか、いやだかおうだか知ッたかサ。」男「それでも、あの道さんが来レばこそ、マアかうして、部やをもどうやらかうやら、持つて居られるやうな物ノ、外にといつちやアひッとりも客衆のない様に、それもみんな、

おまへおしねんした事で、おかげでネ、此のやうにつまらねい身にまでなりいしたョ まだその上に、道さんでもしくじつたら、・どうするもんであらいせうョ せめて道さんが來ればこそ、どうなれかうなれ、おまへの名あてにして、紋日の一チ日も仕舞ッたり、若い者へもとさんぐ\心付けも、なるやうなもンだに、わつちだとつて、どうしてそんなヤに、金が出來るもんだえ。折角二三度も來て、どうかためにもなりさうな客しゆだと思へば、なにのかのと言ッて、みんな切レさせて、人にやッせつない目をさせてョ」粂「さうもいふなョ なんぼ出來ない金でもョ、うぬが買ひたい人をば買ふぢやないかョ」里「いつだれを買ひいしたえョ」粂「だまりやァがれ、知るまいと思ッてかョ このおうもョ、藤とやらいふ色男をョ」里「ソレあんまりな事を言ひねんし、その日は雨が降ッて、どうも歸られないから、それでおいたのョ 居たとつても、なンにもこつちの世話になる客衆でもなし、何しに又あんな男を喰狂に、買やうんだえョ 好きもしないョ 客ひでゐはしまいしョ」粂「ハァひでゐがしないから、おいらをもふるョかョ」里「おどけぢやァない。人をやかましくいふのも、大がいにしねんしョ てまへの事は棚へあげて置いてョ」粂「何をョ」里「棚をそらッたばはねんすな。をとゝひの晩は、なぜ他へいきねんしたョ」粂「そのめ\/としたョ顔で、「どこへョ」とョ 喰ひ隱しをしねんすかョ」と 言はすれて粂「アイタ\/\/\/、いつたよ\/\/。」里「ナアなぜいきねんした。」粂「その晩は麻布のやしきから、

附合でとの國やへ、ちよつといつた許りだ。」里「ちよつとあがつたものが、あしたの朝歸るものか。」忠「おいきに歸ッつたよ。」里「そんなら、なぜ寄りねんせん。人をふみ付ケて、なぜすぐ通りをしねんした。」忠「あんまり遲く成ッて、こつちの見せも仕舞ッたから、それでおいきに歸ッたよ。」里「かへらないが聞いて呆れらァ。」忠「やかましいわえ。」里「そのやうに、人ばかりいぢめて、やかましく言ッて、手まへはしやうわるをして、とんだ蟲のいい仕方だのす。なにを喰ひねんしてもあたりやァしまい。」忠「能くあてた、たれだから、富を附ケても、紋付をしても、ねつからあたらない。」里「それまだ口を利きねんすか。」とまくらをふり上げる。忠「コレよせやい。なんにもたゝかれる覺えはない。」里「是れがないものか。なぜとの國やへいきねんした。」忠「イイサ一ど許りは、いくまい物かナ。」とけんくわのさいちうへ菊来り菊「里さん、久しいもンだの。あけてもいいかえ。」忠「誰だ。」菊「おれだよ。」里「ふざけたのす、俺だとヨ。」菊「ふざけてもいいよ、本に〳〵いつでも來ると、やかましいのす。どつちもどつちだよ。なンのたいもない事をいひやつて、腹を立テやつたもンだのす。」里「茶を呑みなんし。」菊「茶よりやァ酒を。」忠「おれも飲みたいが、みどりめが、てうしをもつて行ッてよこさない。」菊「みどりぢやァあるまい。ひさしい。又からかひだらう。」忠「それはさうと、こんにやァの客しゆは、やかましからうが、どうぞ能くしてやつてくんなよ。」菊「なンだか馬鹿らしいのす。今度から、もうあのやうな連衆

は、よしにしなんし。いつそ人をば寝かしもしないで、しんぞうしみでもあきたかた。そのやうにさ
里「そこがおたのみだ。よしさんだとおもつて能クしてやりなんし。」里「いや／＼にもしやせう。よし
さんりひつた。」里「ヲヽ見ねんし。舌を出して笑つて居るよ。」里「ヲヽ、しぶい長い舌だのう。あつ
とやけざせるぜ。」喜「邪見／＼。おまへを笑ふがおやすない。べかつかうのお礼をして見たいだよ。」
喜「イヤ／＼、人にやすおかゝな人をつれて来て、いゝおあそびさ。」喜「おどけぢやアない。御顔をだよ。」
喜「何のいせん／＼。なんぼお顔でもいや／＼。こんな所に居て、人好物のいゝを見るのもいやだか
ら、はやくいつて、いゝ色男を抱いて寝よう。はやく夜が明ければいゝのさ。」里「ヲヽ、よしてく
んなよ。」喜「あくるるあふ。しけのくされ／＼。」里「やゝいわな。」ト、ぷく吞ながら。」喜「さい
だうかつけの、義理一ッぺんの御ちそうは、よしにしやせう。」おさらばよ。お暇乞とばかり、また
夜は随分だがすからう、よつぴといくせつなしての、またあしたの一日、かほ見せでるおかりをして、
喜「道とはやみんなにかぶられての、せつながつて身をすりでもしなさるとしたのでなければ
喜「動きない、紙の嫌だけれど。」里「びきしいゝ。おいつれうふ長ほれた、たまくはそんな事もいつ
喜「モシ言さんの客は、御客だよ。」里「題目さだ。」喜「何となしてうな人だのう。」喜「ヲヽ、おと
なしいの段かゝりて二つ程の勘当で、いひわけをも、通ひですゝつ、といふ所へ、幸治郎小用

うだ忠公、きついもんだの。」忠「だれだ。むす子か來や。」幸「寒くつて、ねなくつて。」忠「だがそんなおほしろとよ」里「モシおはひりねんし。」幸「お茶でも汲ンであげいせうか。」里「おかたじけ、おゆるしねんし。」忠「コレ幸や、澤樣はどうさしつた。」幸「大のえて／＼。」忠「なぜだか、さつきはおれがざしきへござつたが、女郎衆がしやくとやらせん氣とやらが、おこつたとよ。」里「困つたもんだのう。あの子は惡くする氣ぢやアないが、ほんにけふは、癪がおこつて居たよ。」忠「貧しやアそれでも、おとなしいからいい。」幸「親玉のは。」忠「是れも同じく、いつもながらだが、こんにやア菊さんを、めつたに賴みに賴ンだから。」幸「よし／＼、ドレ、寒い。行つて寐よう。」忠「いくか。」幸「さばよ。」里「お休みねんし。」幸治郎はかへる。忠「どうもあいつも、色男が身のあだで、どこへいつても、さうおうにされるから。」里「琴さんが、いつその、ほれて居るよ。」幸「さうだらう。うぬもいやぢやアあるまい。」里「そんな事は知らない／＼。」ばかをいはずと、マア能く聞キなよ。」忠「何テの。」里「おどけぢやアないがの、せんどの晩、部やで。」忠「どうした。」里「若イしゆを呼ンでの、お前の事を聞イたとよ。」忠「おれが何の事を。」里「せんたいかのしよにんだ。」忠「だれが事ッた。」里「エ、モノ知レたことサ。」忠「ム、／＼、かの女郎めか。」里「ウ、ヨ、あいつがなンのかのと、さんざうをしたといふ奴サ。それで部屋で、權八に聞イたものサ。それでもあの人が、いつそおまへの事をひいきにして、ようチく

南閨雜話

思ッて居るから、旦那のまへでの「あの客しゆは、茶屋衆も能ゝ存込んで、なんにも氣づかひな人おやァござりません。」といつたよ。それで内でも、構はないさうだ。それだからおつと、足をも遠くしての、おとなしくしねんしよ。」忠「エ、何をならべる。やい、おかァ、そんな事をいふものだ。」里「ほんだよほんだよ。譃ならば誰にでも聞いて見ねんし。きくさんも歌さんも知ッてるねんすよ。又こつちの内のやうに、客をやかましく氣を附ける内はないよ。」忠「ア、とんだむつかしい事ッた。もうもうそんなら、來ないくゝ。こんにやアぎりだ。」里「そりやァなこの事ッたえ。」忠「來るからやかましい。」里「だが、「來るな」といつたえ。」忠「イイヤ、もうゝ大概にしろ。ドレ迎へがきた。たうとうゆうべも寐かさない。」里「まだ早イわの。」忠「俺がようおやァない。おやしきは御門がむづかしい。」忠「そんなら、いつ來る。」忠「知レる物か。」里「それおやァいやゝ。なんでも歸しやアしない。」忠「馬鹿をいふなァ。しげゝ來レば、惡い。」といふ。どうするといいのだ。」里「そんなら、あさつての晩に來ねんし。」忠「どうでもしよう。」里「ほんだよ。」忠「ウ、く。」

寸南破良意序

北里連二南海深一。東川流西山高。各遊所。爰近頃新一場築二埋地一。號呼二蓬萊島一。然後家建軒並。島守集二此所一。構二茶店一。是給女抱置。諸客點レ茶靈意。故此遊樓。宵レ日盛レ夜繁榮。就レ中若輩是貴翫。口寅二前垂一。例被レ敢二誰言一。延二鼻毛一垂二涎面一。小曾交重レ度。時士觀悉雖二是制一不レ顧。禁言遊レ耳。猶募レ心。不レ得レ止隱忍通行。是皆所レ致二血壯一。於レ受打或笞。亦後懺根云腫物抔生苦痛。至二此節一雖二後悔一有二其詮一哉。予好人任二誘引一。暫遊頓盡。仍綴二此書一。題二寸南破良意一懺悔。不レ詳通人。莫レ笑爾云。

安永四乙未年仲夏

東陽流人　南鐐堂一片自序

モクロク

○ネンキモノ　○イチザ

○シンゴザ　○バントウカブ

○ショクニン　○ムスコカブ

○キホイ　○テダイ

○カミユヒ

寸南破良意

南鐐堂一片

年季者

とうから面工をして、二朱銀一枚宛ハ、今夜こそ内の首尾よしと、晝より心支度、廻り小髪結の來るを待ちかね、近所を尋ねて髪を結ひ錢湯に入り、仕著せの松坂島を著かへ、きせる煙草入なぞ見えばう有りて、たつた一時か二時の遊びを喜見城の樂しみ、戸をしめるやいな夜食もそこ〳〵、うちの首尾との繕ひ、急々こつそり出て行く。別手小女櫻木、年季をつとめ、宵から濃いものをみたので、小女をつれ、「御出でなんしたか」「おかみさんは」「今いふ裏の竹へ行きなさつたが、マァお上んなんし」「そんならまアおあいんでくださんえ」との顔をさし、引手から、元結紙にて、はだまさをようにおたまを結ひ、首縫みなとねだいの前に、光琳筒のおき、黒…の牛ゑて、奥の私の間にて、細めにかけたる燭のあるを、「誰なだ」「アイわしさ」「ヲヽ小せうさんか」繕り、よなよな…、目あげて下さいとなりや、お嬉しいり。煙草を御上りなんし」「ようござおます、連れて行つてくんねえ」「どこへいかう」「いゝのさ」「どこでもいいわな」「…おいらのかの八ッ目屋へ、其の時のおよしさんを呼びなさ

るか。」かゝ「ナアニ、ありやァ能くねえわな。」かゝ「なぜえ、あの子はいゝ子だがの。ウウおまへあんまり久しぶりだから、夫れで呼び憎いのか。かまやァしねえに。」久「ウンニヤ、夫れでもサ。誰でもいいから、お前の見たてで。」かゝ「そんならあの此うだによつて、あの子よ。マア何でも御出でなんし。コウおふね、こんなにねぶつて許りゐずと、松さんが今夜来る筈だから、勝へ遣らねえやうに、待たせて置き申しや。サア御出でなんし。」トツトそこはぬかりやす。」と先へ立ち、つれてゆき、八ツ目屋のくゞりをのぞき、「御客だよ。」八ツ目屋「御入れ申しなさえ。」かゝ「大ぶ賑やかだの。サアお這入りなんし。」久はいる。男ニかいへゆく。かゝ「コウ新久をつれてはしごをあがる。なかに座敷つく、あんどうの火をかきたてながら、「あなた、よう御出で成されました。」久「アイ。」かゝ「コウ新助どん、おはやさんはあるかの。」男「ヘエ聞いて来やせう。」と火入を持つて下へゆく。かゝ「今夜はあつたかでござえすねえ。おまへ四ツにはかへるだらう。とこをはやくさせうナウ。」久「アイ。」と許り話もなく、しばらくして男帰り、「かみさんちつと。」かゝ「なんだ。」と立つて耳出す、男なにかさゝやく。かゝ「ナニサ、ハテナウ、どの子にしよう。」久さんおほ年増は。」久「いいのサ。」かゝ「ソンナラ新助どん、おふかさんを聞いて来な。」男「アイ。」と行く、八ツ目屋女、帯の結めざとまでだらくに、前垂外れ無り、黒い半えりに白粉を附け少し酒に酔つた顔附で、さかづきもつて来て「かみさん、この中はよくいつちよチまかしたの。」かゝ「やかましいわ。どうだ此のごろは、忙がしいかの。」女「アイ、今朝も朝直しが二つ、けふも暮までに十八九あつた。」かゝ「其のくらゐありやアいい。」女「かみさん、どの子だ。」かゝ「まだ

細れねえ、おふかさんを呼びにやつた。」[illegible]「フウ、おふかさんがあればいいが。サアおふかさん、上は
申してくんな。」[illegible]「サア一つ御あがんなんし。」といふ所へ来る。久にまちかねたるにうれし、女郎のかほをみぬやうにみる。女郎おふで元服
顔の微をかくすため、白粉ぬりたり、[illegible]似あは[illegible]「おばさん、此のごろはねつから逢はねえの。」
ぬ風のうしろむき、手まへに[illegible]なものを[illegible]
[illegible]「サアー、御目にかゝりやせん。もつとこちらへお寄りなんし。」[illegible]かづきを久へさす。久さかづきを取り、[illegible]「御存
じなんし。」[illegible]久、女郎へさしつ。女郎[illegible]「コリヤァおはずかりだねえ。」[illegible]
みなんせ。」[illegible]「ハアイ。」[illegible]久へさす。[illegible]「[illegible]やさう。」[illegible]久
むこ[illegible]「わつちがいたゞいて、御預りにしよう。」[illegible]「何をいうても、まだ年若でヨ、
かの顔を[illegible]
ばかれ[illegible]いのがおかしや可愛い。」[illegible]「いい所だ、誰ァねえ。」[illegible]「かみさん、内から呼びに来
たら[illegible]、今いくといつてやんな。」女はしごのきはへ行[illegible]「今帰るとナ。」かゝ、久を[illegible]勤めをお
ざりなんし[illegible]を請取つて[illegible]「[illegible]お休みなんし。」[illegible]帰りにお寄んなんし。」[illegible]「お
ばさん、[illegible]ふりむ[illegible]「おいそぎんのまねえか。」[illegible]「一つおふるまへなんし。」と手拍で[illegible]「床
はこ[illegible]「[illegible]」[illegible]久をつれて[illegible]「おさへの内はと
これ、遠く[illegible]二近所[illegible]是れからどうぞ、わつちが所へ来てくんなよ。」[illegible]
……[illegible]女郎久[illegible]、女郎年増[illegible]、女郎[illegible]

思ひ、家に入るやうにしてゐる。久「四ッたうつ。かへりやせう。」とおきる。女郎「きついびつくりしやうだ。
ほどなく四ッのひやう子木に、
そんなら帰りなんすか。ちつと早いけれど、内へ這入りよかろう。」と世話にもならぬ事まで、おまへ煙草入や何かはあるか。」久「御ざえす。」と男草履な　といつて下へ降り　男「お近いうち御出で成されませ。」女郎「此のごろに
よ……くゞりからわかれ

一　座

金「今日は朝降りの用なし、大の字坊と來てゐる。かういふ時内に居るはきつい無駄。サア今から染太夫といふ所はどうだ、定七。」と茶碗で隱し呑みの一杯機嫌で動かかけるは、坂田屋の金兵衛とて、作頭略もする役者なれど、左が過ぎしくじりがちなり。となりの薄井屋の定七聞いて、定「いい所すつ。しかし今日はちつと、帳合の仕かけが。」金「なンの事だ。ぶんながせ／＼。」定「ソシテ、貴様と二人か。」金「ムヽニヤ、横町の浦部屋にゐる浪人の木次も行かうといつた。」定「ムウ、木もか。それなら三人よ。行かう／＼。」といふところへ、半合羽に番傘の出立、木次が所へ行き、ひるねしてゐるをおこすに、金「サア／＼。約束の芝居々々。」木「ム、ム。」とおきて「ア、能くねて居るものを。定先生も行くか。」定「す、サ、そだ／＼、行かいでどうせう。」木「そんなら。」と支度し、四文錢一本懐中する。定「イヤア、あくりにかつたと見えて、あるな／＼。それなら此方のいた事、氣遣ひなしといふもんだ。」木「なンだ、武士だと思つて、安くするな。」サアと三人つれ立つ所

一、淺逢の新右衛門溜がへりとつれて、手ぬぐひかたに、 二「三人ながら、どこへ／＼」 三「知れた御事芝居さ。お出で／＼」 四「おらは又地獄へでも行くかと思つた。」 三「ムヽ、成程、鬼をたいぢにか。氣遣ひ成されな。さう云ふ所でなし。」と三人目を見合はせ、嗣はしはい／＼せにゃならずたき男なれば、だましてつれ行くはらなり。 四「おれはちつと寄る所がある。」と引手茶屋へよる。三人はしあし合はせ、嗣を引きずつて行。 三「こんな事であらうと思つた。わるいぞえ／＼。」 三人「やかましい。」 引手茶屋「お揃ひなんして、よう御出でなんした。芝居からのお歸りがけかえ。」 四「あたり／＼。芝居は出し許りさ。」 かゝ「そんなことで御ざえせう、マアみなさんお上んなんし。」と小女にいひ附け、たばこ盆を呼んで出す。四人裏をかけ、二階をあがつていなさい上る、小女ちやきやんで來る。 三「ちつと見ねえうち、大分尻が大きくなつた。其れおやゃもうはじまるわえ。かみさん、酒を買ひにやんねえ」 かゝ「アイ。」 三「コゥかみさん。もう在ン時だ。」 かゝ「今日はふつて、とうか暮れるやうでも、まだ八ッでござえせう。」といふは、もう七ッ時なれど、鰻けれは、ただとてあさは以とおもひ、暮までを一切にうけける計で、八ッといふ 三「そんなら金丈、爰で酒を呑むはむだだに、どこぞへ行くがいゝ。よしかみさん」 かゝ「それがようござえす。」 四「さうだ／＼」とつれ立ち、かゝを先へ立てて出る。中に、嗣ににげんとすれど、いはれて屋のかゝに金兵衛いひ附け、にげさせぬやうに手を引かせるゆゑ、おしやれ間の心で西方寺へ行く、女郎屋の河岸の門をつく かゝ「お客があるよ。」 女「おかみさん、お出でなんし。お客人だよ。」 かゝ「御四人だ。座敷があるかえ。」 女「ござえす。お上り申しなんし。」 かゝ「ヲヤァみなさん、お上がんなんし。」と言われて、四人ながら二かいへ通り出しまう。行く 三「ヲヤ、此のふすまを見やれ。きつい琉球づゝみの新印と來てゐる。」 宅「嘘

はなえ。其のせゐか大ぶ禪がびたつくぞえ、氣を附けてやられ。」　かゝ「爰がいつちよくするうちでご
ざえます。」　皆々「爰はどうで此の位なものさ。」といふ所へ出　金「コウ、かゝアし、おれがのは沙汰なし
だよ。」　かゝ「金さん、久しいもんだ。火喰ひしたらしかえ。」　女「金さんもし、此中いつぞおまへの噂が
あつたよ。」　三「どこでくつさめが出た。」　かゝ「なぜ女の返事をしてやりなんせん。」　三「おきやアが
れ。女がいやがる。」　かゝ「かはいさうに。」　金「憎さうがきいて呆れる。むしん許りいつてよこす。い
かにおれが金もちの金兵衛さまだつて。」　女「エ、憎らしい。」　定「コウ、かみさん、よその咄はさえね
え。はじめな。」かゝ「アイ」と女つぐ。此のあひだ杯事有り。（杯をとる、綱はこたつに居しが起きて、）綱「どうかくらいやうで鬱としい。そこの障子
をあけてな。」女障子をあける。　綱「なんだ、うまさうな物が有る。」と下戸なれば取肴をむしやうに喰ふ。[illegible]　十「どうだか
みさん、女郎衆は。」　かゝ「アイ、みなさん、中年増がよからうね。」　皆々「なんでも美しいのがいい。」
かゝ、アイと女にむかひ、　かゝ「そん、みんなお初會だから、する分いいのをそろへて呼びにやんな。」　十「アイ、ど
んな子がよからうね。」　かゝ「どうもお一チ座といふ物ンだから、知れねえわな。おまへいいやうにし
てくんねえ。」　女「アイ、そんならわつちが、なんでもいいのを働かう。」といひながら、客四ツたりの顔をつくづくと、立ちながら見てゆく
金「綱先生、拳は。」　綱「なんの事ッた。たべ附けぬ事。」　金「ム、成るほど、下戸だから、かみさんう
たうか。」　かゝ「わつちも知りやせん。」　金「こいつはいくぢやアねえ。」　定「何ンのへぼの癖に。」　金「そ

たなら来い〳〵。」 ○「サァ此の吸物椀で。かみさんたれへ一はいつぎな。」 ○「リャンヤ。」「チエヤす
ょ。」「リウカヽ」 ○「オット、あがれ〳〵。」 ○「存むとら〳〵。」 といふ所へ女郎四人出る、跡より女房、にて出る。おげん、お時、…お行…、
客四人の顔をじろ〳〵と見る。金、 ○「イヤ〳〵、貴公から〳〵。」といひ …「瀬川さんから、お順がようござ
盃をとり 先生からと横にです …
ませう。」 ○「金が盃を …、それがよし〳〵。」 ○「…何れも … におげい、とかく … を …て … 酒になる。夫れより … 頭を出して、未
… 〳〵、爰にも是れがあるか。」とあたりのまくらへ、たもとより錢を出しては紙につゝみ … 「オット
… 〳〵。」 ○「サァつねぶしでいたこかうではなえか。」 ○「よしなんし、あれまあ … ござんす
なア。」 … 、たれも御茶漬やあがりませんか。」 ○「よからう〳〵。」 女、… を … 来て …
「こいた、白魚の汁が。 … 出来ちやいかねえ。 … 〳〵。 是れも … いふ … よ。 …
し …なには、 … といふ所をたれと喰つて、随分仕事をしたまへ。」 … 、是れを …には
…」 ○「… しなさ … 〳〵。」 もつと此方へ寄るとして、 … 気は、 …
… お時さんから、皆こつちへよらねえ。 … 其 … なこつちへおくんなんし。」 …
… いひ … 此の … 、… もつと首をのばしてあがれ。」 …
…」と笑 ○「… たも御かへなんし。」 ○「… だ。」 … 来、 …
け から「フウ、いいきれだ。」 ○「ヤンとおそのかえ。 吉原から … 〳〵

エ、だうりでこゝしたが　モシエ、お煙草が。」主「そんなに店おろしといふ所は御めん。吉原から来たといふは嘘八。まことは深川へ行つた時、大引で上げて来たのさ。」か「上がものかえ。油断のならねえ。」男「お賑やかで御ざります。ちと誰方も彼方へ。」みな〳〵「ずる行〳〵。」と行きながら「かみさん、モシ御帰んねえ。」か「左様なら、どなたも御機嫌よう。金さん、御帰りにお寄んなんせうの。」主「よるのサよるのサ。」帰り〳〵、女郎、かむろを送りながら、みな〳〵下へ行く、男案内して、夫れよりなじみな部屋なり、此の座敷一座にて、牀におもしろみもなければ、これまで。

○新　ご　ざ

其の年四十有余と見え、皺面切つたる家暮大尽、白髪まじりを黒油にてしやすびんつくり、元結だくさんの大髻、申の刻過の革色の黒小そでに萌黄うら、同じ色の羽織、大小よこたへ、きん〳〵として扇はち〳〵。かの上着を丁寧にたゝみ、屛風へかけさせ、帯を解いて牀の内に、待ちかねたる諸ごふ、ニツコと「夜はくれども昼見えす、あるよのう。」女「御火はござえすか。」ぶき「コレ〳〵、顔まう。」女「ナニ、ヂでござえす。」ぶき「たゞごだではないか。敵はどうだや。」女「今茶づけをたべてるなさえす。」といひながら行く。ぶきつちやうと「まだ青柳のいと長く、結ぶやはや玉の。」女郎お花、薄化粧に鼈甲の櫛よこさし、つと本多わけ、髪のはこもんの縮巻にしごき帯、素顔よく、いき身に立引の有る風つんとした姿で「寝なんしたか。」ぶき「イヤ、寝は致さぬ。待ちかねた山のほとゝぎす。」古い事より外にはしらぬとをかしく、花もとにすわり、かんざしで鬢をかん　花「モシエ、いくつある見てくんな。」ぶき「何をな。」花「エ、モ。」

[illegible]「エ、[illegible]」[illegible]「オット[illegible]

[illegible]」[illegible]お花「い

[illegible]すぐに[illegible]」[illegible]「ひつこい」[illegible]言ひさうに笑うて[illegible]—

やでござえす。」ぶざむつとする。　○　○　お花「エ、モばからし。よしねえ、究屈だ

わな。」[illegible]だ」[illegible]わっちゃ。」[illegible]お

なかさんか、ちよつと顔を出してくんねえ。」一お中噂子と「なんだ」[illegible]「茲へ来て耳を出してくん

[illegible]に／。おまへ[illegible]あるといつて、呼ンでくんなよ」[illegible]

[illegible]おはなさん、[illegible]てもらへしかえ」[illegible]「よし／＼、[illegible]

こんな[illegible]い所へ来た[illegible]、もつてえねえおまへの手から、茶といふ所だ」[illegible]

[illegible]」[illegible]ねりかうさ。」

[illegible]

[illegible]いふもんだ[illegible]下で[illegible]には[illegible]」

[illegible]知つて[illegible]

[illegible]てゐるのさ」[illegible]といふ[illegible]でござりよ

[illegible]やうな[illegible]ござへせう」

お花「エ、モ憎いなウ。」と手をのばしてきせるで[illegible]、きせるが汚れませう。」武左いたゞきをのんで聞いて居る[illegible]
[illegible]ならず、さむらひにむかひ、[illegible]御休み成されました。」[illegible]「御やすみ成されま
[illegible]行 お花「もつと居ねえ。[illegible]申してゐてはつまりませぬ。是れから座敷を
[illegible]客衆のかへりに気を附けねば叱られます。」と行く。お中さきのや[illegible]お花さんちよつと来な。
用が有るさ。」[illegible]るを、[illegible]呼ぶわな、なにか用が有るさ
うだ。ちよつと行つて来るわな。」と行つて長し。是れは廻しに出るな[illegible]武左大ふけにふけてあく[illegible]お
[illegible]おのしは[illegible]客や、其の外に粗末にしてもよい事か。」[illegible]「何を
とは、[illegible]とは[illegible]宵にも[illegible]に、又どこへか行つて長く居て来て、どうもすゐぬす
あな[illegible]「もし、[illegible]の用だ[illegible]大きな[illegible]もう皆寐たわな。」
[illegible]「イヤ／＼、寐
[illegible]つた事が有るなら、あやまつた、堪忍しなんし」と手をにぎる。手をにぎられてちや
にぐんに 武左「そんなら、もつとこちへ寄つて寐さつしやい。」
やり。

○伴　頭　株

唐棧に花色七子の帯、[illegible]の紙入、高慢髭なでてすゞあがり、[illegible]御出で成されました。お

まつたかでござりますり」作蔵「アイ、おまつたかでござえます。」お絹「うんあエ何でも有るか。」とア

もこざりますこ」ト二階「杉、つれ申しや。」と「アイ」ト降いてあおす、客の有る座敷の小ふすまのすき」をひつしやりと立て[illegible]なすばる。作蔵「呼

こで来ナいやな」お「もしエ、もつと此の間は煩つてさ」。宇頭「久しいもんだ。それが来たといやな」

[illegible]

なしいもんだ。どうした。」お「いつそ心持がわるいわな。」作蔵「そうか。」おせつ「エ、そなたの事ッた。か

つかうの顔いで。」宇頭「[illegible]てあるか。」お「アイ、此の頃は引いてあやすが、おまへだから出たのよ。」

作蔵「此れは有の[illegible]たい、それから酒も呑めまいに」おせつ「呑みやせう、」作蔵「すきなやつさ。」[illegible]を

まうさお絹どん、一ッぱいつぎな。[illegible]作蔵「も

つとやきや。」おせつ「くうか。」　「サア御休みなんし。」　おせつ「も

し、」　宇頭「ム、。」[illegible]

[illegible]作蔵「もしエ、御客人が有るよ。」作蔵「ナンだ。」おせつ「いつそ胸がいたまから、どうござさ

まつて[illegible]作蔵「エ、やかましい。」といひなから[illegible]おせつ「どうもこうも苦に成ん事ばつかり有る

おかれ、この上に胸がいたまわな。」作蔵「何が苦になる。」おせつ「節句がさ。」作蔵「仕まつてくれる

客がねえか。」おせつ「この中札までさげえした客が有つたがね、ちつと譯が有つて、夫れから變改さ。」作頭「ム、。」と許り。外の女郎、「おせつさん、あけてもよしか。」おせつ「お咲さんか、來な。」お咲びやうぶのそとはにすわる、おせつが側に成つて、たばこをすひ附けてやる。鼻紙をとつてのむ。おせつ「御きゝ、貫込さうだ。」お咲「ム、ニヱ、今宵すちの客を返した。」おせつ「ださんだ」お咲「ナニ初會だ」作頭目を明なして「おさきばうか。」お咲「隱居さん、お出でなんした。」作頭「いゝ隱居といふな」お咲「名を忘れたからさ。」おせつ「コレお咲さん、お前節句はどうだ。」お咲「わつちやア中バらるだ」おせつ「八さんか。」お咲「ム、ニヱ、八さんはかぶつたわな。」おせつ「フウそりやよからうなア」お咲「ム、ヨ、是れにやアわつちも困つたわな。とんだものに成つた客だあな。夫れだけれどもの、どうもうさがさびしいとよ。」おせつ「ヲヤ、夫れでもよくちよつノ\と來たがの。そして誰だエ」お咲「此の頃左六處來る客がひとりの」作頭「さうしての、遠くから來る馴染の客が有るわな。夫れもかういつての、文もやつたあな。今日も返事をするはずよ」おせつ「フウ、そりやあいいナア。そしてお前の可愛がる色男は。」お咲「ナニ、ありやアの、マアなンだから、だまつて置くわな。そんなことをいふとの、腹をたつおなア。其の代り小づかひでもなえ時にやア、さういつてやるわな。」おせつ「フウ、なンでもお前は浦山しいの。わつちらは又こくうと苦しいわな。お前も知つてゐるが、アノ夫れ此中も來た客の。夫れあの客はの、裏櫓へ出る時分からの馴染での、隨分みに成ツた客だ、

それがの、終あの時しくじつた事が有つての、あつちから切文をよこしたわな。こんないい客はねえからの、返事の文にあやまつて遣つたらの、夫れぎりでモウこねえわな。夫れから其の客は表へいくとよ。是れをマア切れるによ、夫れからの。ムンニヤもう云ふまえ、外聞が悪い。」伴頭「何またうぬがやうな狼に。」おせつ「黙つて居なんし。ホンニモウ、わつちが様なはかねえものはねえわな。此の節句は、どうで自腹でも切らねえけりやならねえといふ物だ。」おせつ「困つたもんだの。」伴頭心の内でかけうなとをふし思へど、さすが不便なれば、いうもしこと思つてゐる。おせつ「お咲さん、そつちをむいて見せな。お前の髪は、誰ぞにいつて貰つたか。」お咲「ムンニヤ、わつちがいつた。」おせつ「悪いか。」おせつ「ムンニヤヨ、とんだいいからよ。ぜんたいお前にやア、丸まげが似合ふよ。ほかのふうはよしねえ。」お咲「どうもくせがついて、根がしまらねえわな。」おせつ「この中の簪はどうだ。」お咲「いつそほしかつたがの、其の時は工面が悪かつたから、終買はねえわな。そりやアきうと明日湯へ行かうだがやアねえか。」おせつ「わつちやア外の湯はどうもいやだよ。明日は大かた天水で湯が立つだらう。」お咲「もう行つて寝よわ。アイもし、おやすみなんし。おやかましうござえせう。」伴頭「もつとになしな。」お咲「おせつさん。おさらば。」おせつ「もう一服のみねえな。」お咲「アイ。」とかへる。伴頭「あの女郎は働きものだ。」おせつ「其のはずさ、わつちらとちがつて、美しいわな。」伴頭「ナ、ヨ、夫れでおれもちつとほれたといふ腹だ。」おせつ「ヘエ

ほんにかえ。終ぞねえ。」伴頭少し身もんだいをするにかまはず　おせつ「らし、さつきの事はえ。」伴頭「何の事だ。」おせつ「なンのことだおやァねまわな。」伴頭「どうも知れねえ。」おせつ「そんならいい、明日文に書いてやらうから、どうぞマア、今夜キィといつてくんねえ。」伴頭「何をよ。」おせつ「ア、そられつたえ。節句をさ。」伴頭「たンなら先づ、オイといへばいいか。」おせつ「エ、モ憎いなウ。」とつめる。伴頭心うれしくなるもきつい、まんみやうさんし。

○職　人

色黒く唐犬顔、うんさり髪の茶筅本田、びろうどの襟かけ、青梅縞の布子に縞ちりの帯、未刻時分のひおりめんの下帯を、見せた儘まくりかけ、大工どうだおかねえことだとつく、小女「エ、もよしねえ。すかねえによ。」大工「なンだ、すかねえのいいたのと、戸だりおやァ有るまえし。コウ頗な事が有る。」小女「なンだ。」大工「ちよつと煙草を買つてきてくれ。」小女「錢は。」大工「其の中に有る。コウ國府だぞ。」小女「エ、よきな事をいふ。國府を吞む風かえ。」大工「おきやアがれ。早くいけ。」と小座敷へ這入り、「爰おやアねえ。きついまごつき。」と先の座敷の障子の破れから、内をのぞいてはかり「なンだ大キな鼾だ。木挽小屋をみる様だ。コレエ、起きろ。」とゆすると、女房お長、ぶん切につめがねの黄風。ふいとおきて「どこへ行つた。」大工「小便に。」お長「長い小用だの。」大工「ナ、ヨ、おらァ牛だ。」お長「だうりで色がまつくろだ。」大工「うぬに似て。」と夜着のうちへはひる。お長「おらァ知つてゐるよ。」大工「何を。」お長「エ、あつかましい。よこばんを切つて來ながら、たまたま來

わやァひのァむえだ。」大工「ゑはすな。噺許りして來たのだ。」お長「ちよく／＼らを云ひねえ。かすり
に綿の襲をつよこ」大工「譃はねえ。瓦をかぶつて六をめくつたといふところだ。そしてわりやァ、
だれだヱ知つてゐるんか。」お長「知らねえでどうするもンだ。神明から來たお市。」大工「違つた／＼。」
お長「何だかふとこだ、ぜん體あの子にほれて、このおうちこの隣やへ行つて呼んだぢやァねえか。い
いかげんにいちやも働いたがいい。なン程黒い色男でも、上總木綿ぢやァいかねえに。又あの女も慾
心な奴よ。錢でよくれる客と見ると、ひつたくりたがらァ。此のごろ神明から來やァがつて、まだ此
の土地はお先でゐながら、今までゐた所の風をすらァ。大きな横だよしよ。此の土地で夫ンなことが
一ぱいに成るものか。まだ小僧でゐながら、おいらが樣にはう／＼くらがへをして、渡つて來たもの
でさへ、そんなごつた事はしやアしねえ。お前も鐵はうのやうでもねえ、よしにしねえ。」ときせるで
大工「エ、熱いわえ。おきにしろ。」お長「そつちの熱いよりの、こつちがやけるわな。」大工「なンだ燒
ける。こいつはいいわえ。追附よしんが始まらう。こゝの座敷も鐵ちきな造作だ。是れぢやァけいど
う同時に倍憎い。」とわるそ道へまぎらせ。お長「うつちやつておきな。そしておまへ、こしらへてくれやアしまえし。」
大工「子をかへ。」お長「ナニ、おまへのこしらへた子なら、さぞ人がよからう。梯のこでもこしらへな。」
大工「譃はねえ。」と腰一こい／＼來いの二度あは、愛想づかしの種をまく。コリヤァ忘れた。道理で暗

ねと黙つた。」と暗闇の外へ、あんどうにてうしをくわんぜよりでさげて置き、あり明の火でかんをして置き、てうしのふたを明けて「フツ、よくわいた。」 お長「久しいもんだ。しみで小ごとをいふわな。わりい事許り。」 大工「呑まねえか。」 お長「いやだ。」 大工わやわんでぐつとのみ、「サア是れから寝るだ。コウ、そんなにつん〳〵と、わた屋の二かいを見るやうに、あいそづかしをするなえ。もつとこつちへ寄りやアがれ。」 お長「いやだ。白歯がうつらあ。」 大工コワイロ「くわん音がありやア、羽子屋を開るわな。うぬがひつなうつすな。」お長「おきねえ。ひつなんざあ、そりやア昔の事だ。手まへの前を土間へあげて置いて。」 大工「なんだかさ、ふゝ、おやのめの傘は、内の欄へ上げておいたら。」 お長「おやのめの傘を持つ風か。」 大工「見ろ、傘といつちやア、薬にする程もねえ男だ。」と肌をぬいでみせ、お長「フウ、安くねえの。ドレ、なんだおかん一心命、こりやアなンだ。」 大工「こりやアけえみやうだ。」 お長「けえみやうとは、死んだものの名の事ぢやアねえか。」 大工「す、ヨ、こいつはもうとうにくたばつた。」 お長「フウ、地ものかえ。」 大工「ナニ、大はしの女郎だ。美しいものだつたよ。うぬらず足元へも寄りやアしねえ。」 お長「なに又あひなぢやア有るめえし。コウ、夫れが可愛いか。おれがかはいいかえ。」 大工「是れが可愛いなくつて成るものか。」とほり物をさする。 お長「ほんにか。そんなら其のほりものを抱いてねな。」 大工「ムヽ、ニヤ、マア今夜はしよふ事がねえから、」 お長「なぜそんなら、ほり物のはうがかはいいといつた。」 大工「いくら可愛くつても

」おま「お前のやうな者にかはいがられて、其のおかんとやらとおんなじやうに、早く死ンぢやァ割がわるい。憎まれてなが生きをしたが、はるか増しさ。」大工「あんまり長生をして、しめへにはつち婆ァにでもならねえやうに、おれに可愛がられて、

」おま「おらァいやゝ。マァまゝにならしよう。」とあちらむかい 大工「コレエ、あやまつたからこつちらをむけ。」おま「そんなら、おかんといふほれ物のかはりに、おれにやァ指を切つてくんな。」大工「指をきつて何にするの。」おま「汁の実にするのさ。」大工「指はいたえから、首を切つて遣らう。」おま「何、灰吹はそこに有るわな。そのロをたゝかずと寝ねえ。ねぶつたえわな。」大工「あら怪ふそりやァかつて、

○息子株

色白にむつくりと銀杏に髪を結ひ、おとなしやかに意気なる風俗、京模様のやはらか裏、黒ちりめんの帯、うら附草履をはき、きせる、煙草入など、そこ迄りをこのみ、男子「かゝさん、おまへにちつと相談がありますよ。」かゝ「なんでござりますよ。」男子「この中とある座敷にゐた、ソレなんとかいふ子よ。」かゝ「ハイ、おまりかんしよ。」とすでにあたまをかきながら、わざと聞く 男子「ソレヨ、しん子のお初さんのことでござえせう。」男子「それじやかお初とやらを、こしらへてくんねえ。」かゝ「おつかやァまだ近づきでなえが、夫ンならァ

ア聞いてこまるいやせう。コレ、御茶を上ゲやッ。」と行く　徳はにこ〳〵として、火ばちへ何か書いて、さんだんしてゐる。かゝかへり「若し、ようござえす、サアお出でなんし。」徳かゝにつれ立ち女郎やへゆく。かゝ「おちよどん、二階へつれ申しな。」女アイと附いて行く。かゝ下にゐて女郎を呼ぶ。かゝ「コウ、むすこがぶたよ。とんだおまへにのほせたよ。てらさねへやうに早く来な。」ふせ屋おむら「おばさん、ほんにかえ。」とにつこり。かゝ二かいへ行く。「サア一つおあがんなんし。」徳「つぎなさんな。」かゝ「もしエ、おまへの御見立ほどあつて、あの子はしごくおとなしい、静かないゝ子だといゝ評判の娘さ。おはいがつておやんなんし。」ふせ屋お村、黒ちりめんの紋附、むらさきぢのこもうら、帯も八丈まし、ふじまゆにゐれわたし、まだ十六ぐらゐと見えて、ぼつとりしたいはんとこなし、ちこしはづかしいと、ふさぎたして、かゝのそばへすわり、「おばさん、よう御出でなんしたいの。」こゝにまた〳〵には、此の位の女郎はない物の様に、知らぬ人にはいへども、昔所ほど諾ぶしの有る所はなし、からいふ事は出しまし有ることなり。かゝ「アイ、おまへのかほは知つてゐるが、まだしみ〴〵とお近づきがやァねえ。」お村「アイ、四五日あとに爰へ参りやした。お頼み申しやす。」かゝ「フゥ、今まではどこに居なんした。」お村「わつちかへ。」と許りいつて、居た所はすこしかくす。かゝ「もしエ、おさしなんし。」徳「アイ。」と杯をお村へさす。かゝ勝手につぎついでやる。お村「コリヤアおはゞかりだねえ。」と礼する。とうけるまゝかゝ「酒は呑みなんせんかへ。」お村「たつかしさ。」かゝ「のまねえがいゝのさ。此の場所は女郎衆がみんな呑むよ。夫れだからいつきあへのあたりがあらいよ。する分大事につとめなんし。」お村「アイ、お頂き申しやせうが、お近附のために、はゞかりながら。」とかゝへさす。お村つぐ。かゝのんでかゝ杯を取り。かゝ「もし、上げませうか。」徳「アイ。」とうけて少しのむ。

か二「なンぞお上んなんし。」徳「イヽエ。」と何もくはずに見えぬはう。か二「大ぶ郷がやアさわぐの。やかましい。コウ
おまへ、おちよどんを呼びなんし。」といふも、北國などとわぶつて、大事の客の女郎を謹ふ故、此所のなかに、わけてしん子ゆゑ、かゝのいふまゝにやす〳〵するなり。お初「しこの時は、
行つて「おちよどん」ト女来「なンでござえす。」か二「コウ、郷がさう〴〵しいから、おくの六疊へでも
床をしなよ。」女「アイ。」「サアお出でなんし。」か二「もうお休みなんし。」徳「マア、寝や
せう。おまへかへるか。」か二「アイ、おいとま申しやす。おゆるりつと。」といつてゆく。お初は床のきはまでおくる。か二お初のせなか
をたゝいて、お初ニッコリ、わらひなさるで、「みかた見ぐるしいねえ。そんならおばさん、おやすみよ。」で、といひ、ざしきへ来として、といふそばへよ
る。徳「　　」とたつ。〇　お初「なぜ
帯をしめなんすえ。」徳にこ〳〵「　　」お初「わつちらにおまへが帯をときなんすは、
むだでござえせうけれど。」徳「いふもんだね。」「〇なんすか。」徳「何さ。」お初「もしエ、　」
徳「なぜえ。」お初「なぜでもさ。」
徳「少しの酒で、どうか頭痛がするやうさ。」お初「もつと〇〇〇〇〇〇〇し。もんで上げん
せう。ノ、すこしたゝせあげせうか。」徳「イヽエ、夫れにはおよびませぬで御座ります。」お初徳のひたいをもんでやりながら
「だえぶ御いんきでござんすね。」徳「左様でござります。わたしは年符でござりますから、堅うござりま

すヽ」豊「サア、エヽ、てなンの事ッたなヽ。節でふしかよ。」豊「なンの勿體ない。」お初「ねしやァ見たやうだよ。」豊「誠ほんの事。」お初「何さ、この中たしか一遍で来なんした。其の時わつちやァ見なんしたつけエ。」豊「見しれなんこつちやない、お前の顔が目に附いて、隣にのかほもかゝ様の顔も、みんなおまへに見えて、諸木がみんな見えても、木の中にもおまへがゐるやうだ。」お初「ヲヤ、ニちよく／＼ら評り、嬉しいねエ。」お初

徳「サヽいた、もよく／＼らでなし、しかのしんにヲ。」豊「さそんなら臨寄なかなんすか。」徳、豊「ナニしやうをいしは誰にかき。」お初「其のあとをかたんなんし。」豊「この所ばかり、ほかは何じませんよ。」お初「もしエ、豊さまへおかみさんが有るかえ。」豊「まだ女房を持つ年でねえのさ。」お初「そんなら大かた近所の娘さんなんぞを、いろに持つてゐなんせう。」豊「ついぞ色なぞといふ事を致した事なし。」お初「おまへこそ色男をもつて居るだらう。色の仕やうをちつと教へてくんな。」お初「ヲヤ／＼ネエ、嘘ばつかり。大き方いゝなつけたんだといふ、どこぞにお娘子が有るだらう。」豊「是れは耳寄り。そんな事が有れば、爰へは来やせん。」お初「そんならほんになまかい。」豊「コレ、私は不行だ。おまへないひかけにしよう。」お初「何おなぶりなんすも、だれがこんなにせふから、おきけしなかえ。エヽ、もう憎いなァ。」

徳「オヽ、いた。イヤ痛くはない痒い。」お初「かいかァもつとたえなァ。」豊「ハエ、わいらが居ては、お邪魔かねえ。」お初「何なぜえ。」豊「はて喰つてしまへたいといふ

からさ。」大抵どこぞの客に、かはいい客が有りさうな事さ。」お直「エヽ、そりやまた云ひなんすね。」と又つめる。

傳「す、イヤ／＼、　今夜はお客の持ちあそびに成るさうな。」何「女郎買ひの

こりしきのはある譯さ。」直「何なンだねえ、ぬしやア、わつちが思ふやうにもねえ。」ねつから情がは

えやうだ。」直「じやうぶなければ、用心が悪からう。」半「脈が悪いのさ。」直「ドレ脈はいかゞ」

とつおいつ。半「エヽ、モウ。」　直「脈はかな

く、もうおいとま申しませう。」としたく　お直「まだ早いわな。」と袂「逢うて間もなく早いの、めの、憎

やからず存じ出されたこ。」直「来る時はいいけれど、此のかへるのが辛い。内で顔に出るたびに、八の

字が額にこな。」直「それとつてあが頼むのか。」直「知れものさ。」直「わりいなア。わえても知れね

えやうにしたらよからうに。」直「其時に出来はないけれど、おこさんでも知れるのです。」お直「フ

ン、そしておまへ又いつ来なんす。」直「此の暇にまたあまさう。」直「このこさ忘れいわな。あす

の晩来なんしな。」直「其面を致しませう。」直「此口にては、仕舞つて置くにはよ。」直「もしつかりとした

御返事は、申しにくいと申すとこ。」直「お、でも開でなれても、あすの晩来るやうにいたしかせう。」とは

なぜ。」直「ここそ、待つて居やんすぞや。」直「逢ふもさ。」直「お帰りはなつてかまますか。」直「すいそ。」

とこいやきを付けさ。」直「明方を見出して、何だな。」直「お

ほふ、揃へかいだ、のせえ。」御「揃へかけ。」

つ き は ひ

煤竹色の糸織のどてらに、萌黄色木綿のしごき帯を前で結び、水がねのかたわけ、少し剃下げあたまの長月代、ひたひ青きあけ、粋たいたはたきの附いた大きなさげ煙草入、紺の手ぬぐひ肩へかけ、雁首の大きなきせるを持つて、障子をがわつたりと明け、巻舌で　とまのりて犬の川ばたをあるくやうだ。」とらうかをあ「あいつが小便はなうぞに長え。くたばりやアしねえか。こいつァたしかに廻しに出やアがつた。いゝぶあしくすらあねえ、御たち此の屋体がわしてぶさ／＼しい。まんろくなくらひ物も出しやアがらねえ、いけはぎのあたじきするらア。見やすがれうぬらア。」といふ所へ、先づ茶わんで一ぱい、其の酒をさしみの中へぶちこみ「此の者へは手をつけねえでおいたも、かうせうといふ腹だ。大かた此の刺身を、四ツ門きの客へ出すといふ物だ。先づ是れで一番番を張はせるわ。たゝみを切つさきたえご明樽がねえ。」とふとんのうらを踏みさき、手ぬぐひではち「サア是れから、らんちき山ざくらを入れてくれべえ。」しやうに手を　女来て、む「すゝ、コハ、何だね。」男「コレエ、、汝らアどうともしろ。あのふんばりよすり引きずつてこねえけりやア、合点しねえぞえ。」と足ばた〳〵で高声におどろき、男下より、る。女「呼んで来いときさ。」男「もしえ、女郎衆はをりやせん。呼んで来ようから、マア御寝なりやせ。」茶屋「なンだ、居ねえ。ふてえ女だ。俺がいつて引きするべえか。」女「何さ、もし／＼下にサ。」といふを、男かぶりをふりて、めば

たきをして「むごくされたさうで、しまに泣いて居るから、うつちやつておきつせえ」重三「とりやに

小聲にて「ときさるを、二人してとめて、もしもしとあやまる」重三「なにこだ、こいつらア、おこいしえんまのまへを見るやうに、なにはつて

はつたり、ひしやげたりしてもがつて、しねえに」と、きかづき〔したたかになきしていた、取り〳〵となげる〕ます、ここは、と

げる…してにげあたり。し、あんどうぼつたり。壹「もし、マア靜かに」しゆこたへかねて來て、ていて「もし、コレもし、さうした

もこおやねえ。コウおれだ〳〵」壹「なにこだ頭だ、たうの芋だやアあるまえし、人を糞にしたア　お

のしやアていいしな。コンエ、、あの女郎はた、長棹で突出しやアがつて、背から跳へとびやア、

こゝにとも來ねえわ、其の上にた、此の屋たアほねおやアて、ふくそつぼうな金ら一錢も出さねえわ

夫れでも錢アとりやすから、ふていはつつけるだ。うぬらア盗ろすなのか、夜盜なすかの、と

こでも女をはやく引きアつていこい。ふんづぶしてくれへえ」〔はらしたたかに來れ〕「その世の中に…まだ…

おも手出でなさ、すつと來て「われやア熊がやアねえか。なにこだ、おとなしくもねえ、娘くいつたこなにやらいさ

「いやアがるこさうくしいわね、默りやアがれ」〔しとたをこ…〕「なにこだ御たいそうな、

僕がぶう〳〵をいふべらるのことに、主のくるにやア及ばねえ。ようこす…れ、ぬしの事いたから勘

傲しようが、あんまりいきえましい」ふて〔吉三〕「いいわえ、マアくつと寢ろえ三」壹「ユヤニ、醉やアし

ねえ」「マア、、、醉つてやア居ねえわな、マアなえ〳〵」すね〔…〕壹「は大風の吹く、たやうなわ。

手代

もみあげ少し置きたる上方本田、額髪通りぬき、やさがたなる男、呉服屋の若いものと見えて、みおん棧留の袷に、和とろめんの帯、こくらのあはせ羽織、びらうどの紙いれ、唐ざらさの煙草入、すひ口銀のそげつぎのきせる、石わり雪踏で來て、千代清「かみさん、このごろはお目もじいたさんなア。」女房小声「ハイお出でなんした。コレ二かいへつれ申しや。」女「サア御出でなんし。」ト二階へあがる。清、出しものを見て「是れはいつもながらえらい御ちそうぢやまで。しかし此のごろは禁酒の願、いつからにやちあかんぢや。其の肴みへいきたいぢや。」女「是れおかえ。」ト、ふきをはさんで出す。清、ふきをくつて茶をのみ、やゝ「こんの前だれ松葉をぬはせ、まつにこんとはわしや氣にかゝる。ノホホヽヽホンニサコサノサ わしはいつもの通り急ぐ程に、早う來いでの。」女「今けんばんへ人を遣りやした。」清「こゝでもせうでんが有るかの。義太夫があらう。」ト三味線をあてゝ、手上るり「雪やみぞれやはな散るあらし、かはい男にいつはりなくば、木この心で淡路しま。」トやう、女郎お夏、水ばみの結びわけ、押へぐしの小さいのをさし、こはたおりめんの紋附の小袖、やらだを造りながら來る。清「なんぢややら、いかう御もつたいぢやの。」と源太もどきこなし。お夏「ぬしやア今夜も宵だぢかの。」清「御意の通り。イヤモウ今朝からして、立つてなるぢや。」お夏「むだアいひなんな。泊るのか。」清「ハテどうともしよう程に、まづ一つ上れ。」トさす。お夏、さかづき取つて、女にむかひ「コウ主やア泊るのか。」女「どうしなんすか。」お夏「大かたいつものとほりだらう。」

早く牀をしねえ。」女牀を取りながら「此のごろは間があつて來なんしたから、今夜はおとまんなんし。」と外へ行く、お夏「サア○なんし。」と小用に行く。清寝「れつきとした侍に、成程むりとはおもはねど。」おなつ小用より歸り「小用に行つたら寒いやうだよ。」と入り、なンだ義太夫か、もつと語りねえ。」清「身二つに成り二人して、そだて上げたる其のうへは、のきなりと去るなりと、お内儀さんをもちなりと、ト、我が身の上はいとやせぬ。」お夏「おらしれえ所だの。義太夫おやアねえの。」清「聖天おやの。」お夏「ム、しやうでんだの。もつと語つてきかしな。」清「イヤもう何時おやな。」お夏「もう追附四ツさ。」清「それならもう歸らにやならん。」お夏「なぜえ。」清「いつものとほり、今夜も長うはゐられんさかいに。」お夏「エ、こわりいなア。いつでもゆるりとした事がねえなア。久しぶりだから、何ンでも今夜は泊んねえな。」清「イヤノヽ。」お夏「なンといつても歸しやアしねえよ。」清「それは困つた事おやの。」といふ時四ツの拍子木。清「アレ四ツおやの。」と笑ひながら身づくろひ。お夏「それ見ねえ。笑ふから嘘だ。泊つてもいいのを、歸るといふのだ。」男しやうじを明けて「お夏さん、おむかへでござえす。」お夏「マアうつちやつて置きねえ。」男「モシ。」と行き、又來て「もしあなたは、御直しでございますか。」清「イヤモウ歸ります。」お夏「よしなよ、うそだよ。」男「もしお夏さん、次郎さんが來たよ。」お夏「ナニいいわさ、うつちやつて置きねえ。出てるといつておきねえ。」といふも萬八、男の次郎さんが來たといふも萬八、すぐにとまらせるさんだんなり。男「あなたはお歸りおやァございま

せんか。」主「どうした物であらう。」夏「なンの事ッたな。わつちが客がきたけれど出ねえわな。こら程にしてとめるに、泊んなんしよ。」清「ハテせうこともない事ッちやァ。夫れならかぶるとして、泊つてこまそかえ。」男「左様なら。」と下へ行く。清「たうどうとめくさつた。」夏「何がくさつたえ。」清「主の性根が、くさつたといふ事ッちや。」夏「なぜえ。」清「ハテ、客の来たのに行かんゆゑ。」夏「ナァニ、アノ客はいい。わつちやァおまへがかはいい。」清「ハ、ァいはんすも、おやつ。にけいせいに可愛がらるゝ運のつき。」夏「好きなことをいふなウ。」清「其のくしは、わしがおこした櫛とちがうて、小サい櫛ぢやな。」夏「アイ、こりやァ押へ櫛さ。おまへに貰つたくしは、いい鼈甲だから、大事にしてしまつておくわな。」とすつぽかし、とうに七つや、行つてゐるなり。清「フウ、それはさうと、まだぬしの年を知らん。」夏「わつちかえ。わつちァ八十五さ。」清「えらい年ぢやな。コウデヤニよつて十八ぢやな。」夏「ムンエ、ちがつたよ。人のとしを聞くにやァ、マァおまへの年からいふもンだ。」清「わしは十六ぢや。」夏「ヘエ、十年あとにかえ。」清「なンとてうどえい夫婦ごゐぢやあゐがな。」夏「夫ならぬしやァ、わつちを女房にもつか。」清「わしもな、おしつけ見せを出すさかいに、其の折はぬしをよぶ心算ぢや。」夏「そりやァお忝う御座エす。わつちを女房に持つものは徳だよ。しよたいもち風で、水もさけます、手鍋もくゐますのサ。」清「イヤモ、わしも主の此のゑくぼには、とんとはまりくさつた。」

お夏「なンの事ツたえ。お嬲りかえ。ようくきつた〳〵といひなんす。さかながやァ有るまえし。とりやァさうと、ソレとうからさういつて置いた、枕はどうしたな。」 清「イヤまだ出来んがや。」 お夏「夫ンならこつちで買ふわな。おまへの紋とわつちが紋を附けるやうにあつらへようなウ。」 清「うまい申おやな。さういふ事をしては、仕廻に闇八ぶしで、道行をせにやならんぞや。」 お夏「なンでもするわな。」外の女郎、何かいゝ〳〵いつて這入ながら、「おなつさん、お許し。」としやうじをさつと明けて這入る。内からこたへてゐる。「ンニヤヨ、いつそおつかけるわな。」 お夏「誰が。」 外の女郎「もうこねえさうだ。御免なんし。」とすわり 「清さん、御出でなんし。」 清「なンだやヤら、えらう逢ひておやの。」 外の女郎「ムンニエ、いヤ是れお夏さん聞きねえ。あの此中も来たしやうわるの、ソレあれしがの、宵から来てゐるらすな。」 お夏「フヤ、おこんさんの客のことか。」 外の女郎「ナ、ヨソレヨ、宵に来た時にの、おこんさんといつそ口舌をしての、問ふにやおちねえで、語るに落ちるとの。手前からどこの子の噺をしての、あらはれたわな。たれかあとんだせめられたわな。」 お夏「フヤ、そのやァおつりきだつけえの。そしておまへは。」 外の女郎「わつちやァ利會の客を取つてゐるわな。今よく寐てゐるからいい。」 お夏「そりやァ面しろかつたなウ。」 外の女郎「ム、ヨ、とんだをかしくつて、かへつたわな。それから、髷を切つたの何のといふ噺が出たわな。わつちが常談に、おまへならわつちが切つて遣る、といつたらの、いつもの由良でゐるから

の、狂つての、私をいつそ追つ掛けるとつて、廊下ですべるの、夫れだから逃げたのだァな。」清「なこだやら、宵からして騒がしう有つたて。」外の女郎「おこんさんは、わつちが兄弟ぶんだから、よく附合はねえけりやァならねえわな。」お夏「フゥ、随分大事にしてやんねえ。其の代りにおまへをもかはいがるだらう。」外の女郎「いつそ可愛がるわな。この中もの、梅漬を拵へて、わつちが所へよこしたわな。とんだ眞實にするわな。夫れだからあの子の客衆のきれねえやうに、今夜なんぞも座敷へ行つて取持つのよ。それもの、おれが馴染の客でも取つてるりやァかまはねえけれど、今夜は四ッあけの初會客だから、かまはねえ。」お夏「夫れでもさつきから久しいことだよ。おきたらう、いきねえな。」外の女郎「なにかまはねえ。田舎ものだ。」お夏「夫れでもさうおやァねえ。いきねえ。」外の女郎「そんならいかうか。お休みなんし。清さんは寐たさうだ。」と行く。お夏、清が顔を見て、「よく寐たなう。」と我もねる。

○髪結

五分月代に額りつはに抜き、元ゆひ澤山の本田髷を横へひんまげ、青梅じまのやはらか裏、はゞ廣のまがひ八丈の帯を、少し横のはうでかひの口むすび、買ひたての麻の葉小もんの手拭肩へかけ、赤い縮緬揉のさげ煙草入、あし半分の三番そう下駄でとほる。女郎屋の男「もし／＼、チトおより成されませ。」髪結長「何の事ッた、五助。」男「コレハ／＼、とんだお見それ、お出でなさえ。」長「来てるるか。」

男「アイ、とうから待つてさ。」長「フオ。」とはひかり「かみさん此のごろは。」女「御出でなんし。」長「おみく、どうした。」女「御出でなんし。サア二階へ。」と行く。長はしごを上りながら、イヨコブシ「逢つてはなしは山々あれどヨ、ズイラデバキナサロノヽ。」女「六疊へお出でなんし。」長「又しやうじのやぶれた座敷か。」女「もしエ、この中はよく脇へ御出でなんしたの。」長「フウ、あの時は附合だ。」女「嘘許り、わつちやア、お半さんへいつ附けたよ。」長「此のべら棒は、おえねえ讒屋だ。」女「お前の喰ひ散らしにやア、油斷がならねえ。」長「何だ、あのふんばりやア、なめてでもゐるか、ねつから生まれねえわ。左助に聞いたら、とうから來てゐるといつたが、又ばん狂はしか。」女笑ふ。長むつとして、きせるではひふきをくらはし、「コウおみく、呼んで來い。人をうつむけにした奴だ。」女だまつて下へ行く。「五助どん、大きにふけたよ。」男「フウ久しい物だ。」と出し物を持つて二階へ行き、「サアお上りなさえ。今お半さんが來やす。」長「是れエ、おのしも能くちよ〳〵らをいふもんだ。來ちやアゐねえわ。あのかは羽織もふてえやつだ。口をかけて置き、客へ遲く來るといふも、かすり許り廻りやアがるからのことだ。すべため、いまえましい。」男「呼んで參りやす。」と下へ行き、下のくどりが、わら〳〵わら〳〵と音する。長「來たな。何ンでも一番いつてくれべい。」とかたつてゐる。女郎、お半銀ふくりんのつげぐしを横さして、すました顏をして、「今來たか。」と長だまつて居る。お半「コウ、なぜものをいはねえ。おウしか。」長、ちやわんでぐつとのみ、かまぼこをくひながら、「いまえましい革羽織だ。」お半「だれが。」長「うぬがよ。」お半「なぜ。」長「是れエ、うぬがな、な、ほうぬほ

で、髭なでをしてもな」お半笑つて「わつちやァひげはなえ。」と來るたびに、よひどまりを附けておく客が有るか。」お半「せまえ事をいふなウ。なンぼ此の土地だつて。」長「せまえの廣いのと、花娵の店おろしぢやァあるまえし。モウ何時だと思やァがる。五ツをくらはしたは、大方五ツ明の客を取つて居やァがつて、猫ばゝの面で來て、成るほど白前を勤める女郎といふ物は、けちなものだ、そら程稼ぎたえか。ざふやくの馬を見るやうだ。」お半「聞いてあきれらァ。おまへが遲いから、内で今までめくりをしてゐたのだ。なンの、そんなに古いせりふをならべて、一ばえをいふ事ァなえ。手まへの來やうの遲いのはうつちやつて、そして此中も脇へいつて、どの子をか呼んで、性悪許りして置いて、そんなに太平をいふ事はなえ。腹が立つならくらはすとも、どうともしねえ。」とすねかける。長「うぬをくらはすとな、握拳がくさるわ。」お半「きつい負けをしみだね。」長「そんならくらはすぞ。」と手をふり上げる。

お半「もういいかげんにしな。謝らうから。」長「なンだ謝る。あやまらねえで成るものか。さういふ事なら許してやるまえ物でもなえが、あんまり蟲がいい。」お半オンドウタイ「ひんとすねては見すれども、ついあやまつて張よわき、なぜ女子には生まれたぞ。ヨイワサ〳〵。」と唄ひながら茶椀を取る。「コウ中直りに、青いきりといふところをついでくんな。」長「又呑んでどぶさるのか。」といひながらついでやる。お半「なンの、可愛い男の側で寢られるもンだ。」長「おきやァがれ。憎いが聞いて呆れるわ。火燵でもしろ。」お半「しよう

しよう。」と手を打ちさうにして、オットいう 女下より来て「な、だえ。」 お半「おろくどん、どうぞ五助どんにさういつて、辻番を借りて来てくれねえ。」 女「火燵をするのか。」と行 お半「サア寝な。」 長「此のかんりやく枕も久しい物ンだ。」とからから〳〵とふつて、「何こだ、此の焼印を押したざまを見ろ。横たふしだ。」女、火ばちをもつて来る。 お半「おかたじけ。」 女「長さん、お休みなんし。」と行く お半「煙草をのまねえか。」 とらう人ごたつをしてあたる 長もあたる 長「ちつとめらうか。」 お半「唄へな。」 客スリヤス「いやな客にも逢はねばならぬ。家業なら斯ウしたうきめはせまい。」 客イハ「三百両の金がほしい。」 お半「おいらもほしい。」 長「やらうか。」 お半「ありさうな事ッた。」 客「安くするな。」コレサ、おらはな、こんなやらうでもな、身代は相應にいいわ。」長さんといつちやァ、おそらく廣いもの。」株の二箇所も持つてゐるな 場所の株も有るわ。」 お半「ノウ、そりやァ人のを預つてゐるのか。」 客「おきやァがれ、みんなおれが株だわ。」 お半「ム、だがぶ、汁の身にしてえなア。」 長「こいつァ新しいことをいつた。」 お半「コウなンざおごんねえ。」 長「なァまけて、業腹まぎれに今夜来たのだから、驕るところへはいかねえわ。」 お半「そんなら、いつか蕎麥を買つた時は、ばくちに勝つたときか。」 長「其の時の蕎麥ァねつからうまくはなかつた。」 客「あおなくつても、馬ほどくらやァがつて。」 お半「うまを云ひねえ。」 長「うまくねえのうまえのといやがつても、内おやァうぬらァ、きらずあんな許り喰つてゐるのだらう」 お半「エヽ、ふけうきなことを云ひなんな。」

とせなかをくらはせ長「そんなにくらはすな。腹がへるわな。」お半「ひもじいか。ひもじかァ茶づんな。」長「ナニひだるかァねえ。そつちの腹がよつ。」お半あたまをかいて「エ、モア、此の笄、とほりが悪い。」とあんどうへさして見て、「コウみな。餘程目があるの。」長「ドレ見せろ。」と引出て「ム、、よつほど附いてゐる。俺にくれろ。煙管のたしにするわな。」お半「儘にもしやせう。コリヤア大事の客から貰つたのだ。」長「いろ客か。いつか来たつつころに行つた、不景気な野郎か。」お半「なこの、それぢやァねえ。」長「ドレ／＼もつと見せろ。」と又かんざしを取つて見て、「何だ比翼もんの毛ぼりだな。あつかましい。比翼もんといふ面かえ。さうして此のひよくもんの裁でいはへて置くも、古いやつよ。縁結びの心か。」お半「何かうして置くとの、其の客が来るよ。きめうだよ。」長「客に結ばせるのか。結ぶ客の面が見たいわえ。」お半「つらよりもの、其の客へこつちから、おしきせの文をやつたらの、返事をしてよこしたわな。飛んだおつりきに書いてよこしたよ。」「ドレ見たい。」とふところの引出しから出して見せる。長「なこだいや味な。」とひろげて見る。

かへすがへすあすの夜は御けんに、山々御はなし申すべくと楽しみまゐらせ候。

數ならぬ身にしへ、ようこそ御心そへくだされ、こまごまとの御しめし、誠に御けんのやう、繰返しまゐらせ候。まづとや時しの御いとひ、御かはらせなう御勤めの由、御嬉しく存じまゐらせ候。とし て過ぎし夜はゆる／＼御目もじいたし、御もてなしに預り、今に／＼忘れもやらず、ぬ

しさまの御事のみ、おもひ暮しまゐらせ候。どうぞ／＼其のふしぎに、御けんいたしたく存じなり候へども、儘ならぬ我が身ゆゑ、おそなはりまゐらせ候。御くまどの隈願ひまゐらせ候。殊になう御なつかしく存じ居り候折から、御文給はり、飛びたつやうに存じまゐらせ候まゝ、あすの夜はどのやうにいたし候ても、御目もじいたさんと、さま／＼内の首尾つくろひ、工面に心をいためし候御事に候。何ぶん／＼あすの夜は、御待まひ置きなさるべく、それとも御きしにてもあり候はゞ、御申し越し成さるべく、何事も御けんにと、其れのみ楽しみ存じ候へば、あすの夜は十年ほども先のやうに、待ちあかしまゐらせ候。此の御返事をしたゝめ候と、人目をいとひ候ゆゑ、忍び／＼にあら／＼申し残しまゐらせ候。かしく。

なほ／＼つれのかたへの御ことづて、申しきかせまゐらせ候。くれ／＼もよろしく申し傳へ候やうにとの御ことに候。御下ひかたさまへもよろしく／＼、御傳へねがひまゐらせ候。かしく

長よいを「なんだ、とんだもくるゐかんとんびめ。踵から長羽織といふ文だわ。こんな奴のくせに、かんざしや銚子でも持つて行く物よ。用心してゐすまれねえやうにしやれ。」「何にほそんな事をいつても、おまへには斷うはかけえまえ。」長「足でも書くわ。此の文で目がくたびれて眠く成つた。寝るがいい／＼。」と牀へは「火も消えた。浪人ごたつもあたら亦とねねえか。」お米「マァ寝てるな。小用

にいつて来る。」とゆき、かへつて〇〇〇〇〇、り長、れいのたぬきをてう〱、お半小よりをよつにはなの穴へ入れる、長はくつさめ〱、

跋

彼の南海に住む大鰭に、其の海内を迫しとせん。また井中に蹲踞る小蛙は、纔かなる水中を廣しとする。七五三の料理も、満腹れた節は其の味もなし。香のもので茶漬も、空腹い時に無味いものなしと、五六杯もかきこむ。一時勝負の息貫、間にあひもをかしきものか。

寸南破良意誌

英花新驛敘

英花新驛は何の為にしてか作れる。何の益なき為に作れり。謹んで龜の甲をやき、馬糞を投げてこれを卜するに、四ッ谷の大道兩儀を生ず、是れを名づけて追分といふ。兩儀合つて四ッ手となり、二丁立ては八卦となる。八々六十四文の酒手、癇の鍋の乾兌離震、銚子の酒のかん艮坤、卒の卦のたつ賦辨、物日をはづす失物待人、みな見通しの辻法印、おどけ揃つて爻にならひ、高天原で三度はらつて、ホヽうやまつて白す。

安永六ッのとし

玉川常水書

自序

[illegible]川の水の流れに[illegible]三ッ酒の[illegible]一[illegible]なるがはちやまもなかるゝ、[illegible]
る[illegible]の中にあるべき[illegible]には、[illegible]、一名これを[illegible]
業といふ、ごつと飲んではぐいと呑き、すつと酔つてはすつと醒る。所が所詮[illegible]、始めもな
く終りもなし。ふら不幸に飲みあかす。一升三百六十四文。一たん酔つて泥のごとし。今年始めてだ
ふつきに醒たりや、乱酒といふわるじやれを、よく／＼聞けば他人にあらず、[illegible]つたる[illegible]つた
ほつたとは何だ、なんだから、なんだかわからぬむだ言を、後の遊冶のいましめにもと、剞劂氏に投
じて世にあらはすこと、酔つてくだんのごとし。

安永六のとし九月

末樂館主人誌

賣花新驛

朱樂館主人

序

世の中を遊び盡して今ぞしるつかひ殘した錢金もなしと、口ずさびし人をたづぬれば、江城の[illegible]四[illegible]に、四こくは四ッ谷なるべし[illegible]獨立の宗匠あり、萌中[illegible]といふ。執筆二人有り。一人は[illegible]といひ、一人を[illegible]といふ。[illegible]買色をも一事とす。しかはあれど、ひたすらよし原ばかり月夜とも思ひたらず、所かはれば品川も高輪にのぼせ、淺草川の淺くはあらぬ流れに從ひて、深川のふかく思ひいれてより、土橋、中町、矢倉下を最上の道具とし、されば根津、赤城、氷川、御旅[illegible]、[illegible]はず。[illegible]は衣類にきらはず、これに[illegible]所にかまはず回向院前は釋教にさし合ひなし。千住、板橋は三度笠かぶつても旅籠にならず。など云ふもさら[illegible]、[illegible]にあらずとのみ思ひおきてたれば、他に中町、月は品川二十六夜、德場同樣に人々こ[illegible]ふさいつ頃[illegible]に[illegible]、萌中庵のふたりと組合、蘭酒年四十[illegible]といふ人、宝會のくつわよ

[illegible]

り、近頃組合となりし嵐興といふ息子年は十七八。をそゝのかして、かの廓へいざなふ。嵐雛曰く、やつがれも年だに若くんば、ともにゆかまほしきを、今や耳順になんなんとする身の上、杖をひくにもものうし。明朝かへるさに、樓上のおもむきくはしく語り給へ。日記にしるすべしといふ。

出立

嵐雛「サア嵐興、いかうではないか。宗匠はとても氣がねえさうだ。」嵐興「参りはまゐりやせうが、今朝ほど宿で、『早く歸れ』と申しましたから、ちと氣懸りでござりやす。」雛「そこは俺が得手もの、占つてみよう。」と、懐より一枚摺の何か書いた物を出し、算木を投げて、「雷澤歸妹と出た。初九は歸妹以娣 跛能履征吉。兎角は卦の表もいくがいいとみえる。九二は眇能視利幽人貞。今夜みたて損ひなどといふことはけつしてねえ。もはや此のあとは見るに及ばぬ。」といひきたといはい

しらず、むりにおす　興「なるほど参じやせうが、たれぞ今一人。」雛「よし/\、そんなら外をつれて行か

子をすゝめければ、

うこ　嵐外「サアいき給へ。」嵐外「ちと用事がござりますが、御とも申しませうか。」雛「用はあとになかし

て。」外「さやうならば。」雛「そんなら宗匠、外をつれていきやす。」と三人つれだち、むす子黒羽二重の小袖、黒りうもん給羽織むらさき紐、茶小紋縞

縞の下着、萬七子の帯を締め、菅笠は　大木戸は通りが悪くはあんめえか。」外「この頃はようござりますゝ。」

唯へ傾けて、宗匠に暇乞して出る。

雛「さらばまゐらう。」とどうじ格子じゆばんに、膝のあたりよごれたる黒縮緬の小袖、古手直しの小紋縮緬の一重羽織、帯は手あかつきたるあさぎ博多、細身の脇差はないのがただ、黒ぢりめんの少し毛

あれに大きな木は二人、ほりわけの森のきせる人それで颯に走り、意外にはなしながらゆく。 二 無紋の黒つむぎにそうかん色の十徳、「黒酒ごとのお膝のあたり、何で汗ばみましたの。」 三 二三日昔のとふた酒でありまするこ」 四 かうなる／＼、かうなる名遂げて身しりぞく、」 五 かうなるこういさんしふくいはまこ」と云ひつゝ、大木戸を過ぐれば、茶やの挑行燈あまた見ゆる。

夢 路 風 景

黒鍬の甲斐にゆきかふ道は、しら妙のお江戸の西にあり。森の中の火の見櫓は、天を衝いて高く、あかるみの四ッ手駕は、風を走つて速かなり。爰に行きかふ提灯あれば、かしこにたゝずむ闇あり。萬年屋の奈良茶は、むかし川崎よりきはめ、鼠大寺の蕎麦切は、これの月代よりも青し。百歩番のあかき夜、無窮屋の夜間し、いづれ書夜をわかたず、行司の燈華しやん／＼と響けば、運動の甲良藤暴として一つゐり、場の内の合式は懐町ヶ谷より早く、練馬の鯛馬は牛よりも遅し。地蔵の遺精はつとして名にたゝ、仁王のしかくも一向にとりさたなし。見番にあぶれし藝者もなく、問屋に寐て居る雲助なし。夜更けに彼なき猫子木あれば、夜中に損ねきあんま鳥あり。時にとつての思ひ月は、晦日の開けらでもし、一蓋さしての發花は、四時を別たずして開く。のし垂子の四角があれば、香の物の七色あり。道下の小言續に閲す。るごとく、神棚の灘鐘の如く尖れり。看造りのふの陸は、四ッ谷の大道になつて長く、部屋持の布團は、大佛の耳たぶにたぐへてあつし。年増にきまりし少年あれば、看造

にふだれし障子きありゝ、表座敷のくだらぬいさこざ、逆寐入りに寐入り、奥座敷の酔けきこんだれ、寐たやうで寐らず、天龍寺の鐘ごん／＼と暮れ行けば、十三社の烏があ／＼と明け渡る。酒にたゝざるかんばせは、桃園の花よりうるはしく、大一座の燭臺は、鵜川のかゞりよりも多し。日なしのたりがり、遊音心もやはらぎ、高井戸の市のたつ名もいとはずして、四季をり／＼の楽しみにふける。山崎の水車めぐりまん日のかず／＼、いじもてつゞゝるにいとまあらずと、べん舌さはやかに言葉に花を咲かせてみたれば、○亭「一銭つたよりきつい繁昌でござりやす。」○「息子、茶屋は何屋だ。」○「私は不案内で御座ります。おらへのお馴染の茶屋へまんじやせう。」○「手枕屋はふさがつたし、滝川屋にしようか。」○「イヤ呉竹の三が所へいつてやらさア。あなあのえに。」○「呉くれ竹やとやらはどこでござります。」○「あの里に隠れの蕪菜を呉へ付けよ、蔵造りの西瀬だこゝだ／＼と呉竹女房「これはお珍らしい嵐酒さま、きついものでござりまするに。」○「この頃の忙がしさ、遊ぶにひまがねへ。」○「それは結構でござりやす。」○「丹公ぶしが遊びたい。」○いそぎたるむなにゆを汲み来るとて、となりのむすこ庄五郎○「邂逅んでふたらにけつまづく。庄五郎縁端よりきたつて泣く。○「庄五郎はつよい。泣くな／＼。」○「落ちて庄五郎はなきやませまい。」○「ほんに鬼灯ほどな涙が出ました。」○「いゝ／＼よ、だまつたぞ。」○「おなかをあしふて、丹公きいてくりやれ。」せんど正燈寺の紅葉見にいつたれば、蔵前の仙漁にあつた。去る屋敷の客人が中近の半婦がここへござるから、おれにもい

つてくれべいと、お侍とかいふから、そこでつと顔を出したが最期の助、鮪漁もされた片腕と思つて抓ま
ねえ。」「ついこの頃うちにはむすこやくわつた。」「それではこつちにおきがねえはずでございま
す。」「なか〳〵、「宇崎とはえらい息子知らねえか。半太夫が事さ。」「もし〳〵、どこにいたしませう
おありなされません。聞いて参ります。」「玉殿はたれしといふ所がよかりつ。」「はて馬鹿な。俺は
彼處へはいけねえ。」「そんならとたお前達へはね。」「ト、将軍がまたらう。あすこは衞道かひでなと
聞ひたがあるに。」「その風呼ばれとはなう。」「いやはやなんとも、おもて座敷のそれ。」「横雲でよふ
聞いてござれ。」「さやうなら横雲でまゝ聞いて参じませうか。」「やつぱり爾にしよう。」「ま
すこ、こゝの奥座敷にござれまして」「何でもいゝ」「あなたはどなたに致しませう。」「間で、こつて
お見立てなされますか」「近江野がよからう」「十二宮が事か。」「あゝ、あれでござりまする」「十二宮様
とはえ」「あの片田舎でおやといつた、近頃近江野とかへたわいな」「離れた間ばかり、、、家庭
まはどこに詰りませう」「俺と連れし者たち」「かしこまりました」「奥行きを出しました
よりこまりとす。」「どの川でたのませ」「去りゆく行くべし」」と云人をあれぬ入ったる「何」れ
はこの仲の眼をして行くれ」「何人でござりやす。」「あれは彌右衛門、満岡郎とて、この
野かしれ。我に寄て、近付になられえ。」「とかく言ふ中たどりつきました」「では何んと申し

やす。」玉「これは玉城さ。」與「何か行燈に書付が張つてござりやすが、何でござりやすね。」酒「玉城へいかねえで仕合、あの名の書いた書付が張つてあると、一はいがさわけねえ。」與「なぜでござりやす。」酒「もちつとすりやアいはねえでも知れる。」

樓上の興

皆居へあがる。〔[illegible]これへ[illegible]いれる。〕[illegible]すつと格子際へ行き「アレあの森が海宗寺の森だ。此の頃にあの庭へ傾をつれていかうぢやアねえか。」生「それはようござりませう。」[illegible]煙草の火いれ来る。[illegible]えごえごと硯蓋持ち出し、程無く嵐酒の出かた横雲、嵐眞が出かけ近江野、しん注ぎを出つて来る　まや「お杯を[illegible]」外「おすやどこん始めなさえ。」まや少し存んで嵐酒が處へやる　酒のんで横雲へさす。それより段々杯すむ。三人の女郎皆立つて行く　玉「息子がのは柔和ものだ、外のも美しいわえ。」外「お前のも綺麗なものでござりますよ。」玉「何かあいつはきつい臆病だ、コレ息子、てめへの顔は、確か奥の格子際だつけえ。」ト思ひ出した顔をして[illegible]　近江野きさ来る。玉「一杯のんで、ゐやさん憚りながら。」と杯をずいとやる。き「わつちかえ。わたしやゐやとは申しやせん。」酒「昔からぞつこん知つて居るの。」近「眞にかえ。」ト苦笑ひして「アア、あほけんせうこし」酒「そんなら六代御前にあひなたのまう。」き「ぬしはとんだ名ばかりいひなんすよ。」ト少しのむ。酒「[illegible]ねえな。」き「ねからたべんせん。此とたべえすと目がさかつりやす。」酒「そんなら杯を此方へよこしなえ。」ト引つ掛けてのむ。生「嵐酒さまのお口は、軽い事でござります。」酒「軽い筈よの

先らかんやきなうしは煮にしてのんで来たからさ。コレ息子、誰ご呼びにやらうではねえか」[illegible]「よ
うござりやせう」「丹次、たぬきを呼んで来い」「おかしこまりました」「たぬきとは何で御座
ります」「是は公が事さ」ほどなく下から三味せん箱持て来る。幇間来る[illegible]「ようこそお出でなさりました」「これは久
振だ。まア早速あがらつせう」「ちと献じませうか」「イヤまア」[illegible]「さアあがりやア、お
それながら頂戴でへ上げませう」「[illegible]こまさんあげんせう」「わたしやこまさんおやゝござりま
せぬ」「[illegible]かいりを口についてやすねえ」「ほんにかえ」「だれか事だ　肴やおやねえか」
「[illegible]ごゐえんせん」「ほんに来なんせんね」「あすりばん来なんすはすき」しかしゆ
うへも待ちはきなしなんしたから、あすの晩も知れませんよ」[illegible]一味線出し[illegible]隔夜かなめ[illegible]すか合はせる。
「[illegible]なもの[illegible]鈴[illegible]」[illegible]「かねに[illegible]おかすごでる、テ」[illegible]に[illegible]初夜の[illegible]「だい
ぶ[illegible]たうだ。しかしあのさびがいいおやねえか」[illegible]しほり[illegible]あけの[illegible]をコレ宗匠、
この[illegible]千曲といふ目つきがあるおやねえか」「成程[illegible]た所がござりやす」「此の頃
け[illegible]日にさめついてゐるから、此と似た所があると目がつくよ」[illegible]「もしおはなしなんし
た[illegible]実前おやしあんあまし、お[illegible]はねえはすだ」[illegible]お茶がおごりんすよ」と進けて
[illegible]「[illegible]くいつたがいいのさ」[illegible]「よかつたね」とくつとよる。[illegible]「これ／＼

れこうつたうしいぞよ。」丹「それなら、そこへさんじやせう。」上「よしか、こゝにゐなんしな。」

土龍(りうづ)に手(て)をかけ飛(と)ぶぞと見(み)えしが、引(ひ)きかついでぞ。」外「ありがてえ〳〵。」呉竹 持(だいのもの)ち来る。丹「鄙(ひな)

会のみ給(たま)へことさ。丹「ちよと上たへ過(す)ぎました。」丹「もう唄は今といいから、呑むがいいおやアねえか。」

丹「さやうなら下しをかけまさう。」丹「ちとあけをお頼(たの)み申します。」上「梅雲・第一 ちよつと見ろいは

かしてか丹「あんたはおれだはね。」丹「むだでも何でもたべまさんものを。」丹「あいあなたはんとはいい

…おらすーはいそれでさすよ。」と顔まで 丹「あしのお手打あることしたことか。」丹「こんなこつちや

…それ、雨の晩にいつぱい盃だつけよか、二三日田中(たなか)の長崎屋(ながさきや)の温泉(をんせん)に入(はひ)つたから、大(おほ)かたなほつた。」

丹「さうあつかつきへめについて居(ゐ)ると、ゆう…よかつたものを。」と、むだをいひながら呑んで、肴丹「鄙

こゝか鼠(ねずみ)は凄(すご)いおやアねえか。」丹「口(くち)つきは正(しやう)の真(しん)でござりやす。」上「これなくてはねへんし」と大根の皮かむきたる

を長持… 丹「鼠の真だとしはいだあおやアあんのまし。」上「おめへ鼠がァおちやんせんよ。」丹「そして

こゝでいふ…上「たぬきでおさんすよ。」丹「相方は鼠あれ、とつちへしても四ツ足仲間(なかま)に離(はな)れねえ。」「お

かんそに…上「もと上りまさア。」丹「ちとこ喰(く)ひなさ、宋匠(そうしやう)くひ給(たま)へ。」丹「おめへなぞ下戸(げこ)だまさねえ。」

「下戸…この酒…上りまさア。」丹「成

きりそれ 酒(さけ)を手にとるか最期(さいご)、其の座(ざ)で盃(さかづき)を口(くち)へ入れた事のねえ男だ、酒なら呑まあう。」丹「成

得意面(とくいづら)…はよく上ります。」丹「下戸(げこ)ならねこそ男子(をとこ)はよけれ。」丹「いやもう酒は…でよし田の黴(かび)

好にしよう、上へ[illegible]へ、下から 吉二「はい呑んで一寸[illegible] 一杯のみ、三十に[illegible]し、「御きげんよう。此の間は」と、
かご、[illegible]「[illegible]をもちつと置いたりようござりやせうに」吉「おれが為にあんまりな、二三筋目に
待つて行[illegible]
はあけのしんぞうがなはろわさ。」吉二「[illegible]近江野さんのお座敷へ、お出でなされませ。」三「[illegible]息
に、[illegible]と[illegible]顔は[illegible]やかでござります。」確かにお前の相方の噂も[illegible]
します。」三「[illegible]」と、「さぞお酌しやう、[illegible]されてひとりよ、[illegible]」
吉「あの[illegible]こんなふうに[illegible]といふ奴だ、むしやうに浮くやつよ」三「成程さうでござりやすか、[illegible]さうや
す」吉「しかしあいつが二三日で[illegible]のよねによつて[illegible]だよ、あれこそ[illegible]で語る[illegible]太夫だ、あれがし
んはいつしかれいなことだ、そして[illegible]やかだよ。[illegible]お身などはとんだするものか」三「[illegible]一番に[illegible]も
お休みなさるのまで、[illegible]中で入しまする」吉「一ばい呑んで帰れ」三「また津の国[illegible]へ、ちよつと寄らねば
なりませぬ。明日[illegible]へも[illegible]御様子に[illegible]」吉「いつもの通り間けいかれそ。なんと息子[illegible]
でよいかな」三「[illegible]ようこそ[illegible]。左様なら御機嫌よう」と[illegible]と[illegible]を引き

閨中並に きぬぐ／＼

[illegible]「[illegible]」[illegible]と、[illegible]「[illegible]
はまことに[illegible]でおざんします。」と数へていづ 吉 ひとり煙草を呑みながら、「待てどくらせど来らず。上[illegible]

して、横雲來り「おたばこ吞みなんせんかえ。」と煙草盆つき出し 酒「さつきから煙草の吞みあきをしました、」にかなかしな顔付だが、どうぞしはしねえかえ。」 黄「いつそ醉つてせつなうおざんすに」 酒「こつちでは飲みもしねえで、どこで醉つたのだえ」 黄「四こくでさ。」 酒「此の頃はあつちに遊びあきたから、こつちへくれば、扨も珍しい事を聞きやすえ」 黄「おめへどこでもよくされなんすからさ。ア、せつない。薬を持つてこよう。」と出て行く。このあと座敷には、宵から牀の中にてはなしをりふしたかく笑ふ聲などする。 近「ぬしは横雲さんのお客と、お心安うおざんすかえ」 興「イ、エ。此の頃二三度俳諧で出會つた許りさ。」 近「寧そすかねえ。」と息子がそばへずつたりより、「私やぬしの名を覺えやんしたよ。誰かさんとようさんといふね。」 興「そしておめへの名は」え。」 近「佐次兵衛と。」 興「じやらけずと。」 近「くれ竹で聞きねんすと直にしれやす。」 興「それでも早く聞きてえ。」 近「わたしが名は、八景のある所でおざんすよ。當てて見なんし。」 興「金澤ではなし。オ、知れた〳〵。」それより話段々低くなる。何時となく話聲たゆる。しばらくして寝返りをするやうな音する。 興「オ、あつい。」 近「〇〇〇〇〇〇〇せう。」と紙にて顔をあふぐ。 興暫く〳〵だまる。 近「もしぬしは寝入りなんすかえ。」 興「ねいりはしやせんが、飲みつけぬ酒を一ツ吞んだ故か、いつそ心持がをかしい。」 近「是れを吞みなんし。直にさめやす。」と萬金丹を出し、枕元のしたぢゆうやくわんの薬湯をつぎ、「一口飲みなんし。」 興さゆをのみ、茶椀を下におく。 近のみかけをのむ。 興「みんな吞みなさるかえ。」 近「おめへまだ飲みなんすかえ。」といひながらみなのむ。 興「もう一ト口。」とひつたくり〇〇〇〇。 近「わ、せいを出して冗

談をしなんしな」この所酒起きて來り「息子にこゞつてばかり居ずと、ちつとおきさつせえ。」近小声にて「ねた振をしてるなんしな」酒「お邪魔かな。」といひながら枕元へきたる。「扨むつまじい事だの。これおいらんの、聞いてくんなんし。おいらが傾なぞは、三夜の三ヶ月様ださうで、宵にちらりと見たばかりだ。こゝへきて聞けば、鄰座敷で聲がするが、客を廻すとやら何とやら、源水ぢやァあんめえし、餘り廻したら目が廻りさうな事だ。とんとよし原などにはねえ點だの。」近「かまはずとおきねんしな。」外隣ざに目ざめ起きて來る。酒「手前の宵はどうした。」外「さつき小便に行つて其の儘さませぬ。」酒「宗匠や、爰ぢやァよくするぢやァねえか。藝者を大勢呼ぶ客があるとの、人の買つてゐる新をもあげに出すよ。こゝの内でめつたに厚いものはな、面の皮と上草履だ。おいらが傾城などは、通を見た事がねえから、通の客は嫌へだ。とかく四國邊の國猿でなくつちやァ夜が明けねえ。こんな所でむだな小言を云つても、しよせん始まらねえ事だが、餘り一國な所だ。傾城どもは品をするとつて不人相をするし、きつい料簡違ひぢやァねえか、高えつらをすりやァ正月だと思ふさうだ。どこやらの火の見といふ面をしやァがる。これ息子や、油斷しやるな。一體下の紀目が茶が好きだから、傾城まで茶が好きだよ。客を皆童子格子だと思ふさうだ。宗匠宿と云ふ所はもうなえわえ〳〵。」と獨りじれて居る所へ來り、「橫雲さんが先刻から獨り寢てるなんす。ぬしやァなぜ寢なんせんえ。」酒「よく〳〵書くやつよ。こつちで寢て

居る中は、まあ二へ行つて居て、こつちが起きると、来て寝るとは、ねつから嬉しいねえ。」二はやつさ
せう。」といふ中、しかしあの中、團平「これ竹でござります。お迎ひに二と、由良之助殿がおま
せう。」と渡る。表座敷の羽織と、また大かたありましたとつて来てくれろ。」「私がとつて来やせう。」と持つて、こゝへ置
きやす。」「ヤレヤレ鳥がその去た處へきつかり置いてくれねえ。」と、駕籠の錠のたゝき、を腹にきせ、油
宗寺の鐘のばうばうと鳴るになりぬいて、階子をとゞろかしてかへる。近息子が背中「この頃にひと
り来たんし。待つているいやよ。」竹一郎、こんなに哭。「蘭酒さまのおかげで、よい楽しみをいたしました
「まつらはよかつたかも知れぬが、俺がちよとさうで、妙な菴、芝居、生割、辛、皿、生飲、肴、
といふ所に気がつかなんだこと、かかる通里のかたがたいことを書きつらねし、人のものいひでこそ
なさごよ。

黄花新驛　巻

中洲雀序

夫れ東都の繁榮なる、道里遠近の地を遍く見聞するに、其の珍しき數々なる事、いふに盡さず、殊更夏は人氣盛んにして、水中に浮ぶ、満前の興を催す。中にも三叉の月名所にして、清流水を汲む、其景色言ふべからず。就中近き此を以て、中洲埋めて納涼所となりしより、萬人擧つて此の地に集まる數、日々に繁なる繁榮となる事、譬ふるに所なし。實にこんな土地が唐にもあろうか。然りと雖も往古何れの時にも見ざる事、惜しいかな君子、悲しいかな君子、此の土地のいきさま、書に記すべしと、論じ、漸く聞く事あり。我輩も天狗に巣立ちたいふ言語あれば、愚拙も作者の巣立にはなるまいかと、盲蛇物に畏ぢず、小本となして出版せしに、此れ鳥の真似する鳥、頭の水鳥の羽、[illegible]を下して、己れに見る人集まりにても藁を、藁を、[illegible]。我は雀中洲の[illegible]て、徘徊往來て見たる通りの書きたれば、則ち中洲雀と名付けたり。[illegible]、筆に書き記す而已。ア、ねつからたわいなく、御めん候へ。

丁卯の秋しり

道樂散人無玉誌

中洲雀

道樂山人無玉

人間纔か五十年、呑めや謠へや一寸先は闇雲と、古人の意見に任せつゝ、我まだ助平になるやならぬ其の内に、擔板漢を盡してすかんぴんとなり、西門寺にはあらねども、進退行き難く、明けても暮れても、只褌一つが錦の夜著、夫れに引きかへ、世に有る人の郭通を見るに附けても恨めしき。さりとては我が心からとはいひながら、餘り早い零落れやう。せめてもう十年程も採穆がして見たいと、思へば思ふ程煩惱更に休まらず。嗚呼是れも皆因果ぢやと、其の因果から思ひ附き、淺草の因果地藏樣へ、七日參りをして願をかけ、南無因果地藏樣、何卒わしが身の上を不便と思召し、大六天の百兩富を五つ六つお授けなされ、今一度昔のやうにさせて下さりませと、祈つて見ても印なく、去りとては情なき地藏樣と、恨みながらもその昔、曾我の十郎や藤屋の伊左衛門などが、身の上よりも斷くそあらんと得心せ、心ならずも、傍に取り散らしたる細見、長唄、義太夫本のたぐひ、寄せ集めて枕として、とろ〱と睡むと思ひしが、現ともなく夢ともなく、墨染の衣を著たる老僧只一人、枕元に來

中指で、いとこ賽六の勝負にして、又こなたへいて、取はこの浅草地内の居続内町地獄茶屋に一波此の極貧苦にせめられ、一文も遣ふ事が成らねば、大六天へ富を五つ六つ取りたいといふし、七日参りして我を頼むと雖も、そりやあ無理な願ひ。今の世の中に、神仏を始めとして、誰しも金銀をほしがらぬ者はない。然るに其の江戸中諸国の神仏が、種々な事を思ひ付いて、揃ひ開帳をして見れば、其つから参詣する人もなく、よしや賽銭は納めても、四文銭を二文と出して、纔か一人に過ぎぬ大がたになり参詣り。さめうへ心ない奴は、かね耳に賽りしその外、願をかけたは損な気になりをくし、古銭が出て勝手の口、もうしたの損な商売はない。それわかるほど、年おう照り降りなしに儲ける人はない。たゞし此の度の開帳でも、ごつそりとした金儲け。そのおかげで、おいらがやうな地内の居続ふでさへ、相応に垣根の外の儲けが有つて、土手をしつぼりの猿ゆゑの、下り見世へいつて見たが、たれも生き手が忽ちなく成れ、どうも仕方がないから、よたな所へ持つてくそ。癇をためておいては、皆々の寺の開帳へ賽つてやり、毎日々々の賽銭をあつめて、諸う立手を済へ、十四文のめくりを引き、又は紅屋横町へ百ぱかり入れ込むの、ちよんぎまるといふ身で、頃日は暮して居る。其の中にゃア妻法もない。いかに口があるといへばとて、百両富を五つ六つとらせてくれとは、余りな無法な言分。どた俗、百日参やら中日参りして頼みかけても、そのやうなきやうい無益とい

ふらり、先づ第一着物もたまらず、草鞋も切れようから、よしにしたがよい。こんな事が俺が自由になる位なら、俺が取つて今時分に還俗して、千両屋敷の二三箇所も買込んで、金萬と奢り散らして居るけれども、たんだ神仏でも金銀の事は自由に成らぬ。夫れを凡夫あなたは知らずして、なんでも願ひさへ懸ければ、叶ふ事のやうに心得てゐるは、大きな料簡違ひ。既に見よ、いつぞやも内木屋の手代で八めが、内の若お職を女房にしたいといふて、おれが所へ願掛けをして頼んだけれども、是れとても大きな筋違ひ。まして年三といふ色女が有る中に、此八めはしつかりあくりの腹を見るやうと願色で、色事とはいつもりつか合はぬ。づの合はぬは不義の元と、忠臣蔵の本にも書いてある。女郎の一つ言ひをもした処が、女郎子中さうに神仏へ願をかけたとは、さりとは通にも似合ぬ間抜けたものだ。そんな古い事は、すつと古流に品川と洒落れたら、唐の楊貴妃が家語にも、死生命有り、富貴天に有りといふた事が有る。といふ人間の寿命は、生まれついた年だけは長遣まで、なにほど長生がしたいと思つても、死ぬ時節には死なねば成らぬ。金が欲しいと言つても、授からぬ福徳に持たれぬ。授かる時節を待つて居るがよい。とはいふものの、それでもつまるまいから、いつそ盲金でも借りてやらうか。つゝての賽を下ろして見るか、又はよい思案でも有るなら、めくり取つてやるか。とてもかうなるからは、もつともらしき小筐を取つて、人の物をば我が物と心得て、金銀の檀那が有るなら、随分ゆかれた

て魔道へ引き込み、成るだけかすりあひさびとでたがよい。夫れもせえぬもんだと思ふなら、幸ひおのしは獨者だから、近所の女房や娘と通窟して、地獄といふ恐所はどうであらう。こいつも古い奴だから、始まらんと思はゞ、また外に思ひつきがあらう。したが當世はとかく人の思ひつく事でなければはやらぬ。夫れに依つて今の時行りものの思ひつきを見たがよい。子供たらしの馬糞菓子を、紅毛の儲りんたうと名附けて賣り初めしより、朝鮮の香慶子、與勘兵衛が膏藥、お駒飴、念佛飴を始めとして、色々に名を附け形を作り、世上に專らはやるといふも、是れ皆江戸の繁榮なる故。されば今では佛までが洒落てきて、石地藏が疱瘡すれば、木佛が經をよみ、左次兵衛四國を廻つて猿となれば、肴を佛に作り、とんだれいほうの見せ物となり、金に三兩一分の高利あれば、船に五人一分の安船有り、藝者好麁ぶといへども、終に怪我をした沙汰を聞かず。中富が道成寺眞の藝にして、諸人感ぜさる者なく、筆太夫が巧みの節には、男女老若の心を蕩かす。親王は木場に隱れて人になしまれ、巴代が力強しといへども、綱代が顏の美なるにおされ、素女女郎の眞似をすれば、娘藝者の風俗を眞似、蹴を才三といひ、きついだんのうといへば、おたふくと氣取る。例刻といへば諸事に通ずるの類にして、しやれものの通言となる。町人は武士を學び、武士は町人の風に作りてしやれる世のなか。春は上野、飛鳥、道灌山、日暮の花盛り、夏は水邊、秋は菊見或は紅葉、冬は顏見せ、初雪の趣向には、

秋葉みめぐりの景色を見んと、眞崎かけて押し出す遊興、景色の地算ふるにいとまあらずと雖も、わけて月の名所は、外に中洲の涼み所と、近來の大賑ひいふも更なり、川岸には水茶屋行儀能く軒をつらね、料理茶屋跡先を押へて、船路陸路の客を留む。座敷の飾り意氣にして、諸人の思ひ附くことを工夫し、心を盡す中にも、わけて四季庵の構へ當りに目立ち、風雅なる事を專らにして、庭に萩寺のやつしあり、四季の花節をたがへず咲く。料理の思ひ附き、器物の綺麗心有れば、貴賤の客たえまなく、其の風俗一樣ならずして、當世風有れば昔風あり、野暮あれば粹有り、洒落た男いきな女、通者道樂もの、傾城藝者散亂として入り雜はり、歸る客有れば來る客有り。されば座敷間數有りと雖も、あく事なく、呑込んせね、好きいせんの北國言葉有れば、又よしねえ、すかねえの東國の言葉有り、武左が惡洒落、權五左がさえ田舍說の色事には、茶屋の女も持て餘す。勝手取込みといへども、客に當まなく、働きの女は目を廻し、料理番魚板にはなるゝ隙なく、台の物積って山を生す。四季庵賑やかなれば樂庵靜かにして、奥床敷座敷の樣子庭の作り、すべて茶方の心有れば、さながら千の利休がぬけがらかと怪しまる。されば二軒茶屋も是れが爲に劣れを取り、兩國さびれて中洲へ引け、商人居並んで通りせまく、煮賣、煮肴、鮨飯、玉子燒、胡麻揚、西瓜の立賣、桃、眞桑瓜、餅菓子、干菓子の屋臺見世には、買喰ひの族蟻の如くに集まり、食物過ぎては腹を下し、食傷の種を求む。四文錢

持ち能しと雖も、纔かの買物には、一文二文のやり取りに損があれば、四百の錢も忽ちなくなる。何れの商人も暇間なくして、錢に得かる事を悦び、或は食逃げされたる事を憂ふ。蒲燒の香四方に薫じ、唐もろこし、だんごの附燒には、屋敷の折助おもに錢を遣ふ。座敷淨瑠璃、芝居、見せ物、輕業の三味線、鼓、太鼓の音さわやかに、鳴物調子に打ち叩く、其の音天に届けば、天人も共に影向ありて、將に此の土地にも來たらん事を願ふ。賣市る茶番狂言に混りこゝをくしこ、劇場の側を爲し、三日月に淨瑠璃を構へ、竈河岸の芝居には水茶屋の家名を記し、見物出し顔くに華なつて、桟敷は、さながら人込みの渦に巻しく、頭穴に來て汗を流し、さゝやかに來ては喧嘩を始め、屋敷のいかし羽ぶりに、いなやつき島と云へば、おもはゆき、木戸口賑しく、留場を構へて出入を改め、木戸番の聲に三も可笑し。噺家、手妻、講釋手、かけの打ち様、道具立、すべて拍子能く揃ふと雖も、兎角ひとすく少なくして、初めより終りまで休むに暇有らず。聲色は善惡有りと雖も、身ぶりは名人にして、能く役者の癖を呑込み、聲も仕分け、囃子の間拍子、忽然として代る替る有様目覚しく、鶉鶏の身振には、見物の女中づうを失ふ。獅子細工美しき、數取り集めたる工夫目を驚かせば、老若ともに是れを感ず。されば龍宮のこゝに出現したる如く、乙姫も川に遊んで、此の土にも龍宮有りしかと疑ふ。唐輪智之助が輕業、譚業にして見るに危く、錢を出して氣を痛め、緋鯉の作りもの珍らしく、生けるが如しと雖も見物少なく、おかし

目前にて、讀みとれぬ事を遊ふ。猿の輕業見るもの有れども、壯士氣なくして馬鹿らしく見え、これお動りんの音に、薩摩[illegible]の笛を吹くより思ひつき、おそ／＼見なさい江戸子が細工は、物凄くして妖怪屋敷の庭かと思はれ、女の力持心能く、宛然巴御前の再來かと怪しまる、何れの時代も[illegible]く、人ならずといふ事なし。中には草履[illegible]を[illegible]、我がちに集る人、買ふ人共に[illegible]二十四時の榮華の夢、程なく覺めては[illegible]、目の前に[illegible]まんだら、[illegible]に取り、[illegible]客あらば[illegible]出でんと、[illegible]には[illegible]の[illegible]、[illegible]の首を落し、哀れ氣なる聲にて往來の人を招く、目の當りは、[illegible]腰帶、[illegible]下げ、[illegible]つて、[illegible]いふ有り、[illegible]に在り、水茶屋[illegible]に[illegible]、茶をかわかして客を[illegible]、[illegible]く、[illegible]ふんどし[illegible]垂れ長くして膝を過ぎ、風に揉まれて翻々として波に閃く有様に、龍田の紅葉と歌はるゝ大川端に小早[illegible]、屋形船、[illegible]、にたり船、先を爭つて[illegible]、川幅しと[illegible]の如く、出合ひの船あれば[illegible]の船有り、めゝやす有ればめくりあり、[illegible]の[illegible]、唄、[illegible]、[illegible]、役者の身振、[illegible]、義太夫のしつぽり舟には、乘

合の舟纜を取り卷き、我が物顏に聞き居たり。ちやんぎり太鼓のぶちこはし船は、拍子面白くして浮れ立ち、玉やかぎやの花火船には、目印の提灯を燃し、大花火小花火或はからくり、遠近に光り渡れば、物のあいろ細かにわかり、玉飛んでは雲に入る音谺に響き、又散亂として四方にちる、將に星落ちて身をなげるに等し。されば玉屋々々の聲、震動して山川に響き、鍵やの花火有りと雖も、玉屋の名代強くして、誰も鍵やと呼はりたるを聞かず。上る船あれば下る船有り、騷ぎの三味線高く、遠くなるかと思へば忽ち近づき、近く成るかと思へば遠ざかり、謠ふ聲微に、汐風と共に散ると、水茶屋の提灯、空に照らし川に移れば、魚もこゝに集まりて、網にかゝる事をしらず。船宿は軒を並べて客を待ち、蒲通をせばのたまくと成る、交會といへば外されぬ事と覺え、仕方なしの隨行きに、懷金を出して内の首尾を害ひ、息子といふ愚鈍にふまれて、二朱見世を一分といひ、勤めの金を縮めらるゝも知らず、無益の金遣ひと人の遊興に夜の更くるも忘れ、歸りに犬の吠えに憂へ有る事を知らず。毎日毎夜來る人替ると雖も、更に盡きず、えいとう／＼と市の如くにおし合ふ群集、眞に古今稀なる大賑ひ、これひとへに目出度き御代の御功しと、萬づきせぬ富永町のためしを、こゝに評判々々。

中洲雀　終

妓者呼子鳥敍

天に乙女の踊子あれば、地にまたお豐とお富あり。妙音を以て辨天と呼び、容色によつて小町と稱す、聽く人晴に魂を飛ばし、見る人忽ち恍然となり、故に今や兩婦の傳を述べて、妓の所謂、意氣の手管、放蕩者の身の上話に、獸猶鬼が魂魄も花に照の光となりける。小町が亭の酒宴に、ひとつの趣き頭女の操、足を恨むるお豐が終始を、たゞうく閑に書きつゞけ、呼子鳥とはなづけはべりき。

安永六のとし酉の孟春

田にし金魚題

目錄

第一　當世伊達俗

第二　おとこの嫉妬

第三　まつさきの狐

第四　おとこが手管

第五　生きたるおとこ、死にたるお富をなやます

妓者呼子鳥

田にし金魚

第一　侠風俗

両国元柳橋の片ほとりに、萩の枝折戸物好きらしく、臥猪庵と號せる在りけり。ここに入り來る一個の客は、露時雨と云へる粋男、年ごろ三十にかぞへ、頭ひたひ大きく禿上げて、上に生へだ、中背は裾がへし、下にお被りつゝ着、帯の結びも小粋に、何れ派なきつきのえり、黒繻子の襟を掛けつい、きなる小紋の背を二重着して、重ねから羽織を着流し、矢八寸の下駄をはき、八幡のとき帽子、俗、左づまにてそともより、

「よう先生おうちかね」と這入る。トずつと　ふする「ごうだ露時雨氏ねつから逢はねな。」露時雨「さうさな、松葉屋にいつか遊びに顔をみせたけに、藏前の何とかの所で、今までゐて歸りやした。」ふする「松葉屋はだれだえ」「三浦の何某の二、みな御會にごろ、こいつはどうだ殺したか」[illegible]

だ[illegible]はかけぬかな。」と問おもしろい[illegible]

節があつたな。」「何こりやア、おつうやに用があつて、今よし町を通つたら、一文字屋のおさんが、呼び込むからちよつと寄つたら、今吉めが來てゐやアがつて、何だか氣なしにくるやアがつた。」「アイツも此の頃おきうり吉と色ごとだといふ噂だ。」「アノ馬道のおせんがよし町へ轉を出したかこいの、實氣もおつつけ三十にならうか、まだ美しい顏だよ。」「ヤ今吉のいふに此の頃橘町へ來たといつけが、又よし町へこしたかな。」「矢帶同朋町に居るとき、又深川へ歸るといつけ。あいつもよく〳〵巣をかへる奴ぢやアねいか。」「あいつが馬道に居る時分呼んだまんまだ。やはりよし原に居る方がよからうに。」「なによし原もいかねいのさ。あいつも深川に居る時の元氣は今だやアさらに無しさ。」「さうだらう。しかしあいつが思ひつきとやらで、此の[illegible]の娘どもが、眞似をするさうだ。先度も三田のやしきとやらで、二ツ櫛をさしたけなが、おてんは[illegible]、おまへは放蕩で、ふたりとも當つたさうだ。」「ヤそれにつけても、おらアおとよにきれぶみをやつてしまつた。」「二たりやなぜ。」「此の頃どこの野郎かにか、これびやアがつたといふ事だ。それおやアどうも、外分が悪い。」「何そりや誰だらう。よく聞いて見たがいい。そしてそのきれ文の返事は何と云つてよこした。」「聞きな。飛んだふといあまめさ。きられる覺えはない、殺してしまへの、氣が違つたかのと、小むづかしいだらく〳〵文よ。面倒だから半分も讀んだかやア見ねい。それに聞きねい。こびき

町のおとみが、此の頃はどうもならねい。せんども俺がかれくらつたら、客をやめて引くして、十四五日看病したが、毎晩三度づゝ水をあびて、七日がうち鹽断ちで、夜晝寐ずに付いて居たが、大ていきついぞおやァねい。それに飛んだきざんな奴よ。ャこんな事ァむだ。それと云へば十日までに二十両ないとならねい事があるが、五両でもあてがねい。なんと本材木町の金貸はどうだらうな。もう貸すめいか知らぬ。」「アあいつも永沈でこりはてたものを、何貸すものだ。ねしやきの山が息子と心安いぢやねいか。」「俺あいつもいかねよ。」「ハテそりやァ困つたもんさ。」「けれな、出来ねい時は出来ねいものだ。此の頃は富や無盡許りつけてゐる。聞きねい。第六天の富も十四五まい付けておいたが、今宵つて見て來たが、花へでも出てるねい。どうで一工面して見て下さい。」「これに困つた事ァねい。二十五ひなれや煙管煙草入をしまひ立たんとする。「もう遅い泊らつしやい。」振ッと離したい事もあるから。」「そいんや、今夜は歸らにやアとする無い事があるやうすで」ト云ひながら歸る。上野の鐘ごん〳〵、「こゝぞうちャ寝るよ。」かぞ「旦那お床をとりませう。」

第二　おとよが嫉妬

諸の賽雅遊者の中にも、新川のおかね、中村お園、平松町の文字たつなんどには、その拔きよきのみなれども、わけて心と音曲と、三ッ揃ひたる、其の中に咲き花たちてしな、蕊町に名にしおふ、

薫天おもふを聞きしに、飛燕があいきやう貴妃が媚、虞氏が風俗、西施がようぎ、我が朝のその昔、小町、衣通、女三の宮、夫それ〴〵の姿にも、をさ〳〵劣らぬ容色なれば、勿體無くも異名して、諸天おとふた名に高しゝこれば町方屋敷を分たず、櫛のはひ引く座敷の數々、猶いやましのお豊が心、露時雨が招文にかゝり、なんでも逢うての怨み、なんと云はうやかう云はうと、心亂るゝうき思ひ、此の夜の座敷はことさらに、軍次兵衛、一藤太、與三左衛門なんどと云ふ、すこびたる一座なりけり、中にもまずき半か通、いやみ揃ひの茶道の文南、酒たけなはに及べる折から、文南「モシ〳〵おこは先生。そこうの手のほりものを、ちつと拜見いたしたい。」豊「イ、エ私等が手にやア、そんなものは遂ぞ覺えがありやせぬ。」ト何もなき方の手をまくつて見せる。中内にして雪をあざむく[illegible]いかなる肌だの白妙 文南「そつちの手をお見せ[illegible]」無理無體にまくり見れば、たつ筆に、二世も三世も露時雨なぞと、 文南「そこで[illegible]なかつた、これさ[illegible]、飛んだ大きな文身だ。これをほる時ア、さぞ痛かつたらう。似た事もあるものさ、木挽町のおとみが手にも、やつぱり露時雨とほつて居たが、よもやその露時雨ではあるまいな。」[illegible]「露時雨とほるがはやるかも知れない。」藤太「おとみとはせんど木挽町のはらでアノみた娘か。」文南「それたれ、あれはもと在々木幸八と云ふ三味線ひきの娘だが、中橋からこゝまでの、女藝者のとうんだこ[illegible]とろじうとは、かの評判の色をとこか。」 文南「さやうさ。ほんに憎い程いゝ男さ。第一本町日

のうお前さん、髪はうすく、色しろく、よる齢で無し、瓜で顔でなし、ほんたうの毛でつくつた眉も古お守解しの化粧で、それに空気をふのばかりして歩くから、江戸中でも一番と評判のたわいでござんす。」[illegible]文句言ひたくなるのでも穴を知へして居ればいいことかえ。」なんなえでも私が[illegible]事は大がござりませぬ。御聞きなさい、其の[illegible]じやとか言ふこそが惚んだ色男だね。指切り髪切り[illegible]、さりとは浮気者ていふ事さ、それだから[illegible]つてしまつて、あの男に引き替へ[illegible]にんした所へ、帯封のないお金のことやらず、以ての外不承知だけ[illegible]、それでおとこの[illegible]此の所にかけ込む。」といつて騒ぐげな。」

と聞くと、[illegible]もとより上品で、身におぼえの無い無理を言ひかけて、[illegible]に見かへて[illegible]女が、ただ[illegible]うかしかし[illegible]、年に初はなるの[illegible]、[illegible]へ、大勢のよくし道中に通り、[illegible]、日帰りしいと言[illegible]とうとうせば、[illegible]の木[illegible]の木の若い時八つかしさうにして[illegible]、その[illegible]見かへた門はなせつとてしか、[illegible]忠[illegible]、[illegible]相[illegible]つて[illegible]つとてか、嬉気をおこつたる、陽火の火[illegible]ふりまはせて、[illegible]ゐ居る文箱に、ただ[illegible]、[illegible]、[illegible]は[illegible]何かは知らすまへ[illegible]。それ[illegible]で[illegible]し、人はまつ白になつて、道の一[illegible]灰会[illegible]いかに文箱はつ[illegible]しく[illegible]、これや[illegible]の[illegible]化

物、雨中にほしき男なり。一藤太は手練の早縄、お豊が小手を高手にからげ、駕へ押し込み、橘町へ早々送り返しけり。それよりお豊は食事も絶えて、二三日打臥せしが、二世の男を寝取られし。その仇人に添はせじと、斯る心も我ながら、げに浅ましや恥かしや、アラ物うしの時来り、恋と恨みとねたましさと、三ツの金輪に蝋燭の、もゆるほむらも胸掛の、鏡に道は照らせども、心は暗き川岸へたひ、水漂泛と物凄く、空吹く風もたゞならぬ、多田の薬師にならびたる、秋葉の宮のしん／＼と、繁みの一ト木の神木に、石を拾うて打つ釘の、音ちやう／＼とこだますれば、思はず耳を打ちおほふ、流石女のおどなさも、恋にはつのる一念力、一七夜がその間、木に打つ釘も人に通じ、おとみは毎夜物のけに、責め悩まさるゝ苦痛のありさま、不思議なりける事どもとかや。

第三　まつさきの狐

上がた店の息子雷義と云へるできぼし、臥猪庵におとづるゝ。

らいぎ「どうぢや先生、けさは早う起きなんしたノ。」ふ「コレハ雷義子か。いまお帰りがけだな。」

らい「イヤ／＼内からわざ／＼来たのぢや。」ふ「それにしては飛んだおはやい。シテ此の頃のお楽しみは。」らい「気をかへてけいこぢやわい。それについてちと智慧を、借らねばならぬ訳といつぱ、アノお富めが事ぢや。わしやえらう惚れたさかいに、なんと口説いておくれんか。」ふ「いつぞあつたらはな

して見やせうに」ヲヽイヤ蒔はいそげおゝや。ハテおきにやつてこましたい。」ヲヽ「ソリヤアあんまり急なこつた。きうなら呼びにやりなさい。したがあいつもはやる妓だから、呼びにやつても居ればよいが。」ト云ひながら裏の女使を呼んで、おとみを急に呼びにやる。ヲヽ「此の廣いお江戸おゝやが、又おとみ程もらい妓も、とんとこちや見あたらぬ。どう思うてもこちや女郎より、藝子がてつりとするやうだよ。わしも藝者は好きだけれど、心いきは女郎より、もつと懇いらんでごうります。それに客と一ッになつて、いか様食ひをしてしやれる所をみると、ぐつと愛想がつきる。」ヲヽ「いつご聞かうと思うたが、女藝者は何故客よりも箱頭を大事にしやるんだ。」ヲヽ「深川藝者などと違つて、江戸けいしやは箱頭ににくまれると、いろ／＼のあたをする故の事さ。」ヲヽ「時におみつが見ゆは、くつきりとした、よい妓でやすね。」ヲヽ「何、アリヤアあいつの亭主でさ。」ヲヽ「アノたんにさん／＼と云ひなさつておるゝ、三味線の兄さんは大かた亭主でさ。」トはなす中、おし／＼おさかきたる。ヲヽ「さて／＼先から待ち／＼夜だ。あそこへおみつが出たらう、大きに悪くぶつて居たこつちや。なにいゝよ。」ヲヽ「さて何それでもよくきに急いで参りやした。なうきうしまうが」ヲヽ「エヽ、すつきりあんまりの急いで来た故、いつそ息はづみやすよ。それにやつさんが来て、又御神のおやばんで、はんにじれつたうござりやした。」ヲヽ「それだがたつさんは気のいゝ人さ。いつそや向島で此人、書舞の時も、三味線や何かの世話をして、ほんにやく気づつくんさ。」ヲヽ「なにしや
ゝそすこと

つちの話ばかりせずと、ちつとこちへも話を廻してくれろ。時に雷義さん、一ッ呑んで参りやせう。」らい「それもよござんしよ。」こさ「お坂さん三味線をとつてくんなア。」ふさ「三味線はむだだぞえ。それより酒にしやう。」こさ「のうべあか坂のお屋敷で、夜の明けるまで飲んでゐやした。」ふさ「外の所でのんだ酒を、何こつちで知るものか。何でも今日呑ませにやアならぬ。ナア雷義さん。」らい「いやであらうと今日は一ッすごして下んせ。頼むぞえ。」ふさ「コレ小僧、燗が出来たら持つてきや。」小僧、銚子を持つて來る。ふさ「サアらいぎさんこつぷにしやせう。これでひとツ呑んでまはすよ。」らい「コレなんにも肴がないぞえ。」ふ「肴はさきで上げやせう。梅干でも持つて來や。サア、お富ばうさしやせう。一ッ呑んで雷義さんへあげやう。」こさ「アノコレでかえ。」ふさ「何そのやうにきもをつぶす事はない。呑む所ぢや呑むだらう。」こさ「マノそんならたべやせう。」さか「おとみさん、又呑みなさつたらあたるによ。」「又おさかさをばから。それがてうしのさしで口、ドレおれがつぎやせう。」トいへば、おとみのんで、こさ「雷義さんトがやせう。」トいへば、らいぎ呑んでおさかへさす。さか「わつちやねつからたべやせぬ。」らい「それでも半分呑まんせ。」こさ「あの子は呑むといつて肴でばかりゐやすよ。」ふ「コリヤア面白い。三味線弾かずといいから、サア一ッ呑みや。」トいふ「そんなら、半ぶんたべやせう。」ト呑んで臥猪へさす。ふ「チトおさへませう。」さか「コリヤ無理だれ。そんなら雷義さんおあひをお頼み申しやせう。」らい「お手元と云ひ度い所ぢや。」さか「さいをがみ

やすよ」三「こりやァ、ほんにあんまり肴が無い。小倉角の酒屋へいつて、ちよつと玉子をとつてきや。」と三「玉子をたべたら仕方がござりやすまい。」三「そつちやァ仕方もあらうが、俺が仕方があるまい。しかしお玉ばうが呑むと寐ると云ふが、ちつと薬しみだ。」とお笑ひな「いつそもう目がとろ／＼して来やしたよ。」六「おきやァがれ。」ら三「なんと先生モウおいでんか。」と三「どこへいくのだえ。」六「まつさきさ。」と三「また狐の出やすかね。」とも「ナニ犬がおいしいね。」と三「お玉ばうおあひを呑むから、先生へ上げて納めとし給へ。」トのみさし盃へ注ぎ、とも三「手酌に致しやせう。」ふ三「それでも半分。」と三「コレこちうじやせ、悴ぶんたべやす。」ト先へ注ぎて、ぶつかけて、「どうかお礼計り呑んで居るやうだ。」とも三「まだおとみ坊はねつからあがらねへ。」三「イヤ、エおとみ坊にやァ話があるから、今日は呑まされやせぬ。」とやこれでお納めやせう。時に小倉舟はどうだ。」小舟「さつきから待つてゐやす。」六「そんなら雷義さん、サアまゐりやせう。」トみな／＼、とも三「おとみさんお久しうござりやす。」と三「誰かと思つたら桑名屋の人だの。おばさんはおかはりもねいかえ。」ホヽ二せんどのしくばまりまんまだね。」とも三「とみんなあんまりかゞみ過ぎるぜえ。」とみ「またわる口ばかり、ちつと三味線を出しやせう。」トおとみ、おさか、八重が引き、三味線を引く。皆々末座の前へ来ると、おとみ引… 三「おとみばうどうした。」トみな／＼、暫く此の間に舟すて、おかみさんしやしたつたえ。もしおかうはたしか薬師さんでねえ、となりの者はなにさんで

ござりやすよ。」ふ「あれは浅草だ。」とみ「アノ櫓を見ると思はずぞつとしやしたが、ほんに情ない處だねえ。」ふ「俺にはいい所だから、ねえ。ここは度々ついやしない。」トいふ中、舟は着く。ふ「まア稲荷へ参つて來ようか。」とみ「お前はお岐ぼうつれて参つて來なさい。わたしやおとみぼうと話があるから、はつたやに待つて居やす。」トらいぎはおさかをつれ稲荷へ來る。ふす とみ「モシいい思案がありやしたね。」ふ「おとみ、用があるならこゝへきやれ。」とみ笑ひながら、「ふんだえ馬鹿らしい。」ふ「馬鹿らしい事でもなんでもねい。話といふのはアノ雷義がことだ。」とみ「雷義さんが何うしやした。」ふ「あいつがでも無く惚れて居るのだ。口説いてくれろとうるさく頼む。それ故今日此處へ來たのだ。定めていやでもあらうけれど、ハテほれた顔さへすれば手前の爲にもなる事だ。」とみ「それだとつて馬鹿らしい。いやだと思つてそんな事がなるものでござりやすか。そしてマアよくつもつても御覧じやし。どうわたしが、ハテそんな事がなるものでござります。」ふ「手まへの云ふのも尤もだが、ハテ手前の内しよのわけも知つて居る。おれがかう云ふも分るまいが、こゝをよく聞いてくりや。露時雨は友達、らいぎはついとほり、どつちのひいきと云ふ時は、ろじうがひいきならおやしない。畢竟かう云ふも詰る所はろじうがためだ。」とみ「なぜ又ろじうさんのためになるえ。」ふ「あれがお蝶に切れにくい、内證のわけを知つて居るか。」とみ「成程露じうさんの話では聞きやしたが、何か切れるにも切れ悩い、むつか

しい事があると云ひなさつたが、其の事かえ。」トいふ「ハテそのわけといふは、この前ろじうが内を出た時に、薬研堀に店を持つてゐる内の何やかは、皆お鰻がすごしておいた。それに手前も知つての通り、ろじうが好きだアノなべさへ、その時分はわけてあれもしあはせ悪く、お鰻が衣類や頭の物まで、みんな質あて、一時に二十両といふもの借りた。今切るにはその金を返さねば男がたたぬ。それでろじうも此の頃はいろ／＼と工面すれど、二十両のことはおいて十両も出来ぬさうだ。なんとてよい、義をだましても、金を借つてろじうへ渡し、お鰻へ返させ、さつぱりと切らせたいは思はぬか。」トいふ「さあ切らせたさは切らせたけれど……」トいふ「そこだによつて得心して……」と云ひいだすを、だましてもあれ。それでもそんな事は……」トいふ「ならぬと云へばお鰻は切られぬ。それではろじうへ義理がたたぬ」ト「ウヽそれは……」「いやならいやと云ひや」ト思案して、トいふ「どうともするのか」「ト…いい、備…、娘子はたいし、駄賃次の間へ出て、「かういふ義理、何ぞ楽しいものでもこなんだか／＼」ト「おこあげうが狐を見たで、それでもらうひまどつた」時に内々の様子は、「…」ト「ハテ先生がする事だ、如才があつてたまるものか」ト云ふ「エ、ありがたい」とよろこび、此の中をとみに奥座敷よりさあ出て、いきに向かひ、ト「翁裏…ん…が…あつたね、なんぞ面白い事でもあつたも知れぬ」ト少しくきみ悪く、ト云ふ「何だね、大と狐を見に来たばかりおれ」ト云ひ、わせうこ手を打つて、さ、なる。「早くなんぞ持つてきやれ。一ッ呑みたい」ト云かし

以楽呼する

よりました。」ト云ふ内、吸物、銚子、硯蓋いろ／＼と持ち運ぶ。 らい「何とこゝの藝者でも又呼びにやらうかな。」 こま「何おだだ、よしたがいい。」 こま「おさかさん三味線かへ。」 ト いふ内おさか三味線をとつて來る。 此のうち酒事しましよ。 先生立つて奥の座敷へ行くおとみを呼び、同じく立つて行く。 おさ「さつきいつた通り、らいぎさこゝへおこすから、いいやうにあはせておきや。」 こま「それでも飛んだあんまりきふだねえ。」 おさ「ハテ今日逢はうといふこつちやなし。口先で例のちよ／＼らさ。」 こま「そんならマアどうともしやせう。」 おさ「よこすぞよ。」ト、又こちらの座敷へ來て、「らいぎ子一寸あそこへおいで。」 らい「行きは行かうがなンぢやいの。」 おさ「なんでもマア早くいきなさい。」 雷義うれしげに立つて奥へゆく。 とみ 奥のすみにうつむいてゐる。 らい「なんのこつちや知らん。ふそこへいれと云ふから來たのに、あほらしい。」ト ひとりごといふ。 こま「もし一寸此處へおいでなんし。」 らい「なにおやす。」 こま「さつきから段々と先生さんのお話で聞きやしたが、ほんの事でさうおつしやいすか。わたしどもがやうなものを、さう仰しやるはずがございせんか。おだましなんすでござりやせう。」 らい「欺すとは商ひ冥利、夷大黒かけ奉り、わしやとうから先生を、たいてい頼んだこつちやないわいの。定めてお氣にや入るまいが、心の内で手をあはする。」 こま「かう申しいす上からは、此方に譃はござりませぬが、お前茶にしておくんなんすなえ。」 らい「さう思うてくんす事なら、どんな心中でもして見せませう。」 こま「眞にかえ。」ト いだきつく。 おと「おとみさん／＼。」ト よぶ。 こま「よびやす。あの子は口

の悪い子だから、こんな事が萬一知れると、大體わるく云ふこつちやござりやせぬ。」トゆかんとする。むりに袂を引留めて、　らい「コレまだ話したいことがあるわいな。」　きく「アレ誰か來やすと云ふに。」トふりきつて座敷へ行く、らいぎも、まぬけたつらつきにてあとより座敷へ出にくる。　ふ「なんとらいぎ子、あんまりおそくなつたなら、内が悪くはないかえ。」　らい「たとひ悪くとも大事ないのさ。」　きく「何それぢやわるうござりやす。サアモウお歸りなされやし。」　らい「モウ一ツ呑んでいにませう。」ト手を叩き　女をよび「何ぞさかなを持つて來ねえ。」トいふよりも、れいの茶賀田業、大平茶椀盛なるゐをいろ／＼持つて來る。らいぎはをどつて何もくはず、先生はむしやうにうちくらふ、らいぎはおとながくひかけの汁をとつて、これをうまさうにすひ、香のものなどを、わがくひさしのしるをおとみがぜんの上におく、おとみはこれを知つてくはず。　ふ「おとみぼうは何故汁をたべやらぬ。」　きく「わつちや蟲氣でしるは嫌ひさ。」　ふ「そのうちでなんなと一ツしな食うて下されし。」　きく「皆わつちが嫌ひな物だよ。」　らい「これとも其の松茸はくふだらう。」　きく「何それもなまものでなけりやァたべやせぬ。」ト先生にこにこ笑ふ。　らい「そして手前は何が好きだ。」　とみ「わつちや何でもみんな嫌ひさ。」　ふ「それでも芝居は好きだらう。」　きく「いいえ、それも猶嫌ひさ。」　らい「そりや嘘だらう、役者に誰か贔屓があるかえ。」　きく「お前に似て居るァノ市山傳五郎とやらが、ほんにしんから好きやした。」　とみ「その傳五郎と云ふは、敵役か色事師か。」　きく「色事師でござりやす。」　らい「それがわしに似たと云ふのか。」　きく「しかみ火鉢をわらかに其の儘。」　らい「何やらと。」　きく「イエ瓜を二ツにさ。」　らい「よい男かの。」　とみ「外にやァござりやせぬ。」　らい「どうぞ市山を見度いも

のださ、や聞けば此の頃、橘町の藝者共が、狂言をするさうだ。おれが此の頃殘らずよんで、アノ白木屋をさせて見たい。役割はごうつめ先生。」丹「ハテおとみはお駒、お前は才三さ。」らい「わしがにや出來ようかの。」丹「出來ねへでどうするものだ。なんでも髪結の眞似をするのと、おこまにだきつかれる計りだもの。」らい「こりやアどうぞして見度いものだ。筆太夫をよんでほんまにやらかしてこまさう」と、[illegible]處へ、[illegible]生のむかひに來り、先生は此所に[illegible]と、二人の引きつれ、藝者を引き、[illegible]へ急ぎゆく。これぎはおとみ[illegible]とともに、かの[illegible]水に舟をうかべて、[illegible]にぎ[illegible]催しにつれ、舟は　らい「お富がうまし[illegible]ばに呼びにやるがよい。」玉「わしたちもあきつてもお屋敷へまゐりやす。どうぞあきつてのそのおしたにしておくれなんし。」らい「それはちつと待ちやさしいが、明後日はそれならきつとおやつ。[illegible]おとりらいざは舟を上り、[illegible]、お富、お坂は此の舟にて、すぐに[illegible]へ[illegible]。

第四　おとみが下段

まつ亭と聞えしは、前に蒼海漫々と、總房二州を見晴らして、風色類まれなりければ、雷義に此の日の約束なれば、墨水寺河の友を誘ひ、此の所に倣遊なす。

玉「呼びにやつたは、雷義子だねへ。」らい「おとみさ。」玉「アノ木挽町のか。」らい「アヽ、それさ。」

玉「あれにはつがむない色があるが知つて居るのか。」らい「何さう云ふ事はないはずおやが。」玉「貴公はそんなら何ンにも知らねへな。あれにやァとんだ瞞があるよ。」墨水「さう云ふはなしをおいらも聞い

たゞ辨天おとふとそのおとみと色事ひだといふことだ。」主「そして指を切つたりほり物をしたり、おとみめはいつそ氣狂ひのやうになつて騷いだけな。色男の名はたしかなんとかいつたつけ。」主「なんでも薬研堀のおりものだ。おとみが來たらば、手をまくつてほり物を見るがいい。」下略 二人連立ち茶屋より駒下駄にて來ます。駒か、いつも鼻緒はなを、さて上着には黒ちりめんに染出し紋の淋しき模様、着物の裏にすそ廻りは合いとの縞ちり〳〵織で、下着に二つ重ねには、江戸むらさきのちり緬にて、江戸つまに白あがりにあさぎの十草をまり付けて、鼠縮緬の長じゆばんに、緋ちり色のきりたてゆもじ、由ぶきの紋からのもよう、おさかもつれのはで衣裝にて、よ町よりもよし來り、主「をばさん此の頃はおとほぜはしうござりやす。」巳のふ、「きついお見限りだの。さきから御客が待ちかねてゐたよ。」「二階へ」ト二階へあがる 主「待ちかねたまつほのさしみ、」主「いつそ急いて来いといつて、つひあそこでこれびやしたに」主「おらア羽折藝者にしたいものだ。」主「なんの事だえ。わつちらアこんな事ア存じやせぬ。」巳「ナおとみさんこゝへ來なさい。」トらいぎが傍へよる、おとみ、らいを見ては

とみ「をかしな事をおつさんすな。なんだかねつから通りやせぬ。」巳「コレおとみさん。やけん堀でいことをいけがあつたつけ。」主「こりや、おきせるんだやアごさいやせぬかえ。」主「いえやそんなことはないしさ。」とみ「なんだかなんだかいやをかしいね。いつそ酒にでもいたしやせう。けふはなぜか氣がふさいで、ちつとも元氣がござりやせんね。」らい「なんぢやかもや〳〵心持が惡い。ふたけたいな。いつそ酒でも呑んでしまはう」ト茶碗をとつて手酌についと引つ掛ける 茶碗を取つて、主「なんだえ、あんまりおはき過ぎやす。

私が半分助けて上げやせう。」トらいさまのみましをとり半分程のみ、弥「やんやおやかりものあ。ヤ雷義さん、さつきの事をソレ聞いて見なさんせいか。」○「コレおとゑ、薬研堀の方のことづけは手前心に覚えがあらうがの。」きん「アノおるゐさんかえ、およねさんかえ。」ゑん「イイヤそんなものぢやァない。」○「そんならおたみさんか、お銀さんか、おかねさんか、おまきさんか。あの子たちより外に、ことづけをされるものはない。」○「何ぢやら無い、男ぢやわいの。手ま八の手にある男ぢや。」○「わつちの手に何があるえ。」ゑん「何があるかよくつてみさんせ。」きん「馬鹿らしい、わつちやアいやさ。」弥「そんなら何か見せられぬ事があるな。」きん「成程ほつた人もありやしたが、そりやとうに切れてしまつて、さつぱりとした身の上さ。ナア おさかさん。」○「あのことなら飛んだ古いのさ。今ぢやさう云ふ事はござりやせぬ。」○「そんならこゝで消してみや。」○「するぶん消しもいたしやせうが、わつちひとり馬鹿らしい。いやさ。」○「人の身請のあらたあすと、雷義さんおまへの手をお見せなんし。」らい「さア見せませう。」（トもの気軽いで両手をづいと出しまはすれど、腕に毛のあるばかりにて、ほり物など更になし）ゑい「なんとどうぢやあるまいが。きれいなものであらうがの。」きん「そんならお前わつちが名をほつておくんなんすと、わつちが手も消しんせう。」らい「おれがほつたらこなんは消すか。いくつでもほり度いものぢや。」とみ「およしなんし。わつちがお名をほりなさつたら、外聞が悪うござんせう。」らい「そんな事を云はんすなら、今ぢ

きにほりませう。」　[illegible]「こりやおもしろからう。ドレわたしがほつてやりませう。」　ト[illegible]針をとつて[illegible]「もういゝかげんに、じやうだんをなさりやし。しまひにやァこまりなんせうぞえ。」[illegible]「そんなら手前は消す気がないのか。」[illegible]「随分消しもしませうけれど、さうはなりやせん。こんなの事で。」[illegible]「留蔵さん、それおやァおまへすむめいぞえ。」[illegible]「コレおとみ、どうあつてもそんならいやか。」[illegible]「アイいやでござんす。」[illegible]「そんなら消させるとまゝにせうわ。どうぞ手まのお見せなさつしやい。」[illegible]「見せる事も嫌いやさ。」[illegible]「そんなら見せるとおきませう。」　ト[illegible]女房、[illegible]来[illegible]なんだかお前さんがたは、口説諍の云つておいでなされやす。ちつと御酒になされませぬか。おとみさんもちつと弾きなさいな。」[illegible]三味線をとりよせて、[illegible]女房は[illegible]間へ銚子を持ち杯を置いて[illegible]おとみさんもちつとお目に懸りやせう。」[illegible]「こゝにもつとゐてくれな。」ト[illegible]へ行き、[illegible]留蔵[illegible]おとみなんだ。」　ト「けふはなんと思つてか、大分いろ〳〵の事をおつしやいすね。」[illegible]「なんと思つてもゐやせんけれど、聞けばこなんは色事があるさうな。そんなら今までのは皆嘘おやの。騙したのさやな。」[illegible]「なに嘘だえ。」[illegible]「ハテほれ物も消すまいし、わしにもほらさぬからは、これ根ほおやぞや。おとみさん、あるならあるとかくさずにいうてたもらぬぞ。さりとはつまらぬなごい仕方おやよ[illegible]、その程にまで思つてくんなさる上からは、何でお隠し申しやせう。訳をはなし申

しいすと、長い事でござんすが、ほんに義理ではつかれもしいした。また消されぬと云ふわけは、此の私れたしが端女の時、いつそつまらぬ事許りござんして、その人のまへから二十両かりやした。それを返してしまはぬ中は、どうも消すにも消されやせぬ。あそこでそのわけを話したくても、みんなが聞いてゐなさるまへ。悪く思つておくんなんすな。」ト「さう云ふわけとは露知らずに、むり詰めに云ひやした。そのかね私が貸すさかいで、はやくもの消して返し、さつぱりと切れさんせ。」ト懐中より金を出し、二十両ほみへ渡す。ト「御心切は忘れやせぬ。きつと返さうと思ふ。」ト「リア金を貸した上からは、はやくものを消してたも。」ト「[illegible]」ト「御膳が出やした。おたつてまたゆつくりとお話しなんし。」ト「いま行くと云うてたも。」ト[illegible]一間のうちに、「ソレ/\あんまり暇がながい。切替しで手がたつ/\。」俄でこつて置へもつと手を入れて話すがいい。何かがきある早く来給へ。」ト「そんならで、いつでも後に又噺しやせう。」ト二階へ出る。「御前さん何うだ分つたかな。」ト「大分り/\。」ト「それでもはりもの消さねばすめぬぞ。」ト「それもわかつたて。」ト「分つた許りいつてもすまぬものだ。」ト「おとみその手をだしやいな。」ト「なんだえ馬鹿々々しい。わつちやァ知りやせぬ。」ト「それ見たか、何消すものだ。」ト云ふ故に、らいざは見せたが、色々と気をもめども見せぬ故、業を煮やして、ト「いんや消したよ。」ト「何けした。」おきやァがれ。こりやァな

かしいきつい謹だぞ。ネとふさんどうだ。消す気は更になし地の重箱だらうが」おとふはろしう〳〵知れようかと、此の事を二ん」睨し、消す〳〵振りしてらいぎをじらす。ミ「かあいゝ男の名だものを、めつたに消しちやアなりやせぬよ。」三「消されまい。尤もな事だ。併しそのやうになんぼ思つて居なさつても、此の頃露じうは在おかへつて、毎晩おとよが看病するけな。その証據には此の頃に、おまへのはうへは來めいがの。」ト聞くよりおとふはびつくりして ミ「そりやア〳〵ほんの事かえ。」三「ほんの事くらゐか。薬の世話や何かをして、毎晩夜すについて居るけな。」ミ「どうして知つてお出でなんす。それがまあほんのこつちやア。」三「ほんのこつちやとうする積りぞや。」ミ「おとよさんがさぞ嬉しうござんせうといふ事さ。」ミ、三「それを聞いちやアおとふさん、さうしておいらあれまいざえ。」三「なぜえ。」三「かくしなさんなよく知つてゐるよ。でもはや物を消すのならば、四も五もいらない露路雨がかゝるだ。らいぎさんはたださえ。思ひ切つてしまふがいいによ。」三「ほんのきさ、消したら言分はあるまいがの。」ミ「そりやア又しれたことさ。」三「どうしてあの子が消すもんかと。」ミ「一ト押して見せてくれやア。」ミ「エ、おつつ、いやさ。」よ「これを消さばとんだ事だが、らい義さんだからやア消されまいさ。」ト云ふゆゑに、らいぎはいよ〳〵腹をすゑ「これおとふ、見せてくれねばれたしかたなたちな。」ミ「エ、とう、ネつたやいやだとふに。」ひたい [illegible]

ばかりに氣せつなさに涙をこぼし、茶屋の夫婦は大いにおどろき、醫者などよんで氣つけを與へ、やうやう息を吹きかへせしは、無理無體に駕籠にのせ駿河町へ歸せしは、氣の毒ながら可笑しかりき。

第五　生きたるおとよ死んだるおとみを憐まず

露時雨おとみがかよふふみ、ものよりよければ先生より、たがひにつうろなしけるが、かの先生はまつさきより、よし原に大ながし、四五日宿へ歸らねば、かかる事とはおとみは知らず、ろじうが方へ遣る文も、先生かたにとゞこほり、ろじうがおとみへやる文も、先生への手紙かと、留守の丁稚がとゞけねば、たがひにからむいぶかしさ、惡事千里は防ぎ難く、おとみと雷義が色事と、しやくり手あれば、露時雨はせき込み、此のごろやる四五どの文も、用事あるのに返事もしれらず、不思議と思ひ居たりしが、又もや外へくされ逢ひ、人も知つたる此の露時雨が面をけがすか性惡め。さう云ふ奴とは知らずして、おとよまで切れたこと、甘誰知らぬものも無きに、人に笑はせ恥かかす、思へば憎きアノ女、何うしてくれうぞしきよたかと、兩國の松しまより、おとみを二階に呼ぶ使に、もし座敷へ出たつたら、いつた先まで聞いてこいと、せいてやる人早立ち歸へり、おとみはよ町に、客は雷義と聞くより、ろじうは心ならず、おきによ町へふみ込んで、事の實を質さんと、急いで着る京着を、二人連れで高話

下「アノおとみめは、なんとほんにほりものを消したらうかの。」ト ハテかゝァめが床を通して、雷

義とおとみを呼びやアがつて、薄暗い一間の片隅、屏風をぐつと引き廻し、物音断えてしめやかに、
丈身を消すもぐさの匂ひ、なんでもあいつはきまつたに違ひは無いが、其の罰であれがかうじて、二
階からころがり落ちた。アノざまはをかしかつたぢやなかつたか。」
トはなし聞くより露じうはせきこみ、歩むともなく銀座町、右へまはれば尾張町の、つゐ打ちやが向
うかど、お富はよ町を立ち出でしが、らいぎがつれのしやくわしを、女心にまことと心得、これ
枉思ふ心に見替へ、またもおとよに立ち帰る。露じうが悪性根あしく、顔で知らせる心のしつと、
常時申す見れどつんとして、物をも云はず行きすぐる。
「ナニ、よしレ待ちな、おとよどの」と、声かくれど、ひぞつてゐるはな聞あしらひ「ヱゝうぬ此のごろ色事が出来たとおもつて、愛憎
のつきたそのつらア、うぬなんだ。」「エヽ、こつちであいそがつきたわな。いけあつかましい。そ
れやアおつちに云ふのぢやあるまい、おとよさんとの間違へかえ。」「エヽこいつは云はせれば途法もね
いやうなアそれがおれが前でぬかされる事か。それに今聞けば、うぬはお物まで消しやアがつたな。」
ト「消すなア、どうするものだな。うそぢやアねい、これ見てくんな」ト出したる物をつきつけて見せ ことより一徹短
慮ふかく、おとみもとどりひつつかみ、氷の刃をはなし、
か小脇心ぐつとつつこむ。ト、あぐり、おとみは苦しき息をつき腹「エ、恨めしいろじうさん」さけば
此の頃お豊さんに、又たちかへる性悪の、邪魔になる故殺すのか、死ぬる命は惜しまねど、だまされ

たかが口惜しい。さう云ふ酷い心も知らず、明暮こがるゝ胸の中、先生さんの話には、俄にお前の身の上にも、金のいる事があつて、苦労さんすと聞いた故、雷義さんをだましてから、二十両かりとつた。その義理づめに文身まで、汚すもお前に心中の、心も身をも汚さねど、女の身に恥かしい恐ろしいだまし事。其の罰故に此の死にやう。主に任せた此の命、お手に掛つて死ぬ身は嬉しいと云ひながら、一人の母の行末の頼りに思ふ其のお前が、心がかはつて、殺すとは、お前は鬼か露時雨さん。唯恨めしいはお豊さん、心に懸るは一人の母上、私が死んだその跡で、誰を力に憂き月日、泣き死にに死になんす、その介抱の死水を、とるこの私が先だつて、歎きをかける不孝の罪、許させたまへ母上様。」と、南無阿彌陀佛も四苦八苦、始中終を聞いた露時雨は驚き、「さうとは知らず早まつたか。口惜しや残念や。人のしやくりと間違ひとで、無慙にそなたを刺し殺し、何面目に永らへよう。アレ町内は十重二十重、遁れ難なき此の場のしぎ、死出三途をもともなはん。」と、お富をつらぬく刃にて、腹十文字にかき切つて、互にひしと抱き合ふ。お富はにつこと打笑ふ、顔も蕾の花の色、二人の春もまたずして、散りて空しく成りにけり。おとよはかくと聞くよりも、前後正體なかりしが、やう〳〵と心付き、「二世まで誓ふ戀中を、寐取りしのみか心中とは、皆お富めがなす仕業、口をしや怨めしや。」と、伏し沈みたるやまふの牀。おとみが母は悲歎の涙、氣もさかのぼつて狂亂し、小石を拾うて袂にあつ

め、相引橋よりまつさかしまに、底の藻屑と成りにけり。お坂はしんみの兄弟に、別れしよりもなほ悲しく、おとみが死骸を葬りて、涙のしるし七卒堵婆、七日々々の訪ひ弔ひも、こゝに一ッの怪談あり。時丑三の頃ほひに、夜な〳〵もゆるおとみが墓原、陰火の中にわたる泣聲。衆僧これをしづめんと、あらゆる法を修しけれど、更に此の事やまざりし。此の寺の境内に、世を遁れ住む浪人ありしが、かの泣聲のいぶかしく、仔細ぞあらんとうかゞへば、風翻々もの凄く、めざすも知らぬ眞の闇、手毬ほどなる一ッの丸き火、橘町の空より飛び來りて、おとみが塚に落ちると見えしが、陰火たちまちもえあがる。中におとみが其の姿、かげの如くにあらはれて、さも切々たる聲音にて「あら恐ろしのおとふさん、許し給へ許して。」と、をめき苦しみ泣き叫ぶ。浪人とくと見すまして、來國光を引ッこぬき、眞向にさしかざして、おとみをなやます心ン火の玉を、まつ二ッにきりくだけば、左右へはつとぞ消えにけり。蒼き炎ももえやみて、おとみと見えし六角の、一ト木の卒堵婆と成りにけり。怪力亂神はかたらぬと、浪人深くこれを隱し、かつて此のこたせざりしとや。此の夜はおとよもろとも取別けて看病はげしく見えけるが、もだえ勞れし苦惱のひまか、正體も無く打伏しぬ。ともに勞れし看病の人も居眠る丑の刻、草木もしづむ折からに、おとよがわつと叫びし一ト聲、皆々驚き目をさます。心ならずも陰魄は、「コレおとよ、ようなされてか、氣をつきやいの」とゆりおこせど、何の答へもあらいぶかし

ば、いだき起せば息たえて、氷の如く冷え渡る。母はおとよが耳に口、「おとよいイノ。」と呼びいくれど、遙かに隔つ娑婆冥途、二十の坂もまだこえで、無常の秋の夕しぐれ、知るも知らぬも聞き傳へ、しほらぬ袖ぞなかりける。されどおとよが一念の瞋火となつて、おとみが墓を悩ませし其の證據は、彼の浪人の一刀に、件の瞋火を切りける時に、アット一聲叫びしが、そのまゝおとよが息絶えしも、不思議の中の不思議と云ふべし。もとより死したる執念の、生きたる人を悩ませし、類は古今に多けれど、生きたる人の一念の、死したる人をなやませし、前代未聞のありさまを、春の眠りに夢みければ、その有増を記し侍る。

安永六ッの春めでたき月

妓者呼子鳥 終

美地の蠣殻序

深川の遊びは絶えずして、而ももとの肴にあらず。四ッ目きの稲荷木は、唐書の足を早め、八幡のおやん／＼に、伊息様の錦に應へ、きぬ／＼をなしえぬ款は、通しに取りし色客に通す。鎮に富し闘の繁栄は、参詣を知らずして、永代寺の門前に群す。委しくは辰巳を見て、東から通に成らんと肝膽を砕いて、見徳の枕に五十番の蓮花を囲ふも、遊女の元丁にほしく、其の臨書は小さく見ゆれど、遊石なんぞ大海の心を知らんとは古言に聞くこそつけたり。移る時は四條半に奉れをさらして、白魚も中落を撰び、見通しに寄る時すれば、昔と背越を厭はず、古けれど中富が道成寺には、七人の風流を思ひ、佃の世の気遇には、小人島の桐状を真似しむも、みな買色の道ならずや。千住を以てする事に、由緒を以て盆の甲子ならんとする事なく、[illegible]一つかふには、雌どんの[illegible]を、車輪まで生かすなど、此の冊子を見て後は、はれやれもさすらふもです、しやれて歸まる、美地の蠣殻と題する而已。

蓬莱山人歸橋述

安永八ッのとしたつあした　恵方に向ひて

美地の蜩殻

蓬萊山人歸橋

武藏國の吉原と、下總に有る深川の、あひにかゝりし兩國橋のほとりに、天馬といへる宗匠あり。[illegible]、ト云ふこんの井つゝ、うきにひとしく並び、左は橘の系譜前齒の如く軒をつらね、その中に挾まれてゐる、門は冠木門と勝手を兼ね、庭には植木をうゑ込ませ、四季をり〳〵の眺をつけ、獨身にて住み給ひ、片付けて居る門口から、新傘、鶯の羽八丈の羽織に、青茶返しの小紋の上着、[illegible]の下帯に、[illegible]、新「[illegible]これは先生御くらう、きのふも月次の御會に參りやせうと思ひやしたが、内がちと忙しくてまゐられやしなんだ。在天貫文のひらきは誰が勝ちやしたネ」しつかりといふ所をして置きやしたが。」天馬「[illegible]この頃の知[illegible]な下手に[illegible]。[illegible]は不運で勝ちもしやせん。在天は[illegible]なにかと[illegible]御句はないどい所でござりやした。」新傘「なンといふ句がまゐりやした。」天馬「懷紙をお目にかけやせう。」トやき杉の机の上から出す。はやらぬと 新傘「天馬さん、モウ宗匠の職もあいく〳〵ねえ[illegible]一番に[illegible]だから[illegible]のやす」[illegible]何で有らう」ト思く「成程おめの[illegible]さん[illegible]

くいふね[illegible]、たへの給羽織に、みぢんじまの七子の上著に、しのぶずりの下著、なり、[illegible]しのかつこ、[illegible]なから[illegible]り、ン羽とふところ。[illegible]「天窓うちにか[illegible]」新傘「是れは雨先おうらしい。その後はお目にかゝりやせん。」

琴孝は、丝色かへしの小紋のはおりに、くろはぶたへの上著、くろ手八丈の下著、じゆばんはならみしぼりの[illegible]、[illegible]前にお[illegible]紋[illegible]。琴孝「三寸屋のまへで、足袋のこはぜが[illegible]けたから、直して居たら、親公が来たから、つれだつて這入つたのさ。定會にも出ようと思つたが、まつけエされねえ用は出来るし、[illegible]はせず、昼時分から夢を見たのさ、在天は外でも有るめえ、むすこだらうの[illegible]。[illegible]例の、[illegible]江さん入句で、江の島も跡な出す氣の汐干潟、といふ何か設けたの[illegible]、俳諧もてうよくたうしく案じねエければ、いけねエのさと、わるくは云ふもんの、汐干と三月の二の[illegible]かはりな、よく引きすりこんで案じたねえの。」[illegible]「[illegible]わつちが句はどうだなう。」

新傘「おまへのは、御成めへの見せものを見るやうにはかれやしたつ。」[illegible]「時に新[illegible]、てめへの晴へ掛けものが有るによ。」ト云ひながら、金小吉の表におきざらさのらこの付いた、四文銭と二朱銀をわけ／＼、文を出し、「きのふ爰へ来るはずで出たが、ちつとしやくりが有つて、枡屋へ行つたが、ぬしの事ばかりいつて、おきくが此のふみをよこしたヨ。」新傘「おほかたこの文も、紙くずの中からひき出して、敷いて寝て伸びたのでござりやせう。」

琴高「なンざいきな事はなかつたか。ひまなら一トくさり話しねえ。」袖鶴「用もねえから九十五文込、百といふいきまでも[illegible]さうか。」ト いひながら、寄セ切レのたばこ入を[illegible]出し、[illegible]「まあ聞きねえ。見通しへ上つた所

が、廓並の客が帰ッたと見えて、火も無い火鉢を置いたから、足でよせるとつて、額をやぶつたのさ。それで業がわいた所へ、お久が来ていふにやア「あの子はござりやせん」と云ふから「誰にもならねえ、一寸借りてこいよ」と云ッたら「江戸へいきなせいした」といつて、呼ばせねえのさ。そんなら藝者を貰ッて帰らうといへば「誰ぞお呼びなせえし」の「何」のといふから、俺も中勘と云ふ悪で、お峰を呼びにやつてくれろといへば「お前もすきな事を言ひなさる」と、あれ程見いれてるさんを呼せたがる、こうしてお峰さんを呼ばれるもんだ」見苦しく土間では、きやと云つて騒ぐ声の音を聞いてゐたら、馬さんを知らぬ者はおぞさすめへ、あの子も客なしに歯を染めた陰の子だらうぢやアとうしても御休に出るもんだらうと、大神楽の曲毬を見るやうに、上げたり下げたりするうち、俺も仕方なしに、わいつ跡内のなことやら、蝶人形がふたつといふ、仲すい顔を呼ばせたあれ、ふびでゐ新をとり散らして、帰らうと思つた所へ、江戸からお鶴がたつといふから、また落着いて居たが、あんまり寂しいによつて、家に誰か引き込んだ、その跡へ出る顔もさぞやあらうと呼ばせたが、昨夜の話がたつて、一寸を押して、いけねえのさ。さうかうすれど、おてるが来ねえから、一向ぶして居ると聞ケば、お菊が云ふには「今江戸から帰んなあつたから、茶漬をくつて居なさえす。」と云つてから、鉄に通ふてしまいふには、よう御出でなされしたと、お定まりの口上で、風見の顔を見るやうに、

つくしてましで居なのらい。一ッ呑まふかいといへば、大黒屋での人だが、風にふかれしこのはでたのきことを、照らして煙草を呑むを見て、お菊も通つたきざんふの、あすに座敷を見たからのすきこらつとあいちへお出なさまし。と、煙草盆をもつて引き立てるから、よんどころなく上つたれど、仕打が氣に入らねえから、何処を見つめて、薄目のへる煙草を呑んで居れば、ちとし勘さん、おつらさこれに、おめへの仕うちを考へて居やしたが、どうかわたしにおびぶんの有るやうな顔つきだが、おめへでもまだそれがわかねえ、わたしにてえしてあやまりが有るから、それできうなせえすのだと、押つ被せたからう見れまえねえ。いふ事が有るのでもねえ、又ねえでもねえのさ。俺がだまつて居れば好きな事をいふが、そんならわつちも聞きやせう。昼おれが来て口をかけたら、無いといふから、お上でも付けて来たこたのらば、片道も遣いでくる程だつて、江戸へ行きなすつたから、あの子の内の親達でも呼ぐといふによつて、こけなあそびで待つて居た。それになんだ、大黒屋で呑んで、風に酔つたの、のぼせたのと、お菊がやつた盃なぞは、綿でこせへた兎では有るめえし、はねる事はねえもんだ。大きうらしい。江戸で呑んだ小半が、茶わんの中の針を磁石で廻すやうに、付いて爰まで来はしめえ。あんな杯に一つや二つぞく呑んだつて、いきつきさうな顔つきかえ。かぎやかなんぞの横座敷で、店のやつらの帳面でも枕の下に置いたらう。よしにしねえナ。おめへのやうにくつせんべいといふ心だ

やア、引ケねえによ。顔のやらうは、面が白くつてもやはた果だよ。大それた輌で、長屋までに、夜遊を仕まつた女郎衆が、先を引く/\、夫婦は鼈甲のかすがへるもんだ。中には引かえも有しうが、まだ抜けきるりの顔にあふつく顔に、情々の付かねえのだ。さういふ奴は見世先の梁に、びら/\張つて有る、絵にでもならねえよしねえなアと、上げて云つたら、お照も悄く泣くふりをし、去まつて居たが、口舌の古傷が開たさうで、ごたつきもする所を聞きやしたが、此頃おめへの云ひやうでは、喧もつともでもござえせうが、わつちがいふ事をも聞いておくんなせえし。おめへさんが昼間でなさるとしさは今晩さやれた。また江戸へ行つたのは、ほんのでんたうさまをか拾てえ、ほんでおざえすう。おがうえの箸迄しゆみ居でやすつたも知つて居やすが、そのかへに、お時さんを呼んでくれねえと、お気さんにたぎ馴みなせえしたまへ、あの子も此の主達は、一といつてニとねえ器量で、その上に上手な子ではおるし、丈おめへのお稽古で、諸何くもおぜえさうだ、わつちが様なにかねえ女郎は、どうしてお気にいるもんだ、けれど、もしえ、そこには気楽のならねえ、三ッ股で詳知られえものとねえ観嫉さんたが、お耳の下つ事二年は、仕まつてくんなさつて、八ッ幡さんもあんまりだ、野暮と思ひなさいすめえ、わつちがあれしくましたすがい、質に腹くも楽でさるやうに、お心安いて云ひやすが、無心もつひにこいやとはいつてねえ、いつも/\仕方がいやなら、今日でもあすでも、い

いやうに渡りを付けたそのあとで、お時さんでもどの子でも、茶やでも出しもしやせうに、かつかうも悪う御ざえせう。先も酒を呑ませかは、此の事を一ト通りいはうと思つて、あゝしたのさ」と、十九女見世の云方をするやうに、好きなせりふをいふならの、おれもまた切間つた幕さ。」十「それもら方はどう付イたの」十「もう今日切りと思つての、コレさうじふことなら、江戸から歸ッて直に来さうなもんだ。茶イはなくふの、茶がまなくふのとじらして置いて、また大こくやも町内で、目を利くやうでもねえ。酒ばかり出す気のきかずに」と、跡を残していらぬ舟宿の世話までやいたのさ。吾「よつぽどはなしの口ぶりでは、深川は上手に成つたが、またゝゝそんなことでは喰へねえよ。はじめは大分通のやうだが、紙びなの古いやうに、先からそんなに上げたとつて、舟宿の世話までする事はねえ。これ程茶ばかりおあやしかて、手めへじかく云つたがいい。あんまりうぬぼれたせりふだぞおれならさういふ所でねえ。ちよつとつまんで噺さう。先づかうさ。ちつといんきん過ぎるかしれないが是れお照さん、成程わつちがおときを呼ばうといつたは、情のねえやうだがよく聞きねえ。命から二番とドらぬ金を出してくるものを、其のくれるな我がまゝはいふめえものでもねえ。又お時が出たとつて、ふりけへさうな器かえ。おめへのやうな一ツ本ン道といふ女郎じやに、おいらがやうな計りといふ客が、どうしておく筈も立ッもんだ、よくつまつても見ねえ。茶づるとつてあれほど手間が掛る物

かこわつちらよりは曹のいい、引ケる客衆が晝ッから来て、待つて居るのは知れたこつた。その譯をも一ト通り通して行ケば歸りもせうに、女までがぐるになつて、貧にこそ遊べ、一時や二タ時遅く来たとつて、亭主を呼べの、かゝしを呼べのといふやうな、山王でもねえのさ。かういつちやア大そうらしいが、上総での初勘定に、何國の女郎がいくつ賣つたの、何屋のかゝへがお着物の一チ番だとつたのと、手習の師匠さまより先へ知ると、とてもう數ほを蒔かうなら、通の事では聞きいいが、色男のうぬぼれは、御氣には障らうが御免だ。權藤の霜を最う些とふめば、悪じやれの里言は今の間々々。」藤「男分のいふのは、いく〳〵いい所だが、そのやうにもいはれんのさ。かんばんがいいと、すか兩公。」君「御先の御遊所も、きつい所で御座のやすが、なる程先の面が悪いと、かうみがなくて遊びよう御座りやす。その御座にこのふみのわけは。」喜「それをよこしたは見通しさ。彼のおれに逢つていふには、今をとつひ御贔屓さんが来なすつたが、わつちもちやうど變のうちへ出て居やしたが、とうもお客が歸られえから、この譯を話して御歸し申しやした。其の後は腹を立てなすつたか、御出でなさいませんが、どうぞ御連れ申して来てくんなせえし。」と、俺に手を合はせて頼んでよこした。あれ程迄しけはめて貰ふものを、最うちつと買つてやればいいに。」君「さういふ事なら今から行つて見やせう、お前も御出でなせえしな。」喜「俺もちつとは當もあるから、行つてもそんおやねえのさ。」

「一体當所が、お照さんを買ひなかい。」「あ参りやせう、天宗も行きやんした、行きねえな。」「私も行きてえが、今夜は郎黨を取るに來るはずだから、行きにくい。」「櫻主たといへばいいわな。大名か町人か。」「何樣御中よ。」「やしきなら見にもなるめえ。今夜はかの百五十取らすに行きねえな。」「夢谷も行くだらうの。」「おれつちは勤番だぞ。能くとおれのとり持ちに行くやうなもんだ。」「おまへのはかうした遊びはきうだらう。」「表へ上つてみしとわつちと、女郎を買ひこなして見ようではねえか。」「聞きやうと天宗には、なんでも乘切りといふ子を買はせるが、どうだらう。」「是れはなるほど面白からう。みんなもそれにしねえな。」「そんならわたしもさうしやせう。舟宿は何所がよう御座りやせうねえ。」「やつぱり其處の二見屋が能からう。」ト四人たち、支度をして、ここを[illegible]たの、舟宿へ連立つて行く「かみさん、一艘こしらへてくんねえ。」「ハイ、庄八どん早くこしらへてくんせえ。何所でここのやす場かえ。」「何處であぶら場でここ」ト四人は河岸へ行き、船頭は[illegible]帯に着物を一つくくり下つてくる「降りさうだによ。苫をもつて行かねえか。」「西だから降りさうもねえ。サア御召しなさりやせ。」「八どん」四人は舟にのる「ハイさやうなら、御機嫌よう。」ト舟を漕ぎ出す。段々舟を出て川中に成り、「なんとアノ白魚といふ物は火が好きかねえ。」「そのことで話が有るわな。いつか佃島のやけた時、白魚の上を逃げたとさ。」「そんなら、おれが居る下は、白魚が付いてあるくだらう。」「火性かえ。」「なにさ、おれ

がやけるわな。」みな〳〵、わらふ。 天馬「コウ新地も寂しくなつてはいけねえぜ。四季庵も夏のだうバだ。ナント天宗、此の頃に舟俳諧はどうだらう。」 天馬「それもようござりませうが、やつぱりおかゝゑ藝者をつれて、向島もようござりませう。」 琴羊「向うの角のすは屋もいい内だが、をしいことに二階がねえから、二十六夜も悪からう。」（我々舟はひのみの下から横川へ這入る。）「アノ辰巳に書いたかやば町から、如雷が新五左衛門をつれて、此の近邊の店おろしをしたが、よく書いたなう。大方親阿がかし藏を見せてえと云ッたも、こゝらだらう。しかし今時分、あんな不通はすくねえよ。むすこ〳〵といふやつが、引かれぬ工面をするのさ。」 祝鶴「此の乞食小屋にいい娘が有ッたが、どうしたなう。」 琴羊「ひさしく見えねえのさ。」（とはなしも過ぎに滴川り近くなる。） 舟「もしえ、何屋へ御出でなさりやす。」 天馬「何屋が能からうの。」 琴羊「わつちや何屋でもいい。新ばうが近附の所へ行かう。」 舟「近附はござりやせん。松葉やばかりは久しく參りやした。焼けた後は建ちやせん。田舎とやらへ引込んださうに御ざりやす。」 舟「どなたもおちかづきがなくば、上田屋がようござりやす。」といよ〳〵相談定まり、（はうらやがし前へつく。） 舟「汐がねえからもう先へは參りやせん。おかりやすから、こちらの舟をもやつて御出でなさりやし。申し〳〵、いよ〳〵上田屋でござりやすね。お跡からしまつて參りやす。」（四人は、つれ立ち上田屋へ行き、くゞりを明けて這入る。） 亭主「お客だよ。お常どん見通しへお連れ申しねえ。」（四人は二階へ上り、見通しへ行くと、女中煙草盆を持て行き、茶を付けながら、） つね「どなたぞお名ざしでもござりやすかえ。」

[illegible]「なにさ、だれでもいいから、中どしまを呼んでくんねえ。新公は名ざしはねえか。遠慮なしに云ツてやんねえ。天宗もだれぞ有らう。」新公「せんど堀留で見た、おかなとやらを聞いてくんねえ。おめへはどうなさりやす。」[illegible]「わたしは誰でも能うござりやす。」涙鶴「なんのこつた。宗匠のやうでも御座へ。おらの嬶のなれに名ざして遣んねえナ。おらも名ざしは有るけれど、誰が有るから見徳なしにふり出すさ。」天宗「そんならおつれとやらを聞いてくんねえ。」[illegible]「聞いて見やすよ、有るならよんで呼び申しやすよ。」おつねは裏へ聞きに行く。おとめは盃器と銚子を持つて、ねむさうな顔付で来る。[illegible]「一ツおあがりなせえまし。」[illegible]因八は女たちを聞きたく、酒もろく〳〵のまず、ま〳〵て居る所へ、お常ははしごの下よりこゑをかけ、[illegible]「ヱヽとめどん、ちよつと来ねえ。」と「はしごのだ」ゑひさな声で、[illegible]「見番へ行つて見て来たのや、あとはみんないいがの、おつれさんは丸が付イて有るよ。どうしようのにこうアノ坊主だから、いいわな。どの子でも呼びねえな。」かのけん番に丸の付いたは、江戸へ行つたか、用事にて余所へ行きたる印なるべし。[illegible]「さうし、おかなさんは御座りやすか、おつれさんはござりやせんから、お直さんにおそのさん、おかなさんにおゑんをさんを呼び申しやした。」[illegible]「誰でもいいのさ。藝者をふたくみばかり、呼びにやつてくんねえ。」[illegible]「[illegible]おりにしようかね。」[illegible]「太夫がいいわな。」おつねは呼びに行く。だん〳〵酢も廻りいとうかうするうち、女郎おかなをはじめ、古手返しの小袖に、[illegible]八丈の下着、赤合羽をみるやうな色のじゆばんに、三ツながら黒じゆすの半えり、もえぎ博多の帯、紋は五三の桐もお定まり、さしものは中ぐらゐ。おそのは八丈のかはり縞に、なんきん返しの下着二ツも、いづれもくゞめのじゆばん、半えりは前に同じ、茶地の金なしもうるに、からはなをおりし帯なり、紋鬼蔦も古いやつなり。おかなは鼠色ちりめんに、紫と白とに分けて、[illegible]の帯にまのうらへ、これは茶の小[illegible]と縞ちりめんの下着に、浅

煮ちりめんのじゆばん、半えりは前に同じ、黒びろうどに金ぎらさ縫よ、腹合はせの帯、紋は菊菱もうなれなり、
お直は香茶ちりめんに着つむぎの下着、茶色しぼりのじゆばん、半襟は前に同じ、ひわ茶しゆすの帯、紋は八重梅の
飛んで並びしも、道人への的中なり、何れもとばはよし、是れは正月の仕かけなり、秋にもなれば御新の類なり。髪
は前の方をいてふの如くにし、うしろはひのしの輪のやうに引き出し結ぶ島田なり。新傘は楽しとみるよりかけ出し
おかなと廊下にてまゝすくに是れは外のうちにて、名代に二三度もとりしゆゑ、此のうちにては、何しわいのぶえに
するやうにたのみ居る。おきんは芸者の三味せんばこ持つて通りながら、ちらりと見て行く、新傘はなに気なく居る。
きん「こつちへ御道人りなせえし。」女郎は火ばちを中におき饒舌、おかな「もし一ッおあがりなさりやし。」
と杯だいを新傘へさゝる。おかなへとも、此子はおその、此男はおなほ、天町はおきだまりの通りに酒「よう
む。その所へ芸者津摩太夫、三味せん引豊治、まわず庄蔵、三味線引利十、庄蔵、はなり同人の顔を見覚し
お出で遊ばしました。」きん「持合はせだ、一ッ上げよう。」庄蔵「是れは指上げませう。」豊治「そんなら
太夫へお相さつ。船頭は湯をしまひ来て、後、ぎん「誰だ、どうも知れねえわな。」津摩「あてゝ見ねえ柳橋だ
よ。」豊「待ちなよ、こう、ゝろ、手を離し、 [illegible]「此の金物は庄八だ。」[illegible]よしねえな。[illegible] 女房「是れ
みなさまお揃ひだ。」おきんどこへ、きついものだぜ。」ぎん「わつちらが勤めるところはどうだ。おかみ
かよ」「此のうちの定まりの[illegible]、津摩太夫を出す。豊治は[illegible]「あなたはお近付でござりましたか、お見し
申したやうで御座ります。」豊「久しい跡に、裏で近附になつたけれど、そんな所はねえ場所さ。」
[illegible]「津摩さん、一段かたんねえかな。」津摩「何にしやせうかねえ。」芸者「ほかのものはいやだ。伊太なほ
聞きてえの。」[illegible]「ハイさあ弾きねえ。」と津摩太夫は一段かたる、出し物も持つて[illegible]る おぎんは何やら女房とさゝやく
つと来ねえ」[illegible]女房はちひさな声にて、出「もしお前は、[illegible]ノ新傘さんとやらにお近附だそうだが、ど

この内で出なすつた。相見たけへのこつたから、知らせてやらねえければなりやせん。云ひねえな。」といはれておかなも、少しいやみのある顔付り、暫く考へ「なるほどアノお客にたつた一度、久しい跡に、島屋のうちで出たばかりさ。けふはアノお客ひとりではなし、つき合ひで來なすつたけれど、皆んなが初會だに、俺ばかり裏では悪いから、初會の分にしてくれろ。と、いひなすつたから、お銀どんも見た通り、噺をして居たのはね、その事を通じたのさ。それだによつて、知らせてやらあとようごぜえす。」女房「さういふ譯ならいいが、ほんにさうかえ。」と云つて考へ、ハイ下へ下りる、おかなは元の所へ居る、津摩太夫も一段かたり、庄蔵も長うたにわ色なさつかない、いろ／＼いきまもあれど、風りうの本にくはしければ、今更書くもむだなり。きん「もしおつとあちらへお出でなさえし。」と硯ぶたてうしを持ち、四人が先に立ち廊下を行く、牀は表の座敷なり。新傘琴峯観鶴と天馬とのわり牀なり。琴峯「おらが長屋は変らかの、新ばうもけふも鄰だの。」新傘「さやうさ、相かはらずお心安く。」観鶴「新公は向うだの。遠くて能いぞ。」新傘「それはなぜえ。」観鶴「ふた茶わんの唐くさを見るやうにからむから、やかましくつて寐られぬ。ノウ天宗。」天馬「あの子ばかりでもごぜえせん。おめへの鄰も、あんまり靜かでも御座りやせん。」女郎四人、一人々々の牀へはひり、いきまは一度なれど、一人々々はじめよりあらはす。その、琴峯が牀へ來て手をたゝく、しばらくしておとめきたる。「おとめどんか。おらが内への、多葉粉をとりにやつてくんねえ。ついでにの、茶も一ツよ。」あいとおとめは障子を引き立てゆく。「もしえ。小菊を二枚おくんなせえし。」琴峯「お安い御用さ。」おそのは枕をほどき、段段古い紙を取り、中からおめいからのもちをみるやうな、赤い括りし物を出し、まき直し枕の上へのせいはへる。とめ「おそのさん、明ケてもよしか。」その「明ケねえな。」おとめは

ちやわんに膳をもちそへ、たもとへおそへ、かたのみしたばこを紙に包み入れてくる、その「さあ一ツ膳お上りなせえし。」琴孝は起き、ものも云はず蓋を取る。琴孝「たんだ。」と蓋を取り平皿の「つゝ切の肴にせりか。久しいものだ。たこつた岸のおかはにごみといふ平だ。」汁のふたをとり「三味線ひきの眼をくふやうな鰹だ。てめへも一ツ杯くはねえか。」その「わつちは精進さ。」琴孝「食は。」その「たちもいさ。」琴孝「おれもおほかたくふめえと思つた。なぜ初會ではさういふの。」その「初會だの裏だのと、わけもかほちやもねえけれど、喰ひたくなければ喰ひやせん。」と話しながら、いやいや琴孝は二三杯食ふ。その「お茶につけてあげやせう。」さうかうする内食ひ仕舞ふと、「左やうならお休みなせえし。」その「もしえ、おめへに聞く事が有りやす。けふはわたしが親のねんきだがね。男と一所に寐ねえのが孝行でごぜえせうか。又お客を大事にするが孝行でごぜえせうかねえ。わつちが思ふには、一ツ所に寐ねえ方が、孝行だらうと思ひやす。」琴孝「かはつた事を聞くの。さう云ふ日なら、おいらがやうな竹光を、可愛がるが孝行さ。」その「あんまり呆れて、つひぞねた。」琴孝「何があきれる。」その「エ、もうおめへほど、しやうぶ革ならいいわな。」是れは芝居で申し上げますと、花道から出る役者は、人の悪き通り言なり、琴孝「そんな事をいつて、寐るつもりか。」その「おめへも又かはつたことを云ひなさる。寐たければ寐るわな。」琴孝「是れ気をよくして居れば、太平楽なら、うぬが親になんだ。おほかた馬糞さらひの頭取だらう。よしにしろ以二女郎八人一換二小判一兩一といふ土地に居ながら、てめへのからだを見るやうに、ねるのゆるあるのと、蕎麦がきでも拵

へはしめこし、こんだばかりに口が喰ッても、おかしやアしねえ。大きなこたくは、おきやアがれ」「三おきやアがれ」とは何の事だえ。ほうでう樣な吉原の女郎衆の詞にあると聞きやした。おめへの安くいひなさる、こんな土地にはこせえてん。もういふ勤めはするけれど、わたしが里は大名さあんまり安くしなさんな。おめへのやうな通り者は、腹元はしたにうりやァはれ、夏涼臺で見たばかりござりやあこむずになつ　「ヘイ大名とはなんの事だ」おらが國にはねえ乞食だ。様るなら廊下へ出すがれ。ト一刎さ、嫌やァしやせん」おめへを通だといふ事さ。そんなに嗅を立てなさる訳もあんまいごせんすめえ。なんぞかお氣にさはつたら、もつとは不承しなせえし。たゞ、ンのかのと云つたのは、いたしが悪うござりやした」「ヘイまた好きな事をいやァがる。わたしだの、かの何だのと、乞食の口が近所たつて、一ッ所にふんで貰ふめえ。大名とやら小名とやら、俺は蔵屋の總領だ。手前のやうな顔のいゝ、腕のいけねえ女郎は、土でもこせへた人形より、買ふといつても直はしねえ。おらはな、面はこんな不器用でも、着物の下はぜんまいだ。二本の足の爪さきから、ほンの多て、まげたはけ先まで、水道の水とにかく國か、日に一度さし引きする。今頃面を〔?〕へ擲はうが、十軒店の二階でも、給入野郎が三十八両と云ふ代り物で、てめへなんぞとくらべては、とうしみに鐵縄だ。傾城の心のしかく所と、金もちの金玉は、つくてえ物と云ふからは、おしくするも合點だが、さういふたとへの女

郎はな、ほりもいきうも細かぬいた、北国あたりの遊女のことだ。こんな所に居るならば、羽織りの丈までも長い客は、有り難いとはおもはずに、勝手なやつを引き出すが、よしにしろおきにしろ、あんまり呆れて、、、つかもねえが、火もねえから取つてこいと、一ッぷく呑まう。」藤「おかなは嫌いはいき、彼ァりか褒美か「けふはよつぽど寒いねえ。おれもうへあぬぐねえなア。それも内で寒かろう。」すこあう

「まアこれなら、一ッぬかうかねえ。」と云ひながら、羽おりと上の着物を　藤「屏風へかけへ、さんなら寝る

と肝心が悪いから、みんなが騒いで上へおそうと云つて、一升酒で下へ進ゆうかね。」藤「いいれな。肝心をこれして寝るつもりかえ」十「なんのこつた。さうきやねえが、」と云ひながらにかり、ゆう云つて顔を目をつけて、そ

うおめへは、あんまり寒しいおのひてんな呼んでてねえ。そんなわけでも有るならで、わたしが内へ呼ずでは有るし、と持つて行きやせう。」藤「おめへもそれになこのた、あのすなわつたから、しか呼びたければ呼ぶがいせ、さつきもあすこではゐ通り、きのふの部屋から文が来て、さうそうおひを呼べといふから、あすこの内ではお前も出てねえによつて、夜のうちで出てくれねえ。」とてふせうしてわるくおもふまいた。おめへさんさういふ心なら。しまおきつきおけいと廊下ではなしてかれたいを、おかくどれが見付けて、おかさんにはなしたですで、わたしやおかさんが呼び出して、「このお客に出た内へ、知らせてやるのだ」といふからのぞ、ちよくちよくいつて置いたわな。」と話して居る所へ、姿[illegible]門より出た、[illegible]して居

屋内へ、おかたを呼びしなじみの客来しわけを知らせやりし故、女は高つきにせんべいを持ち来り、障子の外から、女「おかなさん、明ケてもよしか。」といはれて、新三もおかなも返事をせずに、息をつめ、寐たふりをしてゐる。女は明けてはやり、度々おこす故よつたふりにて顔を上ゲ新三「誰だと思つたらおみねか。なんに来た。こん夜りくつを云つたつてわからねえよ。いふことが有るなら今度聞かう。しかし此の子を呼んだのは、わつちがみんな悪だ。たいそうらしい船頭までおこして、連れる事はねえ。アノ舟宿ははじめてだに。」と茶やの女のむつとするやうに、おかなを立てていふ。おかなはいろ/\といひ譯の工夫をし、物をもいはず死んだ如くになる。船頭もはじめての客故、所の茶やも大事なり、又客も大事なり、質にとられしあまい奴の如くなつて居る。おかた「なるほど、おかなさんを呼びなせえすも能うござえすが、なにも申しやすめえ。此の譯ならばこの間に付けやせう。」と障子を立てて行く跡より、おかたも立つて行く。小用所の傍にて、島屋の女とさゝやき居る。新三はあとに煙草をのみ、まてどくらせど来ぬゆゑ、高つきの煎餅を、鼠の食ふ様にして待つてゐる、暫くしておかな来る。新三「どう云つて遣んなすつた。」おかな「わつちもこのぐらゐな事は、考へて置いて出るものを。」新三「それでもあの女がいふ所は、おめへの方へあたるやうで、氣の毒だわな。」おかな「氣遣ひな事はねえ。」と云ひながらたばこをのみ、屏風を引き廻し牀の中へ這入る。「おめへの足もつべたいの。わつちが足も立つて居るからつへたいよ。聞きねえな、私が「知らせて遣るな」といつたに、内からさういつて遣つたから、こまつたが廊下へ出て、小さな聲で云ふには、「おみねどん、けふ爰の内で新造さんが、わたしを呼びなすつたから、船頭衆に島屋の内へ知らせてやつてくんねえと頼んだのに、アノ人の云ふには、どう云ふ譯か知らねえが、けふはアノ客衆も付合ひで来なすつたさうだから、知らせて遣らずとようござ

ませう。能くつもつても見ねへナ。獨りのお客で、跡の連衆も騒ぐといふもんだと留めたから、わつちがやめにした風に、船頭衆の前をいつて置いたから、今あすこで新傘さんに、なンのかのと云となすつたけれど、枕元にアノ人が居るから、だまつてゐやした。」おもいれかついでやつたりやア、お峯がいふには「ゴウキにおせわでござりやした。今度から島屋のうちへ來なさるやうに、おめへをお頼み申しやす。」とヌッて歸ッた。なんと上手なもんかえ。」新傘「成程人をかけるはきついもんだね。所の女さへそのぐらゐなもんだ。わつちらがやうな者は。」と笑ふ。此の所いろ〳〵仕うちあつて、はなしもなくしつまりしは、世話に云ふ屏風より外知る人もなし。しばらくして、たばこのみながら起きかへり、新傘「さつき琴孝がやかましく云つたを、おそのさんとやらに能くしてゐたい。」[illegible]「初手にはおそのさんもきつゝ出たけれど、茶わん鉢屋の轉んだやうに、さうぐゝしい客だから、早くそこをば勤めたのさ。またアノ子は、土橋でもよく賣つた物さ。」祝鶴は新傘がむかうなり、ねむさうなこゝろをして、祝鶴「新はう歸らうぢやアねへか。行つてもよしかね。」新傘「寂しくつてなりやせん。御用もなくばお出でなせまし。」といはれてたばこ入きせるを持ち起きてくる。兒島「おかなさん、女で女をだますのは、長局のこまよりは恐ろしいぞ。」[illegible]「まアおやかましいこつて。お氣の毒だねへ。」[illegible]「一杯お上りなせえし。」[illegible]「酒よりやアおいらがいきまを聞いてくんねへ。まアかうさ。あうお町の象にとあるからだを持つて來ていふには、「もしおめへに願ひが有る。」といふから、「何だ。」と聞かば、「お前がとんだ不通なら、どうでもつうゝつが出來るけれ

ど、屋敷の鐵棒、町の羽二重といふ仕うちの、革羽織と見たから、打明けて云ひやす。」と、俺をば番所の煤はきといふ雑物にたとへて頼むから、『なんのこった、不器用な水鐵砲を見るやうに、しびらすともいひねえな。』といつたら、『わたしが内の心安くする女郎衆が、年こ明ァでの、明日行きやすが、どうぞ逢つて來たうござりやす。それ許りならいいけれど、借りが有るから遣つて仕舞ひてえ。』と、頼むによつて、『行つてこい。』と云つたれば、今に歸りやァがらねえが、それはまだ、合點づくで遣つたと思へば氣もすむに、おのしがいざこざ、天馬がいびき、琴孝が悪じやれ、やかましくつて寐らりやァせず。」と、はなすところへ、お直はかへり、しやうじを明けてはひり、なほ「有り難うございましたねえ。」と、親仁が側へよる。傳「あつかましい、寄りやァがんな。蒲團とおればかり、野郎の根付と云つてゐるが、とんだ貧乏な道具屋でも、こんなふとんに結びじめもねえ牀を、明けずあるくも大抵ほどが有るもんだ。いま頃まで勤めれば、とやをして居る夜鷹でも、七八ぴやくに二八もくふ程かせいで來る時分だ。いけあつかましい四ッ足だぞ。」なほ「それだから、わけを頼んで行ッたに、四ッ足とはなンのこつたえ。あんまり髭がおほ過ぎやす。」傳「まだうは言を云やァがる。四ッ足は知れたこつた。うぬが牀の中を見ろ。四ッの足の跡が有る。一髭が多いこの少ないのと、意久が似面は書くめえし。わいらがやうな替玉と、口を叩くと夜が明ける。新ばうおれは歸るによ。」新ば「そんなに腹を立たずとも、一ッ上つて御出でなせえし。」かこ「お

眞さんも寄らねえな。わつちがかんをして來やせう。」とおかなはてうしを持ち下へ行く。お園も來る。琴孝はこのまわざを聞き起きにくる。 琴二「もうかへるか。おれも行かうわの。」 眞二「おめへはあしたで能うござえせう。」 園「いんにや用があるから行きやせう。」おかなはかんをして、なべ手に茶づけを手しほ皿に入れて、持つてくる。 おか「サアひとつおあがりなせえし。おふつきりではじめやせう。」と茶わん、少しづゝ、つむまねして祝禱へきす。 眞二「いいかんだぞ。」と皆々少しづゝ、各み支度をする。 琴孝「アノ宗匠はどうするの。」 眞二「置いて行つてもようござえせう。」 琴孝「それでも知らせて行かすに悪からう。」みなみな支度して、天明の床へ行く。 眞二「目をさましねえな。おめへはあした歸つても能からうぜ。」といはれ、目をさまし起きあがり、 天二「ときに醉つたぞ。それ何ごとだ。あした組あひの内に評もつが有るから、かへりやせう。コレ歸るぜ。起きねえか。」と、おみたをおこす。目をこすりながら、 天二「まだいいわな。」と云ひながらのびをしてゐて、床の物をかたづけ、是れは九の悪い客あまりは來りしもあり、「られもいいんかと、 ぞろぞろ行きやせう。」と、立つて支度をする。男、おふねは能うござります。」一同人は連れ立ちお住うちなり。女郎も起つて帯をする。 おりる。おかなは傘を出し、ぴ、ちひさな聲で話しながら、 お五「いつお出でなせえす。お縫さんの譯もあるなら、はやく來ておくんなせえし。しま屋の内の女は、なんと云つてもおめへのおこゝろ次第だがね、お頼み申しやすによ。」たなたの草履をはいて、女 「さアお近い内に」と譯の無いやうにいふは、客の歸るをうれしがる、古來よりの捨言、四人目をそろへて、ことはなり。みなみな連立ち門を出る。但し春の茶すみ男にうちを持ち先に立。 眞二「今夜のやうないまいましい晩はねえ。」 琴二「さうさなう。」この晩いせは裏やぐらかすそつぎで。」 天二「後篇にそれは。」 天二「待ちたまへ。」いかすがりやい。 おすこの耳に、かねは上野か淺

草か。

美地の蠣殼 終

芳深交話序

龍とならば雲とならんとは、さすがに若衆らしき誓の詞、驪山宮のさゞめごと、比翼連理のせりふよりは、いやらしみがなうて、去りとは好いたと、殺たむしやうに片意地學らん、衛の靈公が祕藏若しゆ、盍東野がかた饑ねんじや、我が朝には高野大師傳來の此のみち、誠に僧徒の樂しみなれやと、衆道庵の穴好和尚、毫を机上にふるつて、鬼畜人天、皆是れびらしやりとしたるき色に門戸を開し、一時專念の野郎ばうし、偈を說いて白して言ふ。

穴　好　述

安永九子の初春

芳深交話

穴好

八雲たつ出雲の神垣より、荒神様が今宵おかへりと、清らかに注連打ちはへ、尊心のふとしきたつて、燈火を照らし、仮に二丁町のわたくし座敷、御通ひに少しも違はぬ、顔見世の夜の賑やかな人気、潮の湧くが如き和泉町の辻をよし町へ、さして、宅好「さてじのつなやく、ここに旨弁ちやう、ここまでつ賑ひではござらぬか。」三「イヤ怪しからぬ結構、川合もののあなとは、某も目をまはしたし、目まひがいたしますわい。」よ「さぞ／＼。拙者ノかこの御時は、顔見世三ツ目のうちここもに、今宵見ぬでは、このけしきがござらぬ。まだ今宵もいさ過ぎかい、積らのというて、ひいき／＼の役者の進物を町中へかつのます。よやこの定七は、此方どもかさかしてはゐで有らう。」しまし、さやつも通人、大かた真道のれいと／＼待つて居るでござらう。」三「イヤ／＼定七とやら申す男は、其処で剛者でござります。」よ「ナンノ本町の菓子屋の手代でござるが、私が心安うする屋敷の碁盤川を、わしが世話で出入させましたまへどから彼の友達、容体なども若いが、当世は浮世上手、其のくさい事はおすではあるまいか、なんと

ようやうを交ぜて書かねば通用が分らぬ。慮外ながら御意見。」坊「有りがたい御しめし。」といふ内よし町のなじみの茶や。坊「日出たう、今年もかはらず来ました。」と見世へあがる、茶や女房「コレハ／＼好さま、相かはらずありがたうござります。お連さまお上り遊ばしませ。定さまも先程から。」といふうちはしごから、定七「ヤレ／＼、おはぐれ申して先刻から、待ちに待つてをりました。サア／＼まづ二階へ。」坊「さこそ／＼。イヤ心ばかり嘉例の御祝儀。」女房「有りがたうございます。」といひ、三人は二かいへ上る。若者長八「きつい御見限りさ。」坊「イヤモ恨みはもつとも。定州などと違つて、今の寺へ入院してから、旦用はしげし道は遠し。」定「イヤまうしあなたさまは。」坊「最前から、お引合はせ申さうと存じたが、途中の事ゆゑ。コリヤわしが法類なり、肉縁なり、一ツ體分身の和尚。此の間當地へ初出。頭のまるい下りでござる。」定「新子さまのお盃を、ちよつと。」坊「智辯主、おさしなさい。」長「イヤ慮外で。」定「ハテ埒も無い。是れまでは右のせりふ、是れからは雑さま。サウ出なされてはモウとんと始まりませぬ。」長「サアおひとつ。」はしごの中段から下女はつ「長八どん、綱さまは只今、瀧蔵さんは、もそつとせねば跡がきかれぬ。」と。」長「ソリヤアへんだの。」定「よし／＼、綱さまさへまめなら能いぞ。」坊「デモ貴様、久しうは遊ばれまい。」定「是れはまた、いかにわたしが店ものおやとて、サウ見くびりなされたものでもござりませぬ。今夜はおまへさまを干瓢にして、見世のしゆびは。」坊「それで安堵々々。」といふうち、見世先へ、[illegible]「おやかましう。」

と云ひすて、はしごをでわた／＼ 五「ム、久しぶりで、珍らしい蛸がとれたなう、長八どん。」 五「とれるはずさ芋のすかりだ。」 宝「きつい御さかん。」 長「マイしつくいが開いてあきれやんす。」 五「いつも／＼、口は諸いが面は美しいぞ。」 長「おきやァがれ、氣が違つたさうだ。」 五「下りさま御名は。」「富吉と申します。お頼んまうしやす。」 五「サァお杯を。」 長「一ッ上ゲやせう。ヤト、、。」 五「是れ／＼どうでござります。」 長「道々も說いた談義、何ンと聞かれた。色酒は呑まねばすまぬ。ア、埒も無い。」 芋「デモ私は無調法。」といひとなみ 五「是れは御むり。」 長「下げて上ゲやんしよ。」 芋「ム、味方見苦しい。」 五「サア御呑みな。」 芋「コリヤなんぢや、魚ではないかよ。」 五「まつ茸でござります。」 芋「カウ老眼では。イヤ此の瀧藏が跡はどうする。顏見世の夜の追ひかけ迎へ。」 五「ホンニどうする。ヤァおはつさん、瀧さん跡は。」 はつ「又今聞きにやりイした。モシエ三味せんの常藏樣が今見世へ。」 五「來て居るか、呼べ／＼。」はつ下り はつ「常藏さん。好さんが、お出でなんせよと。」 常藏「ヲヽレお久しや。好さま御機嫌よう。」 五「夏あうた儘ぢや。一ッさしましよ。」 常「定様お珍らしう。」 五「久しう承らぬ。お彈語りを。」 五「瀧さんの跡をうけましたら。」 芋「ソレ御はうび。」 五「有りがたうござります。」此の内常藏はてうしをあはせみやうがの松のけい事。 長「瀧藏さまの御出で。」 芋「ドウダ瀧ばう。」 瀧藏「是れはまたお久しぶり。」 五「きつい久そもつたい。」 長「顏見世だけさ。」 五「ム、酒くさい。そつちへよれ。」 五「好さま、わしが所の下りさん

呼んでくだんせ。」宝「マアよしにも致しやしよ。」粂「ム、久しいしれ事だ。ゆでる子も有るまいに。」好「有るとも〳〵、大こくがひり出した子貝を、ずる分御所持さ。」宝「ナニシ好さま、若衆に向つて、ひり出したとは、ちと禁句でござりますぞえ。」粂「呼びに遣る〳〵。俺が呼びにやるご坊主。」長「御二人様のお迎へ。」長「ひどいわ〳〵。いかに顔みせでも、二人ともに詰だや。それをきく事か。」長「おやまりました。」粂「好さま。アノ夜が更けてすきになつたら、かずの物みせに御出でんせや。」粂「それからすぐに、貝じやくしと願ひまする。」宝「呆れてものがいはれぬ。」長「汐時も、ちうどよし町。」好「こいつまでが同じ様に。」宝「是れはわたくしもお願ひ。おかげで私も出番このかたのはれ遊び。爰にば、おぐお致してをろより。」好「扨々是れは、酷い目に逢ふ事かな。わしはともあれ智幹和尚は、はじめての若衆遊び。」宝「ハアテあなたは、やはり爰もとでお遊び。お遊方も下りさまの事なれば、まだいとけなさま、〳〵の色子。」粂、粂「そんならわしらは、鬼色子といふのかえ。」宝「あんまり違ひは有るまいわえ。」長「イヨ丸屋さ。」宝「ア、附合ひとやらはせつないもんぢや。我が面白の人かしましやおや。」粂「どこひ〳〵。大こくにひり出させた、そのいひわけはなんと〳〵。」長「おつしやるほどおまけおまけ。」好「そんならどこへ行く。やぐらか縮つぎか、中二朱も今は無いさうだ。」長「是れは又きつい目ぜゝり。」好「せめて小花だけをかする氣だ。」宝「きようといふもんぢやえ。」好「とても行くなら、

ちつともはやく。」 「四ツ明正面へ。」 友達もとみな〳〵 「智仲、お聞きの通り、義理詰に逢うて此りした
ら、形ばかりを殘しに參る。ゆるりつとおしけり。常藏もお側に殘す。其方呼んでよからうやうに、
常ばうお頼み申す。」 「かしこまりました。」皆々二階を下りる、 「さうなら御機嫌よう。」 左衛門町を
かいにやくし屋へ 「ナイ頼んます。」 お客はお歸り 「お歸人でござりやす。」 「ム、一ト二ツ三ツ十七八。おやに
「小座かたにはまばなるまい。」 「左樣さ、六や川吉をこしらへろ。」 「アイ。ごちんなさんせ。」
上へ懸けてある客の前を 「エヽ、お背から離れいま出て來る。」 「ア、お茶を一ツ。」 「ヤ
運び、かしへ出て行く
召しやせ。」 「ムウよしかな。」と皆々さしば しへかいる 「モシ〳〵、危うござえす。」 「次第々々、好きなお手
を引きませうか。」 「どういふことさ。エヽ、こわねえけれ。」 「客だけのよし口ぎやうでは、帰りか手
を引いてやろ。」とみな〳〵ふ 「ア、また川は寒いなア。」 「八ツ時はうの時はよく出つたか。」 「立
てやしたに。」 「ドレそのたんご、こゝへよこされえ。」 「ハイ〳〵、探りながら。」 「わたしが
いたしやす。」 「エヽ、それ危い。燃えそくなつたんだ。」 「ドウトいたこいなア。ドウトよしな。これんで
はよよ口はおのかぶだ。」 「よく、竒ふらんだ。」 「何で酒くが難しさ。」 「時々の悪い顔をくだ」
女はいて御機嫌よう。」と、ふみをおし出す 「どこへやりやすね。」 「客人がたりお宮ゑの明へ」 「上橋
の川屋へ。」 「それ愛はどこだ。」 「モウ案内でござりやす。」 「暗牙と違つて、おそい事だわ。」

稲川や下女「オヽ、イ息子さん。とほうもなく寒いナウ。」妹「テもきついせつこみさ。」定「今少しく。」かれこれいふ内稲川やのさんばし 清「稲川やく。」妹「サアく、あがれ。」隣へ上り、みなく、妹「アイタく。」定「どうなされました。」妹「年たん道に木の根が一ツ有る。」しきへ来り、とうちつれざ おまつ「ようお出でなんした。おきよどんお火鉢を持つて来ねへよ。」定「ヤレ寒かつたく。」まつ「さぞお寒かつたでござィしつろ。」妹「ヤレく、ふる、上つたぞ。」まつ「綱さんきついもんだねエ。」長「まはりあしく。」清「わたくしも御同然。」皆じまひと見えこ、ふたりの間か たずつとさしきへ まき「綱さん夕はきつい,ほしやうだの。」くら「云ひ合はせてむごいしやうさ。」妹「とんだ事ツた。」定「二人ながら身をうちなんしよぞえ。おたしなみ。」くら「ソリヤマア大きなお世話。」まつ「お茶でもあがれ。」妹「おらが同行衆はどうしてくれる。」まつ「モウ今おいでなんす。」妹「イヤコレァノ長八や。廻しは。」定「まつもとや。」清「かしこまりました。」まき「おきみさまおつてさま、只今。」妹「四ツ明の只今は氣が無イす。」まき「そんな事おつせんすな。お子ぶりは受合ひさ。」くら「おきみさんが来ちやァよ。」まき「何かまふもんだ、ナウ綱さん。」綱「知れたことさ。」妹「京くだりのおつかとやらはどうだ。」まつ「エ、子さ。よく出なんす。」トはなしのうち、きみ、まつ「どなたもよう御出でなんした。」まき「綱さん此の間は。」綱「お慮外まうしやした。」きみ「お互さ。」まつ「サァお一ツ。」妹「まづ先生から。」定「まづおまへから。しからば年役。ァ、氣のどくや、お二人ながら、おれにさせるはさ

ぞなからす。色子ふたり、色男一人といふ客づらへ、老耄した辨慶といふ客から、眼をねぶつてさしてやらう。」「きつい御あやまりやうさ。」「あなたへ上ゲエしよふ。」「サアきまつた。」「さつきから鴨がべびノヽ。」「お前あけエしよふ。」「ちよあつと。」「アレサわつちやア、たゞエしねエらのを。」「恥しいもんだ、おあひ。」「おきよふごんおてうし。」「かはりめをもうお一ッ。」「エエ何のこつた。酒はかなひいきをすらア。」「鱸さまの。おまへはよふ。」「その話は、すつとおなかし。」「月が朝れたか。」「こつちら譯が有るのさ。」「有りさうなもんさ。」「かはりめを御らうじろ。」「マア是れをお吸ひなんして。」「松本屋が寂しい。こいつを一ッ。」「わつちやアねつからたべこしねえ。」「おふくろが若いからか。」「鱸アねえのさ。」「ム、おまへ、吞まなんたなう。」「よふそくしい。」「アイねしやア吞まぬかはりあびなんす。」「よしか。鱸でごぜえす。」「おまへはんに頼つたさうだ。」「久しぶりだ。」「アイたびノヽやらうにやアおことづけ。お禮もようしやせぬ。秋の開帳の時分來たまんまさ。」「ホンニそんなこつたねえ。」「病氣大分下がつたさうだの。」「よくお當てなんした。アノよふだ礼薬といふものは、せつないものでござりやすよ。」「醫者さんを替へたら、おほきくしかりやした。」「ナ療治をすると、ひるがだいなしになる。氣ながにれうぢをしろといつて、やうノヽとよくなりやした。」「れうぢを仕拔いたから、蟲の根は拔けた

ときこ」「サア杯はどうする。」「ホンニなア、サア上げましやせう。」「よつもとやさん、せんどの返事はまだとつてくれないか。」「アイナ、わつちに如才は無イがね。何をいふも、ほかかぶつて居ねエすから、まだ〳〵ひも逢ひやしたが、きつく仕にくいやうすさ。」「いかん事ッたす。」と[illegible]出るいふ内證「[illegible]お上りなんせ。」「おれは茶がらう。」「是れはしたり。ぬしやアしやうじんによ。」「何をたべる〳〵。」「爰ではおまへも。」「すつきりかまはねえ事さ。しかし一ト色はたしなんでもええのさ。」「その所が有りがたい。」「ムンにや、ありがたがるまい。けんばの割までも知つて居るばうまだ。」「すごい〳〵。」「いかう夜が更けた。」「夜は長イさ。背のよし町は忘れた。」「サアちつとお休みな。お替かへなんせ。」ト四人は立つて行く。「小べん所はどこだ。」「それおきよどん、連れ申して行かつしやい。」とぼう〳〵「おすゑさんのお牀は、爰でござりやす。」ト[illegible]んだよ上所だ。ちんまりと暖かで有らう。」「おれが牀はどこだ。」「お前さんは今のざしきさ。」「コリヤ強だ。」「コリヤ瀧さん。」「瀧はうや、後に忍ぶぞ。」「綱さんに出けるよ。」「アノ鬪市に備ふものか。おきよ、長八を呼んでくれろ。」「好さま御用は。」「勤めを遣つてくりや。」「いま定さまから。」「そんならよし〳〵。ナニ長八、明六ツでするたちよ。寐こんだら起してくれろよ。」「どうか雨氣づきやした。もし降つたらばおさるけさ。」「もつたい

ないことを。槍が降つても。」長「夫れえでは御機嫌能う、」と長八は出て行く。三「オヤ怪しからねえ。ぬしやアおしこたつてさ、もしノ\ ただまつて居なんすな。エ、つひぞねえナア。氣の知れない。」新「ム、、ム、これしまつたよ」三「ソリヤアまあ何のまねだエ。」新「これか。コリヤア座せんといふものだよ」三「馬つ、氣のつきなもんだねえ。寝る時するものかえ。」新「寝るときさせないで、いつするのだ。」三「馬鹿らしい。」新「それでも、」三「エ、おきなんせ。」新「ム、力の有る女郎だ。」三「えつおや大力さ。」新「小芝居へ出ねえか。」三「おまへ出してくれな。」新「力もおびかたかつた。」三「アノおまへの若衆に、ちよいきやんだねえ。」新「白井権八といふ人形の身だナア。」三「諸やねえ。」新「その時、に下りでないから、」としほきやんとこだ。」三「若衆買ひはマア、どう面白いねエ。」新「どう面白いとつて、おいらが喰物。」三「イエ、ソリヤ、昔のことさ。いまは入れ遣ひに。」新「うさやねえ。こりやおきさんか、お職の若衆にきついもんで、道ひかけに呼ぶさうだ。ゆうべもおくらさんと一ツに、若衆をすされたとさ。」新「若衆には何がなる。」三「うらやましいかおまへ。」新「十二で、おいらも若い時は、して来たのさ。」三「もしまアノ若い美しい坊さんは、若衆よりは何ぐらゐ有るよ。」新「下よへもはうすが好きか。」三「アイかつちも好きさ。」新「きつい茶人だ。客を茶事に置かみなさ。」三「ソレヤア七ツだ。寝なんせ。」新「七ツが人を喰やアせまいし。」三「それでもかつちや

アねむたい。」妓「ヤレじれつくな。勤めは是れぎり、おらは本ンにかたいばうずだ。氣置きなしにはしなれけしなれ。」暁告ぐる二番どりの頃床なにおとなふこぶらしも身にしむなれば、まき「お前、おらいさんを、切れて了つたといつて置いてにぶい事をいふの。」客「エ、野暮なもんだ。手前が外のもんなら、かまひは無いわさ。カノへしりが割れると、かゝさんいはなねおりだ。其のうへが神明か湯島へ左遷の身とならにやァならぬ。ソリヤァ手まへも同じ事だわさ。」まき「アノおきみさんを見ねえ。ナンノ事ッたの。すかない。どうも小意地の悪い権原だよ。さつきも座しきで、おまへの客人のまへで、厭味を云つて人をいやがらせる。どうも口まめな子だから、氣に懸るよ。」客「さういふ役者にやァ猶よくしてあやなすがかんじんだ。手まへはどうも附合のきどりが悪いによ。」まき「何悪いもんだ。アノ子もまへど、丁どかういふ世界の大色事をして、モゥすんでにくらがへといふ場を、おれとおみちさまと二人で、やう〳〵と内へ知れないやうに、働いてやつた。其の時は手を合はせてをがんで禮をいつたに、モウそりヨゥ忘れて。」客「その色客は、アノ何で有らう。富吉へ來た色二才の、新車によく似た客ぢやないか。」まき「ム、それよ。それからアノ子をも切れて、今は品川へいくさうだが、一二度付合つて見たが、いきな客よ。アノ子にやァ過ぎものだよ。」客「くはしい事を、能く掘つて御存じだな。」まき「久しいやきもちだ。なことといふとをかしな事を云ひなんす。屋敷ものかなんぞのやうに。」客「ム、ヨ手まへは通なもん

だからさうだらうが、おらァ生まれ付いた野人だから、ツイ何やかに氣が廻るのさ。今もいふ通り、此の色事が甚幸さまへ通ると、蓮座後光住まふといふ大天井だ。安くない色事だから、きめて見るのさ。有るやつだよ。物あきの早い人にやア。」ト手まへの氣に引きくらべて、よくおまへそんな事をいふの。無理けんくわをしかけて、又おらいさまへかへる氣だの。わつちだといつて、此の色事が甚幸さんへ知れると、此の土地にやア居られやせん。おまへおれをちよいと遊びにしたのに」ト一氣に引きくらべてとはわが事ッたね。ドレどうやら今になつては、甚さんに怖さが増して、無理口說に切れたいのだなア。ドレヱ怖もてを勤める根性でナ、おいらと色事はならないわ。手まへおりよナ花代なしにお買ひなさつたな。ナニさ、お前おむづかるか。泣くと人が名を立てるよ。御もつともだ〳〵いはなお前の辨口でも、此の返答にやア雪みぞれだ。さうだァレ〳〵〳〵。」と裏ざしきのめりやすにしひと夜はふけ、定が脉のまへをたゞか人是、きゑ「おつてさんか。」おつ「おきゑさん、行つてもよしかえ。」きゑ「ええの悪いのとは。」おつてさんおはひりよ。」おつ「お許しなんし。」付けに出す。きゑ「法師は何としたえ。」おつ「飛んだ固い和尚さんだねエ。いつそしやれてふざけやんすから、ほんの事かと思やア、眞になつて云ひなんすは、「おらァ附合ばかりの女郎買だ。あすは又法事が有るから、ちと寐にやア勤まらぬ。」と、わつちを嫌ひなんしてか知らぬが、きつとした堅藏さ。」きゑ「吉原へも連になつたが、やつはりさうさ。」きゑ一おつてさ

ん聞きねえ。アノおまきさんは、悵んだ子だなう。」こ「何この事か。さつき座しきで、をかしな事をおまへにぶつたが、この事か。」きん「ノきやん若衆が色事で、始終の狂言は、おれが若衆めが書いたと見えるっ。」きく「おくらさんもおくらさん、何こほ連衆の付合だといつて、アノねおまきさんばり、紺さんの一客に、甚さんの名じみだわな。いく度か紺さんを連れて來なんすたんびに、きり組んだ趣向き。おらいきんも目は付けて居るけれど、崩れるとくだけが大事、證據をつらまへるまではと、馬鹿に成つて居るのよ。」何こと思ひなる。」ふてえ子だナウ。」こ「ナ、おらがやうなおくでやうなものは、どんな色若衆でも。」こ、こは、コリヤア御邪魔いたしました。」きく「もつと話しねえ。」こ「あなたお休みなんし。」定「是れはおそうさう。」こ「ここに出て行く。」きく「リアもつと寝さんせ。」定「是れほど寝てるわな。」きん「モシエ、おまへのなじみの女郎衆が、あんな事が有つたら、おまへはマアどうしなんす。」定「イリコウ聞きなさるは、お前もする氣か。」こ「エ、すきイしない。」定「それでも、」こ「おきなんせ。」定「ふう一ツ體が、若衆を連れて女郎買といふか、さえぬやつさ。」きみ「なぜさえねエ。」定「ハテ、男さへほれる若衆を、美しい女郎との取合はせは。」きん「云ひなんすな。女郎はつかりは。」定「地と違うて、そんな若輩なことは無いといふのかえ。」き「左樣さ。」定「そんなら美しい若衆が、分限者の子で、いき人で、いき過いで、おむくで、向うから惚れられたら、どうしなんす。」きこ「ど

うしやんしよすやら。」半「それ/\、もうむかつて来た。」きく「色若衆で金もちで、つうな息子が惚れたといつたら、色事もするのさ。」半「介六といふ所を捨ててね。」きく「むつかしいことをきめなんすの。」半「色子は嫌ひ。」きく「アイ、何あんなものに。」半「そんなら少しそりといふ場。」きく「襟のくらゐ、りうといふ苦しい所を出て、痩世帯とは氣がなしこがなし。」半「地口はきつい。そんなら幾なしになると、理非なしの色男でも、髭なでの意休にするのか。」きく「ナントそれも當世ぢやアす有るまいかね。」半「やにさがりも、吸口が黒くなるにやア。」きく「信仰がうすいやうさ。」半「呼ぶうちはまんで。」きく「長嘯の時は長柄。」半「中賣のにしりをするやうな女郎だ。」きく「おまへのやうな、つうなお客に。」半「河り流れ。」きく「さぞおつらものさ。」半「ナニすなしさ。なしつくしのすいた所なし。」半「頭井なしのお前に。」半「そシ皮をば殘してくんなんせ。いかにおれがやうな情なしだといつて。」きく「羽織ぶらがくをも向けて。」半「勤めなしの一ツはい。」きく「嫌じやのさうなふうさ。」半「永代寺の鐘ごん/\。」半「ちや/\迄はう、愚僧はかへるぞ。」半「定さま、まあ開けやすぞえ。」半「合點々々。」半「若衆めらをそこねて/\。」きく「熱燗をお一ツ。」半「アヽ有り難い、あつかんすだ。」半「是、是いかにも一ツはいい。」きく「おまへりや迎れへ。」と介補さが、つと來たる。きく「お近くに。」半「中う盃をうおさくり。」ってこの間に。まだ今夜の噺は、しやれにでも書いて出しやんしよ。」きく「勝ッ手にしなんせ。」

[illegible]、[illegible]「旦那のお立ち」△「チンツ、〳〵、チヨン〳〵」東西々々、[illegible]介甚幸いさこさの段は、後篇に御覧に入れます、先ヅ今日はドン〳〵〳〵〳〵。」

芳深交話　終

喜夜來大根序

お花畠の鐵砲には、臥龍の牀の根だにひゞき、御殿山のてつきうは、戀に心をこがすとかや。朝鮮にべつかうの櫛かゞやけば、こんにやくに眞しろな顏、佛店あれば地獄有り、宮地あれば、寺門前、野でも山でも畑でも、間口のけんをけんとして、何れか色にかへざらんや。

本郷梨白散人誌

喜夜來大根

梨白山人

大根畑に豆のもやしが出來ようとは、神樂催馬樂時代のうたひ物にして、今はその豆に實がいりて、はじき豆のとんだ事〳〵。此ごろは長月十五日、けふは神田のかげ祭。ことに天氣もうるはしく、十一年ぶりにて、新たに出來たる宮居の結構に、本殿廻廊金をちりばめ、行きかふ男女袖を列ねもすそを染むる中にも遠手ぬぐひの長さ凡そ三千丈、何によつてかかくの如く角つなぎの染めたるを、高砂屋で呑んだ酒と共に、あたまの上へあげ、足は南京あやつりのごとく〳〵、ぶらり〳〵と、森山でうなぎを喰ふか、よその酒をこらうかと、昔の思案はしの出來も、大方こんな事と見えたり。程なく鐘は上野から、ヒヨヒト聲こゝ夕暮の四六時中がそのあひだに、南鐐の駒の隙過ぎし、人間わづか五十歳、三十振袖四十島田、襖ひとへを幾仕切、うヽジン〳〵、町人さんもなんもし、侍さん三ツびきさんきつかふさん、おかたづけなんと上んなヨ、アレサたこ〳〵の上と、呼ばれるおかゝる出るはひる。貴賤のへだて中長家、神田長家のそれより來る、先廻り檐、其時お宿をさがし[illegible]、[illegible]一點も此の町の軒ばの雀、

エ、いま〳〵しい、日和がよくても、夏ばつかり道がわりい。」かね「あんまり道が悪ると下駄がへるヨ。」ぎん「下駄がへつたら買つてくれるだらう。」かね「ふゝ、お前さんが買つて遣らうとつて待つて居たつけ。」ぎん「エ、何さのあいつが。」かね「ぎんさんすぐと喰ひねえよ。おめへがそんなにいつても、アノ子が持つて居る緋縮緬の手ぬぐひは、おめへに貰つたといつたよ。そしてソレ伊勢屋のはうの理くつも、アノ子はうちへかくしつけて、おめへがはたれえて遣つたおりやァねえか。」権は手をふり鼻先を目に、「コレ〳〵しづかに。」かね「ソンナ見なさえ。」権おもてから顔をさし入れ、「あのわけは。」と耳のきはへ口をよせさゝやけば、かね「ソリヤァまたさうしてやつたがいゝのさ。」こゝにて権ちひさな「コレきたなし。」かねうなづいてばかり。権はとなりをかへりみて、「おぎんばうどうだ。ねぶつたさうだぜ。」ぎん「権さん聞きねえ。今日はもう七ッだらうが、マダ口開けもしねえよ。是れぢやアあごをつるして居ねえけりやアならねえわな。」権「ざまア、たま〳〵やそんな事もいゝな。」ぎん「ほんにたま〳〵所がネ、此ごろあぶれどほし、やぶれしやうじがあきれて、上下で綴にくる。」権「おきやアがれ、今々も泊りを取つたぢやアねえか。」といふ内、四五けんとなりで、なにかさわがしくいふと、権はいう〳〵かけて行たゝみ込んでみえねゆゑ、つとめはと聞きたるを、あしふといの侍が、ひとあを置いたうへへ、ふとんたをりかへしとるのがたかにけするやうな男ぢやアねえと、むつかしくいふ。権「ソリヤ今ここ間違へといふもあるもんだ。買逃げなんぞをしなアんねえは、いはずと見えてゐることつた。高が女だア、とるにたらねえ、うちやつて歸んなん〳〵。」などとすゞろに、二階つてある故、権も共々だまし、二人して連れ行く。ぎん「おらが所へは、アンナのさへ来ねえ。おかね

きんけふはとんだかてえナア」 たま「ホンニまだ明かねえの」 ぎんはきせるで畳を「一夜みせになるぞ」しやうを付けろよウ」と、押したりしてすわる。ふつつけ無性なをさき、かねは昼のつかれにきせ、きりを吹いたり、戸を「わつちやァ三人上げたが、おめへはきついもんだの」 アノ田町の庄さんも、モウくるじぶんだがナウ」 き「きのふも来るかとおもつたが来ずさ」 きつき源さんが来たから、女を届けてやつたが、晩あたり来ればいい」 ニ「あゝいふ客ア随分能くして置きねえ。ソレ何ぞといふ時にやァ用に立つから」 ぎ「ァイそのやァわつちもじよさいねえ」 ニ「マノせんどお前が引ッ込んで居た時来たの、サウいつたよ。この暮あたりやァ紬を留めるだらうが、その時分にくめんして、どうぞしてやりてえもんだ」といつたから、おれもの「アノ子にはおめへもしつてる通り、なじみも有るけれど、どれとつて力になるのもねえ。本郷の嬢さんも切れてしまふし、吉さんは此中来たが、内を出されて谷中のをばさんの方へ行つて居る。しみて来るのァおめへばかりだから、アノ子もお前をばあしくは思ひやしねえから、目をかけてやつてくんなさえ」といつてやつたよ」を出して きんけふゆれ 三「おらが所の是れァ、どけへいつたらうナア」 三「やつぱり近所に居るのさ。いい年をして馬鹿なをしいなう。五郎吉もいいもの好きだ。かゝさんの様だらう」 三「アノすきつい事をしたつ、ひつもたんすらへんなからつほうだとさ」を出し、とおやゆび「是れはいつさくわしかろ」三「その筈さ」を消し とおやゆび「是れが来てから日なしや何やかも切りけへたよ、借金もよつぽどへらし、

質とおほかたうけたアさ。サウさせて置いてから、ア、いふこつた物を二度とはなしてある所へ、かすり目當をかけ、くろこやつ帯をしめ、當の字の半分有る手拭をかぶり　ま「おかみさん、なんしいの。」　長「長さん、おかねさんがまちかねて居るに、なぜ來なさんねえ。」　か「イヤサけしからねえ。道で逢つたらうとおもつたに、能くおぼえて居て來たの。今日は何ことおもつて來た。」　長「何こともおもはねえ。逢はうとおもつて。」　か「だれに。」　長「誰でに。」　か「エ、そんなにはぐらかす事はねえ。」　長「マア久しぶりだから、おかねさんの所へへつてから、日否をばいひねえよ。」行（長介は笑ひながら、おかねは勝手へ茶をとりに行く。おかねは間を立ててふすまごしに、）「なぜ久しくお出でなんせん。おかねさんが文を上げたへ行けかねえ。」　長「此度は文を届けてくれたけれど、此のごろァまけ續けで、とんだくめんが悪かつたから、夫れで久しく來なんだのさ。」　長「どうだえ、んな變な事もねえかえ。」　か「アイ」と小つぼを出して、十日程あとに是れがに、内にいつでもゐやす。」　長「ソリヤアへんちきだ。誰と逢けた。どこに居る。知れたかえ。」　か「イイヤ居所ァ知れねえが、相人はしれてゐるのさ。ハア聞らねえふりで居なんし。」　長「ム、是れアノせんどやくそくした物ァ、もつと先へよらねえぢやア出來ねえぜ。」　か「何かえ、ゆもじの事かえ。」　長「このごろァとんだくめんが悪くつて、夕べも一分ばかりとられたから、あんまり氣がくさつていめえましいから、ちつと氣をぬかうと思つて來た。」　かね「けふは晩まで居るかえ。」　長「ム、居る氣だけれど、今はなす通りだから、こ

いごろに来てゐるのと居よう。」とはなしてゐると戸をとん／＼たゝく ぎ「誰だ。」ぎんはのぞいて見、清「清次さんだヨ。」ぎ「廻つて来な。今明くよ。」清「サイ。」ぎ「歸んなんなよ。」清「立けへる／＼。」ぎ「かつてにしやァがれ。」清「清次よ。」ぎ「地まはりさ。」清「地廻りやァへのお高え。」ぎ「うそアねえ。」清「箒屋かどろばうか古い奴よ。」清「モシ／＼侍さん、コレ侍さん。」と呼ばれて立もどる出、門すあたりに御國侍と見え、青茶ばかりに紋所のわかる人体、お定まりの淺黄うらに、かはらけ色のはおりを着、もゝ引をはく 侍「よりますべいかな。」清「おまへんなんし。サテおめへはもみぢをもつて居なんすね。どつから取つて来なすつた。」侍「今日はハァひばんですから、こつ徒里すへいぎ申した。」清「ナニ、こうそやァはつはりおやァあんめえ。もみぢ山とやらだらう。」侍「アニハレやくてもねえ、きよごんのテいつてけえもねえこんだ。大せえもんですよ。」だ笑ひ、マアお上りなんし。」長火に「おだん坊が紅葉山もいい所だが、大せえもんは大だれえだ。」侍「いつ／＼のおにやァはうぐをとくらいへでもして、渡つて来たもんだから、もつたア世間も見たけれど、アノ子なんざア遠國から、十一のとし賣られて来て。」侍「きつい新内ぶしだ。」ぎ「よくいふよ／＼な事を。キンニ爰よりほか見ねえから、アンナ事はじやうおうさ。」侍「いけりやァそのはずだが、ミケどしつかまつて、大せえもんはどうもいへねえ。」かたはらに突く なと云つておかはれからふおれも、通とやらおやアねエけれど。」ぎ「きついおことわりだ。」侍「イニニャふうおやァへ、出ねえおやァ、てめへなんぞのめへおやァ、あつたに口がきかれねえヨ。」ぎ「ヲ

レあたまがつけへらァ。そんなに上ゲてくんなさんな。」長「上げるのおろすのと、四ッ谷とんびか、おいら凧ぢやァあんめえし、マアおらァ隨分大ごうだけれど。」と右鬢へ指さし、小ごゑになつて、「あんなこばおやす、髭などの大通先生だ。ここ大通の上遣する世界だが、眞の大通は少ねえよ。マア吉原へ行く客なら、茶屋に宿はもちろん、出入のあんまや商人にまで知られ、屋敷から何からよくとり廻し、女郎の買ひこなしもいやみが無く、高くもとまらず下卑もなく、さうおうに附ケ屆けにも氣を付けてやるべきさ。のはきつはりとやめ、といつてこけに遣ふといふでも無えが、マア大通だ。もつとも吉原ばかりでもねえ。その土地々々で、ちつとづゝのかはり目は有らうが、大てい氣どりは同じ事だが、引ッくゝつて見た所が、我が逢ふ女郎を初め、遣人禿若えもの幇頭末社茶や舟宿と、みなそれ／＼の情をしるがかんじんだが、茲の修行がどうもならねえと見えた。どの通人もくせが有つて、大方ァりきみが有るよ。マア吉原の引つばりへでも行くやつは、根津や音羽は、夷狄の地とやら何ンとやら。いつて、足ぶみもしねえやうな事をぬかしながら、かげぢやァこそ／＼茲へも上り、また能くいふやつだが、「茲らで節句でも仕まふか、居つゞけでもすると、馬鹿々々しい。同じ金を遣ふなら、茲らへ二度も三度もくるを、吉原か深川で一度に遣つたがいい。あんな所で遣ふは、きついむだだ。」といふけれど、是れが第一不通といふもんだ。ソレ今いふ人の情をしらねえからの事だ。誰もそのくれゑな事はしつて

ある事だから、物好きでするこたもなし、名馴んだ上ぢやア、せつ何の一ツばゝれゑは、義理にもしまつて
通らにやァならねえもんだ。吉原からはじめ夜たかまで、それ相應の情で無くッちやア、名じんだ甲
斐も何ンにもねえ。また算用して掛る氣なら、あすけへ一度爰へ一度と、ひろひ買ひにして居るがい
い。それぢやァおらがやうな折介でも、月に一度ばゝれゑは、引つぱりばゝれゑは買へるけれど、名馴で
あはうと思ふにやア、尻の納かねえはしれて居る。身分相應な土地で遊んでも、名馴が重なりやア深
入はするもんだものを、誰が何といつたとつて、初めの算用通りにやァいくもんぢやァねえ。そして
また女郎だつても、其の土地々々の風俗の違ふ計り、勤めをして通る所は二ツはねえ。ええ場所に居
ても、むねのわるい女郎も有りやア、いやしい土地でも、氣の高え女郎も有る。ソレ高尾が捕のお職
を見や、今の世までも名は朽ちねえ。また通人も其の通り、美衣飾り作つても、無情の多い世間だか
ら、金で面アはつて、通だと思つて居りやア、襟もとといふ所で、通人とそやし立てる女郎とが、に
なつたらばうだらう。おらァ錢アもたねえが、通の極りァ聞いて居る。ゆかしこ手前になじんで來る
客、どういふ氣どりで來るか知りやァしめえ。手めへの心もこつちで推量したばかりで、どうだとい
ふ事を聞きもしねえからいひもせず、互に明かしれねえけれど、然かほんの誠といふ場だ。まことと
いやア、一ツ性でひとける許りたいふと、かたく心得た手合に、けいせいにまことなしなんぞといつ

てゐるから、しつぽくそばの四かくな玉子は、かんぺうの氣で喰らふだらう。マア手めへなんざア、賣られる身だから買はれてゐる。買ひにくるから逢つて歸すといふもんで、どんな色男だらうが大通だらうが、男にやアあきはてゝ居るものを、めつたにほれて堪るものか。ほれねえからア誠をつくさう筈がねえが、そん中にも、色きやくの間夫のといふは格別で、氣のねえ勤めの其の中でも、元が女と男だから、自然と和合する所で、器量にほれるか氣にほれるか、千萬人の其の中で、タッタ一人の男だから、是れがほんの誠だが、ソリヤアもう及びもねえ。犬の齒に蚤一の富だから、ほれられようと思ふが不通、玆の情をくみわけりやア、手前のやうにしらばけに上手もつかはず、今云つた買ひにくるから逢つてけへすといふ所で、よくもせずあしくもせず、有るべき通りの候べく候が、けつく誠でおもしれえと、そこにほれて來はじくるが、女房にせうといふ氣もなければ、ならうといふ氣は猶あるめえ。そつちやア勤め、こつちやアほれてくるもんだから、玆へ出て勤めてゐる內は、隨分と來る氣だが、併し來やア來ても、茶がまにしたら直がせうが、金氣のねえやらうだから、何このたしにも成りもせず。來ずともいいと思ふなら、つき出されるまでの事、百か二百で切りに上るも、足しになるめえが、わきへ上らずに玆へ許り來るといふは、こけなやうだがこつちの誠だ。それだによつて終に一度、立引とかいふ所をはたらかせて、勤めを下ツた事はねえ。もちろん引キずなんざア、俺が

宗旨おやァ用るねえ。手めへもふうがな氣どりだが、おれも又あぢに繪をすけたやらうだよ。ーなも
つともわつちらだつて、かゝいふいやしい土地にこそすめ、轉ぶのなんのといふ日かけの身おやァな
し。しやうべえがしやうべえだから、客によつて上手を遣ふ事も有るけれど、コンナ勤めをするさへ
有るに、人をだます許り能でもねえから、生まれの儘の氣どりで、あんまり上手は遣ひやしねえ。ソ
レで嫌なら來ねえがいい。又來る者はくるから、とんちやくはねえのさ。」與一ナントまあ、かう苦し
い勤めをして居る者に、立引させて上つたの、無心をいつて引きすなんざア、情なしのてつぺんだ、
おはいさうに勤めをする身の上は、どういふもんだと思ひやつて見た時やァ、百の所へ二百、四百の
所へは南鐐の一片もやるやうにしてえもんだが、コレも今風の通人は、ごうけな金の遣ひやうだ。倹し
て遣ふこと笑ふけれど、小粒に猪でもはやすやら、南鐐に手足が付くかしらねえが、生かして遣ふと
躧屋をいふが、向うへ廻つて見たがいい。こすくするより、大やうなが能ささうなもんだ。二朱の所
へは一分遣つて、おとなしく仕て居りやァ、ハテむかうもそれだけの情であつかふもんだから、同じ
遣ひもおもしれえ道理だ。それだによつてふられる客は、大かたァ大通といふ氣どりの、うぬぼれの
やからが多いヨ。ソレシテまあ女郎にだまされめえとするが、悪い氣どりだ。だますがしやうべえだと
いふ所へ、目をつけたがええ。だますと見たら、それなりにだまされたふりで、何ンぞむしんでもい

ふなら、ハテ身上りをして色客を呼ぶが、間夫へ見繼がうと何ンにしようとしらねふりで、心能く遣つたがええ。とかく手めへのきみをぬいて、向うをおだてゝやるはうが、通で有りさうなもんぢやァねえか。客が有つての女郎だから、成りせえせうなら、いちや付かずに金をば遣ひてえもんだが、今風の通人は、だふされめえが第一で、義理でしばつてふむさんだん許りするから、向うもつらづくで、ふまれるたァ思ひながらも、ふまれちァ居るけれど、心ぢやァあいさうが盡きねえでどうする物ンだ。そこへ氣の付かねえのは、通のひつたくそでもねえとおらァ思ふが、長え羽おりにほん多で無くちやァ、大通でねえといふ世界だから、をり介といふ身の上ぢやァ、所せんはじまらねえから、ちひさく成ツて、かたくなつて居ねえけりやァならねえ。」ムヽ「ホンニおめへのいふ所が、ほんのこつたよ。むかしの噺を聞くに、吉原なんぞも、女郎も客もいきぢをみけえたて、名をのこしたがたんと有るが、今ぢやァ客も徳用といふ氣どりが多くなつて、いきぢを立てると物が入ると、ちよく／＼らないつてぶんながし、ホンノ見えばうばつかりで、ほんとの通は少ねえ筈さ。まして爰らへ来る客は、其のうへに人が荒えから、あつけへにくいとつちやァねえ。何ごぞといふと切り込まうの、ふみこはさうのといつて。」と話す聲はしばらく音もなし。しばらく有つて侍「コリヤァハァはつにけんざんのをして、いかくお世話になり申した。是れからァ又をり／＼来ますべいから、目さァかけてくれますべいかな。」ぎ「ちよつちよ

と御出でなさえし。」といふ内帯をしめる。ぎんは　侍「サアおさらば。」　ぎ「お近え内にエ。」右隣おくらが所は先よりきやく〳〵の有
るやうすなれども、はなし声も聞えず。「おくらさん、でえぶしつかだネ。」　くら「定さんは酔つたとつて、寐てるるからさ。」
長「定とは。」　お「ソレいつかおめへと連立つて来たのヨ。今日は一日仕まつて居るわな。」　長「おれと一
ツ所に来た。ム、そんなら大工か。アノ鼻のねえ。」　お「そんな事をいつて、おくらさんに云ッ付ける
ぞえ。」　長「いいわさ。定かはなのねえは、千日中通つて居る。」定は間のから紙を明け、　折「折介め。あひく云ッ
たナ。聞えて居ろ。」　長「定ぼう聞えたか。」　定「鼻は無うつても、耳は聞えるわイ。」　長「おくらさんも
何との事ッた。寐て居るなんのといつて、トンタまご付かせらア。」　定「長介へめへと己が中だに、大
通を云ひのあいたやうでもねえ。其様にふるてへすといいわエ。」　長「定ぼう、あつたな事はいはれね
えもんだナア。」　定「壁に耳有の物いふ世の中だ。」　長「定ぼう、とんだ事をしつてるな。」　定「講釈で聞
いて何とでも知ッてらア。」　くら「長さん久しく来なさんなんだネ。」　長「きつい事もんだ。さつきからお
前にもあへかられえ。」　長「おめへの耳がよごれようと思つてよ。」　くら「おらにものをいふと、口がくさ
るよ。」　定「指合だぞ〳〵。」　お「おれが猪をうふらうかと、大てえ用心ふるほつちやアねえ。」　くら「アレお
め、までが、長さんとならんで、何との事ッた。」　くら「だ、いてえ。」　定「オ、いてえ。どうひやアかるこ」といひながら
れしさうなてい　長「ム、なつまじいもんだ。」　定「長ぼう、手めへの通の悟りやア恐れだゾ。」　長「ソこナ
有る声たなり

にほめてくれるなア。気か小さえからとりのほせらア」定「イヽヤア真の事だよ。俺がな松の木やなんぞをへつるに、木目をのみ込まねえでやつふけると、逆目が立つておへやアしねえ。ホレもふのを見るといふが、向うの情を知るのだ。鑿や鉋を磨ぐにもよ、金が堅えかやはらけえか、金の情をみたにで、按配だアな。いつもはてえやはらけえと、情を見てやらはさねえと、ろふに刃が付かねえわさ。おれも先の所おやア、韓信とやら棟梁とやらへ」「かし」ふすまを引きたて、一眠やアかうしんのばんにして、リア寐なさえナ」ともなし。暫くお長「定ばうゆるりと居やっ」定「かへるか。晩まで居ねえかっ」長「用が有らア」く「おけへんなえすか。」定「おぎんさんおさらば」長「アイもうお歸りかえ」長は外へ出る。かねは戸を明け か「このごろにエ。」長「すイ」と云ひながらふりかへり、一ツレかんざしがぬけさうだぜ」秋の日おしいつれなくも、山の端ちかく暮れかゝれば、ほんとつき出すいりあひに、ねぐらへいそぐからすがカアノヽ。

喜夜來大根　終

富賀川拜見序

落花心有れども流水心なし。山椒擂子木に變じて、子をすることを忘れ、翹花を貰つて、ろく／＼顏を見せず、實にや當世の人物。風雅の種として、冬瓜の丸むきを好み、おのれに高慢の魂増長して、終にむだ錢を取らるゝ。予は岡場所に眼をさらして、もろ／＼の穴を探るといふも、天に口なし人をもつて、鰯のかしらも信心から、此の書を編んで開く時、既に江戸繪圖の川ほど筋を出して、眉に皺をよする者も見え、又鼠の尻尾ほどな筆を振つて悦ぶ輩もあり。然るに過ぎし水無月の頃、京の意氣といふ變人、我が町に借宅して、娘の赤まへだれを弘めんと、山吹の花を咲かすれども、實のひとつだに無うして、遊所の笑ひ草とはなりぬ。是れ蟷螂が斧をもつて、押し送りにむかふが如し。犬うつ童、三里にたらぬ黄裏にも、東都の心意氣をしらせんと、鯱の水入に水道を汲んで、今や此の書を著はし畢んぬ。

天明二とらのとし春

東都龍の鄽に住す

蓬萊山人歸橋述

富賀川拜見

蓬莱山人歸橋

山本屋の段

客十歳、見通しより表
白髮の隠居まはる。「是れ長五郎。露丁さんはいつ來た。」船頭長五郎「きのふ來なせえしたが、池中さんで居ねえから、腹を立つて歸りなせえした。どうでおのきさん程のことはねえのさ。」おたよは障子を使ひなぶ下よりく、る。土「何をして居た。今尾竹屋の定介が噂がしたが、なんだ。」主「いくよし〈村さんが來た。その事をいひに。」土「おきやがれ。ふしん方といふ面で、楊枝を使つて來るも久しいもんだ。おはかた伊のさんとやらが來て逢つて來たらう。」窓棒つらの一「此のふしんかたと云ふは、飯を食ふ事なり。」主「伊のさん〳〵。」と聞き飽きた。先度も云ふとほり、いつたん出て、私が方からつき出さねえければ、去年の事も有るからすまねえといふに、〳〵しぶくりも困るよ。長五郎どん。」主「これ許りは請合ひ難いぞ。四月お雪さんが引込んだ時分、伊之さんが「呼びにこえ」と云つても、「お雪さんの居る内なら出もしようが、あの方

に突出されて、今さら私を呼ぶとは、あんまりつまらねえ。」とか何ンとか云つて、出さうもねえものだに、お前の方から出るといふのも。」と言葉を残す。た「おめへまでかそんな事をいふ。今につき出して見せよう。」長「ところてんか八幡鐘ぢやァあんめえし。夏からよつほど遣り過ぎた。」下より下女来り、女「芸者衆の迎へだよ。」長「けえさうねえ。」十「うん。」と口かうおざい、女「長五郎どんもお迎へだ。」お帰りはいつもの通りだらうね。あとでゆるりとむだなのどぶ漬。」と地口をしほに下へ行く。十蔵はうかぬ顔、おたよもすまぬかほにて、二人ながら出格子に腰をかけ、たばこを呑ながら、十「昨日長五郎に手紙をよこしたが、とゞいたらう。どうするつもりだ。もやうも早く定めねえか。祭に間もねえぞ。しかし何の彼のと、好みがあつてやかましいから、おせいさんと相談して、そつちでいゝやうにしたがいゝ。下着も其の通り、紋所はおれが三ツだきの向う梅がいやなら、上ゲ羽の蝶を染めたがいゝ。此のうへの事は、伊之さんに仕まひも帯もして貰へ。とてもつき出すなら、月の出るほどの事をさせて見せてくれろ。あの人だつて、それ程の事の出来ねえ風でもねえさうだ。」おたよは祭二日の仕舞を、いくよしの川といふ客に頼み置きしに、少し理あつて切れし故、十蔵に頼まんとおもひ来りし所、十蔵もさる者なれば、先をくゞり云ひし故、あとへも先へも行き難く、いろ／＼工合を極め、た「それは云ひなさらずとも知れた事さ。おめへに仕かけを頼む程の事だものを、伊之さんには十分な事をして貰はねえければ、お前も胸がすみやすめえ。」とあとは何もいはずふさいだ顔をして居る。十「口ぎれいには云ふが、なぜそんなすまねえ顔をしてゐる。」た「何も彼もすんだのさ。」十「それでもどうもがつてんが行かねえ。

なぜかくす。」とさう云ひなさるから云ひやすが、かういふ矢先、さぞ腹が立たう。だましたと思ひなさらうが、とてもあとでは知れる事で、其の時腹を立ちなさらうより、せかずに能く聞いてくんねえ。いつぞやお前にも話したいその字ね。」是れは親「きのふ人をよこしたが、久しく勝れねえで、此の頃人參とやらを吞むから、出來るなら十兩程こしらへてよこしてくれろといつて來やした。どうも仕方がねえから、年ンを一年入れてこしらへようと思ひやすが、お前の所へ、來年はかたく行かうといつたけれど、そのわけだによつて、どうぞもう一年待つてくんなせえし。」可哀さうだと思つて、腹を立つてくんなせえすな。」と物おもひ顔にて、かんざしで髮を搔く。「十」出し笑ひ「それはまづ氣の毒に、悲しいをかしい事だ。此の狂言で金をはぐは、三笑が居た時分、喜代三ガ下ッてした事だ。へらぼうの置きにしろ。一ッ荷で四文の水道を買つて、米の飯の水加減にひしやくを立つて置く男だ。ふところに有る金が、千吉のなどりのやうに、醉うたときア。」と笑つて居る。三十藏さんあんまりないき過ぎだね。誰がお前に其の金を出してくんねえと云つたえ。仕かけさへ貰ふのが、もつてえねえと思つて居るに、いかにはかねえ勤めはすれど、一人の親の大病に、一年ねんを入れるのが、あつとも苦にはならねえけれど、離れてくらす父さんに、逢ひたいとても儘にならず。誰がしてくれる看病も、氣に入らぬのはとしよりの、氣まゝが出たらどの人も、あたりも惡くならうかと、何より是れが苦勞になり、又はおまへに

約束して、待つた月日に行かれもせず。二ッの事が胸にみち、私が今夜のぶてうしは、堪忍してくんねえ。」と、てう／＼涙を零し、寄衣で顔をかくし云ひければ、十藏程の男なれど、金を出せで泣いて聞いて、十「それ程にいふからは、よもや嘘でもあるまいけれど、餘り愚痴を云ふ樣だが、まづ尾竹屋の野良奴が、第一俺が氣にくはねえ。惚れはしめえと思つて居れど、本にも書いたいくよしの、去年のわけを皆が云ふ。」た「未だそんな事を云ひなさる。伊之さんはどうとも仕やす。金はなんでもいりやせん。」十「そしてまた年をかき入れ十兩かりて、ぬく時も十兩か。」た「おめへでもござりやすめえ。質を置いて利が付きやす。十兩の書入は一倍出さねば拔けやせん。」十「能く考へて見たが、いよ／＼譯がわかるなら、其の十兩を出してもやらうが、伊之が祭を仕舞つた跡で、直に突出す證據が見てえ。一年はやく此方へ來れば、十兩出しても理窟がいい。」おたよはいよ／＼覺悟を極め、どうしても十兩のかねをとり、初め伊之に云ひし事もあれば、今さら仕舞つてくれろとも云はれず、此の金を渡し、まつりを仕舞はんと思ふし た「どれ程に云ひなすつても、其の金ばかりは貰はれやせん。」十は少し腹立聲で、十「金を貰ふがいやのは聞えた。年を入れて、これが所へ一年遲く來るが嬉しいか。」た「重々さう云ふ事ぢやァねえけれども、どうも譯がすみやせん。」十「十兩出すも勝手づくだ。それを案じる事はねえ。しかし伊之字のいかさはいやだ。」た「なる程口で許り云つても、お前の心も濟みやすめえ。去年中ぎりづくでおゐんさんにほつて貰つた、此のほり物を消しやせう。」と左の手をまくれば、かすかに伊之とほりきり、下に有りければ、始めて肝を潰しけれども、十「消さうとも消すめえとも、熱い日は御勝

手次第さ。」女「さう云はれて消しかねるものか。」士「もぐさが無くつてお仕合さ。」女「おせいさんにさ。」士「けいぶんがわりい。」女「そんなら仕様が有る。」とはながみをもみもぐさのやうにし、帥之と彫りたる上にすゑる。心には十兩に云ひわけをせんと思ひ、熱さをこらへて燒き消してしまふ。士「今まではもしやと遠慮したが、とてものことに右の手も見せてくれろ。」はつと思へど今更いやとも云はれず女「右の手も今消しやす。」と又まくり、是れも消してしまふ。士「何も彼も分つた。約束の十兩を遣る。明日早く持たせて遣れ。外にも何ぞ用が有るなら、いつてよこせ。といつてやれ。」一時にくゞりの開きし音しに、下より女來る。女「十藏さん、おたよさんの。」士「よし〳〵。」女「まだお休みなさらんかえ。」と無理に二人を蚊帳の内へ入れ、屛風を引廻すと、八ツのむかへの拍子木カチャン女「おやすみえ。」しゃしゃん〳〵。

辰見山樂内之段

當三世にあらすんば、樂する事なかれとは、がうぎに古代のはなしの事、今は二代目三代目で、作者の連名茶番の世話、醫術の心はうすくして、肩癖やらぼつ引きやら、胸膈とか秀鶴とか、赤仲でもつきあきでも、そんな事には闇からぬ、丸いあたまが多く有る。中にも辰巳山樂とて、醫心とては少し有り、人を殺すいかしもせず、遊びの道を種として、いま通人の會所となりぬ。帥之、心安き故、丸樂を手傳ひながら、「山さん昨日の手紙を見せねえか。何と云つてよこしたえ。」山「外は知らねえが、おことは飛んだ

よく勤めやす。先度もがうぎに醉つて行つたけれども、よつぴとい頭をもんでくれた。坊主の取扱はきついものよ。」ト話して居る中、久丈は門ぐちより 久丈「やかましい。そとへ聞えるぜ。」ト奥へ通り「いつ來ても〳〵あつい内だ。是れ伊之さん。おこよが所から八十が事について、急に逢ひたいと云つてよこした。なんだらう。」伊之「一ッ處に祭を仕まへと云ふ事だらう。」久「たの字は文をよこさねえ女郎だの。」伊「あんまりよこさねえには、ちつと譯の有る事さ。」久「おめへは祭をどうする。」伊「彼奴に聞いたら、仕舞ふ客が有るからいいと云ふによつて、仕掛でもして遣らうと云つたら、それもいらねえ。」と云ふによつて、今の内仕まふ客人が有つても、もし間違つた時、かうしてくれろのどうしてくれろの、仕廻の穴を塞ぐ乞食のどぶ板を見るやうな、安い野郎おやアねえ。」ト、きたへはきたへたけれど、彼奴に沙汰無しに、紫縮緬に折鶴の裾模様をつけて、下著は白むくめんで二ッ、帶は萌葱に白より金で、笹鶴を織つたを、大丸へいひ付けやした。極いはすに置いて、十四日に遣つて、どこの客人があらうが著せて、こうけいしといふ歩行きつきが、見ようと思ひやす。」久「今仕舞ふと云つた客人は誰だエ。」伊「ソレハ聞きやせん。」久「時に正月から云ふ趣向が有ル。子供にかゝれる道中雙六といふものを拵へやした。是れ見ねえ。」伊、山「どれ見せねえ。」[illegible]「振出しはなんだ。」と皆々よんで見る。

「中　裏」　此處より子供はおりいろ〳〵出る。

「お今宿」美しし。此所に久しく居て、立物となる。折ふし人によつて、めうがも、はせる。

「お琴宿」物事やはらかにしてきれいなり。名物の大酒あり。

「おとめ宿」此所の八丈高し。かたすいきにして、松介が別さうあり。

「おたよ宿」美しくて、一ツ體人柄のよき所なり。是れぞといへる景色もなし。

「おくめ宿」はおりをやめて、爰に来れば、はやる事妙なり。付け頭をきらふたり。

「おふつ宿」愛よりのぬけ道有り。和かにしておもしろき所なり。

「向をたけ宿」
尾行
此所に泊る、はたご一ト月十二匁、ひる許り三十六匁、夜も此の通り。昼夜となれば、六十匁。海道にひろく、何事もひいきによく、たのもしき内なり。

「おこよ宿」十手観音の堂有り。酒をたなして顔をかくこし。

「雛吉宿」此所の人素顔なり。上品の生まれ多し。

「お八重宿」物事やさしくして、笑ひに口へ手をあてる所なり。

「おしな宿」子供の仕つけを守る家有り。此所へあたれば、ふり出しへ帰り、ふたたび出直す。

「おもみ宿」はてにつくる所なり。団子の名物。

「お□宿」夜なきの森有り。一度聞けば人来らず。近頃つぶれしとなり。

「おと吉宿」けつきよければども、おやなきものはあはれをもよほすなり。

「おもん宿」　此所の人、わけて丈高けれども、見かけとちがひ、にうわなり。

伊「是れからあと知れたもんだ。上りはなんだ。」久「上りは大いにこまりやしたが、やう／＼案が付いて、此の道中をまはつて仕まふと、すぐに京へ付いてのぼせさ。」ふた「かんしん／＼」又おもてより飛公きたる。

飛公「皆揃つて居るか。」飛「遅かつた。」久「丸角へどんぶりの紙入をいひ付ケに行つた。それより伊之ごん、西河岸の水茶屋に腰をかけて居たれば、いきな三十近くの侍が、竹屋の新と何やら咄をして歸つた。跡で新に聞いたれば、『十藏さんと云ふお客だが、仲町へ甚いこつ。』といふから、『誰を呼ぶ。』と聞いたら、『もといくよしで、羽織のおとさんがこれびやした。おたよさんが色事で、今は山本の内できつい事さ。』と云つた。アノ客人を知つて行くのか。」にきく。しやべる樣〇伊之は色をかへて、伊「けえぶんにも知つたと云ひたいが、夢にも知らねえのさ。夫れほどの女郎を、馬鹿々々しく呼んだも業腹なつ。それに合點の行かぬは、夕の夢に、おれがはし紙の名を鼠が喰ひ破つて、跡を男が釜の下へくべた夢を見た。起きて考へたが、死ぬだらうとは思へども、代々内は土葬なり。あきらめて見ても濟まねえところに、今の咄の此の上は、今から行つて黒いとも明るいとも、片をつける分のことよ。十藏でもはうさうでも、荷が重からうがまゝのかはよ。」久「俺も味方に行きてえが、かへつて行かぬが書き能からう。せいては跡がいてえによ。」伊「おれも手段が大きに有りさ。」とかけ出すを引きとどめ、飛「あんまり形がきたねえぜ。」

伊「舟宿にあづけて置いた。」とあとをも見ずして一散に。

尾竹屋三段

伊、くぐりを明けて這入り、吉・主「伊之さんよくお出でなせえした。お吉どんおたよさんを。」女は見番へ行く、外の見世も出る、つれ立ち見通し、行く、見番「二三日はおとほん\/しくごさりますね。誰にねえいいてうしたねえ。おゆふさん。」主「さうさなう。あかい雪でも降りやせう。」伊之はいつも不人さうをするお好きなれども、舟にて工ふうし、何時よりきげんよくして、伊「おゆふさん、おちぜさん、どうした。とんだなつかしかつた。おはりさんは。」主「かけにしほどあるまで。」女、硯蓋杯盃臺持ち来る、いろいろいきにあれども、持んで大器を持く、伊「おちかと雛吉と扇蔦を聞いてくんねえ。」りかゝる。お吉は見番よ　主「おたよさん来やす。」主「もう一ツへん御苦労ながら、雛さんとお近さんと扇蔦さんを。」伊之に向ひ「もし無くばエ。」伊「だれでも。」お吉はまた聞き「これ\/、おいちさんとおきはさんは、さきに行いた。この字だよ。」主「承知々々。」と行く。あきはじめやせうかねえ。」伊「はじめねえ。」主「あひぜえ物にしねえ。えびのふたには大き過ぎるわなあ。」清かり、げい者揃ひ　客「お客をかいであてようか。」客、進「聲を聞いたらう。」主「イヽエサ、名を聞いた。」とはる「是れはお珍らしく。善は酔つてをりますから、お前だけ置いて参りました。」客、進「伊之さん、またあついねえ。此の間は扇を、剛敵扇は嬉しいねえ。」扇「こきに橋の落ちたで祭はどう成りませう。」

伊「有るめえとも云ふ。又靈岸島の十八町は、道具や人を舟で渡して、牛と車は兩國を廻して、十四日にねつて、十五日は此方を引くともいふ。まだ定らねえさうだ。」るたよく、伊「お出でなさりましたか。」た「はい。」と笑ふ。又酒事あり。三人三絃を出す。伊「よしにしねえか。」馬「是れも御祝儀。」と三人なく。伊之ははじめよりせかずに居たりしが、段々と酒も廻り、おたよが目を止るたび目障起る。少しづゝ心に身に成り伊「コレ扇蔦。人の命と云ふものは、今日あつて明日ねえやうなものだけれど、天地の間に義理と云ふものは、仕方も無えものだ。一寸抓んで云はうなら、朝むつゝり起きる時分は、七八十に成る石切の金國のくわくらんした様な親爺が、悲しい聲で菜を賣りに來ると、「この菜は幾らだ。」「三文だ。」と云ふ。「把が少さいから二文に負けろ。」「負けねえで買はずに仕廻ふわ。なにが汁のみに困つて、昨日しぎやきにした茄子の皮でも煮てくふ。かういふせち辛い事をするかと思へば、一寸こゝらへ來て、「扇蔦を。」と聞けば、「たつた今私どもの内へ出やした。外の者を。」と呼んで居る内に、「迎へがありやこりやになつて、扇蔦さんが明キやしたが、どうしよう。」と云はれた時、「もういらねえ。」とは、きらずを買ひはぐり、錢がなくツても云はれねえ。目の前で只一分とれる様な物だけれども、是れは是れ、父母より五りん五體を引きずり込んだ人間だから仕方がねえ。去年の暮には兼太夫が大病で、顔見世中骨ををつた左名太夫は死ぬ。昨日まで馬駕の通つた永代橋も、目ばたきをせぬ間に落ちるし、世の中といふものは、かはつたものぢやアねえか。俺がかうしていい氣になつて

居ても、かう云ふこの子たちに、同じ西河岸の客が來て、どんな目に逢はうも知れねえ。夫れよりは此方から手を引く方がましだらう。」とあちにおたよが方を見る。 長「なる程藝者の論は、嚴いもので御座りますが、また憚りながら此の扇蔦樣などと申す者は、かしなぞで知つたお客にお目に掛りますと、お客も、「扇蔦明いたら來い。」と仰言ても、一度も參つた事はござりません。」あれ程約束したに來ん。」と、見えに腹をおたちなさる方もござりませうが、それはすべたとうつちやつて置いて、やつぱり今のが眞でござります。」私だとても、かう云ふ商賣は致しますれども、人の流れと水の行くへ、どこで生まれたかもお前も御存じはござりますめえ。」としを〳〵とした顔をする。おたよは胸中終の樣子、合點はゆかずとものをもいはず 長「久しいもんだ、身代ぐなしもよしねえな。」 長「おせわさ。人の噺をする内らんちうをしながら、」此のらんちうと云ふは居ねぶることなり。「それこそおせわさ。」伊之に向ひ「おつとあつちへお出でなせえし。」伊、物をもいはず立つて二階へ行く。 長「此處でごせえす。」ト二階へ連れて行く。お升思ひじめより歸り、下よりくる。 其「伊之さん。ようお出でなせえした。おめふさんきついもんか。今朝、一晩には屹と來なさらう。」といつた。何ぼいつても君子一言なしよ。」ト笑ふ。「おたよさんは。」 お「今來なさる。」 其「またわたしがおきばんだ。ゆるりとお休みなされませ。」ト云ひして下へ行く。來り、は入りて障子をたて、おたよ た「低い蚊帳の釣り樣だぞ。」と高くつり中へは入れど、伊之は何も云はずに居る。「飛んだ惡いてうしだ。」 伊「いつもよりは機嫌が能いのさ。」た「ハイ是れは御めんなさい。」 伊「十藏さんはいつ來た。」 た「ええ引つ。」とをかしな顔をする。 伊「かくがさんの事さ。」

た「二三日あとにさ。」伊「それに付いてお前に話が有ル。聞いてくんねえ。」た「何をさ。」伊「きれいに突き出してくんねえ。」た「なぜえ。」伊「あきた。」た「嘘だらう。も鹽屋おやすねえか。」伊「夕もうつらうつらと、おめへの事を思つて寐たれば、かういふ夢を見た。おれが客紙の名を鼠が食つて、跡を火にくべた夢を見た。考へたに、おれも大方死ぬだらうから、跡ではほりものも消し憎からう。今の内消して、きれいに出してくんねえ。」といふよりおたよは胸にこたへ、目の色かはりしが、さあらぬ體にてた「悪い夢はさか夢とやらぜいいのさ。」伊はおたよの目の色かはりしを見てとり、予ずよくなりて、「其のほり物を見せてくれろ。」た「いやだ。」伊「見せともながる事はねえ。」と見たがる。おたよはいやがる様子。合點いかぬ故、夢と考へ合はすれば、扠はもはや消して仕舞ひしと始めて心づき、「是れ此のはつつけあまめ。人が知るめえと思はうが、からだにはナ、見る目かぐはなを縮緬にして居るわエ。べらぼうづらめ。夢が當つて見ろ。見徳で色食になるものはひとりもねえ。かう云つて出すからは、何も彼も破れかぶれだ。大そうらしいが、善光寺の如來には、いかけた穴がいくつ有ル。屋根板のへぎ仕舞は、かまほこを付けて賣る。京大坂は知らねえが、江戸の事ではけちりんでも、怠けた事のねえ男だ。こんな貧乏な野郎でも、日本橋の人間には、生きむしが合點しねエ。丸平屋の奴らは、生きタ蟲と云ふものは、湯殿隅のこほろぎ、銅壺の上の油蟲、是れより外にはねえ奴だ。お中さんもつまらねえ。餘程わかつた人だと聞いたに。子供の仕付ケはどうするか。まづ突きだしのいろはには、客を見分ケて相應

に、こゝはこけだけなんぞをとり、國家の留主居に仕かけを頼み、其のやつらも出番を見て、寺参でもする時や、親の所へ行く時分は、跡の仕廻をあびせて行けば、親方にも損は無い。通な客には手管のけいこ、たうなすにこやししても、かほちやになつた例しはねえ。おいらが様な生もの知りな、此の仲町の悪い穴、春の小袖は知れた事、四月に入つて袷になれど、袷を持たねえ子供衆は、やつぱり仕かけに小袖を入れる。五月節句にひとへもの、六月朔日から絽のかたびらも、七月十五日より又ひと八物、九月に入ると四月の通り、重陽かたは小袖を二ッ、あんまり寒くもない年は、夷講から三ッ着せ。おすゐさんは根があがる、島田くづしに一が出ぬ。通ものの様で悪いことと、なの過ぎた客人は、黄絹に實絹、狂言にも程が有る。人の見分が出來ねえ故、こいつは一番引ヶようと、櫻田の別煎を、餘程呑ませて見た所が、思ひの外に虚屋のやう、表許りで勝手のかたくた。こいらは客のいい手本だ」と、いあえましい世の中だ。あたまにもこごとの返事も出來ず、言葉も人には遭れにせ、いゝでさんと思ひしが、其段々云ひなせえす所、一ッも無理ではごぜえせんが、講を一ト通り聞いてくんねえ。成程十藏さんを隠したは、重々私が悪いけれども、おめへにもさう云つた、祭の仕舞の何やかや、見くびつたやうだがね、もつとも苦勞を掛けめへと、川さんに頼んだを、切れて仕廻へばしまへもなく、十藏さんに仕かけを頼んで置いたけれど、まだ其の上に仕舞ても、頼んで見ようと思つた處、長五郎どんが悪心で、何か様子をおかしく

あり、お前に仕めへを頼めつ」と云ふ。「どうしてお前に云はれるもんだ。彼方へ惡く悟られては、仕かけの方も埒明かず。はかねえ智慧をやう〳〵出し、金を騙して取つたなら、お前の名前で仕廻をし、爰の内へも恰好よく、又上藏さんもよつぽど物の分る人。今時の人間が、上雨でも只は出さず、成程皆消しやした。」とり見せる。「と雨手をよく、」よもや夢にも見えさうなもんだ。いきた襷に火を付けて、嫌だ悲しい悔しいと、思ひながらに消すものを、まだ見えようが氣に入らねえ。かう云ふからは覺悟の上、此の上雨でおめへが仕まひ、上藏さんを突き出せば、よもやおめへの其の顔も、立たねえこともごせえすめえ。」伊「能くつもつても見やアがれ、今度の祭の一件は、夏邊から知れてある。おれが顔が立たねえなら、度々、「仕廻ふ。」と云つたのに、「いい。」の何のと云つたから、それなりにして置いたれど、お雪にア、云ふ目に逢ふし、手前には突き出される。俺は變つた生得で、はおでも何でもかくすがされへ。此の上は何處迄のか、小さい子供に仕廻をつけ、向うの内で上藏が、ここ上違へばこつちは上雨。何でも寂しい祭を見て、『おたよさんはきつい子だ。伊之さんを突き出した。』と、土橋仲町を引き廻して、遊びもたれからやめにする。人の寶の上雨で、おれが仕まつて何樂しみ。も早何にもいはぬがいい。どんなことをしたとつて、火あぶりがうまるものか。」おたよはいよ〳〵つまらぬ譯となりければ、互に無言となつたる内、おたよは小よりで小指をいはへ、しばらくかんがへ居たりしが、すつとたつてゆくを、伊「小指をいはへて何處へ行く。野暮大臣ぢやあるめえし、切つて貰つて

何に成るもんだ。」与「きつい先のくざりやう。いつ、切らうと云つたねえ。」伊「夫れを聞かうとおもつて云つた。どうしてうぬが魂性で、分つた事がなる物ンだ。但しは俺にとめさせる、なぞで書いたる狂言か。」与「剃刀を借りて来る。」伊「べらぼうめ貸すものか。」与「そんならやめて手水に行かう。」と立つて下へ行く、伊之はどうぞして腹をいんと心を砕く。おたよは来る。伊「剃刀を貸したかの。」与「借りようとも云はねえのさ。」と蚊帳へはいり、一「もしどう考へてもつまらねえから、かうしてくんなせえし。上藏さんを突き出して、おめへのかほを立つてから、私をおめへが突き出せば、よもやお前は立ちさうなもんだ。わたしは死ぬともどうするとも。」伊「長い月日に短い命、其の二番目を待つ内には、金も命も目がくれるわ。」おたよは指を切るにはひとりでならず、其の上先を遣られし故、如何はせんと思ひしが、やう／＼心落ち、髪を切らんといふがいを抜き、丸まげの根の上より、料理場よりそつと持ち来りし剃刀にて切り落しけれども、伊之はお宅よりの害催入りして居ければ、おたよはさうやう切り終ひ、うす刃をはな紙につゝみ手をふき、たばこを二三服のみ、あたまをふりければ、髪は前に落ちる。少し笑つて手を叩けば下より女来る。与「お吉どんか。お針さんを呼んでくんねえ。」呼びに行く間も無く来る。針「なんだおたよさん。」与「蚊帳で髪を悪くした。櫛箱を持つて来てくんねえ。」針、笑ひながら、「けぞんぜいな。」与「そして蠟燭を一ツ付けさせてくんねえ。」針「好きな事を御意なさる。」お針は行く、此の髪を切りしは、お針と相談の事と見えたり、其の中へ櫛箱を持ち来り蚊帳の前に置く、お針は櫛箱を持つて来る。与「おたよさん、さア。」おたよは蚊帳の外へ出る、お針は肝を潰し、「ヒエヽどうしたこの子は、気が違つたか。伊之さんなんの事つた。見てお出でなさる事はござえせん。」伊之見えて居り、いよ／＼はりつよく、伊「お針さんはまだ知るめえが、この子は宵に切つて終つた。今夜は居候にして置

くものを、髪を切らうが、何國の客への約束か、上藏への心中か、うらやましい世界だと、遠くから見物した。」上「呆れて物が云はれねえ。」たよ「何も云はずといいわな。早くすいてくんねえな。」此のお仕に髪をすかせるといふも、髪に何ぞ狂言でもあるとうたがひもあれと、らふそくを二ちやうつけ、中をあらためて見せる事なり。かんざしもたぼもたゞさず、つめて小さく丸髷に結ふ。上「ぐつと長く切ればいい。素人の切つたやうだ。」結び仕廻ふ。伊の上は蚊帳の中から「それもそろばんづくだ。」おすみさんが難儀をすれば、みのをかけてとうとも云はれる。」上「おしやべりには困りはてる。是れから御勝手次第。」とおたよを蚊帳の中へ入れく。下「伊よたシ、見ねえふりをすることはねえ。ひけふな。御不承ながらとつてくんな。」伊「髪には外から口がかゝつて有らう。」たよ「入らずばどこぞへ捨てねえな。」伊「捨ててもいい髪をなぜ切つてくれた。」たよ「どう云へばかういふとやかましいぞ。」と涙ぐんでしがみつく。京傳は深川拜見といふ事を書いて居たりし處へ上總やと云ふ本や門口より、上總や「どうで御ざりますね。せんどの小本は。」京傳「せわしねえ男だ。やうやう髪を切つた所まで出來た。」上「餘日もござりませんから、夫れ切りで彫りませう。」とむりやりに取る。京傳「是れでは仕舞がつかねえぜ。」上「そこは後篇。」京傳「そんなら春永々々。」

富賀川拜見　終

眞女意題自序

森羅萬象

高天原に神留坐す、其の神達も御知りの、媾合一夜の契りには、餅も喰うて来たこ通も不通もおしなべて、雲となり雨と成る、傾城買の魂膽は、先達數萬の書に綴り、仙波が牛に汗すれば、所謂いうても口眞似と、取つても附かぬ仙臺訛り、赤膜たれぬの萬八なく、最後のモサを取つて退き、唯一神道変りなし。混源地色の味事や、浮氣の中へ持込みしが、少し新しい今年の趣向、眞女意題と號けれは、敵の心の稱名にて、只識字を假るのみなり。何を申すも作者の新米、二本たらぬ毫にて、やたらむしやうに引かきたれは、解らぬ處も多かるべし。そこが作りの愛嬌と、目醒茶の業を御かきす、拙なき本屋に見捨を、波羅伊伸意喜餘目出玉、ガテン〳〵。

時に安永丑の初春、鮎のかす禰宜天竺老人、字は森羅萬象とて、智慧はもとより梨打烏帽子、何ンにも白紙引かけて、分らぬ事を太鼓だすき、書して否がる書林にあたふ。

陸野奥右衛門國詞

（い）主。江戸にてぬし、又はなどゝいふに同じ。　いつくしねえ。うつくしい事。　伊勢屋しつへい。酒を注ぐに云ふ、酒屋の名なり。　い

きび。しりの事。　いす。詞のすゑに付く。「いし」「もし」「ゐす」「ちや」いづれもすゑにくはし。

（は）ばかたれ。馬鹿の事。　又馬鹿たれ、又ばかゝ。いつたい人をのゝしるなり。

（に）にぐむ。ゐのぐにてぬる事。　にんがう。人形の事。

（へ）べすね。かほをしかめる事。　べゝ又べゝこ。玉門。　べろ。舌なり。

（と）とゝろなし。心なし、分別なしの事。　とかう。いやらしいふきみなり。　どこゝこ。

（ち）ちくと。すこし、ちと、すこしといふ事。

（ぬ）ぬうだりく。のさりのさりなり。

（を）おかない。おつかない、おやッかなといふにひとし。　おかなく。とんだ、つがもないといふ事。

（わ）わこ。男の子。　わらし。子どもの事。

（か）がゝ。嬶の事。　がアさま。かゝさまといふ事。　かけて。やりかけてといふ事。

（よ）よゝ、し、や、れ。よしやれと諸方にいふを、切ッていふ。「そりや」「こりやア」などゝ同じ。此の國のならひなり。

(た)旅ごとうのつつ立ちかへりを見るやうだ。ひつくりかへる事、またかわるいを誉るなり。 だんはう。おやかた、だんなの事。

(つ)つけねえ。とんぢやくないといふ所へも、違ひないといふ所へもいふ。

(ね)ねえな。なにさ、いやさ、いんにや。

(な)なには。なに、何さ。 脳。あたま。 脳がやめる。づつうのするなり。 なく。ものの音のする事、なるといふ事なり。

(く)くらわれ。喰ふ事。

(や)やめる。せつない事。 やんだ 否なり。 やんだら。いやならなり。

(ま)まがく。真事なり、又まがいはまつかいなり。

(け)けね。家内なり。

(ふ)ふくりん。不正直、くわるい事。

(て)てくへん。ところ、末に出る。 出来る。出来る事。 出る。ものの出る事。 ことふ。今日といふ事。

(あ)あらくに。すこしまいといふ事。

(さ)さみい。寒三絃。 肴町のおこう。女をほめるときいふ、末にくはし。 さかな。にぎやかなる事。

(き)きこーん。びく/\する事、すべて此の國の人、物の音をいふ事いたつて下手なり。末にくはし。

(し)しごこ。玉茎。 しめづける。しめこむ、といふ事。末にくはし。 しこゐる。かたくなる。

（ひ）ひぶくろ。末にくはし。　兵糧をしめづける。めし喰ふ事。

此の外に方言多けれども、此の書にあづからざる事は、もらし侍る。

眞女意題

神は人の敬ふに依つて威をまし、人は神の冥慮によつて幸ひ有りと、菊月の御祭禮の貴賤羣衆、かまくら時代のゑご草履より、三まい裏付の今の世に至るまで、蹴上ゲの塵に交り給ふ、和光の影は神鏡の、形を天の月日に表はし、神樂の太鼓は神馬の勇み、豆は女中のはな緒ずれ、さねかつらやらぎん背しやら、ぬらりくらりの花の露、大こうあんかびん付ヶに、一トきは目立ッ御えいだう、衣裳ごのみのひな形は、若まつが能からうか、香煎がどうせうと、物ずきしたる出でたちは、嶋や親ごの肩の張、片うで腕にだゐ紺屋がかんばん、いつはりなしは見世物の、丹波國の猫むすめ、タツタ木戸錢八文とは、ニヤンと安いで御ざりましよ。サア先の方お替りと、ごつたにまぜる覗きからくり。わうか二間の箱の內、唐土おらんだ、忠臣藏、櫻茶が似顔は高麗屋と一ツにして、本屋の前にならべられしは、嘸心外にや有るべきと、當推量の光り手よひ、そゝり小唄の鼻をほじくは、おゐやけに持ち能いのおや、生薑の匂ひと知られたり。折しも角の煮賣やより、ほゐ醉ひ機嫌の國侍、仙臺紬の綿入羽おりに、十六うねの長紐を、片ひさに結び下ゲ、花色太織に淺葱うら、あき樣草履を引きかけて、

大小を貫抜さし、お高祖頭巾をのつけにかぶり、鳥居の方へのさり／＼、歩行く後より、けんぼう小もんの合羽おりに、合羽色のばら緒ひも、岸縞の小袖さつぱりと、帯は黒なゝこの大名じま、本多くげしの意気なる男、忠七「モシ奥右衛門様。どちらへ御出でなさります。」奥「コリヤ忠七おつゝどこさいきやる。今日や非番である故、参詣に出来申した。」忠「コレハいいとこでお目に掛りました。ソンナラ御一所に参りましせう。」奥「旅や道づれ世や情、ソンナラ同士にまゐるべし。」と群集の中をおし分けおし分け、前にもなれば拍手うつて、中音に六こん清浄の声をとなへ、ふしをふみ／＼、「主も拝みやつたか。」忠「ハイ、もう拝みました。」と、つれ立つてこそこゝをぶら／＼「何ンとごらうじまし。能く御宮が建ちますね。」奥「あらく／＼しい普請もし。」と話しながら吹矢の前へ行けば、しんぞこおもしろさうに「兎角々々、おかなくえい仕掛もし。アリ、ヤ、真赤く塗つた人形が舌を出した。」と見とれて余念なし。忠「さァいい加減になさりまし。ちつと煙草に致しませう。」とそこらを見て、「コリヤァどこもお盛んだ。透いた所へめゐりませう。」奥「ナニバ、お国の釈迦堂を見るやうに、おかなくさかるぢやや。」とあるく内に、土弓の音「アノきりん／＼、どんがり／＼と鳴るはなにもし。」忠「アリヤァ土弓さ。」奥「ナニ鼓弓もし。」忠「イエ楊弓さ。」程なくましろのかたなる綺麗なる茶見世へ、女「おかけなさえし。アイお茶。」忠「お茶も当りめへだす。」女「ホヽヽヽ、つひ云付けたがくせになつてさ。」忠「ホンニおめへは、中洲あたりで見たやうだ。」女「アイ夏中は、幾田屋になりやした。」奥「然らば主達や、知り人いし。」と茶碗とリトケ、「此の湯や、おかない埃もし。」忠「ソリヤ

アおめへ香煎さ。爰とおたがァ、茶のかはりにみんな是れでござえす。またつんとしていいやつさ。女「どうやら粉薬い見るやうだ。」女「うさァねえ。」喜介 引手若者 喜「モシ旦那、高松屋へお出でなさりまし。子供衆も揃つてをります。」忠 厚板入の下ゲたばこ入レに、銀のごけ張り少し皺を下ゲおにして、「どうせうか。」喜「マァござらうじて、お氣に入らさァどちらへなりと、御出でなさりまし。此のごろ氷川から来た、いい中どしま衆がござります。」女 女郎と聞いてぼいやり、「忠公主やひまでえすか。」忠「わたしやァ、お前様ンへの勤めだといやァ、いつまでも能うござりますが、あなたはどうでござります。」女「私までは非番もし。」喜「ソンナァすぐに御出でなさりまし。この節で御ざりますから、おそいといいのはふさがります。」女「お出でなさるなら、早えがいいのさ。」忠「夫れだが今つから、半ば半端だす。モウ何ン時だエ。」女「アイ此の通りさ。」とふけおんどうへ村をともすい 女「何でもかでも、つけへねえ行きやれ／＼。」と大こみ込み、四つ女鐘をござんくいい 忠も 忠「大きにお世話。」女「おゆるりとおしけりなんし。」少し酔り歩くといふへ高松での門口へ書て、ぞりを脱ぐと、「およしどん、お客が有るよ。サアおあがりなさりまし。モシ旦那、おこしのもの。」とお「ソ、リ、ヤ、ふちかねた棒。」喜「お小構がござりませぬ。」とおかみさまへ渡せば、大小へもはさものも、附る値をつける。上ばたるきおよし 喜「サ二階へお出でなさりやし。見遁しにいたしやせう。すやくれえ行燈だ。」とかけさしにこいを立てる。小ぜまく片手にさしたばこ盆へ、片手に中しゆ附けいなりの東てんに青でりの茶わん、おはう色のといくい 才「コリャ女中。そのすだれえまくりやれ。」忠「こゝの簾は、上げつこえへしさ。」ママ下にお出でなさせえし。」よ「おめへさまがた

女郎衆は。」忠「いきな中どしまを、二人さ。」よ「ソンナラ美しいのを、見立ッて来やせう。」忠「コウまちな、たしか氷川とやらから来た子が有るぢやアねえか。」よ「ソリヤアおかのさまンさ。」忠「だれをおれに出してくんな。」よ「しかも今出し申ス内さ。」忠「有りがてえ。」トおよしは下へ行く、程なく酒肴もつてくる。お「サアお上りなせえし。」お「マツ呑みやれ。」よ「ソンナァお憚りながら。」とてうしでかつたり、よ「ハイお上ゲ申しやす。」お「只ハアおかなくつぎやれ」ト一ツ呑んで頭をひつしやり「伊勢や新平つけへねえ。コリヤ生一ツぽんもし。」とこくうにしたうち、この間少し酒もり。忠七は下戸なり。忠よ「サアおいでなせえし。」ト女郎お大、とび色つむぎにくろじゆすの帯、本多あげの切りまへ髪、銀むねをちよつとさし、鬢で頭をかきながら立たり／＼。おなじくおかの、花色ちりめんに金なしもおるの帯、髪はざつとたばねたばかり。気しよくでも悪いか、面やせたれどにくからぬ風ぞく、忠七と顔見合はせ、びつくりした様にてざしき直る。忠七もきのつぶれた顔付にて、およしにそつと。忠「アノ、ばん目がかのか。」よ「しれしさ。」忠「ソンナアよし。」とあんどのやうす。お「忠公さしやれ。」忠「ヤアおじゆんさ。」大、ト右衛門お大へさす。ちよつとのむふり、忠「オツトよし。」よ「モシおかのさまこそ。」かの「おりよけえながら、お近附のため。」お「君のお杯い戴くも他生の縁もし。」大「オヤげんさんを見る様な事をいひねんす。」よ「ホンニ夫れで思ひ出した。雲海さんはどうなせえしたね。」お「今夜来なさるとつて、おいちさんが心待ちさ。」とやかういふ。よ「おめへさんがた、めしけへやし。」二人の女郎立つて「サアお上りなせえし。コレ金治どん。おめしばちよう持つて来な。」忠七おかのがざしきのけぶり、どうやらわけが有りさうなり。忠「おめへは御酒のうへだから、飯はあがられめえ。」お「ネエナ。酒え呑んだればこそ、兵糧しめづけるにや、つけへねえ事いし。」ム

ニちく／＼、お汁だ。コレ／＼ヤ、鰹のかもし。」北「ナニ肴のつみ入れさ。平のはつ茸がつゞきもなくあまつてえ。」弥「あれは八ながすつてあがりやし。」北「モウさうは喰へやせん。ソンナラバつと茶づけやせう。」弥「あとたお茶は…」北「…から欲しいもの四五杯しあつけて、さうた上でさつかけべいチヤ。」たらふ喰ひつゐし、下に下げると間もなく二人の女房、下には若き小娘を華やかに結び、上衣をきちつとしてゐる。女「…お淋しいやうだね。」北「此の頃さついらんす。」女「それではつかし賑やかでござんす。」弥「どうでも賑かになるこいらさ。ソリヤそうと、ソノはま松町の女郎の行燈に、かうしきに書いてござります。」北「ソレ、ツイ、ハ、見事いし。たくさんにかいたのは、わくにはつた大鏡もんし。」女「ソレはひふそれにつ懐しのこつた。」弥「ハア、おつかし行燈の事もし、エソリヤ、ヤトとんだ揃だ。」北「[illegible]おやうりしの奈良ことですネ。二階の者も所によつてはござない。」弥「江戸のちおちん處のひでもえ。イヤ悲公、ソノ隣者のまへにすへて居る、そのこい顔は何としてこ、する。」弥「ソリヤア俳諧とつて夏の名物さ。」北「それやうて、小人衆のおにはこれかとおもつた。」女「ヤ、嘉吉さう。エテマ、わしか、若様とおもはれたよ。宿が下駄と気に買わせて、聞れて見さんせ、いとしけはこちかとこうかに…。」弥「俺のかうかたかしへ、いきて、惚れた惚れたといふ、たんぺいたこといすすなり、ねん、おもひ。」北「ドレ、北とおもふらへ、おいでなさいまし。」弥「ア、悲合衛門様に…

とつれ立ち牀へ行く。中らうがにまいどうを置き、牀を二間に分けてとる。コリヤアしんに有りがてえ。割牀といふやつア、どうも氣さな物、だよ。」よ「そりやア又通さ。」忠「置きアがれ。」よ「モシ例こくな。」忠「ぐつと今夜アぶんながしだ。」オ「おれが錢も遣るべいチヤ、いくらもし。」よ「宵どまりで一ツぶんさ。」オ「ソ、リ、ヤ、取りやれ。」ともえさらしやに金入の裏のはながみ袋よりなけ出ス、忠「ソレよしか。」と南鐐二まい。よ「アイおゆるりとお休みなせえし。」と下へおりる。おによらうきたる。大、お「モシお休みなせえし。」忠「モウおよりやし。」オ「寐るなら寐るべし。」とてんでの牀へはひる。大「おめへの羽織やア何だエ。」オ「是れもしか。コリヤかな山の霜ふりつむぎです。」といひながら、とびさやの帯を前へ廻し、よこにころり、大きせるなとりあ　大「オヤどうせう。煙草がねえ。」オ「おれがたばこさ飲みなさい。」大「コリヤアとんだ色のくろいたばこだねえ。」オ「ソリヤおいの河原もし。」大「ナンダさいの河原だエ。」オ「ねえナ、おいの河原といふ所の煙草でえす。」大「ナヤいとこのかはらが聞いて呆れる。ソシテどうやらきつさうだね。」オ「ナニハやつこい事いし。」大「ホンニ人にやア添うて見るだ。見かけによらねえやアらかな多葉粉だね。ドレ、おめへのきせるを見せねえ。オヤ飛んだいいかる張だの。コリヤア水にうきやすか。」オ「あつらへて拵へたから、御當地などに有るよりは、かるい事もし。ぞよう風が吹いて來ると、空中へ上るでえす。」大「オヤ飛んだむだアいひねんす。」と云ひながら夜著の中へむぐり〳〵、オ「爰の家内に、だうろしゆや幾人ごいす。」大「わつちまあし十七人さ。モシおめへがたのお國にも、女郎屋が有るかえ。」オ「お國の肴町にちや屋

が有るか、又お長といふか、おかなくいつくしないぢや。河かねうらの七寸ぬきイ著かけて、トヽハ朱ぬりの駒下駄アはいてありく、いきび風だ。天人の影向もし。」太「いきび風たア何ンの事ッたエ。」オ「ハテ斝尻風の事いし。」太「オヤつひぞねえ。ソシテおめへの來なんす時分、はやつた唄でも有ッたかえ。」オ「おれや先月のはつか頃に、お國よ出來たが、其の時分はやつた唄や、兎角よべきやうもなく、能く／＼出た文句もし。」太「どうごうたつて聞かしねえ。」なへぬいて オドら聲をはり「爺と嬶とがァなしで、代になるとねうだの／＼、這出來る。オヤ〳〵くつちやく／＼。」太「おかのさん聞きねえ、とんだ唄だの。」オ「おめへがたアもう寐たか。」ト、帯をとき、くしてゐたのを「コリやおくとこちこよりなさい。くらはれやおかなくしこつたこ。」太「ソリヤア何ンのかへ名だえ。」ト、太が手「これや此の事もし。」太「ほんや馬鹿らしい何この事ッたなア。」オ「ア足イはだけやれ。」太「少しまおなこ。お、よし。」ト見れより少しの間はなしとしれにほこ、はなし事にしめすかなり。ふほんに緣といふものだ、おおなん物さだね。」太「おれも顔を見合はせた時やア、夢の樣な心持だつた。おこの氷川から來た子と名さしようしたも、大かた蟲の知らせだらう。」ト、もうじれツてえ事が、いくらも有るが、あんまり嬉しくつて、ひツとつも出ねえ。わたしもおめへの顔を見ると、つもる事を話したかつたが、おまへしどんのめへも有り、お大樣ンは口わるなり、知らさふりようして居やした。私も親たちに別れてから、四ッ谷の兄さんの所へ行つて居やしたが、「おやしき

に奉公に出す。」とつて、おやんと氷川へ貰ッてかけ、駈落して仕舞へなさる。ほんに憂い事も辛い事も、誰にかうと相談する人もなし。誰かァ知らねけれど、おめへの云ひたかつた事ア身にしみて、忘れられねへから、何かおよつしたらと、逢ひてえと思つて、文つけへを頼んで、おめへの所ア尋ねたが、「神田にやァ見えねえ稼業もねえ」とつて、二度六かしい貝けへる。懐かしいとじれつてえで、たうとう氣にてつれ出して、稼業のはうはねつから勤めず、くらげへしてここへ来やした。ホヽヽどうした縁り合はこゝで、フッと今夜逢つたやら、わたしはまだ夢のやうな心もちだよ。」此のはなしのやうすをみるに、まともな家業の地色と見えたり、「おれも神田の親方が、田舎へ引ッ込ましッてから、川越へ戻らうかたと思つたが、とてもの事なら江戸で稼いで見ようと思つて、方々と聞き立てたが、芝口の鼻紙袋屋へ口入する人が有つて、すみ込んで居る内に、どうやらかうやら、煙草入がたちやァねいならふ、實體にして居りやゝ、親方の氣に入つて、始終は養子にするとて、子も同然にして下さる。何やかやで工面もよし。ァノ連立ッて来た客人も、出入やしきの御家中さ。お前の事も一ッたん「女房にしよう。」と、生血まで絞り合ッた中だから、未々砂にかぶり付いても、夫婦にならうと思ふから、川越へ便りの度に、伊介さんの所まで、文を頼んで遣つたが、屆かねえも道理。ホヽヽニとんだ身の上になつたの。成るほど人の行方と、水の流れやァ知れねえもんだ。」お「夫れでさつはり譯が知れた。シタが別れてから丸三年になる内、何ぞ

そ意氣な事も出來たらうし、嘸わたしに逢ひなすつたが、うるさくッて成るめえの」吉「ソッ、そッたつめの事でこ見さんに賣られたのか、色男と墮落したのか。地めへ稼ぎで補けて遣るも、いけえ事若る點さ二一、まあそこに「おめへそんなむけえ事を云ひなさるな。是れ見な、おめへの手ではつて有る、此の虫の字が前積だ、な二一二ネ、そこ二一なぜとつておめへ色事をするくれえで、此の母の補を消すにおく補が、お前を人にして見な、死ねに死なう」にといふ位で、これ程に補をうつちやつて置きなさるが、又そんなに喜ぶかい事でこ二が、、誰がするきように身を賣るもんかな。いかにした手かもんだとつて、嘸わな事を云ひなさる」一吉「ソッ、ネア來ねてこしさ、何も泣く事、ねえかえ」「意氣な事でも出來たらう、又逢つたがうるさからう」めと心にもねえ事を云はれたから、おらねえ、をつめの心に引きくらべての事だらうと、邪推の廻りやたもいやなを云つたも、腹ッたくいつて見りや、嘘つこ無しに惚れたからの事さ」一吉「ソ、、是れから何のやうな事、、云はなさらねえか」吉「とゆうたけへも何ゝにもしねえよ」一「やつ、違いたきしやうが有るかえ」吉「そ、れがたくッてとうするもんだ」一「込の商賣を出し、」「ツ、と角をすれすにおりんとして居る」に、な聞えきしやうに、所にい、お女の二み。す、なんだよ」吉「ソレか、そりや、内の娘御の付ケ文さ」一「ドレ見せなさえ」一と罷起こして「それ見ち「口ぎれいな事をいひなすつても、是れだもの」吉「マア何、だらうと讀んで見たわ」一「讀

まねえでどうするもんだ。」文「餘りノ＼つれなき御心ゆゑ、御氣にいらぬ身をばかへりみず、及ばぬ御懇ろ申しあげまゐらせ候。」忠「夫れでてえげえしれたもんだ。モウ讀まずと置いたがいい。」か「シ
ン器量はどんなだえ。」忠「つがもなくおいらしい、ほつとりしたふりそでさ。」か「ナゼ夫れにかまひ
なさらん。」忠「ハテ十八のとしから云ひかはした、命かけての女が有るから。」か「ソリヤァどこに」
忠「ツイ家にさ。」と引きよせ　か「ナニ嘘や。」といふ聲もとぎれにて、おもしろくなりかゝつた最中、時の鐘がごん／＼　大「モウ八ツになるさう
だ。おかの樣／＼。」か「なんだネ。」大「ちよつと下へ行ツて來ようか。」と云ひながら、たばこぼんの引出を出し　大「其の札や何ンでいす。」大「何ンでもさ。」と上草履をばた／＼。大「ちよつと下へ行つて來るから。」より名を書きつけた小さな木札へ帶を締
めずに其のなりで居な。」と見れば木札をもつて下へ行くは、是れはねずに閨あるといふ所を、かみさまに見せるの
おないと作者の　ちつきに二階へ戻り、しやうじ「もうよつほど寒くなつたよ。ちよつと下へ行つて來ことをもちなり。やつしやりすぐに床へはひり、
ても、こんなに足がつめたくなつたよ。」忠「ドレ。」大「ソレ見な。」忠「ホンニ、かなつこほりのやう
だ。」か「かたから風が來るぢやァねえか。」忠「ソコヲかうしようか。」大「久しぶりだの。」此のあと
りやう、向う部屋には坊主客らん　忠「コレ起きねえか。」雲「ム、なんだ。おらァねぶてえ。」い「ソレデモ起
きなよ。」雲「エ、、そんなに出家をいぢめるな。」い「何ンだ出家だエ、ほんにおめへら蟲がいいぞ。」
雲「ソリヤァなぜ。」い「なぜといつて、肴ァ喰ッたり女郎を買ッたり、只の衆よりやァおしがつえゝ。」

置きやがれ、いわしやくひたし女郎とア寐たしたア昔の事よ。いまの世界の女郎を買はねえは、ト六羅漢とおや玉ばつかりだ。」雲「そりやアさうと、此の頃はナゼ来なさらないんだ。」雲「ハテ錢が皆無だからさ。つり鐘ア大きくつても、南鐐の替りにやアならねへ。世間の醫者が上手だか、業道めらアくたばらア、ひやうし木で撥け出すより外、工面しかたに雪の空、最明寺もどきを遣ッたのさ。」卓「ナ二講や、念佛に出るものが、昨夕くれがた日和下駄で、門ン前ンのはうへ行くものが、おほかたどこその圍ひものと、色事でも出来たらう。」卓「また見通しから覗いたな、色事おやア無かつたが、後家ばうがれこさで、鱉汁を拵へたから、そりよ、喰ひに行つたのよ。」卓「すや氣味のわるい、おめへすつほんを喰ひなさるか。」雲「ハテ、ほ、蓮池のすつほんは、みんな腹へ孕らア。またおこしや落雁でなだつから、しやうじん物も同然さ。」卓「すや悟らしい口だの。ソシテその圍者ア後家さんとやらばかりか。」雲「許りかたア。」卓「ハテおめへ方の圍者は、二三人でもやふおややアねえか。」雲「こいつアきつい。どうしてそりよう知つて居る。」卓「どうしてでもさ。おほかたおめへも組合だらう。」雲「いんにや。おりやア仲ケ間はづれだ。」卓「イヤ、さつからとんと忘れて居た。おめへその寐たうには、どうしてくんなさるな。」雲「夫れも此の頃いふ通り、二十日過ぎに法事も有る、手に入るわじんも有るから半金ヅヽれほはこうともしよう。」卓「間違つちやアならねえよ。」雲「ハテ、うたぐへの深い。それお

やァ成佛ァならねえよ。」市「エ、おめへもひさしいもんだ。モウ寐ようか。」「それだやァ手前牛になるぜえ、腹ッこなしにこつちィ寄ッたり。」市衆にて「エ、おめへも付けがあれえぞ。」と宴もひつそとなる。奥左衛門はかつたりそつたり、おさぶ来る　と、婆「岩のはてまの囃子あや、生まれおゞろと頭ふる。キッポコ／＼＼、やッ。ピッポコを待ちかね　ピッポコ／＼、やッ。一人歎うこゝる所へ、手に火入をもち、左「義理一ッ通のあだ付きは、結句心のもめる種。」小声に有内ぶしをうたりなれども、婆「まだおめへ寐なさらねえか。世にもおかしい化物なら、足をあらつて寐る時ぶんだァな。」左「何ハァ夜も更けにや、何時でもつけへねえ事もし。夜番に當ッたばかりは、拍子木ィ叩んがり／＼、鳴らして、おやしきィよつはふあいく事もし。」大「ツ、キィおめへ折介かえ。」婆「ナニおれが名や、おく右衛門もし。」大「エ、こ、中間かといふ事さ。」婆「身がお役目や足輕でえす。マヌ主が鋼を詠あてや。眼をつぶしてねまられべいか。命たくりの君さまあ。」大「よく人を嘲しねえ、呼付けて下けうか。」婆「マヅねまりなさい。コリャいしに少とおしんが有る。」大「何ンだえ。」婆「いきびィたくらせやれ。」大「何ンとえ。」大手を丸くして「この無心もし。」大「エ、おもひ付きでもねえ。そのくれゑならあすこのかけま茶屋へ行きなんしな。」婆「いしもとゝゐなしィ語りやれ。若衆や主たぞより、南蛮一片高うごいす。」大「ほやきたねえ事をいひねんす。ソシテかけまもちけえこらァ二朱だァな。いきたかア今でも行きな。昨今ろくに寐ねえから、ねむたくてならねえわな。」として寝床入りとうしろを向い　婆「コ、リ、ヤ、

いゝかえおにうしろを向いてや、おかな〳〵不工面でえす。コ、レ、や、こぢうさなさい。主やまれハふ
るといふていすか」ととよりた娼　上「エ、よく人をいぢめねへんす。する事が有るならうともして、
無かしてくんねえし」マタ望が有るもんだなア」上「サンダラこおりて向きなさい。マタさうた顔付や
るかなア思くねえおやと」上「わるくつても能くつてもいいのさ」上「そだに腹を立てやるなえ」いきひ
のむしんも否だらよすハしし　モチットこおさよりやれてよ」と引きよせる　大「どうとも仕ねへし」
「よの袖をのけなさいよ」大「舌がくづれていてえから、どの客衆にもかうして居やす。何の角のといは
すと、早くしのハなんし」新造　　　　　　　　　　　　　　　　　主「マア罪がたくれいなア」
真二ツ暗いたとつてどうするもんだ。居所さへ知れて居りやア、マタいつでも逢はれらアさ」上「ヲ
ヲやさうだけれど、夜の明けるかしみ〳〵いやだ」上「俺たとつて嬉しかアねえのさ」上「マア二内
いけへつて、娘こに逢はうと思つてさ」上「又しやうこりもなく、そんな事を、此の口がある〳〵やか
ましい。」かつ「ふさいでくんな。」忠「知れた事さ。ウワしてふさがア。」とちうといふおとの聞えしは、何の
りみれん　「コ、リ、ヤ、忠公、モウ東が真赤くなつた。起きやれ〳〵。」と高呼ばはり、おかの忠　忠「モ
マしに」
のおけへるのまアかつ」　いやえらしい　　　　　　　　　　」上「ド　今夜来てくんな。
私ア方で仕舞つて居るよ」上「さつからじつアかくして居たが、文を付けた娘としつしよにするとつ

て、内證に相だんが有る。なんにせい今夜來て相對づくで、料簡せうわサ。」小「料簡とつてどうしなさるな。」忠「ハテ生きて添ふか死ンでそふか。はなれねえ料簡さ。」小「夫れほどに思つてくんなさるか。」忠「ハテ知れた事さ。」トこくうむしやうにありがたい事ばかり。小「ア、リ、ヤ、鶏がきつかう〳〵と鳴くわ。サアいくべい。」大「おかしやア輪違々々と鳴いたさうさ。」ト忠七は羽織を著ながら廊下へ出る。かのはしをしをと付いて出る。目のくぼみしはうまい事なり。忠「モシお大さんとやら、ゆうべはとんと咄にもめえりやせん。是れからア又お心安く。」大「お頼ん申しやす。」梯子とん〳〵と若いもの、喜「ハイお腰のもの。お履物はどうでござります。」忠「そりやアあなた、裏付はわつちが。」若「コ、リ、ヤ、若いふと、寝間に有るてつへん袋をとつて來てくんさい。」大「何をえ。」若「てつぺん袋もし。」大「何こだか無茶だす。」トいひながらはしごを上り、笑ひながらばた〳〵「何だと思つたら頭巾の事さ。」若「コ、レ、ヤ、お世話。」大「お慮げえ申しやした。」ト小ごゑにそつと「必ず晩によ。」忠「ム、承知さ。」喜「よう御出でなさりました。」

くゞり戸ぐわら〳〵も、戸ざさぬ御代の御いさをし。神樂の太鼓のどゞろつくに、八聲の鶏の東天紅、誠や諫鼓苦深うして、鳥おどろかぬ君が代の、めでたき春の笑草と、かいつくるものならし。

貞女意題　終

世界の幕なし序

生湯に水道の水を用る、喰初に越谷の上白を味ひては、一生麦飯の脾を養ふことを知らず、常に土手の團子の賤しきを甘んずれば、適竹村が上がんの貴さをしり、夕に三里の熱きを忍ふれば、朝に兩足の輕き事を知る。去れば薄紅梅の折詰よりも、一山五文の橘つめまで、吸つて見ざれば風味も知らず、上は呼出し花魁から、下は切見世夜鷹まで、交はらざれば噺にならず。此の小冊の拙きを、書林が梓に鏤むるも、はらぶと餅を製して、貧しき腹をこやさんとには有らず、予が手製のむさきを味ひて後、諸子の作せる上ぐわしを賞み給へと爾云

於杉著亭　本膳坪平誌

世界の幕なし

本膳亭坪平

夫れ世界を幕なしの大芝居と見ては、江戸四里四方を舞台と定め、朝日照りそふ三ツの霞は、楼敷にかゝる毛せんの如く、残んの雪のまだらに見ゆるは、お屋しきの綿ぼうしかとあやまたる。天に揺うつかふ十は、三番叟の黒きにまねび、花に来鳴く鶯は、仕切場と思ひて鬨じうす。されば浮世を茶にして喇をうんぱせば、馬の小便も喰はずとすみ、野分の道に稲光打を用ゐては、火鉢に虹をつひやすことをなし、自腹のえんがう、香所のおこしと一座せずといへども、贔屓連のほたけに金神の皮は投げまじ。恵比須講の黄蔵に手をうつといへども、金づかひにえくのつかへなにうらわず、早業の鮮りこぶしを振りあぐるといへども、町落しのけれくわにもあらず。九尺二間のせまきに住みて、昔鮮の割込みにおそれ、大長屋のおひ込としきは、舞台より、まゝ一寸隠の切ささいとふ。楽木戸の開けてりに、前に置かれたよりは、路次の出入りにとぶ板のはねんにおそる。楽屋が持て来る役者附に、一分の花はいれたといへども、伊勢の太夫が三よみの奉附に、一百の御初穂に手軽しの献立に鬚年貢

の幕、作は櫻田、淨瑠璃は、常磐津ならぬ難波津に、咲くや此の花豐後節、仕かけは正面松かざり、下座のはやしは通りかぐら、鳥追の三味線にて幕明き、廊下にて禮者大ぜい。△「松葉屋半右衛門御慶申し入れます。」口すだれの内より、「ハイかたじけなう御座ります。」△「三浦屋大助御祝儀申し入れます。」口「ハイかたじけなう御座ります。」トヾ禮者皆々行き過ぐと、正面のすだれ松かざり、廻り道ぐにて裏店の體〇裏店ながらも、よつぽどひねつた住居、はりまぜの二枚屛風、正面のはしらにふる三味線一挺、はんど火鉢、何者の打ちもらされかしらねども、主忠兵衛は三十四五のあから顔の男、いろのさめた柔梅の眞岡に、うら襟もぴか〳〵光り、紙子仕立の古き袖なし羽織、置きごたつの前にて、古い扇子箱へ名札をはりかへてゐる、女房お鶴、是れもたゞ物らしくなきふう、年ごろ二十二三、青梅縞のあかのつきたる黒ぬめ切れたはんえり、油でにしめたやうな前だれをかけ、ながしに下りぬかにて手を洗ひ、やう〳〵今ぬつくりが出來たといふすがたにてゐる。

切まくより、けんばふの麻上下、くろつむぎの小袖と、飛した八丈のあひぎ、小僧盆に半切と貝じやくしをのせたを持ち、伊勢じまの仕著せ、三尺手拭にてしりをはしをり、かけばおりを着たる、挾箱持のをとこをつれたる禮者。長八「これ小僧よ、腹がへつたらうが、もちつとこれへろ、むかうの萬忠で、いつも茶づけを喰はせるから。」小「ナニサ、わたくしは腹アへりません。けさおざふ煮をたんとたべたから。」とかういふうち本ぶたいへ來ると、長八はこしより扇子をぬき、手に持ちながらなづきふりむいて、挾箱のうしろへ廻り、のび上つて手を入れ、年玉もの二色出して、貝じやくしと半切は箱へ入れ、出したる品をへぎにのせ、すこしこなしあり。〇むかうの女房を、おつるは見附けて、鶴「オヤ長八さんか、おはやく〳〵と。」長「これは〳〵、サアまあお上りなせエまし。これおつる、此の箱をそつちへやらつせエ。」上り、長うへへ「先づあけましては。」とあとをいはずうつむく。忠、同じく、「まづあなたにもおそろ

ひ。」ト、あとをいはずうつむく。鶴、噴ひつみを出し「先づあけましては。」ト、おじぎをする、此所へ下女おまつ二階より、かみゆひしまひ下りてくす。長、ちよつといたゞく。鶴、是れも同じく
る。長「さて當春は、殊の外長閑で御座ります。」忠「左やうで御座ります。今日などは、とんと三月時
分といふ陽氣で御座ります。」下女松、茶をくんでくる。忠「舊冬のお仕まひは。」長、茶わんを下におき、「まづどうやらかうや
ら仕まひましたが、とんと去年中うち續いての物いりで、大きにいきつきました。」此内お松は二階へ上り、よらひまりを
した青梅の布子に、あかみかきした黒じゆすの帯を締め來る。鶴「ホンニお千代さんも、おやくをなすつたさうで、御座ります。飛んだ
おかるかつたさうで、御日出たう御座ります。」長「イヤホンニ、其の節はお祝ひなすつて、取込んで
お禮にも參らなんだ。」忠「イヤおことおほいに、このはうへも御重の内。」ト此のはなしのうち、供の一人はいねむつてゐる。おもてへ、
「肴屋長右衛門御祝儀申し入れます。」ト云ふところに、ひつくりして目をさます。鶴、若者の行き過ぎた跡にて、「おかたじけなう。」ト、いふ。とかう時
うつれども、御さかづきともいはぬ故、長「イヤまた永日。」といひとまごひをする。忠「マアわざとお杯を。」ト御祝儀のあいさつ。長はしよせん晴そに坐せん是
ぐらゐで、供にまで茶づけとは及ばぬ事とおもひ、「いや又ゆるりと、おあづけ申しませう。」ト立つ。忠「でも」ばかり。ト、いつた「これはあま
り御あいさうがない。」トおくつに出る。「小僧どんや男衆に、おちやでもしんぜたか。」鶴は長八が立つたあとに、としだまのあるを見て、
「もしおとし玉を。」忠「これは相かはらず。」トいたゞくまね。長はこゝにて供にもめしをくはせ、手まへもしたくをせうと思ひしに、大あてちがひとて、あいさつもそこ
そこに出て行く、忠兵衛は門口にはいりこんであるとし玉をなつかしげに見てゐる。鶴はこれをかたづけ、「まつや、もう九ツをうつたぞヱ。おまんまをまだ
たきつけねエか。ちつと云はれすと氣をつけやナ。おらアもうたいたらうとおもつた。」松「お昼には

まんまをたきますのかえ。」忠「すりやアいゝたかねエで何をたべるのだ。喰はずにゐる氣か。」松「ホン
ニけこはおさぶにだつけね。」トきせるをつぶした[illegible]中の間へ[illegible]の若い者、[illegible]の羽
織、[illegible]留の、忠「是れは藤兵衛、まだ〳〵御出でては御座りません。」にてトンツとは[illegible]忠はふたゝび[illegible]
[illegible]
「藤兵衛か、正月だと思つて、でエぶきれエだの。サア上らつし。おらがほうへはまだ正月がこ
ねエ。」ホンニ、おれにやア度々來たさうだが、とんとまちがつて氣の毒だ。書附も先へとゞけたが、ま
だおつと取りこんで、出來かねるさうだ。ぜひこつちから持たせてやるはずだ。」自分のかりを人にかこつけ、女房をかへる爲置
きけるゆゑ、むかふから云ひ出ぬうち、いひまぎらかすつもりなり。鶴はとつくりときいてゐるけれど、さるものゆゑ、わざと「ホンニおらア二けねエ、著ものをぬぎ捨て
て置いたつけ。コレまつや、おまんまがいつそこげつくぜエヨ。火を引いての、そして其のおきヨヲ
火鉢へ入れや。しほ引を燒くから。」トいひすごしかいゝあふ「どうぞ今日、少しでも持つてゐエりてエ
物で御座ります。かのやしきの氣まぐれが間違ひましたで、大きに手こずりました。どうぞならうな
ら。」忠「是れも同じ小幕にて「おれもじよせエはねエが當にして置いた金だ、四五兩まだ受取らねエ。是れもじ
よせエにする所ぢやアねエが、かはせが間ちがつたから、正月早々と云ふことだ。それせエくりや
ア。」「時にヤアめしを喰はッせエ。もう晝過ぎだ。今まで客があつて大きに遲くなつた。まつ、膳は
出來たか。お鶴はどけエいつた。」松「今おにけエへ。まだ御饌がむれません。」忠「早くしろ、八ッだ

ぜエ。」 藤「わたしははらアようござエますが、時にたんと今日、貳匁出來ますめエか。さうねエと内へまゐり憎う御座ります。」 忠「氣の毒だが、どうも困つたもんだ。」かや トくびをかたむける。○此の内下女まつはの女房おつるは、二かいにてとくと聞きすましゝしよじ知らぬかほで下りて來る。 忠、ふりむいて「なんだ火ばちを。」 鶴「肴を。」とばかりいふ。 忠「ウン。」トそこら「こゝの火ばしは。」トいひながら、きせる二本にて火入へ火を移し「ござア」トつき出す。 鶴はあたまへ手拭をかぶり、はんど火鉢のごとくへ、鹽引のはやしたをのせてやく。藤は此の内まうだんりで、忠兵衛とひたひでにらみくらをしてゐる。此の内ぞんだても出來る。 松はこごゑにて、「おかみさん、あなたにはなんで上げませうね。」 鶴、同じくこごゑにて「ゆうべの吸物わんがひとつ、まだけへさすにあつたよ。あれにしたがいい。」 松「何ニあれは、けさ早く取りにあゐりました。」 鶴「ホンニカ、てめへただつてゐたから知らねエ。そんならてめへの茶椀にしたがいい。そしててめへあとでたへやナ。」 松「ハイ。」ト、またぞんざいをしておかしをまる。藤 いゝまでにらみくらをしてゐたが、向しようがもつかず、氣も晴れるもごふはらと思ひければ、「そんならとても今日の間にはあひますめエから、ちつとはへ參つて見ませう。」 忠「何んとも氣の毒だが、そんならさうして、ちつと飯でも喰つていかつせエ。」 鶴「イエ腹はいゝ。」トたちさう「ぜんか出來た。喰つていかつせエ。」 鶴「お前へおまんまもりやしたら、上つてお出でなせエ。」 藤「イエおじきは。」ト立つて「なあんにもねエなら無理にもしひられねえ。」 藤「へゝ。」トにがわらひをしながら出る。 忠「うちへもよふしくよ。」ト云つた許り、「しるはにねエか。」 鶴「晩に御汁もおかふらするのさ。」 忠「鹽引で酒エかけれアいいに。」 鶴「ねエもんねエ物を。」

忠「夕のは。」ト鶴「みんなけ。たりねエぐれエだつけ。」忠「あの坊主もよく呑むなう。一升ひとりで呑んだぜ。酒エかけねエおやあ喰へねエ。」鶴「おみきがあつたつけ。」忠「ホンニ、神酒を下げてかけよう。」ト立つて神棚のみきを徳利から、しほ引へ酒をかけながら、「ゆだんのならねえ神さまだ。かたつはうの徳利なァ、呑んで仕まはしつたさうだ。」鶴「もつてエねエ。おめへまちげエて、かた〳〵エ許りあげなすつたらう。」忠「それも知れねエ。」ト突ひながらぜんへ直り、此の内家内三人ともめしを喰ひしまひ、おつるはやつぱり手ぬぐひをかぶつたまんま、やうじをつかひながら、鶴「おめへあした顔に出なさるに、小袖や上下はどうしなさる。」忠「さればさ、こなたの上田じまをやつて、入れけへてこよう。」鶴「おめへもむごいことを云ひなさる。あれ一めエぎりだものを。」忠「禮をしまやァ、またいれけへらア。」鶴「ようかし、去年の帯もいつ出してくるか、知れたもんぢやァねエ。」ト忠、少しおれて、それでもこなたに、さむい目もひだるい目もさせたことァねエから、あんまりりきまねエがいい。」トいまの仲ノ町の事がおれにあるから、ひがみ根じやうでつよく云ふ。鶴、これもまた其の事がむねにあるまゝ、こゝぞと思ひ、「そりやァ知れた事サ、又著せたり喰はせたりすらァ、男のやくだ物を。何恩にきるもんだ。なけなしものを一めエづゝはがれて、寒い目をさせねエもすさまじい。」忠「はぐもはがれるも、てんぐ〳〵のまはり合はせのわりイのだから、身を恨んでゐるがいい。」鶴「はがれるもはがれやうに依つたもんだ。正月しまから、面白くもねエ人がきたりなにかァして。」トすこしあてゝゐる。忠むぐつとして、「てめへでエぶおつな事をいふナ。ウ、何か、今のをおれが借りだと思つてゐるか。

馬鹿々々しい。てエけエつもねにも知れたもんだ。三十くらさげて、さがりのしかゝつてつまる物かに「一口やァちようはうなもんだねエ。下りにしりやァあがるめエが、身所はおすきだらう。」忠「じッかん「われやァ人をちよめらすな。」善「ちげへのねエ事をいふもんだ。」主「おれが情なら、わしやくにさ ト件にむしくなつてゐる、下女を引はなし先をしまわやァどうするゑ。」ない、盃をあけながら、ふりむいてふたりがふうをへる。主「おのよゥはだかにして一つかふが、ふめでもあるめエ。」主「これあんまり大きなごたくな上げるな。俺が喰はせて置かさァ、今時分は親子三人が、おほちやのつんでさゑせつて歩くだらう。おらのめしヨゥくらつてゐるを、有りがてエと思つてゐねエ。」善「これァ大笑へだ、かほちやのくるまをさつてあるくものゝ、身のかはゝはいて見ねエすることアねエ。」主「云はせておきやァ。」ト、云ひながら、そばに有りあ はしたつけこを六日あげる。 鳥「ぶちわたせエ。正月しまから女房がぶつて手がらだらう。りやァぶちわたせエ。」ト下手にかゝるときわれが其の中へ、とつちよいた二者が、扇をとつて落し、小僧 トとやに引きずに れ、此處へ来る。 主「はや夜やく、稲荷の御出でだ、亭主をしぬか。」ト きわきなおち上 主「一たんの因果でこんなとけへ来たな。出ていきてえにもはだかにやァされる。」善「御祝儀さうし入れますこ」トしきてことばをまては、きのどくに思ひ、もしあさなさき つてわる、萬じまんざい、きしだんなさんといへば、主「これ かまたじけなう。」トあすで礼を入 にいきやうなお いてしまし「正月でもいゝから出ていけ。はだかになつた代り、今まで命を繋いでやつたは、喰らつたと臥いだといふだのになるから、云ひぶんはあるめエ。さァ出ていけ。」善「これは忠公むごいぜエ。

禮に來た者を、出ていけ。」ト上、そして喰らつたはよその酒、爰ではまだ茶もくらはねエのに。」清七がとこの小僧は、内のきうごうを氣のどくがり、小「檀那サア、おそくなりますから、もうおけへんなさりまし。」善「ナニ、けへりたくば、わればかりけへれさ。」善はとだなの方をむきなきゐたるが、「犬猫でもそんなに、でがるかァ出ていきやアしねエ。わつちにも相應に親分仲人もあらァ。」善「かゝさんの言ふ通り、ちげへねエ／＼。」しんない「國に兄弟一門も、あらうやらないやら便りなし。妙で御ざエす。」ト上下のまゝよこになる。つまつは困りはて、大慌てゝ、簡みに行く。家主徳八、これもいまかなかり、せつたうへあかうといふ所へよいにきたゆゑ、いさらいの羽二重の御紋付うこの小紬のまゝにてきたり、徳八「忠こう、はつ／＼しくなんだ。なによう
ござるのだ。かゝさんも、日ごろの氣質をしらねエおやァなし。そして御客も御座るに、此のまたお客もでエぶいい機げんだ。ともは小僧ばかりか。」小僧もこまりきつて「どうぞもし、おこしてくださりまし。」徳「こりやァうちまで、てめへが手ぎはにやァいくめえ。どこだ。」松「新川とやらだ、なう小僧どん。」小「ナニ新堀さ。」忠「ソリヤァ大さわぎだ、十二三町もある物を。時にマァおつるさん、おめへマァおらが所へいきねえ。けんとくの悪い。神棚の下で泣いてゐる事があるものか。」忠「ナニうつちやつておいておくんなせエ。うぬがすきで出て行かうと願ふのだから。」徳「これさそれが悪い。マアとかく夫婦の中には、ちつと氣にあたる事もこらへにやァ、長の月日に添ひとげられる物か。おらァば、アなんぞァ、ことしで二十二年といふもの、つひに一ト言でもいざこざァいつた事アねえぞ。それにや

すたけへに、腹の立つことも、ちつとこれへて見ると、何のことはねエもんだ。ハテ大事は小事から
おこるで、ありの心から鉢頭のつゝみもくづると、孔子も云はしつたぢやァねエか。」ト大屋もしつたかりの片言をいふ。
此言に馬八女は ト、コウおつるさん、おらが内へ来な。うすけエぶんのわりイ。女は女のひいきだ。
おれが聞くつて附けてやる。」トむりに連れて行く。 馬「コレ忠こう、マア理くつはあとでまはし、此の客をおこし
てけエすがいい。」 馬「コレ清公々々、諦むさん〳〵、コウ。」 三「オヽ、なんだ、よしさお〳〵
コヽトたわいなし。 馬「又馬鹿々々しい酔ひやうだ。小僧どん、どこでこんなに呑ましつた。西河岸のらんだ
くさんの。 小「お前さんはうん〳〵であがりました。西河岸でも昼時分からいままでよ。」 馬「さうだらう。
あのばう主もなるこつるで、九ツ過ぎまでくらつてゐた。コレ清公々々、サアおきさつし。コレはい
らねえかイ。コレ」 馬「オヽ、のみ込んだヨ。かまふことアねえわな。」 忠、馬「コレ〳〵おきねえ。」ト忠を
揺ぶり、 馬「何どうしたと、わからねえ。イイヤ、かはねえわ。」 馬「これおやすしよせんけへされあエ。
て。小僧さん先へけへつて、後に又むけへに来るがいい。どこぞで酔はくつたか。」 三「たべはいたし
ませんが、顔まよう御座りますから、マア帰りませう。」 馬「喰はずやくつていくがいい。」 三「ただ
ていうなせえ。」 小「マアエニに」 馬「遠慮しめエヨ。」 小「ハイ。」トいひながら、風呂敷包をしよつて出て行く。 忠「そんならい
いが、こ薄暗く〳〵、内へ帰つたら、忠兵衛さん所に話をしてお出でなさるから、後におはへにこい。」

と、おつしやつたといつたがいいぜ。そオしねえと、内で案じるから。」小「ハイさうまうしませう。」ト出てゆく。德「上下のまゝで、寝かして置くがいい。しよせんぬがせられはしめエ。」忠「さうさ。これまつよ。人が来た時かへつて悪いから、そつちへ寄せてふとんをかけておけ。わきざしはどうしたの。」無「お出でなすつた時から御座りません。」馬「ハヽ、、、、、、。」馬「小僧もこぞうだ。おのうはいけんか、開帳の取りもちおやアあるめえし。」德「時に、これはこれでいいが、俺も今礼から帰つた時へ、呼びに来たから此まゝ来たが、何も理窟は聞くまでもねエ。てエげエにして機嫌を直しねえ。」馬「何さ、何も損はねエ事でござエすが、あいつが料簡ちげへで、ぶつくさいふからの事サ。おまつもまた大屋さんを、お呼び申す事アねエのに。」松「それでもお客さんはあるに、おかみさんは泣いてお出でなさりますから。」馬「それやアおまつどんも呼びに来るはずさ。おれがこさア、いつまでもはてはしめエ。」松「すや怪しからねえ。清七さんはねえつてるて、いつそおならをなさるよ。そして神棚の方へ尻をむけてサ。もつてエねエ。」馬「なに、いつから死人も同然だ。」忠、にかけて、少しき一へより死人が悪いね。」トいはれ、德もうつかりいつてきのどくさうなかほ。「時にかみさんを呼びにやつて、中直りにあつきりとしよう。どうで湯は七ッじめへだから、遅くなつた。こゝで一ぱい祝はう。道で呑んで来た酒が、さつはりさめた。」トいふ所へ、およし来る。「どうだね、理窟はついたかね。」馬「およしさんか。ほんに正月早々から、

マァこくらうをかけて。何もしさいもねえことを、言葉の間違から。」つる「おつるさんは、機嫌はなほつたか。」よし「何さ、たわいもねえ事を、心やすだてからおこつたことさ。随分機嫌は直りやした。」つる「そんなら連れて来さッせえ。」よし「アイ、」ト出て行き、程なくつる来る よし「おめへ湯はもうしまつたから、湯をわかして置くから、洗足でもつかひなせエ。」つる「さうしようよ。そして今夜はおせわだぜ。」よし「出来てるやす。」つる「ホンニまつや、なますをこしれへろ。そして汁もたてるのだぜ。」つるは、はじめて来た内のやうに、はしごの下にすわつて、かんざしでおたばこをふかせ、下をむいてゐる 忠「サァこれおつるさん、とんと此の上なんにもおふのエぜ。先ヅいつぺい、否むがいい。おまつどんかんなさつし。」まつ「ハイ。」ト忠兵衛が方を見る 忠「上つてこい。」よし「酒はなたか。」つる「のうへ客が来て、みんなつかひました。どうでいるから、取りにやりませう。」よし「御祝儀だ。ちいと許りとりにやるがいい。」忠「どれ、おれがおなますはこしれへるから、鳴渡とつてきや。」よし「おおしを一」忠「あとからやるといへ。」よし「それでも今夕ンとは気の利かねエやつだ。今のと一所にばんにやる。」といへば、よし「然ようぶし」ように出て行く 是れより、三人なまぶしへの酒狂にあれども、目もばんけいに及び、本家のさいさくきびしければ、先づ此の本は是れぎり、〳〵〳〵〳〵。

（後編世界の幕なし　次出）（實事は不出）

世界の幕なし 終

和唐珍解序

素園時乃繁華之地景勝之靈也、就中丸山寄合之間、名妓少而娃好了、客貨比他三估一估也、我們不思一遊焉、萬里行路無奈、今般唐本三句、作註唐珍解戯文、是秋的大造化、閲一閲一歡一歡、朱樂館主人序。

序

夫れ支那の地まはりは、漢に遊女ありとうたひ、天竺の貝多羅は、衒賣女色とかきのこす。わが日本の二はしらは、鶺鴒にもよわり給はず、蒼海原の青余に、萌葱さなだの紐とけて、出合のひとつ穴にねやと、天神七代五代參、地色ばかりをかせぎ給へば、人の代となりて、伊勢源氏の物語にも、指切髪切のまことなく、二條の后、若紫も、おいらんの意氣地心元なし。今や京の女郎に江戸の張りをもたせ、長崎の衣裳を着せて、大坂の揚屋で遊ぶ、自由自在の樂しみを得る時にあひて、和漢の人の大一座、晦日の月のまん丸山にむすび、卵の四角な文字を、唐來三和と云へる中位なる色男、よからぬ贅にかきねの外、ぶらりとさがる瓢簞で、鯰をおさへた大あたりは、慥かなる物なら、我等請人にたつものならし。

四方山人

和唐珍解

唐来参和 著

雲想衣裳花想容と、清平調の詞の華、花の艶とて不知容、人老いて不知花、花あれば人、人あれば華の都も餘所ならぬ、仇の浮名を立し崎の、色の丸山かごとれて、和蘭も異国も、心ならぬ恵の道とて、唐土商売の萌き立して、そゝりさめきの華人、旅館の夕の徒然に、通詞諸共打連れて、うかれくるわの娼家入、是れ客中の客ならん。

[illegible]大使[illegible]「顧[illegible]可回[illegible]」[illegible]「顧 旨」[illegible]「明朝早起来我在這裏等候快些去了不可路上[illegible]」[illegible]「多労多時」[illegible]「去 了」と皆々帰りし[illegible]「爾門等一等」[illegible]有可貴幹[illegible]「[illegible]要瞞我」[illegible]「望貴収有些事故不要去」[illegible]「領 旨」[illegible]「明日再来迎接」と皆々[illegible]んはう一人のこる[illegible]「若者はやかしこ、若者なる[illegible]「ハイ／＼、どつつきまだ」ぞなたさまだ」是れは案内さす御案内と[illegible]いふ[illegible]下にしやれ[illegible]「没規矩[illegible]」[illegible]若い者、兼てさういつて置

くに、是れはどうしたものだ。唐の客人には、そのやうにしやれては腹を立つ。翻身便拜すといひ、叉手跪拜下去などといつて、天窗を地へほりこまねえければ、がてんせぬよ。」若「ホンニ、さうで御座りました。是れは大きに不調法。」唐「得罪我了我饒不得他。」唐「苦哉苦哉。」唐「請息怒他的不是了。」唐「我們的人下次再顧要小心些。」唐「マア〳〵、二階へ御上りなされませ。」唐「請上來坐。」唐「樓中有蜘蛛網。」唐「蜘の巣だらけではないかとおつしやる。」唐「是れは又悪口許り。まア〳〵皆様御通りなされませ。」唐「崑崙奴僕跟著我來。」と皆々娼家へ入り、二かいへ上り。唐「李君且上面坐了。」唐「怎敢。」唐「今晩は能うこそいらつしやりました。」李「初相見。」唐「初めてあうたとおつしやるは。」唐「ハイ〳〵、是れはありがたう御ざります。」ト申してもしかし通じますめえ。藤さん宜しく御うけを。」唐「ソリヤアどうでもいい。それよりちと談じる事がある。ちよつとおすこへきて貰はう。」と立ちあがり、唐「哥哥那裏去。」唐「有些事情。」唐「去了來。」藤内は廊下へ出て、唐「コレ外の事でもないが、今日連れて來た唐人は、大明の李蹈天といふ金持だから、あひかたの女郎は、梅檀を出してえものだ。そこいらは手めへも、ソレよしか。」若「しかしちと、みかたみぐるしいね。」藤「コレ家暮をいはつしやんな。手を出さつせえ。」と金を一分　若「コレハありがたう御座ります。シテおまへさ

まはこの間の通り。」萬「新造さん〳〵。」新「よう御ざります。何事も方寸にありで御ざります。」萬「しんの頼みだぞ。」と藤肉に座敷へ来る。禿「藤さん、お出でなんしたか。」李「個裏來。」萬「こゝへこいとさ。」禿「わつちやァいや。氣味がわるい。」李「没有可怕的事。」萬「マア側へいつて見や。」李「挪住他。」禿「オ、こは。エ、モウ。」李「爲甚去使不得。」とだきつく。禿「アレよしておくんなんし。いつそ顔をなめさつしやる。」李「休要頑數。」禿「エ、モウうるさい。」と振り切りに行く。李「休要跑兒姐妓面前不可告知。」若い者酒肴を持ちきたる。萬「ちと召上りまし。」萬「いかさま李哥喫一杯。」李「好了。」おいらんの道中よどたたもとよう御出でなんした。」萬「きつい御もつたいだね。」萬「ナニさうおやアおすんせんけれども。」萬「這箇杯兒奉獻娘子。」と此の所和漢取りまぜ、古風、略之。李「今日纔得相見。」萬「そし、主さんとおつきえなぞ。」萬「初めてお目にかゝつたと、おいらんへの挨拶さ。」李「どうでも唐のお客さまがたは、御丁寧で御ざりますよ。」萬「こつちからも、何とぞ相應にいつておいておくんなんし。」萬「しようおへ〳〵「初接高風、不勝欣躍若蒙不棄感謝不盡。」李「這般恩惠折殺俺也。」萬「なんだか唐音と申す物は、むづかしさうなもので御ざります。」李「敢問娘子尊名。」萬「喚作椿檀。」李「青是多少。」萬「今年十八。」李「我當齊花容貌標致生得出塵。」萬「當時名妓數一數二。」李「多虧得名妓眞正多

難得緊。」「恐れながら、あなたから献じませう。」「牡客来欲一杯哩。」「ソレ、一葉お酌をしやな。」「アイ。」「蒲甕一杯。」「しつかりつけときな。」「全體あつちの客衆は、酒が強うおざんすねえ。」「せん頃は御出でなされました、朝鮮のお客さまは、どうなされました。」「ム、功慶子か。此の頃は寄合町へ許りのぼせていくよ。」「主なぞもお出でなんせうね。」「さるぶん折ふしあゐりやす。」「娘子喫煙。」「客から女郎へ、つけざしもありがてえ。それおいらん、煙草を呑みな。」「よしなんし。そんなことを云ひなんすな。」「吸口を折つて呑むと、腹がたつぞ。」「見つけなんせんから、ようおざんす。」「藤内哥哥敬備一杯。」「どうも此の酒はちと甘口だ。是れその子、アノ供部屋へいつて、崑崙奴にさういつて、持参の酒がある筈だから持つてきや。」「アイ。」「只さう許りでは不通で御ざりませう。」「ホ、唐音でなければ、意が通らねえ。いつたらの、『那箇四角酒快些將来。』といふと、『拿進去』とか何とか云つてよこすよ。」「なくて子がすきだとえ。」「ホ、、そこさうおやすねえわな。」「それだつてもをかしくつて、どうもいはれやせん。」「ホ、役に立たねえ。唐音も何もいらねえ。おれがいつて取つて来よう。」と立つて行く跡へ下よりはうばい女郎「藤さん。」「なんだ。」「ホ、、」「青柳さん、おはひんなんし。」「アイ。」と側へ来て、「藤さん、わつちが客人は、

なぜきかんせんえ。」三ム、呉三桂か、今日さそつたけれども、用があるとつてこねえ。事によると跡からこようよ。」三「煙草を呑みなんし。」三「アイ。」三「毛唐人でも、ソリヤア色男だから、ぢうてきにのほせるの。」三「よしなんし。きざな。」三「ハテさう云ひなさんな。おれも八九年も續けて、こつちへ來たらうが、此の國の女郎買の馬おりは、ソレお前だわ。よしか、おれも日本の言語を覺え、おめへも唐音をおぼえるほどの久しい馴染で、咻のこんたんにも何かがわかつて、書合はせをしようといふ物だから、ソレートト通りおやアねえよ。」三「どうだか知りいせん。」三「ナニしらねえ事がある物だ。アノせんかうの匂ひをかぎしめるが最後のすけ。」三「此の通詞あがいはせておけば。ソレ唐歌さん、そつからこそぐつてやんなんし。」三「アイ。」三「ア、おやまつたノ\。コレおへんの鸚八と、此の唐人がこれてるるから、また機嫌がわるい。」青「ナニ唐人にかまふ物だ。」三「一勝哥不可插口嘵嘵。緊。」三「請想 請想」ソレ見たがいい。しかれた。」三「俺的性兒不喜歡鬧動只喜歡閑靜。」耳ならだとよ。」三「てめへに惚れたとさ。」三「頭。」三「ヘエ。」三「サア青樓さん、一ばい吞みねえ。」と作を三し唐人に付い「俺明得他意。」三「我竟不認得他。」三「呉三桂該死也。」三「敢 領 傷 杯。」三「わつちかえ。をんなたはぞかり申しいせう。」三「なるほど青樓さんは、よくあの言葉を聞きとりなんすぞ。」三「通

一壺酒壺。」唐「在在、」と見していふ。こうばい女郎、廊下よりたつと出を見へ、錦「あてゝ見なんし。」唐「アレサ、だまつて押へなんすりやァいいに。」唐「ハテナ、是れ許りは誰だか知れねえ。」錦「ホ、、、何にもならぬ事をした今夜はよく來なんしたねえ。」唐「サァ下に居ねえ。」錦「ぬしやァ、」唐「あれはせんど咄した、李踏天と云ふ毛唐人さ。」錦「へエ、。」と唐人に向ひて、「モシおはつにお目にかゝり申しんした。」唐「獨今日天色好。」錦「どうぞ是れからこつちへも、御出でなんし。」唐「阿暫酒醒了些。」錦「さやうさ。」唐「ホ、、、、た、錦州さん、そりやァまあなんの事だえ。」唐「大笑ひだ。」錦「おれも餘りがてんが行かぬから、默つて聞いて居たが、此奴は大笑ひだ。」錦「マア聞きなんし。あの私がね、言葉をかけいしたら、「近日。」どうとやら云ひなんすから、あてつぽうに、「どうぞ御出でなんし。」といひしたら、「ア、あつい。」とやら云ひなんすから、「さやうさ。」といひしたが、逢ひしたかえ。」唐「氣が逢つたさうだ。」錦「そしてねは、何と云ひなんしたのでおざんすえ。」唐「ぜんたい唐人が、この子の言葉をかけたを聞きつけねえで、獨言に、「今日は能い天氣。」とか何とか云ふと、「どうぞ御出でなんし。」「ア、醉ひがさめた。」といふと、「左樣さ。」何の事だか、ねつからをかしい。」錦「ホ、、、ハ、、、。」唐「笑甚麼休要唉話我。」唐「休要惡猜。」コレみんな笑はねえがいい。手めへいことかとおもつて、此の毛むしがあつくなつた。」

李「敢問笑甚麼。」甚「此妓好咲得緊。」李「新來的在個裏頑耍則箇。」吉「錦州さん、爰であそべとさ。」甚「ナイ。」若者酒を持ち來り、若「サアノヽ、御酒を持つて參りました。」甚「オヤいかいこと持つて來なんしたねえ。」吉「その中に居るのはなんだえ。」甚「こちらの蠑螈、これが蛙、その次のは蛇。」吉「きみのわるい。生きてるいすかえ。」甚「何こしらへ物さ。」李「硝子透亮了好看。」甚「此の酒を、マア呑みなんすか。いやだねえ。」吉「さてシアノヽ、此の事許りふらそことゝ云ふと思ひいしたら、天井の事もふらそこといふねえ。」吉「ばからしい。そりやアふなそこだわな。」李「我喫酒出酒鍾。」李「さけを呑まうといふに、おまへよくを出しやな。」[illegible]「アイどこにえ。」[illegible]「エ、この子もじれッてえ。いつもの引出にあるわな。」[illegible]「アイ。」へ引出よりこつぷを出し李へ渡す。酒を呑んで李「最好甘請試用一杯香氣妙極。」甚「好了。」吉「わつちやア一すいつてきいせう。」立あがる 李「再座咲談。」甚「そんなら後にきいせう。」[illegible]「ハイノヽ。」甚「それはえるもんだの。」吉「ホヽ、、、、」笑ひながら出て行く。甚内は酒をのみて[illegible]「不但香氣好味道絕妙。」吉「此の酒をな郎衆が呑むと、むしやうにその客人が、かはいく成るといふ事では御ざりませぬか。」吉「おいらは呑むめえよ。」李「擔火來。」藤「それ火がないとよ。」李「アイ。」李「少些字來不甚多。」ヒイーレイ、[illegible]」甚「イヤ唐でもあの事は火人と云ひすかねえ。」甚「何日本の言葉を覺えたな自慢にい

ふのだ。」「どれいつて、火をいけておかう。子供とりに来や。」ト立つてゆく、「ア、言葉をおぼえねえんすから、めつたな事は云はれねえねえ。」「ナニこの唐人などは、今年はじめて来たから、鼻の先でわるく云はれても知らねえ。」「俺嘗認得那个娘子。」「錦州さん、おめへなぞはみたと云ふが、おめへ知つてゐるか。」「いゝえ。」「ム、だれ〳〵、この中備前屋へつれていつた時、おめへがみせにゐたから、それでだらう。」「ナゼあつちへは行きなんせんえ。」藤「鶏をぬすみにかゝつて、見つかつて逃げる拍子に、まがきのどぶへ落ちて、それから面目ながつて行かねえ、べらぼうなやつさ。」「ハアクツサメ。喫糞了。」新「オヤくしやみは、唐でも同じことだねえ。」「ひとりでに出る物だから同じ事さ。」「ハアクツサメ。那箇説我事也。」「先刻そばで悪く云ふものを、くさめも出ねえでどうふるものだ。」「ハアクツサメ。傷風不耐須。」「是不好了。」ト羽織を脱いで路天にきせる「多謝多謝。量尺正有了分寸不錯了眞正相像了。」「イヤ羽織を着なんしたかたちは、よくふくさんに似て居なんす。」「福とは福輪木が事か。あれは紅毛人だ。」「像不像比一比看。」「どうしたか、今のことばがしれたさうだ。」「娘子休要客套。」「モシ何さん、客じんにするなとさ。」「いつそなえ。」「契些酒喫。」「他是淺量。」「愛的甚麼東西。」「最愛彈唱。」「藤哥彈弦。」

「請兎」「なんだとえ」「おれに三味線をひけとよ」「彈きなんし」「コレ二葉、そこの三味線を出しや」「ヲイヲイ、ひきなんし。」「どうも久しくひかねえから、なぞとう致はかもうつたうしいが」「苦辭不脱」「又來自負了」「モシいつそね、唐の唄を彈いて聞かせなんし」「おもしろくねエやつのてつぺんだよ」と調子を合はせて、

「一更裏天、一更裏天、月照紗窗、人也未眠、被褥兒、寒凍得揮身上顫、我的肝肝我的心肝、何處貪花、撇下了我。撇下了我、偏在花街上嗣。」「越更感激」「モシ、それでしまひかねえ。」「いつそ馬鹿らしいもんだね」「唱得好蝴的是聲清韻美了、且覺眞另外好聽」「唐人ひとのはわるやつさ」「それより日本の淨瑠璃を語つて聞かせなんし」「それでは又、こいつが譯が知れねえからてれる」「ソリヤアようおさんすなァ」「そんなら斷うしよう。この中あれが淨瑠璃なのごたかいが、唐音に直して置いた。それを語つて聞かせう」「それは又、こつちでわけが知れえすめえ」「何でもマア、かたつて聞かせなんし」「何にしようなア、ム、曦鏡の身替り場にしよう」「快些拿來」又調子を直して、「日月互明惹起天災偶然浮雲有覆失光年幼王母后與讃似楚閃可傳鴻永井右馬頭宜明須命囚監」折から若者「モシおつれさんが、お出でなさいました」「異于相

か。」若「さやうで御ざります。」若「那箇來了。」藤「吳三桂的。」藤「他也來得好。」梅「是れ二葉、その三味線をかたづけや。」元「イヽ。」鍋「わつちやアいつて來いせう。」葉「ナゼ、マア遊びなせえ。」

錦州はかへる、吳三桂はずつと通り座敷へ入る。李「我等兩人老早到這裏等候先生先生却如何恁地來遲了。」吳三桂「飛也、似奔將過來了越急越不明白列位早至等久了恐懼不過。」桂「今夜は能くお出でなんした。」吳「多福。」吳「那箇座。」吳「列位在這裏我豈敢占上座。」青柳來りて座敷へ入る。青「今夜はどつちかぜが吹いたか。よく來なんしたの。」吳「僑居冷淡過日如年了。」青「それで來なんしたのかえ。大かたそんな事でなくば來なんすめえ。浮氣だなう。」吳「小生不浮浪之徒不勝戀慕所以特地走將過來。」青「ソリヤア寄合町の事かえ。」吳「俺曉得儞今宵因有些障礙却來這裏戲弄我。」青「よしか。そんな事を云ひなんすな。たれも客はおざんせぬ。」吳「莫說謊。」李「彼此難辨可否。」葉「我自心裏曉得了今夜差不多好了。」吳「信不得。」若「今晚はようこそ。」吳「怎樣久不相見。」若「ハイく鳥渡マアいつて參りませう。」とたつて行く。新「吳三さん、約束の小人島をもつてお出でなんしたかえ。」藤「小人島とは。」新「イ、エ、ナノ枕箱の引出へかつて置きいすからさ。」吳「一兩日内拿來了。」新「まただましなんすな。」吳「不敢說謊請勿生疑。」元「おいらは小人島もなにもいらねえ。手長島になりてえよ。」藤「ナ

ぜ」「高い所へ手が届いたり、また酌や何かをするにいいからさ。」「少妓是有件要相託之事。」

「是れふたばよぶぜ」「エ、。」「拿茶來。」「お茶をあげや。」「還混的好不要大熱」

「ぬるいがいいによ。」「アーイ。」と立つて行く。やり「ちがいしよから。」「從家纔出甚麼。」

「旦那さま、此のごろはすきと御出でなされませんの。」「とくと用にかまけてさ。」「常常壯健。」

「おかはりもなしかとさ」「ハイありがたうござります。」「要與婆婆商語。」「モシ近づきに

ならうとさ」「ハイどうぞこれから、お目をかけられて下さりまし。」禿茶を持ち來り「ハイモシ、そこ

をちつと、御茶を持つてあがりました。」「どれ〳〵、爰へよこしや。」「御膳はまだかな。」「イ

イエ。」「晝のおかね。どれいつてせつついてこよう。ハイ後にほど。」と立つて「與哥一杯喫得大

酒也好。」「猜醉來罷請兇請兇。」「要和佩化拳。」「這樣事也好請李哥在對面坐則簡。」

「おいらに見ようや。」「走開去休要在個裏攪遶。」「コレふた葉、もちつと後へさがりやな。」

「一、五、十、兩、七、無。」「那裏了。」「モシこればかりは、日本のとあまり違はねえがやアおぜ

「四、九、三、八、六、二。」「我不敢當。」「錯過了氣甚不遂。」「此の所へ若者し

んせんか。」「ぜんたい唐土から來た物さ。」「衆皆個裏來。」「どうも、なにも差

て「ちよつと、を。」「これは跡へさがらでアなるめえ。」

上げる物は御ざりませぬ。」唐「調理好甚麼東西都好喫。」唐「把官路當人情沒什麼款待有罪有罪。」日「半東感激。」唐「李稻天葱菜猪兒怎麼樣。」唐「是大明了。」日「料理が、いとつてはゐるよ。」唐「今いつたタァ、ミ、ニ、ヤゥとは、此方でいふ日本だといふのと同じ事だ。」日「それはありがたう御ざります。まことに何もあげる物は御ざりませぬが、その牛のあんかけが、御馳走でござります。ふるせでは御ざりませぬ。」日「いか様これは新しさうだ。」唐「牛兒煮了吃更妙燒的滋味不好。」日「失禮請飯。」唐「要喫。」唐「鶏の皿はそのちよくに御ざります。こちらのは羊の油でござります。」日「先生飯桶剩些。」唐「又來弄舌。」唐「モシ口のはたに、まんまがついてゐるやすよ。」唐「講甚麼。」日「イ、エ、サ。爰にまんまが。」唐「越攝越生我也厭了這個髯鬚。」日「手前があごへ手をかけたから、髯の事だと思つて居るやつさ。」唐「莊客吃一杯如何。」唐「他是海量。」唐「喫了。」日「和介どん、それ酒を吞みなんしとさ。」若「ハイありがたう御ごります。」唐「賣發他。」日「ソレ花を下さるとさ。」若「はなとはありがた山櫻、しかしこれはなんで御ざります。」唐「銀錢だよ。おれがはうへ持つて來や。いつでも金と取りかへてやらう。」若「ハーこれはありがたうござります。」唐「コレコレ、そこが例の通り三拜する所だ。」日「ホンニさうで御ざりました。かうかね。」唐「オヤ馬鹿らしいな

りだね。」「ホヽヽヽ。」（若者あまりじぎをする拍子に、懐より[illegible]ふんどしの落ちたるを落す。番頭天手早くとり上げて）「什麼了。」「とんと見なんし、此の人はいもじを落さしつたよ。」「怪しからねえ。」「是れはとんだ物を落した。」（と赤面する。）「先生是什麼了。」「我也不知。」「藤内是什麼東西。」「なんだ〳〵とつて聞くには、おれもくたびれたぞ、日本頭巾。」「アレ見なんし、紐の結び目を口でくはへて解きなんすわな。」「是れはどうもたまらぬ。あなへも入りたくなつてきた。」「好這一頂新頭巾。」（と頭へかぶりて、紐を頤の下でむすぶ。）「すやどうせうなう。かぶんなんした。」「おれも言ひやうがないから、日本の頭巾だといつたによつてさ。」「そし藤さま、をがみます、お返しなさるやうにおつしやつてくださりまし。」「いつそをかしくつて、腹が痛くなつた。」「這個頭巾甚麼價錢賤則我也要買。」「價金三兩二分。」「價錢賤。」「爲什麼。」「奉獻大明皇帝。」「禪も三年とやら、アノ犢鼻褌を買ひたがるぞ。」「是れはとんだ事だ。シテ何になりますへ。」「國へ持つていつて、彼方の大王へ獻上物にするとよ。」「いかな事でも。」「我強買了好好說一聲。」「あれを無理に買ふと云ふが、掘出しと云ふものだ。いつそうつて仕舞はねえか。」「怎麼樣準不準。」「細細說知他說道現金賣不除價。」「算。還價錢。」（[illegible]分金を出して渡す）「[illegible]兩」「好極費了錢賤。」「ナアノ〳〵若い者、此の金は山わけだぞ。」「そ

れでも。」藤「ナニサ、かまふことはねえ、そつちへマア金をしまつておいたがいい。」若「ハイ〳〵。」吳「買著了利市。」若「アレいつそ喜ぶわな。人を茶にしたせんきだ。」藤「ついぞねえ。」吳「崑崙奴在那裏來吃酒。」藤「いかさま、くろんぼうめを爰へよんで、ちと酒を呑ませて騒がせう。」青「なんぞ藝がごさんすかえ。」吳「他是手藝極多專做幇閑過口。」崑「何をしいすえ。」藤「かるわざがきつい物だとい。」若「是れは竟ぞ見ませぬ。よんで參りませう。」花「わつちがいつて來いせう。」と立つて行く。崑「かるわざなら、向うの舞臺でさせて、こゝから障子をあけて見なんし。」藤「それがよからう。そこの三味せんをとつてよこしや。」新「アイ。」李「煎個燭心再明亮些。」青「らふそくのしんを切れとさ。」若「ハイ、こゝらへ置きませう。」ト廊下に崑崙奴「餘外有什麽客人若太拘禮我要辭了不敢去。」花「アレそつちではおざんせんよ。いつそまつくろだから、どこにゐさつしやるか知れねえ。」崑「那裏那裏黑地裏是個難走。」花「一所に來なんし。サアはひんなんし。」崑「有何事情。」李「來來吃一杯。」崑「感激不盡。」藤「ぐつと大きな物であふらせるがいい。」吳「儘著斂得直個大海量。」新「早くかるわざをさせて見なんし。」若「マア跡でさ。重ねてあがれ。ソレお酌。」藤「發樣好看。」藤「爾做輕捷。」崑「領旨。」ト酒をかされてのみ、立ちあがりて舞臺へかゝる。藤内三味線をひく。みな〳〵けんぶつ。吳「娘子們道技最有趣請看一看。」青「せんだんさん。見

なんしとさ。」「アイ。」「大干係得緊。」呉「有趣得了不得。」「衆位請喝采。」「妙極々々。」

くろんばうはいろ〳〵の事を仕廻ひて、久元の所へ坐る。「成程恐れ入つた物で御ざります。中々日本の人などには、出來ませぬ事で御ざります。」「わつちやァあぶなくて、ろくに見いせんわな。」新「いつそ面白かつたねえ。」「阿痴倦。」「多勞多勞。」「アレ見なんし、此の人は鼻の下をいつそなでさつしやるよ。」「あれは今のおらんださの高慢さ。日本ではあごの髭をなでるが、唐土ではなんでといふと、鼻の下のひげをなでさ。」「怪しからねえ。」「再起酒。」「滿灑。」「沒道理。」「豪傑勉強。」「せんたい強い酒でござります。」「便賭氣飲了好個海量。」「此等歡喜事難再有了。」「アしきもねえ。此の人は鼻くそをとつて、肴にさつしやるよ。」皆「ホ、、、、、。」「あの酒を呑んだら、又なにかをどらせう。」「どんなをどりでござんすえ。」「此の頃日本の踊をおぼえてきたといふが、それよりはいつそこれが得手な、かほちやをどりがよからうと思つて、節も手も其の儘にして、文句ばかりこの言葉に直して、教へて置いたよ。」「見たいもんだね。」「をどらせて見せう。崑崙奴來做鼓文。」「領旨。」と又立ち、「什麼了。」「他是一味裏用心學日本小曲。」「好了好了。」くろんばうは立てかぶりてをどる。座内はみな〳〵耳をひく。「いつさんのさまさ〳〵のきのさまは、じしんでまきのきのさまよ。」

藤「小曲差了、雪の柳のその樹の樣は、如斯喝。」北「いきさまきりのそのきのさまは、如此也不差嘛。」藤「兀自差了。」北「大醉酩酊舌頭也不肯轉且罷休了。」呉「使得了。」北「モシそりやア、しやみこ踊といひすおやアおぜえせんか。」藤「暹羅といふ國に、甘波邪しやむろなどといふ國が類してある。其の國から出た踊だから、かほちや踊ともいふ。又しやむろ踊と云ふべきを、皆人が云ひあやまつて、しやみこをどりといふのさ。」新「モシ、あの人の背中のぽちく白いは、なんでおぜんすえ。」藤「アリヤア、今夜灸をするゐる筈で、ごふんで點をおろして置いたのさ。」北「ほんにかえ。馬鹿らしい。」北「阿阿爛醉如泥請兔請兔。」と足をなげ出す拍子に、銚子がころぶ。藤「これはしたり、何ぞふく物を。」若「ハイく。」李「崑崙樣了可惡。」北「有罪有罪請兔請兔。」呉「初始相會不得無禮須要小心些。」北「請恕請恕。」若「サア〳〵雜巾。」北「不要拭。」と雜巾を引きたくり、唐「有趣綿布。」藤「爲什麼。」李「要做盛煙袋。」青「オヤあれをたばこ入にしなんすとさ。」青「どうしてねえ。」藤「おほかた持つていつて、縫はせるのだらう。」北「這个雛妓十分嫖致忍耐不住。」と禿にらしろからだきつく。禿「エ、モウ此の人は、いやらしい、よさつせえな。」藤「手めへに惚れたぜ。」禿「すかねえ。」北「吃驚了扭轉身來不要腦不要腦。」禿「アレしつらつこい。背中に鼠が居るわな。」藤「ドレ出して見せや。」禿「オヽくすぐつてえ。まだ子で

おござんす。」「モウ目があいたか。」「什麼了。」「ねずみの子で御ざんす。」「請一看。」「見せろとよ。」「わつちやァいや。」「お目にかけやな。」「アイ。」「それにけた。」「どつちだ。」「たしかこつちのはうへ。」「鼠兒在這裏。」と鼠をつかまへ、そばのいり酒をつけてくつてしまふ、「まや。」「休做沒良心的事。」「美味美味。」「けしからねえ。此の人はくはしつたよ。」「これはとんだことで御ざります。」「エ、モウにくい人だ。折角人が可愛がつて、かつて置く物を。」と泣聲になる。「泣く事はねえ、今度俺がいいのを持つて來てやらうよ。」「[illegible]物事動不動要癡呆。」「ヂエ〳〵〳〵。」「これはどうかしたさうで御ざります。」「マア廊下へつれていくがいい。」「背中をさすらつせえな。」若者背中をたゝくと、鼠の首玉と鈴をはきだす、「嘔吐。」「是[illegible][illegible]得緊。」「くびたまと鈴を、のどへひつかけたさうで御ざります。」「硬礫咬不碎。」「わつちやァ、胸が悪くなつた。」「いいきびだ。いつそ今ので死んでしまへばいい。」「あまり酒がすぎたから、鼠をくつたりふざけたりするから。」「モウいつそ寐かすがよからう。」「ホンニきついゑひやうだ。」「[illegible]いゐになりました。サア〳〵つれてまゐりませう。」「崑崙奴去房裏罷。」「多承厚款感謝不盡列位安置。」「サア〳〵。一所に行かつせえ。」と手をとりて連れて行く、「崑崙奴這[illegible]踉蹌的去了也好笑。」「くろんばうで大笑ひをした。モウ何時

だか。」と腰の根付時計を見て「モウ九ツ半時だ。」 李「夜深了。」 芸「我也倦了些。」 李「角落頭房裏去睡一覺也好。」 わか者来り 若「扨今晩は、いろ／＼と面白い事を見ました。おとあちらへいらつしやりまし。」 芸「よからうよからう。」 李「去了去了。」 若「是れ子ども、見通しへおつれ申しや。」 若「なにさん、ついでに其の煙草盆を、あつちへ持つて行きなんし。」 新「アイ。」 李「那裏那裏。」 李「サア御出でなんし。」是れより三人共床廻り、芸者は一人蒲團の上に寝て居る所へ新造来り、 新「藤さんちよつと耳を出しなんし。」 芸「だれも居やァせず、なんだ言ひやな。」 芸「イ、エネ。まだやりて衆やなにかが起きて居るから、おいらんは後に見あはせて来なんすとさ。そつとおめへさんエ、さういつてくれろといひなんした。」 芸「ソリヤァそれでいいから、ちよつと火を一ッ持て来てくりや。」 新「火がねえとえ。アイついでに茶もくんで来いせうか。」 芸「ム、、それも一ぱい。」 新「くんで来いせう。」と立つて行く。李竹天は奥の座敷にて退屈になりしや、唱歌を唱ふ聲聞える。「兀的昆蟲簇雙飛鳳蝶上下不失偶才貌相攜倶有情。」此所へ禿来り、 禿「藤さん／＼。あのね。おいらんの客人が、先刻から、ニヤンツウ、ニヤンツウ。と云ひなんしたがね、又今大きな聲をして、何か仰せえすが、何のことだか。一寸御出でなんし。」 藤「ム、そりやァ『おいらんを呼べ。』といふ事だ。」 禿「アレお聞きなんし。何かいつそ大きな聲で。」 芸「ドレ。」 李「蝶也亦何知某有味嗚呼俺不知他沒深情。」 芸「ム、ありやァ、

たいくつしたから、きざすを唄ふのだ、いやな奴の。」禿「うつちやつて置いてもいいのかえ。」唐「ム

ム。」禿「おやすみなんし。」と出て行く。新造来り、新「サアおあんなんし。」唐「ありがたく〳〵。」新「モシそれ、ど

うか唐音のやうだね。」唐「ヲヽ唐音ではカンキといふ。」新「モシどうぞわつちに、たういんをちと

教へてくんなんし。」唐「するがよい〳〵。」新「さつきしなんした箸は、あんまり違はねえやうだね。ア

レをマア教へてくんなんし。」唐「アレもむつかしいのさ。なりだの、カレンだの、ロンジだの、サイ

ナンだのとつて、急にやア覚えられめえ。」新「ソンナラ、ほんたうのをしへてくんなんし。いつそね、書

き付けて、今度持つて来てくんなんし。」唐「持つて来てやらう。其の代りに手めへに無心がある、聞

いてくれるか。」新「なにをえ。」唐「おいらんにかくして、　　　」新「

唐「いやな事はねえ。おれがあひかたは手めへだから、

」新「アレサ、モウよしなんし藤さん。しつぶかえア引つ。」下にて騒ぐ　唐「あら嬉さん〳〵。」唐「ア

イ。」唐「寝へちよつと来てくんなんし。」新「アイ。」と立つて行く。唐「コレ、顔色のかえた。」唐「そつと引き

かへて。」新「アイ〳〵」と新造は出て行く。　唐「ドリヤ此のあついに。

何をそんなに腹を立てなんして、挨拶もしなんせんの。」唐「盗人たけだけしい。腹をたつた訳

は、手めへの小胸にある事だ。」唐「ナゼエ。わつちが胸にどうも。」唐「ム、どうも言ひわけはあるめえ

若「ナセエ、おれのさ。此中らいふ通り、ソンァノ客は、畳踏衣裳をねだらうといふ所だから。」菊「オキヤァかレ。畳踏衣裳は、あの能なしやにさせるつもりだから、それで今夜狂言をかいて、つり出した。是れ程手めへを思ふとは知らねえで、それにくつつてゐて。」馬「よしなんし、それだによつてもの客は、なんでもねえ事にいかいとうかしをして、切れてしまへやした。ぜんてえこの頃は、ぬしが気がおかしくなつたよ。つき合ひの何のといふは附けたり、より合町に面白い事でも出来たらう。」菊「そんなら、合町へいけば、おれを長棹にして、つき出してしまはうといふのか。」馬「どういふへばかういふよ。ソリヤァぬしが邪心といふ物だ。」藤「邪心だかなんりやうだか、女の心は知れねえ。」

「コレぬしは。」馬「気が違つたさうさ。」菊「アイ気が違つたのさ。よくつもつて見なんしな。ぬしが客なら突き出す長棹のと、いふ事もおせえせうけれども、かうして苦労気案をして、人の目顔を忍んで、逢ふ中ぢやァおせえせんか。ハテ突き出す気なら、おむつさんと云ふおかさんのあるのを、知りつゝかうして。」菊「かうしてどうした。」馬「待らなんし。誰か来た。」馬「誰だ。」「わつちでおざんす。」若「そんならいいに、出損をした。」馬「其の持つて居るのは何だ。」新「おいらんが、此の蘭香の匂ひを嫌がりなんすから、下の佛だんの蘭花香を持つていつて、そつとすりかへてきいした。」馬「唐人は、モウ寐言でも云つてゐなんすか。」新「ナニ色々の道具をかざつて、ふと

んの上に待つてるなんした。」折から李蹈天廊下にて、李「白日地等到幾時、娘子々々、梅檀婦人那裏去、娘子娘子、呉哥々々。」聞きつけに来り呉「有何貴幹。」王「梅檀那裏去。」呉「我也不知。」李「藤哥々々。」と藤内ざしきへはひりにかゝる、皆々「ホイ。」あかりをふきけす。

和唐珍解 終

和唐珍解

跋

九州郭中の五人に、變窮變知氣の二人を加へて、七人一座の間違ひだらけも、時にとつての滑稽ならん、其のこつけいかうと鳥かなく、東の人のはらに合はせて、嘘と實の合の宿、著々羅はおきに支那もろこし、きいた風土の風俗に、さつと小菊のはなをつまんで、珍ぷんかん鍋の耳に殘りし事を、負中は丸山、唯まろかれと思ひ、机に向ひしも、方々に筆の誤りあれば、御さけすみもあらんかと、をしみやら言譯やら、ちよつとしりへに此の事を、鉋屑もいへばいふ。

唐土乾隆五十
　　　乙巳初春
日本天明五年

唐來參和

古契三娼自叙

潮光や、浪速の葦は伊勢の濱荻、北郭にふるといふ言あれば、河東にてらすといふ言あり。所かはれば南驛育の謂も、朝草の名によぶ、さりやみつの女肆、言風俗各異にして、人情亦異なり。今、中、古、品の人ン物を拵へて、その人情をかたらしむ。これを知るものは、これを好むものには如かず。これを好む者は、これを樂しむものにはしかず。我未レ樂、何ぞ竹邑が上臈を學び、白菓梅家が黄鐘を喰ひ、大木戸の餺飥餅の大いなることを知らんや。誠にしかり。こや古契の三ヶ娼にあらで、これの殘笑とも見たまへかし。ときに天明七つやのひどくめん、紙花喰ふひつじの年、通人の羽織長き春の日、花川江戸羅月が別業松風亭に毫をとる。

作者　京　傳　誌（印）

序

京傳さはめて三つの色町に明く、今一冊子を著はす。是れをひらけば、ゆふべけの晝寐の貌のおほひとなり、これをたゝめば、傾城の酒あたゝむるあふぎともなれり。されど大籬ふりにし代より、竹ばしごくだれる今も、人の口に戸ざしなければ、何某是れなうれへざらんや。我はなほ町抱への身のさちなれ。もしあぎとをならすほんくらあらば、腕こくをもて是れをふさがん。そのことわざしを、此の華の鼻のさきにむすぶてふ、たなだひのはしにしかいふ。

山上町鳥のもの
あふさか市樓
かふ喊白書　印

「吉原」

北方有二佳人一

新都江都地、青樓多二美人一、明眸[illegible]、[illegible]、[illegible]

[illegible]

古契三娼

〔深川〕

晉謝安携レ妓遊二東土一

おむかへと一度に聞くやほとゝぎす

〔品川〕

家交ニ江河南北岸ヘ 心通ニ上下往來船ヘ

北尾政演畫

たま一たそたれかはけふのつまならむ
あだしうき世にあだし身なれば

吉契三娼

古契三娼

山東京傳

鐘ひとつ賣れぬ日はなし江戸の春。されば御江戸の繁榮を申すは、大引の手赤の助言をするにひとしかるべし。誠に土一升金一升と申せば、雕塚を穿つても、金のなる木の實生はあることかし。わきて遊里の全盛はいふも更なり。大門の仕置場たえて、堤に飛びかふ螢も、刑鞭の朽ちたるかと思はれ、橋下の火の見櫓に、風見の烏おどろかす、馬を四ッ谷の新宿につなぎ、牛を高輪の南にはなつ。かかる江戸に住みては、夕に笛をふいて、朝に紫の衣を着し、昨日まで[illegible]あきなひし番太郎も、けふは地主の花をさかすることかし。通町のほかに横町あれば、横町のほかに新道をひらき、八百八町は、深川本所の中にも數へたらず。町鑑にもれ、江戸繪圖に書きつくしがたき、小路々々またすくなからず。稻荷新道に白虎湯の看板かけしは、所の名にめでし開運なるべく、下駄新道と聞いては、[illegible]のにほひなつかしく、樂屋新道を通りては、見たきものといへる清女のことのはを思ひあたる。[illegible]新道も、[illegible]によらば、[illegible]の弘慶子が住むべく、不動新道に護摩壇かけしは、[illegible]の屋の

門口ならん、猫屋新道に鰹節屋はなけれど、廐新道にみごと廐はあり。瓢簞新道に鰻屋はあれども、繪馬のなきこそ殘念なれ。觀世新道の童は、「有り難の影向や。」と謠ひ、狩野新道の藏の壁に馬を畫きしは、勸學院の雀なるべし。かかる名高き新道にもあらず、爰にきんご新道といへるは、金吾中納言の住み給ひぬる古跡にもあらず。主馬の小金吾が所緣もなけれど、圍ひものの多くある故に、かく名づけしも最もぞかし。人通りは常にたえず、らうのすげかへ世帶のやにを通し、鏡とぎは俤の日々に變るを悲しみ、祭文となふる山伏の、爰に哀れを留むれば、長々の浪人來りて「御子孫も御繁昌」と祝す。ちやらつく雪踏の音は、日なし貸しの步行きぶり、駒下駄の虛無僧は、藏のむだ書よりぬけ出でたるかとあやまたる。川越極樂寺本堂建立、たがァ／＼。かし本屋の風呂敷包は、片々へかしぎ、鍋釜ゐかけのへな土人は、そばやのうどん箱なり。鷄は砂水に羽蟲を拾ひ、日間のぺん／＼草は、犬の糞をつらぬいてはゆ。己とふるき軒のつりしのぶ、やれたる竹簾かけし緣前に、將棊を、さしてゐたるが、「お手には。」と問へば、「金銀二枚に墨のすりかけ一ッ。」とこたへしは、歩のたらざるなり。勝手よりそばやのかつぎ呼びかけて、「ぶつかけ二ッ。」と誂ふるに、女房が「盛にし給へ。」とすゝめしは殘りたるしやうゆを、ひや飯へかけてくはん望みなるべし。大屋どのの娘子が寒彈に目を覺し、向うの親父が看經にねむけを催す。つねに日の目さへ見ぬ新道の住ひも、園生に植ゑてかくれなき、く

れたるとよばれて、きのふまで川竹をつとめしも、其の身の果報とて、さる大盡にうけられ、けふはおひじの名をつけて、よしとあらためさせ、ゆく／＼は内の首尾とゝのへて、御新造さまともよばせん心ざしなれど、暫く竝に圍はれとなりけるに、およしははや歩行きぶりにも、八文字の癖をかくして、急に白地あかすれど、まだ里言葉の折ふし雜るもをかしかりき。男女に小僧までつけおかれ、一日のわざとては、芝居咄と阿猫の世話やかるゝのみ。鉢植のまんりやうは愛せず、己が身をうけられし代金の額ははや忘れ、淺草の梅ほりに人仕事して、その日をくらすは母、攻づかひの間には、紋附背つてあるきし兒を、花魁がおとし米見つけし如く、一度にうかみ出で、日なしの七口をかたみに殘し、去年世をさりし親父まで、草葉の陰にかた眼ぬいで、姉のさしみ引き寄せて、茶碗酒すふる身とはなりぬ。目の木は鳳凰國とやらん聞けど、唐もやまともとかく女の世の中にこそ。此の圍ひの向うは、表に額にて古文字書きたる障子をたて、大山石尊の御札にならべて打ちたる宿札に、女中御かみゆひ處と筆ぶとに記ししは、もと深川下も木場の川並鳶の娘にて、みごとなき時は、ねさきの葉で旗いとひいく／＼を吹き、雛草で島田まげこしらへて遊び、ぎし／＼なるあしだはいて、舟蟲のはふうごんやの針つぎ持ちて、縫物習ひに行きし身の、親はらからのためとて、十七のとし新子となりて土橋へ出てより、あたまのうへは日々にふえ、有上田の光も夜々あきらかになりて、呉服屋の屋敷通ひを

つゝのほせにさせ、箱川の馴染を宿あつけにさする程の全盛、其の後自前となり仲の町八間にこがれ、藝者衆とよばるゝも所の習ひなり。光陰は三間ン堂の通矢よりも早く、はや中ウどしまと云ふもふるくなれば、又川岸をかへて表櫓へ出で、歯を白くして新造と化けてより、額に小じわができ、ぼゝあお仲とあだ名されしぼゝあ／＼ことよばるれば、己がことゝて返事するも、うき勤めぞかし。ふあご縮のめききするにはあらねど、只かすりへのみまはりて、情なしと云はれしも、さすがまきいそけにもあらぬかして、わたらといふ所に下て三ンの何某とて、何拾ひしたりうかしのはたつぱりして渡世を送り、あだ名で幕の通つたる男と夫婦の約束して、去年の春より務めをひき、此の新道の住ひ、昔は人に結はせし身の、今は人の髪に憂世をむすぶ世渡り、九尺二間の借家に疊四疊敷いて、殘りの二疊は薄縁にてくろめ、越張は三庄太夫の淨瑠璃本にてはり、さる程に哀れなりかゝ一重帯は、丸竹のぶつつけ格子、張物の戸板に隠れて見えねど、相州箱根御藥湯、二度入二十四銅、四五度入四十八銅、一ト廻り六十四銅と記せし看板をかけ、四百四病のなほるしかけも、ひんの病は請合はれず。信濃の一ト季奉公人相手にしての夫婦暮し、亭主は金川在で名にふれた、長屋門づくりの大百姓の獨り息子にて、蕉風の面白くなき俳諧も少しはやり、碁も下手と云はるゝほどにはうちて、江戸の流行唄も、先づ此の人がさきへ聞き出し、稻毛厚木の作左衛門、天王丸の五郎介なぞは直下に見くだせし

かな川での通りもの。女房お品は伊豆の大島の生まれ、新島村といふ所に、島薪あきなふ者の娘なりしが、何故にや十一の年かな川の宿へ賣られ、いづみやといふ家へ抱へられ、賓の入ッたたうもろこしの毛みる様な髪をそつて坊主にされしが、ひろ袖の布子にこんのたびはいて、ひぜんかきながら小じよくつとめしも、いつしか爰のうちの通名をついで、お職となりしが、ふと今の亭主となじみてより、燒蟹喰ひ合ふ中となり、硬堂で取れたたまごのけて置いて、おまする程の眞實、實体心はなかりき。あるとし品川宿の夏坂屋の亭主、湯治の歸りがけ、此の女郎に見所ありてより、相談極めて品川へのくらがへ、品川の水にみがきあげから、掘りだしものと歡び、野風、すゞし野、村芝がれつにならべて、名も袖うらと改められ、九曜の星の合印付けらるゝ身となりければ、今の亭主ことごとく此の袖浦がこと忘れかね、神奈川より馬で通ひ、鳥はものかは馬のいなゝくに、そのわかれををしみしがかうじてよふり、五百石の田地を質入レして、出來秋の勘定合はねば、おやおや今はたまりかね、韮屋宿老の耳へ入レて勘當し、在所を追ひはらはれければ、袖浦も薩摩の何がし、山のたれさんにうけらるべき場所をはづして、まことをたて、其の年のくれ年ゝ明けて、南ばんばに海苔をとつて渡世する伯父をおやぶんにして、此の新ン道の借家も、今は袖うらのおく口したる住居なり。女郎じみたるはくせとて、むしやうにしはきものなれど、さすが座敷持のはてとて、せたいのくりまはしよく、風呂の薪に

ふすぼりて、いつしか家のすみへもくろみ、棚のはしの蜘も住家をかふれば、夫婦もはや江戸なれて見ゆれど、女房は古郷忘じがたきにや、一チばん鹽二ばん鹽とて、嶋干物の目きゝと、日和見る事の上手なるもをかしかりき。貝寄の吹く春の日より、鰯雲の雨催す秋のゆふべまで、貧乏とおつかけくらのみするぞ、やるせなき世帯なり。されば人のゆくへと水の流れ程さだめなきはなく、ことさら川竹の身は、泣くと笑ふとに一トとせをおくり、待つと別るゝとに一日をすごして、いづこいかなる人に身を任せんも知れず。たゞ出雲の衆議評に任する事ぞかし。孝行にうられ不幸にうけ出さるも、えんのあるのが實なるべし。此の三ン人のふじん、所はかはれど同じ川竹の末葉とて、合借家同士の心安さ、折ふしはうしと見し流れの昔をかたり合ひて暮れぬ。頃は卯月の半ば、心なしにはやとはれなと、心有る人のいひ置きしも尤も、圍はれのおよしは、あまり樂すぎて一チ日を暮しかね、近所のをさな子かりよせても、人みしりして、こはく丹後の藍縞に、小便を置き土産してかへれば、せんかたなく岡雨に、ゆけのたつ手焙引きよせて、富士のすそ野見るやうに灰をならしながら、旦那にねだるべき下タ心。袷小袖の模様の案じにぜいをつかし、木地ろいろの用だんすに、たてかけし三絃とつて、一人のすむ水の流れと身のゆくへ。禿だちから郭に住めば、たゞいつとなくあけくれて、暦くり出す品さだめ。けふはかねつけ袖とめの、もん日／＼をかぞへてあかす里の花、とのご待つ夜

は久しうて、首尾のなるよのみじかさよ。ふかう成る程なれそめ心。」「おもひにそはでおもはぬに、そふも縁なりやしよう事がないざえ。」

といふすゑの文句は、旦那へきこえてもすこしゑんりよゆゑ、口のうちにてうたひ居る折ふし。むかうの女かみさひお仲、きしじまのあぶらでよごれたる給、かたはだぬいで、お仲「モシお品さん、今日はうちでも留守だから、又はなさうぢやァねえかね。」とかべごしにいふ。となりのくすりゆの女房は、青茶のいろあげ、つたりもんの付いたぬの子のたすきはづして、長らうのきせる〳〵はへさせるにして、たち出で、お品「ムヽ、わつちも今ちつとはなさうと思つて居たのよ。マァ見ねえ。此のながい日に、一チ日臺所もとにかゝつて居るわな。たべ物ごしらへほど、うるさいものはねえよノウ。」お仲「ぜんてえおめへは綺麗ずきだからよ。そしておしなどんが、氣が利きすぎて居ると云ふもんだから、おめへがてい〳〵おやァねえよ。モシおむかうのおよしさん。ちつとおはなしなせえせんか。」ト お仲は主人のうちでのおしやべりゆゑ、はう〳〵をよび出す。およしにきを付けて、三味せんを下におき、かうしの所へたち出て、およし「わたしもけふは忘屈して、身にもちあつかつてをりいす。けふはさんたぼ、梅堀へつかはしいしたから、小僧と久介ばかりさ。」といふ所へ、小僧たばこぼんへ火を入れてもち來る。「此の子をごらうじいし。ゆうべねぼけてながしへおちて、此樣に疵をつけいした。」お品「すや〳〵あぶねえ。小僧どん、きのふの事をいつつけまうさうか。」小ぞう舌を出しながらひつこむ。およし「けふはお休みかえ。」お仲「けさいつそ、しやくが痛うごごりやしたから休みやした。おめへさんもあすはおいでなさえし。ぜんてえおめへさんには、しのぶが、しのぶとは娘のふうの名なり。よくお似合ひなさえすよ。」およし「みんなさうおつせえすが、わたしはあつちにゐいす時から、手がらが、これもよしはらのかみのふうなり。すき

さ。」お品「お仲さんは、よく郭の風を呑みこんだよ。品川なんぞぢやァ、むすび兵庫がはやつたよ。まへどくら田のひめづるといつた女郎衆が、すきでいつたつけ。」お仲「よしこの風には、しの字わげ、こしかけ、京やなんぞがいゝさうさ。深川でまへにはやつた天神むすび、またとこ本多に、きごとな髪よ。」お仲「稲城すそこに、扇屋のおかねさんがいひはじめた風ださ。」お品「おまへさんなどは、品川といふ所は、お馴んなさるめえねえ。」お仲「ついぞ存じいせんよ。道中や雙六で見たばかりさ。それでも湯治から帰つた客人、に聞きイしたが、景色のいい處だとねえ。」お品「先、高輪の茶屋からして、新かとく、中かとく、一チ力、七チ力なぞと、他所にない家名がござりやす。」お仲「石橋萬とやらは、留守居しゆの話で聞きイした。」お品「そして女郎しゆの名に、三ッ字名の中に、おの字がござりやす。六七年跡は、いゝ女郎衆が揃つてござりやした。さど屋でつき出しのたいさうであつたは栄山ンさ。蔵田でひな菊、りよ、松坂にはいい女郎が揃つてをりやした。柏屋でなにには、花まち、つの国で豐山なほえ。けいしやでは、新内で鶴賀がはやりやした。河東は秀彌といふのひとりさ。歌に荻江惣介といふがありやした。高輪には壽楽さんが座本で、をどり子がだいぶござりやした。義太夫で春治と云ふがいい浄るりさ。ぜんてい宿のけいしやは高輪へゆかず、高輪の藝者は宿へ来ぬといふが法さ。藝者を一ぶと、新造がひとりづゝ付きやす。男げいしやは、明朝座料を取りにまはりやす。引ケを取られ

るもんだから、錢でうけとるのさ。それだからどんすやびろうどで、いきな財布をこしらへて、自身に取りにまはりやす。人に取りにやつてもよささうなものだが、さうするとしきいらしいなどといつて、やかましい所さ。女郎も今はうつり變りやした。今では新松坂の此春、其君。佐渡屋で町づる、あやぎぬ。村田でその歌、ましてる。大松坂で其朝、野の芝。新叶で三つ花、鳩瀧。ときは屋のから歌、梅崎などが利きものさ。はやる女郎は、初會にうら約束をさせやす。新造が二人付いて晝夜さいもの日もこうさ。わきとちがつて若者の祝儀も三こくわい目さ。そしてたれ樣御仕廻誰と、下タへその女らうの名を書いて、かけ見世へはりやす。それを仕廻札といひやす。見世をおもてへをといひやす。どこのうちもみな三人づゝ定まりて店へ出やす。それを見世番と云ひやす。五つにかはるのさ。此のことを正みんをはるとも云ひやす。見世番でないものは、みな内見世にをりやす。お見たてといふと、みんなかけ見世へならびやす。吉原は中ヵ座といつて、まん中に居るがいい女郎しのださうたが、品川ぢやア、兩方のはしへすわるがいい女郎さ。見とほしの事を瀧と云ひやす。穴ぐらの樣に下きにある座敷を、下タ家といひやす。天王の時分がにぎやかさ。六月の七日から十九日までございいやす。そして燈籠が出やす。二十六夜は大ものの日さ。妙國寺の仁王さん、願行寺のじふやなどは、べつしてにぎやかさ、恵美子講などはでにする所さ。大見世の若い者は、橋向うへ遊びに行きやす。よし

はらなら、川岸へ行くといふものさ。」　お仲「つる吉といつた新内の藝者は、どこに今はをりやすえ。」　お品「やつは、村田屋のむかうに居やす。モシそして旦那やかみさんの居るところを、お部家と申しやす。」　およし「オヤ吉原ぢやァ、ないしようと云ひすよ。」　お品「ほかに客のあるのをまはしと云ひやす。」　およし「それも吉原ぢやァ、名代の客人ンといひすよ。」　お仲「深川なんぞぢやァ、そんな手おもい事はねえが、よびどほりを付けた客の來る間に、ぬすみといふを賣りやす。」　お品「ム、はてね。品川の法でなじみの客が、外へかくれて行くのを知ると、そのさきの女郎の所へ臺の物を送りやす。」　およし「吉原ぢやァ、さういふときは、つけとゞけのふみと云ふをやりいすよ。」　お仲「深川ぢやァ、なじみの茶屋へかくして外の茶やへ行つて、その事をけどられると、おきにその茶屋から先へ知らせやす。さうするとくわしなぞを、女がうちの娘がもつて來るのさ。さうすると跡がむづかしうござりやす。またいろ客があつて、子どもやから茶屋へ、「あの客へはだされぬ。」なぞと云つてやかましいと、その客が名をかへて、外の茶屋で會ふ事がありやす。知れると大かぶりさ。」　お品「品川はおとまりの有るときがなんぞさ。今ぢやァはうく／＼の亭主たちが、茶をする事がはやるさうさ。」　およし「まへど美月さんや萬千さん、賀達さんなんぞが、くら前をおつき合ひなんす時分は、よく吉原へ來なんしたよ。」　お品「その時分は、品川も盛りさ。」　お仲「ふか川ぢやァ、かゝへをしてやると云ふが、客のはでさ。郭ではいは

に斬造を出す、といふやうなものさ。そしてしかはやなにかの寂しいことや、異構だ〳〵と云ひやす。こ
れは都合の悪いとき、頭の物も皆ぬけてしまつて、つけの櫛をたよいとさしてゐるため[illegible]するなら、
それが通りになつて、つぶりのもりでも悪いか、しかはさみしいと、此の頭はとんだつけさと云ふ
ことと云ひやす。客が[illegible]をせんなに、まへだれなどを出しやす。これ手ぬぐひにも、もん所や名をそ
めた前だれをくばいやす。茶子どもにかく施へに遣すしかなは、小袖一つ〳〵さ、紋を付けて遣す
うちもござりやす。そのあとはみんなでふくのきものやうす。それだから働きのねえ子は、下帯なん
ぞも下々のはうばかりさ。あたらしいのを取てかへて、きまことえてさするのさ。山びらきは
三月二十一日から二十七日までさ。八幡さまの祭は、八月の十四日、十五日さ。十五日は休まつりと
いつて、木場を始で御輿が渡りやす。それはなぜといふに、木場が渡りませいから、御輿が通るの
さ。一の鳥居は代々木場から建ますのでやす。まへど木場より親方衆とふまでのが出やした。わつち
らが下にも西町分は、よびすのみやのこつたあたに、それより稲荷といふがありやした。その時分は
しばばたたはつかうしやした。今はすさきのさそんとし名ばかりさ。土橋の箱やら武蔵は、土橋に
やうと曽我したて端にたわ[illegible]いまあり、桝屋につきやうさ。いまの[illegible]なりこうもので
かふさんはまだも、[illegible]はまさつと云ひやす」[illegible]

きりとやら云ふ笛をふきなんすネヱ。」お仲「土橋の藝者ちやア、春吉、小吉、三喜藏、おみきなぞかうつたものさ。をとこげいしやでは、千蝶がふるいものさ。新次、五介、清二、喜六なぞもとほつたものさ。ふた兒やといふが子ども屋から、どれもいい子が出やす。」およし「ひな松とやらも、そこから出たぢやアねえかね。」お仲「土ばしの子ども屋は、みんないきと云ふところになりやす。仲町の梅むら、生松、山本が、いい普請に出來やした。なり／＼よく家名のかはる所さ。梅もとの亭主は、あたま七といつていろしさ。おもてやぐらにも地がござりやしたつけ。今居る所もてまへの地面さ。今で口利きは、子ども屋のうちでまき屋七右衞門、六十ッたんといふかし元、白ロ舟の清七なんざさ。仲町のはおりは、大きち、八十吉、今きち。乙吉は郭へいきやした。仲きち、だん子、ぢんすゝ太夫で八重太夫、三吉、伊八、千てふ、長治、ぜん次、喜三、つる太夫なんざさ」およし「磯八は吉原へ參りしたね。去年ンのえびすかうに、長七いせ屋の筒井さんの、客人の思ひつきで、介六を磯八がしいしたつけ。その時うちの娘が、ほめことばをしいした。」お仲「おもてやぐらへ出た路考かめが、はまむら屋はあかるいものさ、さかひ町の安五郎が、半四郎とひこべいなんぞでやると、がうてきさ。」ひこべいとは、かけあひの事なり。こはいろのとほり句なり。「三ンやぐらでも、ばゝァおたきなンぞが通つたものさ。ふる石ぢやァ、今は豐倉がはやりやす。いい子どもがあるからさ。あすこはふせ玉さ。はやる子は四ッあけにいつち

やァござりやせん。新石場ぢやァ、金子屋がにぎやかさ、げい者は奴、島八、さみせんが文てふ。歌で五郎治、三味せんが宇八。はおりでさよ吉、むめ吉さ。佃四けんも又できたさうさ。まへど仲町へおくめといつて出た子が、やく年〻で郭へいつて、大かな屋とやらの粂川とやら云ひやしたが、およしさん知つてお出でなるかえ。」およし「その女郎しゆは、たしか二丁目の新見世のきつかふ屋になりいすよ。わつちもちつとよしはらの話をしたうすが、ことし總籬といふしやれ本に書き盡しいしたから、云ふはむだでおすよ。このぢう旦那がもつて來ておきいしたから、よんで見いしたが、すつぱり松葉屋せかいさ、女郎衆のくせまでかきいした。」お品「品川で宿のうちへ出るかごかきは、横目をするかやくさ。かごかきにもいろ〳〵ふてふがあるさうさ。またけん、正六なんぞと云ふがありやす。」おさ「吉原のかごやにも、ふてふがおすよ。茶屋なぞへいつて聞いてをりいすに、ふりまし、おもたまし、みおまし、あぶれなぞと云ひす。五とくといふは、夜かごの三ちやう並んで行くときいふふてふさ。」お喜「氣をつけてごらうじやし。深川通は吉原客とちがつて、ちよきに乘りやうがちがひやす。こちの方をむいてさかさまに乘りやす。これは船頭とはなしをするに、勝手がいいからさ。急ぐ時はふたりせんどうにするのさ。深川にも二十年程まへは、米蝶、べんてんおかん、木綿屋おきちなぞといふ、名とりの牀けいしやがあつて、その時分はおしなべて、仲町の事を八幡町といつたさうさ。

古い深川通は知つて居る事さ。」お品「お仲さん、もじ五郎はどうしたねえ。」お仲「きつねが付いてから死にやした。深川ぢやァ上手にいしやがれの谷で、八まんまへ護摩をあけやす。仲町や土橋の子どもは、山からおよび帳で喰物を取りよせるのさ、道あへの子どもは、十二もんめの内を、茶屋へ六もんめ取られて、子ども屋へ四匁を、あことゞざふ用の事なり、三百二十四文取られやす。そして人を騙した事を、「當[illegible]くはせてやつたと申しやす。又ものゝけつちやくせぬ事を、ふかきれねえ」といひやす。こいらは管りのおさきから出たことばさ。今おやァ堤燈や六軒でもいふさうさ。八まんの鐘は、茶屋からやくで、かはりばんにつきに出しやす。」お品「品川でまつさか屋の野風といつた女郎衆が、わかいたものさ。その時分芝に介といつて、怪しからず手のある客があつて、その人の友だちが、まつさか屋へなじんで来やしたが、その介といふ人は、その色をとこでもねえが、どこへいつて一チ座しても、とかくひとりもてるさうさ。それだから折ふしは、かうまんたらだふさうさ。それを友だちが憎がつて「どうぞ一チ度誰ぞにふらせて、此の末かうまんを云はせぬ様にしてやりたい」といふ噂を、野風が聞いてゐて「わたしがところへつれて来なせえし。思入れふつて見せやせう」と、ふとうけやつたから、さいはひにして、二三人ですゝめて連れて来たのさ。先づさかづきがひととほりすむと、その客が「つね〴〵はけこださうだが、どう云ふ氣か茶わんで酒をはじめて、野風にさしたのさ。野かぜ

もかねてたくんで居る事だから、「たべやせん」といつた許り、うけつけねえでてらしたのを、無理にしひるとつて、ついその客が銚子をひつくりかへして、野風が着物へぐつつり酒をかけたのさ。きりたての八丈のむくもうあかけも、黒びろうどの帯も、さけだらけになつたが、さすが野風だから、平氣ですつと立つて、又きらびやかに著かへて來て、さうかうするうち床もおさまつて、一チ座の客はいよく\こんやは、飛んだ目にあふだらうと、となりのまはし座敷に聞いてゐると、思ひの外野風が大ほれにほれたやうで、飛んだもてるから、一チざの客があつくなつて、野風を呼び出して、「約束がちがつた」と恨みを云つたのさ。」野かぜが云ふにや「成程あの客人は、女郎かひに妙をえた人でござりやす。おまへがたの誘ひやうできとつたかして、さつき座敷で酒をわたしにかけたのは、そこうのふりでした狂言でござりやす。それはなぜと云ふに今夜わたしに振られても、あの女郎にとんだけちな女郎だ。おれがそきさうでかけたから、そのいしゆにふつたのだ。酒をかけねえとふられやアしねえと、ぬけ句にするつもりでござりやす。わたしもまた此廓では、まつさかの誰と、とほり名を付けられたふしようには、名が大事だから、手だと知りながら、どうも今夜はふられやせん。それだから今夜は、ぐつとほれた顔で、うら約束をしてかへしやす。さうしてうらに來たとき、面白くふつて見せやせう」といつたから、みんな野風がはつめいを感心して、そのあさはかへつたのさ。それから

約束の日に、その介といふ客の處へ、その一座がいつて『今日はぜひあゆびやれ。』とすゝめたら、その時その人の云ふには、今夜うらに行くと、『あの女郎はたしかにふるから行くまい。』と、見ぬいたやうに云つたとさ。そのことを野かぜが聞いて、その手にほんたうにほれて來て、たび〳〵ふみをやつて、呼びたがりやしたが、とんとそのぬしは來やしなんだ。』

お伸『深川に黑さんと云ふ客があつたがね、飛んだ情なしで、そのくせぶ男さ。仇名をびはえふたうとも能のめんとも云ひやした。あんまり情なしがとほつて、誰もとりとめて出たものがねえのさ。ふつとお鷹といふ子が『わつちが呼んで見せよう。』といつて、黑さんに出たものさ。さうするとお蝶といふ子も『よんで見せよう。』といつて出たのさ。それをお鷹が聞いて、ぐつと知らぬ顏で、おてふに云ふにやァ『もシわつちやァ、おてふさんおめへときやうでえぶんになりたうごぜいす。』と、云ひ出したものさ。お蝶が云ふにやァ『わつちやァどうもおめへと、きやうでえぶんになるわけはごぜえせん。』とはねたのさ。又おたかが云ふにやァ『そのわけといふは、黑さんの事でごぜえやす。ぬしは私が先でごぜえやす。それを美しくおめへに、黑さんをかしておくから、見事によびとげねえ。さうするには、兄弟ぶんのよしみがなくつちやァ、かなう事もならねえから、さつきのやうに云ふのさ。』と、お鷹もさるものだから、おてふをしばりにかけて、たか見で見物をしようといふ惡心さ。それからお蝶は、黑さんをよんで云ふにやァ『おめ

へといふものァ、わからねえものでごぜえす。わつちやァおたかさんをよびなつた事は知りやしねえが、どうもかうなつた日にやァ、此の上おたかさんを呼びなつちやァ、わつちが立ちやしねえから、おたかさんをきれなせえし。』ときめたのさ。黒さんが云ふにやァ『どうもてめへにやァ、忠といふきさがついて居るから、いやだ。』といふから、『なるほど忠さんと言ふ客もごぜえすさ。ごぜえすがそれが氣にくはざァ、忠さんをきれやせう。』といふうち、八まんさんのおびだしがなるから、ぐつとせきこんで、『なんでもあきなほしにして居なせえし。このかたをつけて見せやせう。』といつて、その忠と云ふ客のところへ手紙をやつて、今日はなしてえことがちつと有るから、来いといつてやつたから、忠が来たといふやつさ。それから忠は、はおりを二三ンぬえかつたり、何かして騒いで居ると、おてふが、『禿がいたい。』とかなんとか云つて立つたものだから、忠がぐつとかんしやくで、『これえ、何のこつたえ。用があるのしまつてゐるのと、呼びによこしやァがつておいて、しやくがいてえの米がたけえのと、とんだ奴ぢやァねえか。』と云ふと、おてふはこゝがかんすりといふものだから、『モシ忠さん、あんまりてえそうなこわいろをつけへなさんな。いんばぬまぢやァねえが、まとでうまるめえに。』とつらあをいふ。忠はなほ〳〵熱くなつて、『ム、そんなら埋るめえとは、きれると云ふ事か。これえわれときれたと云つてな、他所いきにきせるをもたねえ程も、ふしようぢやァねえわえ。』と、云

ひつのつたから、おてふはさいはひにして、つきだしてしまつたのさ。それが忠はいろをとこ、黒さんはぶをとこだが、おたかがめへのたてひきばつかりで、さうしたのさ。それだから深川と云ふところは、客人のあそびに、でえぶあんばいのある所さ。いろ男にかへても金にかへても、子どももどうしのたてひきをおもにする所さ。」むすこ「よしはらでも、今はとほり名を付けて、たいそうにして居る女郎衆が、みんな子どもさ。そしておしよくの女郎と、二まいめの女郎とは、どこのうちでも中〻の悪いものさ。今で繁昌なのはひなづるさん、氣生のいいのはすがはらさんさ。まへど手をとつた女郎衆は、松賀屋のはつ島さんさ。色客がくら前からまゐりいしたが、或時くら前の客の約束のばんに、かねてためになるさる大盡の客がまゐりいしたのさ、くら前のはうへは心やすだてにして、その大盡を座敷へ入れたものさ。河東ぶしなぞでしやれて居る所へ、くら前のが來て見た所が、約束だに座敷に客があるから、ぐつと大がんしやくで、座敷へふんごんで、その大じんをさん〴〵悪口したのさ。大じんも約束で居た事を云はずに、座敷へ入れられたものだから、まはしかたやり手をよんで、おほ騒動になりいしたが、はつ島さんはぐつと平氣で、その大じんのまへへいつて、ワタシイ、今夜はぜんてえ、くら前の客人の約束でをりいしたが、來るまでもまづ座敷におき申さうと思ひして、座敷へ入れまうしいしたが、約束の事を云ひしないのは、わづちがわるうおした。ぬしもあの客人に悪口され

なんしては、立ちいすまいから、これでぬしの顔を立つておくんなんし」と、指を切りいしたのさ。そのひやうしに、指がどこへかとんで、見えなくなつたのさ＝これでは氣がすみいせん」と、又ひだりの指を切らうとする所を、しんざうやたいこもちが寄つて＝もうそれで心中ゥは見えやした」とやう／＼とめいしたのさ。それでの大じんも得心して、さかんになつてまゐりいしたが、それではくら前の客が、腹を立つてきさうもないものだに、是れもやつはりそのまへよりも、けつくしげ／＼に來いして、それ程のさうどうも、しづまつたのさ＝どつちか一人はしくじる場だが、成程手のある女郎衆だ。大じんのきげんのなほつたは聞えたが、くら前のがよく黙つてくること、ひやうばんしいした。あとできけば、ゆびを切つたとき、なくなつたふりで、しんざうといひ合はせて、その指をかくして藏前の客の所へ、もたせてやりいしたとさ。はつ島さんがうけられていきなえす時、ぬしの口からはじめてあかしてお話しなんした。それで分つたのさ。オヤさんか、早かつたの。」ト女さん「たゞ今かへりました。」お山「ホンニもうあぶら屋が來た。もう口がくれるさうだ。」お山「わたしどものうちでも、もう歸るだらう。およながのしたくでもしやせう。」○女といへる文字を三つ書いて、姦とよむもむべなるかな。予ひととせ池魚のわざはひにあひて、此の新道にかり居せしとき、此の三人の物がたりを聞、はべりしを、今そのまゝにこゝに記しぬ。

作者　山東京傳

閣　同　けいこう

「きゞすなくのべがねのきせるは、はひ吹をたゝいて、かんしやくのけびやうしとなり、思ひにはどうした花のさくらばりも、首を長くして、名代の客の如し。今はりわけし三つのさと、すひつけたばこのすゐなるも、あげぎせるのやにこきも、とほるとほらざるたがひは、只くわんぜよりの一すぢに、頼むは外にないぞえ。テツンシヤン。

きやう傳みづからばつす。

古契三娼　終

吉原楊枝

白澤は横腹に眼が有れども、五百羅漢の二階にかくれ、鰻には八つの目有りといへども、小若町の店につるさる。京傳かの蒼頡が四の眼にもあらず、たつた二つの天眼通を以て五街を見渡し、店燈のもとのくらきを照らすこと、晦日に月の出でたる如く、奥州が提灯よりも隈なし。総角に棒があたるとも、豈五丁町を暗闇とせん　於皐此の道の明るいかた。

天明八戊申春

笹葉鈴成

自序

いつもはつ音の心地ぞと、よまれし鳥の手がらかな。なくにさへ笑はばいかにほとゝぎす、いかに別れに聞くとても、明のからすの憎まるゝに、汝は口のみ我は筆のみ、なくて七つのくせ事を、また書きすてて憎まれなん、一筆烏のかはいとなけよ。

京ばしの御ぞんじ述

吉原楊枝

山東京傳著

人として愼むべきは、色と慾との二つなりと、尤も至極なりと。されど色と慾とは、木娘に川竹をつぎたる如く、大きに異なり。三粒養の投長半に、大ふり袖の名有り。むべ由りけいせいは、夜鷹舟まんおうの役をけし、阿花蝴蝶に大門と傾城を書きしより、博奕打と女郎買とは、一つ畠に生ずるものと心得たるは、閨性は三分で買はるゝものと思ひ、江戸の豆腐の喰はれぬ事を、しらぬやつの云ふ所なるべし。爰に美徳を磁石とて、阿房と果報のひあはひに生まれ出でたるものあり。身代は拍子木で鐘時を知らせ、華の錦の襖を敷くくらしなれど、天性氣だうらくなる生まれつきにて、左ほどの身代を嫌ひ、今年二十五の曉かけて、鐘撞堂の鐘に驚いて、三ヶの月の空に殘りて、闇に似たるを見ては、あひかたの鬢櫛を思ひ出し、流しもとの竈馬の音を聞きては、すががきのでうしかと心うかれ、たゞ北に遊ぶのみ、一年中のわざとすれば、磁石とよぶも尤もなり。世間の人は酒に醉ッて吉原へ行くに、此の磁石は吉原に醉って、呑まぬ酒をのむ。一日おきの郭のかへりがけ、淺草くわん

おんの寺内を通りけるに、常に見なれぬ風雅のいほりの有りけるに、心を附けて見れば、垣の内に一ト本の柳をうゑ、枝折門に「杯の額」をかけ、酒中花といふ三字を書きたり。かの五柳先生をしたひ、東籬菊把、悠然望二南山一と云へるしうちか。但し生花屋のかんばんなるか。何にもせよかはつた物ずきなり。此の庵主にこそやうすあらんと、垣の小かげに身をふせて、内をうかゞひけるに、二十八九のなばう、白ねりのきれで鉢卷をし、つやなしの藍上田に黒じゆすの半えりのちとやれたる小袖に、黒どんすの帶をわきのはうにてむすび、えんのはしに出て、手飼のさるの蚤を取ってゐるやうす、色の靑き所から、髪の毛のうすい所、いかなるほんくらに見せても、それしやのあがりと見える姿、さしづめ矮狗で有りさうな場を、猿とはひねつた物好きと思ふ内、向うより來るふたりづれ、一人は竹にすゞめの、ほたもちほど有る黒羽二重の小袖に、黒縮緬の綿入ればおり、らんうかぶりのきぬ頭巾に、こいかうしの足袋、今一人は黒縮緬の小袖に、黒たんごの羽織、吉原ばんだのきのふあたり結うた髪、かた手にすそをつまんで、しきせ小袖に島津あられのへりとりむくを見せかけ、かた手に鰒をさげて來る。又こなたよりは、結城じまい小袖に同じ羽おり、花色縮緬のはつち、ぶつかぶり頭巾の上から、吉原のもちつきの手ぬぐひをかぶりたる男來かゝり、夫れと見るより頭巾を取って「是れは是れは寒木樣、文字黒さま、お揃ひなすつて、妙におはやい。」とあいさつすれば「伊之喜さんか、ど

うりでいきな男が來ると思つた。わつちらもけふはこゝの會日だから、なんでも先生のおきる時刻を考へて、晝時分からぶら〳〵出かけやした。けふは雪空でいゝあくり日和だねえ。おくがたへはむきの此のふぐで、あつがんと云ふ趣向だが、かうさげた所は、かほみせの二番目だね。」「アイサ、きついものさ。わたしも今あつちからの歸りがけさ。先生が下戸といふもんだから、わたしがみつぎものはこいつさ。」と、ふところから紙袋を出し、「萬屋の袖のふきに、ちと肉桂の匂ひで風ぐすりあきやすが、がん石もなかの月は、口へかすがたまつてあやまりやす。少しうつはに花のあるやうに、あるへいを取り合はせやした。もしこいつがお茶をひいたおいらんを見るやうに、いつでも立派にあとへ殘る奴さ。是れにではなをしかけば、おまへ方のはうにねえりうぎだ。」と、三人話しながら、枝折戸明ケて入りければ、磁石にはなほ身をひそめてぞうかゞひ居たりける。貧者三友とは、是れらのともがらを云ひつべし。かの三人は、「おひでさん、先生はまだ寐てかえ。」とおとづるれば、女ばうが、「マヽみんなお早いね。もちつとさつき目をさまして、又寐なほしやした。マヽどんと話しなせえし。」と、手あぶりをまんなかになほせば、寒木が、「とんだ寐やうだ。定のうちも向うのかべに、月があたると晝みせ出る時分だ。ナウ伊之喜さん。」「サウサ、晝みせといへば、角ドから、「おめへに逢つたらとゞけてくれろ。」と、此中一ツぶうを頼まれたを、とゞけたかほでゐたが、見てやんなせえ。」と、かみ入

れから出して渡せば、寒木はとつて「アノけいも名は立派だが、手のねえやつさ。ぼんしんややの手そこはかゝる内は、話せねえよ」と云ひながら、中にこれからはゐるをとび〳〵によんで見て「おきやアがれ。是れでも新ン手の気だらう」はかたこまり目利きおやて有るやうし、しんぼうを見るも有りがてえ。僅か寛が敷免状を読むやうに、いく度繰返しても、難しい文句はえんしだ」と、二つに引き裂いて手あぶりのはしを拭いてゐる。話の最中一ト間の内より、しはぶき二つ三つして、先生と思しく立ち出でけるを見るに、年は三十四五と見えて、手の有るきかり、温にしてはげしく、威有つてたけからず風俗、鉄色頭巾のねまき小袖に、樺茶どんすの帯をしめながら出で「コレハ寒木子、文字黒子、伊之助子、揃つての御出で、今の高笑ひが耳に入つて、ヤウ〳〵目が覚めやした。今日はけいせい買の極秘傳を申すから、のみりつとお聞きなされ」と座に附くに、三人はすゝめ原へ小石うつたる如くひそまりければ、蘭石はおのが笑壺に入り、此の先生何事を云ひ出すやと、聞き耳立ててぞ居たりける。先生きまじめにて曰く「夫れ釋迦の方便、莊子の寓言、楠が謀略、繪師の繪そらごと、紺屋のあさつて、帯へは違へど商人のそら直云ふも、みな身を治むる事にして、慰みに譬つくにあらず。貞女にあてゝけいせいを論ずるは、螺蝶吉丁蟲をとらへて、我に似よといふにひとしかるべし。されど傾城とて、八文字ふみながら生まれもせず、本は素白地の娘にて、親はらからの

殊に此の里に來ぬれば、女郎とても別れに眞情なき習もなし。實から出た實もあり、まことから出た噓もあり、又噓から出たまこともあるなり。近松門左衞門が狂言に、傾城にまことなしとは、譯知らぬやぼの口から只たんな、と書きしは、深き所なり。されば とて女郎に惚れらるゝは、浮島をふとに下手の弓をいる如く、あたるはまれなれば、さはあてまことを有りと思ふも、又あやふし。昔より此の道の先達、まゝけいせいの虚實を論ずれども、みじかくいはゞ、嫖子は實、だまさるゝは愚なり。さあらば實貴人のかへ、六分は猶へを取らせても、嫖なるみじ。その端人がだまさん／＼と心がける客もあれども、それはわかで小精で、出じんのかへぶ節のにイくにひとしかるべし。傾城のまことをみるは、こなたもそれだけの實を見せねば、その情をうる事あたはず。又或道をかけて、嫖客語と色をし、茶屋の二階で悲啼をころばし、又は女郎のあまり全額を排して呼ばるゝも、われ巴なり、此の道の通なりと、心えたるもすれど、それをよき事と思ひ、まれんと思ふへからず。是れにはいかうれけの有る事なり。なにはの榻外、みやこの素法師、江戸の奈良茂、紀文をはじめ、大盡の身をうち、下總の輩子にむすこの大ひやく打つは、傾城買の無用しるし、よく／＼面白きわけのあるものにあと見えたり。とかく情を尊らとする郭なれば、客も女郎も情深く、こそ有りたきものなり。扨は今齣影あたり時鳥、といへる一句の猶は、まことにありがたき所なり。女郎の客にあひとぐる五段有り、ま

づ初會には、男ぶりと様子に惚るゝなり。聞き傳へたる客ならば格別、初めから氣性の知るゝものにあらねば、男振りのよき方が利を得るなり。又はたのおだてにて、自分はさのみと思はぬ客にも、惚れる氣になるものなり。初會に一座の内にて、自分の客一ばん男がよく、その夜も嬉しく、どうぞ今一度よんで見たく思ふゆゑ、よく勤めて歸す。あすも顏みせなぞで、朋輩の女郎が、扨おまへのあがつた客人は、どうもよい男だ。さぞ呼びたからうなどとたぶられるにしたがひ、いよ〳〵呼んで見たくなり、一座の客の所まで文をやり、又はつてを求めて呼びにやり、それより馴染と成りて、一日がほども逢つて見る。是れよりは、その客の氣性と手に惚るゝなり。此の客きしやう面白くもなく、さのみ手もなければ、男はよいが面白く無い客なりと、つひあきが來るなり。此の客手も有り、氣性も面白ければ、いよ〳〵惚れやうがしみて來て、外に惚れた客又は客色地色が有るとも、切れて仕廻ふ氣になるものなり。さて夫れよりは、その客の心だてに惚るゝなり。夫れほどに惚れても、此の客實情がなければ、是れほどまでにするに眞實のなき客なりと、諦める氣になるものなり。此の客いよいよ實情もあれば、こゝにはぐつと惚れ、もはや夜も日も無いやうに思ひ、一日逢はぬと塞いでばかりゐて、逢うてもじれつたく、あはねばなほじれつたく思ひ、親里のやうすも咄して、親兄弟にも引き合はせ、少しも外へ心をうつさぬ氣になるなり。夫れからが金づくなり。もし此の客身貧にして、し

けしけ逢へばつい身につまり、女郎もいろ／＼くらうして呼べども、つまらぬわけになり、あげ代がたまつて、二階を止められ、中の町へ出て逢へども、夫れも長く保たず、しぜんと逢はれぬやうになり、初めは死ぬ氣にもなれども、夫れが二タ月たち三月たち半年立てば、去るものは日々にうとく、そのやうにも思はぬやうになる内、まんざらでもなき男が出來れば、夫レに紛れてつい夫レぎりになるものなり。此の客身の上もよく、なか／＼城のおちぬ人ならば、此の上もなく惚れ、もはや人の前もいとはず、いかやうの事も恥かしくなく、女房に成つた氣になり、大酒をやめろ、[illegible]遊んであるくなといのなどと、意見をする樣になるものなり。さて夫れからは緣なり、夫れほどに思ひ思うても、緣がなければどうか云ふわけになりて、その客の所へ行かず、年明ケまへに成りて、思ひがけなき人の所へ行くものなり。ありやす禿だちの文句に、思ふにそはで思はぬに、添ふも緣なりや、しようことがないぞえ、とうたふ通りにて、えんといふものは、男ぶりでも氣性でも、手でも心だてでも、金づくでも行かぬものなれば、惚れられたもつき出されたも、皆えんづくと思へば、はれもせぬ腹も立たぬなり。又女郎の好む所に、客と地色との大きなるわかち有り、金の有る色男の客も、つとめといふ文字あればいやなり。錢のなき不男な地色も、まぶといふ文字有れば面白し。女郎も客に惚れたと地色をするとは、心の内に別有れば、地色を見のがして客の恥にならず、客に惚れるは地色の恥にな

らず。只客は客をせき、地色は地色をきれぬやうに心がけべし。夫れも深くはいらぬものなり、かうばり強くて家をたふす事まゝ有り。あまりこみ入つにせくと、女郎の方にて深く惚れたと見るゆゑ、けつくつのるものなり。だまつてゐて、たるみの来た図へのりこみ、切れさすべし。客をせく程の客をば、又内所からせくもの故、とかくせくにもかけひき有り。元が眞に惚れてゐれば、ほれるこつと頼んでも、外へ心は移さぬものなり。地色に根くらべといふ事あり。引ケより七ツまで男はおもてに立ちあかし、女郎は二かいのれんじに出て立ちあかす。毎夜かくの如くして、互の根をくらべる。八ツに格子をあらひに出る若い者にみつかり、頭から水をかけらるゝ事あり。勿論色事と一やうに雖も、しんの色事と、義理の色事と慾の色事と、三つ有ルなり。又なじみの客のかけなどたまりて、二階を止められたるに、女郎中の町へ出て逢ふこと有り。是れは惚れたばかりでもなく、あまり世話になりし客には、義理でさうする事もあれば、是れらは内所にて見のがしにすべし。客にもさま〲の別ち有り、みやうもんに行く客あり、一通り慰みに行く客あり、女郎に惚れて行く客あり、くるわに惚れて行く客あり、はたに惚れて行く客あり、女郎にほれられに行く客あり。みやうもんに行く客は、名有る女郎にちかづきの出来るを喜び、さだまれる相方もなく、振袖などあげて、所々はう〲を經めぐり、とかく「誰さん〱。」と呼ばるゝを喜び、みやうもんに倒れて、無理に色氣を去り、我慢にて面

白くなき目も度々するものなり。一ト通り慰みに行く客は、さのみ女郎の虚實にもかゝはらず、一月に五六度來て、その夜さへ面白く遊べばよいと思ひ、歸りも早くして、内の首尾も悪くせず、女郎の用も相應に聞いてやり、餘りかぶりをせぬものなり。女郎に惚れて行く客は、無性に客をせいたり、名代の夜はかけ出して、茶やに世話をかけ、何かくらくなり、無理な時もゐつゞけをして、内の首尾を悪くし、毎夜來りしも、その女郎と切れしれば、さつぱりと足ぶみもせぬものなり。是れらは茶屋などにても、あてにならぬ客と思ふべし。くるわに惚れて行く客は、中　町又は女郎屋の内所なぞに、ちかづきたんと有りて、方々を噺して歩行き、あまり女郎にかゝはらぬものなり。はたにほれて行く客は、あひ方の女郎はそれと面白くなけれど、二階中が心安くなりて、こゝからも「誰さん」「おすこからも「誰さん」と、云はるゝが面白くて行くなり。惚れられに行く客は、うぬ惚れた奴なり「何屋の誰を買つて見よう」と、一度いつてはよし、又外へ行つては、是れも面白くないと、なじみかねるものなり。是れはうぬほれ故、もたつと惚れる女郎が有りさうなもの、と思ふ故なり。又客にあな知りと譯しりと二タいろ有り「左の手の指に、横に傷の有るのは、夕あたり起請を書いた女郎だ」「の、「やり手に呉服屋をうけあはせ、初の客にそんれうの内かけを著て出る」「の「竹村のはり札は、金がすまぬとはがきぬ」のと云ふを、知つたじまんに云ふは、あな知りとて嫌ふことなり。又わけ知りと

いふは、客色地色初なじみ、あるひは切レ引キまでよくさばくをいふ。されば穴しりには成り安く、わけしりにはなりがたし。新造買にて、座敷もちと色をするならば、あひかたの新造はするぶん小りこうにて、あまりねこく無イのを見立てあげるがよし。扨ては新造のぶきげんよりあらはれ、又は夜更などに、座敷の客が歸つたか歸らぬかを見にやる時など、たわいなく寐てゐては、いたつて困る事あり。しかしあげるしんざうは、其の色の女郎が見立てゝあげさするものなり。又番頭なれば、女郎にかくしては萬事し憎きものなれば、先づ番頭にまかして、いかにもよくくるめて置くべし。ばんとうさへ承知すれば、二階で逢ふにも、中町で逢ふにも萬事し安し。されど引けに歸るといふ客も、朝までゐたり、又は名代の客一座の多き客など有つて、至つて首尾に氣のもめるものなり。いかにも氣が長くなければ、出來ぬ事なり。尤もその逢ひ憎き所に、面白みの深きは人情なり。色の女郎の座敷が、縱ひやり手部屋の向うなりとも、れんじが行きぬけたらば、こつちの物と思ふべし。心中にも色々有り。日文、時文、血文、血ざけ、血ぎしやう、牛王ぎしやう、入れぼくろ、ほりもの、かみ切りゆび切り、つめをはなす。又客の心中に、盜人誓文といふ事有り。是れは先の女郎の物を盜みしといふあやまり證文なり。いつはる事有るときは、此の證文で恥をかかせろといふことなり。いかにもたわいなき事なり。此の外に色々の心中あれども、畜生のする事なり。すべて心中といふものは、惚

れぬ客やなまほれな客に、深く惚れたと思はするための道具なり。ぞつこん惚れた所は、しうちにて知るゝものなり。心中にて疑ひを晴らすは小口の所なり。尤もあてにならぬ理窟なし。されば第一の心中といふは、心に有る事なり。指を切る一切の道具の、よろづ見世に有りてうる所にて知るべし。とかく客も女郎も、なまほれなを、眞に惚れたと見せる中に、楽しみは多く有り。眞に惚れてかゝり、いろいろのくらうで、かんじんの面白みをけしてしまふ故、友だちほうばいのつき合ひにもかまはず、たわいもなき人になるものなり。昔より床花をやるに、いろいろのあんじあれども、やつはり茶やから遣らせるがよし。多少は客と女郎とのくらゐによれば、限る事なし。ただなじみ浅き内に、客と女郎とさし向ひにて、金銀をとりあつかふは、いたつて安きことなり。座敷持の女郎の身の、おのがまゝにし安きは、中ぐらゐの女郎に有るなり。おしよくよりこまい目あたりまでは、内所にて大事の女郎と思ふ故、至つて氣を附ケ、やりて、遣しかた、ねすまで心を附け、茶屋にてもおつこふにとりあつかふ。廊下あるきも出來ぬ故、色狂ひするとも、至つて手重し。又突き出し間のなき女郎は、勤め一年ほどの内は、内所の世話なれば、是れ又身まゝにならぬ、ことさら番頭女郎の手まへもかねねばならぬゆゑ、色狂ひもおのづから遠慮せねばならず。されば中位の所は、萬事し安きものなり。又こまい目の女郎の惡きは、何所の二階にても有る事なり。今どきは、一朱の女郎を買ふ身の上のものは、

一歩を買ふ氣になり、一分を買ふべきものは、晝三を買ふゆゑ、終には二階かとまり、茶やにまで損をかくるなり。呼出し晝三の客は、國家の留主居、うとくなる旅人、大商人の檀那、大名の御隱居の類なり。平の晝三の客は、有德なる町人のむすこ、若との樣、御用たし、町人の檀那のるゐなり。一歩の座敷持は、きめうきん、おはたの二男、又は道樂のるゐなり。大見世の部屋持の客は、家中者、又は高の能き由の手のるゐなり。その分限に應じて、それ〴〵の女郎を買へば、おのづから買ひとぐべし。初會の晩に、女郎のほんに惚れたとかけるのとは、ぢきに知れる口傳有り。廊下を通る女郎を無性に呼び込だり、度々唾を吐いたり、おふと直に手水に行ッたり、腹はびになるのは、いか程よく勤めても皆謊なり。度々つばをはくと、逢うて直に腹ばひになるのは、いかう譯の有る事なり。氣を附けて見るべし。また何か云はんとしては云はずにしまひ、いろ〳〵謎をかけて見たり、恥かしさうにて多く口を利かず、客をふとんのはしへ落ちる程に、こつちから身をおして行くは、ほんに惚れたに違ひなし。たとひなじみの客なりとも、女郎にたいして深く腹立つは心せまし。とかく恥かしきは、客と客との立てひきなり。女郎買は金を遣ひ習ふより、意氣おを覺ゆるが肝要なり、金はわきもの、ありさへすれば、遣ふに苦の無きものにて、意氣地は俄に覺え難し。世間にても金を活かして遣ふ、殺して遣ふといふ事あり。されど先づむだ金を、澤山遣ひたる上でなければ、佳境には入りがた

しこ女郎買は見切りが大事なり。とかくそれ〴〵の仕うちを見て、取りさばくを通り者といふべし。
もと傾城はなぐさみに買ふものゆゑ、深き所を論ぜず、其の時々を面白く遊ぶこそ通なるべし。傾城に實をつくされんと、よしなきくらうを求めに行く客は、遊びといふ所を取り失ひしゆゑなるべし。又あたまからしつくしたるふりにて、けいせいかひの味ゑを知らず、無性にいきすぎたるは、あまり出來過ぎたる仕かたなり。此のくるわは顔のあたらしき中が面白し。あまり顔が賣れて來ては、却つて色なども出來ぬものなり。又女郎の客をだまして金をとるは、商賣なれば許すべけれど、其の金をためて親里へやり、田地あるひは何ごぞのかぶなぞを買はせ、萬事しまつして、著るものなども氣を附けて著るは、孝心のやうにも思はれ、りこうらしくも思はるれど、それは地女のする事にして、女郎の氣性にあらず。色のために金銀を遣ひすて、見世へも出られぬやうになれ、あすのたくはへも知らぬは、うはきなやうなれども、傾城の身の上にあたりし氣性と云ふべし。義理と情のゑには一命も捨つるが、まことの傾城なり。されど傾城買は以心傳心にして、筆を以て書く事あたはず、詞をもつて述ぶる事あたはず、むづかしきものなり。それ程むづかしき事に、金を出して遊びに行くとは、いかいたはけゝといふ人は論ずべからず。其奴まだ傾城のうまみを知らぬ奴なるべし。此の道許りは推量の沙汰にては分らず。三つぶとんの上に九年めんぺきせずんば、その深きを知るべからず。唯遊び

といふ所を忘れたまふな。」と示しければ、垣の外に聞き居たる磁石は、己が心にてきやうし、思はず門の内に入りて、かの先生にむかひ申しけるは「我先ッ刻より垣の外にて、先生の通談を聞く。傾城買の悟道をきはめ候。そも先生はいかなる人なれば、かく青樓にくはしきや。」と不審しければ、かの先生さもあらんといふ顔附にて、「御不審にまかせ、我が身の上を語り聞かせ申すべし。爰にやうじといへるものは、楊柳くわんおんのまもりたまふ所にして、口中を清らかになすの佛具なり。その器種々有りといへども、その中に吉原楊枝と號し、ふさの長き一種有り、常に傾城のやうじ箱に住み居ては女郎のあなを知り、居續け客に歯をみがかれては、通客のふところに入ッて、その人情をさぐり知る。我こそまことはかの吉原楊枝の精なり。今こそその姿を見せ申すべし。」と、忽ち白りんすに、向う菊の地紋おりたるいしやうを著し、緋のはかまを著し、やせおとろへたる老翁と化し、身より光を放ち、其の姿は長頭丸が昇殿を許されたる時の姿もかくやと思ふばかり、諺にやせたる人を、やうじに目はなを附けたやうなりと云ふもかかる事にや。白髪の長きはふさのやうに思はれ、今ふさやうじに菊のもんうつは此のゆゑなるか。緋のはかま著たるを見れば、赤き紙の袋に入るゝも、ゆゑなき事にあらず。磁石はばうぜんとしてゐたりしが、かのいほりと見えしも、觀音の地内と思ひしも、やはり柳橋のわが別業にて、三人の通客もかのにようばうも、消え失せけるぞ不思議なり。かの老翁再び

申しけるは、「我に逢はんと思ひたまはゞ、行く跡を見たまへ。」と云ひさま、庭のすみなる塵塚の、内に入るよと見えしは、夢うつゝの如く、あまり不審なるまゝに、立ち出でて見れば、日ごろ遣ひなれたる古き楊枝有り。扨は此の楊枝の精出でて我に示しけるか。遊行柳の謡曲に、柳の精出でて佛果を得、又祇園女御の浄るりには、平太郎が妻のおりうと化したるためしは、文章に書きしばかり。今柳をもつて作りたる楊枝の精、目前に物語せしは、まことに不思議なり。是れをおもへば、やうじ隠れなといふ物も、なき事にもあるまじ。何にもせよ此の楊枝の為に、青樓の悟道をきはめしこそ有りがたしと、ひとりの侍者はつぶやきてぞゐたりける。思ふに楊枝の古きを折らずして、そのまゝに捨つる時は、必ず怪有りと、世に云ひ傳へけるも、かゝる事になん。

吉原楊枝 下

自跋

漢苑有レ柳。一日三起三眠。號曰二人柳一焉。蓋齒木以レ柳所レ製也。故雖レ非二情齒木一有レ情乎。延爲二女郎雲談一。而授二其悟道於通客一。奇哉怪哉。于レ時正月初紋日。使下二絃堂雛妓呵上レ毫。山東京傳書二於鷄舌樓上一。

通言總籬敍

彦國佳言を吐くこと錦木屑の如く、靡々として絶えず。頃日京傳青樓の通言を胸中に呑みこんで、頓に茶表紙の一冊を吐く。是れ鐵楷が仙術にあらず、放下師の小刀にあらず。これを閲るに、象牒中に顯はれ、これを聽くに、言文而にとゞまる。嗚呼汚き眼に若輩の噂を延し、中街に暮る廊下駄の音耳に近し。實にも美といはゞ、鶏舌の液を溜らしたる酒樓に昨夜の衛絲を聴し、二十七明の長き夜雨を一枝花の曲あるを思ひ、逢ふ夜の暁きを嫉みては作りなしき花を喪む。目々の艶なる噂を口波鳴き、色深情の衣帯にさし入れたる事に、蘭下花の閃咲くと出買の色白なる皆の咲く、一竈は専ら花街に通じてしかも花實相對し、真に新を識つて、我が皆の繪下に頂いて、七を打つて、寄情の噂を賑るに至らずといへども、二と三との情を解き、他人の迷と共に京傳を愛するの一曲を知つて、絲筈をチトひねること爾り。

文きやう白書

自　序

我嘗ていへる事あり、青樓は家が爲の雪隱なりと。夫れ如何なれば、持つたが病の腹痛に惱み、金屎をひらんが爲、尻をはつ立てて、此の廓に通ふこと繁きが故なり。若し貧客我が屎を喰らはば、驀ち黄金の蟯蟲とならん。一チ日例の長屎に退屈の餘り、此の妄作書をなして、かた屎の堅きをして、ひり屎のゆるきに和げ、世に其の屎の撒り樣を傳ふ。通客といふとも我が胯を覗かずして、何ぞ尻の穴の廣きことをしらん。吁屎が涸れるにあらずや。

于時天明七年丁未孟陬。

山東屋のひとりむすこ

京ばしの傳述

通言總籬凡例

○此ノ書ハ論語ニ所謂損者三友ヲ以テ大意トス。蓋シ總籬ト題セルハ、流行ニ後レタル古句ノ雜リ无キヲ以テナリ。

○艶治郎ハ靑樓ノ通句ナリ。予去々春、江戸生艶氣樺燒ト云ヘル冊子ヲ著ハシテヨリ、己惚ナル客ヲ指シテ云爾。因ツテ以テ此ノ書ニ假リテ名トス。氣之介、志庵共ニ彼ノ冊子ニ出ヅル所ノ名ナリ。

○妹妓及ビ雛妓小妓ノ言其ノ儘ニ記スガ故ニ、訑ヲ改メズ。假名遣ヒヲ正サザルハ、其ノ音ノ訛レルヲ知ラシメンガ爲ナリ。

通言總籬

山東京傳戯作

其一

金の魚虎を睨んで、水道の水を産湯に浴びて、御膝元に生まれ出ては、拝搗の米を喰らつて、乳母日傘にて長り、金銀の細螺はじきに、陸奥山も卑しとし、吉原本田の髪筈の間に、安房上總も近しとす。隅水の鮊も中落を喰らはず、本町の角屋敷をなげて大門を打つは、人の心の花にぞありける。江戸ッ子の根生骨、萬事に渡る日本橋の眞中から、ふりさけ見れば神風や、伊勢町の新道に奉公人口入所といふ簡板のすぢむかう、いつでも黒格子に、らんのはち植の出してあるは、芝蘭の友を旦那と稱す。江戸がみの北里喜之介が住居。鮑魚のいちぐらに同じ門口、くだすだれの外に、仇氣屋のひとりむすこ、えん次郎「黄の無地八丈に、けんばふにてとめがたの小紋をおいた上著。三ツつゐに島かんとうの下著。紺縮緬のらせんしぼりのじゆばん。下著はみな黒なゝこのうらえり。うらは花色ちりめんのすそ廻し。胴うらは白羽二重、身はゞひろき仕立。あはせばおりくろの無地八丈、まへ下りながき仕立。五丁ひももあやまるとかいつて、黒のびらうどのちよんがけ。帯はおなん戸茶どんすの小もやう。づきんをえりまきにして、中の町ざうり。八はたぐろのくゝたび。花かいらぎのわきざし。かみはよし原ほんだ。すは町のおやぢがぬいたひたひ。二日めのさかやき。おしやう先へはひらつせえ。」えん次郎かたへ出いりのたいこいし

や、ねるいしきん黒ちりめんの小袖、おなんど茶なゝこのはおり、消さびにてはなのさきあかく、ちかきなり。あをいほのあふぎにて、くらつすだれかたむけ、喜のばう「お宿か、えんさんが来さしつたよ。」トうち入はいりみれば、あかりはなに女ばうのさしづをうけながら、あをちやのはげた布子に、もん所のついてあるきれではんえりをかけたやつをきた小女、しもやけだらけな手で、たゝきつちのながしの上でちんにゆをあびせてゐる。小女「かうして居るもんだよ、ぢつとしてゐや。アレ御覧じまし。いつそ嬉しがります。」喜のおかみ「いやたしうござんした、あつらしいた小そで、くろなゝこの幅のひろいはんえり、このやうなゝかいけいなきむすび、まはぐろをおとしてしらは、これはばかに、おはぐろをつけようといふしたおなり。まだ左衛門かいふ字のついたおかゝあ、此の女房むかしは松ばやのきやおいらんの、せわしんざうなりしが、年あけかかれて久しいいろきやくにて、喜之助が女ばうになりしなり。かみの毛のうすい所へみゝみねきのまゝらだこにて、あらそはれず。まだ里の言葉がやまず　そのまんま二かいの日あたりへつれて行つてほさせや。すゝ志庵さんよくお出でなんしたね。えんさんかえ。此の間はお早々でござりやした。うおでござりやすね。」下仕かけたしだしをかたよせる。えん「こゝのうちのながしは松ばやの湯殿といふもんだの。」しあん「本町の棚したもありやす。」までかいてある。喜之助は中じきりのはしらによりかゝつて、[illegible]小そで、まへをさきなだの、下タじめを[illegible]帯にはさみて、[illegible]を下に置き、喜之助「これはお揃ひなすつて、さあこちらへ。」えん「でえぶねむさうな顔の。」しあん「客を逃したしんぞうといふ顔だぜ。」喜の「ゆうべは常さんの茶ばんで、升屋へあふりやした。けさ八ツにけへりやして今起きやした。」えん「つまさんはやつぱり、深川のせかいかの。」しあん「おゐなもがうてきな奴だよ。このごろもどこかの番頭にかゝへを仕て、もらつたさうだ。」深川にて、かゝへをしてもらふは吉原でしんざうを出すに、ひとしきことなり。喜の「此の間も御供して[illegible]多喜

屋の、およふ、五介、鶴太夫、長二、ぢんすけ、仲吉なぞといふ、うざうむざうを引きつれて、向島がござりやしたに」ゑん「ときやうさんや、ぶんきやうさんと逢つて、青ろうへはとんとござらねえの。誹諧と義太夫はきついもんださうだの。」トいひながらこしからゐち川屋が仕立の、あんぺらの内ぬひ、りうさのねつけのついたさげのたばこ入からきせるを出し、すひ付ける。女房にせんと、一つ火ばこにかゝつてある、たゝみしまや、わりあちやをついで兩人へ出す。喜之助はより いゝにおいのたばこや宗理がかいたきくのはん行だなゐら、東のはかつたこんぺいたうをいだし、喜之「これでもあがりやし」トゑん次郎が しやう「ゑんさんが酒を飲まつしやらねえは、玉にきずだよ。」喜の「あいよう今の通は下戸さ。」トうれしがらせる。「しあんさんにやあ好いものがある。きのふ長崎屋のこはんが所から、隅田川の貫つた。おちよ硯をきてや。酢じさかなが何も有れあえす。」トよ立かゝ見まひのこぶ巻はなしか。あの鯉のは飼た。」ゑん「よくはやつたぶふ飯だ。」とゑ「おいしい物ではなしさ。けさのお汁でござりやすか。」ゑん「若い時ずつとやつてなく おきやあがれ。とうふ汁がかしましてるな。きつい松葉屋の晦日どうふだ。こいつア怖くもないかぬやつだ。」喜之「お疑ひは晴れやしたか。」ゑん「うなぎを取りにやりは」よ」「どうだらうといふ事か。もういゝがあるの。」トきんちやくはみまへさげながら、なにりやうを一片はふりいだす。喜之「青か白か。」ゑん「やつぱり白おを、長やぎのことさ。」あを、白、すさ、みなうなぎの名なりとうなぎといひいつう 女ぼうは小女にいひつけて堀江町へ取りにやる。おちよ「早くよ」喜の「時にしんさん、京町の新造けへの色事も見だしになつたがやあござりやせんか。」ゑん「へ、それで惚いざるんさ。晴のうちに、こゝのわけいふ者があるのかいよ。」ト住よしやおはつたおきいとをいいつめてうれんかへりきせる一ぷくたた

たいた」トいふ「ぜんてえ萬ごくにしよふきをつけて、とつしが相手にするからはひらねえわな」トあてこすやうに見せる、嬉しがらせる。「けさも尾張屋の男が文を持つてきたが、けいせいも内しようと達引になつて、引つ込んでゐるさうよ」何か哀れなくさぶえ人のうしろで讀まうといふ文だつけ」トふたりするの兩口の引きかけ、かれ人とふん　けはひの忍づをみるやうに、みよしにすりの半切へ書いた、文をはふり出す。喜之助はとつてひらき、としてこゝに書いた所からときをよんで、何か〳〵なで、ひとりを書き、しようと申か丁でみあひできる氣をつけるだらうし、わたくしもたこ引だす、江戸町のかたをつけて、いつそ晴れて來て、それろと云ふ文で、未にせひ〳〵といふ事が千許りかいてあるに、けにはえんとかな合で、えゝ次郎をいろにかけでよいきさうに、此のごろはやる手なりとなんと思ひ、よみてしまひ　喜之「出懸りする忍ぜん、何かありがてえ句ね。あの女郎はたしかに半殺しに仕て置きなさると、仇をしやすにえ。」えゝ「やりておかに云ふにやあ、はれてお出でなさろとも、二かいを御忍んりよなさるともと、皮羽おりのひもを見るやうに、兩方へくゞらせていふから、どうもならねえ。かうなつて見れば、ふびんだよ。きつい事をきりかけもしあえから、江戸町のかたを付けて、いつそ表むいていつてやらうかとも思ふよ」喜之「さうなされば、きついくどくさ」ト上意ひつれてむまい所、ト、色男には何がなる」トそばにある三味せんを取つて爪のさきであしらひ「水無月も流れはたえぬ浮世のきしに、夜舟こがしてふふり袖の、かほにまがきのあとつく程に、はでな浮名の手習ひも、くさめ〳〵のやるせなく」ト弾きてさシそのありやすが此の頃ひみめの有つたすがほとやらかえ。そのあとはどうだえ」しあふ「泰琳が妙に節をつけたよ」ト文のさきあの口べにも、ほかへ移さぬ心とは、神々さんも

どこやらも、とうに承知であろうけれど、まア、はれた證據をいつ見しよと、思やかたきし忘られぬ、忘られぬ身は思ひ出しもせぬ道理に、思うてゐるぞえわしやほんに、察して下んせ。私が名に、おつじを付けていつかさて、つくろひのなき夏のふじ。」喜の「京傳がいつはいに染つた文句だの。」えん「おかなやの白妙が、つるぜんのありやすは、なにとかいつたつけの。」しまん「それはなつ衣さ。」おさ三「花ぐもりは四代目の瀬川さんの、つるせんだそうだねへ。」えん「前の瀬川はどうしたの。」喜の「わんのんの地面にゐやしたが、國はれたそうでござりやす。」おさせ「玉の井さんはやつぱり仲の町にゐるかね。」あの子も不仕合だねへ。」しまん「さうださうさ。おふくろへだそうだから、相應なところをみたてに出て居るのだらう。此中いくふんのおいらに傳言をしてよこしたつけ。」おさ三「ぜんてえ浮氣からおこつたことさ。」喜しまん「おあへ、かやうに喜のこんじやうを盡した人も、あるにはあろ。」おさせ「いやばかばかしい。」喜原田來ばくらしいなア、久しぶりで聞いたわな。」トわらふ。女房はこいたの茶屋にて、しほんをしたかたこあいの下女はうなずきかにこくゐ、女房はおとをきる。此かはえる夫婦は京町のいろ事からふゆりよればなし、喜之助はウ、ありがてえ、ウ、さうさといいかげんにあいさつし　喜の「御心安いからそのまんま出しやす。」おさ三「まアこれでも」えん「いいわいな〳〵」トいふ少ゐはかまのないたろうのす、出す。しま三「こいつは著ながしのものだの。しやれたもんだ。」此のあひだ酒になりうなぎも　おたかたびらけてしまふ。喜の「ホンニ住よし町の川治から、茶入を待つて來ておきやした。こういうじやし」ト一行物から茶入を二つだして見せる。しまい、えん「こいつあ京がまたわえ。新兵衛が萬右

衛門だらう。金一枚位かの。此方はいつからなものだ。とんだねきものだ。この中數寄屋川岸の伏甚から瀬戸の玉川と難波を見てこしふこしたが、尤も遠州の書付があつたが四十兩だいだ。目がでるの。袋は白地の小ぼたんに一つは嘯太たつけ。どれもはくさきはよかつた。」しあん「此の間橋場で江月の横一行を六やしたっけ。一片に雲自西自東といふ語さ。表具もようござりやした。天地はやつぱりふとじけだが、風帶一文字はあんらくあんさ。」えん「おれにゆづッて呉れめえかの。」しあん「はなしやすめえよ。」喜之「角町の德六が高麗の御所丸きんかいをもつてるやしたつけ。品川の萬千がもつてゐる松花堂の布袋はとんだ出來のいいものさ。萬千といへばチシまだおめへさんに話さねえが、柳郊さんか村田屋で大いな事さ。何とかいふ女郎でござりやした。此の頃は村田屋の部屋は扇屋といふもので、萬千もおつきあうたをよみやす。」えん「あそこのその歎といふ女郎をおれがかつたよ。新宿からこした橋本は又あつちへ歸つたさうだの。おいらといふ好い女郎があつたつけ。妙國寺の仁王に提灯があがつてゐたつけ。」喜之「たゞ嗣のけしきばかりの所だよ。問屋ばで馬のいなゝくには、あやまるて。」えん「大木戸の石がきにせきだの金のはさんであるのは、なんだの。」しあん「あれは何ンかのぐわんをかけるのさ。」えん「おいらはあの土地においては不通だよ。ちつと旅もしてみようす。湯治にいつた時、賀達が所へいつたまゝだ。」喜之「御存じなくつてもな所さ。」しあん「しかし夷狄だもきみありだよ。吉

噺ならつけとゞけの文を遣らうといふ所へ、臺の物をおくりやす」北「いやもう臺の物がきたやれ大騒ぎさ。こはがるものはお鷹匠の御留り、いやがるものは五ッがはりに正めんをはない、にぎやかなのはえびすかうさ。おこしをこしらへてにかい中をかつぐ内もあり、あんた色男をえびすにこしらへて嘲したてすあいくうたちもありやす。ぜんてえしろうと芝居のはやる所さ。」北「そこまへかたは松ばや屋でも度々狂言がござりやしたねえ。」よ二「此えびやなどにもよくあつたよ。」北「ぼくがさんが丁藤で、玉屋の山三さんがお五郎で、大門の四郎兵衛さんがすけ成で、をかしい事がござりやしたつけ。」北「狂言といへば茶十郎松が六けんのおさくをされて、ふる市とよくらへこつていくさうさ。」をかしいおやあねえか。」えん「そいつが中洲であつかちの邉ごくをかつたときほど、をかしいことはなかつたに。」北「そこでえぶきなつくさいよ。」「さんやそこおやあねえか。」よ二「ほんに芝居のはきがいふさくへふつたといふ句ひだ。それおしやう、主のはおかださうだ。」北「さあ／＼こいッァ大さわぎだ。かゝあに叱られることを仕だした。」北「もちつとの事でもみせなたのみにいく所だ。」よ二「しかし所ではすエわな。」えん「やけぼこりでいいのさ。」此の間女房の手れうりにて、たまごのあつやき（にわさびじやうゆ、吸なにはなり）すけのあんばい、えん次郎「成程おしやうはよくふぞ。ぬす人には極つた。」しう「もし松ばやおうやしあい茶づけをいだす」あ小格の書いのを附すり。」北「あれはつけあそ。扇屋のせんべいの、丁子やのてふあしいせん、

四ッ目屋のかすていら、竹屋の水貝、しつか玉屋の蒸ましなぞ。こいらはつけめさ。」あふ「丁子屋だやあねえが、はてなといひてえ所だ。」きぬ「はやりの言葉も味なものだ。ちよつといひだすとおしやうにはやるよ。此のごろのはやりは扇屋のきかふざん。丁子やがはでさ、ぶしやれゑいぞ、お楽しみざんす。松ばやがおちやあおつせんか。玉やのおにのくび。大文字やのしらずんもよくいふよ。さまといふ事をせとといひやす。越前屋はしんにと云ふ事をたんといふね。」ふ「丁子やの日でんさんと、されいでさんすよと、松ばやの山寺と、さかことは、いつの間にかすたつたの。」きぬ「今でもはうぐ〜でいふものは、しつたかさ。」しあふ「をさきさんおあへはよく知つてるだらう。大かなやの正月の仕着はなんだつけの。」おらせ「たしか地が黒で色人の花たてわき、角のつたやが鷹のもやうさ。わかなやが若松にかすみ。中あふみやが花がうしでござりやす。鶴屋は牡丹のすそもやうの時もあり、ひおりめんの無地の事もござりやす。角の玉屋はほたんさ。松がねやがさくら川さ。松ばやのくじやくしぼりと大えびやのほうわうがよくまちがひやしたつけ。」えん「あふぎやの十二ひとへ、丁子屋の若松に額はよく人が知つてる。」おらせ「瀬川さんのつき出しの時は、いつでも佳例で八ッはしにかきつばたの模様でござりやす。大文字屋のつき出しはいつでも、とかくさかなの模様さ。」えん「正月元日に禮にでるのは、大びしやばかりだの。」おらせ「さやうさ。」きぬ「つき出しの時部屋持ばかり、うちへ残るほど

うしたわけだ知らん。」 おちせ「おれはさ、わかりやせんよ。松ばやにぜんてえかてえ内でござりやす。
ん郎衆に上草履をはかせやせん。今でもはくものは、瀬川さん、松人さん、部屋もちで二人許りでござ
りやせう。そしてれい日にはみんなざうりさ。襟かうがいも中座まで楽ずきさへでござりやす。さん
や、でえぶいぶるによ。ちつとさしくべねばいい。」よし「丁子屋もかしよ。内だよ。客のまへはりばさ
うりを手にもつてとほるの。客のこねえ女郎はつゐしかとほると中略へだされえね。二かいに小便
所の二ところ有ると、はしごを庭からあがるやうに付けてあるは、丁子やばかりだ。」 よし「まるえび
やにははしごが二所あるによ。扇屋の小便所ほど通いのはあるめえ。寒い時分などはてえきだよ。半
七がかつはを着て床をまはすも久しいだらけだ。玉屋もかてえうちさ。そして早く見せたがらせる内
だよ。松ばやおやあ、あね女郎の事をわつちらんといふね。扇屋おやあさしきでといひやす。丁子や
おやあ、あね女郎りその姉女郎の事を大きいおいらんと云ひやす。」よし「玉屋といへば紫夕が小むらさ
な皆来はあがつたかの。」 おちせ「こんだう我物が香角のまゝで、一ばんまけたさうさ。」 よし「琴棋書画を
やるさうだの。けいせいにも色々なくせが有るものだ。きさがたが、水かゞみのありやすが好き、瀬川
が茶の湯、琥さくが池ぐさのてんとり、すがはらが梅をたち、わかつるが謡、ひなづるが團十郎び
いき、松人がどうしたのだえ、丁山がちよつとみな、たき川が三つ七賓の紋所をかへす、丸市かかぶ

ゐの外に男の子をかゝへて置く事などは、今でのうがちだ。」しあん「こんおう今戸の墨賀が寮へあゐりやしたら、るうゝ屋のせんぺい、くわれき松屋のきよみん、いづみやのこえん、いの字いせ屋のせいら、長崎屋のこはん、をはりやせつ久、かんほくといふ醫者、宗匠のとりつ、などが來てゐて、儒枝點の（はいしはけば はい點事なり、）誹諧をしてゐやした。いなぎも源氏の書人にこつてゐやすよ。地内のおたみが死んで力おとしさ。ほくがもへりに詣りかゝつてゐやす。」しあん「けふは二十六日だの。あさつては三河じまの不動へいかうぜえ。喜のぼう。」喜の「あゐりやせう。」しあん「後月の不動ほど傾城のでたことは覺えねえ。ナウ喜のぼう。まつさきがたが、たはらやのよしの、にしき戸の若つるが出るし、七こしかでるし、七里が出るし扇屋のうたかたが出る。」喜の「岩越も出やした。からことも誰か見かけやした。けいしやとでこぶ見かけやした。あさなに駒次、おりせ。」しあん「ひやうごやのおくにも供につけ、成瀬けい」やはほんじやうだ。見番にそばがたえぬはずだ。」（ざしきならでもとけんばん一分にそばをかふなり）しあん「もし羅月が妹は、いつ梅とやうじやのおいくを、そうじめへにしたといふがほだねえ。あれでうすいもが無えといい娘さ。」えい「何いいものか。うすいも所か、ひめじがはの紋がらといふ面だ。ときにちふつとよつて大話になつた。ちやうどじぶんだの。もう豊ゐせのおゐきどつくりもひけたらう。喜のぼうあいぼつせえ。これやは一町目のつもりだ、ナウおしやう。」しあん「おおさん喜のさんなあつかなによ。

おれもいつちやあふりしんのいちやつきでもさせるこつちやあねえ。いろ男のていしを持つと心づかひだよ。[illegible]大事のもんだがお貸し申しやしよう。」ト[illegible]見たあ[illegible]喜之助[illegible]いろ事のできた事をしよう[illegible]
ろ、[illegible]「お供ないたしやしよう。おもせ著物を出してくりや。」[illegible]
[illegible]戸棚の[illegible]ねだん[illegible]のひきだしから、ゆふき縞の上著、くじやくしぼりに[illegible]
[illegible]上田のはおり[illegible]これはえん次郎に貰つた[illegible]
る。喜之助は著てしまひ、喜の「ちよつとびんをなでつけてくりや。」女ばらは、さしてある一分[illegible]
[illegible]
所を[illegible]一寸[illegible]下にとり[illegible]の思ひ。」
こない。」
おれ」[illegible]あれなわしない。[illegible]このうたの戸だんは、丁山びつぎの間
と[illegible]喜之助は、[illegible]お出でなさりやし」
えん次郎、しあ[illegible]
[illegible]う上、もし四畳さんの所から人が来たら、やけあなが目になおわせんか[illegible]しよかえ」
[illegible]うと、もし四畳さんの所から人が来たら、ふたつの口へでもいつたといつておきや。それもよしこれもよし」ト そこらを見廻しな「何か忘れたやうだわえ。」ト少しか「オ、それ／＼、ふくる町の豊國
[illegible]所から人が来たら、忘れずに此中のやしきの金二分るのだよ。」ト、だんばしごの小引[illegible]こいつもは
[illegible]なつた[illegible]小女[illegible]よ[illegible]
え[illegible]おおきいつて来ま[illegible]

ツトおつむりがあぶねえ。」喜の「サァおさきへ。」

此い間帰ばしより大きんばしまで郡中にしやれ、吉原やうじのふさならで、餘りながくしければこゝにもらす。

其　二

けふ此い頃は瀟洒や輕井澤ではやる時分、さ植田ぞゑにのかたなド々皆、こい茶さやの袖くち、もえぎさんだのうら付で、とんだおやまのなく、西のくぼの我善坊谷や、本所の割下水あたりで見かける手合、くら宿でいやがられるなまま通ども二三人、雨ない別れて土手のはしを通りながら、一人の二本ざしくはへ煙管をはたいて、甲「ナントノへみさつせえ。田中の方から、三まいの早かごが來るが、いま時分なぜあねえに急がせるだらうの。」乙「ほんに何者だらうの。こいつは譯せねえわへ。」丙「ナドいち、早かごは土手のきはまできたり、文次郎「あれ見さつせえ。かつぎ息きせず、へゝきこえた、おれはたしか

また田中のはうへかつぎこむぜ

駕籠をかき習ふのだ。」里「成程さういへば、中にへんな奴がのつて居る。」喜「何になつても習ひのいることだの。これ公が所に孔方は少々なしか。小ぎくを一帖かひてえ。おれは顫る秋風だて。」喜「青樓の客が、そんなけびたものを持つものか。きんならいつくらもあるが、けいせいのわるがみを、かすりがうしとさつせえな。」花「それでも紙がねえと、何かふところがあるねえやうだ。」里「コレかみを結

ふたら、こゝのかみひ牀がいゝぜ。こつちらの髪結牀は下手だぜ。」至「此の高札場はよく出来たね。
八十爾か、つたといふ事だ。どういふもんだらうの。」花「くわうとくじの門ぢやあねえか。」トしやれながら来
る、跡よりわるいしあんきたり、喜之助まけなかにはさまれこえ、火吹、きたりうのでんぼ、扇にて夕日をよけなおら、きれいごとにていふ／＼と来る、なまつうどうは、歯をくりかゝり／＼見て、えもん坂をおり、中ゆびとすり
ゆびで、かたびをくるりとなでゝみて、まなをあけたとかい、うはまへのえり先を一ッぱいつぎり行きすぎいる。○川竹の流れはたえずしてしかも元の客にあらず。さ
とに浮かるゝむだ人は、且きれ且なじみて、久しく来る事なしといへども、つき出しからなじみて年
のあくるまで来る客もまた少なからず。何がどうだか解らねど、たゞ人の氣をつりあぐる大よせ小よ
せのくるわの名とりおほ、すらりとお並びなされて、よい中町の夕景色、左の竹村に比して、右側の
七けん軒を六らぶ。はでな遊びを駿河屋がまへ、此の時まじめなるらんとしやれながら、門口より、
よね「此の間はおせわでござえした。」えんま「おしやう。向うの兵庫やに居るのが、丁子屋のつき出し
だ。よつほど瀬川といふばがあるによ。」喜の「かなるとは先づ名が美しいよ。」女は手をふきながら、いやなから三人あがる。下
ト女「これはお揃ひなすつてよう御出でなさりました。」とシえんさんがお出でなさりましたよ。」女房おかみ
こちらは出て、おえんと茶へむきてそうさ、喜之助の奴がかみは束ている。とを「ようお出でなされました。」よね「旦人はどこだ。」ちよい「只今お
ごしきへまゐりました。おいら江戸ちやうから度々お人でございました。よほどお久しぶりでござり
ますねえ。」えん「心しぶりもてえきうだ。」しよう「吉原ぢやあ四五日こねえと、久しぶりのやうださうさ。」

た「モシえんさん京町に何かお世界がお出來なすつたさうでござりますね。あんまりお浮氣をなされますな。それでお久しぶりだと申しますのさ。」ト三人がこしの物を取り中ごしになつてゐる「ねえ喜のさん。」喜三「いいんにやよ。それにもわけのある事。どうでしまへたかくな事にはなるめえと思つてゐ、こつちへは沙汰なしにした。」喜三「これはようござりますが、もし江戸町へでも知れましては。」ト少しまじめでいふ。喜の「そのおせけえもすんだ事ださうだ。もうこゝ切りの事さ。」女房「さやうなら、ようござりますけれども。」ト立つこ袖だなかとこ下おかたかけへおさしたかけ、しよくだいを中へ出し、喜三「いいのじいせやの二かいに後方をむいてゐるのは雅だ。」女房「扇屋の扇のさんで御ざります。」喜三「ぶたいは團れたものさ。」しあん「つたやのさんしう、つる屋の在原。此の春のつき出しはどれもあたりだ。丁子屋の名山が此中向島で見かけやしたが、七越といふきみがござりやす。」えん「丁子やといへば、みさ山もとんだ美しくなつた。」女房「松ばやのをはやく見たうござります。」此の内吸物すゞりぶたなど出る「ちつとおすひなされまし。」ト一サアはじめなさえ。」女房「さやうなら。」ト酒になる。とどえん次郎へ又杯まはる。女房へさし禮儀をする。みな一通り杯すみ、此の間に松田屋をしまひにやる。えん「おかう通るは藤兵衛ぢやねえか。」しあん「藤兵衛々々々が二人通る。」喜三「おきやあがれ。」えん「コレ／＼藤兵衛々々。」しあん「でたがねえ藤兵衛々々々。」喜の「藤兵衛ます藤兵衛はまゝの紅葉かな。」えん「これちつと默らねえか。」藤兵衛はいのじいせやのまへあたりできゝつけかけてくる。藤兵衛「これはどなたかと存じました。ごきげんようござりますか。」

え「どこぞへ行くのか。」藤「ひなづるさんのおざしきへ参ります。」えん「ざしきでなくばはなさうと思つてさ。」藤「それは殘念でござります。松藏、藤二、三味子や我物がまゐつてをりますから、ぬけにくうござります。今晩はやはり一町目でござりますか。」ト ざしきの様とらけんはどうでござります。」喜の「又まかさうと思つて。いそぐならいつて來ねえ。」藤「さやうなら御めんなされまし。」ト向ふへかけて二町目へはひる。二町目より竹屋の歌ぎぬ出てくる。跡より歌菊出てくる。えん「おしやう、むかうからくるのは誰だと思ふ。」しやう「竹屋の歌衣さ。」喜の「こいつはきつい。それでは近眼とは思はれねえわえ。」しやう「顔も提灯の紋所もわからねえが、禿が耳のわきへ黒い絲をさげてゐるのは歌衣と、大文字やのはた袋ばかりさ。」え「あかい所にめきさがあるの。」女ばう「お二人ながら竹屋の千兩箱でござります。」しやう「歌菊が地口にだい。」女ばう「もう一ツあがりませんか。えんさんお茶づけはえ。」え「腹中まん／＼さ。」しあんにこぶしをいぢつて見て「もちつと熱くしてくんなさえ。」いわしときすのほうろくやき、かはりの吸物出る。ふたをとつてみて 喜の「イヤアかもせんば葉付大根のがてえわえ。」しやう「料るもんだよ。」ト云ふ所へ溜川がかぶろ來る。女ばう「若しえお藤さんに、おいらんでおつせえすこのあのけさの文を屆けておくんなんしたか。」と、こ」のれんをひツぱりながらいふ 女ばう「ム、さう申してくりやしたけさ福三保藏にもたせて遣しましたが、おるすだと申して御返事は参りませんこと、申してくりや。」ト かむつてゐ方をむき、「十や三保藏、御返事はこふんだなう。」ト勝手より三保藏「まゐりません／＼。」女ばう「そんならあの、さう申し

いせう。」女房「おつと遊んでいかねえか。」めなみ「叱られんすよ。」えん「コレあの子や。」女房「あなたみ、あなたがなんとかおつしやるよ。」あなみ「なんでおすわいなあ。」ちよ「おいらんとどうじさんによくいつてくりや。」あなみ「アイさうまうしいせう」ト云つて はいる 女房「とんだ利口な子でござります。三保蔵や、其の送り物は、玉やりたが袖さんのおざしきへ行くのだよ。そしてみつさんはじきに歸らつしやるさうだから、かごやが來たら三ちやうだよ。」そうかうするうち、三次郎あかた松田屋のおいらんおすかはるか二に來る。眉如翠羽、肌如白雪、腰如束素、齒如含貝、嫣然一笑惑陽城、迷下蔡。其のふぜい、田町のかたはみて久兵衛が繪つた、からいとの繪あやにたてもんのうちかけ、白じゆすのへりとりむく、かみに手がられけ、かのみすは小間物屋の見せの如く、禿のかみ一人はりさお一人はやつこしまだ、うつくしくかみゆひの長二がてぎはをみせ、ふり袖しんぞう川波、せわしんぞう玉夕、つきそひきたるこばんしん下夕おいらんのえもんをなほし、打かけの下たるをなほしえんとを・こしをかける。おす川につこりわらひ おすま「おふださんどうなんしたえ。」ト いつた ばかり えん「さあおいらんお上りなされまし。」おすま「こゝがようすよ。」玉夕「えんさん、よくお出でなんしたね。」あふ「いつもうるはしいおかほつきね。」しよう「何かむしやうにきれえでござりやす。」玉夕「嬲つておくんなんすな。ぬしがみんすにえ。」トいふうち松田屋のわかい者清七そうたんをけし、おたのみまうしますと出て行く。玉ゆふは茶地のつきんの長いのらから、きせるを出し、たばこをつけておいらんにわたす。父つけてえん次郎みなへくばる。おす川禿のみゝに目をつけて、何かいひつけてやる。おす川「いの字いせ屋に、ときやうさんがゐさつしやるから、俺がいふとつて、よくお出でなんした。」といつてきや。」禿はむかうへ行く。あけえんの下から犬がのびをして出る。川波「ヲヤアわつちといへば吃驚しいしたよ。」女房「此のお杯はわたくしが預りまうしませう。お雪やすゞにつれ申しや。」ト云、五町と萬里と、おしつ八百吉

を呼びにやつてくだせえ。」下女「[illegible]を[illegible]し先へ出る、[illegible]いせいも立[illegible]いつる。女郎「さやうなら　おいらん」おす川、玉夕「おやかましうござりいした。」女房「どなたも御きげんよう。」みな〳〵[illegible]一丁目へまがり[illegible]喜の[illegible]よりと松田屋の[illegible]の「井川さん夏里さん、何うなすつた。何もしんになッてかきなさるね。」[illegible]夏里「で[illegible]せ[illegible]より[illegible]云ふ所へ、お[illegible]り二三[illegible]見立て[illegible]えぶ道がわかうおすね。」[illegible]「こんやは[illegible]んさんのつきやひ[illegible]いざ[illegible]に[illegible]

いべ〻に青いべ〻に、白いべ〻を着し、こ〻の見世はたんの事はねえ、けくわの薬種と云ふもんだ。」[illegible]を[illegible]て[illegible]「[illegible]、エ、すかねえぞよウ。」[illegible]「後程お目に懸りやせう。」[illegible]松田屋へはいる、みな〳〵な[illegible]行[illegible]うれし[illegible]を行く、うちは[illegible]んせ[illegible]にに[illegible]と[illegible]の前に、[illegible]たけ[illegible]なお[illegible]山を[illegible]な[illegible]たた[illegible]大か[illegible]ら[illegible]山をこ[illegible]た[illegible]源兵衛殿をな〳〵[illegible]う花の[illegible]にてあ[illegible]下の[illegible]一[illegible]兵衛〳〵、お客人だぞよ。」みな〳〵はしごを上る。跡じりにて女郎四五人のとゑ　源兵衛「直に座敷へいれ申さう。」[illegible]た[illegible]二[illegible]大[illegible]の女を[illegible]たのもと[illegible]つらできつ[illegible]呼はつしやるぞよ。」[illegible]の[illegible]これたおだけへ[illegible]しな[illegible]行く[illegible]長崎屋へ行くわ。」[illegible]「さがりい[illegible]。」おす川いつの間にかどこへかなくなり、ばんしん玉夕ふり[illegible]ば[illegible]水[illegible]く[illegible]

[illegible]下[illegible]、[illegible]川が座敷の好み、中の間の飾り夜具は錦の山の如く、一面の琴は遥かに見ん瀧に似たり。囲ひの重縁は松風の音かと驚き、いかうの小袖は楓の紅葉したるが如し。本間の天井には四

季の歸いろ〳〵、おい〳〵花の手柄をなせ、はりつけには朱雀を畫いて雲上に近し。きんの金彩の爪に、義之の墨帖をちらし、湖月萬葉のさうしを並べ、異香四方にくんじて大盤の紙花こゝにつき、龍のくびなる玉、つばくらめの子やす貝も、こゝに持ち來るべしと思ふばかり。床の眞中に銀しよくをてらし、朱蒔繪のたばこぼん、きんばうの杯臺、かけばんなぞほしてある。

しあん「家名は松をもつてし、紋所は楢をもつてし、床柱は栗をもつてす。」喜の「サアむつかしい事を云ひだした。此のからかみはだが書いた。」ぼう「鱗形樣がお書きなんしたよ。」えん「もう上ゑりは知れたから、大のゑにするがいい。」ト此のうち廻しの杯てうし持ち來り、ろふそくのしんを切つて行く所お定まりの通り。なかゐ吸物持ち來る。茶やの女ちやうちんを消し、はき物と一所にあがる。おく。喜の助にあがるふりそでゝ。喜の「攻さんよしなんし。いつつッて階子へふだをはらせんすにゑゝ引つ」ト、息をきつてかけ來る。しあん「休日の湯屋を見るやうにでゑぶはしやべくの。」喜い「そんなに騒いだら又、やりてがみせ三味線の一といふ聲で、りくつを云はうが。」喜の「それでもからかひんさ、な。えんさんよくお出でなんしたね。お雪どんどうした。」ト茶やの女のかたへとりつく。跡よりしあんにあがるふりそで夏いろ來る。えん「此の子達二人はむしやうに美しくなつたよ。」玉夕「あいさ、いつそいろけづきんしたよ。禮日もふり袖の跡おさへは、ぬしたちふたりさ。」えん「早くつき出しになつた所を見たい。其の時は知らぬかほだらうの。夏いろさんの初日は大方おしやうがするだらう。」しあん「アイサその時になると著物のあんじがござりやす。上衣はまぐろの瀧のほ

り、おくは牡丹餅のおらしさ。」良いふ「よしておくんなんし、ぞおかしい。」玉夕「お雪どん一ッいまつせえす。」良道「どれおれがついでやらうよ。」書案「イ、エ玆へおくんなさりまし。」良いふ「一ッ呑まつせえし。」書画「おいらんはどけへ行かしつた。今までゐなさしつた様だが、もうどけへか見えなくなつたほとゝぎすのやうだ。」えん「松田屋のけいせいも、だらふそくを見るやうに折ふしたちきえがするて、あやまるよ。」玉夕「わつちらんは今一生の客人の所へ、あいさつに、ドッさしきへお出でなんしたよ、琴のやよび申して来や。川漢さん煙草を出しておくんなんし。」玉夕「此の引きだしかへ、おつせんよ。」錦木「エ、じれつてえ。そこにあるからお見なんし。」玉夕「さきやう烟管をなくなへしと聞えあれるでえぶ竜田が御上達だ。」玉夕「それでもどれつたうおすい。」トさ云ふ所へ、すい[illegible]の男、[illegible]来る

[illegible]

す、こんばんはようお出でなされました。只今玉やのお客人を[illegible]ましてそれへ参ります。まつびら御めんなすつて下さりましと、申し付ましたそして玉やで小紫さんが、あなたへ宜しくと、おつしやりました。」トもがくしてかへる所へ、表ざしきのおいらん髪はしのぶわ さゆ山「えんさんよくお出でなんしたね。」えん「イヤアとめ山さんどうなされやした。はなしがあるからちよつとこゝへお出でなせえ。」さ山「あでかよて」といつて後に来かいた[illegible]」トかたのあたりでちよいといふけをゝせ、おし[illegible]

あふぎたが　おすみ川「もうなんだかわからぬ事のきさくしになつて参りした。」　[illegible]「おいらんこれはど
ら来る。
うでござりやす。」　ト夕「これ／＼は参りしたねえ。」　おすみ川「きいしたく／＼。」　ト夕「ありやあおつせんかえ。」
おすみ川「ありいさ。」　しらん「おめへがたは、しやあねえかの、蚊はねえかのと、大音寺めへの塔ぢやあある
めえし。」笑ふ　[illegible]「わしもしえ下々でありやすの本を貰つて参りした。長崎屋でぶんきやうさんが、お
ひろめなんしたのでおす。いつごろあだでようすよ。」　ト夕「ヲヤお見せなんし。」トかほとやら云ふめり
やすかえ。早く読えたうすねえ。」　おすみ川「まあのちにお見なんし。」　此のうち[illegible]出る。[illegible]しのわん、[illegible]いひつむしくはのくわい[illegible]に[illegible]この[illegible]松田屋のあふしよく物は[illegible]なり。これ立はこゝに[illegible]。あまくだかりは松田屋のつけ目にて、[illegible]切なり、はしは前根からとりよせる竹の先をけづつたのなり。これもこゝのりうきなり。みな／＼はあはよき故、[illegible]ともにならべたばかり、ぜんはさしきの拾小舟したる。こゝ一文けいしや八百吉、おしづ、たいこもち左町萬里[illegible]するぢやていしゆ七右衛門来り、大さわぎになる。此の所のし[illegible]あまりさう／＼しくて、[illegible]こゝに[illegible]まうかうするうわひけをうつゆゑ、[illegible]夾の間をたてきり、こゝあしの[illegible]三行き、けいしやたいこ拵へなく／＼かへる。おすみ川[illegible]とこをきめ、喜之助、しあとも、また／＼の[illegible]まうをはじまる。すゞりぶたの上にくわゐの丸煮に、こはふかのいしてのあたまの如く、[illegible]紙を引きさいたるに似たり。よこらにてのふた茶碗のなかに、いるなれの[illegible]じやうゆをかけたや[illegible]い。

川竹「しあんさんはどうなんした。」　喜いろ「いつそもう酔ひきつて寝てしまひいした。いつそすか
ねえちかあぼうすでおすよ。すかねえぞよウ引。」　[illegible]おやばからしい。何もたべるものがおつせん
よウ引。」　喜いろ「となりへ梅づけをとりにやればようしたねえ。これ／＼その子は誰だ。此の土びんへ
茶を一ツもつて来てくりや。いい子だぞよウ引。」　トいひながら、はしのかはりにした松ばのかんざしを、あ
[illegible]してふいこまれ。おすみ川がかぶろは雨ぜ[illegible]

をおいて、ねらしのふた一人してたばこぼん、おき、ねまきを帶へはさみ、おいらんのくしかうがいをしまひ、火を入れて來り、そこらをかたづける。トタ「もういつてねや。また長火鉢へ當つてべん／＼と起きて居めえよ。」長火ばちと、ふた總毛のあたるひばちは、もへいとは下にあり。新ざう「さやうならお休みなんし。」ころもだのそうじなく、ひなだから。馬道「玉夕さん／＼。ちよつと顔をお出しなんし。」トタ「何ンでおすえ。」まう「あのねあのね、これ／＼がさつき見せへ參りしてね、明後日こようと申しいしたよ。主にも、よく言つてくれと申して、おしやべりをだしきつて參りました。主にも、とんだ恨みがある事のほのことと言つて參りした。喜んでおくんなんし。」トタ「わつちといへば、かたつきし主の來なんすのを待ち切つてをりいすよ。なア、此中の文を屆けてくんなんしたと仰せなしたかえ。女さんもあんまりすかねえ不人情だよ。」馬道「腹をおたちなんすな。主が言つれ申して來いすといさ。明後日はしまつてるから、と言つて參りした。」トタ「「主」といへば嬉しがりきつてるの。」まう「それでも嬉しうおきなせ。」トタ「それはさうと川浪さん。さつき山崎の人に、ひな形をやつておくんなんしたかへ。」まう「持つて參りしたよ。」まう「今日は二十六日だね。嬉しうおす。あしたはかみあらひ日でおすよ。」まう「なに晴れしやういつていい、ならくさきたか。」いさゝか玉夕さんね。ごしやうでおすから、なんぞ藥をおくんなんし。いつそもう、しやくが痛くつてなりいせん。」馬道「わつちらんの所にきおう丸がおすから、まあおしきへお出でなんし。」まう「ぬしの客人は、おかへんなんしたおやあねえか。」いやさ「松さんはかへりしたが、太兵衛さん

ぶゝ塗りにしてやらうから、出みことつて、夏花さんと民の戸さんと一座でおすよ」トまた一ふ、はつ
ぬこ」いつ子「あいさ。さとうの坊主で、さけをよくのみいすよ。さつしておくんなんし。わつちとい
へばたゞ一ねえに、新造になりいしたらうねえ」志津「えいじんさんに、見てお貰ひなんしたかえ」
いつ子「やつぱり、癪だ」とおつせえしたよ。それでも、按摩引込むと腰元にするト、とおつせえすから
けふも無理に、ねせへでましたは」ト多「しきうちきなん、こゝの次の間へ」しのびをおとめなんせんかこ
ト熱茶うち時はうつり、八ツをすぎて昔ははにひつそうし木ゝあり、打つて聞ゆれば、昔
青「よしいせう」ト　昔ンヅ、なくなつてしまひ。ト便所のまはりにはかけは、おくり物のかる山の
ごとく、水だいのかみつみとしてうしろをむき、江戸町二丁目[illegible]お所と書いて、そばのせいろう、
れんじに[illegible]二つ[illegible]みごは、人形の[illegible]しかしづまり[illegible]そしきにて[illegible]れたる[illegible]き
くしどうは、なつみどきつと音ト、今までしられたる座敷もなきりの天窓、いつもおとはいるなき声に、すずれ
火の用心かかなばうあゝ其のこゑもしづまり、さきまもけいせいもれて、夜けまのとあきえせすとねこばかりおきて
あそこみ、夜はしん／＼とふけわたる。折としとしんぞう、あいつにけいせい、のうしろ姿をナリ、京之助にうつ
の内へはいる。此の所の秘意作者しばらくあづかりなり。此の木を[illegible]たいてい御すゐまゝあれかしおもうて
しきは死ぬ死なうといふ中になる。紀にこうぶれたいこうは　志津「それお見なんし、ふとんの外へおちなん
うちよれたれを流すばかりのむつごと。ほつてはれ、のはなしこみ、
すた。いまこつちらをお向きなんし／＼」志津「あやまつたら、ふしようながら向いてやらう」むかせ
らるゝは恩ならず、向いてやるのを恩にしてだ」志津「男心のにくいのも、嬉しきほどのやほとな
りいしたのさ。サア誤りいすからお向きなんし」さみしうおざアナ。ねしにきき申しいす事がおすに
え。ゆうべどけへお出でなんした。京町かえ」志津「フゝおつな事を云ふの。京町のねこがあけや町へ

通つたうはさは聞いたが、おれが京町へいつたときはまだ聞かなんだ。」「よしておくんなんし。とあ川さんが中町で見かけたと噂をえしたら、ア本當に噂せうし／＼、おいひなんせんと、くすぐりいすにえ。」「これさ、まさねえか、ぶちりあすでよ。」「そいやあうそでおすが、ほんに咄ァ、わつちを招んでおくんなんす氣がえ。」「此の頃はでえぶ、ぐちになつたぜ。」「それでも若し、ぬしのとつさんやかゝさんが、ふしようちな時は、どうしんせうねえ。それをおもふと、死にたうおすよ。」「それよりまだ先が処二年三月と云ふ約だから、其の中にはせつちに、とんだ事ができるだらう。」「まくつらつてお見なんし。五年このかたおつれがみのためにもわるし、ぬしのためにも悪いよ、たび／＼あきらめて見ても、思ひ切れんせんものを、ほんにあく縁でおつせうよ。ぬしもさう思つておくんなんしよ。おれを又ねなんす。ほなへかよのを入れんすによ。」「これさ、あやまつたよ。こんやはむしやうにねむい。たばこを喫ひ付けてくりや。てめへおれが事ばかりそんなに云ふが、おれが顔の立たねえやうな事をするなよ。こんなつらい何を出すやうになつちやア、たよりねえ。」「まだ其のやうにおうたがひなんすなら、此の上、ゆびの一本や三本はいとひいせんが、手でも、に指を切つて貰つたとて黒焼にして、むしやすのにはなるめえし。しよせん／＼けいせいも金はれねえ。」[illegible]

出した。少し腹がきたわえ。さつきそこにおつたのはなんだ。」女郎「仕切場でおすよ。」（仕切場とは帳もおなじことなり、）客「そいつはおやまる。れいの小梅のかり〳〵するので、ちやうけにしようこ。」女郎「これ〳〵、太兵衛どん太兵衛どん。これさ、後生になるから、茶うけぜんをぜんこさへて来て下さえ。」（かかるせかいに引かへることなりましきは大かんしやく、）女郎「あれさ、およしなんし。しやくがいたうすよ。ごはつてもおくんなんすな。」けがれんす。主やおわりいしやれだよ。」客「そんならどうしてしも、あの客をきれる事はならねえか。」女郎「それが氣にいらねえで、主がお出でなんせんでも、切れる事はなりいせん。わつちや正直ぬしの推量の通り、あの客人にほれてゐんすわな。」客「でえぶてめへは白ラばけに、がうてきを云ふな。それぢやあもう料簡がならねえわえ。」女郎「料簡とは、両方の手にけんをもたせる事かえ。あぶなうおす。およしなんし。」客「何さ、だこいつア、いいかと思やあがつておれがかう云ふ句を出す日になつちやあかくごをしな。まづでえ一チこの枕の紋所も氣にくはねえ。此のきものの裾もやうのあたりも白状仕てしまへ。」女郎「これさ、そねえに足げにしなさんすな。大事の色男の紋でおさアす。」客「かうすりやアどうするこれえ。しやうぶ刀の身を見るやうに、白イこばかりぬつて、つら許りうつくしくつても、いきしにのねえ女郎は嫌へだ、此の女郎は此の位なやつ、こいつは此の位な奴と、てえげえ女郎のねうちをしてつきやつてやれば、いいかと思つて、をかへあがつた河童を見るやうに、ぐにや〳〵する

十郎はこつちから、おさらばだわえ」 女「ホヽ／＼それを聞かうばつかりでおす。そんな氣に入らぬ十郎なら、早くおさらばをしておかへんなんし」 客「けへらうがけへるめえが、うつちやつておきやあがれ、おれがゐるちやあ、そねえに怖いか。だうりでぶる／＼ふるへるな。これえ、中町の何屋のうちにやあ、せつちんが何軒あつて、何やの裏にやあはきだめがいくつあると、四つ手にわかさりのかゝつてゐる時分から、きつねのまひ込む時分まで、三ッぶとんの上におしつまつてゐりや、どけへいつても色男一疋の役はしてくる男だあ。手前の顔をふむには手間隙は入らねえ。跡でかまるめえぞよ」 女郎「ねしやあ紙屑拾ひかえ。よく閑所やはきだめを知つてお出でなんす。男一疋と云ひなんたすからは但し犬の生まれがはりかえ。まア氣味の惡いじゆずかけとやらなだあぶりとやらおやおつせんかえ。もう云ひなんす事がなかアゆるりつとお休みなんし」 ト女郎なか／＼まゝならぬとはながらお出て行く。客は[illegible]こなられどもせず

たなく、ねるにもねられず、あんどうのむだ待をよしにまち／＼しているうち、じつの升やうし米と田にはうつり田中の方の寺々にては、じやん／＼のはんしよう、思はれるのもあきこれからもつまるところはみな筆のこやう、えん次郎はよひより京町のわけにて、おす川ちおほくやうち、それもおすけ川ちやうとえん次郎をよび出し、いそしかな事を手にしてゐるつもりの、みな狂言にて、うちのまへの格子を見るやうに、うしろ谷は[illegible]川とふれ、夜はもらりとあけてれんじのすきまからさしこむあかりに、長持のまへにりをらめていはたれども、[illegible]、えんちやんお迎へを、下さはどうし／＼と茶をつくなどし、ねずの男はあいらをばきになし、いれかはつて、

に參りました」 え「フウ、もうその時分かの」 男「おつしやつたよりは少しおそい位でござります」 え「喜のやしおんはどうした」 男「喜のさんはたゞ今、おしたくなすつてお出でなされま

す。」ト云ふ所へしまひかあひかたの裏いろ、さしきへ置いたはおりをとりにくる。跡よりしあん、おきてくる。喜之助もおすみかみにてかほをふきながらおきてくる。なつはきもあとよりきたる。喜之「さア〳〵すぐにおかへらう。」喜之「羽織のしりかをれんせん。お待ちなんし。」しあん「おいらんはでえぶおつかれの。」トいへどもおす川はたわいなし。みな〳〵かうかへ出る。ねずは二かい中の紙くずをはきあつめ、あんどうはちやぼくじのせきたふのやうにならべてある。喜之「此の紙屑をもやして置くと、おぎやア〳〵といふ奴が出来やす。」しあん「かう紙屑をはき集めた所は、羊のへどといふもんだ。」えん「いい〳〵。」ト二かいからこをおりる、板ばなに交かならべてあり、はしごの下には借り物のおかいみかさねてある、茶屋男ざうりをなほす。茶男「おまへさんのは、此の二重ばな緒でござりますかね。」喜之、喜之「此の間にお出でなんしよ。」くどりをがら〳〵とみな〳〵出る。えん「おほきにおそくなつた。かごはばひつてゐんか。」茶男「いれて置きました。」しあん「とんだねへい心持、二日ゑひになりやした。」ト玉やにてはもう大戸をあけ、からしをきれいにあらひて、しきゐにしほをもつてある。料理番ざるをかつこてゐる。ゑうりはん「此のいかはあふりやあねえか。」喜之「なに鯛いかさ、かな川だア見なさえ。此のあつい事を、あふりやするわいなだと安いわな。」ゑうりはん「だれかれんつにしたがいい。」喜之「何さ、とんだ事を云ひなさらア。此のちくしやうめしつ〳〵。此のおぢやアどうだえ。いい魚だア見なさえ。生むぎだよ。はねだでもかう云ふ丈長はねえわな。」ト此の話をよそにきく〳〵、三人はしする出やのまへまで来る。えん「こしのものを出してくりや。」茶男「マアちつとおよりなされまし。」喜の、しあん「すべがようござえせう。」えん「さうさ〳〵。」茶男「さやうなら。」トくどりより内へはひり、三人がこしの物を出してわたす。むかふみひやうご屋などにては、もうみせをひらき、わかいものあけえんを拭き、ならえんをかけう。竹村の前には名札をはがした跡のあるせいろうつんである。かしのきやく八いを打つて上るこやひ、ふじみ町

□□たゝ□人づれにて□□る。一人はきりやのよこての
小便所□□ふの□□□□、小ぜんてつの□□をきながら、
鬼蔵「コウ鐵えまてえ。いつ所にえゝべえ。ゆふべ
おれが女の来たに、どふにやァす、きいてくんなさえ。鐵さんと云ふものはわからねえものでござえや
ま□これおうさよじさんに一本ンかりてたてひきをしてあげてやつたに、今夜も知らん顔をしてゐや
す。あんまり押がつよえ。八ツを打つてあがる客はみんなあの位なもんだ」□「なんのかのと云やァがつ
たからな。おれがすいいかげんに間尾を合はせておいたぜ。あいつァたうもろこしを、よこぐはへた
しやうといふつらだナァ」□「ふだ[illegible]町□しは八□□にみせを引く□□、八ッを打つてあがる事□□ほんにきういつたか
と□だ[illegible]ねえか。こんなおりは□朱銀をはふり出して、酒肴付けてあすんできたナ。あい
つがおふた□左年[illegible]助のこつたあ。これ中もナ、きらすにあれをいれていつた奴で、ほどをを七八へ
こつけやあがつた。あすこのやてえはねは、大方あいつがくらひつぶしてしまふだらう。あのぐうて
[illegible]やな。まとひ持にすればいいな。エ、くさびをそぎたくなつた」□「□行、[illegible]「なんで
もぼんにや虎や□あがるべえざえ。こいつァ思ひつきだつけな／＼」□エ丶引ト行き過ぎる。大門の口番人
に[illegible]て、こ[illegible]しんぞう、しこけたやうな□の火をたいてあたつてゐる。[illegible]
[illegible]の女郎と見えるなり。□□「おつなこうし□のこゑにて　ヤヤ喜のさんとうな
んした□。□□、おひさしいの。何今時分までうか／＼してゐる客があるものか。いいかげんにしてか
[illegible]」とんだ目にあつたな目だ。□□のおさんによく云つてくれねえ」□□「おさらばえ」□次郎

喜之助三人は江戸ぶしをうなりながら大門を出る。　茶男「かづさやァ、○」かご「アイこゝでござりやす。」ト、白玉やのたなしたのあたりにて一人ごとをする。

茶男「なぜこつからのせねえ。」かご「高札が出来てから、大門のきはへ駕籠がなりません。」すかうより泉その娘下女をつれ朝参よりかへる。　上方「お夕さんでえぶお早いお出で。」ゆう「すゝきえんさんどう成されました。けさは山谷のしやうほふじのびしやもんさまへ参りました。」えん「こゑんさんによく云つてくんなせえ。」ゆう「さやうならおれいかに。」上方「ナニ召しました。」上方「おはき物はついたか。さやうなら此の間にはえんよく云つてくりや。」かご「こつちらのだんな、お羽おりをもつとおいれ成されまし。」かご「ほうバへよしか、どつこいとな。」ト かご立たそう ともにあがる。

○おくられて行くちやうちんと、わかれ路にきくかねとは、かたけて見れば、つりあはねど大じん客にこいとらう、おくるけいせい道心者、もりもらひ同士朝噺、口よりけむの出て居る頃、立つや今戸のかはらけん。すわる門ッ手に三人は、にほん堤を一ッきんに、いそがせてこそ　行く空の

通言總籬　大尾

一日土堤自敍

さる劇場の不寐見木戸を顯木戸と心得、封建時代の東子を猫と呼ぶ。猫に小判の喩へも宜しからず、野猫の名有れば神子と思ひ、野猫とは香爐かと思ふ。回向院の猫の石塔、其れ寺にねこの開帳、某家に猫間中納言有り。女三の宮といふ猫あれど、[illegible]に猫有り。物乾に根子あり。[illegible]は鳥ねこと熊谷、[illegible]。猫の[illegible]郎に客の帯、猫じやらしとは有難山猫、其の傀儡の見番は猫の眼を以て迎へ[illegible]、[illegible]には猫なり、[illegible]は猫作、猫の[illegible]にも、[illegible]るが如き[illegible]合に、[illegible]かし[illegible]の、これ[illegible]に[illegible]、[illegible]は清[illegible]か、猫を[illegible]し[illegible]に、小夜更けてあ[illegible]ぬに逢ひ見る[illegible]ぶれて鳴く、猫の首[illegible]は[illegible]となり、猫足は[illegible]と[illegible]る[illegible]にや深川を淺く見て、猫を[illegible]と三毛猫にし[illegible]、屋上より聲を投じたることに、やんはりと猫なで聲の言質は、猫にあらず天木蓼にあらず、御旅にあらぬ異しき妖怪有り。不審なるかな此の化生、鼈を禁物ならん手の音を恐怖がり、毛志之助が呪詛には耳を掩へ、みないで[illegible]に[illegible]と云はず、神拝をなすに拍掌ならずして疊とん〳〵。飛んだ事と[illegible]見開くるに、一目[illegible]、[illegible]川の[illegible]、[illegible]知恵袋の[illegible]、[illegible]

も骨を折にふれし、戀と情の二國や、一日土堤と大師樣の御籤も、日には幾度浦右衛門、頗る洒落本、筆の屢く濫と有る中に、今將に土堤の和歌松に、辨天やしきの光をば、春のながめの徒然に、猫たらぬ女児はよけれと、玉の杯を八郎兵衛へさして、一つの目と言爾っ

時に天明八戊申ざし孟春

内　新　好　述

口演

東西々々、高うは御座りますれども、是れよりずらりつと申し上げます。御贔屓の御方樣より、御このみにまかせ、むかし語の怪談を、座しき狂言にとり組みまして、御覧に入れ奉ります。狂言名代の儀は、今樣一目提、第一番目役人替名の次第、

道人三綱　市川門之助　　同五常　澤村宗十郎
同　[illegible]　市川八百藏　　同進退　坂田半五郎
[illegible]先生　松本幸四郎

其の外女形あまたに御ざりますれば、役わりを則ち略しまして御ざりまする。[illegible]すなはち一日見の[illegible]では、[illegible]ことなら永う御座りますれば、ゆる／＼と御見物のほどを、ひとへに希ひ上げ奉ります。其の爲口上左樣におぼしめされて、下らぬ事な[illegible]の外には、白拍子[illegible]舞の袖頭巾、一目提がこんたんは、うそおやごころ[illegible]、本の事にて本名を、み[illegible]、なかる事をまかでも題、わからぬ无[illegible]の一まひは、よしなにくませ玉章の、[illegible]のかことの口上で、[illegible]附を打つ、下座でのみ込むはやし町、帷幄の内の道具建、

念に念を入れ奉り候、已上。

書肆　鼻　冷　房

總目次

○歌樂が庵室　○娼家の意見
○通言の原始　○無心の階梯
○うゐらうの演文　○鄰座敷の噂
○三下の遊談　○歌骨牌の興
○書家の名譽　○きぬ〴〵のさま

一目土堤

内新好

一體風雅なる座敷の躰、西の方は野道へかけて枝をり戸あり、東の方にうゑ込、石どうろう、柴垣、石の手水鉢きれいにかざり附け、植木にそはし中戸、鶯のこゑに上野の鐘にて夜が明くと、向うの方より揖譲、進退兩人出で來る。揖譲はおりいしやう着流し、脇ざしおとしざし、ふところ大き〻、進退もおりいしやう、長脇ざし紫花の出立、草履との二人つれ、しん道のまん中ごろに立ちどまり、

揖「五常は何處へいつた。」進「あすこでお道だ。」揖「お道といふは、たしか四條の内に有つたわえ。」進「しづかにいわねえか。」トこゑをいはせる、はおりいしやう着流し、長脇ざしより出てゐる。揖「ながえかゝべんだぞ、今のひかりをみたか。首だのに。」進「あゝ、ありやァおいせだ。」揖「エヽ、出前のか。」進「エヽ、さやば町のか。」進「先生は内だらうか。」揖「又しやれこつぱして、ふさがせとのうか。」進「大礼が能かろう。」トなかへ聲あア、おいでなさいまし。」トテンツヽになる。みなみな揖「先生おやどか。」ト石をとんとんと しをり戸のそとにたゝずみ、たいへい内より、戸を叩くとて

やどりのつま戸を開けたれば、人も木すゑの木隠なりけり。」トとなりの娘が琴うたに障子を開き、あるじの歌楽先生立ち出づる。床の間に文台、かうろ、書籍を飾り、机にはわかの浦、定家卿に歌書あまたの並べ、かたはらに吉書と手あぶりなど置き、いうへい煙草をならべある。具「是れは當國方より出でたる通りにて候。」具「さういふところは、無調法おやアねえか。サアノヽすつとはひらつしやエ。」ト五井、進八、笑ひながらはひる。五「供をかへすが能からう。」進「大けへしさつ。」ト五、立つて供の「手めへたちアけへりやァ。みんなこゝにゐるといつたがいい。爺平は、ばんに迎へに来イ。」トいひ聞かせる。供「はいなア」五「時に先生、よいお歌でも出ましたか。」具「いやいや此の間は徒然なるまゝに、一人燈のもとに、肘をまげて枕草紙にして、狭衣をかたしき、夢にもいさやしら玉か、新古今を口ずさむのみ。」進「わしも些と歌をはじめたうござんす。」具「おはじめなさい。まづ歌に六義あり、難波津、淺香山は歌の父母とし、神代の風儀にして、我が朝にては知らずんば有るべからず。今やうのきいたふうに、三十字一もじとは冬葱味噌と心得、腰折とは腰の中へ邪魔を入れた事と思ひ、連歌とは坊主が野郎に成つた事と心得、旋頭歌とは船唄と思ひ、三鳥の傳とは松介が仕事師の役かと思ふ。探題とは大内へ登城する事、兼題とは本を載せる物、長歌高砂は博奕の數と、早合點の一人で濟ます聽取傍聞では、歌ばかりはまゐらんて。たとへば、わがやどの花見がてらにくる人はちりなむのちぞ戀しかるべき、といふ歌は、當世によく叶へり。その心はうつくしき通どしまの女ばう、十六七の意氣にして、はすはにあらぬ娘がかりに、手がとゞきしを戀

評し、或は妓者などの宅へ、若きをのこら、晝夜を分たずはゝに行き、自腹など切つておごり、色男
通の氣でゐるに、有りしかども、人の負擔をうけては、不幸にしてまかれるか、娘ならば嫁して他へ行
き、妓者は同じ樣にして、今ははかに行く方もなく、敢りなん[illegible]で暮しかるべき。なんと聞えたか
ネ。」三升、進退、居心の[illegible]「聞えた、それ。」升「四方樣子もさと吾妻のなごり。」[illegible]
この狂歌も、少々饒舌がれるにはよつて、しかし、當時は只、連俳、俳諧、雜俳でもねえてゝ、とかく
諸事狂歌のことさ。わたしが歳旦に、ともかくもまだ人々の引札を明けてうれしき飾小こそ[illegible]
よ「うつてつけの名な狂名さ。」[illegible]「俳諧、狂歌も時の興に[illegible]、[illegible]にかまはず、早くおもひの來る
やうた[illegible]竹の大宮人にも、昔しの狂歌の名人は幾らも有つたて。といふ内にかなまろ丸光臣
〔卿〕などには、本歌もこれ狂歌も名人さ。アノ頭のつまといふのやすなとも、[illegible]の詠まれ
た、[illegible]いかにいやそれも色に引かれん、といふ狂歌から出たのさ[illegible]」[illegible]
ハア、それで解せました。」五「時に足下の狂名は。」三「八頭神樂[illegible]」[illegible]で狂歌福神豊六
にも、名が有つたと思つた。」三「アノときやア、わかなの狂歌に「[illegible]神樂ではせうか[illegible]に聞える
わたし」[illegible]、[illegible]の中から神樂といふうたよみが有つたて。此の人の歌はもり守武下に置き
ければ、必ずつ[illegible]、言葉をつ[illegible]と申しにほめられけるとかや。」三「そのおつかぶせに附けたの

一日土堤

まことに　五「私も此の十五夜は、月見の狂歌をいたしましたて。」歌「ム、、なんとおつしやつた。」進「下戸どしはみな望月をながむなり上戸は酒の杯をみる。」五「フウ、面白うござえす。」甚「酒の杯はどうか有りさうな所ぢやアねえかの」歌「イヤいいのさ、進退は狂歌は出來るての」五「ほめられてのり物聞おやァねえか、先これが擬題を取合はせやして、無性に口から出次第と、狂歌を詠じました。詠じましたのすさまじいが惡い所は直してお貰ひ申しませう。先初手取つたのが寄帝祝。こいつは大きにてこずりました。

君が代に八千代といはひ玉はゝきたぶさもゆらに園をはくはつ

目黒のはつ雪

初雪をあかずながむる日ゞの道おもしろたへと醉ふ田圃はた

隅田川の白魚

白魚を我おとらじととり舟の網は一しほ氣も角田川

不逢戀

宵の目にちら／＼と二重の帯とけてぬる夜にいつか逢ふべき

吉原時鳥

妾の中の町にて郭公さすがおあいと聲をかけたか

「マア此歌はこういふものさ。たほすといつた所が、おんまり違つた事も無いものだて。イヤどれもようござんす」「わたいが出来ました」「三日向顔のせざれば、其の智はかりがたしと。しばらく御目にかゝらぬ内にたいぶ御上達た。中々不肖及ぶ所にあらず」「イヤ是れは御まいつて。いた銀山すみませんかぶと」「しかし最はや狂歌も、一ツ花はやりましたの何とやらで、今時は狂歌をよんじる隙に、寧ろ迫歌をよむが能い」「ヘヱつめ歌とはッ」「道歌と申すは、こがいへにきよたのさきぶよとのはぶりればじや。このにぎよをたへけとくみはかーいふやうな物さ。見れも分るやうに申さうなら、五月五日に京都の御通りへ入ンすれば、神功皇后の人形に新膝と九郎判官の人形を見たといふ事で、ハ、、、。浅葱うらが萬葉歌でしやれをいふやうな物で、一寸聞いては何だか分らねえてな」「それをよんで面白いこともあるまい」「[illegible]何も分り安しい事は無い。只言ひ度しはうまいた」「きのふ湯道[illegible]といふ[illegible]錦木を見たが、吉原大全に有る事を[illegible]書きたな」「[illegible]」「傾城の始まりは[illegible]年が頭ではまるとして有つすと」「一寺嬶人はそれでも数えて、謡経いもと云つたね。[illegible]たまつてるやう」「[illegible]の古歌はしば／＼れるが、中にも奇逃好[illegible]詞にも、[illegible]かのなかあまでさしてかほかもしは思はじ。

是れ淺草舟の客をまつ風情を詠じ給へり。又野土の遊女をよみし歌に、不破山をあさこえくればかすみ立つ野土のかたに鶯ぞなく。泊遊女と云ふ題にて、實陰の歌に、夕波にこゝぞ泊りとうかれめのうたふ聲にや舟もとまらむ。などと云ふがござる。」喜「狂歌にも有るてな。傾城にうそとまことはありそ海のはまのまさごの客のかずく。」歌「フヽウ夫れは、我が戀はよむともつきじありそ海の濱のまさごはよみつくすとも、といふ歌から出たのさやこ。」京「さやう見えます。」五「唐にも女郎屋が有るかの。」喜「隨分有るのさ。あつちで吉原といふやうな所を、花街などと云つてね、まづ唐の世に北里といふが有り、明の世に板橋といふが有つたて、契情の事を倡婦と云ひ、突きだしを青妓といふ。」京「通といふ事は、唐にも有る事かいの。」喜「有るともく。孔子老子をさして通家と云ふ。」京「成程たうりで、司馬通達といふ名が有つた。」喜「おきやアがれ。」京「シテ大通といふ事は、いつ頃からはやり出した。」喜「大通といふ事は、前かたより云ふ事にて、かけて明和六七の頃なれば、粹なる人はよりくいふ事ありといへども知るものなし。野な人には勿論なり。しかるに安永六丁酉のとしよりは、大通といふ事江府市中に專ら流布す。樽ひろひまでしやれにいひ、夫れよりだんく遠境邊鄙に至るまで、此の事大いに流行す。」京「又地ごくといふ事は。」喜「五六年此のかたにて、最初は地ものには極まりし故、名號けて地極と申すなり。今は殘らず革羽織故、皮極といつて可ならんか。」五「ま

つた手の長い人を、二つ目の道具といふは。」甚「その心といつは、鎌臺がいつも黒幕の內、うしろぐらいといふことなり。」与「小ぬす人ならば。」甚「內氣といふ。是れ高麗屋が云ひはじむ。」与「ちよんの間といふ事は。」甚「三味せんより出でたることば。」進「野暮な壁とは如何に。」与「女郎もかはず、夜あるきせず、內に居るのを野暮といふ。家のはとりをぶらつくを則ち家邊とまうすなり。」五「昔なやつとは。」土「潸イといふ事。」進「茶にしてゐろとは。」土「向うのやつを呑んでかゝれといふことなり。」五「水にしろとは。」土「ながしておけと申す事。」進「はしよるといふは。」土「ながゝるといふ事。」土「だうらいふものは。」土「廣徳寺。」進「興福寺とは。」土「隅田川の牛島、奈良にも有り。」土「東福寺とは。」土「通天橋。」進「透頂香は。」甚「小田原うゐらう。」五「漬文はいかに。」土「すいか合點。エヘ、。

拙者岡場所の咄と申すは、お附合に先達、御そんじのおかたん〳〵も御ざりませう。御江戸を立つて見通し、本澤はせをかうやく、玉屋の花火いがらしを左右に、はるか向う下總州岡場所辨天講と申すは、元町尾上町をおすぎなされ、土手川に渡せる御橋をお渡りなさるれば、千幡屋館介留守は松井、唯今にては隱居をいたし、悴清助となのりまする。御旅が清澤屋敷へとまいにお出でなさるゝか、または回向院へ御參詣のせつは、必ず角違ひ成されまするな。御のぼりなれば左のかた、御くだりならば右のかた、軒には暖簾片波のもん、子供御請面でなくて、行儀たゞしい所でござる。ヤレ近年はう

れるわはやるわとあつて、所々はう／＼に似せかんばんを出し、イヤ富永町の大富町のと、いろ／＼に似たる名を申せども、ひらつたく八郎兵衛やしきとしるしたは、山田屋、山くら、堺中、のう州、せんしうやばかり。御存じりない御方には、たとひ百両遣ひなされうとも、一人も揚げはいたさぬ。さるによつて客はまゐるごとに、鐚金を跣足と遣ふ。ハリヤ／＼／＼／＼。迫つて来たわ／＼馬鹿やうな、くだらぬ香にかけられそん、巨のひかりは口癖に、狂言書いたるさわやかに、うそつく／＼の空生酔つぱか生／＼つぎやんしよ。小言の長酒々ごこん魂膽の小言次、コノ客頼んで金たれと、かの仁無てもぬいてもらくはねぬものは、としあご白まへかはぎおり。ト云ひかけて、揖譲せきをきき出しアイ／＼といふ。みな／＼「どうしたどうした」■「あんまりしやべつたら、口が六あゐだ、喉つたやうだ。喉が引ッ附いてならねえ、茶を一つくだせえ。呑口一ッぱいと出かけよう。面白し／＼」揖譲子の口は毒毛よりもおそく、いにしへの身の上話、昔の孫楚も此の席に坐さば、おもてぶせならん。我が町の高傑やもかく席へ進け、おや玉は遠慮頭巾を脱いで、大きにあやまらせるのといはん事、まのあたりなり。住みた蛸は吉原の儀八六身ぶりの如し。中々聞き事でござつた」与「サア茶を呑んだら、その噺が聞きてえ」■「イヤモウ此の跡はよしにして、噺にせう。遊女でなしのさいつころ、土手がはのじやくしようへまゐりやしたら」■「じやくしようとは若衆屋か」一「左様さ、まづあそこではしのや、なみやから、尾小野

まで十軒の内でもネ、若枡が一番。」「ひまかつ」「イヤ申ぐれるた。そこでおつねがすゝめたをお
喜びなぞエすこと云ふから、誰でもいゝ、ナント／＼、いくのへ、大けえ手前へしようがねへといつたら、お
吉といふ婦人を呼したら、所がさんは俺が面に目を合いても、面白くねへから、げいしやを呼でにやつ
た」「とはおれか。」「イヤ、お吉に増吉に豊茂を呼んで、とんとさわいでると、兼次に錦や、勝
次がおしかけて来て、初手の閑静に引かへて、大々講がなどの初めりやうさ。その後よ一ほどまる
りやしたが、どうも手いねえやつだから、此のころはおとよにしたよ」「若でばおれも噂が有て丁」
「あれとアもこせまいで」「マアノ＼おれに聞きさせねえ。此のころのことだよ、二三人づれで深川へまる
つて、大れよも遊びに通処へ行く気で、湖の舟なしに若枡のとこを通ると、とつねが見附けて声をかけて
明ると、あともおもおとおおねが出て、奥の間へいつた男を見るやうに、おれをつかまへて一いご
ねえ、あん様のやつもはきまをつぶして見てゐると、連は若枡へはひつて隠れかけてゐるし、おれ
とおれは困つたから、生憎のけんくわといふ身で、二階へ引きずられて、大和らも来るまでの
達の、酔んでありやうへ、おつまとおかんとおりまといふ三人ならんだ、所が中が婦人をよく／＼見る
と「何だ、すねへ」「ニ、ここ、お顔で、久しいあとに、おれが足を附け置いた顔だて」「イヤ、ソウ
ト「ここでとい」と睨むこて、娘分のおせいさ」「何とんな事がわるもんだの」「ソノおせいと有りのしと云

れから梅むらへ来て、子供の時はいゝ子でござえした。」「わたしが仲の町へ行くじぶん、狂言をかいて、ばつと足を附けやした所が、むかうでも大承知で、近々御すつもりにきまつた所へ、寸善尺魔が。」「よく有るやつさ。」「ちよつと用が出来て上州へいつたと云ふもんだから、どうもこゝであかねわかれの鳥はもいかはと成つた。此のこたア伊三や幸次がよく知つてゐるはす。」「アノ藝者のか。」「ウ、そこで若輩で思ひすめぐり合ひしは、まことに夢のごとし。こつちでも忘れねえから、むかうでも忘れるはすはねえわさ。おせいもわたしを見たが、何とも云ひにくいさうで見ぬふりをして、只うつ向いて何ともいはす。」「ウ、お半といふ身で。」「どうも合點がいかねえから、よく見りやア両がんになんだをうかめたやうすで、なほうつくしいね。」とやかういろ／＼思ふ内、上の方から順杯と出たもんだから、こゝでさんねん関子騫な事が有つて、おれが中にゐると何の事はねえが、端にゐたのがあやまり。どうぞめんくをして、取りかへて貰はうと思つたが、杯がすんでしまつちやアだうもならねえでの。そこでその晩に名のり合ひもせす、だん／＼噺を聞いた所が、おせいにちがひなし。あとで聞けば、おせいが云ふには、「五常さんもまへかたから知つてゐるし、どうも連衆へは出られやすめえ。」と云ひ出して、そつちこつちと内しようでもめたのを、かゝしゆのおみよやおつねが團子をいつて、「いいやつとで無理に出したと、おなかが話したつけ。」夫れから度々いつたけれども。」

五「邪魔な嵐や雲が出たか。」 五「出たゆくれ爲。 つれが買ひに行く、又はわきへ出てゐたり、その外聞

が悪くなつて逢はねえ。 はたにはだうすきえにしとあきらめた。」 五「ナニさうあきらめますといい事だ。」

歎、もいずいより五常が業を、もくね、ことして[illegible]いしりける女の、[illegible]ことかたにすいけるを知らで、お

て胸をいためしか、何思ひけん[illegible]、つるぬ[illegible]たとしなれて、その里に業がある折に出ででかれ

見きかふぐりもあらねど、かの女の[illegible]手練なるに、まよふて[illegible]ふたりにやと、[illegible]なきにことろおかれて

たゞいふばざ、はずにて[illegible]かづきかけはけはし[illegible]いしじめあつし、目をしきかで[illegible]

「くみそめしもとのちぎりをわすれ水あさくもふたこになどながるらむ。」 ト書いて、五常にみせる。五じやうおしいたゞいて是れをよんで、

五「是れはおもしろうよう出来ましてござります。」 五「なるほど御秀逸と申さうか。當意即妙。」 五「お

その御週子。」 五「此の通りかいてやつて見ようか。」 五「まだ一つ狂言をかきやす。」 五「あそこでもやつ

ぱりおぜいといつて出るかね。」 五「イヤおかんと云つて、娘もおたみと云つてあそこへ出やす。 何で

も二人ならべた所は、姉妹とは云ひながら、ヤヽも似るものか。」 五「さういふのが有るものさ。ヤノ

淺くさのくわんおんの脇の方とうしろにゐるが、柳屋平十郎と云ふやうじ見世に、姉をおもん、妹を

お吉といつて、二人ながらよつと見ては解りやせん、見るがへるほど似てゐるよ。くわんおんのわ

きのほうに出てゐるのが姉のお間さ。去年けんぶくをしやした。妹のお吉はだうのうしろに出てゐや

す。まへまは三社ごんげんわきにをりやした。此のごろ今の所へ出るでな。」 五「いでふ娘のまつかぶ

せをしようと思つてさ。」 五「やうじ屋といへば、隨身門をはひると、左がはの中ほどに、柳屋八右衞門

といふ楊子店は、いつ通つて見ても、はつこ四五人づゝたゝねへ。後備がいいといふ評判でもな
いが、番人にあいきやうのあるのだ」「ヤノ彼においてもといつても、おやぢ仁八右衛門といつては上
がたものさ」「よく知つてゐるのう」「なんでも滝といふもんだらう、かたふきい、此の頃
はおいらも見ねへ」「夫の法はすつかりもうお有つて、去年の六月だつけ、末の中が日本橋
のおへ引こしたさ」「そうしいこつた。もとつとあすこにゐたら、御殿おふだを見るやうに、繁昌に
出さうに」「夫ちや是れから進退の講を聞かう」「ヲヤおれがゆゑへんだで、二人とふたりでまるめや
した」「そこ二三だからいいに」「三三とに若衆夫婦の道をいふに」「そこでまづ奥へ這入やつと
上ると、お常が来て「今夜からは泊りだ」といふから、「そんならまつかいに」と目をかけさせて、その
内夜着にたゞ岸沢金蔵、米吉に文字八、豊きのと谷吉をよびにやつて、掛合を語らせて、存分な
した。夫れからお常が、是れから向うに見える藪がおれたらばかしいだらう、といふ場のなか
びに、格子に見える間がまへの内が、わたし共のいん居所で、おかみさんのいきうとのおいにさんに、き
る藪を端にとつた。夫なこと、おもしろくも福に聞かしてゐると、婦人が来た「あなたもこつちらへ
お出でなせえし」といふと、両婦が来て坐る。ト一人の婦がおさきに立つていつたね「どうもかつてた
がいいかねえと思つてゐると、おつねをよんで「進さんにやアどうも出られやしねえ」土産りてふやで

まへかた一度なした事が有るから、こ、とんだ事を云ひ出した。こつちにやア違ひがねエから一緒に出てもいいと思ふなら、出たがいいといつたが出ねエ。そこで代りにおこんが出た。三輪がおのこと言まつて、だん〳〵側のしやれなど外出て、もはや秋へまはらんと致した所に、下からおなかが来て、三輪が側へ手をついて、　さアどうしもお袋の事でござりますが、おのぶさんは、おなじみのほていやへお出でなすつたが、御貰ひ申してくれろと申してまゐりました。お袋の事でござりますがね、どうぞ貰つてくれろといふ事か。ソリヤア事と品によつたなら、やるめえ物でもねえが、あんまりばかばかしい。息子がのはすいるか下わられねエに離るが、おれがのはくれろといふ。誰にしろ貞にしろ、なじみの客が来たに逢ひは有るめえけれど、かう番頭はしが有つちやア、今度から好晴賞に八卦でもおいて、よく目でも見てこなくちやならねえ。こんなからさう人替へるといふには、夏冬も七つおやア有るめえし、手離たおも、おれが無理をそへて見やな。弓御しやえす所は、しごく御もつともでごぜえすがね、そこあなたがたに離れていて、何になるものでごぜえす。たとひ又無理を申したとて、ほんにおまえさんもおめへさんがたでもなし、おなじみの客衆がござつたから、貰つてくれろと伝ていやから、嬉しうござりやした。うそと思しめすなら、下へいつてごらうじませ。あそこに大頭が来て居りやす。是れが又おなじみといふおやアなん、御初會でござえすから、又外にいい子供衆がいつくらも

ござえすから、お呼び直しなすつてもよささうなもの、さう仰しやつちやァ通ぢやァござりやせん。」と、しばゐのお月さまこけの顔を見るやうに、上げたりおろしたりするから、三絃もぐつとかんしやくで、「どんな事をいつても、やる事はならねえ」といひ出したから、わたしも搗米やか鍛冶屋の隣にゐるやうでやかましいから、中へはひッて、いいやつとで、弱よく鬪をせいしやした。で下でかゝしめのおかよも、すこし氣味がわるいと見えて、見番から札をとりよせて、その中で子供をよつて、おつれな遊びにやつた所が、かはりが程なく來て、座に附くとうつくしいね。中々おりゑなどはよつ附かねえ。そのはずさ、馬や道から鞍がへして來たとさ。夫れから三絃がきけんも大直りで、大杯でぐつとまはしの、床へ這りやした。その晩は大醉酊で、いつ幮の中へはひつたか知らねえぐれゑ。さうするとおこんが來たから、「きりきんだ浴衣を著たの」といふと、「コリヤア新形でござえす、此の頃あつらへて染めやした」と云ふから、夫れまではもめんの氣、よく〳〵見ると縮紗の單衣だから、わたしも少しへこんだて。夫れから暇がねえから、おかよとかいふ女郎が、色客な地色とけんくわをしてあたまをぶちのめされて、くしやかうがいが微塵になつたといふ事を、座敷でちらと聞いたから、何でも妓者と云つたら、おこんがほんたうの所を云ふだらうと思つて、「今夜藝者のおかよとやらが、客に頭會をくらはされて、べつかふの櫛かうがいが、石こつはのやうになつたと云ふ事だが、手めへ知

つてゐるだらう」「ナニ今藝者衆におかゝと云ふはございせん。又こゝらの藝者衆か、べつかふのくしかうがいなさすのは、ひつとりもござりせん。ナニおかみさん、みんなつげのくしに、花王石で あるさ。くしといへば久しいあとに、安の奥座敷で五人一座へ出やした。それに藝者衆ネ。大勢だから、わたしがゐるところがねへから、トノ床の間のネ、ふくろだなの下に坐つてをりやした。だれからしまひに立ッとき、ふいに立ッたから、上のふくろ棚へあたまをぶつ附けて、どつしのといひやした。此又くしがをれたらうと思つてぬいてみると、大きにきづが附いたばかり。よく折れねへ物だネ。その時のおすが、「ソレこゝにござえすよ」トあげうのえた時、是れはわたしに、しよせん鑑識をゆつたと見られたから、櫛やしのぎも、鼈甲んや水牛と見られちやァうまらねへと思つて、わざ〱はなしにませんて、櫛を見せるやつさ」「ヱヽ、ヤ、役者の黄楊ぐしもそれで分つた」「だれかい」「イヤ向島へいつた時は、あけや町の利八が来て、サレどうしたのかうしたのと、夜中はなして寐かさねえから、ゐかうるんの八分を聞いてかへらうと思つたら、ものにしで鮹がなきやす。恐らくいゝと、鮹の罵や何哉やのおはれ目、と口すさむと、此の句をおこゝへ難件に氣にかけやす。ナニ手めへそのやうに氣にするこたといつたら、「鮹のこひ惜むといふ所が氣に掛りやす」といふやつさ。よつほど手まへの心でも手の有る氣、何でも役者稽古にはつぴを着せて、下馬でもぶちこみさうといふ女郎さ」「あ

なびはさういふのが面白いものだて。」玉「始終中々一興をしたのさ」女共「アハヽヽ、ハヽヽ」玉「まことに傾城ほど、世にふびんなる物はなし。夫れに近年の洒落本を閲するに、女郎の穴を書けばよいかとおもつて、おいらんの内しようのやりくり、重簞笥の引出の隅からすみまで、洗ひざらひを櫻木に彫る。傾城の身にとつては、剃刀針の呵責よりも苦しうあらん。又傾城が見聞くならば、素人となつて、昔の入黒子を入込の浴室にて見らるゝよりも恥かしからん。遊びも木端女郎ぢやアいかねえて。殿方もちと樓へお登りなさい。高妓の頭上は、怪知な小間物やの荷箱よりも重く、玉の鼈甲は日に映じて輝く。されば美婦をさして光と云ふも、是れより始まるか。小便無用も東江の流れをあらはし、二階の御手洗場には居續け無用と書いて、尺盡にはらを立たせる郭中の全盛、一拜讀にむかつて、客に學者も御ざるが、ナノ唐詩選に花近高樓傷客心萬方多難此登臨といへれども此の心は御存じ有るまい。古は如月の末つかたより、彌生の節句が昔になり、中ノ町の櫻も近うして、心を傷むる客江戸中に多うして、日本土の琉の如くに難澁に思ひしが、やう〳〵面上が出來て、まんと有りついて樓に登臨す有御座の妙音を聞くと云ふ詩、夕し晧眩の鹽草は、たてひざを几案とす。四季をり〳〵の戲と執著に云ひしも、此の國をさしてなり。松金屋の一丸や正六が居ねえ物だから、燈籠でも俄でも、臨時の事に付いては、今おやま表だつて世話のやき手もなし、イヤまだ手がぐつとわかい時でござつた。玉屋

の花魁といふが、殿下駄に鎖をつけたので、道中をする時コロリコロリと、かすかに鎖の音がして、
イヤモウとうも云へねえあんばいだ。」「鎖のはじまりだね。」「さうさ、殿下駄は五十年前の、てふや
次郎兵衛が所で拵へやした。居続けの夜着通ひをせて置かなといふ物も、此の花魁が初でござえす。
その時分山本やの座敷に、其角が何かござりました。よへ岸が、傾城ふ合ふにも無常を離すべから
すとして、時鳥貝ありの闇い孤落、おもしろいでせう。此の山本やのむすこが、今の市のふろへ養子にま
ゐりこした。何でも傾城の一くや子ばかりが、五十町に五六十人あつたのさ。その時代から見ては、今
は大きに、ちやうひなみ静かになりて。」「まア、ますます右衛へいきたくなつたねえ。」「時
にあつな所へ、次郎兵衛が拵へたの。」「まアどこへ／＼」「つまこでいなのの長屋前を上ると、」「ウン、
めしまやおすこの時が、あすこでいゝ」「あれすこは襟名をよくれ前といつてな、鍵の前は小名で、あれ
たくしに開けたので、あれたくしが見た時は、山崎や、あふむや、鶴谷や、丁子屋と、四軒雨で有の
やした。一番はやく見世びらきをしたのが、去年の正月か、鶴年の山崎とあふむやで、是には源か
よこして丸ひやした。そりのおりぐら見世と云ふが、下谷から出でした。内の子供は一人づゝにこれさこ
それだから、一寸行灯のいゝやうな所もござえす。」進「品川へうらがの女郎屋が、子供をあそこして来
たやうな物だ。」甚「名はつゐ鍵といひやす。」甚「中手様と云ふのは、こればしのさ。まだ六月にならねば、青

新最中でござえした。其れに神明なぞからも出居主に来てゐるといふ事。いはくあつて六七月の頃まで、藝者といふがなかつたよ。そこで深川の男けいしやが、毎日ひる過ぎから来て、夜の四ツには又深川へ歸りやす。サア四ツをチヨンと打つと、藝者といつては一人もなし。俄に引手茶屋が出来るやら大騒ぎ。」与「なんでも見通しはつがもなくよからう。」与「なる程品川は海、あそこもやアやねだ。」四「明君の伊勢喜で、妓者をあげて騒ぐより、手軽いねえ。」与「さやうさ、ちつと夜の明けやうが早いばかり、まづ新みせと云ふものははやる物さ。」トはなしながら此の所をまがり明けこい　歌「ハイ御迎へにまゐりました。」五「オ、今かへる。待つてゐや。」歌「やつがれもそこまで一緒に參らうか。」与「どこへ御出でなさえす。」歌「桂舎の所へ。」与「ヘエ、、たが所だネ。お待ちなさえ。わたしがあてゝ見やせう。かうたからト、此の近所にはなし。徳町五丁目六丁目では、おみよが所かね。上方へいつたおいそかト、排讓といふ事のおこよか、お八百か、おきくか、おきよか、肉吉か、但しはおかめか、うつくしいのが喜代吉、種次、町で聲のいいのがひな吉、うつくしいのがおとめ、おゆん、おくめ、品川で此濱、たゞしは、てぢかいの長町のおふみが所かえ。」歌「なにさ桂舎主の所へ行くのさ。」与「エ、わたしやアまた藝者と承りやした。アハヽ〱、とんだ耳だ。」五「サア御一ツ所に參じませう。」歌「イヤあしたの事にいたさう。」五「なぜえ。」歌「あしたでもいい用さ。」五「左やうなら先生。」与「退出と出かけ

ます。」進「是れは昔ばなしで、御たいへつだらう。」五「イヱ面白うございました。」トみな〳〵外へ出る。進「是れから三綱が所へいつて、遠文へ赴かうか。」進「左様なら、爰で御別れ申しませう。」五「五常さん。」五「揖讓、進退。」進「供の谷平。」五「かた〳〵。」五、揖、進「さらば。」チョン〳〵。二「六作だ。」

○一日提攜吞屋鋪の宴

子曰、三人行必有我師、擇其善者而從之、其不善者而改之、とは手出しの時分氣に入らぬ時は幾度も取替へろといふ事、昔の東遠法師は陶淵明、陸修靜に訪はれ、大きに左が過ぎ、虎溪の誓を忘れ、此奴は大笑だぢや。と云ひしを今に三笑と云ふ。其の三笑にあらぬ三綱、揖讓、進退といふ上々當の通手合、宛如闘足無遣の縛めと、碁太平記の六つ目に見えしもむべなるかな。三、竪縞八丈の給羽織に、黒ちりめんの小袖、下著も八丈、帯は黒博多、鮫鞘のわきざし。揖、黒じまあゐがへしのちりめんの小袖、けんぱう縮紗のあひ着、ごらう織の給羽織、ひもはいはずとひら打にて、茶づかに錫粉ざやの脇ざし。進、御なんど茶ちりめんの給に、下はたんごじまの小袖、黒糾子の給羽織、なつめの柄絲、黒銀鋼子粉鞘の脇ざし。三「くこむだらうぜ。」揖「あそこぢやァ山田屋が遠文だ。」三「ナントおゆんはきれいぢやァねえか。」揖「アレモもとはあすこの女郎さ。」三「四季あんのおいとゝ云ふのが有るぜえ。」三「あれよりいゝ。」進公ぬかるぜえ。」揖「わかい見場だ。」トむかふへとぶ。三「とんだ小屋がかゝるいゝ。」揖「おれも中がへりが出来ねえわせ。」進「おまへは神田者に違ひねえわえ。」三「ナゼ。」進「とらや永閑や、[illegible]や宗[illegible]が事をよく知つてるから。」揖「おれもさう思うて何でも東の方をひいきする。」東とは東神田なり

皆さん、[illegible]からなさ、[illegible]になんなせて、[illegible]久しくて、[illegible]たばこを「是れはおそろしいな
しう[illegible]にいたる[illegible]子を[illegible]けれはいか、[illegible]さである。
されました」[illegible]「[illegible]ゆん[illegible]お出でなされませ」「でも[illegible]ここなの」「ヤア、あつとこゝに御出
でおそばしませ」半[illegible]下の四[illegible]、下女お[illegible]、[illegible]を[illegible]るト、うきにうらへかけて行く。○くんでくる。○下女お[illegible]、茶を○をもつてくる。○[illegible]「進さん、お
ともさんがいつそ待つてお出でなせえすよ」「有りがてえな」「夕はどこへいらしつた。お目に
かゝらねえの」「さくばんは、隠居所に用がござりまして、ひるからまゐつてをりまして、すぐに
泊りましたから、御出でなすつたを存じませんに」トいふ所へ、お春手に[illegible]をさげてくる「どなたも御出でなさるか」
「イヤお友さんとおせきさんはお出でなせえすが、お美江さんは昼から、山田屋へ出ておいでなせえ
す」「泊りかどうだかまだ知れやせん」「そんなら此の内で、何方ぞお呼びなせえし」トお春[illegible]持つて[illegible]三番へ
やる「[illegible]いかいこともえご礼が有るの」「どれ／＼」ト[illegible]「フ、ウ、おのよ、お花、おみね、お
けん、おかね、お八尾、おゆき、みんなよいからしだ」「なんでも此のなかではおみねがいい、
花のよしのやまと云ふから、お花もよからう」「花および[illegible]子としようか。花よんでにしきのことし
と、お花にせう／＼」「お春どん、お花さんだヨ」ト[illegible]をお春にわたす。ヤイと取つてよせば行く。此
た、その外南京ちんの[illegible]されいにいろ／＼、[illegible]も、酒は上なれに[illegible]、てうし、すゞりもの、[illegible]おかない、なるお
してかんろのごとく、[illegible]は好みの[illegible]はいきにして、[illegible]らず。「此の屏風は誰だ。」「知誰せう」「ム
ム筆法は妙だ。当時瀧本流ではまづ猿江の[illegible]とも[illegible]。又芙蓉[illegible]ともいひやす」「フウ、瀬戸も

の[illegible]なら、おれが心安い」三「今は[illegible]大工町へこしてゐるが、[illegible]にゐた時分は、山寺
宗助といつて、マア[illegible]の方よし、書は[illegible]もつゞくものなく、[illegible]のも[illegible]で、百[illegible]とい
ふを書いて、是ればいゝともいふしこ[illegible]の御かたよりの賛も有り、諸国の貴人高位者[illegible]より[illegible]
す覧をおつゐ、百布袋画讃にも成就し、具頓先生秘蔵せられし所、さしいかな[illegible]江で焼失したて、
マア第一長崎にまで門弟が有り、[illegible]七日に及んで、だれんもよくの人言わ。瀧本坊、池の
坊の本阿弥にして、茶道の名器書簡[illegible]に[illegible]、具頓が目利でなければ[illegible]ねえ。」三「頭取は具頓
から、[illegible]たさうだといふであの。」三「[illegible]有るふえしやう。」三「此の[illegible]でよく[illegible]しや
くが出た。」友「でえぶ噺が目におちたの。」三「目におち、とらにおきる。」トいふところへお友、お関の両[illegible]くる。みな／＼にはかにだま
る。[illegible]
[illegible]袖に、下[illegible]
う御出下なせえしたね。」三「友達[illegible]出たる事あり、又楽しかあねやつ。」三「進さん、御出でなせえ
[illegible]さん、なは[illegible]こざりしたそ」一「[illegible]、それなつとおれたる事
あいのさ」三「今夜はお[illegible]江で[illegible]いいので、おめへ
[illegible]はおう[illegible]、こつではおふた[illegible]太鼓におす[illegible]
[illegible]おなくなしてまあし」三「今[illegible]代が来やす」一「[illegible]さん、ちつとおはじめなさいましな」三「酒

かゝる、ト いつて牛六んまどかみさ利一とさし、段々杯まはれば此の内おとし噺などする所へお実江くる。　実江「どなたもよう御出でなさいましたこ」　三「お実江さんけふは泊か。」　実「アイ、ひるから出てをりやすがね、とまりかどうだかまだ知れやせんがね、ひよつとしたとまりだと悪うござエすから。誰ぞ呼びにやんなすつたかえ、三さん。」　三「お花を呼びにやつたこ」　実「お花さんかえ。アノ子は美しいに、わりちもふり、手が有ると云ふもんだから、どうもこ」　ト いふ所へお花くる。　花「どなたも御出でなせえまし。」　実「お花さま、爰へ来なこ」　四「お花さん／＼、ひるまはどこへ出たこ」　花「さがみやへ。」　三「サアこつちらへ入らつしやえこ」　実「そんならわたしは、いつでもまゐりやせう。ハイどなたも、三さんのちにまゐりやすよ。お花さん、お頼み申しやすよ。」　ト 帰りにかゝる。　三「おみえさん／＼。」　実「エこ」　三「そのやうにかせがしく死なせえ。」　実「ハイ、まつる亀／＼。」　ト いひながら大和行く、見れば

こゝのことばにて、つるかめとはいはひなをす事をいふ。　春「三さん、そのお杯を、お花さんにおあげなさいまし。」　三「左やうならお花、お開とお女、といへんす。」　ト 杯をお花へさす。　四「お開き、」　四「何でござえす。」　三「何おちかい階のためこ」　ト 何かべちやくちやと耳こすりをしてゐる。　五「何のこつたエ。面白くもねえ。みゝつこすり計りしてゐて、いゝ事の噺ならあしたしやこ。なんだかあおにするの。おらァもう帰るぞ／＼／＼。かへるが誰ぞとめてはねえかこ」　友「揖譲さん、何のこつてござえす。」　四「内しようばなしをしたら色事だッ。大笑いだ。そんな事をいつて吉原へ行くがいいのさ。おいねえ枇杷葉湯だこ」　四「いいのさ。いかねえでどうするものか。どこへいつても色男と云ふ

ものだから、爰でかなねえてな。」喜「揖讓さん、あんまり口をおききなせえして、夕の様に。」男「大きな目に合はうと思つてなう。」是れは揖讓よし原へ許り行きて、久しくお馴染にかよふまたま來りしゆゑ、ふう使い女郎といひ合せ、揖讓をまつはだかにして着るものをとりあげ、おせきがきものを揖讓に着せ、夜明けれども歸る事もできず、こまらせしゆゑなり。男「おいらがやうな通に、あんな事はしねえがいい。手あへも土橋にゐた程もねえ。餘り智慧のねえしやれだぜえ。馴染の客が久しぶりで來れば、笑ひ顔で出るか、又は「頭痛がする。」の「しりがいてえ。」の「氣しよくが悪い。」のといつて出るも有り、又なじみの客のそばへ、默つて坐りの、小ごゑで「御出でなせえし。」をいつて、氣の毒さうな、ふさいだかほをして居るも有るてんだ。さう云ふのは、まて躰でむつかしい噺のあるもんだて。深川の女郎は八まん參りか山へでも行く時か、土手側の女郎なら、さしあたる故ね「御開帳へ詣んで歸る時、うしろから來てあたまの物をみんなぬいて、逃げていきやした、口惜しくてなりやせんが狂言の山で、少しないてしのぎのかうがいや、斑なしの櫛を買つて貰ふと、今までの櫛かうがいは七つやから出るか、色事のおよに飛ぶか、小づかひになるか、又、年が明くとおまへの所へきつといきやすが、まだ一年有る、二年かゝつてゐるこのと、前置があつて、五兩や十兩は出しかねない客と見ると、年をへてあるにやゝ二十兩有ると、どうともなりやすが、十五兩ぐれえで、親かたさんや判人のはうを濟ましませて、どうぞこの暮から、素人になりたうごぜえす。」などと、こんたんの鐵はうを引きかけると、直に

不見え客が有つて、金を出してやると、その金を引つたくつて、そのうへで長枕さ。客はぐつとあつくなつてやけを起すと、内の首尾が悪くなる。所で國へ附けのはせといふ事を、女郎の方で知つてる物だから、父外の客へ狂言をかきかけて、一趣向に入用だ」と、ほうばいの町の実始の血を貰ひ、足りねえときは、様々の日記のまでもんさくし、足のゆびのはちつともつたいないと、氣の附く所だまだ確勝さ。影物をけして金を取るも古いやつだて。出居茶の地ごくは三ヶ貫つて、つく〴〵一ぱいに行く、左ッからうる拙へは、すこし〳〵我儘をいひ、茶を附けてくはせねえと口小言をいふ。女衒が女を見やうは、かたから先へ見て、足の大小を考へる。二三度も晒に附いた女郎でなければ、おいらをかくの引くのといふ事は出来ねえこつた」ナントさうぢやアねえか」トいつぱいをいふ所へ「二階が明きました。サア御出でなさいまし」「さらば二階へあがらうか」トツノトチンツンツン」ト「日三夜をひとなから、昔二階に、若手より見はらした所が

詩曰、誰二夜洪漠一葉竹猗々、有二斐通人一

其滅なる竹やぶを此君と見ては、我が身を王子饒にたとへ、一日もこの君なくてはと、なじみのそばをはなれず。

其こゝに吉原出のおはまといふ女郎が、此のころまで有つたが、大ちよく〳〵らものさ。かくといつちやア、泥亀をくらつたしつつかきを見るやうだ。其のくせいたつて尤物で、どんな客でもおはまには

殺されたて。其れに妙な事には、牀で伽の時に大聲を上げて泣きやす。なかれるには客も困つたて。其れだからおはまが部屋にゐる客は、氣色を悪くしたね。第一大酒で、ことに一日のんでゐるはずになるん事がいくども有るッ。去年とやら中橋の方へ圍はれたといふ事さ。」喜「ハテナ。」三「譃だと思ふなら聞いてみな。此の左内の内では、おはまが事はみんな知つてゐるてな。」トばたの所「下より内儀へ。」内「ですがお静かでございますねエ。」トたゞに「おかみさん。」出すトいつて 喜ちつとおいたまき申しませう。」三「持ち合はせました。」一「つおかれ。」喜「ハイ。」トいたゞく、おせきつゞで「私は本がすきで、どうもなりません。今日も本屋の本を見てをりましたが、下へ來ておもしいやうでございます。」喜「いいといつてござえすを、見ぬ世の人を友とするのも本好だ、書物を繙く時に故人に逢ふもそ、いいたゞきみだ。」三「この間もたつちこつちと、お茶注さんの客衆が由くらやにもございます、昔が好にもお客が御出でなすつて、留はうでもあるお出來ました。所で此の喜のいいやうに致しました、有りがたい事には何どなたも、「下しうやノ〜。」といつて、お出でなすつて下されます。お論さんがも、あまりまい晩はおましなさるかいい。それかはりなく御出でなすつて下さるがよろございます。ナ、ト此の喜が中すお本が、わたくしうございますか。」三「又御袋がおふもんの。」三「上下か。」喜「ナニ上下で思ひ出しました。わたくしともの番頭が、上下を毎日四五枚畳へ世話やきに出ます。」喜トばなさよい。東あるて、喜「ハイ」一「下のおなす手が來で、

エ「おかへさんへ、女さんがちよつと逢はうとおつしやりやす。」 専「すイ、左やうならゆるりつと。」トいひながら〇口はいり、下より「ちつとおあひをいたしませうかネ。」 エ「おゆんさんは酒を呑みなはると、下へ行く
いつそ笑ひなはるよ。」 エ「ひさしく笑ひを聞かねへ。」 専「エヘ、、」ト笑ひながら「お聞きな、一寸おはなし申したい事が。」トつゞいて行く。お前 専「何だかいぶかしいの。」 専「エ、、内しようの事さ。」ト[illegible]所に
下へかける。見れば下の四畳半、[illegible]の間は[illegible]二階より下りたりけるから、[illegible]
な[illegible]客来てゐる様子[illegible]かげをして、下の客のそばに[illegible]てゐる[illegible]客にふたり[illegible]来て
[illegible]手代 専「此のごろは毎日いそがしい。けふははう／＼歩行きました。」 専「どこへお出でなせえしたエ。」 専「まア伊勢町から小網町をぐるりと廻つて、夫れから米の二百俵ばかりみんなまはして、すぐに茶船で堀下でやると、跡へ又来たが来た、夫れから入れに来での序に、取残したのが有るから、照降町のはうへよつて、夫れから爰へ来たから遅くなつた。」 ○「アヽヤア藏の鍵を大屋へ預けて早くこつちへ来ればよかつた。」 専「ホンニ馬鹿な事をした。」 専「もしえ。」 専「ナンダ。」 専「ゑゐんさんたそうふことはけえ聞きなすつたらうね。今夜はどうも思いがけね。どうぞ名代に、おれんさんでも呼んでおくんなせえまし。」 専「承知々々。仕方もねえ。名代でも取りやせう。」 専「イツソもうわるいねえ。左樣ならゆるりつと。ハイあなた。」ト達にあいさつして、そこ／＼にして[illegible]二階にて、三「[illegible]さん、一杯はどうする。」 専「一ツおあがりなせえまし。」 専「忘れてゐた。つゞまいぞ。」 専「つゞまいぞ酒呑ませう。」ト[illegible]手をもち

ト[illegible]のま、しりに[illegible]て、 主「こ[illegible]した黄菊を一[illegible]」 主「白むくの[illegible]、よう[illegible]にか[illegible]る様の[illegible]、田善
はけふ、[illegible]
紺縮緬に[illegible]の帯、とし[illegible]はつ[illegible]かの」 主「[illegible]、きついもんだ。八百[illegible]
出たやうだ」 三「[illegible]い[illegible]だ[illegible]、我[illegible]れえ。[illegible]はお[illegible]でも[illegible]はうか。」 主「
つまでつて[illegible]かたびらでいまへ」 主「[illegible]し、是れが[illegible]」 主「[illegible]つ[illegible]けて上げ[illegible]て
う」 ト[illegible]たう[illegible] 主「ドン[illegible]がつがう」 主「[illegible]やせん
主一[illegible]ね[illegible] 主「チョットおきゝ[illegible]しやせう」 主「お[illegible]やでは[illegible]りま
せうか、[illegible] 主「是[illegible]は[illegible]いた[illegible]も[illegible]はく、いた[illegible]う
わいれ[illegible]ました[illegible]いた[illegible]こ[illegible]いたの」 主「[illegible]ちつ
とおやすみ、道[illegible]しませんか」 主「成程それがよからう。」トみな〳〵牀へ這入り 女「お春どんし、お茶を一つ持つ
て来て[illegible]れ」 [illegible] 三「[illegible]お[illegible]さんがおなさんね[illegible]で、[illegible]
しやう[illegible]」[illegible]、ひと[illegible]の[illegible]も[illegible]一[illegible]
御茶と[illegible]火を持つてまゐりました。[illegible]御[illegible]ようす御休み遊ばしませ」 主「[illegible]」 [illegible]
明[illegible]れて、[illegible]れて御出でなせえませんか。[illegible]だ、[illegible]のやせん」 主「[illegible]をつくせえ、[illegible]に
をはにゐなさがら」[illegible]いかれやしね、[illegible]内で[illegible]かけえ」 主「[illegible]目にかけねえで

いいえ、進さん、約束の物を持つて來ておくんなせえしたか。」進「ウ、持つて來た。」文「ほんにか
え、それはどうだか見せなせへ。」進「よし〳〵、見せる。おいらんは引つこむし。」進「フウ。」文「おいらんが
かあつちらへ行く時も、今まで心安くした者は、みんなみやげ物をやるから、私もおつと氣を遣つて
遣ひやしたが、是れにやア五步ほどかゝりやした。やす名をとりかへても、五軒の茶屋へくばり
物がいるし、どんな事をしても月に二歩づゝは、髪結さんに遣らねえかならぬ、夫れに内床屋の拂ひ
が、一兩ほど有るし、小遣はいる、内からといつては、何にもしてくれやせん。」此處へ新造下　進「まだ
御座りやせんね。」トはなさ「可哀[illegible]」「仲衆が來たか。」文「ハイ、ありやア久しく來ねえ客さ。何か思ひ出
したか今夜來やした。」進「來ずともいい物を。」文「來ずともいいは、あんまりらしいだい。手めへあれ
が階へ來ずともいい、下へいけ〳〵。」進「おはきさん顔をしなさんすな。」文「奥の客はお歸りなさんすかえ。」
「ハイ。」廊下は旅人か、ここへはよく來るでは、おまへにもおなじみでせんね
二ぞさんお花さんは。」進「今ここへ行つた。」進「お定さん、やまとやの客樂は。」文「今歸つたヨ。
是れから二ぞさんの御そばに居りやす。」文「二ぞさん、お前のたねへ。」進「二ぞさん、文歌が居るたをおとんな
ごいせんか。」進「取らう〳〵。」進「こいつはよからう。今夜はまけたもののはぶちッこだヨ。」トみなゝ、なおさる。
進「サァおはなさへ、早く來な、歌がるただ。」進「おつかさんもとりやせうか。」文「お花さん、おめへどこ

へ行つたよ」三「下水に、あつちらはもういゝかな」五「今あいたヨ」三「ヤ札はどこにある」二「安
にこゝのまゝ下へ出すことはならないよ」三「それでも人たちは」三「拂蔵さんとらねえかな」三「いかに紫若
のねえよ、たといつても面白くもねえ、いつてはあんまり一ツ國だから、そんなもわたしもわると
あに」「あはれと思へ山櫻」三「花にあらしの雪ならで」三「ふらとふらぬは麻の門」五「義理一
へ、かゝあた激け」「かけしや組のふり合はせ」三「是れも他生の達しうやへ」三「行かもしら戀
の道」「身をつくしてもあはんとぞ」三「おもひ川なるゝれば」三「門田のいなばおとづれて」
蘆の丸屋の余りもやら」三「ついまつへんつき十郎の」三「その御夜つめに何もすらねい」三「一度
は何も不得手だ」三「一つ目からでいふよしも」五「聞きつなかたそれがおなれば。」三「貝あはせ叩のとも
しやな」三「此のみんなとできたてに」三「百物語に引きかへて」三「百人一首の歌がるたを
三「せん遊で」三「[illegible]」三「とりやんせうかい」三「今のはまだ知れねえか」
よとつことにもこざいません」三「お花さん、おめへのひざの下に一枚有るわな」三「そうれへ」ト見え
「そ上のおかたしはしと、見ねで近たす」「いつて、少ながやァねえ、お花だ」三「あの
手にいつても、あんな事をしてつまっと二階かせるよ」ト[illegible]いつて[illegible]
[illegible]
[illegible]と寐ようぢやアござえせんか。」三「ねぶつたくなつたら」

お花は[illegible]なさしはふ、三「これ七ッだらうす。」いゝなからかた みな森へ入る。二「お花さん、ちつと爰で話しねえ。」一「おじやまだらうから、あつちへ行つてふせ[illegible]やす。ゆるりつとおしけんなさいまし。」トいづくへか行く。暫く間中漠然たり。春宵一刻ま夏の夜の、まだよひながらと思ひしも、いつしか東雲のやんまかづら、あさまになりぬはづかしの、森のからすは塒を出れば、二「サア／＼、夜が明け過ぎた、けへらう。同穴にしよう。」三「嗣々く。」三「ハ、／＼。」トおきあい、二「いつ御出でなせえす。」一「いつでも。あさつて来よう、よひどまりをして[illegible]。」ト何にもおさだまりのせりふ故、是れを略す。これから／＼[illegible]せりふ有りて、お別るゝ下ではまだみんなねこである。三拜、三進、羽織を着し[illegible]しをき、美江、門、[illegible]わかいものきうりをなさ[illegible]女おくる。外へ出る。[illegible]「ハア、ねつからねる間がねえ。」[illegible]「お美江はちつと上よふるて。」[illegible]「話せるの。」[illegible]お友は、おしつけどこへかかこはれるさうだ。」三「ハア、綱名代なぞよしたナ。」三、笑ひながら「何とんだことをさ。」[illegible]「すきのねえ手だへだ。」二「かうつけやしきによる所が有るか。」とかい[illegible]て、「此のごあにしろ。」三「そんならこつから船でいかう。」トーの橋のかたはしなる吉川[illegible]いふ船宿より、ねなう[illegible]寄にのさ[illegible]い、[illegible]だんながかた、おはやうござえますす。すぐに吉原へ御出でなせえせんか。」[illegible]文松が河岸へでもいかうと思つて[illegible]鶯、キャツ／＼[illegible]来て行く[illegible]を聞き[illegible]進[illegible]りあへず、「猪牙の間やみな此の舟に乗りちまで心にくしの鴛[illegible]の聲。」舟はだん／＼沖へ／＼と漕ぎ出します。

内新好竊中空々、而任閒暇、閑窓獨所浮茶、而無據書之。

跋

客ハ者舟也、君ハ者水也、水則チ載セ舟ヲ、水則覆ス舟ヲ、氷川に釣竿を卸し、土塘側に横網を打つ。薄情と云ふ嫗婦有りとかや。左有慢ニ極リ而愛情多ク、然る後に馴染の深間に至る。居續けの耳には聞き常念佛ぞ、衣々の眼には見るもの皆涼し。時々聞都川岸の固剪る者に、一杯繼竿としやれると雖も、未だ長竿の色ききを知らず。動魚等の浮沈なすを憤々然として、茅には餌をとられ、連珠を擡うて舍に歸って下が子なす好、思ふ其力之所ニ不ル及バ、憂ニ其智之所ニ不ル能ハ、而して吾に跋をこふ。予も亦一ッ穴の一作者、未だ通夜にも臨露子の嘆くかにも中る屋、肉根之油之香に愛で、青い處は辨ぜず清の新好士に替つて。

南都舊陵樓主人神田の八町堀の旅宿に筆を采る。

一日土堤 上

一日土堤

自惚鏡序

松王丸曰く、松王が淨玻璃の鏡に懸けて、鐵札か金札か、地獄天堂の境と云々。所謂淨玻璃の鏡は紅毛のスピーゲル、唐山の火齊鏡、我が邦に稱する自惚鏡なる物是れなり。其の形を寫すや、秦の始皇の懷中せし照膽鏡もそこのけなり。頃日振鷺なるえせ者、仁壽殿前の古事を思ひ出して、此の鏡を高く掛げ、遍く北郭の遊里を照らし、觀る所の善惡邪正、撰して一冊の草紙となす。實に靈鑑不昧うをつこなしの灑落本なり。則ち外題は自惚鏡、作者もおつくり甚佐でにて、筆を酉の市坂とす。

天明九己酉初春

皆様御ぜんじゐ㊞

自序

舟かく夜明に近き堀の蛙も、何にうかれてすだくてふ、待乳山に啼く鶯は、咄相手の友なるかも。今や盛んに行はる丶、自惚は、此の道の大意にして、四方の君たち、彼の鏡を額に照らせば、忽ち色白いいい男、通の氣ならざるはなし。いでや此の念ひを斷ち、此の迷惑を去らば、傾城之腸をも探りつべく。化粧部屋の鏡となつて、素顏をも分たん事を。

于時立春二日の曙

こゝろ時めきて

振鷺亭戯述

目錄

〇息子株
〇武左
〇色客
〇茶頭醫者
〇侠客

自惚鏡

振鷺亭

◇松しま　まつのみどり

見立てつんとせず、又とりしまりて、誠に中庸の位あるは、角屋敷も傾くべし。突出し一年程は、あまり苦勞はなけれど、中町は更なり、座敷身じまひの樣子、客のふうぞくまで、まはしやりての氣をつければ、ものごと慎みがほに、うはきらしきことならねば、さして深き色客と云ふはなし。又客には憎れず、色男にはなつきやすく、茶屋にて藝者たいこもちの噂ばかりとき、口に手をあて笑ひながら、われ知らず客のひざへ手をかけ、にはかに慎むおもむきなど、娘氣に替る事なけれど、言外に色氣あるはゆだんならず。誠は寂しけれど、いはず語らず、どことやら色氣あるは、十分にきたりと知るべし。

○息子株

黒羽二重の紋付をき下着、三ツぐけにくわんとう縞の下着、裏うへ目のあはせはまり前さがり、見よくこげちやに少しきれのこげた羽織のあるふべちよみの帶、せまからず廣からず、指きれい手にて、いやみでなく人がらよく、

こゝうに女郎の隠れる出たゝつれはゝ、かとか云つて、座しきもにぎやかにてきまり、まだはえい、マ其二个らうアおはなしなさい、と云ふせりふありて、きせるをひねりながら、知つたしきんのしほやをはなす。かで松島が、どうぞおめへをつれて来てくれろ、とつて、あるやつだが、しんになつて頼むからの、いい加減にいつておいたが、あのきわやうで味がよくつらやあたまらねえ。なんでも大事がおこるだらう。」栄次郎「ナニサ、よくあるせりふさ。」我「さう如才がなけりやあ、まんこうは御あんどだ。」したが下にまつほど来たと云ふもんで、座敷でたしなむやうす、それに顔を見ぬやうに見るおもひれ、染出といふ目つきがあるから妙だ。なんでも遊びも末たゝのうちのこつた。先がみえるやうになつちやあ、もういかねい。」ト云せるとうれしが 我「其ときに、きのふはどこへお出でなすつた。」栄「大笑ひさ。山谷のきけいがとこへ、皆のいにいきやして、駿河楽のおしやうが初会、わつちがていしので、花月がいつくんござゐした。きけいも味な物好きをする男さ。けふは玉屋の楽のあへで、おかねに出やしてゝよわるこびのした所で、大いにうたせやした」我「玉屋といへば、なるほど柳枝は美しい。今でのかきつぎの明神へあるりやすから、あゑべ」とつて無理に云ふから、いつしよにいきやした所が、へんにぬきでござゐしよう。」栄「ふみのぶんしやうなどは妙さ。ぜんてい玉屋は、ないしよのしうちがきれたもんで、傾城のしんていが格別さ。」我「ぼくがも下座敷へ、ごめいらうのがくはちつとひねりやすね。」話してある所へ松島がかけて来る。松「もしえ。主においらんが、ちよつとお出でなんし、と。」栄「今いきやせ

う。』と云つてくりや。」我「いい子だから、茶をひとツくんで來てくりや。なんと云つてもむすこかぶだ。」えがつくもんだの。」主「つれが白我さんと云ふもんだから、こゝもとにこんな事もございませう。ときに、あしたは早くしやせう。」トきせるたばこいれをもつてちらかへでる。[illegible] 松しま「ぬしやあ、なにをしてお出でなんしたえ。」と[illegible] 主「まだひけめへだから、はなしてゐやした。」松しま「ヲヤそばにへびにたつてゐいす。どれお待ちなんし。」[illegible] 主「これはねはさかり。」松しま「どうやらたしか見申したやうだが、どうもおもひだされいせん。」客「ナニこんや初めて來たものを、ご存じのはすがねい。」松しま「濃はつかの云ひなんす[illegible]はじめて來なんしたふうだ。」客「誰をつくはきづいきいひさ」[illegible]「茶はかい云ひなんすと聞きいせんによ。」主「よつぽどよつたさうで、せつなくつてならねい。」[illegible] 松しま「あれはかのおあがんなんして、主も深くはおあがんなんせんね。」主「おめへなまれし、さかづきだいにばつかり呑ましてゐても、ついよひやした。」松しま「ばからしうざんす。」折からを通りながら、おく「松しまさんお樂しみ。」松しま「ちつとおはひりなんし。」○「いつて參りいしよう。」[illegible] 主「がうぎにすき〳〵してきたねへ。[illegible]勤はしねいこつた。」[illegible] 主「付きそひなら仕方がねいに」松しま「又おいた今夜は一付合ひで來たこ、云ひなんすこつたらう。」主「つきそひなら情なしに、しん

ざうしゆでもあげやす。それにどうして、茶屋からしめひによこすもんか。ごするりやうにも知れしおん事とやらさ。」松しま「うれしいねい。まだやつぱりづつうがしなんすか。くすりをあげいしよう。」葉「いんにやもつてるやす。」トはらばひになり、あんぺらの紙入から何かだす。松しま「これノヽその子や。まつのや引。」まつの「あい、わつちでござんす。」松しま「主に白湯をくんで來てあげなうしや。そしてこのさとさんの座敷に、ひやうご屋の傳さんがゐさつしやるから、かの事をお頼み申しいす。」と、云つてくりや。」この閒しばらくはなしなくあみをふくみし梅柳、たいぶいに何かいひたさうにしてゐる所へ、かぶろ白湯をくんでくる。のみながら、葉「おく座敷へいつて、白我さんに、「おさみしくば話しにおいでなんし。」と、いつてくりや。」まつの「何もうねておしまひなんした。」葉「そんならよふし。ごくらうごくらう。」まつの「あい。おやすみなんし。」出てゆく松し「もうさめなんしたさうで、顔が白くおなりなんした。」葉「眞黒にならねいでしやはせ。」松しま「それでもいつさ、ぬしやあきめこまかでざんすよ。」葉「おてらしだネ。」松しま「さうぢやあおつせんけれど。」葉「そんならどうだネ。」松しま「ばかからしうざんす。」葉「何がね。」松しま「知りいしねい。」葉「それぢやあ、ねつからわかりやせん。」松しま「なんとでもお云ひなんし。」葉「おめへもうおいくつだ。」松しまわらひながら、「あてて見なんし。」葉「そんならかうと、十八さ。」松しま「よくあたりいした。ぬしやあ大方、廿九かはたちになりなんすだらう。」葉「きついもんだ。二十さ。」松しま「ひとつましはなんとかいひすね。アノネ、アノ、だまつてゐいしよう。」

葉「それおやあわからねいこなんといふ御意だな」 松しま「あのもうなんぞ、きまりなんした事がざんすか」葉「女房といふやうな事は、まだ早いよつて、うちで不承知さ。」松しま「そりやあんまりおとなしくしてお出でなんすので、内でもお氣がつきなんせんのだらう。みんなそろつてお出でなんすか。」葉「そろつてさ。」 松しま「それではていいくだやれおつせんねい。兄弟じゆはえ。」葉「一人もなしさ。どうぞおめへのやうな娘をほしい。」松しま「ぬしの妹になりいしていね。」葉「わつちが妹にはすぎもんだ。」松しま「氣にいりなんすあい。」葉「十二、もつていねい。」松しま「そんなら妹にしておくんなんし。」葉「茶にしたもんだ。」 松しま「あんまりはなしを茶にしなんして、そつちへばかりおよりなんすから、」葉「かうかね。」松しま「アレサ、どうもきうくつな○やうなたんすよ。」トひつをかけながら「おや、」葉「のぼせるからさ。」松しま「上帽らしいことをおひなんすと、」葉「まつむら御苑だ。」松しま「あれ大きな聲をしなんすな。」葉「だまつて」松しま「ぬしばつかり」葉「どうしたらお氣にいるね。」松しま「エ、こぼからしうざんす。」トすこしすねたもち、葉「さくばんのおつかれで、おねむいいふう。お心おきなくげしなりませ。」松しま「よくご存じだねえ。」とおひさな「」

松しま「もしえ。しんにぬしやあ

來てやんなんりかえ」葉「つきだされるまでは、來るなとつてもくるるのさ」松しま「そのやはさへ情があつて、來ておくんなんすのかえ、[illegible]それもこれも[illegible]くのこつてござんすから、たんぼこつちでおもひいしても、[illegible]　[illegible]葉「[illegible]ごみ、おむかひに参りました。」葉「兵庫屋か。ほんにれんじがあかるくなつた。」茶や男「白我さまは、とうにお[illegible]お出でなされました。」又「けふ一ン日、はらあんばいがへんなこゝろもちだらう。」[illegible]をしおか、松しま[illegible]をさせ、えりなやと[illegible]しうちあけ、[illegible]白雪は面白くもねいといふ顔で、ふとんの上に、[illegible]おたばこをふきながら、[illegible]白雪、おはやいの。」葉「お前おねむうござんしよう」[illegible]「[illegible]、きれい事さ」[illegible]「藤の井さん、おけへのなんすよ。」[illegible]「くれしたおもで、[illegible]お早いね」わつちといふは、いつでもよくねいしたよ。」男「なんだか、大は、[illegible]又おそうござんした」[illegible]「[illegible]しまにつこ」主がお出でなんす時、必ずつれ申して來ておくんなんし」[illegible]「お頼み申しやすよ」[illegible]藤の井はあんどうのひをみて、[illegible]けに、たばこをすい付[illegible]いい/\顔つけしきは、京都白粉だか、顔とかいなの多いにやあふさぐ」[illegible]葉「どれだおそくなつた」すゞあふのかせうと[illegible]ふおい[illegible]

[illegible]今戸のかはふけむは、桶引[illegible]の別れかと[illegible]しく、[illegible]あけの明星[illegible]つかふ[illegible]とくも[illegible]、部屋[illegible]ならば[illegible]所なるべし。

そ　め　ぎ　く

たゞみなどにてしんきうなあけるとも、またつきあひの時は、ことさらきれいごとにして、ことはづかひも嬉しがらせるやうに云ふべし。はしたなきあたなどは、きつく嫌ふものなれば云ふべからず。二階ぢうのしんきうに、何さんはおもしろい客人といはるれば、ひとしほ何事によらず、思ひつかるるものなり。

○牽頭醫しや

[illegible]ろ好きにむやうしやを[illegible]といつて、[illegible]といふ[illegible]道具は三味線[illegible]、酒も[illegible]立派な[illegible]、う[illegible]はすり物のこしばり、[illegible]しよたい道具は[illegible]ひきれんとひるねの[illegible]、いつもたはこであつらなきくしは、[illegible]あつたやうの如く、[illegible]いつまで[illegible]をうぢにしたいつけ[illegible]、[illegible]い中にとんだ目だて、[illegible]けふも日本な[illegible]事をさとるわ[illegible]、[illegible]うあいは[illegible]とさでふん、おききをいたしやう[illegible]、夕さ[illegible]にしわお客は[illegible]、[illegible]した[illegible]大家にかなあづにはにもし、[illegible]といふ[illegible]あり[illegible]のこいそれいぶに、酒をあけた[illegible]、[illegible]あたのよだれた時、[illegible]きた[illegible]なしをするとき、しかたとあぢな身をする、これ[illegible]いだ[illegible]きしきの[illegible]すんで、[illegible]さしき[illegible]の中[illegible]ふりをでしんざうとお[illegible]、[illegible]三味線をし[illegible]とに、そのま〻「男」身にかへて、おもふ人にはとほでかり、思はぬ人のしげ／＼に、[illegible]の里のうきづとめ、さうことなきあだなくらし。「[illegible]ぶはおきな文句だの」しほからにまつたにきびといふ聲だに「[illegible]あいさ、いつそ色つきいしれからさ」「[illegible]」「もうゆだんはならねいわえ」おしつけつきだしといふ時にやア、きつはり見出顏だらうのに「[illegible]しつたかさ」未、さいみなと[illegible]あさなかやうないたらんの、藝者を知らずうか／＼と「[illegible]」ほんにあさなきんは、どうしなんしたえいに[illegible]よむかう島にゐる

ゐさうで、せんどあつたつけ。かはいゝ事をしたは又兵衛だ。」染ぎく「それだつとて、女郎しゆの氣にもなつて見なんし。どうも中町へ顏がたちいすめい。」玉「それよりやあ、美しくつてどうも玉子やきだ。ちつと口をすはせねい。」染ぎく「ばかなしうおすよ。エ、そすかねいぞよう引こ」木「べつかつこうといふ顏をするいこ」染ぎく「うつちやつておいておくんなんし。アレサ、くすぐつたうおすよ。ひつこうにえ。ヱ、いつそ酒の匂ひが、アレサ、しやくにさはりいす。」といへば、木「なに譃をいふやつさ。さつきてうしをこゝそとけびさうなしながら。」染ぎく「そんなことをいひなんすと、いつ付けて二かいをとめいすにえ。」木「げいしやぢやあ有るめいし、この子もあをつきりひねりの、さつばつなおいらんになるたちだ。」染ぎく「そのときやあなんでも、來ておくんなんし。」木「知れたおんことさ。」染ぎく「それでも主やあ、しらはの女郎衆にきらひだとおつせいして。」木「いつそんな、もつてえねえ事を云ふもんだ。」染ぎく「ちよ鶴さんをおあげなんした時に。」木「あの時はなまこのあぶらげをくつて來て、しゆすのえりで口をふいたから、つい口が辷つた。」染ぎく「ようおしやべりなんす。豆藏のやうだ。」ト はらばひになる。折から屏風のそとからしんぞう ちよ鶴「染ぎくさん／＼。ちよつとおいでなんし。」染ぎく「なんでおすえ。」ちよづる「あんどん部屋へえ、猫が子を産みいしてね。」染ぎく「ほんでおすか。」木「どつこえ待つた。そんな事をいつてはつきさうとおもつて。」ちよづる「なにさ。ほんでおさな。」木「猫よりやあ、おめへたち

が子を産なしやうをなしへてやらう」 「おや馬鹿らしいに」 ちよする「羅木さんは不人じやうだよ。さのふのばん、竹村の前で見かけ申しいしたら、見ぬふりをなして、二町目の方へおまがりなんしたよ。サアどこへお出でなんした。サアおつせいし〳〵」と、ぐすぐすたりつめる。「おいていく。おいていのがくるんだに」 「わつちやあいや。はひふきをこほしなんした」 「すやまだごつた。ほうとみえんのへヒとといふもんだに」 「ちやおやおおつせん。わたしのすそへもかゝりいした。それまあおたちなんし。」 「おかごへ帰るの。ドリヤないしよでも、ちと話してこよう。」 まきく「てうぶなら早く云つておいでなんし。まだおせうがけしておはひりなんすな。」 「あんまのやうにとおあつかふのに」と、よろけよる。ちよする「羅木さんは、いつも気が悪うおつすね。」 まきく「なにもういつも酔ひさつていさんすに。察してやくんなんし。わつちといへば、前日のやうにつつうがしいすので、いつそじれつたうおすよ。」 とやたかの方はしや「内でどうもうさんに、かけてくれさつしやればいいに」 「わつちらが客人にしで見なさい。兄こそそうひなんしよ」 ちよする「それに、こよひのやうな客人をとりいすと、しんにつらうおさあす。ほんに両方とおねい。お付きでね。つんほね。みんながたはもんのうちでおすねい」 「そしてあのほうすもさ」 ちやうを「きいてさうだ。もうひけなうちいしたね。おやすみなんし」と出ていく、入れちがひて廊下をバタ〳〵これこそおいそくさんのおでこしきは、もうこゝかえ。」 まきく「とのうまおがへすにおあけなんしたね。」 「そ

んなうろてへたこつては、しのびのちよん〳〵まくはならねいのさ。ナントちつとひたひをもんで、
くれぎかんけ、きたこちらかつ」まご「それんでおけいしよう、おやねしやあ、しあいほくろがおすよ。」
與「ほくろといふきやくは、よるねむきやうだ。」ノマ「ドレとつておけんしよう。それな、みなんし。」
と口のはたのほくろをしつかと取る。與「こりやあ、封をするときのようじんさ。」紫ぎく「口はへりなんせん。」與「口からさ
きへおまれたからさ。ときに此の琴はどこだの。」紫ぎく「わつちらんの座敷でおす。」與「ゆうげんなこ
つた、こつちもちつと唸らうか。」と三味せんを取る。紫ぎく「あれだまつてお聞きなんし。月夜がらすがなきい
すよ。」與「うるてへたやつさ。あいつも色の黒いにやあ憎まれねい。おれも黒仕立にやあにくまれね
い口ゆゑだらう。」紫ぎく「それだによつて　わつちもこつちらをむいて、にくま
れいせんやうに、」與「これさ、あやまるからこつちを向きな。」紫ぎく「なんでも口
なきいたはうが、だまつてねつこでおすよ。」與「ム、いい〳〵。あいがていく〳〵。」とむだをい
ひくせなれば、紫ぎくはすや〳〵と寐いきの音と、世けんもひつそりとしづまつて、かすかに聞ゆる八ツのひやうし
木のにはさよひぎぬのひやつくこゑ、淋しのぞみもたえず、鼻のあまつたよだけでて
與「まゝよを　もちつとおきてつきあふ氣はなしの切口か、寂しくなつてなら
ねい。これふりしんせんせい〳〵。」そあぎくちぶく、「なんでおす。どうもねむくつてなりいせん。ごし
やうでおす。」　一　與「あはれがらせるもんだの。ちよつと話があ

るよ。」末ざく「あれさ〳〵、くすぐつたうおす。ばからしい。」末「ばからしくつてもいいよ。」染ざくちひさなこゑで「あつかましぞよう引。」末「オヽ嬉し。」むりやりのちぎりも、また其の中におもしろみあるべし。

へすみのえ

見立まがきに人しげき時、きよろ〳〵として氣をつけ、立つたり居たりして騷ぐと見ゆるは、地色あるなり。又つんとしたるに二ッあり。ないしよで叱られた時などは、何やらぶにんさうに見ゆるなり。火ばちなどいぢりて、もの思ひ顔なるは、しんに苦しきことあるなり。ある女郎のいへるは、よびたいと思ふ我が客ひとりこず、その夜の一座ばかり來たるばんか、なんぞ氣のもめる時は、いかにもつとめられぬものと、余にかたりぬ。

○武ざ

あさぎうらの萌ぎんないの小そで、黒ちりめんの羽おりに、ぎたもちほどなもんをつけ、もゑぎのぼうし出立、えもん坂ごしりをおろし、中の町のりやうがはをきよろ〳〵見て、あッちへはいたり、こつちへばつたりして、しん町でどぶへ足をふんごみ、やう〳〵しあんをきはめて、ひけまひにあるまがきをのぞき、武ざ「これわかいもの。アノほんを見てゐるてきはどこうぢやこ」若「ハヽ、分でござります。」ぶ「ぶとはけせぬ。」わかい者「イエお座しきもちでござります。」といはれ、ざつくり、ぶ「そんならあのかべの中ほどを、はたらいておくりやれ。」若者「おこしの物を。」大切さうに両ごしをわたし、ざしきへあがる。お定まりのごと〳〵、若者たばこぼんをなほして、あんどんなどかきたてゆく跡にて、羽おりを袖だゝみにして、はつちをぬぎおいたるところへ、あひかたすみのえ來る。うゐた〳〵まはつておびをしめながら、うれしさうなかほで、

ぶ「ドイ、大事のところを。」若菜「お杯を」と出す。ぶ、祝言をするやうに、をりめただしく存んで、ていねいにしたみながら、「おなかだちなさ」と若いもの、出す。住の江杯へ手をかけたばかり、若菜「ちとはじめまして、さし上げませう」ぶ、うけながら、風なしそれをいふ。古「おつと、あいどほしの明神、ちと献じませう。」住の江「おさはり申しいせう。」ぶ「まア〳〵。ドレおしやくをいたさう」すみのえ「これへおくんなんし。」ぶ「ハテさておかたい。それはどうあつてもおかさね。」住の江「いつかうなりいせん。」ぶ「それでもあがるところでは、あがるだらう。」住の江「おや馬鹿らしい。」若菜「おゆるりと。」と立つてゆく。ねつからはじまらぬざしきのやうす。武ざてれのみに、手じやくでひつかける。折から廊下をとほるまはしかぶろ。住の江「これその子や。ぬしに酌なしてあげまうしや。」ぶ「いや手酌もなか〳〵つうなもんぢやて。」かぶろ「なにこつちへおよこしなんし。」住の江「久さんはまだゐなさるか。」かぶろ「あい、まだお出でなんす。」住の江「そんならの、今ふみをかいてあげんすから、庄さんにとゞけておくんなんし。」といつて来てくりや。」あいとかむろは立つてゆく。入りちがつて、若菜「おあちらへ。」ぶ「すぐにとなりざしきかの。」と立ちながら、どんぶりの中から、しふちんぶかんと年だいきをおとし、ひろひとるをかしみありて、とこへはひるとき、間もなく住のえ来る。こいつはありがた山椒と思ひの外、たんすのうへの硯箱をおろして、あんどうの前でゆる〳〵と文を書く。ぶ、まち兼ねて、「御用だんの筋と見うけ申したが、相すんだらちとねのまくはどうぢやな。」住の江「まあ寐てお出でなんし。いまぢきにしまひいす。」ぶ「君さへさういふお心なら、千ン年でも萬年でもまつてゐるぢやて。」悪さい うたひ「せめてねやもる月だにも、しばしまくらに残らずして、又ひとりねになりぬるぞや引。」住のえが色きやくと一座する女郎と見えて廊下から、はつ音「住のえさ

ん」ちよいとこゝへおいでなんし。」佳の「なんでざんすえ。」はつ緒、ひさな聲で、「いま庄さんが來いしたよ。」

佳「二階にかえ。」はつ「そしてネ、貰つてくれろ』とさ。もう床はひけいしたから、おつふくるめてお前でなんし。」佳の「いまいきいす。嬉しいねい。」とふみをまきしまひ、どこをどうかあいさつもなく、おくの方へ出てゆく。[illegible]と見えて、[illegible]しましく、す二朱のみゝをつらぬく、程なくさわぎもしづまりて、やゝ[illegible]わるくなること、いうおをはたく、[illegible]時鳥とたぬき寐入り、[illegible]にはあらでねずがきいをつぎに來たり、「これく。」[illegible]「ハイ、お火でござりますか。」[illegible]「火でもなんでもないわ。身が女郎はどうなり[illegible]したぞ。」[illegible]「是れはお氣の毒でござります。」[illegible]「イヤく。だい一女郎がその意えぬ。何やらざつばの先へ[illegible]たやうに、されくばかりしてゐて、その上どこへ遊びにいつたか、[illegible]に[illegible]る形もふつてこぬ。大切の[illegible]をだして、遊びにあしくされては、筋によつて料簡[illegible]ならぬ。[illegible]よくだまされ[illegible]ず、[illegible]くしが、[illegible]やうにいれもしませうから。」[illegible]「そんならお身、ひとつはたらいてくりやれ。」[illegible]「わしこまりましたし[illegible]と出てゆく。[illegible]大[illegible]けにふけて、目ばかりぱちくしてゐて[illegible]もうねなんしたか。」[illegible]は初會の客を、なぜにそまつにおしやる。もうかへる。」[illegible]からしい。もう八ツまひでおざんす。そしてあの[illegible]には、いつそねる[illegible]がいつもとこおわが所へおいでなんす客人が、せんど足をくひつかれなんしたとさ。」と、きいてがつかりする。[illegible]る[illegible]留めるお氣ならばとまる氣もやが、面白くもあるまいて。」佳の「なぜえ。お氣にさはりなんしたこと

がありいすなら、お許しなんし。それともまた堪忍ならずば、どうともしなんし。」ぶ「どうとつて、これがどうなるもんぢや。」住の江、如才のない女郎と見え、「何をそのやうに腹をお立てなんす。ばからしい。マアお聞きなんし、かういふことさ。」「去年からいつぞのぼせておいでなんす客人が、先度腹を立つておかへりなんしたのさ。それが来いしてね、しまひの事をどうのかうのと云ひす。わつちもこの客人に頼みいせんけりや、ほうばい衆のまへもわるし、このこつて名代は出されず、つい座敷をあけいしたのさ。こんなにうち明けていひしたら、おさげしみなんせうが、ちらひふうしいすも、いつそお気の毒。それにどうともして、よびまうしたい気でゐいしたなり、こんな事も云ひだしにくし、よつてゐいしたがわるうした。また主の腹を立つておくんなんすは、わるうは思ひいせん。」と、あつかましいことをいつたと思つて、うつむきになる。かけられるは知らず、ぶ「さうのたまひては、この方いかうおそれ入るて。」住の江「かんにんしておくんなんすか。」ぶ「かんにんしねいでどうするもんぢや。」住の江「それぢやきうくつでとつくりしいせん。まだお話しまうしいすことがおざんす。それにひつこい客人で、いつそよひきつて、やかましくつてなりんせんから、ちよつと顔を出してきたうざんすが、ようおざんすか。」ぶ「その儀はどうとも。」住の江「そんならちよつと、いつてまゐりいせう。いつそむしいすから、夜着をよして、うへの蒲團をきておいでなんし。」とせわにもならぬことをいひながら、鼻紙をもつ

て出てゆく。見れば見立なほしにさせていためかしん手なり。時うつつてにこ／＼顔も、まちたいくつのあくびとへんじ、枕もとのおるかみは、君がはだへかとさみしく、今や／＼とまちかまへれど、うはざうりのおとだにたえて、うらやましくもとなりざしきのむつごとに、向うざしきのいびきの聲、夜はなん時とれんじを見れば、さらりとあけてからすがカア／＼。羽織のくろちりめんが、夜あけにしたがひ、赤くなるもをかし。

へ か め ぎ く

もらひびきはきれイにやるべし。それもなじまうと思ふ女郎ならは、若い者のいひださぬうち、こつちから云ひだしてやるなどは、情なきものなれば、少しこだはりて名代をとるべし。此の時はぜひうら約束をすべし。また見立てなほしにでる女郎は、あまり心よからぬものなれば、とんだ氣にいつたきやふあひをして、[illegible]きつきわつちがあがる時は、みせにおいでがなかつた。」などといふせりふしかるべし。

（一）き は ひ

だうふくものといへばなあるでもなく、茶さきのこがね原といふさかやき、茶みおりのぬめんちりのあはせに、黒ななこのうらえりをかけ、こびへさきのすそまはしに、同じしゆすの袖口、大あられのちりめんのひとへ羽織に、七子おあるもそでのふよんばけのなんも、日野場のとちれへけ、りといふ出立。まきえんのきわを結取つて、もんせきめいてこじきにとりまかれて、羽織をだいなしにしたなどと、あくたんをいひぬき、膳のきいそくをしたり、硯ぶたをあらしたりして、いつぱいをいひぬき、座しきも納まり「ただいまよんどころない。」一金「客が來たといふことて、[illegible]うちに大あげ[illegible]、わかもの、こしをかがめ、か[illegible]「[illegible]、お氣の毒ながら。」金「おきやあがれ。嫌だよ。てらが大難のかしらでも、貰ふの引くのといふこたあ五分でもならねい。ことよすべによつちやあ、やるめいもんでもねいが、でい一チあの女

郎の仕うちが気にくはねえ。おへねいすつぱかしと見たから、すつぱりはだえへでしてやらあ。今戸やきの姉さんが、しけにあつたと云ふふうで、つんとしやあがつて、今になつて何くれかにも凄まじいこなんでもこゝへ引きずつて来やな。わけ道がなたねいけりやあ、すまねいにふ。」若者「こんばんの客人が、いたつてわかりませんと申すもんでござりますから、どうぞ。」と手ねぐひをなおり出ます　女「しよけいでもせつけいでも、闘場所だとやらねいが、銭にならん客に、勤めさせねいもせつしやうだ。てめへもしらうといやの若いもんだ。無理なことも云ふめいし、すなほに見立てなにしてやるべい。」若者「これはありがたうござります。もうみせはひけえしたから、はたらいてまゐりませう。」と、立つてゆき、うしろかづきを持つて来る。あとからお茶をひいた女郎、ぶにとられたといふ顔。若「さやうならおやすみなされませ。」と出て行く。しばらくはなしなく、来あふこともいつそゞ引つかけながら、女「てめへもとんだぶにんさうなもんだ。かはきりのえんまといふかほだぜい。なかなかほりに一つ客まねいから。」妓「此の頃はいつもしやくけで、ひつこんでゐんしたから、いつすゐもなりんせん。」女「へ、こいつも化もんだ。」妓「なにがえ。」女「おれがうでのゐりくよのほりものが、くしやみをしたから、」妓「いいかげんにあがんなんしたら、」女「おれがからだにやあ、おきやがれこほしがとつついてゐるから、めつたに寐ることあならねい。」妓「そりやあ困りなんしたもんだねい。それだやあそびに来なんした時、困りなんすだらう。」女「誰あねい。

したが氣まぐれなたんならあるものよ。うぬのお筆といふ女郎だがの、どこに惚れたかがうてきにおれに惚れて、よつぴと案ずるにつとめるが、ありがていおやあねいかえ。」亀ず「そのおふでさんとやらと、〇〇をしたんしては、わつちらが内の女郎しゆは、面白くもねいはずだ。」主「女郎衆も氣がつゑえ、したが町の女郎しゆは人からなこつた。おいらが氣位ぢやあ、きつはりはじまらねい。」亀ず「きつき連衆のほりもの見いしたが、こはらしい程につてるなあすねい。」主「すこあいつもおさきなやもうよ。」亀ず「いおの悪い。もふつとそつちへよつておくんなんし。」主「てめへの嘴おかしをするなやねいが、ばかにひよふなけいぞいだの。きぬいとのもうけいといふもんだ。」亀ず「うちやつておいておくんなんし。そんなに氣にいりなんせん内へ、どういふ氣でおあがんなんした。」主「化物屋敷だと思つて、よづかうしをのぞいた所が、てめへの顔が黒く黄色く、ほたるのけつのやうに、悪びかりに光るか、つぎの女郎が、きつまいもがわくびをしたといふ顔か、三番目が、すりこぎのたちおうじやうといふ顔、四番目が、おろりといふ目、五ばんめが、どろばう猫の屋根漬りといふ身ぶり、六番目が、なぶくわの仁王といふぎうすい、七番目が、まだ人間らしいから、あけて見たところが、おめへねいかほたるのたうへすだ。へおやあねい。鼻でらしの五百羅漢といふ面つきだ。」亀ず「とんだ悪しやあ、嘴じやうすだねい。もつとはなしてお聞かせなんし。」主「おきやあがれ。かうは云ふものの、

てめへはこじき芝居のさざむすめのやうで、いつそかはいいよ。」亀ぎく「主にかはいがられさんしたら、さぞ長生をしいしよう。」金「それだによつて、起きてはなさねいか。」亀ぎく「あんまり話すと、夜があけいすよ。」金「あんまりしやべつたで腹がへつた。べんたうをつかふから、茶を一つはたらいてくれねいか。」亀ぎく「もうみんな寐てしまひいした。」金「いけずるくむごくするの。てめへも物あへにやあ、ひどいたわけだ。」ト、いふところから、箱につゝんだ、とまれへけへりのこはめしとたくあんをだして、むし／＼食ふ。亀ぎくはちや／＼寐いる。あんまりがうせいをいびきしゆゑ、いまさらおこされも出来ず、まわり／＼してゐる所へ、黒ごはくのおびをきていでむすび、とりかへをなでながら、おきて来るつれ。八「まだおきてゐるか。」金「女郎はどうした。」八「たわらひだ。」ト、座敷をいきにしたから、ぐつとのりがきて、のびとはつたら、ごふのつきよ。とこへ来ると、かんなのが冇うすにうなされるやうに、うなりだしやあがつて、まだどぶさつてけつからあ、へんちきな晩だ。」金「それ見や。あんまりおとなしくしたもんだから、おれまでこんな目にあはせらあ。なんでもあそびやあ、あまく見られると、あいさけおやあ大きなちがひだ。しよせん初会から寐ねせんすだ。もういくべい。」八「まだまつくらだ。」金「気のよわい野郎だ。女郎といつしよにどぶさつたな。気のきいたばけ物は、足をあらつてひつこむ時分だ。」ト、れんじをあけて、「いいちくしやうだ。見や、ふつて来たぜい。」金「これぢやあ伊勢屋のたてあひも、あきあおへねい。」八「そんなどこぢやあねい。あかるくなるとすぶぬれが見たうもねい。」ト、おびをしめかへし、せんで袖をたゝきおこす。亀ぎく「なんだえ、ばからしい。」け

へりなんすか」ト言いあいましい。こんな湯かんばへはじめてきた。」ト、牀をでる。鼬ぎくふしようが、ねむさうな顔でおきて出る。小便所のまへに、御生そばのせいろうがつんである中で、道具をそろへるほど、へやもふて見けるに、おもてにしきの客へ、ねぼけたこゑで、言「おほきなおわんだ。」ト鼬、なにねさるだらう。」言「べらぼうめ。やまあらしのばけもんだわ。」トどつとをいゝ〳〵、八畜、鼬八とんとゆけへんなんすよ。言て、客じんがけへりなさるよ。」わかいもの返事を二ツ三ツして、まつくらな中から出て、あくびをしながら草履をはいて、たくらひものも、いかい、たまさるひだ。」言「ばけものでゑびの闘い」とあきれる。」鼬「この間にこ、まだ花が来るもんだ。」ト、くすぐりラ〳〵、外に犬がねてゐる。言とまふむと、犬キヤン〳〵。言ま、畜生め」一八、まつあ、」目をしないで、わたしや傘のしやうできすまりけれど、おまへ下駄の性ではきなさんな。」めこ〳〵さい〳〵」言「まつやみ、ばなをふんまつた。」トうたらねい。」悪遊びのごくてん。これらの客は、花にあらしとやいあるまいにかまはぬひとこのはなしはなりぬ。

《その卷 そめじ そめぎ

見立つんこしてすまし、額に薄化粧、じみなるなりを好むなどは、氣性にけれんしきありて、色氣うすきやうなれど、地色をせず。又まびとげんしと思ふ客は、いかにもして思ふものにて、とかく達引づよく、ほうばいにもひけを取らず、二階ぢうでこはがられる程なれば、あまりないしよの前はよからぬものなり。しよくわいに客をやすく見るときは、かべへよりかゝり、やうじをつかふ事あり。座敷かくの如くならば、氣をつけべし。

○いろきやく

すこしそげてあるびろうどのゆふき縞に、ひさな高八丈の下着、黒羽二重の羽織に、びらうどもわるいものだといふ氣どりで、黒の丸うちのひもに、ふところ角のとれた通人、久しき色客なりしが、このごろうち何かあぢになりて、座敷のうちもたがひにつん〳〵としてしまひ、床もをさまりて、なんでもおまいさんをいふ氣である所へ、そのまきがかぶろ、ためいきをつきながら、來る。そのとき「懸李さん、ごしやうでおすから、なんぞ藥をおくんなんし。いつそ酒によひいして、せつなくてなりんせん。」と、ふとんのまへにつゝぶす、懸李「おいらんに何をしてゐる。」そめじ「今おかんどんと、なにか話してお出でなんした。」懸李「ちつと寐るとこであるから、こゝへあがりや。また化物ばなしをして聞かさうか。」そめじ「叱られいす。」といひながらひざにもたれてすや〳〵ねいる所へ、だまつてびやうぶをあけ、つんとしたおもひれで、その巻「そめじぢやあねいか。だが許してこゝにゐる。すや酒を吞んだの。」そめじ「それだとつて、三つ山さんの客人が、無理にのめとおつせいしたから。」そのまき「そのなりやあ何のこつた。そやとつくに引けをうつたによ。」そめじは出てゆく、しばらくはなしなく、だまつてゐる所へ、ばんしん、うたはし「おいらん。おつとすゞりをお貸しなんし。」そのまき「又いつものやうに、やりばなしにしなんすと聞きいせん。屹ともつて來ておきなんし。」うたはし「あい。」とちがひだなの硯箱をとりて、「懸李さん。おやすみなんし。」と出てゆく。李「かはいさうに、とがもねいかぶろを叱つたり、八ッあたりをする手間で、云ふ事があるなら、きつぱり云へ。」その巻「なんだえ馬鹿らしい。なにも主が腹をたてなんすことはおつせん。あらほど文をつかはしいしたに、それにやつはり、二丁目へお出でなんしたぢやおつせんか。」李「てめへもよつ

ほど氣のせめいもんだ。通のつきえへもするおれだものを、折節は慰みに、女郎けへもあいうちのこつた」その客「よしておくんなんし。そんな情のねい客人とは思ひいせんで、いままで呼びとげ申しいたが」客「なんだ呼びとげた。呼びとげたもすさまじい。コレさう味にはおかなくやすくされちやあ、もうかんしやくの蟲が不承知だ。よしおれが、二丁目にいろごとが出來たにもしろ、二階中でうらやまれる程の二人がなかを、今更年あきめへになつて、色じかけで、けいぶんにも呼ばれる義理ぢやあるめいか。此の頭うちの一ぶ部始終、はくじやうをしてしまへ」その客「そんな事を云ひ立てに、切れてしまふ旦の狂言かえ。オヤこはらしい」客「知れた事よ。うかうかしてつきだされちやあ、懸念されたといふお名がすたるわな」その客「そんなに達引を知りなんするぬしの氣なら、こねいに苦勞はしいせん」ト、何かをかしくしらけて來る。ある詞にさすがつよくもいはれず。客「未練なこつたが、俺はよつぽどふしあはせなもんだ。今であへに色事が出來て、こんなむまらねい目に、あはうとは夢にも知らず、内にいりやあ子供のもり、さいの河原のぼんだ郎ぢやあねいが、しおしの世話や何やかや、じみな住うちをする中も、こつちの事お氣にいらい、それにてめへの年、あきが、もうおしつけだと思やあ、女房の顏がふびんに見え、こん夜あひ嘗たしわにして、あした女房のつれ〲を、しかるたねのわるだくみも、みんなてめへゆゑだ」ト、いのろい何を吐くからは、覺悟をして口をきけ。もうこの世のいとまごひだぞ」その客「さう思

ひたんすに、みんな主のまはり氣でおす。あんまりうたがひぶかうおさえすにえ。」と涙ぐむ。女「うたがはれいでどうするもんだ。〳〵やらうが旅人と云ふもんで、やきまつたけまで、かんさしでくひやつたなかだもの。」その客「も、そんなことをおつせいすな。今夜のことはこれぎりにして、あやまりいすから、やつぱりどうぞふんでおくんなんし。」女「おもひつきでもない。てめへたちのびい〳〵がらからにやあ、もつていねいばあかあたるぞよ。」その客「それだによつて、あやまりいしたとまうしいすに、まあこちをおむきなんし。これさ〳〵。じれつたうすにえ。」女「今更そつちがむかれるものかに。」その客「ようおす。そんならかうしいす。」ト上へのりかゝりねかける。女「なんだお氣の違つた蔦のやうに、からみまはつて云ふから、つい腹をたてした。大きにうつた。時にすこしやすみていの。」その客「まあ待ちなんし。」女「かうなつてしうちとけて見れば、たあいもねいこつた。丸三年のうち、二度まで二階へきさんなしたなかだものを、義理もけいぶんも、いつた仲ぢやあねい。」その客「ほんにあくえんでおつしやうよ。これも主がしやうわるから、おこつたことさ。」女「惟わるにはだかした。」その客「二丁目の女郎衆が。」女「おきやあがれ。」折から七つのなるをうし来、かつちり〳〵とうつて来はれば、廊下にはふくむ音、ぞり〳〵はうく〳〵のくぐりあくおとをきこえ、ひより下駄の音高く、たゞくはへのはなし、はいりが中の町へあんりよのこてひつかへりと見え、とんだいゝこみで、くまつのなたうなりながら、のきかしたをゆきかさる。青楼の春の夜を、ゆめばかりとの恨みより、うき世の夢のみじかさを、かりねの夢にうつしかへ、別れになればいふことも、忘れてあとのもの思

ひ。」　李「ありがていく。」

見かへりの[illegible]におく露は、[illegible]の涙かとうたがはれ、日本堤の[illegible]の音も、[illegible]をきゝて[illegible]島に[illegible]人[illegible]もあよいも[illegible]事承知、萬事の[illegible]客人たちも、う[illegible]れに[illegible]入るも、[illegible]にもあらず、[illegible]のないにもあらず。石上ふるに色男あり、ほれるに不男あり、[illegible]せて、[illegible]たわむれつき出し、また客のために身をうつ[illegible]うかと[illegible]または、[illegible]へばゑちかはが多葉粉入の夏とすぎて、竹屋が冬のしん形とおしうつるがごとし。

振鷺亭戯著

自惚鏡　下

跋

余が友振鷺亭の主、一ツの鏡を作る。鏡とは何ぞや。お備へにあらず、酒樽の蓋にもあらずして、乃ちこの自惚鏡なり。吁これが德たる、居ながら草臺の趣を移す。實に洒落本の天下一を以て、四日市の南總館にあたふ。跋せよと乞ふに任せて、鼃の面へ水鏡、安忍しくもしるす事しかり。

重候多藏題

先生常に云く、娼家にて仰ぎ敬ふべきは自惚なり。夫れ人に己惚なくんば、誰か千里を遠しとせずして、遊里へ赴かんやと、宜なるかな此の言。また川柳點に、客の己惚は遊女の後楯と、これ又己惚の尊きを譽めての句なり。通に至らんといふもの、此の小冊を枕にし、眼をさらし、己惚の己惚たる干要を知らば、大通にいたらんこと、三挺立にて堀へいたるよりも、豈早からざらんや。

天明九のとし己酉孟春

諸譯不知人述

驛路風俗 廻し枕 自序

一日千黄帝の徒然なるまゝに、蜻と共に街を立ち出で、甲州に赴き其の遺意を見るに、青樓に異として、名代不入の客並人の譲りなし、彼の言葉に青樓の方言に似て、また深川の里言にひとし。色男に逢ふ時は、内儀の悋とともにしけれ、五寸の楽見送り、豊羽と倶にふらつき、夜の四つ手駕籠、何がな小言頭よりも續く、雌者意の上りをひき、半通恐れの板子を唄ふ、衣紋から出す板締の襦袢にあやまる、其の匂いた風姿つたふり、新造の文と倶に、くだらぬ文の此の一冊、まはらぬ筆の跡やと、戯じおつてよ、でヨーと嘲は、

此の書は以呂波國に小竹に、瓢箪の果樹の包含、中に入の廻し客の部の内をうかつ故に、此の廻のけたいことそ

山手山人 [印]

驛路風俗 雙牀滿久羅總目錄

第一　井紀國妓樓宵閒世界
第二　俠夫似ニ家長一、醉顯ニ生質一
第三　久左狂ニ藤伊唄句一過レ意
第四　紙治閨中實語離ニ傾情一
第五　烏口臥牀逢ニ怪婦一飛レ魂

驛路風俗 廻しまくら

山手山人

發語

夫れありやす五大力の文句に曰く、いつまで草のいつまでも、なまなかまみへ物思ふ、とは、是れ段田が喝采にして、並木が名を得しうがちなり。まゝにならぬとあはねば寒ぎ、逢へばなほ氣のもめるたね、とは、二上りの段子なれども、其の氣のもあるのが苦界の楽しみ、いか程まじなおしよくたりとも、この色客の楽しみもなくては、勤まらぬものぞかし。その又色男氣どりにて、通ふ客人數を知らずと雖も、客百人に間夫一人、夜ごとに替る枕の數、さう／＼は惚れられまじきなれども、勤めの身には仕舞のたねと、義理一篇の惚れ顔に、ふはと乗りたる四つ手駕籠、日々に行き繁々に通ひ、あげくのはては無心を食ひ、紋日を呑み、袷をまけて撫ひとす。悲しみ其の内にあるべけれども、さとの驚きは此の巷にして、てらされて見立替へ、突き出されては外へ馴染み、己れの心からは、夕の敵はふりやうが面白きなどと、ふられても道理を附ける程なれば、よくされては叶はぬ理窟なり。

されば今宵の裡那も、明朝には忽ち權七とんとなる。誠に恐れ愼むべきは、此の迷ひなるぞかし。
○爰に大坂より中の方に當つて、一つの色里有り、地名を蜆川と呼ぶ。爰に來ては老若の旅人皆足留むる。黄昏の賑ひは云ふも更なり。見渡せば、星と見る夜や此の里の、客を迎れる茶屋が提灯、妓家軒を竝べし其の中に、一二を競ふ井紀ノ國屋の見世、はやたそがれすぎなれば、若イ者つるしかけあんどうへ火をともす。見世には若イ者二人火鉢にあたつてゐるそばに、此の家の女房としは三十がらみ、髪はなつめのぶくさ結び、あゐおなんどの所々わたのすひだしたるつむぎの小袖、たも黒なゝこのはゞのせまきはんえり、くろどんすしッ通のおびを右の方で結びさげ、若者になにいさゝかいてゐる。そばの板のまのはしには、うらつけとこまげたがあがつてゐるわきで、ごふんで名を書きたる黒ぬりの三味せん箱がある。是れはいま居つゞけの座敷から、あいにかゝるのなるべし。若イ者大平とどんぶりを、ひろぶたへのせ持ち來り、見世へ置いてかゝる。是れは茶屋からおあつらへの品なるべし。はやかすなきには女郎居ならんだらうかをへだてゝ、やらうのえんをといふ身にて顔をなか、此の家のていしゆ、そばに年頃十七八な女、あたさばかりつぼにゆひ、なかうどのぬのこにまへ帯をしめ、茶を運んでゐる。是れはをとゝな賣られて來た子なり。節句から突き出しの部屋持、くらがりにあつきれば、まだいつから女郎にならず、披露するに田舎で落から、どこの地ごく、おちたと見える。折から二階より、てうづにはしごをおり來る女郎小春またまだおよりも若きやかに、おしよくにはあらねば、此の家での客とりにて當日かんだういうに、いつそくらうらうといふしろもの。年は十八にこ、色白くほそおもて、白粉なしの口べに許りつけ、髪はおとしばらにゆひ、うはぎは黒ちりめんに、赤く花びしをつまあかりに染めだしたる小袖、しやうぶがはのいたじめ二つつなぎ、花色八丈に黒をすがぬひにして、うらはふぢ色ちりめんのうちかけ、白ちりめんのしごき、閑にはもじ、みす紙をつまに持ちそへ、「花のや／＼、コレ／＼言んじでもいい。ちよつとこゝへ來やつ。」

子供「アイ／＼、なんざいます。」小春「コレサ、あのノよし野やの女中が來たら、ちよつと知らせてくりや。そしてノ、二階のてうしをけへてノ、ちがひだなにひら／＼があるから持つて來や。コレサ、まあよく聞いていきやヨ。そしてノ、たばこを入れておいてくりや。」子供「アイ。」ト二階へあがる。○この里にては、茶

［illegible］の事を女中［illegible］、またひ［小春は心の世へおいでない］［illegible］ほうはいな［illegible］小はるさん、太兵衛さんはこれ程きるたてるか」

［illegible］おとは［illegible］

［illegible］、ヨ、聞きなんしやな。さつきもおかみさんのとつから、あしたは寄りまへだから、けへれといつ

て来たのに、六［illegible］すれ［illegible］。［illegible］＜＼酒な呑むと、ほつてもけへらねえよ。［illegible］おいろさん、そりいた

こを見せた。たわむ書いたえ［illegible］ト是れを見［illegible］、［illegible］、ついたてを張なれ［illegible］、［illegible］さん、［illegible］一人は

［illegible］、一［illegible］は三［illegible］［illegible］を［illegible］、［illegible］、あのう［illegible］［illegible］、下清は

［illegible］八［illegible］［illegible］八［illegible］、［illegible］にとる［illegible］おちず、［illegible］の下で［illegible］したを［illegible］［illegible］「［illegible］、［illegible］「お［illegible］

［illegible］、［illegible］ト［illegible］、［illegible］「［illegible］

ぶ［illegible］二［illegible］、［illegible］と見［illegible］先へこれへこトあ［illegible］を［illegible］北の［illegible］い［illegible］。［illegible］

［illegible］に［illegible］入れようといふとこ六だ」ト非［illegible］、ふと「［illegible］エリ［illegible］、［illegible］、［illegible］は

［illegible］ト［illegible］、［illegible］、「［illegible］、まあすれなつし」［illegible］い［illegible］子［illegible］、［illegible］、［illegible］出よう［illegible］と

いふ子だ。［illegible］あか［illegible］い［illegible］」［illegible］を、［illegible］こいつ、［illegible］やまな、［illegible］い［illegible］」ト、［illegible］

［illegible］、［illegible］さん、小春さんはおわるうございますが、どういたしませう」［illegible］、［illegible］たた

［illegible］、［illegible］しに［illegible］るぶんの事さ」［illegible］「それでもし［illegible］いはすとて［illegible］し［illegible］に

［illegible］つけ［illegible］、このふ一匹美しい［illegible］「あなた、［illegible］なりお見立てなさりませたん

［illegible］、［illegible］つくろつて下つし、そして［illegible］一［illegible］、［illegible］かさ［illegible］

［illegible］

「勿論々々。」トいふ所へだし物いろ〳〵持ち来る。鳥、さかづきをとつて「先ひとつきめよう。コウついでくんな。」トいつぱいのんでみて、「此の酒もしひたけのだしが利いたから呑めねえ。」ト硯ぶたのかまぼこをとつてくひ鳥「此の板ア めつきう鹽ツかれえぜ。コウ、そこの生薑を取つてくんな。」子供「ナニこりやア、茗荷たけざいます。」トいふ所へ、小春といま一人の女郎しやうじのやぶれからのぞいてみてはひる、筆「こちらへ。」トゐなほると、女郎二人くらいはうへすわる。此のところおとだまりの杯ごとあり、程なくはおりけいしや筆吉おたく来り、筆「オヤ鳥口さん、此の間はお久しう。モシあなた、ようお出でなはいました。」連「アイ。」トいつた計り、きせるをとる。筆や「女房ども早かつた。」トかたをたゝく。たく「よふしなせえ。かつこのわりい。」ト三味せん箱のふたをあける。筆「こしけのふとんもいれて来たか。」たく「ぶじやれなはんな、けえぶんのわりい。」ト三味せんの調子をあはせる。鳥杯をとつて、「モシ、一つおちかづきの儒とかなんとか。」トつれの女郎へさす。女郎「おおさへ申しいせう。」鳥「先つ〳〵、時におたく、さのふ堀の内いしがらきのめへで見かけたぜ。」たく「すやほんざいますかえ。私はさつぱりお見かけまうしませなんだ。」鳥「見かけねえはずさ。おめへが畑へおりて、しよんべんなしてゐたときだものな。」たく「いろ気のねえ。おそれますね。」ト三味線をとり、筆、たく唄「いろはにほへどちりぬるを、わがよたれぞつねならむ。人ごと遠き鐘の聲。」下座。鳥は此の内柱にもたれ、煙管を指のさきで廻しゐたるが、とり落し向うのどんぶりへあたり、「ホイ。」トとり膝をぶるぶるしながら、はな紙袋から、くろもじのやうじをだして口にくはへ、牀のまにいけてありし桃の花を見て、鳥「こいつも花や流だナ、生け直してやらう。」ト誰も頼みもせぬにいけ直してある所へ、若イ者来り、小春をよびだし何かさゝやく。これは小はるがなじみの客の来れるなり、小春は其のあしで八九間先のざしきへはひる。扨爰にゐるきやくも小春がなじみにていまざしきへはひりたるとみえる。此の客

ずあぶんいふことをきき、此の間もむしんをいつたら、此のまへもつてきた故、あまりわるくもいはせぬなり。」ト客、
しかしさうおかつぶかはれぬ、あいそのつきることは度々にて、色男でもきた夜は、おかづと悪くするなり。」とし
はかん平どのくらゐと見え、黒りうもんのもんつき、下着はきぬの茶がへしこもん、かいとのきるぐらゐ
なみじかきしたて、くりむめのぶつさきばおり、白たびにかうほねばりのきせるを口にくはへてある。ト小春、ざしきへは
ひりながら「よくおいでなんしたねへ」客久左、よこめにて見ながら「いつもご盛んだの。」小、につこりとわらひ、「ナゼ今夜は遅
くお出でなんしたえ。」トいひながら、火鉢のそばへすわる。久左「イヤけふは、組下に引込みがあつて、居残りをした故
おや。」喜「フウ、コレ喜八どん、茶やの事赤坂へたよりはねえかえ。」喜「ハイ、明日たよりがござりま
す。」久「そんならあしたの朝、文をかいておくから、人をやるならちよつくり知らせてくだせえよ。」
喜「ハイ。」ト杯をとり客へさし「ちとおすひなさりまし。」ト吸物を出し「私もちとしよくらんと出かけませう。」ト鉢肴な
ぞ久「さうなん時だらうの。」喜「ハイ、門ッ過ぎでもござりませう。」久「コレ喜八どん、いいからけへ
らせえヨ。」喜「ハイ、此の間は長次がたりませんから、大きに急がしうござりまする。」久「モウいき
たまへ。」喜「ハイ、さやうならごきげんよう。おむかへは。」久左「いつもの
通りだよ。」ト茶やはかへり、いりかはつて若い者来り、小春をよびだし何かさゝやくと、小春うれしさうなかほを
して、又何かさゝやく。ほそ／＼ばなしゆゑ、いつかうわからず。よくきをたてゝきけば、小春が命とおも
ふ客が、いま来りたるよし、小春はま
た此の部屋へきたり、小どもをよび、「コレさ、ぬしの座はどこだ。」若「中二階でいます。」小「連れま
うしていきやれ。」ト久左「チト待ちなたまへ。」小「ようにいくちやて。」らうかへ、久左「イヤ、こつちでござるいま
ト小「ハイ」ト、客の顔をつかまへて行く。此のとききれッのひやうし木チヨン／＼／＼、ちうかのあく、あ方で、ひけだ
ト、はなしきりとなり、部屋には、つぶれる、よつた客と見え、まきしたでしや

べてある。此のさまいつたいとびのものなるが、二人いびあはせ、ほんとうきどりにて來り、座しよけしはなたしおはなたるが、あまり存ひすてたるはん大きにおかぶの中の字をきめる。八「ダイ、コ、こいあキァ、ト、とんだふんばりおやァねえけえ。オンダ、わつちやおびようをとかア嫌へだも、キきざあつたえ。此の八さまなんざァ、帶をとかねえ女郎は、めした事がねえわえ。」トいふ内、此の客かみ三人ばかり行く後なり。五寸の夜具には初くわい「イ、いいかとおもやァがつて、たけえつらアしやァがる。」トむかつちやァよりも大分に客色はなれこねえだ、町から鞍替へをして來いしたから、ともの風を知りいせん。氣にあたつたらかんにんなんし。どうともおいいせうわな。」三「シ、細れたこつたえ。なんだ、町から鞍替へも凄まじいわえ。てつぽうから鞍替へで、顔にやあ染めそくなつた唐繪さァ見るやうなかまびがあるだらう。しみつたれあえ。」晴、だん／＼にぎやかになる達、おきて來り「コゥ八こう、靜つたた／＼。やかましいぜ、靜かにしやな、宵の約束をわすれたかえ。」八「オヽ、なんだ約束だ。わらおを一足が、聞いて呆れらァ。おらァよや、しねえヤ、ヽ、この女の面がたけえわえ。こんなやてえはねへあがるのぢやァねえがな。けふは親分から二人で、一分しうぎを貰つたから、しぢやうのため始めて、しものやてえはねへ來たのだわえ。ほんのこれたが、かみのおなじみさまへいきや、五十づゝで三味をかり、心いきようひかせて樂しむわえ。ハ、はあなつらだえ。」甚「コゥ八、いいかげんにしやな。だしきるぜ。コゥけえぶわりいぜ。」八「此のやらうは、イ、けえぶんのいゝふりをしやァがつて、親分の羽織をかりやァがつて、きつけもしね

と、やつらのまんなかに、ひしくくしてふつともねえわな。けふも弁天への参詣にいきやアがつて、帰つてこねへんで、なつ主を、よこつらへくつつけたのを、忘れやアがつたが、わたしが出るまくむてねしこすつこんでるやアがれ」ト、この野郎は、あま口にするのやアつけあがりやアいい加減に口を見たきやアがれ」と一つはまとい、「ア、くらアしやアがつたな、がつてんしねえく」トしまひにはぐれ上作いそのさわい騒り、二階より関をゞりまるす。誠に大勢のふいたすなり。既まに二つの口の六畳に、小鉢のいふきすくいお部屋、これは物すさましよつて、いれてまよければ、失れそはけつくめだつて悪しきゆゑ、わざとすなはしにあり、なれ、客まは二十四五、まゐのなきいる男、せいらへ、よし下ずに、こんちまのんのことゆばかんにて、赤のにはゐはひにかつて、ゑのそにに、小作あふむけにかつてむつて、ずやうこにはせうもふかやれいた小鉢、ぬれ手拭の一しかけ、ありつ、つるの小鉢かけてある。誰、一人のしとせう花、りやうさつのこみつへ手いたおわをひつかけ、元にはみやをとびのしたいう三人のゝ　つまいてつけ、つきやくになつたとみゑ、きせしくをして、噂消すん、藥のみのならぬつとばかりまくんなヽ」ト「どうした」ト「いつそ腹の横丁で、たしかおこつてなりやせんヲ」ト「そのやうにかたしたの衣作が、あけつぱなしだけうか、ヤイ」ト「ま、、、」

百六知は??してはゐまりねむて、ぐらい二番りト「あのかたうさいます」ト「いつといいにほひだな」けつどり……

今一人のしよすそ、悲しにまかせて、ほせ。「まわつちにもおくんなんしョ」ト「ほかもしい。おめへにこつこの……なんたもねえのにヽ」ト「みづからもはらがいてえもの。」といふ者あり、意下そう ト「まあ、ないうろうくく」

ト「ほかさま、わつちたよ」ト、団子と ト「ヤヤお絹さんか。おめへとおいろさんは、どうもわからねえよ」

ト「いふは、いほをすててしよそ……にうらはまうその者にて、「いとうん、一人ねえな。よなさき取つてあのこと……なりたなり……なれたるなり。

おいた。」錦「そりやァおありがたうおぜえす。まあしたへいつて來やせう。」小「おめへこん夜は勘さんか。」錦「ナニはつだ。マァ聞きなんしナ。」トはひり口へかゞみ、「いつそよわさうな角力取での、酒ばつか呑んでの、ふざけた唄ァうたつてゐるわな。」ト治兵衞がかほをみて、「うらやましいせけえだコ。つらくつてならねえゾヨウ引。」ト、らうかをつふんで行く。花「この子のつむりには、いつそたばこがついてゐるよ。あやしいの。」染「すヤほんにかえ。こりやァさつきゐねむりをした時、たしかつけたらうよ。」今一人のしんざう、あんどうへぼち／＼かんざしで穴をあけてゐるが、よし「オヤ此の子は、こゑ替りがしたよ。」花「するはずさ、越後屋の伊のどんとこれ／＼だもの。夕中二階のはしごの下で、此の子のつけ文をひろつたよ。」染「譃をつきな。ありやァおだがきだものを。」花「何むだがきなものか。伊のさま御もとへと書いてあるよ。そこの枕の引きだしへかくしておいた。お陸さんだしてそつから讀んで見な。」よしは枕の引きだしより、なめくぢのはつたあとを見る樣なあくひつのふみをとりだし、あけて見る。染なきごゑにて、「いやだよ。よしなよ。」ト、ひつたくり、ひつぱりあふうち、中からさばけると、その半分をよむ。よし「ナンダ、候へば御いやましくもうなた心のうち、コレサ手を出しなさんな。お花さんよくおさへてゐるなヨ。フウ、少しは／＼御ふびんと御くませ、いろよき御かへり事。サアなんだか御手がいいから、さつぱりよめねえよ。フウ、ねがふタノ、御事に候。」染は涙ながらに、むしやぶりつき、とうど、此の文をとり口へほゝばつてしまふ。此のさわぎを若イ者聞きつけて來り、しやうじをあけ若「御免なさりまし。この子たちやァ、とつくひけをうつたのに、早くいつて寢なせえ。いつまでも／＼、お客の前も

おらア、ばか／＼しい。」ト、叱り、ふらうのかほふんどうをかきたてて行く 染、ここ一世話にやアなりねえ。うつちやつてお
きやに」よし「さういつても、もういつてねようぢやアねえか。」米「またこん夜もいつしよに寝よう、
紙治さん、お休みなんし。」曽「もつとあすんでいきな。」よし「アイ、又目だまがやかましく云ふよ。」
ト、三人 小春「コレサ、ついでにそのあんぜんを、そつちのはうをむけていつてくんな。」米「アイ／＼、小
春さん明日よ。」ト、手ならひ子が八ツ下りといふせりふいひ、ばた／＼くさはしごをおり、かけながら、くらがりではなこしむかひ あとは二人さ 曽「こん夜はいくつだ。」
「三つさ。だけれどもどれもそねえにつとめずといい、居つゞけが一人の、そしてかのお座敷よ。」
そして一つはしよけえ逢しさ。それやさうときのふ、さういつてよこしなさつたものを、二まいつが
ふしたから、おめへそれでそのやのはうをかたづけなヨ。」曽「ウヽ、夫れぢやア大きにでえりが出来る。」
小「まだたんといふことがあるが、ちよつとつきやつて来るから、寝ずにゐるなよ、寝ちやア嫌だよ。」
ト、米すゞみをもち、しやんとして行く。さて又かのやかたものに、先刻よりとこのうちに、一人まじ／＼してゐたる久、たばこも
わしたあけていで行く。春はあきて、てんじやうのさんをかんぢやうしたり、あんどんのわきにでてたびら／＼ものを、
[illegible]かはよはし、はきかたをたつ寝に見たり、又きせるのやにをとほしたりして、もはや八ツにもならんと
思ひ[illegible]未だ来ぬか、こゝぞいかはんがおかしかへる／＼といふ所なれども、それもあんまり苦いと、たゞかつ
には[illegible]になる、をりから、となり座敷にて夕べの上るり 遊ぎしよすがのかねごとを、思ひ出してたつつ居つ、腹立ちま
ぎれてうしさへ、あはれはどうしてかうしてと、胸は一上り三下り、今のうき身の心から、たれぞとい
さや白糸の、歌のしやうかにあひの手や、かはい男に逢坂の、関より辛い世のならひ。」久左はこの上るりを聞くよりわ

が身の上にひきあてて、ぐつと伊左衛門きどりになり、「あの歌で思ひだしたこ跡の月の二十日の夜は、小春と俺が一つ枕だきあかした其の嬉しさ。たゞ其の主は替らねど、替つたはあいつが心、俺ひとり牀へおき、今までこずにゐようとは。」となりの上るり、「思はぬ人にせきとめられて、いまは野澤の一つ水。」久左「アさうぢや、よくされるのもひとさかり、次郎の心と秋の空、ふられ安いは客のならひぢや。いつそ逢はずにかへらうか。イヤ〳〵大切の金銀をだし、もとめたるあの小春に、あはずに歸ればこのむねが。」上るり「すまぬ心の中にもしばし、すむはゆかりの月の影、むざんやな夕霧は、流れの昔なつかしく、飛び立つ思ひ奥の間の、首尾はくちせぬ緣と緣、胸と心のあひの山、あひのふすまのぐあひよく。」ト、をりから丁度らうかばた〳〵にて小春來り、障子をからりとあける。(久左)おどろいてよぎ引きかぶり、上るり「ころりとこけてそらいびき。」小春「もしえ〳〵、寐なんしたかえ。」こ久左は小春をとつてなげのけ、「ヤヽコレ小春殿とやら、めばるどのとやら、こなたのやうなひまではござらぬ。三十五人の組下をもち、よる晝勤める久左衛門、こんな時寐ねば寐られぬ。邪魔たされしなさうかどの。」ト小春たゞ痴とみて、うぬはなぜこの伊左衛門きどりになり、久小春は此のしらちいつからうわからず、つきとばされて呆れかへり、小「つひぞねえ。とんだ腹だちやうさ。なんだかわけをいつてお聞かせなんし。」久左「人をばかす狸けいせい狐女郎、狐なら初午におぢや、どうりや〳〵〳〵〳〵。」トまだいつてゐる、小「オヤ氣味のわりい。狐だのたぬきだのとなんのことだえ。」ト枕元に屈んでゐたるが、「アレまた手をうつよ。やかましい。

トほかの座敷で手をうちしを、わが客のしきりにして、小春はすげなくも此の部屋を立ち出づる。又客は條り伊左衛門をとりおすぎて、彌〳〵はひとり出でゆかれ、又うぬひとりとなる。小春は夫れより又わが部屋の續けの客のへ行き、障子をあける。此のきゝもく同じく、お定まりのたぬき。

ふ「もしえ〳〵、寐なんしたかえ。いつきてもねてゐるなんすよ。よく寐るのう。す、さむい〳〵、ちよつとてうしにいつてきよう。」

ト又この部屋をたち出で、トゞはまた紙治が隠し部屋へゆき、上草履をたゝみのうへまではきあけ、しやうじをたてる。是れはほうばいの女郎が、こうづにいきかへり、いつでも紙治が部屋にばかりうはさうりがぬいであるゆゑ、おたのしみだの、おうらやましいのとなぶられるが辛さ、ひとつにはむねきなほうばいなどが、ほかの客をふづとめにすると、だんなへいつつけ、やかましくいはれるがつらさゆゑ。はき上げておくなり。

ト新かう若イ者八ツのひやうし木をうつてまはる。いま一人はうきにてかみくづをはきよせてゆき、二くわいもおつそりとなる。むかうの部屋から一人の女郎いで、らうかのなかほどまでくるとあとさきをみてうはざうりをぬいで手に持ち、五六間さきのあき部屋へはひる。是れは此のとなり部屋の客と色ごとにて、あひかたの女郎が隠しの方へゆきたる留守をしりて、となりざしきからしきりのふすまをそつとあけてはいり、またうはざうりを手にもちしは、あし音にてほうばい。こゝにあはれをとゞめしは、よびにあがりし小春が初くわいはしの客けどられまじとの心づかひなるべし。なりにしたてうづばのわきのはなれべやにおしこめられ、此のとなりへすゑあたりといへども、あきべやと見えくらやみなり。寂しき部屋にたゞひとり、小春はさしさで見たばかり、いまだヰすてはおかれもだまさず、よつたものはせはしく来るあぶらつぎ、をり〳〵こう〳〵とげたの音がきこえしが、これもとまれ、はや丑みつ過ぎしころ、鳥目はひとり寐られもせず、後悔先にたゝざれども、まはし夜具の綿うすきに、いとゞ寒さも身にしみて、折しも吹きくる夜あらしに、つれて聞ゆる遠寺のかね、夜はしん〳〵と更けわたり、犬のとほぼえ、内藤の森にひゞき、あんどうの火もきえ〴〵にものすごく、なまあつたかき南

風の、さつと吹きくる其の折から、しきりのふすまさら〳〵とあく音しければ、烏口はおどろきき、夜着の内より是れを見るに、やせおとろへたる女のすがたにて、其の年二八許りなるが、色水あさぎの如く、黒がみは左右へみだれ、口よりは青くさき息をふき出し、くろくひかりたるものを著し、烏口が寝息をうかゞふ有りさま、烏口はひと目見るよりも、総身ふるへて歯の根もあはず、夜着の袖よりのぞきみれば、かの裳裾よりほそき手をいだし、障子へつかまりよろめきながら、烏口が枕もとを目がけて来る。此の時烏口は更に生きたる心もなく、おもひ出せば此の間、爰の内のてうち場のまゝより、細き手をいだしたるとりつはさ、いまだ爰へ顕はれ出で、我を悩ますものなるか、アラ恐ろしのいうれいやと、口の内には常の内の祖師を頼り、南無日蓮大ぼさつ、いま我が此の難を救ひたまへと息をこらして居たりける。かの者はよろばひながら枕もとへかゞみ、背に負せし龍ぶた、其の外の肴等を手をさしのべて是れをつかみ、むしや〳〵とくらひければ、烏口心におもふやう、是れは日外品川の倉田にて、年を經し一疋のどら猫、女郎と化けたるためしもあり、彼も其のたぐひにて、猫の化したるものなるべしと、猶も口にはだいもくをとなへゐる。彼の者は肴を残らず食ひ終り、やがてすつくと立ちけるが、よろ〳〵として烏口が、夜着の上へどうと倒れければ、烏口ぎやつとひところにて、忽ちに氣を失ふ。此の聲を寝ずの番聞き附けかけ來り、是れを見るに烏口一人、目を廻しゐるた

ければ、若イ者を呼びおこし、薬よ水よと大さわぎとなる。扨また此のえうくわいは、猫でもなく、いうれいにもあらず、ときについたしんざうなり。此のとなりべやは、ひつこんでゐる女郎をねかしおく部屋にて、女らうやのじやけんなるは、ひやうきの内はろくにくひものもあてがはねば、たゞかつへ/\して、くひたい/\がたまりて、此のとなりべやに客あるときは、いつでも来りてぬすみぐひをするなり。たれもあらはれる時は、わかい、もののせつかんになるなり。まことにあはれむべく、悲しむべきは、此の苦海のつとめなるぞかし。

鳥渡此所にて御断り申し候、彼の小春治兵衛道行のまへまでは、いろ/\こんたんありと雖も、丁数も多くなり、御みなしも御むもじさまと、あら/\書き殘しまゐらせ候。

はや春の夜のみじかきに、せんりう寺の六つの鐘ごおん/\、くゞりの音ぐわら/\/\、ハイおむかへのこゑとともに、はた/\/\おりるはしごの音、おもてにははや、かみ高井戸から出る馬子が、やぶれまけのせる手拭をほしかむり、まくらのとんべしいぶとわしよだましたによヨホホイ、一くつわの音、一チヤンチヤン/\/\/\/\。

山手山人書

天明九年正月吉日

廻しまくら終

面美多勤身序

南有佳魚。烝然罩々。彼の詩も酒と肴に、楽しみ極まれる外に又楽しみあり、道に遊び道にたがひなり。其のみちとなんいへる横にかうてをかい、牡の口舌もおもむ島の、邪道にうつゝをぬかし、江たなる深川の湊へ、海道の美玉を集きあつめ、新たに冒険の大穴をこがすことと、仁田にあらでいつたたに、裏表のわかちなく、櫓下の太鼓に連れて、千金のまりつかへまいとはず、御さきまつくら三拾三文、五十六十二百石のきつかけせりふを、道中すがめの口真似に、させなくも腹はてらされ、鉢巻は一もゑ古市の、小山屋様として、誰し伝体と同じからずや、道一巡一記すに違あらじと、其の丸半か一毛をかいつまんで、面美多勤身と題する事しかり。

衎々鼎誌

面美多勤身

撰者　郭　道　交

同　集　交

君子之道、譬如レ行レ遠、必自レ邇、市中に道をゆづり、今や聖の御代に、つきせぬ濱の五十三次の浪のたひらかにして、爰に賑々たり。短客来ればちよん／＼のまくを引き、妓者ありて遊女代のながき言の葉をすゞに、永代橋と號けしも、誠とじつの天びん針、高きやぐらの太鼓はいしやは、見番にこぞり、懐の山吹は、山開きと倶に開き、三筋の秀音は、外に仲町、土橋のはんえい、かゝる嫦本あればまねく尾花屋あり。いてふやの蒲焼は、よせばのがく音に香をさんじ、山の石地蔵はかたき契約をたがへず、千手観音は丈なし手なしのきやほを救ひ給ふ。新地しんくの闇につぶての石場のにぎはひ、山もと伊勢屋がせきじやうには、山海の珍物をまねき、上総ぶしのツゝテンは、騒ぎの中にうれへをあらはし、吹屋町の結城も色を染めかへて、曲馬をもよほすれば、おりえがゐくほにのつ

出来る見物あり。箱根からこつちなる向島へふんげいづれば、深更に内證をさわがす野暮もなんのきありつうき名の川に水がみあれば、いざみに六部たばね有り。されどするは身をくふとはいへど、鴨もたゝけば骨もしよくすとかや。何れかいけ盛りのするを知らざらんや。いつかは夢もさめざめのさや明ならで、首尾もよし田屋へおもむく其の時節も、羽織は茶のちやんちやん、編笠をかぶり、目には六八と小舗はつやなし上田、黒七子の帯にぼたり〳〵する時節、なにかわかると云ふ顔色にて、舟宿へまつとはひる。女房「これは花香さん、よふ御出でなさへ。今日はお一人かえ。」花「アイ連は先きへいつてるやす。」女房「そんなら御急ぎだらうネ。」花「チット急ぎのすおさ。コウ千こう、早く舟を。」千「サットかしこまりました。」ト舟をこしらへ「サア旦那あしよせ。」花「かみさん、いつて来やせう。」女房「コレハコレハおせはしねえ。いまくつていらつしやいまし。左様なら御きげんよう。」ト舟は出る。千「旦那、表へおかけ。」花「さう〳〵。千こう、此のおうはなかしかつたのう。」千「とんだおもしろうござりやした。萬八にははじめてさ。」花「其のはずだ。舟のいかねえところだからサ。アノ梅松屋はしよし野村屋といつたつけが、今ぢや内證がかはつたさうだ。」千「だうりで神明に居る子が、二三人見えやした。」花「時に中洲ははかなくなつたの。」千「さやうサ。平家は二十餘年えいぐわなしたといふが、中洲はたつた十七八年だね。」花「引き事も有りかてエ。」千「もし此中には、あれからどけへ

お出でなすつた。」梅「つき合で土ばしの鶴やへ。」由「だれをお呼びなすつた。」梅「おてふといふ子をさ。」由「ソリヤア上總屋のかけへ。あすこだやア、おいよにおつう、おかつといふ子は、いいきれいな子さ。」梅「アノすましきをして居るお吉は、美しいもんだの。」由「さうさ、そして人がらがいいね。」梅「ナント石場はでえぶんはんじやうだこ。豊くらなんざどうだの。」由「イヤ豊くらもやアまつる大津屋でおなか、いい子供がでえぶあるやうだ。」梅「シいつぞや六けんおやアどこへお出でなすつたえ。」由「金子屋の内へいつたが、お幸が氣さくでいいこるるから面白いよ。」梅「内の小ゆびかえ。藝者衆は誰々だえ。」由「先づ豊香はぶんごで富太夫、豐國、文字清、ふところをどりや八ツ太夫に吹よせ、おのえは今ぢやア出ねえさうだ。」梅「[illegible]旦那[illegible]」由「[illegible]かわいいものを、ありやア[illegible]でえぶ様が入れたのう。是れならア安くはねえ。あんな仙臺かり。」由「[illegible]、こちらの[illegible]降り[illegible]。」梅「ヨウ此中おかしい事があつたよ。御坊主衆の一座で、尾花屋へいつた所が、かの太郎をよぶと、お梅久米之介を諸の出して、アノツンはなの盛りのお姿な、あいそもこそもつきたと云ふせ、お客が坊主[illegible]、二三人呼びさが氣がついて、膝を突つついたら、ておいも氣がついたさうで、あいそもこつそりやつこさんにと諦つたり、胴中へどつとおいらが來たよ。」由「ソレハをかしうござりやしたらう。[illegible]た。」[illegible]花村の内[illegible][illegible]花扇、よくお出で成され

ましたら」花「どうだおとよどん、やほに寒いの。」ことよ「さやうさ、コウおるんどん、おなみさんを聞いて来な。」るい「あの子はたしか大津屋にでて居なさつたつけ。」花「よし〳〵、それもがつてんサ。藝者を二三人呼んでくんねえ。けふ清さんは来やァしなんだかの。」るい「イ、エ。」花「ソリヤアすつぱりかつがれたわエ。」ことよ「藤三さんを口をかけてやりましたよ。大吉さんはねえから、すぐにあとをつけておきやした。そしておなみさんも借りにやりやした。」花「何から何まで、ソリヤアお世話だの。」トいふうちけい者来る。藤三「是れは〳〵花かうさんめうだね。夕などは清さんも交り、段々噺が面白くなつてくるわえ。」トなにかわからぬこわいろで、花「時に持合はせやした。」と杯をさす、藤三「コレハチト。」花「まア。」藤三「さやうなら。スツトつぐまい。」女中「久しいもんだ。一つたべなな。」藤三「イエ、モウ御免だ。けさからたべつゞけサ。」花「コウそこのきせるたばこ入をとつてくんな。」藤三「オツトきせるたばこ入あれば、たすける神ある。」花「きつい物〳〵。」夫れより三絃をチヤチヤン○隣座敷は二人一座、是れもなじみと見えて、けいしやは千子、上るりもちよんとかたり仕廻ひ、みな〳〵ほめる。旅人甲「イヤモウ琴ぜめはきついもんだぜエ。酒にせう〳〵。」千子「モシあなたがたは、此のごろはどこへおしげりか。こちへはすつきりお出でがない。」巳之介「インヤ二人ながら、御遷宮に参つて来やした。」女中「どうでござりますか。」長「譃かほんか、色の黒くなつた所を見せなせえ。」千「さやうなら、定めて道中のお噺が、ありさうなものだねえ。おはなさん、おくまさん。」はな「さうサねえ。」

ナニ譃だからねえのサ。」 弥「夫れはどしよまうなら、おほえてきたのをあらましはなしやせう。」
大きい「どうぞ承りたいね。」長「外の事は知らねえが、女の事ばかり。」 くま「お前も久しい性悪だネ」
北「そこが道中だ。」 はな「サァ聞かせなんしな。」 長「まづ江戸をたつて、品川の村田屋と云ふはかれ
ぢや屋、こゝのお辨がきれいなものサ。鮫洲で、むさし屋の跡ばしらに、ばせをが句があつたつけ。」
子「どういふ句でござりましたネ。」 長「時鳥青葉の海を三軒や。爰も名所の内サ。又日の出の景色は
高輪よりやアかくべついい。鈴の森へいつて八まん、爰の藤はめうにいいヨ。まへに有る烏石と云ふ
のは、三囲の高石といつたのを、うそき先生がもつて来たといふ事だ。そのむかうに芭蕉塚がありや
す。」 北「コウあすこへ庵をたてゝさうなもんだの。」 長「まへ方はあつたさうサ。翁が句は、雲をりを
り人を休める月見かな、といふ句があつた。橘町の宗匠も、爰にやア少との内ゐたさうだ。爰の又
高砂屋の櫛子汁もくへねえナウ。大森へ行くと和中散が三げんありやす。御成御門のあるのは真中
此の宿おやア蒲山の茶づけ、梅干の皮がやはらかでいいヨ。夫れから川ばたで、腹切石といふのが有
るといふ事だが、舟へ急いだから、ツイ見やしなんだ。萬年屋も久しいもんだ。今おやアさきのふじ
霞のおまつが所のかゝはんじやうだよ。此の驛の茶づけの娘がよし。鶴見おやアまんぢうはむまさう
だが、くへさうな奴は一人もねえ。しかし山じぶんにやア、いい玉をやとつておくさうだ。此の鶴見

橋でとき〴〵、頼朝さまのはなした鶴が見えるといふ事だ。」ホ「ソリヤア珍らしい、見たうござりますね。」馬「今度江の島へ行く時、氣を附けて見なせへ。爰のしがらきも、いい茶を呑ませやす。其の先が生麦村といふ所さ。」ホ「よく〳〵芝居でしめかうにつかふ所だネ。」馬「こゝに久保町の十團屋が、引つこんでゐるが、内の娘はめうにいいきりやうだが、そこの子が出来たさうだ。又神奈川の入口で、鳥居のこれがふしで居るが、あれも久しいもんだの。爰の沖がやア、尾張さまの鯛をいけて置く所が見えるさうだ。まア宿中ぢやア、足袋鍋屋が一ばんだ、はね澤屋もいい内さ。爰のかけへの子が、おいは、おそよと二人あるが、どれも上玉さ。鄰の相模屋のおてる、なかうの新和泉屋のおせい、中どしまでおいせはいきな代ものさ。山じぶんに江戸の氷川からいつたさうだ。だいへ上つて、上總屋に、いい女が三人ありやす。爰の亭主はよつぽどうれた通りものだ。戸塚ぢやア中村屋のお絹がいいよ。外においそにおきり、おくめと三人あるが、どれも中ぐらゐさ。松並木の茶屋におみつといふ子がよし。そうべつ此の宿ぢやア、八はいどうふをよくこまかに切る所、又藤澤ぢやア、たばこやがよく江戸者のいく所だ。三味せんひきの吾八は、此の宿の者だよ。爰の遊びはやつぱり神奈川のせかいと云ふもので、話せる處だ。アノ大磯にゐるとらが石は、わるい男にやアもてねえといふ事だが、おいらにもてたやつさ。まんざらでもねえかの。」ホ「こゝらきつい鶯の字だネ。」馬「爰では鴫立澤が三夕のほ

ねたが、今おやァほんの古跡許りだ。それから小田原で白子やのおやかた、こいつが美味。おいしにおしほ、おせうおそばくへねえよ。箱根へいつて山の料理やのおそり、愛にゃ／＼権右衛門が内だ。此のまへ吹屋町で廣治がしたのさ。愛の湯屋のかみさんがよし。すべて此のへん、味わよやうなり、くれす。御駿府でめへの酒屋の娘におかど、こいつは山中にやすねえいきな子だ。鮨の江にやにおそり、おきゃ、これも口がいゝ。三島の女郎おや、中郷橋のおみしがよつぺんだ。愛ちやァ女郎をかふと三味せんの掛けが三十貳文づゝ取りやす」 五「さやほんにかえ。」 六「馬鹿らしいねえ」 五「愛の恵比須やのお料、おひで、お嶋、おすみ、何娘もたら筋子すゞ。又にし吉原はがうぎに馬の安い處だ、家もねえはそんのやうだ。そのかはりにやァ箱根のおびかしで、目くら馬がおほいよ。おらァとも諸したことがある。はこねの上りばなの長こふ山の先に、翁が句に、山路来て何やらゆかしすみれ草と至るなほどおも白い句だねえ」 馬「江尻へ行つて、ねまうやのおかみさんが美しいよ。」 三「ンニ、それからあの前やの、府中膳といふやと吾妻の傳といふ所、あら、道中一番たらうとおもはァ。」 ヽヽシたにながうすにおほのなきるが、僕でおやしゝにほれたれ。」 一「府中で傳馬町の萬やの娘、阿部川餅だねえ、川口やのおいくがいつちいい。此のへんで陰陽石と云ふ様な石が見るよ。」 こ「そんな石だ。」 五「男と女のれいゝ、其の山石。其の子たちに見せてえよ。」 三「まア話しかけねえ、

辰「夫れから鞠子へいつてとろゝじる、こいつもあんまりさえねえ。」巳「そのやうに悪くいはつしやんな。芭蕉もほめておかれた。たしか其の句は、梅若菜まりこの宿のとろゝ汁。又公家衆のつらねた狂歌もあいやす。」子「ソレはなんといふのでござりますエ。」辰「ソレよく誰も知つてゐるわナ。鞠子にてくつの音高く聞ゆればおすかるたまへききにありく〳〵。」子「成るほど、是れはよう出来ましたネ。」辰「又島田の吐月峯といふ庵はどうもいへぬ景色だ。翁が句に、宿かして名をなのらせる時雨かなと。爰も名所、川を越えて金谷。」子「モシ金谷のはたごぢやァ、さぞなますを出すだらうネ。」辰「トいふ事だが、竟に出したのを見た事はねえ、爰では上のまつやのお松、おかね、下のまつやでおべん、おしも、どれも中ぐらゐサ。又日坂で八まんさまのまへにあるいてふの木は、藤堂和泉様が江戸から津までのまんなかの印に、植ゑておかしつたさうだァ。口がくたびれた。」女中さと「よく其のやうに、くはしく覚えてお出でなすつたネ。」女中るん「サァ其の後をお聞かせなせエ。」巳「是れからおれがチットかはつて話さう。まづ掛川の海老やの娘おみつ、今は先の原川といふ所へかたづいてゐやす。濱松ぢやァなべやのおいは、おいね、どれもそんなによかァねえが、とんだ手があつて大の烏丸サ。東海道の内で、錦の夜具をいく通りも持つてゐるのは、爰の鶴やばかりだ。荒井の渡をあがると、かどなみうなぎを賣りやす。中でも紀伊國や、中山やなぞが、いい魚をくはせるのサ。又吉田ぢやァ、江島や

のかけいおふさがよし。赤坂で蔦やのおよね、大和泉やのおきくにおはつ、こいらが名代ものさ。ト是れはしたり又とり落した。日坂の上り口で、あめの餅を賣つてるおかの、きれいなものサ。岡崎でよし田屋のおたみ、かみやのおまつ、池鯉鮒で木綿屋のおきん、難波屋といふあげ屋でおかど、はつの、どれも上玉サ。すべてちりふ、岡さきあたりから先は、古市の玉がまはるよし。言葉なども わけて優しいヨ。四日市で中國屋といふのは、江戸中の神社佛閣へ手拭を上げやした。爰の杖つき坂といふ處で、翁が句に、徒ならば杖つき坂の落馬かな。爰にとんだのおかん茶や、是れも名代のだ。」

東「それでおもひだした。くし田の伊賀町に、おかんへんばといふ餅は、つがもなくうまかつたの。」

女中ども「成るほどお前さんがたは、女の事許りかと思へば、食物にまでしやうわるだネ。」弥「旅はそこが氣散じだヨ。あらましマア此のぐらゐナものサ。」北「とてもの事に、松坂、古市のせかいを、承りたいネ。」男「松坂ははれてならねえから、騒がれやせん。小まつやなぞといふ揚屋へ、子供やからよんで遊びやす。宵から九ツまで三匁泊りを、つめと言つて八匁。是れが先づいいお客サ。夫れから下々の女ものは、いくらもありやす。まづ古市は、上の町でちうかやでおすみ、おたね、おなみ、おなべ、おきと、おみわ、おとも、小まつ、おてる、小はる、おたま、おとみ、どれもいい玉サ。みなとやでおきし、おさき、おりし、おあし、おなほ、おかね、おせふ、おなか、おちう、お琴、おさだ

かゝへつて上ものサ。びぜんやでおひで、おかね、おはつ、さぎりやでおこう、おとも、柏屋でおせう、おゆう、おこう、おなみ、小まつ、小てう、松の、さくら、あいは、どれも茲さ。茲ぢや、藤吉だの白子屋だのといふ揚屋で、藝者でもよんで騒ぐのが、ちやうどこつちで、山へでも行くといふ物サ。藝者が一ト切四匁づゝ、みんなはぶきでとりかつかひやす。壱両に二十四枚の割サ。ちやうど藝者が、両に七つに當るヨ。」女中「それは安いものだネ。」弥「茲で又能をさせるが妙だネ。五百匹といつて壱両でしやす。是れが見物サ。又内で面白くねえと、女郎を連れてどこの内へでもあがつて、どきの内中の女郎をいくたりもかぞらせたり、酒を呑んだりして、一人まへ二匁づゝサ。女郎と二人で六匁サ。そして又此のへんぢやア、間夫の事をケンシといふてふサ。今おやア聞ききあたりでも、事らしいこツす。喰物の事は萬吉とヨ。」弥「ヨウ辰こう、爰に道中つうの知らねえけりやアならねえ事があるヨ。實本のつゐで、橋を三つ越せる所を知つてるかい。」北「ハテナ、どこだらうの。」弥「原、よしはらの間サ。」北「アノ大きな釜のあつた所は、どこだつけの。」弥「ソリヤア箱根の權現さまの前と、江尻の八幡にサ。」女中「成るほどおまへさんがたは、道中は飛んだあかるいもんだね。」北「イヤハヤ恐れ入相サ。」弥「その入相でおもひだした。モウ日が暮れさうだ」女中「サアチトどなたもあちらへ。」トいふをしほに、みな　う鄰座敷は花から　おなみ「サアたばこでも呑みなせへ」弥「イヤ、たば
みな立ち出れば　が出の世かい

これ酒[さけ]ようこそこにあるのをついでくんねえ、……此方[こ]うけはゆきのやうたぞえ。」
作五「……白酒[しろざけ]かやァあるめえし」作「イイ……エエつめたくつてよ、其[そ]の鯷[すゞり]の梨[なし]をとつてくんねえ」
作五「コレヤア、もうおまえが持たよ」作「けふはしやうじんだから、さういはれちやァ食[く]はれねえ」
作五「きつい情しみだね」作「そうらく道楽のは嫌[きら]だ」作五「おまへさんだよ」作「その下[こ]にあるもん
でくんねえ。この串の根みをくはゐやァならねえは」作五「ヨウヨおまへさん」ま、それだ、
おめえそこにかい花がつさん、よく来たつとの」作「コリヤお前さん、変[こゝ]へ来な、用があるよ、
作五「ま、たよ」作「この串をいろいろおめえ達にもあるもしたけ」作五「エエこれつめえは、お鯷の
鯷[すゞ]があるからつとめたけいれ、しまひうちはしもあるてん鯷はいつてゐるものを、
かつらたてつて外聞が悪いやアな」作「それでいての嫁か、幾年の変を見たやうに、からんだ詞[ことば]か
いひたかるやつだが、おめへも変なわい、四つ下かあいになつたはずをみるやうにいかくしやくして
くれる事[こと]はねえ、あれだつてもまたそうざ門[もん]かあつたねえが、真水[まみづ]と塩水[しほみづ]に一つ口に含んで、すいもあまい
も、鯷[しほ]のいおいも知つてる男だわ。其[そ]れをさかさのめしたと思[おも]つて、門跡[もんぜき]で仆[うしろ]たあつかふ様に
被下[くだ]つては……て、……事[こと]は知れえ」作「マア……おまへさん、そういふのさね……ねえ、其を
かう、……花……早く……来やせう。おま

みさん、いつて来るよ。」　なみ「アノいつておいで、花かうさん、さういふおめへもじやうがねえよ。」　花「ナニじやうがねえもすさまじい。傳馬町の長持ぢやアあるめえし。じやうがねえとはておめへの事だ。しかしここかんの女郎衆は、おいらが目へははひらぬはずだ。いつきても盗みの恭やちよんの間借りで、そは〳〵だから面白くねえ。おひだにややおつとは噺したい事もあれど、よしや又聞いてくれる氣もあるめえが、なんぼおれがやうなまんざらなもんでも、さうしたものぢやアねえヨ。」　なみ「そりやァさういひなすつても、うたがふぢやアねえが、どうもおめへは浮氣だよ。もつともわつちらだつて苦界の身だから、客によつて上手をつかつたり、かいて見たりする事もありやすけれど、こんな苦界をするさへあるに、欺すがのうでもねえと、生まれのまゝの氣どりで、あんまり上手はつかひやしねえ。しよせん又知れたせりふだが、今も云ふ通り女郎は、客をだますがしやうべい、客は女郎にかかれてゐるが、遊びとかなんとかいふものだが、たとひわつちが何のかのと云つたとつて、かかれるおまへでもなし。」　花「コウ天窗がつけへらア、あんまりあけてくんなんな。堀さらひの殘りぢやアあるめえし。それになんだ通町で、雪をあつかふやうに、かくのかかねえのと。」　なみ「ホンニ、どういへばかういふと。」　花「あきれが禮にやアこなんだかの。」　なみ「そんなにむだをいはずと、もう夜がふけたから、ちつと寐ねえナ。」　花「ナニねねえなら、水をくめばいい。」　なみ「そんならおきなんし。」

花「おきなんしといふ字は女郎の花と書くぢやアねえか。」な「エヽ、モウうつたうしくしやれるなう。」花「うつたうしいといふものは、松まへにあるぜえ。」な「よくそのやうに地口がでるねえ。」花「ナニひとしありあるとまだ出るのサ。はつだけぢやアねえが。てめへそれでも、おれをあまく見てるるぜえ。」な「ナゼエ。」花「この中の文に、いづれにてもはやくきなこ餅と、しやれてよこしたぢやアねえか。おれをきなこつけて食ふといふ心いきだの。」な「今もつていねえ。どうしてお前がくはれるものか。」花「これでもおれが、爰の座敷をふみだして、とぼ口でのめつて死なうが、構ふたちぢやアあるめえ。」な「さうきくとおつかアや泣きやす。」花「おきやアがんなせえ、泣いてよけりやアおつつけ鶏がなくヨ。」トほどなく八まへの鐘がゴンくゝ。花「モウ夜があけるさうだ。サアかへらう。」な「マアいいわな わたしもちつといひてえ事もあるけれど。」花「マアいゝはなにまでつけておきねエ あすのばんこよう」
な「必ず待つて居やすよ。」トいふみえでちよんく幕。

面美多勤身 終

傾城買四十八手敍

千手觀音は更なり、薩摩守忠度は、一本の手にさへ六彌太をとつて投げのけ給へば、蛸も足が手なれば、やみ〳〵と奉書紙に包んで捨てられはせまじと謹き、茨木童子も大江山の青陣場で、手のつかぬ事を嘆きし由、傾城も寶の藏に居ながら、手の空しきを哀しむも理ぞかし。されば傾城をころすも、手にあらずして何ぞや。故に今新手を盡して、其の題を四十八手とよぶ。是れを以て則ち無手客の愚闇に授けよと、我にあたへしは誰なるぞ。何にもせよ此の一冊の四十八手がつてんのゆかぬ。

寛政ふたつ戌の春日

山東京傳述

取やうき身に間夫の闇客の月

文京

總目

一、しつぽりとした手
一、やすい手
一、見ぬかれた手
一、そは〳〵する手
一、しんの手

傾城買四十八手

山東京傳著

○しつぽりとした手

客はむすこ、逢方はつき出し開のなき中三、尤も初會。

女郎、[illegible]

（客ムスコ）、年は十八ぐらゐ、むつくりとして男もよく、あまり口をきかず、いかにもよき所のむすこと見える風俗、つれも一人あり。

「　　　　」ムスコ「　　　」

「[illegible]いつさ氣がつきませんすヨ」ムスコ「[illegible]」[illegible]

[illegible]

いつそ、手があらつしやるヨ。」ムスコ「手とやらは、二本ほきやアござりやせん。」女郎「にくらしいの。」トつめりさうにしたが、ふんりよしてつめらず、たばこ入附けゐ火をわざとけしてたし、手を叩く。かぶろきたる 女郎「火を入れてきてくりや。よくいけてヨ。」かぶろ「アイ。」ト火入を持ちゆく。ふすまごしにうかゞひ ムスコ「…あたりのしやさんすね。」女郎、ささやいて「なんでさんすとえ。おつとちよつと見えんせん。」トちらし、たつたいまほどなくいぶる火入の火をふきおこしながら持ちきたる 女郎「…すゝでふへ、ひでなどうしたえ。」かぶろ「宵に中の町で、犬にくつつかれんしたヨ。」女郎「これ見や、云はねえ事かよ。コレヨ、それにこりて、モウ犬や何かと、心安くしめえヨ。」トあいけたくしかる ムスコ、うつむいて居る。かぶろ、うつむいて居る 女郎「コレサ、これをしまつての、そして著かへてきやすなや。」トくしからがいをぬき、みす紙へつゝみわたす。かぶろ「アイ、そんならお休みなさりイし。」ト立ちゆくひやうし、立てかけ置きし琴へ袖がさはつて「コロリンシヤン。」と鳴る。女郎「しづかにしやヨ。」ムスコ「わつちやたばこはきらひサ。」

女郎「おあんなんせんかえ。モシエ、ぬしの内は花菊さんの客人の近所かえ。」ムスコ「イ、エ、ちがひやす。」女郎「どこでさんすえ。」ムスコ「神田の八町堀サ。」女郎「嘘をおつきなんし。よくはぐらかしなんすヨ。」ムスコ「跡で知れやす。」女郎「なぜえ。氣にかゝりんす。いつてお聞かせなんしな。お云ひなんせんとくすぐりんすよ。」ムスコ「いはずともいいぢやァねえかね。マア遠いのさ。」女郎「ほんにかえ。」ムスコ「おめへあてて見な。」女郎「そんならかしら字をいつてお聞かせなんし。」ムスコ「かしら字はにの字

さ。」女郎「待ちなんしよ、にの字だね。コウ、そんなら日ほんばしかえ。」むすこ、わらひながら「ちがつたね。」女郎、久しばらくかんがへて、「そんならにかは町とやらかえ。」ムスコ「いんにえ。」女郎「じれつてえ、どこだなう。」トかんざしでまへがみかい、ムスコ「やつぱりほんたうは、日本橋の近所西河岸サ。」女郎「ソレ見なんし。よくあてなんしたらう。」モシエ、日本橋へもくわんのんさんを通つていきんすかえ。」ムスコ「知れた事サ。」女郎「大かた内には、おかみさんがござんせうね。」ムスコ「ナァニ、まだそんなものがあるものだ。」女郎「そんならどこぞの女郎衆に、お楽しみがありんすだらうね。」ムスコ「内がやかましくて出られねから、こつちのはうなぞへは、来た事はねえのサ。去年酉のまちの帰りに連があつて、外へ一度いきやした。わつちが事ばかしいはずとも、おめへのいろをちつと噺して聞かせナ。」女郎、どうしてそんな事がござんすものか。わつちや去年まで、みのわの寮にゐんして、此の春から出んしたヨ。いろをしたくても、わつちらがやうなものは、誰もしてくれんせんものを。」ムスコ「よく嘘をつくの。うそつつきとつけやせう。」女郎「ほんざんすよ。」ムスコ「そんなら客に惚れたのがあるだらう。」女郎「人にほれるのは嫌ひサ。」ムスコ「そんならわつちには、なほだらうね。」女郎「ぬしにかえ。」トかほを見てわらひながら「跡は申しやすめえ。」トふと[illegible]ムスコ「じらしなさるね。」女郎「モシエ、わつちやたつた一つ、願ひがござんすよ。」ムスコ「どういふねがひだ。」女郎「わつちが惚れた客しゆの来なんすやうにさ。」ムスコ「おめへ、今ほれた

者はねえといつたおやねえか。」女郎「たつたひとりござんすよ。」ムスコ「うらやましい事だの。どこの人だえ。」女郎、だまつてゐる。ムスコ「コウ、どこの人だえ。」女郎「おまへさ。」ト思ひきつていふ。ムスコ「じやアぶあやなしなさるもんだの。」トむねどきどき。女郎「ほんでござんすよ。それだけれど、わたしらがやうなものだから、もうこれぎりでお出でなんすめえね。」ムスコ「もつてえねえ。おめへのやうなうつくしい女郎だものを。」女郎「おいらん様サ。たんとおなぶんなんし。」ムスコ「ほんにサ。呼んできへくんなさるなら来る気さ。」女郎「譃やら。」ムスコ「来たらどうしなさる。」女郎「じつかえ。」ムスコ「知れたことサ。」女郎「マアうそにもうれしうござんす。」ムスコ「それがうそだ。」女郎「ほんのことサ。」ムスコ「どれほんか譃か。」ト、〇〇ついでにむい　女郎「エ、たつめたいが、かんにんしなんしえ。」ト、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇の所へ、たばこ入にきせるたはさみ片手に持ち、新造「こん夜はでえぶはだきないばんだ。ヂイ、、いつてもよしかえ。」ト来る、此の客は四十ばかり、これはこいつはよいとなじみなり。萬事ゆきわたつた気なれど、じつは大かたはんかなり。この女郎、わるいときじやまとは思ひながら、「よくお出でなんしたね。サアおはひりなんしな。」一座「そんなら一ッぷくのみの若草としやせう。」トすわる。女郎、たばこつけて出し、「愛へ、おあがんなんせばいいね。」一座「何さ、愛がよしのくずサ。」ムスコ「へへんなせえな。」トぎりをいふ。一座「コウおいらん、わつちが弟ぶんだから、かはいがつてくんなせえ。」女郎「いつそ宵から、わつちをだらしてお出でなんすよ。」ムスコ「何みんなこつちがおやなされるのさ。」女郎「ちよつと見なんし。憎らしい。」ト煙管でぶつまねをして、「しかしぬしがお師しやう

まんだから、手があんなんすはすさ。」一　「ヲヽゆう菊さん、おめへなさァいまつかふだャ、ずゐぶんか
ひれ、おいらアもう老い込んだぞ。だいいち摂が悪くなつて、一ッぱい呑むとへつと寐るから、こ
れおやァ傾城かしたねえはすだ。」「ヲヽすおれほど、花菊さんをおこふしなんせばようさんすわ」
「息子」ニヽ、ありけいはこつちの畠ではさねえ女郎さ。もう来やせん。」「息子」かはいさうに、そんな
ことを云ひなんすな。いつつけんすよ。」「息子」一面いてもいいのさ。かういつちやアなんだらしいが、
三百六十よかん日、此の里へへかよつて、尻に四つ手駕のたこができ、びろうどのはんえりが顔
へかゝらねえと、ねつかられえ男。」一　トはなしにのりがきて、きせるの火玉のひざへおちたを「ソレ火がおち
んした」「息子」ナニ [illegible]　「トいふものだから、ソレでだいの目がいごくと、
こいつアかうだなと、ねんごふが入つて居るから、おつちらを呼ぶにやァ、傾城もマァむづかしいの
さ」ニトラのやこれや悪くすれば [illegible] 女郎、あきれてだまり、紙を小よりにして、煙管の掃除していける「ナニ、ついは
[illegible] しかきつぼなへぶつつけてじやうだんし、たいがいのみたい
なしが長くなつた。長居はやぼのいたり、おいらんお休み。」ト立　「女郎」「ヤヤおすびなせえな」「息子」い
えにや、でえぶねぶくなつたヨ。時におめへはもつと早くけへらさア悪からうによ。」
「女郎」「さうさ、もつとも早くかようございやす。」女郎、嬉しやう〳〵と思ひながら、「モシエ、もおつとお咄しなん
しな。」しかしおきあ申しこなめえ。花菊さんがお叱んなんすだらう。」「息子」でうういふ所もねえ點さ。」

ト次の間「すゞばんとうさんを始め白川だ。ヨリヤア夜ばへにくる事だわえ。」トあんどうのそばへよつて
へ出て　さいぜんのやけ穴へはながみを
入れてみて大きにふさぎ出て行く。あとはチヤンとじツ半。茶や男「ハイおむかへでござります。」
ふたりはつゝとためいき、中の間がとにい

評曰く、右のおいらんがたばこの火で、むすこの顔を見しは、源氏螢の巻の意味ありておくゆかし。此のばゝゐの時分は、まだやり手やばんとう女郎をこはがりて、人にほれても心でばかり思つて居るものなり。又ばんとう女郎が、今宵はあの客人にかう〳〵いつて、節句をお頼みなんし、と云ひをしへても、つい云ひそびれて云はずにしまひ、ばんとう女郎は次の間にねて居て、始終聞きみゝ立て、あのはなしにとりついて、いひ出さつしやればよいにと、氣をもむは度々なるべし。しかも末たのもしければ、内證のせわも早くはなれ、新造出しの難所を越すも今の間ならん。また今時のむすこはとかくゆきすぎて、しやれたがるものなるが、此の客はそれがなく、女郎におもひつかるゝ風なり。まことに此のとりくみたぞが、羨ましきあそびなり。或人曰く、去るおいらんが中洲の假宅に居たとき、「モシエ、町は天氣がよくていいが、どうも中洲はふりんすヨ。」といひしは、ありがたき語なりと云々。とかくけいせいは、あどけなきをしやうびすべし。

○やすい手　客は山の手の通、女郎は小見世の座敷持、尤も馴染。

客田風、二十二三、色青くやせたるうどのやうにはやし、ひたひくはのやうにぬきあげ、いろ氣味の悪いほど白く、まゆ毛ほそく、髪もとさかをたんとまいた本多、うは着ドヤウ縞ちりめんのあゐがゝらうどにうらえり、前口に茶

トヤ、帰るまぎれに、其のうちにあけあぐらで、[illegible]おれもでしくのかみをな
かせ三味せんを持ち、何かないにあるところへ　[illegible]里「知つたか知りイせん」ト、あわてて[illegible]しやうじをさ
とあけてはいり、うた「[illegible]」
らおまへて笑つてゐる。　里「びつくりした」男「からかつてつかはしたら、おつかけんすわな」里「だ
れだに、又こゝにねえそうだ、ごめんなんし」　[illegible]「里風さん、よくお出でなんしたネ」モシエ、
紋太郎をひいてお聞かせなんしな」里「いい所へ来た、ちよつと呼びつけてよびだ」里「すそおも
てえきせるだなア」ト行燈は酒を[illegible]、○里「[illegible]」里「そうなさいなんし」
トいゝ「あなたお[illegible]の[illegible]、よろしとしま、[illegible]」
たく。[illegible]
うに、[illegible]
[illegible]
むいても夜着の[illegible]、コレ銀煙管や、いけすかない[illegible]しやれのえことよ」[illegible]
うりばたり、「これ見や、あの[illegible]火をおこしておかねえ[illegible]ねえ」[illegible]里風さ
[illegible]
え、[illegible]花まよく立つてくれつ[illegible]持つて来たすなんだ[illegible]ものならくれろえ」
[illegible]お[illegible]れ[illegible]」　男「おきやアがれ溫石か。おらア又餅かと思つた。」　くら「おへねえ[illegible]
うた「[illegible]」[illegible]「[illegible]なんし」[illegible]みたにらより出す　里「で
まぶこのころは[illegible]、[illegible]炭の小がひといふけはしねえな」　[illegible]「ちつと違ひんす」　里「そ
れでもまだ[illegible]、[illegible]やるにやれねうな[illegible]」　[illegible]しやれなんすな」[illegible]

ろかわりいゝよ。」黒「ナニサ、ふつと酒としやれよう。」くら「ナニサけんをはなしこ、おやすんなんだね[illegible]

「いや　ほやいふぜ。ナニサその硯ぶたを見なや。金平ごぼうもひさしいもんだ。此の蛸のあたまはくさつて居るぜ。栄螺のつぼへ赤螺を入れてだすから、おそれいらア。こんだの料理ばんは、どうもおそれする

ぜ。」黒「よくいろ／＼な事をいひなんすよ。」くら「そんなら五分づけを出しなせうか。」黒やまさん、そつからとつてくんなんし。」たばこでわるさを出す 黒「もじやだなんだら、いゝ[illegible]。」くら「こいつはよく／＼いゝた。したはなんだはたなか。こいつもふんどしでねへ。しかし是れをくはせたら、手めへは五分づけにせたな皿のなかだか出るだらう。」くらァ又はじまつた。黒「ときに是ればかりぢやアすまねへ。書付をたのにやりやな。」ト云ふは、[illegible]にて其の日のしこみの帳を、何にても紙へ書きつけて、何までも出しこれを、なかで焼に入れたさうになおちにひとかけてとりにやる。又つけ木へ書くことあり。黒「マウねんしたらう。」くら「マア此どもそやつて見てくんなんし。そしてついでに此のぢびんへ、ふうをな。」黒「アイ。」にたつてゆく トふしよう／＼ くら「コウおうへ、いつかだう書てきた八丈を、わつちが此のおくとこつけへてくんなんしな。見世着にしんさアな。」黒「とうにまけておらア。」くら「ソウ、それでも玉とやらがおらなんしたら、だされなんすだらうね。」黒「ヤアさうはとらの門のこんぴらだ。」くら「しやれおやアおつせん。」黒「そんなら此の下着とこつけへはどうだ。」くら「おらアいや。そりやアわつちがこれと、にたりあつたりだ。」黒「おまへにふたりがきいておきれらア。いやならこつちも

いやだのすしだ。てめへたちやァ苦界十年盛だわたしても、こんな着物が着られるものか。よしのつ
ええ。」〔女〕「しつたかわりい酒だ。」〔里〕トうわの氣をあてて、煙草盆のひきだしの炭團を出し、あけて見て、[illegible]此の酒は[illegible]
やるな。」〔女〕「又さがし事ゑしなんすな。よこしなんし。」トたゝる。〔里〕「ちつと見せな[illegible]
さんたァだがこつた。こいつァ氣がもめの昔じやう寺だわえ。」〔女〕「一諸でもいい。うつちやつておき
なんし。」〔里〕「ウ、きこえた。こんだう繪草紙が名代に出た、色の黒い白魚のやうない、駿河町の[illegible]
目色といふつらのおやおか。」〔女〕「かんにんしてやんなんし。それでも茶屋[illegible]おめへ
よめやァきんきんさ。」〔里〕「おやすつきまさよどい。おほかた大きれ寺めへか田町だろう。[illegible]
にしけくくだな。」〔女〕「こんだうも屆つけにおきさ。でえぶ手ができんしたらう。[illegible]
さ。」〔里〕「手めへもその顔で手ができちや、化物やしきのおんどんといふもんだ。」〔女〕「何とでもお
ひなんし。いいよ。とんだ苦界といふものだ[illegible]。」〔里〕「なんだすかいだ。」〔女〕「[illegible]と聞き
なんし。[illegible]まで氣を[illegible]てくれんさア。」〔里〕「こいつァおもしれた[illegible]
[illegible]」〔里〕「[illegible]泣くだろう[illegible]で泣いて見て[illegible]
のいけだ。」〔女〕「いけねえくらだよ。」ト、すゞりぶたのえだ豆〔里〕「コンよせえ。しやれるなえ。」ト云ふと
また外のしんざう来り、しやうじのやぶ「モシエ、くらの白さん、ちよつとかほを出しておくんなんし。」
[illegible]

ふなんだナ。こゝへ来て云ひなんしな。」新造、そばへより耳に口、「あのね、はかなぎさんがね、『どうぞおあしをートすおかしておくんなんし、あしたお返しまうしイすから』とさ。」ふ「久しいもんだよ。『知らねえ。』と云ひなんし。」里「それならさう申しイせう。」ト出て行く　里「コウ、でえぶ火がおこつた。のぼせてわりイ。火ばちやなら、ちつとたつちへよせてくりや。駄菓子屋のしわりんを見るやうだ。炭を使でかつたと思つておごるぜ。」ト里「日から先へ生まれたさうだ。ちつとだまんなんし。」ト火箸でつくやれをする。折ふしとなりの座敷持のか顔、いろ様、銀煙をおいて色白、うすいもあり、ひつつめのしまだ、文がらでいつた髪、れた客の文を読むふ振、よくするやつなり。中じきりのふすまをあけ、かほを半分出し是れは「里風さん、でえぶちえたれすね。」里「存じんかへ。」いふ「アイサ。」里「なじみかへ。」いふ「はつさ。おそれんすね。そこちつとおくんなんし。」とづけ茶わんを出す。トふすまの間から茶くら「おへへんなんしな。」ト酒をついでやる　いふ、目をねむつてぐつと口をとい、かまぼこに火ばしつゝきぼれをあてに出してやる。いふ「こんやァ、又おめへがたいむつ清の間を役だね。」つれえこつたの。」里「なつごとどこぢやァござえせん。わつちが一ことといふと、ト二ことでけへしやす。」くら「こいつァなかしい。手めへのことを云ふやつさ。」いふ「うらやましいせけえだよ。」ヒシエ、おありがたうごさりイす。またおじやまとやらなれば。」里「もう一ついきねえな。」あぐすかたきは、いふ「わつちだと云ひなんすのかえ。きつい合はせ鏡とはおもへども、だまされて咲く室の梅さ。」おやすみなんし。」トふすまをたてきる。くら「しつたか、いいかげんにしやれや。」ト小声でいふ、いつたいなり座敷は、きりやうによほどいいおそれにて、

おもてむきはうつくしく、しんは中わるし。里「あの子のくびも、かずのこなさきゆでにたといふくびだ。」ふら「あんまりさましなさんすな。おめへに惚れてるんすとさ。」里「氣が違つたさうだ。何ほれて居るもんだ。」ふら「惚れてるりやァとほす氣か、おめへもほれて居なんすだらう。」里「なんの惚れたのほれねへのと、土藏の施主が卵塔場で小言をいやァしめえし。」ふら「それでも絲菊さんに、おめへをとりもつてくれろとおひんしたとさ。あつかましいなウ。あの子が小間物屋の助さんといふをして、しばられた時は面白かつたつけ。あんなきいたふうな女郎はねへ。」里「手めへの枇杷葉湯は棚へあげて。」ふら「おれつちらァ口びるいこつておすか、人の客人なざァ取つた事はおつせん。」里「だうりで、すかもの吉にとはさせた。」ふら「ありやァおでした色さ。まだ小僧の時さ。」里「それ見ろ、もう一ぱいだまされた。何が出ようも知れねえ。そればかりでも左上のたゝきで、江戸がものはねえわな。總ざいの芋なくつて、おなるばかりしてるた時分からそれだから、くらはれねえにすだ。」ふら「知りいせん。みやこがねだれやめて、おつと寝なんせんか。」里「ヲヤおつと見や。手めへのかほは何と云ふさまだ。呑みねええもしねえ酒をくらつて、ひてへを見や、江戸繪圖の川と云ふすがただしてし、これへやつこ。」ふら「コヲおめへ、目がくたびれやァしねえか。おらァもうさきへ寝るによ。」里「ホンニ呆れらア。ぐれんを開かねえてゐる〳〵ぼうずを見るやうに、よく寝てはつかり居るぜ。」ト、これより寝まきをはやおもてのかた火の用心さつし

やれませう、二階をまはらつしやれませう。」ト夜まはりの金ぼうの音さへ遠くなり、夜はしん／＼とふけ、まうつ懸に上下のへだてなく此のひやうぶの間も、いかなる夢をむすびしや。はるの夜のみじかく、ほどなく夜はしらりとあける。の里、目をさまし「こいつァとんだ寐忘れた。」ずに目をさめ、くら、此のさわ「まだ早いわな、そして降るさうだ。」「二階降られちやァらんちきだ。」ト云ふ所へ、まはしなどが、目をこすり／＼おきて来る。「二階だ、銀二か。」「降るか見てくりやれ。」ふる「アイ。」トれいじを出して見て「こまかく降りんすよ。」客「いい居つゞけびより」だよ。「ゥ思ひ切つてゐなんしな。」客「へらほうめ、いいあくりびよりがきいて呆れる。」此の客わかいものに年をふり、安下宿をふつてもらひ、中の町を素見ぶらして、ひた／＼と通り抜け、ともに根を出ぬなた。うと、あと先をよく見て、はおりを脱いでふところへ入れ、咄をばつとはしよつて、いつきんにかけ出す。商に曰く、いう客ふはただの客は、女郎をひいて遊ぶなり。色男と定め、初會などにも、先づ女郎の着物から髪の上をふんでかゝり、少しあまい言葉をかくると、あおにたいなできりつめにして引きたふし、あくびや棒引のもとでにしたがるなり。又これより一だんひくきやからは、水茶やや、土弓場などをはつて楽しみとするなり。或人曰く、小見世の女らうは初會などに、「わつちやア下どもの時は、丁子やに居やしたっけの、扇屋にゐたのと、聞かず語りをするものなり。これは小見世に居るをはぢての負け惜しみなり。たいがいに聞いておくべしと云ふ。

○見ぬかれた手　内は大見世、客は家中もの、女郎は部屋ざしき、名代のある夜。

客、年は二十二三と見え、さく／＼とふとつて、かごやにおもたましをとられようといふかつかう、津川油でかためた中たぼの髪、あか鳶の田中八丈、うらえりなしのふたのあたりすこし油でよごれた下着ばかりになり、葉金の

入りしこともなきやうに、[illegible]を前でおろし、袂の中に顔ばかりになり、待ちくたびれてゐた[illegible]見えあり、[illegible]

うらみ書をよんで見る所へ、[illegible]女郎はたちあがらう、顔は[illegible]すこし色は[illegible]

み「旦那だすまア、あはれ[illegible]いひましたらば、[illegible]には[illegible]でもなき女郎あま、小ざしきにして[illegible]

おうちよし、[illegible]和葉に有つて、[illegible]二階に[illegible]。それは部屋の上[illegible]、ちりめんの[illegible]

ト手にかゝりをまきた、[illegible]だいこの何ぞ、もし切つた[illegible]見れば、[illegible]さしき〳〵[illegible]ていねいにのぞ

いたとほるを、[illegible]

此の女見れば、「でえぼいい色だよ」たいこ「マレ、山(やま)さん、客人(きやくじん)かえ」トびやうぶの向をのぞき「これはせうだ。顔(げん)

御(こ)存じではござりませぬか」客「すゝ、だうあで、きいたやうな聲(こゑ)だと思(おも)つた。ママこゝへ」たいこ「御(こ)

めんだうながら、先(ま)へおいでなされまし。[illegible]でござりますが、たびたびお出(い)でなさるから、ちよつと知(し)らせた

つてはおりませんで、お相手でござります。[illegible]

た「それざとふるい」客「イヤ實(じつ)にしばらく來(こ)なんだが、此(こ)のごろ少(すこ)しなじみたのさ。此(こ)のせつやかまし

いから。」たいこ「成程(なるほど)いづれな。アハヽヽヽヽ。」トつきもない所で[illegible]女郎、ふつと氣(き)

[illegible]何(なに)を言(い)ひつけてもらちのあかねえ、ひきずりづらだヨウ。」ト、いふをしほに立つて、[illegible]たいこ、外すな

[illegible]」ですれ[illegible]とき[illegible]人(ひと)[illegible]」客「此(こ)のこゝは[illegible]一切ないの

さ[illegible]此(こ)の[illegible]、手は[illegible]でござります。[illegible]

[illegible]

[illegible]

大いり難渋やうかんすっ」客「そんな気の通らぬ客は勤め憎からうよ。また外の座敷もあるもんだから。」ト、うるはしまつたやうな事をいひ、「おほきにきやうされ。そこでなさまるとだきにかけ出しさ。こゝへたいこ、をかしい言葉もなながら、ト二かの客をとし日はむきをいふし、かへり馬のだちんに、早く一分くれ参つたらのう／＼といたしやした。」ゐかし、それきへとればおきに内へかへり、あんまもませながら、かゝぶ頼みてくれうにと、こつちでは思つて居る。客はわが通なるゆゑ、た客「ホンニ思つて見れば、半年ぶりであいこ持もふやすだこしてくれると思ひ、なにもいかりをおろして出す。つた。ホンニ久しぶりだぞ」ト云ひながら、二つぶとんの間へ入れおきし紙入を探すはゑ、たいこは今やう／＼一分／＼くれをるなと思ひ、たいこ「これはくらいあんだう。」トまぎらし、はこのほうをむいて、客の手もとを見ぬやうにしてゐれば、客は一鼻紙の間をさがし、ふに一ぺんですつた、手まへぼり大小を出し、客「これはおべさゐにこしらへたが、見やれ。ソレかうするとこれが大の月ぢや。かうするとソレ小の月ぢや。」トからしやくしながら二三まいくれればたいこはあてつつちがけつれ、あいさうもこそうもつきはて、むだ口をきいたことゝおもひ、たいこ「ハイこれは／＼」トいつたばかり、くわいちうし、「ちよつとあすこに用事がごにトはなし半ぶん聞きかけて、そけなく立つてかへる。客は此のたいこ持をかすつてはなさせんとおもひし、こつちもあてがちがひ、さてうぬなとりになり客「ア、新ざうも禿も居ならぬ。ちやを一ツはい呑みたいものぢやが。」ト立つて小べんに行き、かへりにかどをのぞきひして、となり座しきのしやうじをあけ、「ホイ、これはそさう。」ト又床へはいり、うとうとはんぐりをしながら、たばこ呑んだりはなをかんだり、寝たりおきて見たり、あくびの五六十、夜着の内につゝんで、やゝ時うつる、やう／＼らうかをばたり／＼とうはざうりの音、扱は今来るなといそいできせるはたき、夜着ひきかぶり寐たふりしてゐれば、外の女郎と見えて、空しくむかうのざしきへはひり、此の時日はそえて頭のごとくなり、扱はこよひは名代の客あると見えたり。うきをつたらかういうてあゝいうてと、むねのうちにいはんと思ふりくつを、なんべんもふくしてゐるうち、又候足音して、しやうじをさらりとあくるゆゑ、びつくりして又ねたふりすれば、わかいもの来て油をついで行く。もはやこたへられず、はねおきて帯しめなほし、屏風ひきあけてみれば、しきせのよごれたふり袖一まい著た新ざう、いつの間にか来て、枕の引出しをまくらにしたと見えて、それもはづし、簪のこぶまをこかしたやうに、歯ぎしりをかみながら、たわいなく寐てゐるを、かの客つ

めたいきせるの先で、八ツ口の間へわきの下をつゝきながら、三「コレ／＼、おきてくれ／＼」ト新造、うつゝに「ウ、たれだ、すかねえ。ウ、フウ喜八どんよさつせえ。ウ、フロスウ。」三「コレ／＼おれだ。羽織を出してくれ、羽織を出してくれ。」ト新、やう／＼目をさまし、眼を開き「マァ瀬川さん、どこへお出でなんすえ。」三「帰る。」新、こはい「おれはもう帰る。」三「馬鹿らしい、まだ八ツでござんすわな。」三「サンニャ、なに時でもよい帰る。早く出してくれろ。」新「マァお待ちなんし。帰し申すと叱られんすわな。」ト眼をこすり／＼、床を帯ひとけたをひきずりながらにたんすの引出しをきしらしてはおりを出し、あなたの女郎へおしらせにゆく。女郎「ぬしはマァなんだえ、今じぶんか。」三「やかましい。おのれが留つた事おやないか。ふといお女郎だ。いひ分があるならいはゐ。うぬがやうなくさつた女郎には、云ふ口持たぬゥ、、若いものにはきもしやすえ。三「茶屋の来るまでまつてはゐぬ。帰る、と言ふなら。」女郎「それだつても、用心がわるうござんす。きつい腹だねやうさ。」三「用心もへちまも入らぬ。何でもかへる。おれが足でおれが帰るに、だがなんといふものだ。そこを放しをらう」ト、よ女郎かあむしやくしやばら、こればかりになる。女「マァ静かにしてくれなんし。外の客衆がやかましうござんすよ。用があんなさんすなら、寝床にけへし申しんすから、マァちよつと座敷へ御出でなんし。」三「、お云ひなんすから、マァお出でなんしな。」トむりむたいにひきずつてゆきて座敷の中へすわらせ女郎「ちよつと見な、こはい顔だ。」ト三、このとほりなれば、はな」とふみすえ、しまつておきなんし。」三「イヤ／＼、しまつて

はならぬ〳〵、どうでも歸らにやならぬ」ト立て、女郎「マア聞きなんし。此方もわつちやアなんと
おもひしたが、おまへは寄しゆとは思ひせん。ひきする、[illegible]逢ひんすと、思ひしたがやないかえ」トひな
たへ、ふたりをあの[illegible]、[illegible]、かへる〳〵、そんな手じいくいおやすいの」女郎「其の立つ
たばこ入を取りわける。

事があるなら、一ト通りわけを云つて聞かせて、なぜくんなんせんえ。いつそ他人がましいヨ。」ト云ひな
がら、[illegible]名代の客衆は早く歸して、主とゆ
[illegible]二人　客「イヤ〳〵、かへしてくれ。いやだ〳〵。」
[illegible]くのと話もあるにとおもつて居た、わたしが心いきも知んなんせんでゐる」
かへらにやならん〳〵」　女郎「[illegible]心いきを無にしなんす。なぜ男はそんなに氣づよいものだナウ。」
客「イヤ〳〵、どうあつても歸らねば[illegible]」　客「イヤサ、
[illegible]はやいうになる、　女郎「[illegible]、きつい人じやらしだ
コレサ」　客「コレ、いやらしい事よしてくれ。かへらにや悪い。」　女郎「それほど
歸りたいかえ。」　客「[illegible]　[illegible]んなかるれはどう
するこ」ト、めろ[illegible]　新造「[illegible]まつたと思「すツ馬鹿らしい。今の騒ぎでゆびの輪をおとしたさ
うだ。」

評曰く、此の夜の名代の客、たかれうけんにも色男ならんと見ゆれども、左にあらず。三會目
の客にてぶ男なり。しかれどもこゝろのきゝたる客なれば、たかなりつて居るゆゑ、まづ三會めの

客をつとめ、もはや時ばなの三兩もしめて來たゆゑ、大の平氣なり。此のうちを一兩ほどやの手の時かりをかへし、二分は小間もの屋の內金にわたし、二朱はかし本やの拂ひ、一分はたんまの心づけと、心のうちではさん用しながら、他にんがましいとは手のあることばゝ、感心なり。ふだんでかのたんになつたら、泣いて見せることなるべし。いつたい人をこふりとさせるふうにて、なか〳〵色男に惚れるたちでなし。又なに事にもこぼきたがつて出すぎるゆゑ、二階ざうでは憎まるゝたちなり。かう云ふ女らうはたてごかしにして、こつちの爲にすると又よき事あり。むかうづらへまはしては、うんさきやつなるべし。或人曰く、此の女郎は八朔の白むくも、あとで又何にか染めて、二度はれをするたちだと。ちがひはなし。また其の手ではゆかぬといふ客は、いつでもむくのなり。或人また曰く、此の客はけいしやが三味せんをひくと、必ずきせるで茶碗をたゝく人なりと云々。

○いそは〳〵する手　中三の女郎、茶やの二かいで色男に逢ふしうち。

作者曰く、草稿出來ありといへども、事繁ければ紙數の多くならんを厭ひ、是に於て省く、追つて後編に著はすべし。

○眞の手　世界は大みせ、女房にもならうといふ女郎、しようといふ客。

右者、[illegible]大湯をしまひますと、一ト二寺中をふれる。いつたい天氣のよ[illegible]女郎、中三にて、歳は二十かをかへし[illegible]い日の晴つゞけの座敷[illegible]二三、少し心さわがしく、

身じまひもせず、ねみだれがみのまゝ、ねりのきれをひきさきしはちまきをして、髪のうちにいれて居る。客、としは三十三四、すこしにがみばしつて、いやみのないいろ男、下着のまゝ、そのわきにかたなぞたてゝある。女げいしや、のメリヤス、「上きうつら／＼とおくる日の、めうと事してあそぶ此のさと。」ト、ひきしまふ。のだいこ「ヤンヤア。」客「リア一つ呑みな。」けい「チト是れはおおさへ。」客「マア／＼。」けい「さやうなら。」ト三味せんをかゝへて居ながら、さかづきをとる。茶や男つゞく。けい「コウ貴様、今朝どこへいつた。毘沙門様の踊りに見かけたよ。」女げいしや、山谷の毘沙門をしんかうして、朝参りする事はやるなり。常通は御ぞんじの事なり。ちや男「客の所へサ。」けい「フウ。」たいこ、懐紙の上へ置きしばちをとつて、ひくまねをして「こいつアいい木だ。」さうけを木と云ふも通言なり。けい「何さ、あんばいがわるうござりやす。いつてえ河東のばちだ。」ト此のうちよほど時うつる。たれか茶やの男をよび出す。これはけいしやにむかへのかゝつたのなり。○げい、しらぬふりをして居る。茶や男、きやくの耳へ口、「あの子をモウけへしませうか。」客、小声で「けへしや。」客「ときにモウ箱をしまふと云ふ法にしよう。」たいこ「チト幕にしてもよからう。」ト云ふ折ふし、そばへ置きし三味線の三の絲ハッチリきれる。けい「モシ、通な絲でござりますね。」ト云ひながら、三の絲をゆるめてしまひ、新なのをかけ出す。此の間五つ六つすてぜりふ有り。トヾ、たいこ、けい「さやうなら、御きげんよう。」たいこ、たちもどり「おいらん、おでえじになせえしよ。」客「おいらん、かの物がとんだよく漬きましたよ。」ト云ふは、はだなのなまづけなり。「ちつと上ゲ申しやせう。」女郎「フウ。」トばかりいつた　客「みんな御苦労々々。」ト、煙管をはたく。たいこ「ハテ、こゝへはき物を置いたが。」茶「トツト、こゝへかた附け置きやした。」たいこ「これはお世話。」トみな／＼かへる。中居膳をはこび、屏風のそとへならべておく。○禿、髪を毛筋立一まきつけ、丈ケのみじかいしきせの布子、油あげにしたやうによごれたるを着、そでを帯へはさみ、ばうずの禿とくるひながら、「なんだといいわ、うつちやつておかつせえ。」

こんたの世話にやァならねえわ。」トたるき　客「松野、いい所へ、ついでくりや。」ト茶わんを出す　女郎「酒によし

なんし。久しいもんだよ。」　客「うつちやつておけえ。呑みてえから呑むわ。いい子だはやくつぎや。」

客「およしなんしな。」トおいらんの顔を見てつぎかねる。　客「つけよ。」　女郎「そんならお出しなんし。」トこうしをとり、ねざ

の客、のみとうにするを、女郎、きせるでちよつとおと打、酒「おへねえ氣ちがへだ。」ト小さい[illegible]五枚出す　「それこいう

の手あぶりの中へこぼれる、客、袖で灰をあふぎながら、ほうばい女郎、これも中三、よそぎれのむくを着、身じまひをしかけて道中に来

じいしに[illegible]トそこらをふく折から、えりへ許り白粉をすりこみ、かほはまだおしろいなし。しやうしを半ぶんあけて顔を出し

「そこに、うけたまはれば、御とうりうださうでござんすね。お樂しみだね。うらやましいヨウ。」ト云

ひながら[illegible]り、[illegible]　客「此の天氣のいいに、居つゞけも氣ちがひのさただねえ。」[illegible]眞實

にて[illegible]て居る　女郎、[illegible]ところから「コリヤァ、山から里だね。ねしやァみせカァ」

さんすわな。」ト[illegible]女郎[illegible]手をだしてとり、　女郎「ちよつとうしろをむいてお見せなんし。ねしにやア

[illegible]「いいえ。けふは出番の衆で約束さ。」

手がら[illegible]似合ふよ。」[illegible]けふいつちやア、都合がわるいけども。」で[illegible]

さけはこ[illegible]いえモウ。」かぶりをふり、ト顔をしかめて「モシエ、しんじつだと思ひなんしエ。ぬしが居なんすと

聞きいしたが、身じまひをしかけて参りんした。たんとおしげんなんしヨウ。」ト、立ちさ[illegible]の客すそを引

[illegible]つと道[illegible]せえ。花がちる。」[illegible]「[illegible]あんたこれ[illegible]文句をおつせえな。[illegible]はいよう。」出て

ゆく。入りかはつてしらはの新ざう、かみばかり立派にゆひ、おし[illegible]

[illegible]のよこれた[illegible]を着たなり、　「モシエ、おいらんの[illegible]

新「モシ〳〵、おいらんの所へ。」女郎「なんだな、やかましい。」新「あのね、初山さんがなんぞおくんなんしつけ。」女郎「なんぞみつくろつて持つていきなんしな。」新、茶やのおくり物なぞとりあつめ持ち行く、所へ、また一人新造来り「モシイ御無心ながら、かてえ紙を一まいおくんなんしな。」女郎「いいきせんな、色々なことを云つてくる。」客「サア持つていきな。」新「おありがたうござりいす。」（ト出てゆく、たからかに、）客「モシ花さきさんがおつせえす。あこつきの着物をどうしなんした。』とさ。」新「廊下れんじへほしておいたよ。」（かくて早みせをしらする鈴の音、［illegible］わらわらとして昼なかの耳をおどろかせ、きふにさわがしく、みなみな見世へ出れば、三味番の新造計あとをかた付出す、まで こなたの書［illegible］の時分は、夜ふけよりも、かへつて二階はさみしく、哀れなるものなり。扨此の座敷はひつそりと成り、昼風の中に二人としむかひ、）客「コウ、銭助が（茶や男の事）けふはでえぶ、手めへにはむいていつたぜ、おれに羽織をねだつて置くからだ。」女郎「ソレ見なんし。あそこの内の者は、すかなくつてなりいせんよ。なんぼ此の頃ぬしが都合わるくつて、何かがいきとゞかねえといつても、あんまり現金でござんすわな。わつちや口惜しくつてなりんせん。」客「さう云ふ気でも有るめえ。それはこつちのぐちだ。」女郎「何さお聞きなんし。頃日は座敷の新造衆がいつても、いつそ神がりんすとさ。それだから附金も、てえてえ気をつけておく筈ぢやアござんせん。此のおうもわつちやあそこの見世で、二度かんしやくが起りんした。」客「うつちやつておけえ、手めへのやうないつこくを云ふものはねえ。かけでもうめばどうでもなる。」女郎「ホンニどこい程残りがござんすえ。」客「ナニ、十両の上ある。わきの内だと、二階へあけるこつ

おいらねえ、それだから居つゞけなどは、まア、存外知らねえはまだに二十や三十の金につまるとは、おれもはかなくはなかつたに」ト、少し女、うつむいて物いひ「考へれば考へる程、今まで葉王に遊びつけたんしたから、今の身になんなんしては、さぞ面白くござんすめえ。それといふも皆わつちゆへ、さぞ憎うござんせうねえ。あいそうがつきんすまいよ」「愚痴な事を云ふものだ。まだ此の上勘当をうけて薦を着ようとも、一つ所に居ればほんまうだ。しかし女郎と云ふものは」「さ、まだわたしを女郎と思つて居なんすかえ。わつちやもうおかみさんになつた気で居ますものを。わつちはふびんだと思つておくんなましよ。それはさうと、それならかうしなせえ。わつちがわるいはうの夜具をやれば、しまいばおかねはできやせう。そしておめへの客人の断りも、さいはいでいるには来るはずでござんす、外にもそのでいるに、来た所でござんすれど、それさへ上へ申しんすから、わたしもあつと都合しなんして、せめて暫くおやんなんし。わし故ならおめへの身は、どうなつてもようござんす。よしや年季をへしても、もしそれ心さ。これ程までに思つてくれる心は、死んでも忘れやアしねえ。したがアなりだけこれで都合し、見ようなら、丈夫の上の相談にしようこ。一時とも早くがようござんすよ。頃日あやかす事、わしへそれは有みにて、しかしと意見をしいしたが、人の意見で思ひ切られるぐらゐなら、わしをかうぶふ身になりはしませぬ。わつちも産んだ母さんさへ、見かへる気でござんすものを。頃日

お妹さんが来て、いつそやせたといつて、涙をこぼしいしたよ。中の間でも、わつちには呆れけへ／て居いすとき、ハテもしをいに上がねえときは、ふててくらがへと覺悟うして居ンす。命までは賣りんせんわな。」客、此のうち始終ふさいでものいはず。 女「ア、モウいや／＼。何かにつけて頃日おやァ、一日も早くこゝへ出たうござんす。ム、ム、よしとわつちは、悪縁と云ふのでござんせうよ。そして、お妹さんの病氣は、どうでござんすへ。何かにとり紛れて申しやせなんだ。忘れずに持つていつておくんなんしよ。堀の内さんのお張護符を戴きにやつておきんしたよ。入谷の鬼子母神さんへもぐわんをかけんして、などとつひから精進をしんす。いつそ苦勞だよ。」客「おれもよく／＼の不孝ものだ。お袋の病氣もおれが事を苦勞にしての事だ。それにかう流して居るなどとは、ホンニよく罰もあたらぬものだ。」女「いろいろな事を思ひ過すと、實にわつちも早く死にたうござんすよ。」ト、男のかほへつめたいなみだをすりつけ、なみだはら／＼。をりふし向ふ二階の方ひるあそびの客のざしきにて、三下り「思ひ切らしやれ。もう泣かしやんな。わしは泣かねどそれこなさんが。」客「ア、だいぶふさいで来た。サア／＼外の話にしよう。今更いつたとてうまらぬ事だ。」女「ホンニそれもさうでござんす。命がものだねでござんすねえ。モシエ、錢助がねしにねだつた羽織は、わつちが方からこしらへてやりんせう。」客「ウヽ、そんならマアさうして置いてくりやれ。」女「早くやらねえと、また口が悪うござんすから。」客、へんたふなきゆゑ、女かほをのぞいて見て、「すやぬしやァ寝なんすかえ。おきなんし／＼。」

「エヘン〳〵、ゆうべからまんじりともしねえから。」女「否だよ。
サア目をあきなんし、あきなんし。」客「コレサ、を
おむずら　一女「そんなら勝手にしなんし。」一　女「こうあやまつた、たしかに
ねねえ、ねねえといひ[illegible]しおやア[illegible]ねねえ。[illegible]しなぜこねえに[illegible]にせた。[illegible]
一たせ[illegible]てくんなんしたえ。わつち[illegible]、いつそ[illegible]だよ、[illegible]
やあつかましい。」　くれ六ッの鐘ゴオン。作者京傳曰く、

[illegible]

評曰く、[illegible]つて[illegible]のつき、[illegible]客[illegible]やうになつて[illegible]では、[illegible]
どこともなしに[illegible]べし。此の身になりても[illegible]、[illegible]をよぶは、[illegible]
の[illegible]とおもふべし。かうなれば、[illegible]
[illegible]いてよこすやうになり、いつとなく、其の客[illegible]
[illegible]でかうつるもののなり。又[illegible]の客を[illegible]、[illegible]されてしまい、
終には[illegible]となる[illegible]すれば、[illegible]
り、世[illegible]やうな氣になり、[illegible]ばかりなりて、人ばかりうらみじみて来て、[illegible]

つく面白く無し。女郎の方からも、もつと内にも居つきなんしなどと意見をし、客のはうからも、隨分はやく客をつとめさせるやうに、手をなしへこやることなどあつて、女郎も歸した翌日は、ふさいで飯さへも喰はず、役しふなもひくくなり、客もうちへ歸つても、御持佛の阿彌陀さままでが、女郎の顔に見ゆるもいとをかし。いづれ外から見ては馬鹿らしく見ゆれど、その身になつては、もつともな理窟もあるべきか。嗚呼、されば捨てがたきは、此の道のまよひなりと、變[illegible]國のしれもの書きしにあらずや。

予俳諧にくらく侍れど、此の小冊を述べ終へぬる時、ふと心にうかみたるまゝ、こゝにしるす

西行も未だ見ぬ花の郭かな　　京傳

自跋

東坡先生曰く、男女の淫楽は互に臭骸を抱くと。宜なり、可愛とおもふ姝娘も、最愛とおもはるゝ俊男も、肚脯も鮮瓜も悉皆臭穢の貯れにして、薄皮の皮をさらば、誰に高慢ありてものいふべきには、白骨となれるすなり。荘子が枕とはなるとも、昔もとの紅顔にかへるべきや。これを見てはあなあ〳〵と悟りし世男も有り、御用心なゝゝと示したる坊主衆も有り。美女美男憧憬にてふと逢ひなな、とはまことに無し。嗚呼こゝを思へば、一部の妄作といへども、悟道のはしたるべし。これもそれの京傳山東館にしるす。

傾城買四十八手 畢

京傳予誌序

近來世に行はるゝ經典餘師と云ふ書を閲るに、鹽梅よしのおでんより上手をゆきたる美味にして、盲目の杖闇夜の提灯、愚者な八兵衛をも明るくし、土手の八町をも照らして、德にいるの大門口に至らしむるの早鑑輿は、これにしくもの有るべからず。然りといへども乾坤でかく、獃呆組の輩、徒は、馴染の文ほどありがたがらず。妄作ほどは手に觸れしず。固や小人にして大道を學ばんは、鰻を割くに鰹の刀を用るがごとく、これ等には難からん。彼等をれうる庖丁には、鎌作者が相應と、奮おつ揉ってこたちあがり、已に草紙を編りけり。たれ大樂通用とは申せども、永樂通寶の位にもあらず。閑後申と號くれども、兼好法師の類にあらねば、戯作の四書とは恐れあり、顔押つゝもはづかしけれど、頭巾と見せて頬包り、妄言から導く木曾海道近道の抜裏も、至る所は四國の室、鰻の店よりかんばしきを、一度嗅いで賞に入れ。虚々邑の瓢介等が、鼻毛にとゞまる眼玉こい〳〵、そつちにや遣はねと云爾。

時

寛政二年庚戌孟春

山東庵　京傳自序

戲作四書京傳予志目錄

○大樂

大樂は月雪花をおさきにつかひ、色と酒とにたのしんで足ることを知らするをいましむ

○通用

通用は質物の通用物の事にして、ひどいくめんの女郎買をしるす。

○豐後

豐後はすべて江戸けいしやのこんじやうをうがつ。

○申

申はまうしんすの申にして、おつりきな所をことゝす。

大樂

堅衆曰、大樂功者之虛言而覓倘入レ慈門也。於レ㨿可レ見二通人爲レ樂氣質一者、獨賴二金銀之損一而貧乏次之客者必出レ是而迷焉、則應レ乎氣差一矣。

それ大樂のうへをいはゞ、春は品川の汐干に遊びて身代の干潟となるも思はれず、戀の淵の深みに嵌り、てれん手くだといふ惡魚のゑじきとなつて、初めて驚けども遲蒔なり。或は上野御殿山飛鳥山の花見に太鼓藝者を引連れては、諸行無常の鐘よりもやたら無性に散らしたる紙花の下りを食らひ、武家方の血氣盛んなるは春色に心うごき、初めはよい仕儺にて隨分錢のいらぬ樂しみと出かけ、一日金一分の借馬に鞭うつて遠騎の遊山も、かへさには忽ち心の駒の手づなゆるみて、大門口につなぐ。はて何の家、櫻は寛濶の昔に變らねど人同じからざる突出しの君が、名開きの蒸籠饅頭の山をなし、嬰ひこんな所へうゑられて、生きた花に見らるゝ花の苦しきぞかし。目に青葉山時鳥初鰹魚、かつ[illegible]の聲に始めて心づき、「もう夏が來たさうな、今日は幾日だ」と禿に聞くは、居つゞけに氣ゐ

けのした客人と見ゆる。其の居續けのるすは上を下へかへし、とゞのつまりは二ばん番頭がむかへに來て、しかつべらしく「左樣なお心ではございませなんだに。」といふに、こちらはやみ雲にて「おきやァがれ、そんなまじめを言はずと、マァ一ッ呑むがよいに。」「イエ〳〵左樣な氣せんではございませぬ。」とはいへど、したがはすきはら御意は吉原、一ッのみ二ッのみ、つひには酒が人をのんで、宿の事はエヽまゝの川へ流してしまひ、氣違ひ水におぼれて共に碇をおろし、木乃伊とりが蜜人になつて遊ぶもあり、夏は墨水に游船をうかめ、江戸藝者のひつこ拔きをつかみ込み、だんな獨りに神八人、此の人數舟なればこそ涼みかなと口ずさむ側から、三絃門ちやうでひき立てての大騷ぎ、さい前より陸に此の舟を見て居たる隱者と思しきが「嗚呼愚なるかな、花飛び蝶驚けども人知らずと詩の意はうたへども盛者必衰の道理をしらぬ其の筈ぢや、千住の悪臭をかいでさへ、女は臭皮袋と云ふ所に氣がつかぬ俗物ぢやもの、あの樣に騷ぐもみな臭骸の戯れぢや。眞に凡夫ではあるぞ。」と憂世を悟り顏なるも、實は錢なし組の負けをしみ、金持にはそんなあいつた思ひはなし。物に感ずるも根が己が心の欲する所にしたがはず、志を得ぬ故の述懐ぞかし。此の隱者も錢があらば生者必滅の場所へ氣もつくまじ。陸から舟を評するも岡燒餅の謂れなるべし。昔は、日もくれぬはや舟にのれといひしが、此の舟は、日もくれぬ早く舟からあがりて呑み直さんと、神頭の何某が水宅に下知して隅田堤の下に

こぎよせ、中田屋かむさしやか、但しは舟をもつと上せて、眞崎の崎玉屋といふはらか、涼みといつは、これも酒色の二つにのみ止まるなり。文月は郭の燈籠五町を照らし、もし總角に棒が當るとも、なかノヽ闇夜とならん景色なし。軒毎にともしつらぬる提灯は、客人の身よりあくがれ出でし金玉かと疑ひ、唯人の氣をつりあぐるぜんまいじかけには、萬客の目を驚かせ、さらに内しようからくりと思はれず、絹張の燈籠はすいて見ゆれど、女郎の薄情なる胸のうちは少しも見えず、二のかはりの硝子細工は、名代を逆につるしたるかと思はる。これもその起りは、正徳の昔中萬字屋の玉菊が追善の爲にとほし初めしなれど、今はそれにひきかへて、衆人を迷はす煩惱のなかだちとはなれり。近來附合の句に其の意をいへるあり。去るものはうとく燈籠のさいく過ぎと、まことにむべなり。十五夜の月見には高きも賤しきも、今宵の月をめでて、詩を作り歌を詠じ發句を按ず。又此の夜色里の賑ひはことにさらなり。此の日深川八幡の祭禮にて、土橋仲町三櫓、新古の石場にいたるまで一年の大紋日、月見と祭禮とを兼備したる遊び、千日にかつた茅も一夜にほろほしてつけのほせとなり、もとの百姓となる店者あれば、百日の說法も屁一ッに放つて院をひらくお寺樣あり。これぞ眞如の月にあらで、つひには隱居の月見としられたり。旅行の月も一風流と、南驛の傀儡にうちこみ、兩松坂村田晋叶己が樣々介六の氣位になり、髪のはけの間から安房上總の月見て興じ、田毎より手事を考へて意

見する伯母捨山、あすが日業をさらしなふでも、質屋ぬ顔してくらすは損と、氣はむしやうに高輪の夫にかまはる鏡金散らして遊ぶもあり、其の外端々のいさゝかなる色里まで月の光のわりなくて、たゞれ相應の月は見る事なれし、而後の月は今さらいふも愚かなり。又海晏寺正燈寺の紅葉見には、ふしぎや今までありつる息子、とりなり化粧の見えぼうして、遂ては其住む里にこけてしまひ、平常の鼎よう田の紅閨の樽にくるまる、樂しみ又忘られず。冬は雪見とて案様内に居火燵、うはきにあらぬことの事、昔の新安にまけぬ氣で、聞意の彼る場へ雪見にころぶ所までといふ何によくふかなし。こじまろ崎より向島のことも浮舟の心意氣も見ゆるなり。春秋の角力、三ツの戯場、梅田の梅見、江の島の月見、品川の汐狩、眞間の紅葉見、龜澤の雪見、四季折々の樂しみはかぞへ盡しがたし。これ天地と云ふ細工人の大からくりにして、樂しみ盡くる事なし。然れども樂しみは月雪花のみに止むと言ひながら、つまる所は女色程の樂しみはなし。月の清きとて女郎の胸の鏡にしかず、雪の色白なりとて抱いて寢た例もなく、花ものいはねばなつくしとて口吉もならず。それよりも眉は月をまかし肌は雪をあざむき、姿は花をはぢらせ、雨に傷まず嵐にちらぬ美人を見て樂しむ程、いかんぞ外に樂しみのあらんや。花より團子色氣より喰氣とは、飢饉年に生まれた人の言なるべし。これ無量の味ひある女色の極意しらぬ故ぞかしと、衆人皆是れに同心にて、今時の樂しみを見るに、つまる所みな女

色へこけるなり。昔も人情にかはる事なく、夫子衛の君が女にのろきを見て、我いまだ徳をこのむも
の、色をこのむが如くするものを見ずと曰ひしなり。兎角捨てがたきは此の道の迷ひとしられたり。
然れども富乏のわかちありて、譬なる樂しみしたくても難し。花がうつくしいとて藪島山に居續けも
ならず。月の明らかなりとて引窓から見ては興もなし。裸で雪も面白からず。されば樂しみには好色に
目むるとはいひながら、つまる處金なり。金さへ潤山なれば愚かなるも奇才と思はれ、醜しきも貴く
見え、錢に一の[illegible]に通じ、[illegible]から前を出し、石をうつて羊となす仙術よりも、はるか神やこで[illegible]
にえんに[illegible]、[illegible]手錢は神[illegible]とぼす。これ金術の勢ひとしられたり。然らば金なくては樂しみはこれ
なかと思へども、[illegible]して然にあらず。顔淵は肘をまげて枕とし、樂しみ其のうちにありと大に樂しく
しが、是を思へば樂しみは又金にもあらず唯心なるべし。その心の樂しみといふは、世の常の俗物に
は得もしと難しければ樂しみは其の身に應ずる處あり、一暮に暮す日もあれば、酒に酔ひ夜中を
て[illegible]、これも己が好くのみの樂しみなり。又女に心中してみたらいのも、つまり樂しいのなう
じたる[illegible]、又講中買うて[illegible]の[illegible]見ながら、女房ととも二一杯のみて、嗚呼[illegible]
の天徳寺[illegible]、寝てのくるも樂しみと思へば樂しみぞかし。金持とても樂しみは極意なら
ねば、氣鬱を散ずる爲に樂しみを求めて、多くくるしみに至るなり。しかれば大樂の樂の字において

得る事あらばあやまちあるべからず。昔世の諺に、親苦勞する其の子樂をする。孫乞食すると、ま人の樂より苦と慾との二ッを失ふいましめの言なり。これ宜ならずや。昨日まで日本一の凉みの場處ともてはやされ、貴賤群集したる地も、今日は忽ち一河の流れと變ず。これ滿水ならぬ盛衰の世の中を天の然らしむる處なり。ほんにさうだやナァと歎息するも、己が老込みのしるしか。

大樂　畢

通用

意氣直何

昔棠曰、無貝之謂通、不通之謂用、通者半[illegible]之[illegible]乏、用者[illegible]日之[illegible]入、其[illegible]乃[illegible]、永年中通[illegible]大[illegible]、[illegible]其[illegible]、而絶也、故[illegible]之[illegible]文以[illegible]格子。其子[illegible]黒[illegible]、中[illegible]逢其[illegible]馬二千里[illegible]之[illegible]苦界[illegible]連則恨[illegible]。（[illegible]下略）

夫れ通とはなんぞ。列子いへる事あり、[illegible]を以て人にわかつ、これを[illegible]と謂ひ、財を以て人にわかつ、これを通人と謂ふと。此の詞これをわけて見れば、よく今の通と称する者に当れり。然れども金銀はのろまな奴でも自由に持つて居るなり。[illegible]は実に得難し、唯通と野夫との差別を知るを以て通と謂ひ、通と野夫との差別を知らざるを野夫といはんか。予こゝに通用の二字を以て此を[illegible]こたんを[illegible]して風諫せん。夫れ万事を[illegible]といひ、[illegible]を自由にせしめて通といふ。是れを以て考ふれば、千万里の外までもよく承知するを通といふべし。又[illegible]の前に[illegible]を通といふ。然れば初めより[illegible]

京傳予誌通用

までも全くして、いきかたのわるき事なきを通といふべし。如来に三妙六通あり、并に圓通あり、衆の仙人も通をうしなうては、下界にはけと笑はれ、狐も通力うせては麹町の市に晒さる。吉原通深川通芝居通といふも、よく其の道を得たるをいふべし。又用の字をいはん。天地全功なし、萬物全用なし。又人に四用ありと。人用ゐらるゝ時には、下女も忽ち御新造様と仰がれ、用ゐられざる時は麒麟も牢人の古着に包まれ、牡丹紅葉の類となられん。又傾城の言に、金銀を約束し、紋日物日をたのむ、これを通て用といふなり。また急用事と書きたる文に用のあつたためしなし。酒屋の御用々々の外車留り、これ等にはもつとも理なし。又通用とつゞく時は古物の通用物のことなり。これについて頃日一ツの奇談あり。爰に長徳を有といふ者あり。其の身代は飯器に車をしかけるくらゐの暮しなれば何くらからず、一盛りには傾城買ひに身をゆだねて、花にめで月にうかれ、雨にもしのび嵐にも通ひ、相方の鼻ひくからねば宿の家名を高しとせず。忌日の墓の燈火より、大晦日の掛乞の来る頃まで、月雪花に三ツ蒲團の上に在りして他念なかりしも、たゞ世はまる事を知つて而して後、世に隠れ住みて閑暇の別業にひきこみ、孤獨のくらしも世の味にすねたる處なるべし。されば昔とつたる杵柄の三味線も、心の隙だによければ、うは氣の調子あらはれず、浮世を離すコロの書に結び、連理も心やすければ、ひとしは住吉屋の煙管に心のやにを通し、小人閑居して不善をなすのいましめを常にわすれねば、か

としやくに片肌をいれて御下におちつき、胸のいれほくろも外山の霞にやさしく、だんだんにきこえてなくなり、細ぬきあけしもいつしか角とれて、ゆたかに眠る手枕をおとろかすは誰ぞ。時宗にあらねど、新度が幽靈にもあるまじく、時ならぬ逆い水鳥とも思はれず。夢か現かと首をあぐれば、こはそもいかに、異類異形の怪物あらはれ出でたり。鼠を追し家うことき、聲あしき聲へんなく、鵺鳥の鳴き霜鳥をつらぬて、鳥有は一目見るより魂も、魄も天上へ飛んで、更に人心地はなかりけるが、夜の化物のうち、頭と覺しきが苦しげなる聲して申しけるは、「いかに鳥有、かたるべき事あり。我は壽永の昔西海に亡びたる平家の一門にもあらず、化物屋敷の隊將でもなく、貨物の精なり。世の中のたはけどもの爲にぶち殺されて鎌田の泥をうけ、七ツ屋の藏にしづみぬれて浮みもやらず。さればあへず、逢ひ時ることはやら八月に及べり。さる昔より賽と云ふ物なきにあらず、戰場に入質あり、宮禪に而質あり、借金を目におくとは、女房が自慢そめる時の捨言葉にして、清水の舞臺と同日の論なり。昔ころ極樂の上人とかや、十念を質におきたる事ありしが、貸主十念のうち一念をもとですぐ東に五の上人、仕舞九念のみ申しける、よりて九念寺と云ふ寺號、何時にか今に殘りたる由を聞く。しかれば權の何に便と云へり、文露と云ふ字を質に置きたる連歌師もあれば、風流の友ともなれり。古人、顔子は己が名を目にあてたる例あり。鎌田兵衛正家は黄金作りの太刀を、相州鎌倉の海中へ

質に沈めて、軍の利運を龍神にくじかれし事あり。龍神これを感應して彼の太刀海上に浮み流れしとかや。これ質物に流るゝといふ言殘りしは、此の時よりの事なりけり。今に其の所を質利ヶ濱といふも此の所謂なるぞかし。又質草といふ言に由つては、袂の上借袂の下質あり、或は燕と鷹の入換へ物あり。天地も又質屋の度をいはば、置主受人のなき質物をとらず。大事盗人は闕所、鼠食ひは置主の損と、損料に正しく記す。或は質に曲ぐるといふ言あり。是れ十の字の尻をまぐれば七の字となる、是れより起りしこじつけなるよし。七ツ屋としやれるも則ち此の所以なり。それも他に遠慮ある時は喉のびをまげてゐすればそれと悟るなり。しやれすぎたる凡夫にあらずや。唐土にもありと見えて質店を印子鋪といひ、質物を典貨といひ、質札を當票などと云ふ俗語あり。固より我々は持主の身代りにたつて憂きかんなんをこらへ、火急の難儀をすくふものなるに、今は己れ放埒に身をもちくづし、動ともすれば我等を苦しむる事ぞかし。或は女郎を身受けせん爲に、親から讓られし家藏を家質にいれ、其の又女郎も間夫に狂ひて素裸となり、韓駒下駄、褌まで質入して、苦界十年損料屋の爲に苦しむあり。或は初鰹魚の名代に袷を苦しめ、こゝが江戸ッ子の尻の穴の廣き所と、隣家の嘲笑をそしりながらこれを喰らひ、又は一人の娘を人質に入れて博奕にうちこみ、又は五臓の煩ひなる夢をたのみて富の札を買ひ過し、主人から貰ひためたる仕着せの布子を殺すもあり、武士はなまくらたらぬ

大小ともまけ、出家はすべな心の偶像までもまけたりし。頭を置いてうける事なきは、恩をうけて恩を知らざるが如くなりとても、我々、つらくつならず。利ありけるされた便もなければ、此の身は頭にくけさかれ、つひに獄は阿原の下所にさらされん。此の積みたはふさんには貧乏神の末社となり、彼の思知らずの徒が、皮膚にわけいり、甚く是等をくらもせん。汝は僅いも骨をも永劫の介なれば、此の事をかたるのせ、世の中の不可者共に傳へて讃ひうけ、もとこん静のなき開設言は書かせやうに心得させこそ、頭陀運命の寄則大王にしはしの暇をこひ、これまでわらはれ出でたるぞや」と、またてゝくよまだすが、かく語すことしにたらずとして、御國にあつた菊りのことい、ふけのくこうせにける。真坊も始めにはとは悦ちたかりしが、自宿の前堂に進みし寺寺は斯かる事になげ、夢等が地獄、なかなか面白く、有難くおぼしくぞうたりけり。或の貧弟の際がいわし時と、さし金銀の金用、おおさ年を置くとも、うける心にはなきは、恩をうけて、ひとまた藏は日かれし恩をしらぬに高なくし、其の時は必ず外の難者となつて、必ず右がずつてきることに疑ひなく、金を持つたら術をめる、面にかたまし間には雨、日に置いても溺れはせまいと迷へども、入りなればなるなり。和主のしかしがらん、つまる所は欲くて、いふは易やしの字の一句に言葉、事が上手にてこそ、女房をしふたのしくがやや。

通

用

豐後

意氣席中

樂禪亭主

此長綴柴乘而、時語之不眠、何時乎
有時日待夜明、未若閑乎
人不聞而行、不慚素人乎

土佐上下に外記節、中比野暮に表太夫節、豐後可愛や危禪といひしは、宮古路が生まれぬ前のことにて、今は土佐節も用ひられず、外記は何言ふ太夫もなし。繁太夫の半太夫までが其の名残とたり。義太夫は今に盛んなりといへども、是れと好不好あり。豐後は嫌ひなく、常磐津の津な由さまで富本の名残し、世の中此の一節にとゞかぬ處なく、上は玉簾のうちより、下は藪の戸の隠居に至るまで、あたら者といふ事なく、彼方の廣間此方の座敷、常磐津富本の表札なき所なく、唐子の顔の紫弾には太家の響をなさずれ、隠居婚出の帯にて浮落の席をいたさする。豐後に豐後節

京傳子之豐後

商ふにこゝへ此の音聲をうつす。これはまた名による故ともおもふべきに、蝶々とまれ放し鵞くまで
が、此の淨瑠璃の節あらはるゝぞかし。それ淨瑠璃は信長の時代、小野通女が牛若丸、淨瑠璃女の事
を作りしより起りたり。これ人の知る處なり。又極樂淨土に淨瑠璃世界といふありて、迦陵頻伽の聲音
でや今日夜淨瑠璃を語つゝ、留守居菩薩息子ども、或は年季ほこつのたゞひまで、此の世界にて金箔
をはがさるゝ事鮮なからずと、此の道に識のお寺樣の話されしなり。斯くて淨瑠璃世々に流れて、今
其の中に豐後節といふもの出來たるなり。是れ卑しけれども樂の餘風にして人を和するの器なり。然
歌數節樂ならざる事なし。聞よりの聲淫節は文章に色慾多く、音聲淫亂なり。然れども其のよき處にお
きて、まんざら姑の小言馬士の惡體を聞くにはましなり。試みに一つ二つをいはゞ、高尾懺悔とい
ふに、いつかおの字の名をつけてといふ文句あり。曲禮に女子許嫁して笄而字つく。此の語によれ
る。又お半の淨瑠璃に唯うつむいて何にもいはずと云ふ文句あり。詩曰、進至無レ言と。此のた
ぐひ多し。爰に又ある新道に黒格子をしつらひ、竹の簀簾かけたる淨瑠璃の稽古所あり。表札に難波
中路踏梅と狹山流にてしるしたり。火ともし比こゝへ來る二人の者、いづれも年季ものと見えて、一
人は澁染のうはざいをして、さらしの手拭を肩にかけ、一人は伊勢縞の布子に棒縞の前だれを締め、
是れも角木瓜を染めたる手拭を肩にかけ、いづれも湯がへりと見え、門ぐちにて、伊八ャア源介とん

造よう[illegible]し」米「ヤア貸すまへ[illegible]つ[illegible]え」米「シツカまふことはねえ、さきへ[illegible]らつしな」
米「わたしやはじめてだから、さきまでさきへ[illegible]らつし」其「そんなら待たつし、小便を一つやらかし
てこよう」[illegible]其「[illegible]、こりやア御免なさい[illegible]
[illegible]
さんが、[illegible]
[illegible]
[illegible]役者と情事にて、そのふみ[illegible]其「伊八さん此の間は[illegible]
ねしでなせえし」一輩「アイこゝがようござりやす。」トこいつはまたいつからなにさいゆゑ、すこし
[illegible]
[illegible]
い、伊八さんも知つてゐなせえすが、とんだぶてうはふらん[illegible]れぞ」[illegible]「是れからお頼み申し
[illegible]
[illegible]此の男[illegible]
よ[illegible]ござ[illegible]

ぜ。」梅「さう〳〵、わつちらアふざけ者だから、それぢやアわりいのさ。モシえ、もつと此方へお出でなせえし。」ト、たび〳〵言はれて、源介漸う伊八のうしろより出て火鉢のそばへ寄る。源「梅さん、此の男ア何しやうばいだとおもひなさる。」梅「どうもしれやせん。」ト、少しか「まちなせえ。」ト、よく〳〵かいで見て、源介が著物を「しれやした、煙草問屋かえ。」伊「ほいし、こいつがわかつてたまるものか。わつちらアなほだ。」おいきに木薬屋と見られる。源「伊八さん、あめへ清明丹はえ。」伊「ほんにあげるのだつけ。又わすれてきやした。まだ忘れた事がある。」ト、此の頃はやる銀煙管を出し、伊勢松阪のたばこ入から取り出し、ねつた、たばこだらけな南一を出し、「梅さん、このやア此の男が弟子入の祝さ。」ト出す。梅「こりやもうらしあなた。」ト、源介にも「さあ、こゝなかゝさんちよつと来な。」おかみ、お鉢のこんをさき、茶をうかがひて、「こりやすもうあいかわらずでございます。」ト、きふにきげんよくなり、ぬるい茶をわかし直して二ツくんで来る。南一のひかり今夜のあいさうもなり。梅「伊八さん、なとつへしおめへのめへを通りやした。」伊「ハヽどこへ、いきなすつた。」源「百川に寄しきがあつてさ。」源「頭目はどうでござりやす。」源「留守居しのの寄合がやんでからいつかうさ。」此のうち源介まねびとはなしをきいて、梅「さ、しなんぞはじめやせう。」伊「コウ源主、己といれかはんねえ。」源介ずいてれてゐる。源心づき、南の頭の三味線をとりたいたばかり、生まれてからはじめて今夜三味線をにぎり、きうにつにもつてゐる、源手をとつて老松をさしへる。源「抑松のめでたき事、高木に勝れ」口のうちにて、源「そも〳〵茄子のめでたきことばんぼくにすぐれ。」伊「コウ源主、そりやアなすびやあんめえ、松だぜ。」源「わしやア又一富士二鷹三茄子と云ふから、めでてえは茄子かと思つてさ。」梅「そり

ヤァわりい料簡だ。梅よりだしまうになるをこれ、[illegible]を長くをしてゐる。をりから來るは新門[illegible]の手代半六、[illegible]是れは上方者にてはゞ中のほりよすみ、よほどたちあがつて齊頂より二[illegible]なればこれ故になり
もさんとめ仕立よほどくあんもできるなり。此のけいしやも此の男を、できるやうでできはやうに、[illegible]半六「はゝァ[illegible]
なりノヽ[illegible]にてはしたたしにゆりいたみになり、このりうなをよほどしこたした仕打あり。
吉むや[illegible]」ト内へ　半「半さんか、おつ二御免え。」トやはりをし　宗「何のイヤ、御不ん慮はいらんむやこ」
與介は人[illegible]をしく、伊八をすこししけて　半「こいやなんぼ御時節からおやとの[illegible]いゝ儀だが
[illegible]宗六　伊八に[illegible]ついに火鉢のそばへより　[illegible]
やたら[illegible]か、きさん嬰上りかしてあくれんか。」　半「半さんか、[illegible]嬰上り。」　宗「おつとよし[illegible]、おやお
きんばさこへいてあやこ」　半「題目講へあがりやした」　宗「きつい後生のねがひやうだなア。それおや
もう極樂のさき[illegible]過ぎるおやはうだが」　半「それだけに罪をつくるがたん[illegible]分なくさ。」ト[illegible]にし
[illegible]か、さすがこれ、これ食のおかずにさんせ。」ト懸に身をこぶす[illegible]の[illegible]、[illegible]
わなも[illegible]もやうどあの[illegible]もやりとくではへさ[illegible]」　半六ゆびの先できくらば　半「居堂[illegible]でもあるが座敷でいう
てきたか。[illegible]いこを　[illegible]「あした堀しうおさんへいきやす」　宗「何ぞ前おやが信心をさてるもんかおな」
ト[illegible]、[illegible]の弟子木[illegible]、[illegible]與介も伊八も[illegible]　伊「[illegible]上締[illegible]、[illegible]
[illegible]に[illegible]梅さいふいふ商人[illegible]一冊で
（本町三丁目あぐすり仲閒唐[illegible]）ぐらゐだがや、[illegible]、いゝ代物はねえ。貴樣なんざァ[illegible]あたらしいから
よく[illegible]上で[illegible]、[illegible]又あすの晩いつしよにあゆんでくんねえ。」内がもうしこね[illegible]
[illegible]いゝか。」　伊「そつちの番しうもやかましいナア。おやかたはさうもねえナ。」ト急きゆく。跡に半六は

あれど、これも四つをきい「なんぢややら、もやくたいなほど夜がみじかいぞ。こゝが勤めの身ぢや。か
てはおちついて居られぬ。
へつてこよう〳〵。」母「もちつと話しなすつてもよからう。」半「店でも又ふたりほどかぶつたぢや。
それぢやさかい、これからも大抵気をつけにやならんぢや。」母「半さん、それでもおめへ頃日は石場の
豊倉へ又しこなはおさうだね。」ト、すこしてゝ思入れいうて、嬉しがらせる、半六真にうけ、
うせなや。せいらんぢやわい〳〵。」母「いいよ、あすの晩ききやせう。」半「ないことといはるゝほどつら
いことはないもんぢや。コリヤあのわろたちが、ざうりはき進へはせんかなア。ヲッとあるぢや〳〵。」
梅、母へ隠すやうにしてそなか間
く半六をにうけてしたゝか親 半「なんぢややら、いかう寒い晩ぢや。」トたちあがる これ等の手間ごまで借
古するでもなけれど、皆此の藝者を一てんばりの、色ちよほいちと見ゆるなり。又博奕の賽と女藝者
は、ころびやうで一夜狂枝の幸ひなし。七ころび八おきとは藝者のうへの事なるべし。しかれども藝
ではやると顔ではやると二いろあり。是れ鳥に鸚孔雀の有るが如し。娘は主君のごとくたかぶり、
我あればこそと恩にきせて、我儘いふ不孝は象牙の撥とともにあたるべし。親は臣下の如く我が子に
うやまひかしづき、三味線箱をかつぎ、駒下駄を直すこと、背慾の皮より出でて三絃の皮よりもあつ
し。又これらが起りをたづぬるに、斯かる卑しき者にあらず。漢土にては妓というて、莫愁、陽阿、
翠翹、などといふ名妓あはし。和国にては白拍子とよび、島千歳、和歌前など、世々に名あるもの数

へ墮し難し、今の女藝者此の流れと謂つべし。上方にては藝子舞子といひ、江戸にても前には踊子といひたり。元文のはじめに名高き、衛門、照、艶などあり。其の後、辨天豐、地藏平などときゝけり。竹壽、雛、百合、秋などもかごゐ是れに續きたり。唯人の愁へを忘れしむるの、器なり。然れども今は衰へて、是等に比すべき者をきかず。

豐後

京傳子三十首

酒氣貧通

申

町傾城辛苦情　凡十年

通子、町馴染傾城三箇年。〇馴染ハ
傾城曰、吾不逢子里而來、亦將有以見一書平。紫花ノ反叫ニ向ヘ人ニ他ノ女郎之文、通子ノ在ニ懐中ニ
通子妄曰、吾何必曰茶、終爲冒爐而已矣。茶ハ言虚也

田の中に棒の一本立ちたるは甲か申か、扨は申か、柳のかげから申シ／＼とよび、花道から申し上げますといふも、皆それ／＼の身の業なり。人間萬事さま／＼に世わたりする中にも、例少なき流れの身は、嘘いふことの常なりといへども、その内にも實ありて、惚れたほど忘られぬものなく、惚れられたほど捨てがたきものなし。こゝに去んぬる頃、大岸屋といふに花衣といふ娼婦あり。彼が客に富士井田藤吉といふ艶冶あり。たがひにほれつほれられつ、彼のわすられぬと、すてがたきが嵩じ／＼て終に心中と極まり、二人が中は深けれども、淺草の中田圃へ忍び來り、氷の刃抜きはなし、すでに胸

りかゝ人を徹らんとせしに、「お刀の手の内御無用。」と聲かくるものあり。はッと思うて邊を見れど、畦に立たせ給ふ石の地藏尊と、案山子の外、人らしきもののなし。扨はわれ／＼が心のおくれかと、又刀とり直せば、又、「御無用。」と聲かけしは確かに、石の地藏尊なり。兩人はびつくりし、「申し地藏樣われ／＼は、心中してしぬるもの、とめずでもないに、御無用と聲をおかけなされしはなにゆゑ。」とふしんをうてば、地藏尊莞爾とし笑ひたまひ、「嗚呼やぼぢや、凡夫ぢや。そちたちが命は今が九段目ぢやないか。おれがとめたは外でもない。定めて先の世を急いでもあらうが、ちと話したい事があるから、死出の旅路のはなしのたねに聞いて置きやれ。必ずまた[illegible]の變化ぢやと思ふな。其お心中死は無分別な事しれてあれど、今好色の世の中に、[illegible]三昧こそせね、一生連れそふ女房のために、腎虚して死ぬる品こそかはれ道理は一ッ、又は金がたんと欲しいとて、氣をつかひ氣病みして死に、或は食傷して命をうしなふなど、是等は金心中下卑とも謂ひつべし。おなじくは女の道にて果つる事こそ[illegible]なれ。世界の人皆其の穴門より生まれて、又其の爲に死す。是れ花は根にかへるの道理ぢやものを、定規杓子にしたる不料簡より、一つなき命を一女の爲に捨て、心中死を自慢らしく、かばねを野徑にさらして淨瑠璃繪草紙に長く恥をあらはし、讀賣の外よろこぶものなし。今時の心中は義にもあらず情でもなく、たゞ不自由故の無理死し、又浮氣なる息子娘は、ぶんこぶし新内節を聞

さ、芝居を見るたびに、半七三勝が死んだは尤もぢや、おそめ久松が心中は道理ぢや、あれほどまでに義理の詰りたなら命も捨てさうなもの。われらとても捨てかねはせねど、素義なる心より心中死をうらやましがれど、芝居でする心中はあゆむところが板ぢやゆゑ、犬のくそをふむ気づかひなければ、着るもの引きずりて行くに品よく、よき頃の衣服、紫のほゝかぶりどうもいへねど、もし是れがほんまの事なら、一町行くとお手に逢ふはしれたこと、亦うしろには浄瑠璃といふものありて、拍子よく、いま死ぬる身で離れながらゆくこと。いかにもおもしろさうに見ゆるなれ。さて刃を貫いた所がいたくも痒くも何ともなく、骸に毛氈をかけらるゝと、すぐさま二階で休息し、暫時いまの心中はきついものであつた、よう見事に死んだと切落しでじや／＼のくるを聞いてゐるなど、ほんの心中おかう有るものなら、なぐさみに死んで見ぬものは一人もなし。なか／＼そんな目出たものにあらず、ほんまに死ぬるはきつうさえぬもののなるべし。いつたんの無分別で死ぬるは、畢竟いのちを弄びにするやうなもの、どの道無益の最後、三世因果のたねをまき、不忠不孝の罪いつの世にか遁れんことと、百笑懐にて目ひければ、胸にん是れを聞き「是れ地蔵どの、そなたは甚う心中を案じてゐるゝが、そりやかたおしぢや。宥鬧に死ぬとばかり思ふしやるは、無量の味ひあることの情をしらぬからのこと、道理でそのやうに固い石にならしれたこと」といきどほれば、地蔵尊、さる事おれを意し

ふすとの言分もつともぢや。たれが此のうそさびしい所に立つてゐる安建藏たるもの。よもやふし朝がへりの客が、おれが顔へ煙草のふきがらはたいたより、悪何はさつた身の上なれど、弁をしてくれずたすりには、先の世の事はまた未道さや、唯よの心中の賊といふは、とても此の世では遂はれぬから、來世で添はうといふが由とみえる。したが外の事はみなさつすが、まにもせよ、是ればかりはまてにはならぬぞ。今生にあるけされに、やすさとまるきき身の空しき後は、いふなくく跡諸の炎に心をこがし、鬼の世にぬをつながれ、修羅の前に刑師して、このの人か寝せらと、よびかけて嘆きへなくふけりつけは、賓むなどは思ひもよらず。もし又最期の一念によつて、よその寄にて浮世へ出生すとこともあれども、畜生界千といふて、あはいと思ふ友は、忽ち刑とあれば、情愛へ行つてゐる縁ここと、人が浮に成つたら、我なもしであらうぞやと吐けやなつけ給へば、二人はまとうとして涙に暮衆ては幸が胸にふれますが。とても此縁はたりあたし、いや未來世でも遂はれぬ。しかも死んでも夏にさことと打わもなるれば地獄の、一ツ、いふたい思ひもとあらずより思ひ前してゝ催さたれまし、外に世界しかへて見それとともに回へは、兩人はやうやく得心し、たがひに心様のものをはなひ、積りになした、刀ととも命をすて、と斬にてきめ、まこく〳〵郷へ放きつへみ、室藏育議うてながめ、あゝはいうと見たものの、心中死もいたく因縁、天命でや、と嘆かつぶやきもとの道傍にたてれ

こふ、二六人が延命地藏尊、利益のほどこそありがたき。

中　終（京傳予誌大尾）

自跋

夫しやれること難し。黄山谷曰く、周茂叔が人品甚だ高し。胸中しやれたること、光風霽月の如しと。是等を洒落の親玉と謂ふべし。然れば世界の洒落悉皆洒落にあらず。こゝに於て予がしやれ本の不洒落なる事を知るといふ。

東偉予二百貫

文選臥坐序

廣し狹しを論するに、花嫁の書おくれしにひとしと雖も、大晦には花海も狹しとし、小尿は糠袋も廣しとせん。劇場の千疊敷も、廣きと思へば狹く、床の陰間の八疊敷も、狹きとおもへば廣し。これは諸子の論の廣しといへども、大家の尻の穴の狹きにはしかず、爰に何某が述べし三箇の妄言あり。其の趣、遠州濱松にひとしく、廣いやうにて又狹し。故に同國掛川の者なる、文選臥坐と題す。これや臥すに狹く坐すに廣からんと云々。

寛政ふたつ戌の春日

山東居　京傳序

居つゞけの夜著遊ばせて櫻かな　花紫

目

一　東北の怪談
一　北廓の奇説
一　河東の艶詞

文選臥坐

○東北の雪景

作

[illegible]好色も、其の名を[illegible]にのこして、亀戸の流れの末にとゞめたる名[illegible]の野、春は臥龍の梅見に、[illegible]、夏は心池の蓮に、所縁の色ある蜆を味ひ、秋は龍[illegible]寺の萩、[illegible]四季の景物[illegible]の助[illegible]衛門にまかせ、[illegible]の別荘に、風雅と[illegible]、[illegible]の植込に、心の[illegible]口の[illegible]、[illegible]四郎が風流ありた、定番のたぎり、時ならぬ松蟲かと、獨りいと閑然たる折から、[illegible]の煙草問屋の隠居、[illegible]かみこ仕立の羽織、[illegible]がお出でござやの。[illegible]かんじます」とんと閑間なしに[illegible]尤も袖なし羽おり、[illegible]よい雪ではないか

ば、これまで庭のけしきを御らうじろ。コレお茶を上げねえか。」女房おわか、よしはら出なれば、と（ねていしやうてけり御すきりやう）「ヤ
宗左衛門さん、ようお出でなんした。」トシイたばこか、檀那のもござりやせん、おたのん申しイ、」
多宗「浪花より今度は雲井になされ。また薫がおかうたものぢや、」おわか「ヤイ、どうともしておくれな
んし」鋒をた、つけては、外のはいつかうおネヘ。」多宗「左様ぢや」茶を出して（ト煎じ所へ下女来）新「煎じ茶
は上るな。これをあがりやし。何ぞ口取を」ト立て出す。うす茶を一ツ　多宗「コレハお手前、おかこれ。」ト一トつにお
「是れはおふくかけん。」おわかは水屋の戸棚から出し、唐蜜柑を入れ、黒ぬりの利休盆をつけて持ち来る。多宗「コレハけつかうなお菓子お
や。ハテ珍しい茶碗ぢや。」ト多宗は此の頃の茶のけいこ故、茶碗にむちゆうなり　おわか「何いつかうな麁物サ。」多宗「茶碗に
も色々がござるなやらうな。」新也「あるだんぢやァねえのサ。まア御所丸、渡唐星なぞか尊い物サ。
又は井戸、刷毛目、熊川、三島手、和物では藤四郎の、楽で道入、ノンコウ、左楽なんぞは違つた物
サ。釜も雲龍、阿弥陀堂なぞはいいものサ。」多宗「色々な名が有るもんだのう。」新「琉球風爐にチ
ャウちなぞといふがありやす。」多宗「ハテけうな名だのう」トかれこれ咄す内、深川の花ども、三四人、奥太郎、いずれ名あるかかりのなり、合羽
にて来り、次の間からじぎをして、三人しいれをまじへてあいさつする。新「此の雪にどういふ世界で、ころぶつもりで出かけたのだの。」
おやお「こつちやハはひんなんし。」奥太「今日は、さる客人をおくつて、二つ目まで参りました故、幸ひと
おたづね申しました。」新三「かうお庭を見渡した所は、貌見世の二ばん目といふものだなう。」三吉「切

腹から腹をさげて出ようといふものだ。」新でん「雪月花三つの楽しみといふが、雪ほど風流なものはあるまい、まことに銀世界だやの。」ト折から、ハしや丁けハ、茶とろめんの長合羽、たこ半ぶい、伸入しつゝり、すつと雪がはいる通り「嗚呼ふつたる雪かな、雪見に鵝毛一羽散亂、おれは合羽を著て立つて俳諧士はどうでごぜえて、」多年「此の人は、時わせるとやかましいぞ。」丁け三「コリヤアおらが兄弟ぶんか、イヤア何れもお揃ひで」與、清、三國、三人「すきとお目にかゝりませぬ。」丁け三「さやうさ、なんといい雪だやねえか。」此の雪に内に寄こさるとは、大先生でもあるめえ、このぶとんに吸くまりの、竹村の上あんで、揚屋町の子明が所の八重垣なぞをそのばとよんだは、どうでござえせう」ト女房を見て、いなさ「まア、是れは奥方へにふはむき、そこ今のは雀でござりやす、の曲す」ト「おまへかとの行きなんしくく」ト、いなまし丁け三「これはへいこうのむさんばうべおけいく。」丁け三「なさま、久しくお目にかゝらねうち、だいぶお酒落が下りました。ハ、ハ、いつも三「來るとそうみなもしいおしやうだ。コレ炭をついでつせえ」ほや「はいといきや、茶の間の数や丁稚や」「ハイ」ト溝「わたいしがつぎませう。」トしかみと手あぶ「時に丁けい殿、今はどうでございますだいぶうつりかはつたけにでございますよ。」「イヤこの物かはの早うつりまして、ね、催藤さんも出なし」丁け三「先づから婆がでる。小さらしもわけあつてひつこむ、最前、下田も口いはゞ僧る。」「それでは、大田も、昔話ばかりになりましたね。」「しか

しみき山、ときはて、此のごろはいかい評判だようござります。」ト言ふ「錦尾もよし、豊住もきついのさ。」
まゑ「角の玉やのこむらさきさんも出なんしたね。」ト言ふ「とうにさ。角玉の花紫は美しいものさ。」
わか「それだがやア今は、扇屋の瀬川さんなんぞが、いつちおほきい女郎衆だね。」ト言ふ「さうさ、熊照もちとものがありやす。」　平「七越さんや扇野さんは、どうでござります。」ト言ふ「かはらず全盛さ。」
ま「わたくしはまだ綾越さんや玉しきさんなぞ、度々間違つてしみじみと見ません。」ト言ふ「どれも美しいよ。かたらひは知つてるだらう。」　平「これはおほきにさ。」わか「花あふぎさんはどうもかはいらしいねえ。おとけねえからいいねえ。」ト言ふ「でえぶ新手が出すさうす。」　多「その花あふぎといふは、アノみあぐりのいなりへ額が上げたいかな。」わいば、アであらうな。」ト言ふ「何さ、その花あふぎから、今のは三代目さ。」　多「ハヽヽ、それならわかご又出来たのぢやな。」　平「とかく角玉のくはしいわけが、承りたい。」新田、たばこを呑みながら「たんとこウ女郎の棚おろしも、いいかげんにしねえか。面白くもねえ。勤番部屋の日まわりぢやアあるめえし。」ト、はんでふを入れる。此の席のうちの女どもに新田があたりの有る女郎もよほど有るゆゑ、三人の噂でさへ、わざとはむきにうはさを聞くのなり。（これよりむろぶたのつけ合せ、暇の贈物など色々出て酒宴になる。）会席ト言ふ三枝盛来琥珀光、しようぶつト す な物のふたつ「鰒とは思ひきや。」　平「いつの間にかいきな狂言をおほせ附けられた。」　平「こいつは命だ。」ト言ふ「玉の緒もたえなばたえね鰒の味。此の位風流な味をもつたやつはないぜ。」まゑ「お、怖を

早く、ふた・きたいに　二重廊下にせきこむやつさ」 多宗「これはよい所へ参りました。ト、二日果報
のあるのおやまでもの御馳走に、わたしにはお飯をすこし」 ト、二ニ多宗さんは酒をあがらね
えから、それがまたいつも悪やい。おはちを持つて来や。そしての、そこのあるのふた茶わんを持つ
てきやこ」女中「ハイ。」ト奥へ行く。ト、[illegible]振箸がおくり物を、はじけるやうにして持つてくるの。
光るだんすのわきから出しちやすこねえか。もつと見せなせえ。すこしくしこにこぶまきか。こいつ
はいきだ」ト[illegible]ためたんだなんし。おまへにやァたへさせねえから」ト[illegible]おきやァがれ。つきぬ
はやうやつでまさかよほしになつたやうに、もつとほかの嬉しいおやんした」ト[illegible]そのかはり、京町へ
いきなさんしたら、うまい物をのせておきんすだらう」 ト[illegible]、何ご新狂言がでましたかえ」
書「頃日は大の色法師さ」 ト[illegible]なんだつて紀の国やがくだに、高麗屋が手紙、なにか極で出あつて
たものを、たまりやァねえ」ト、二重[illegible]、一ツ一向そうつてもおもしろくねえ」ト、多宗はたん〳〵たの
[illegible]、[illegible]色、[illegible]なにが細な頭か、おもしろさうな事もやそ、頓呼こちらも年、二十
だに[illegible]、角力のあひ手になるやうに二[illegible]太郎でもなきやなるまいな。おまへなどもさぞあつ
くしなすつたらうね。」 多宗「せう〳〵な事サ。こちらがのは昔が噺家の頭に、ふた川あたりの事だが
から、いかうおはなしになる程の事もないわな。それも今はこちへよんで、御宿の二階やうたをやを

中宿にして、自由なこつちやけな。」　「イヤモウ、今は大分行儀が悪うなりました。」　多吉「わしらがはうかうした時分は、もはや久しい事ぢやて。すきさいはつかうした時分で、そのせつはいしやうも青梅縞ばかりの事で、浅葱木綿の帯がえらうはやりました。」　「それは久しい事でござりませう。」多吉「ござおすとも。まづ深川での高尾と云ふは、米蝶といふのぢや。これは又えらう久しい事ぢやが、わしらも昔に聞いた許りぢやが、米蝶といふは仲町の藝者で、実名が米やといふたぢや。そこで米蝶というたげな。馬文耕が作東都著聞集と云ふ書本物に、米蝶が鳥屋をはなした事を書いたが、又三浦の高尾が傳にも、山木の勝由が傳にも、鵯をはなしたといふ事が有るが、いづれが實やら。これはむかしぢやが、その後も六部ぢやの茶筌ぢやのといふ、全盛なおみたちがありましたて。」すみ「ハヽサヨ」ト笑ひながら、此わたしにのぞい。　すみ「時にわたくしはおいとまぢや。是れはちよと申して、いかい御馳走に成りました。」多吉「マア御用がなかア、お話しなさいまし。」すみ「イヤ今宵は、店の裏で須崎おやさかいに、店おろしの勘定聞きながら、ゆかねばなりませぬ、あまり面白さにとんだうつゝをぬかしてこました。みな様ゆるりとお話しなされや。」吉五「御用があつてはぜひもない。これは〳〵。」多吉「ホヽ、雨もあがつたさうな。」ト、すみは歸る。三貫、吉五「わたくしどもも、もうおいとま。」嘉兵「かへる氣なら、用がある。」ト、三分、藏人から雨がさを出し、「サア舟にでものつてかへりなさい。」トいふ。三貫、吉五

しハあゆかたうござります。こゝし御しんぞうさま、おあゆがたうござります。」トくわい申する。女房は
立つ。「此の間に[illegible]人の[illegible]を守け、　何か用が有つて次の間へ
ことに何か申うとす。問入うなつて、　三五「オヽ〳〵、いつまでもさいせんがねえ。御いとま〳〵」
まで一かへんなんすかえ。」　三五「ハ〳〵、いつもながらまうにたゝへました。」すこし、淀もかへりやせ
うさ　イト申があいだ」女房「おんなじやうにけへんなんすね」三五「おしやつはやアおすびねえな」
ますこおさにいつてのみのやす」トいふなり、女房「伸きや、こゝらをすたりけやこすてハイ」ト、来て
あすけなしへ、三五「そうシ、これつの水がちやうどようござります。もつとおはやりなさりやせ
まずをしんれすか」女房「まづ、酒を存んだものは言てわりい。さきまにひらつせ」女房「ハイ」ト酒二た
こゝへ、所良よおあけた木を二つ〳〵わやこ、三五ハイ」ト、[illegible]を持て来る、[illegible]
すこ所同まゆ「ここ[illegible]来たのだ。[illegible]永徳殿[illegible]急用とあるが、[illegible]」ト入れて
たまま[illegible]
もの「[illegible]、此の間[illegible]許[illegible]「これやおまつと行つてこさすがため
よ「あれか、[illegible]をこたつへかけてくだせえ」三五「何の用でござりやすえ。此の軒にてて
ますこ[illegible]、けふはおよしなさればいい」三五「[illegible]、けふいかねえと、[illegible]のそんがあ
るから。」おわか「それだが、さむうござりやせうにえ。」ト、いつたい女らうあがりと云ふものは、とんだやきも
ちをやくものにて、又こしわくなるものにて十
[illegible]あなとます「[illegible]でおいらが出しやすがえ。七兵衛をおつれなんすがえ」[illegible]一僕はいらねえ。」

おつか「早くおけへんなんし。」新田「知れたことよ。」ト、そこ〳〵にしたくして、加賀みのに雪ぐつで出かけ吉田がすけいにさせた狂言なり。近所の船宿の皆もぐるなる。此の手桶は萬八にて、女房を一ツはいからためあにすけいはしゐる三人の帰るを待ちあはせて居る。すけい「にせ上使の狂言はいかゞ〳〵」吉田「すつぽりくはせたゆうべ文を見つかつたから、一ト通りおやァだしてふこさねえ。女房といふやつは、せんてえおそれるやつだ。」ときに舟は、もう出来てをります。」ト、五人やね船にて簾をおろし出かける。此の世界吉原か深川か、その先をしらず。

○北郭の奇説

湖　舟　作

夫れ往古の勇士は、戰場にのぞんで再び歸る事を思はず、當世の遊子は、青樓に入つてふたゝびもどる事を忘るゝ。其の敵によつて變化すれば、その客によつて喧嘩するあり。互につれたる中には、他目は敵と見せても、心はやはり味方にて、謀を運らしても、あげる工面もあるべけれど、女郎の片思ひはまうけはなく、客の片思ひは多し。當の貝も女郎買も、唯光るを以て貴きとすべし。大門の伏勢には、新造禿が連を亂して、わけの悪き客人を生捕りにせんと引きずり、ひつぱる客は羽織のやぶるゝことを恐れ、「コレサ、いくから放せよ。」といへど、放すと逃げるは承知の幕。その幕うちへはひつて見れば、實事もあり敵もあり、實惡、道外、男達、勸善懲惡のおもむきはありながら、眼前の生惡を改めざるは、此の郭許りの月の夜も、戀の闇路のくらきと云ふべし。げに世の中は大戲場、下座

あつらへの清書に、五つの時計チョン〳〵と、地の道具がくるりと廻れば、本舞臺正面女郎屋のてい、上手、先ごろより格子さきに、まご〳〵して居る一個の武士、其の名は市兵衛と申すにあらぬ、藤馬付右衛門

頭巾目出頭巾にて、まうれつの南京染、裏は黒つむぎに何か紋所のあるを、すそで取つたすつかり、あこがれの帯にひもを結び、袖は上州の著八丈、袴のあるのはこれさまざま、さむいなりやうにといふて、着をしたことない者じやが、こたつにて、お内の五所紋の小袖、下によく〳〵きたないとみえて、いな色のかしやを著、其の下に浮役の黒繻子、えりのところをあかし雨の小袖、間にみさをのくおかむり、のぼらう著を著、くろおりのしの半えりのかいついてゐるきものはこれの長い刀を、はたいたか帯、あまた下のしまはかりのまみやみな、大かたもえをとこめ、かつかう袴をみせ、白足袋といふ品を、締しきつれらと云ふ者ゆゑにてすあし、もみの手ぬぐひしるしを附けた中ほとさうは、外よりは下をはきまして

市兵衛「一レすりい、おとなしく。」若者「ござたい「ハイ〳〵なんでござりまする。」市「わしはお手前に頼みがある事むしやいし〳〵ハイ〳〵」若「外の事でもござりません。わしかアハヽ、むかへの柱いいんでに、くれえいしやうな若い衆かる女郎をかひたいますが、なんとお手前、そこを一つあく〳〵も動いてやらしやつたが、あはれあとかね、」若「心にはをかしけれど、江戸は春にその気にた、「ハイ〳〵、ずゐぶんどなたでも、御意にかなひましたのをおだし申しませう。サアまづお上りなされましよ」市「そんなら許さつしやれ。」トこのあいだ一コトコト、此のさう云の間違にねえやうに願ひますぞや」若「かしこまりました」市「なに、おやにもあたり、はしごのしいけ」若「お腰の物はこちらへ」市「そんならあづけます。いかいわしがはつか気がかゝつて立るぞる」コレたしかにわしが名を書いて、其下も附けて置いてくんなせえ」若者「はい〳〵、若者の立先へこなにやお、若いもの、ふと〳〵だ」立見のいんでからふく〳〵と、まへ〳〵とほゐ事なしと、ちいさいに東へ、嘘時に進む

の間のま、「エヽ今晩はだいぶ冷えますの。」竹「あくどく寒い事だのし。」ト若者は下へゆく、と竹はあいてある紙[illegible]草入[illegible]にトある、おいは川[illegible]のおまいのもよろしやす、あやまるにはなかた[illegible]を出し、[illegible]りみるで、流しのませるで存じて居る。若者女郎のただこれ杯銚子持ち来り、若「こんすなた、もうすこしこおらへおよりなさつて下されませ。それへおいらんがおいでなされますの。」竹「心得ました。」逢方女郎出[illegible]しりふせの床敷作、[illegible]竹右衛門は何あものいなたまうに、女郎のかほを見たり、若者の[illegible]をなたり、又女郎[illegible]わかい者を[illegible]して居る。初会の床敷は部屋に[illegible]しこれるもの見るも由家の上に於て[illegible]竹「コリヤアハア、初めにお目に懸りました。」女郎[illegible]つて居る、若「アトおはじめ申しませう。」ト[illegible]る[illegible]はし、[illegible]づきの中[illegible]しのしての、女「[illegible]旦那の様ながら、さし上げませう。」竹「[illegible]きますべいがのし。」ト、女郎「マア御亭主から御上りなされぬか。私らはハア国の城下なんぞおやア、馴染があつて女郎も買ひましたが、御當地おやアいかな事、ようかはぬ事だのし。ハヽヽヽヽヽ。」トそら笑ひして「ハヽ、アこりやア、いかく御念のいつた御酒だなや。」トやう／＼呑んでしまひ、[illegible]より[illegible]出し、ち[illegible]の中紙でさかづきをふき、じしんにさかづき臺ト[illegible]に持ち出で、女郎のまへになほし　竹「コリヤハア、いたづくのでますが、おりよく、わいだのし。」トまきなかいら女郎はをかしさをこらへ、袖にかくしてゐたるが、[illegible]おれてふき出す。はや二階もにぎやかなり、若いものもほかの座敷へゆく　女郎「竹のや、紙をだしてくりや。」竹「御めんなさい、袴をとりますぞや。コレあね子だのし、茶碗へ水の[illegible]を一ツはいたわけなさい。」若「アイ。」ト、出て行く。暫く、あつて水を持ち来る。竹「コリヤアハア、お世話なこんだなし。」若「ナヤ水をおあんなんすのかえ。」竹「どうさ。おのへ呑まぬ事だのし。かうする事だのし。」ト[illegible]いひながら、紙の[illegible]をぬき、よくのして、[illegible]をふき[illegible]の下へしきて居る。[illegible]

おたとみえて、穴二つ三つある。（すけ）菊「ナニさうしなんすと、どうしんすねえ。」筍「かうしねえと、嘘は悪くしねえが出来て、其の串きねえ、噓べゝはやぶれ立ちふと、ほろ〳〵となつてしまふもんだわし。」ト、いふ時きた「コレハ〳〵、よくさうしやればいゝ。かうなこれでは、以来馴染んで来るに来にくい事わし。」ト、かれる。（これ時うつり、女郎ときに賑かになる。女郎も此の客からつきあひの間さると思ひ、にた山道のわるじやれをきくより気にてはにしあそぶこころになり）菊「おれやア行ふに、くれんのん様へでもおまふんなんしたのかえ。」筍「わしかな、イヤさうおやアねえが、今度御屋方の大殿様が、けえにおかてえがわし、御時節がらのことおやすあるし、御家中のわけえ衆なんぞが、ちよういふとけへでも来て、ほつと口論でもしたらふと、えらく六づかしいからわし。わしもう始め毎日日毎、三人づゝ夜あるく役で、番非番があつて来ますがわし。わしやア先の月から、お身様をどうぞ〳〵かんでたく思つたが、どうも相番のうちに、やかましくいふ者があつて、礼をあげてくれねえからわし。どうも来られなくござつたが、同役のうち一人ひつこみがあつて、そのむつかしい男とむかう番になつたかれ、やう〳〵のこんで来ました。けえにうるしくえす、時刻到来だアわし。」ト、まじめにしんに話す。此のうち本まで非いて菊「まアおあらへ。」筍「イヤ〳〵、おかまひなすな。是れでも苦しくござんねえ。」菊「チットお休みなんしと申しこすのさ。」筍「フウわしは又かう御馳走になつた上へ、又外の座敷で馳走に成る事かとぞんじた。ほんに心得ちがへだわし。屋敷でこんなに心得違へをするちふと、さしひかへでも

伺はねへけりやァならねへ事だねし。」トひざの下へおいてすわってたるはかまをくわい中し「時にはゞかりにいきてえもんだねし。」

萱「しやうべんにお出でなんすかえ。菊のや、つれ申しやしよ。」禿「アイ、此のうはざうりをおはきなんし。」

竹「やれ／＼おねこ、背ッからげにお世話だねし。これねし。」禿「たんざんすよ。蟲がでんしたか

と怖うござんすよ。」竹「あんだよねし。」禿「わつちやァ又びつくりしんしたヨ。いつそねし／＼と

おどひなんすから、蚰でも出んしたかと思ひしたヨ。」若「チトお休みなさいまし。」竹「よくけえす

ます。」トふとんの上にわりひざでかしこまる　萱「おつとめをいたゞきませう。」竹「心得ました。」トいなたやうふところより紫ちりめんのふくさに包

みしさいふやくのつきたるかみいれを出し、中よりこんもの縞の、紬のすそをつけたる「女郎はいくらだねし。二朱かねし。」

おて白くなりたる金入を出し、かみより出したあとの有るかいを出し

若「あのお子は、お座敷でござりますから、百疋でござります。」竹「よし／＼。」ト半紙をふたつに折り、小づゝみをこしらへて出す

萱「ハイ御機嫌よう。」竹「すイ／＼なにさ、代物はたしかに渡したぞや。」萱「ハイ、たしかにおうけ

とり申しました。」トおじぎして若者下へゆく。女郎もおつたには来らず、こゝに暫く待たせることも不通もおしなべておなじ事なり　一牛若兄は御覧じて、太刀ぬき

そばめ物間を、少しへだてて待ちたまふ。熊坂も長刀かまへ、互にかゝるをまちけるが、いらつて熊

坂さそくをふみ、ハッテン、イヤァテン／＼、ツクテン／＼ヒヤア、ラリウ、ヒヤウ。」ト、ひゞしときせるで火ばち

のふちを叩いて居ることろへ、あひかた女郎あやしのきたる。萱「主やァ独りして、何をお騒ぎなんすえ。」竹「ハ、／＼／＼／＼。」

萱「アノネ、わつちやァあすこに聞いてをりいしたが、今の所はとんだつよい所さんすねえ。」竹「イ

や此のまへの牛若だ、おもにすゝむ十三人のどろばうを、同じ枕に切りふせた所が、大らんちくさわぎで、えらくつえい事なし。」豊「ほんにいゝえ。聞きてえもんでさんすねえ。けでえはなんと申しンすえ。」竹「熊坂サ。」豊「ほんざんすかえ。熊坂と申しンすかえ。今の前をかたつてお聞かせなんしな。」竹「ハアそりやァさうとわしやァとんだ事を、がらゝうち忘れたァ。」豊「なんざんすえ。」竹「りよけえなから、おとなをちよつとよんでたもれ。」豊「わけえ衆かえ。そこで手をたゝきなんし。」竹「手をたゝいてもふくけますかえ。」豊「ようすよ。かぞえ。」竹「アノわしがの屋敷の御殿などでは、手はたゝかれぬ事むし。」豊「なぜでさんすえ。」竹「御殿では、殿様の召すのとまちがふからの事むし。それだから手をたゝく事むしの。」ト手をたゝく。豊「なんざんすえ。」ト来る。竹「コレおねえ、おとなをよんでたもれ。」豊「おとなたァなんのことでござんすえ。」竹「エヽ、もたいがい推量しやァ。わけえ衆を呼んで来やァし。」豊「ネヤア。」ト、廊下へ出て「伊八ドン／＼。」ト呼ぶ。ト若者出る。若「ハイ何でござりやす。」竹「コリヤアハアおとな、御大儀だ。外の事でもねえが、わしらが同役が、此の地へ廻りに来て居るから、わしが御門の札を上げてもらひてえ、おまつといつて来るよつて、四ツをうつたら知らせてたもれ。そしてかうした所の時と云ふなア、なアむし、悪くするといふとまちがふもんだから、どうぞほんたうの四ツに知らせてたもれ。」ト云ふ。若「かしこまりました。」ト出る。豊「そして、御殿や何かをこつて、おつとお休みなんせんか。」

竹「さうしますべい。」ト、はおりをぬぎよくたゝみ、おびもといてよくたゝみ、「コリヤアハア、かうたゝんだやアたまらねえ、しかし門ッまでのこんだ、のちにまかつた時は、ちり紙をあててよくたゝむべいに」うはおりをとかしぬは、いつしよに細だゝみにしながら、ト、いひながらふんどしをときを　竹「まアやおしやすに」ト、あとをいはず、をかしくつかれこれして床へはいる。女も下着ばかりへおびにむすび、てならぬをこらへてゐる。うちやうちやうとこゝにはひり、甚「いつそさむいほんだに。夜着をもつとおかけなんしナ。」竹「ナイ／＼かけますべい。そりやアよしかし」かゝる女郎もかくべつな客でもなく、ふるほどなにくい事もなく、いやはいやなれどくやしいと思ひ、いつしよに寝てはゐれど、たゞ黙つてゐる。竹右衛門もいふ事がなく、互にだまつてゐる。ややありてあゐは竹「ハアかうしてくんならハア他生の縁だが、なんとおまへに江戸の事を、ちくとんべえをしへて下されあゝかねいし」甚「わつちらがどうして、江戸の事を知りんすものか。」ト、いふはもつともなり。竹右衛門もつにいふ　竹「ナアニ知らねえといふは、えらく嘘だんべい。」ト、いふもえし　甚「ホンニマシエ、さつきおかのなれば江戸といふは、吉原の事をきくしのおはなしなんした、お城下とやらどことやらの、女郎しゆのはなしをしておきかせなんしたはな。」甚「わしが方の城下の女郎なぞは、はなしになるやうな事はないことなし。時に此の地に川岸とやら云ふ所があるげだが、舟などで女郎を売りでもする事かなし。」甚「河岸と申しンすは、やつぱり河岸の女郎衆の事さ。」トこつちらのあいさつしもやつぱりわからず、竹「聞き貴公に、わりない無心があるちふが、なんと聞いてたもるまいか。わしは茶屋へゆきたいが、貴公の心やすい茶屋があんべい。なんとひきつけて下されまいか。」甚「するぶんさ。」トはいへどきみが悪いから、あとはいゝかげんにやつて居る。竹「どうぞまたりときは頼みますぞや。わしはハア江戸

のいきかたを知らぬが、衣服なぞはマアどんなものがはえますべいナ。」怪「なにがようざんせうか。わつちらにも知れんせんが、浅葱かたびら黒小袖と云ふ唄がござんす。」竹「フウそんなら小袖には、黒がよいおやす。もつけな事があるわえ。冬最くわい勤で、大殿様から拝領した小袖があるが、此の通へ紋などにはこれがよかんべい。羽二重だやぞや。黒羽二重だやぞや。それにマア仕立師が仕立てたのおやからむし、あんとしてふきでも何でも、あくどくよくみえます。わたなんぞでもうちらとはしなか、えらいもんでござりすむし。」怪「はえませうの。」竹「羽二重だやぞや」ト、[illegible]女らうは只をかしさをこら[illegible]て居る。[illegible]帽子がそれ。[illegible]怪野さん。唯今鐘でござります。」怪「モシエ、今四つでござんすとさ。」竹「ナニ今四ツなか。よく知らせておくりやつた。是から帰る者にあつて、化をとはて貫つて又来ますべい。」ト貴公、待つて居てたもれ」ト、せなか[illegible]直に早くお出でなんし。」トいつたばかり、竹右衛門はふいと[illegible]あの酔いたをしらず、[illegible]なか出ぬか、知る。竹[illegible]これに気がつかず、[illegible]見習[illegible]なか[illegible]竹[illegible]をり[illegible]お[illegible]お前に[illegible]御番に出るやうだやつ。そんだらおとな、外の客へ出しておくりやる。」[illegible]お早うお出でなされませ。」[illegible]いつでもお出でなんしえ。」[illegible]
[illegible]
とを知らず。

○河東の艶詞

谷　我　作

一艘のたなゝし小舟、深川仲町濱本の棧橋へつき「はま本〳〵。」の聲に女立ち出で、馴れ〳〵しく舳に立ち、おかみかと云ふねえさんあれば、お馴染はと云ふむだあり。藝者のつけけん氣、女郎のさゝやき、障子の破れから覗くもよくするやつ。「お梅さん。」といふ聲をかぎりに立ち出づれば、座敷はいき惡じやれにこじつけ地口、さま〴〵いろ〳〵の酒中は、知れし御事とこゝに略す。扨床をさまり、「お茶を一つくんな。」も、障子ぴつしやりのいとまごひにあたりも靜まり、お梅は此の客あたりのある客なれば、まんざらでもないと思ふ程、さつき廊下で船頭との話を、ちらりと聞いた富倉のうはき氣にかゝり、じれつてえといふ手がかんざしへかゝり、又わきばらへさしこみ、あんどうの火のかぶりふるを、目ばたきもせず見つめて居る、富文好、じまんのいろない色男、いつたい石場の留守になじみがあれど、此のごろまかされて居て、こんでいゝつた所があけ跡ある、そろ〳〵かたなくこゝへ來りしなり。これはたゞこれ〳〵の事にかり氣にかゝり、だんまりで居たるが、氣をとりなほし、「おめへ、なぜそねえにふさぐ。」梅「チツト氣にかゝる事があるからさ。」客「其の氣がゝりは面白さうな事だねえ。はなして見たら、氣のはれる事もありさうなものだ。」梅「これぱつかりは、どうも云はれやせん。」客「色男についての苦しみなら、やつぱりそれが樂しみだらう。」梅「色事と土用ぼしは、した事はごぜえせん。どうしてわつちらが樣な者が。」

文「おれが色男(いろをとこ)のぎやんぎやんしやァしめえし。そこではまんざらでもあるめえわな。」重「さういふことなら、いいけれども。」ト、いひながらたばこを附けて出す。文「コレヤアおあつらひでござりやす。」重「とんだ茶(ちや)だねエ。」文「もつてえねえ。どうして。」重「じれつてえネエ。」ト笑ひ上にありつきりをいぢり 文「されえな物(もの)だのう。」重「ぜんてえ吞(の)まねえけれども。」文「エヽノおめへがかゝ。コリヤアわりイふねに乗(の)り合(あ)はせた。」重「そりやア云(い)ひなんせすと、察(さつ)して居(ゐ)るいさ。」トドギンと吞む。その手をおさへ 文「コヽ吞(の)むはいいが、それはおめへが気(き)づくつてもよ、はやりの手(こ)だといつても、こつちのいふ事(こと)まへこきぎなくゝつて、うまくねへとかなんとかで、茶屋酒(ちやや)もあんまりだ。そいらがやうなはがねえ野郎も、くけえと思(おも)つてふしようしねえ。」重「それこそいつてえねえ。さういふ事(こと)もござえせうがね。」文「そんなら半分(はんぶん)すけこざせねえ。」重「すうく\、富倉(とみくら)の女郎(ぢよ)衆(しゆ)が聞(き)いたら、角(つの)でござえせう。」文「おめへでえぶわからねえ事(こと)を云(い)ふぜ。」重「かくしなせえすな。何(なに)もかも知(し)つて居(ゐ)やすよ。」文「何(なに)隠(かく)すもんだ。連(つれ)はなるほどいくが、おらアいかねえ。したが人間(にん)に色男(をとこ)のやうだす。」重「そんなに云(い)ひわけをしなせえすな。せきたくつてもせくきりやうはござえせん。」文「ソリヤアおめへがうそにも、なんとか云(い)つてくれるやうなら、うそをついてもつきりがあつておもしれえけれども、どうで歯(は)はたたねえから、謎(なぞ)もつかねえわけさ。」重「とんだおめへはせじがいい。どうりでお春(はる)さんとやらがこがされて、用事(ようじ)を附(つ)けて江戸(えど)へいつてまで、おふと云(い)ふひやうばん記だ。」

文「無理な文句にふしをつけて、來るなと云ふめへびきか。」梅「成程おめへはうらなひしやだ。よくわつちが胸を知つてゐなはる。だうりで心がつうにこじれつてえ。しかし及びもねえ事だ。」ト、くすぐつこえ文句をいふ。文「上げたりおろしたり、こけがたこをあげやァしめえし。ドレたこかえびかあらためて見よう。」ト、胸ぐらをとつてひきよせる。梅「よしなせえナ。人達へもをかしいもんだ。」ト、いふ顔まんざらでもなく、文「じらしもいいかげんがいいな。」ト、又しこなし。梅「よしなよ。とんだ悪じやれだ。」ト、はなはだふしようち、文「そんなに辛くされる程、けつく思ひがます鏡。」ト、はな歌でまたあたる。梅「子僧だと思つて、そんなにあすんでくんなせえすな。いやだよ。」文「なにいやだ。いやだもすさまじい。ソリヤァほんきで。」梅「知れた事、ほんにいやだよ。」文「きついものだ。おれをわが。」梅「知れた事サ。」文、むつとしてい「ドレ、まだ背つからろくに見ねいが、つらをよく見せてくれ。ウ、まだ歯は白いな。ちすひばもかけねえで、大きな口から大きな事をまきだすが、わりやァマァ何といふ國で生まれて、そんなに氣がつええ。こつちがゝけえだと思つて、あはせ鏡をいつてゐれば、つけ上りのしたふんばりだ。」梅「そんなに口ぎたなくいつてくんなさるな。そんなてえへえをならべることァねえ。」文「ならべるだア。おけんつうのびんぎしが、大きな四つあしだア。たちうりにしても、ぼたんのすひ物にはかならねえわ。」ト、立ち上り身づくろひする。梅「どうするのだ。」文「うつちやつておけ。どうしようが。」梅「けへすことはならねえヨ。」ト、帯をとりあげる。文「なれ〳〵しい女だ。おきに

しらう。」專「おめへの目にも、なれ〳〵しいと見えるか。」文「知らねえわ。」專「そして腹が立つか。」
文「何腹が立つ物かえ。」專「さうだらう。腹は立つめえ。おめへがしんに腹を立つてくれる氣があり
やア、こんなわつちが氣はもめねえ。」文「まだたはごとをつくか。さきつからくらはしたくつて、手
がむず〳〵するわえ。」專「たゝいても誰も叱人がなから、たゝいてくんねえ。初けえからこんな事を
いふもあつかましいが、おめへの爲ならぶちころされてもいい。命はいらねえ。さきつからあいそつ
かしを言つたも、おめへにぶたれてあざができたら、あすの晩からせめてあざでもだいて寢る氣だ。
富貴にならねへのおめへも知つて居るし、さけすまれるも承知でゐやす。聞き及んでゐるおめへさんに、
ふつと今夜出たのが百年目だ。わつちもはかねえかゝへの身だが、たてひきづくなら命でもたく。か
にしてくんねえ。惚れやした。迷ひやした。」ト、男のかほへ前かゞみにせまりつけてなみだはら〳〵文「なる程おめへも、名のうれ
たお職さん程あつて、手のあるものだ。いいわな、誰にもさういつてくれるこゝろざしを、無にする
女好でもねえ。とても今夜は夜も更ける、氣がせえてはなしもできねえ。」專「そんならわつちのほん來
てくれねえ。」文「ウヽ、もうあんまりのみたかアねえが、あんまりころしたらあだをしようぜ。」專「死ぬ
たちか。」

予となり座しきにて、此のしうちを聞き居たるが、夜ふけにいたつて寐てしまひ、此のするを知

らす。

文選臥坐終

手段詰物娼妓絹籭自序

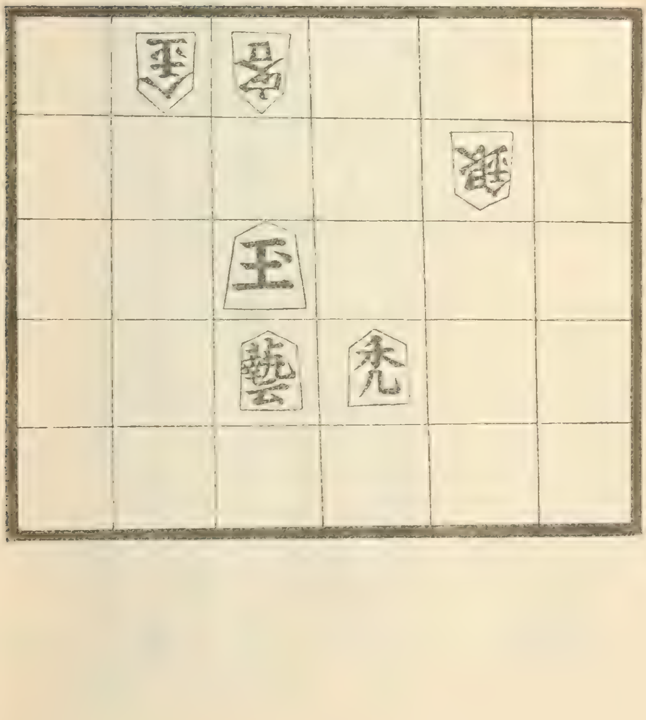
娼花を將棊の局面に設け、娼妓の闕下蹲の往來を觀るに、茶屋に客を待ち茶子あり、算で私夫に開桊子あり、直通詣うして飛車先の如く、素見曲つて角道に似たり、初會の席上に初王手あり、馴染の閨中に入王あり、色は金銀に有つて思案になし　堅き心の石田も崩れ、樓に關ふとも忽ち崩らん、おそるべし巧計のために詰道とならんことを。桂馬は誇つて歩兵の餌となり、香車の直なきは謬白、或は飛車手王手の兼りに遭められ、或は後王手の借金に苦しむ。手のなき時は端の歩をつく苦になる茶屋の借も期に臨んで二歩を使ひ、留主を使ふといへども、借金乞のために逃道を失ひ、遂に雪隱詰と成るあり。鳥籠と將棊を圍すは一手先はみえざるべし。則ち娼妓絹籭を作る　予がは象戯の及ばざる所は只將棊の助言をとふ而已。

于時寛政三年辛亥解凍日題二於菊花亭一

山東京傳

客はしごを二だん上る。女郎てうづの顔にてよこにゆく。藝車を一まいうつ。女郎二けんめのこしきへ逃ける。開いて大手をとる。又一ツけんにげる。あたまから銀とうつ。女郎ふそくにおもひ、とらすにわきへよる。又金と打つ。女郎がそこで死ぬ。

右　惣傾城



目録

第一回

義理と情の二ツ道には間菓子もなければ梅川が年季手王手

第二回

つかへはたして二歩残る亀屋忠兵衛は歩三ぴやうでもつまらぬ身の上

第三回

金銀をつかふ客にもかまはず横にゆくは女郎の實と卵の角道

手段詰物娼妓絹籭

山東京傳著

○第一回

義理と情の二タ道には間駒ならぬ胸川が飛車手王手

砂糖屋の丁兒甘きをむさぼり、鰹節屋の猫兒腥きを好まず。李白一斗詩百篇といはれし底ぬけも、劍菱で酒風呂をたてて三日ばかり入れておいたら、まつぴら御免といふは知れた事。花の下にて死にたいとおうた西行も、吉野山に閉ぢこめて花見をさせたらば、必ず欠伸をするなるべし。されば久米仙人も女湯の番人にしたら、素脛に通をも失ふまじく、弓削某とても女護島へ流したら忽ちおいとま申すべし。とかく程に美しくても、朝夕眼前にぶらついて居てはこのましからず。女郎買ひも命から二番目の大切な金銀を費し、其のくせゆきところを都合と工面で無理にした首尾をもとめ、二親の四ツの眼をはじめとして人目をしのびて通へばこそ、おもしろくもあつたもの、一升買の足るを知らず、心のままに樽酒の樂しみせんと、女郎の股ぐらに家藏をうちこんで身請をし、女房にしたところが三日もた

たす鼻につくは、世間にいくらもあるかたなり。雙ケ岡のしれものが、花はさかりに月はくまなきをのみ見るものかはと云ひしも、まことに如在なき法師なり。こゝをもつて推せば女色の迷ひも晴れぬべし。嗚呼さうおやとひとり悟り顔に口ひろきことは云ふものの、捨てがたきはとかく此の迷ひの一ツにて、上は一人よりして下八萬人講の講頭、兎の毛のポットセの鬘に天窓で出ようといふ菩夫さへも、むかし思へば信田の森の、うらの朽家でもよろまかした徒にて、かの川柳が選に、母の名は親父の腕にしなびて居、とは頗る穿ちなり。わつちやかういふ悲しいことがおざんすと、酸鼻あれば、酒呑童子と腕おしもしかねまじき丈夫の、涅槃像の二王みるやうに己に似合はずうちしをれて、ともに涙をこぼすを見れば、實に女色は斷骨の斧、迷心の毒に極まれたり。佛祖三經に浮屠子の曰く、愛慾は色よりはなはだしきはなしと。宋の景之元が女色の爲に命を沒するを以て見れば、忠に死なんこと甚だ輕しとかたく出かけしも理なり。賢を賢として色にかへよとは則ち此の場所ぞかし。又曰は比封狐、機は深寅虎などと明人も云うて置きたれば、女郎に身を誤つこと中華の人情も違ふことなく、夏の温石と女郎の心はつめたいかもの者なれば、いづれのだんはなるべからず。其の又戀といふ川上をたづぬれば、僅か方寸に足らざる節穴なれど、むかしから此の穴へ國を陷し城をおとし家をおとし身をおとす者、倭漢にかぞへつくしがたく、周室を陷したる褒姒が笑も、波瀾一ほんお

としたる鳥飼河岸の窠も、つひに填つたうはさを聞かず。清の曼翁が碧海の迷津ぢやと云うたも譃ばなし。昔混沌未分のとき、耳か鼻からか子をうませ、社稷宗廟をつがせ、こんな節穴をばあけぬ相談にきはめたら、かう云ふ惑ひもおこるまいもの、何につけても邪魔な穿口怖ろしの風ぬき穴、あやしむべく恐るべきの妖洞なり。

○こゝにむかし大坂新町の郭わかきいと閑かなる所あり。世を捨人のかくれ家地名を黄幡とよびなれしも、道にとなへの通ずれば、ぬれの近きにある故ならん。黄幡の宗とて人も知り、四方に目だゝし一トかまへに、昔萌のな部屋通屋治右衛門が別業なり。抱へのな部屋浦川といふおいらんぶら／＼と煩ひければ、保養のためにはしりかなる此の別荘がしかるべしと、番頭新造の橘巻も看病のたうもろともにしばらく、こゝに遷り居る。ころしも秋の露つめたく菊はたばこにむしられて、桂花に蝶の簇につゝられ、庭の草木もうつろひて、いとほそく啼くすゞ蟲の、音をきくにさへ苦海の身は夜みせしらする鈴の音かと、耳おどろかすも理なり。をりからそぼふる時しぐれ遠寺の鐘の音もしめり、いとゞ哀れの音聞こゆ、浦川はかの新造が云つしにひとしく、幽冥の道が世に逢うたるやうにおとろへて、夜具に其の身をもたれるな。そばには新造うむかみ椿が気をなぐさめの本よみきかし「ちよおいらんのとき、心ちなはどうでおざんすえ」「アイけふはいつそようおざんす」「、それではまあおほん／＼とよく

おなんなんすでおさりいせう。風のあたらぬやうになさりんし。ドレ、蒲團をあたゝめて上げ申しンせう。」と尻輕に、とししたなれど姉とよぶ、おいらん大事の心根は、妹女郎のかゞみなり。隅田川は涙ぐみ、「ホンニ何から何まで心づけ、しんへもおよばぬぬしの介抱、死んでも忘れはいたしんせんにえ。」「なんのマアばからしうおさりいす。灸すゑの文句のとほり、世話になるのをおんといひ、憂きを語るを妹と、名を呼ひかはす流れの身は、せわになつたり又したり、互のことでおさりんすもの、そんなことに心づかひをなさりんすな。サアくすりをおあがんなんしえ。」と茶わんをさし出せば、むめ川は手にうけて、「それにつけても苦勞になるは忠兵衛さんの事でおざんす。」「ア、それも苦勞になさりいすな。お前さんの病氣さへよくなれば、わたしがどうとも都合して、かけもすまして上げ申し、内證の手まへもとりつくろひ、二階のあくやうにして上げ申しンす。縁といふものは味なもの、忠兵衛さんの初に來なんしたは、去々年の三月さくらの初日でおざんしたね。」「アイぬしはよく覺えてお出でなんす。」「アイサわたくしは其の時のこと忘れはいたしいせん。しかも其の晩忠兵衛さんの形は羽織も小袖も黒八丈。」「ア、それ〳〵下着は紬の結城縞。」「もちものや何やかやもいつそ意氣でおざんした。」「わたしも其の晩まんざらでないと思ひこしたから、牀へも早くゆき、なんぞ云ひたいと思つても、モシエほれた男にやものゝ云ひにくいものでおざんすねえ。」「それは誰しもさうでおざん

す。其の夜はしかもわたくしが次の間に寝てゐんして、よく聞いてをりんした。忠兵衛さんのいひなんすには、梅さん初めから此のやうな事いふでもねえが、此の間中からお前を仕廻ひによこしても、御全盛と云ふもので、ついによい晩がなく、初名代で来るも何か已穢らしいから、じれつたく思つてるやんしたが、今夜かうしてお目にかゝると云ふは、わつちやァ夢かと思ひやす。」「まア、おつな手を出しなんした。」「ホンニ忠兵衛さんの癖が、いつそ主は上手だよ。それからわたしがかう云ひした、「わたしらがやうなはかない女郎でも、そウ嘘にもそんなことを云つておくんなんすは、嬉しうおざんすと、よく云ふものでおざりいすが、わたしやァ嬉しくおざんせん。まんざらでないと思ふ心なら、ひよつとさうおつせえすればほんにして、とやかう思ひしても、これぎりでお出でなんせんとは、大抵つみおやおざんせんにえ。それよりはやつぱり正直に、おれはわきに馴染があるが、今夜にそこがわるいゆゑ、せうことなく夜をあかすまでに来たのだから、必ずとやかう思うてもむだだ。ほんに思ひ切れと、いつておくんなんすがわたくしは嬉しうおざんす。」トわたくしが申しいした。」「アイそれから又忠兵衛さんが云ひなんすには、「ナニおめへはむごいことを云ふものだ。此のごろうち茶屋からたびたび聞きにおこした事も、てめえ知つてゐるだらうに、それをわきへこかしてそんなことを云ふのは、ワツきこえた思ひきれといふ謎だらう。こちが死ぬするまでもさう云はれては是非がねえ。」

と一ツすねなんした。「ホンにさうでおざんした。それからわたしも面白くなつて來て、「オヤじれつてえ、どうなさう。さう思ひんすくらゐならこんなに氣はもみません。何をいふのも。」「フウ初會だといふのか。こつちは久しくとやかうと思つて居た心からは初の逢ひと思ひはしねえ。したがこつち許りさう思つて、こんないやらしい事云ふは、積られる所が恥かしい。」「モウ何も云ひやすめえ。」「トあちらをむいて寢なんした故、やう／＼あやまつてこつちをむかせ、「モシマァ聞いておくんなんし。お前さんも人に知られたお方なれば、今までお近付でこそなけれ、茶屋でもたび／＼お見かけ申し、とうから知つてをりんすもの、初會の心がやおざんせん。おまへさんさへほんに來ておくんなんすなら、わたしやヅッとかくごをして呼びとけ申す心でおざんす。」「ハテおれもさうなれば浮氣をのけて眞この事。」「ソリヤほんにかえ。」「ム、知れた事こんな美しいしやつつらを、なんの持たずともいいことに、こんなにおれを迷はせる。」「ト煙管でたゝくまねをしなんした。はづかしいが其のときは眞に嬉しく思ひんした。それがやつぱり悪縁でおざんした。」とほれた男は噂にしても、ふさぐが女郎のならひにて、梅川は梅春とかけ合の此のはなしにのりが來て、すぎこし方を思ひ出し、我が身にかゝる夜具を出れば、梅春はそばから氣をつけ引きかくる。程なく四ツの鐘なれば、氣くたびれてか梅川は、其のまゝそこにすや／＼と寐入りつけば、むめはるが夜具かいつくろひ、屛風ひきよせ、見かけてお

きし浄瑠璃本一枚あくれば秋のかぜ、障子のひまより、行燈の火をふつと吹き消す折から、土堤のおたりと思はれて、「迷子の〳〵久太郎やァイ」ト、トンチャン〳〵。襖へおとす雨の音サラ〳〵〳〵サラ。

○第　二　回

つかひはたして二歩のこる亀屋忠兵衛は歩三ン兵でもつまらぬ身の上

後朝光也浪速の色をせきとめて、黄金でかけし本揃は、ながれの里の浮きしづみ、贖身あれば躓あり、日に新たにして日々にあらたなる、町の夜みせのにぎはひは、（雨がはれたにつきたつるよふなすがゝき）チヽチヽチン〳〵コシ〳〵〳〵。（唄）（まいものは小ぐり清水のだれ）いたはしやてるての姫、とあるところへ立よりて、口説きごとこそ哀れなり。「ツレヽン〳〵。○ハイあゑましい、下駄の鼻緒をふんぎつた。これ鐵やこれから西河岸をさゝるべえ。氣を付けろ、まがりつとにおかりッたまりがあるぜえ。まだかわきやァしめえ。」（かゝいるうしをかッけ）一山本屋ヱィ人ゥ〳〵ヽ一（こなたにはすけんの衆）（田町かうしをのぞき見）「コゥ見さつせえ。アノ如意輪観音が箱しめのこんりうに出たといふ身で、頰づゑをして居る女郎は、扇風が一度かつて揮られた女郎だ。」籬「コゥ、何たるひつてんらしい女郎だなう。茶づけ時のならづけといふうすい櫛に、水膠を見るやうな鮮をさしてゐるぜえ。ふゞねえあたまだ。コゥあけぼのへわきざしも一しよに預けてくりやァ

よかつたなら、どうせえじやまになろ。」ト、からしのしたにねていた犬、尾をふまれて「きやん／＼。」花「おきやアがれ、となんだ気のきかねえ犬だ。」里「犬をふんだも今道心ぢやアねえか。」花「わりい／＼。」里「こつちらの初だけのさびといふ色の着ものを着て、何かふさいで居る女郎は、にはそくなつて判人の所へきがつたと云ふつらだ。」花「うきアねえ、アレあくびをすらア、大きな口だぜ。」里「かけ親にもたれかゝつてゐる女郎は、素人絵の濃むら屋だ。」ト、花暁は早、となりのかうしをのぞいてゐるとも知らず、さつぱりそばにゐると思ひ、むしやうにしやれる。「こつちらの再興めへの二王の腕といふ色の着物を着てゐるるしんは、茄子のさしみをこせえるとつて、鍋のふたでおつへしたと云ふつらだなう。」トいへども、あいさつなきゆゑ、ふりむいてみればしらぬ人。花「ホイこいつア大笑ひだ。」トいひ、わきへさける。「自註に曰く、此の花暁はいつれも助六がまたくゞらをくゞらうといふともおなり、これを唐音にて閙走といふ。長崎丸山にて千年くゞりといふ、實はすでをふつてもどるはみな素手振りといふあやまりなるよし、往古吉原にてはとりんばうと云ふ今は素見といふ。そこで女郎はすかんみといふか。」一度此のむらうより来る二人の客はそのかたものと見え、伴「見なえ、どれもうつくしいものでござんすの。」今一人なる程きれいなものおやゝ。かう見た所は御年始に奥へ出たやうでござる。」喜「いかさま、アノまん中に柏の定紋を付けてをる女郎は、よい器量ではござらぬか。金田氏の内室に少しにてをる。」喜「成程イヤこちらの黒い衣裳もよくござる。」喜「モシ是れは何屋といふのおやゝ。」茶屋男「いまそでありうちからかんばんにおさうかんをさげてあとのはうにゐた「ハイこれは此の新町で一二をあらそふ槌屋と申すのでござります。なんたらこゝにおきめなるが、されませ。さうかういたすうちそろ／＼よい女郎衆はあがります。」喜「イヤもそつと他を見物いたさ

うさしゃ、こいつは夢た銭があるほ チャンチャン〳〵〳〵 かから祈しも玉のかた、とりやけいくわと立てさせいかあ
し、[illegible]のおと、むかし川とふかきなじみの[illegible]屋忠兵衛、[illegible]にはりにげれん[illegible]わをし
かけられた[illegible]むなしもを取られ「コリヤ、ゼニをするのだ」ト云ひは[illegible]「あんまりうぬがつらが憎さ
なた手ととつて
いから、此り定さまがむしがかつてんしねえわえ」[illegible]「うぬがやうな野郎が、此の上地へいりこま
るから、あいらが格子へ立つても、すのこんにやくのとやかましい」崑崙七の[illegible]を見るやうにやる
まつらをはりまげてやるべいと、むねつくさやわるい[illegible]、おやてねえか」[illegible]「へたに[illegible]をおもしや
すからとのりだそ」ト大勢かつてゝ、[illegible]を入れたやうに、しし[illegible]の[illegible]、其の手をし〳〵「コリヤヤわいら
[illegible]誰にか頼まれたなア」「コリヤ、シヤン、たとや此の夜中にこゝいたる門をたゝくは、たゞことゝもよ
もあるまし、[illegible]のやくそくなければ[illegible]」と思ひしつ、むかうの二かいの[illegible]を[illegible]、[illegible]にすみにこたへ[illegible]て[illegible]、て[illegible]
さてこそ、[illegible]、[illegible]「七尺」の[illegible]も[illegible]、[illegible]と[illegible]、[illegible]
ことゝる[illegible]と[illegible]、[illegible]
をむ[illegible]と[illegible]のたもとをひかはなどかやれ[illegible]、[illegible]此り[illegible]の[illegible]上には[illegible]
とう[illegible]
らんむ[illegible]、[illegible]人[illegible]に[illegible]に[illegible]をまつてゐる[illegible]、其の間に
[illegible]を[illegible]じ[illegible]して[illegible]をつけ[illegible]にわいてゐる。[illegible]「どれつて[illegible]火だなア、なにおこ
られよう」ト、[illegible]「ほんにおまはすさけすれ」ト[illegible]かいひながらかけ「むめはるさんえ」[illegible]
下にて[illegible]
きのものをわるんでしたかな」[illegible]、おかただけ、後に[illegible]よりと思つてしまつておりましたよ」客人
此のこしきへ来り、
はあるへとうしてえ」[illegible]あいり聞いておくれなんしえ、[illegible]つてなわいせん、あれがらたうとうか

けたして参りした。茶屋からも人をよこしいしたけれども、わたくしやァかまいせん。久しいもんでおさらいさアな。」梅「おめへもほんにあれ程ほれられたがつてゐるものを、そうもつとほれてやればいいに」亀「おめへさんもそうおつせえすけれども、わたくしだつてもさねえにやァほれられんせんものを」此のさしきの ふりしん ト「あの人さんもばからしい。よくおかけ出しなんすねえ」亀「ホンニいつでもせわをやかせる客人でおさりイすよ」トいひながら上るから 梅「コレ惣助や、今いひ付けたことをきりきりしねえか。何をして居るのだ」惣「アイ／＼今こゝに」梅「久しいもんだ早くいかねえか」トいふ折ふし本ン間のびやうぶのうちにこ手をたゝく。梅「アレ呼ばつしやる。マァあすこへゆきや」惣「アイ」ト此の用をたす。ふりしんみこゑで 廊下「浮なみさん浮なみさん。一寸お出でなんしよツサ、おいらんでも」亀「アイ／＼いままゐりイせう」トいふ客、たつ所へ来 下着の儘帯をしだらくに結び今勝から出たといふなり、横手しにはかり口から 梅「浮なみさんでえふそは／＼するの、格子へ地いろでも来たか」亀「よしておくんなんし。わたくしらァ色と土用干はいつにしたことがおつせん。いろと云ふものはどんなものだえ、どこの井戸からわきんすねえ。」梅「井戸からはわかねえが、へその下からわく蟲よ。こいつにひよつとたかられると、女郎衆もしめへだ。まづ二朱一歩の小金から喰ひ始めて、櫛笄から著物をくひ、それから髪をくひきり、小指をくひ、だん／＼臓腑へくひこんで、いろ／＼な氣をださせ、たうとう命をとりをはんぬ。何ほう恐ろしき物がたりにて候。さこれをなづけて死々心中の

蟲と云ふわな。こいつをよけるにやァ鍋屋のうは氣うせバすりといふがある。おめへがたもちつと用心にしめなせえ。」貫「ぬしも女郎しゆにほれられなんすから、其の蟲の部だね。」貫「おきやァがれ。」廊下鳶二「すホ、、、、、。」らふト、わ重「たんとおしやべんなんし。」ゆくト出て貫「ぬしやァなぜそねえにをしなんすえ。色でも出來なんしたかえ。今おつせえした蟲にでもなる氣かえ。」貫「安の二階ひわしといへども」貫「ぬしたちの相手にするやうな、手のある女郎衆はねえと云ひなんすのかえ。」貫「あるといふことさ。マァ茶を一ツくんねえ。」貫「ぬしや口果報があんなんすよ。今丁ど茶を入れいしたよ。」貫「くふ物なら口がわはうだが、これやァ飲む物だから咽がわはうだ。」貫「わりいしやれだね。コレ小夜舟さんついでおくんなんし。」貫「アイ」ト、火ばちのかけにあつたちやわんをとり、なかにはひつてゐたしなみのおかをあんどうのだいへすて、ちやをついで出す柳「こいつァいい茶だ。コウそこの紙につゝんだ物はなんだ。」ト、あけてみれば火ばちの灰のかたまりをひろひ出しておいたのに「おきやアがれ。おらァ又豆こくりんかと思つた。」舟、わらひながら「きついけびざうなこつたね。」ト、かぶろ來り、いふ時、山本屋おつ、十二せんのは切れたと申シイすから、わきでとつて參りした。」ト、のり入六枚つゞき出す。馬鹿しい、こいつァ錦繪でんだからいいけれども、あんまり為にならねへぞよ。ちつと氣をつけやア本氣をつけなといいぞよ。やつぱりこんだからおいらんの客人のめへでもかまはず、此の簪は二百は貸しいせん。生つけのかうノヽは、たつた二ツはうつてよこしいせんと正直にいゝやヨ。」梅「馬鹿

らしうおもはいなれな。おぶしやれなんすな。わたくしらアそんなけぶしはしいせん」田「これでもい
ゐ男の所へさつまいものおしんをいつてやつたさうだ。」梅「うそうおつきなんし。だがさう申しいし
た。」ト、いふ所へ来る、へやもち女郎、左の袖にて目をかくし、右の手にみすがみをもち、[illegible]
あたりを一ッ　ませがき「ト、つめてえ。オヤ柳標さん、でえぶましておざんすね。」ト、火ばちのそば「おや
ふるはせる。
氣味のわりい。たれぞがわつてをりイしたかえ。」田「なぜよ。」ませ「いつてみたら、がおへつたけえよ。」
[illegible]　田「ませがきさん。かうだつちやア、それ鏡らしいが、かうせアにきれいだぜ。そして
おいけうがこぼれるやうだ。必ずそこらへこぼしてくんなさんな。ひよつとふんづけると氣がもめら
ア。お前の紋はおつなもんだの、枝巴か、きつい者なえだつきにしたの。」田「雷の鉢箱ちやアあるめえ
し。」[illegible]「むくのさきもやうもこいつ
アあんじだ、おやすきに二葉葵か。べらやアねえ、芝居の木戸が蓮池へ身をなげたといふもやうだ。」
ませ「そんなにわる口をおつせえすと、くらアしんすにえ。」ト、はごいたの茶はうじをふり上げる。田「コウあやまつた。お
いらアばか野郎の紋だと思ふさうだ、おつとまちげへ、羽根だと思ふさうだ。」梅「ほゝゝゝゝ。」トたはこをすひ付け出し
「ぬしやア今夜はたれさんだえ。松さんかえ。」ませ「いゝえ、なに此のぢうの松屋からまゐり
したらうさ。」梅「いゝのをとこぢやアねえかえ。」ませ「後生でおきりイす。甘露梅のすくなつたといふい

みのおいさんでおざりイすよ。」喜「イヤおうせいにおつかしくたとへるぜ。晦日ばきの鼠いたすおや
アあるめえし、カヽト、もちつと何ぞおかくいひてえもんだ。」ト、そこらを見はし「梅さん、此のびやうぶの
虎は女郎衆の噂しきにやア目出たくねえぜ。」六「六せえ。それだらといは千里はおつと云うちにある
くと申しンすから、待人がきう早く来るとようおざりんす。」喜「それはさうだが又千里もどるといふか
らわりい。」喜「あんまりかへりねえとうおきしくだりのかい。」喜「成程こいつァさうだの。したが此の
座のへばつしかたをいからして居る所は、なんの事はねえたばこやの看板といふ身だ。」此のむだ
いにはおらぬゆゑ「梅さん、簪をちつとかしなせえ。」[illegible]ぬいて
みつけしおくことも[illegible]一ト、耳のあ[illegible]「馬鹿らしい。[illegible]としがいもなく[illegible]「と
しがいがねえも気がつかねえ。おめへことしで[illegible]許り琉球人に逢ふたらう。」[illegible]「どうしんしたとえ。」
ト見れ[illegible]これさ。よせがきさし、[illegible]耳がわるいね。[illegible]ト、此の中あいしうりでにふ
[illegible]ねえ小夜舟さんがはじめたいいこうじの釜ひつくりかへつてたことがはる。[illegible]唐傘ひつくりかへ
へつし介六とかはる、八文々々。」[illegible]「ホヽヽヽヽ。」[illegible]、此のころで目をさ[illegible]「さ、舟さん、どう
だ気がついたか。」ト、いふところへ朝々とり上げられ[illegible]、らうかをか「モシえ。柳栗さんに、はなが出来た
から、あいらん来てお飯をおあんなえんしッナ。オ、せつねえ。」ト ためいき[illegible]「がうせえに鼻息のあ

らい子だぜ。箔屋のうちへはおかれねえ。なんぞうめえもりがあるかエ」𢭏「いけえことおさんすなエ」
𢭏「先へいきねえ。今いかう」俳「ナ、早く御出でなんし。そしてね百代さんがね、此の文をこういう
じいしつヱと申。」といだす。ト、しん造のふみをひらき、わるかみ、たあく筆のふゞき、見、ト、こゝろにかゝる何だ、〇「ちよつと
申し上げんりやう、らにこんやはよふ来た。ねぎ御やくそくのおけいはへのきれなもつてこねえ
にくいやつだ。御恨みにぞんじんす。〇ぶしやれな文句だナアよめねえ。沈金ぼりの唐草をみるやう
な字のふみだ」俳「マアあつちへいつておよみなんし」ト、むりに引きずつてゆく。此のとやくにしてよれる気もなく、又きいた風のともみらにしあらず、
たゞむだ口をきいてこかいやうさ心やすだてをきれ、何をのさしき、お　よ「柳原さんのむだがをかしくつてあ
そびにゆくをたかしみに来る客なり、此の風の客まゝあるもつなり
すびすぎんした。まゐりしやう」𢭏「そゆ、ツ、ふくおあんなんしなア」　「又いつてまゐりしやう」
ト、出てゆく。俳「さよ舟さん硯箱を出してくんなエ」ト、ふみを書く。かゝる新からなけ則　かふろきは「子ども
あとには
楽屋なさまよ／＼／＼」しきのせわをやく。〇ト、二階中ふれる。〇これなかまのすくにてかふろ、〇ト下には籠をおろす音の聞え
　これをかいろまはしといふなり
夜廓ひければお茶を挽いた妓は、大敵にあうた罪人を見るやうなこゝちにて、欠をし伸びをしなが
ら梯ばた／＼二かいへ上り、わが局々へ散亂する。かつかちめへでおまんまを喰ふ。雛妓は恰も餓ゑ
たる虎の如く、器にのこりし魚の骨は化野に異ならず。とやかくするうち音もなく右も左もしづまり
て、此所に海誓山盟あれば、彼所に顚鸞倒鳳ありて、襄王が夢を結ぶ時なりけり。〇鳥屋忠兵衛は梅川と深くなじみて、

金にはつまれど身はつまらず、あげ代がたゝまつて此の二階がとまつてあれば、ばんとう勝作がはたらきにて、ねずみ番に金をやり、こよひやり手部屋のひけるを合圖に、下ざしきへおく〳〵しおき、忠兵衞は下座敷のくらいところにつめたいよぎふとんの中へはひり身をしのびゐる。をりから梅川「さぞきうくつでおざんせう。」トシふみに用はざしきの客をねかして、てうづにかこつけてこゝへ来り「とゞきいしたかえ。」忠兵衞「きのふとゞいてくはしく見た。手前もいよ〳〵懐妊にちがひなく、近々にひつこみ、寮へいつて産すとのこと、昔の身なら相談のしやうもあれど、何を云ふも金がさきだつ。知つての通り勘當の今の身の上、昔忘れぬ朋友のなさけにて、少々づゝの合力でかすかの暮し、はなしにならぬも恋しさ。」梅川「初めにお目にかゝつたは忘れもしんせん去々年の三月、それから一夜が二夜と度重なり、じれつたいと逢ひたいと云ふ、難を心につけてからとやかくするうちに、」忠「ヨレよ悪體な、今さらそんなことを云つたとつて借金の云ひわけにもなるめえ、耳をだしや。」ト何かさゝやく梅川「わたしもとうから其のれうけん、引込んで寮へゆけば、ぬしには逢はれず、文のたよりもし憎くなりんす。それにまだ聞くさへ怖いおろし薬とやら、ひよつと死ぬまいものでもおざんせん。よしや身にけがもなく出勤なしてからが、傍輩衆に顔見らるゝも、恥かしうおざんす。それに附つてお出でなんす通り、お前をせいて客衆もきれ、おもだつた馴染もなく、あの八右衞門さんの外は此ごろのきやくしゆにみな初許り、それにつけてはだん〳〵たゝまる呉服屋の借り、諸々のかけとこもつまらぬわけなれば。」忠「そんなら逃げる料簡か。」梅川あたりに氣をつけうかゞひ 忠「その料簡なりやしやうがある。」

實はおめ達が此の智恵をつけてくれた。聞けばあしたァノ八右衛門めがしまつて下の獄へ下りへとつれまいくさうだ。俺をせず、てめへに氣をもませたではおい、あいつがおちどになるやうにいけすからふけるがいい。宵に地をはりあらが俺にけんくわをしかけたが、あれも八右衛門めが頼んだに違ひはねえ。何かにつけて憎いやつだ。折よくあすは宵闇なれば、たんぼへ出る道のうら口、あれはできへまはつてゐよう。逃げさへすればこつちのものだ。折もなく今まではなしもせぬが、こゝから西里半わきの田舎中の口村といふ所に、おれが實のおやご孫右衛門どのといふがある。おちつき所はまつそこさ」梅「そんならァノ梅春さんもしようちで」丹「ににがしてくれろ註文で、あの子が貌にをさめてゐな。あすの手はずもあの子に聞きや」梅「おゝ二階はござんは鮎しいでござんすよ。つき出しからぬしがせわについてくれなんしてから、わたしが苦勞を身に引きうけて、同じときに突きだしに出た女郎衆より、夜具も早くしたはしてまた内證のせわも早くはなれ、新造出しもはなやかにしてしまひ、つねぐも客衆のしめ其のほかにたつとも人にひけをとらせず。たいこ持や何やかやにも切れはなれがよいとひやうばんされ、着ものの模樣のあんじまで人にこれはとほめられるも、みんなぬしのせわゆゑでござんす。わたしが逃げたらばてつきりあとで、ぬしにうたがひがかゝりんせう。それぼつかりがわたしや苦勞でおざんす」ト、思ひつけな きつ次の間より「おいらんえ。」トいはれて 丹「さつきにから

あすこで始終聞きましたっ跡のことはわたしが呑込んでをりますから、必ずお案じなされますな。一ツ、こゝをなちのいても、身二ツになつてから、忠兵衛さんも勘當のおわびをしまして、おもて向きからおいらんの身うけをし、目かけのお身にならねやう目出たく女夫になりまし わたし〳〵もかげで祈つてをりますにえ。 といふ折から、ハヽおかやら、[illegible] 此の[illegible]の人と[illegible]
こと[illegible]ありなかれ[illegible]も御
興を口すさむ。

閨情曲

青樓[illegible]鷄鳴[illegible]
[illegible]
唐突佳人罪枕起
[illegible]

夢裏陽臺雲雨情
[illegible]
無情亦復是多情
[illegible]

客「駕籠はひつてゐるか。」 茶屋男「とうにはひつてをります。」

○第　三　回

金讒なつかしき客にもかまはれぬ廓に行くは女郎の眞と卵の角道

世の中は道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴くなる、とはこつと昔、淺草に隠れ栖みし時代の歌なりけり。今繁華の時なれば閑古鳥も寂しきことを知らず、熊谷の堤で小判をかぞへてゐる氣の

なし、されば人の心もおのづから濶達にて、煙花のにぎはひさせは云ふもさらなり、やはりにはあらね木戸尻、色と戀との敵の二かい、水のまにまたる鯉までもうかれうきたつおはてわざは、むかふ川岸はふの宮中の島の八右衛門といふは、金銀ふんぐの金箱にて次郎の眉がる擔簡、おかんにてあぐら、八右衛門「ヨウかれ野をみはらしたといへばどうもいえぬではねえか。」たいこもち　梅「左様でござりますネ」よね「ここは二かいの眺望は妙さ。」ふり袖　さよ丹「モシおいらんのところへお富士さんが見えんすわいな」梅「ほんにナア。」ト、ふまいでゐ女げいしゃ　梅「観音さんの塔も見えます。」　八「なんだかおもしろくねえ日だに」「なぜでござえます。」御酒がしみますかネ。サアこれではじめませう。」　八「いいんや、猩々が出ばんにでやァしめえし、酒ばかりもはじまらねえ。」　よね「わたし共、おいらんがうかねえ。ちつとうかし申さうぢやァねえか。」　梅川「ちつと心もちがわるうおざりいす。」番とうし　梅春「モシおいらん〳〵ちつとうき〳〵しなんしな。ここがしらけんすにヨ。」ト、むかふ川にきとられるなど、はなれるをたいこもち　梅「モシひとツおとしばなしがござりますゼ。」ト、えもんたちよいとつくり、袖をひざの上へのせ、「花鬮栃に紫檀棹の三絃が、會所の棚にゐて朋友の集りの讃に云ふにゃァ、聞けば三河島に湯治が出来たさうだ、芝居の三みせんなんざァ土用休みの内いつたと云ふこつたが、ナントおいらもいつて見ようぢやァねいか。」と話す側に、金客の樫棹犬皮の見世さみせんが聞いてゐて、「モシ湯治をなさるならわたくしもお供をいたしたうござります。三ツ星の商業で

もとかく瞞りません。」といふから、紫檀棹が、「どうした、よこねでも出來たか。」といへば、三味線が「ハヽヽヽとかの竿を痛めましたが、此奴アどうでござりますヱ」 座「おきアがれ」 梅春「ばからしいねへ」 ト、ほどなく出ていれ、皆々八右衛門がきげんをなをしなぞあつてや○かくてむめ川は、忠兵衛がさぞ待ち遠ならんと心せき、座敷のやうすうかゞひて、外して出る庭の面、幸ひ宵闇折よしと、心は先へ飛石づたひ、番頭女郎梅春は、萬事に心得顔の、うしろにしばし立ちどまり、梅春、小ごゑ「モシおいらん、そのうちかけは人目だつ。わたしが下着の此の小袖を上へ着て御出でなんし。」 梅「ホヽ、ご親切な今になつてまで此のおせわ、死んでも忘れはいたしいせん。」 梅春「サア／＼お禮におよびんせう。この口惜へ落着いたら、やうすを詳しく」 梅「ふみの便りで。」 梅春「忠兵衛さんを待つてをりいすにえ。おれ／＼おまへさんを呼ぶのはたしか八右衛門さんがこゑでおざんす。みつけられては一大事」と梅川が手をとつて足早やに走りゆき、庭の戸開けばさながらまつて、 忠兵衛「梅川か」 梅「忠兵衛さんか」とむめ川がおもはず聲を發すれば、そばに木を蔭み待たる梅はあるが、おいらん開を言おつせんすと氣をつけられて氣のつくは、夢の鹿の夢にはあらで、やはり箕輪の別莊に寐くたびれしまゝ、梅川が、とつつおいつの胸算用、思ひに迷る此の時節、そこからして逃げたらばいかゞあらんと心のうちに思ひしは、定めてかくもあるべしと推

量じたる其の始終、筆のゆくまゝ書きつゞり、色情に終身を謬るともがらの、少しは戒めともならんと、蔦の唐丸が求めに任せ、紙くづかごより拾ひ出し、そこらこゝらをつゞり合はせてつひに小冊となし侍りぬ。

手段詰物娼妓絹籭　終

富岡八幡鐘序

往昔は鱶の出たる川なりとて、ふか川と名づく。今は何でも永代寺の鐘は、枕をそばだてて聞く、女郎買の雪は、簾を捲いて見るとしやれる。恐れ多くも御室の宮の御詠に、治まる御代は永き代の寺と有りしも宜なるかな。門前の茶屋、清涼殿とも云ふべき家造なり。後に社の山を背ひて、前には泊りの舟を繋ぎ、十二軒の娼家は、実に月宮殿に異ならず。何一つとして云ふべくもあらねど、辛きは別れの一つ鐘。あかぬ別れの鶏も、境内にて爰へ来ツヨ来と、手前勝手の深川びいきを嘯く。遊びも爰もごつはりしたるを、此の里のよしとすれば、たゞ一ツ刻に八幡鐘と題する而已

清々老人書

自叙

無上佛が威言でも、西方淨土、七、雙親、伯父、叔母意見でもとは、潮來節の確言、通も不通も此の道に迷ひ出しては、慈親の異見もはな歌とのみ聞きなし、魂は猪牙舟よりも二脚ほど早く、とんで彩樓へ昇れば、たちまち有頂天となる。心こゝにあらず、一人たんれいなれば、一こくを云つて亂を起し、石礫のごとく千金を投げうつて、紙衣を著て借金の淵にはまる。嗚呼恐るべしまた愼むべしと、きいた風に不佞一歩の小冊を著はすと雖も、まだつき出しの八幡鐘、ひゞかすほどの力もなく、毫に杖つく初作は、趣向が紙治かんもんと、戌の小春のはつ霞、たなびく冊子の底の中へ、手管もはりも何もかも、知らず知られぬ中なれば、人の誹謗も世の義理も、白かみならぬ反古似き、やく味の加減は一覧の諸君子、ソレ能いやうに、おたのん申しますとしかいふ。

戌のはつ春

喜多樓乙息子

かはきち誌

富岡八幡鐘

第一、間夫客　うそとまことの二道かけしきぬ〳〵のわかれ鶏

第二、恩と義理　兄がいけんはしん身のなさけ

第三、讎と讎　まことをあかす夜半のむつ言

富岡八幡鐘

發　語

金城の巽に當り、貫けて鯰川と呼ぶ。情を商ひの湊にして、數千の舟を浮ぶる流れあり、入船あれば出船あり。表積荷積は軒を並べて森羅萬象し。掛行燈は天に輝き、佃藤の文字燈と共に太し。闇田川の流れに白帆を浮き、白水を流し、舟樓に着船あれば、鎌倉河岸に豊島屋有り、著々たる幸頭持有れば下駄有り、手摺手管の口先には、錠を卸す親舟あり、別れを惜しむ衣々には、涙で動かぬ猪牙舟あり情に繋ぐ屋形舟あり、猪牙で來なせ、屋舟で來なせ、ホイ／＼／＼と、醉うて來るあり不順あり。一寸先は闇の夜も、男樽女樽の聲と倶に、入舟町の水し手締、卯の花點頭く一構へ表の入口は少し狹けれど、玄關より向うを見晴し、見通しには鼓樂の額を打あて並ぶ。河岸の棧橋には入船出船をなして押合ひ、卯花樓なる々の聲と共に、女中高下駄の音から／＼と驅出して行く。

堂島茶屋の段

土佐

蓑六の善「ボン〳〵、金棒の音から〳〵〳〵、夜の世界、若いものきうおなしまひ、あんどうをとぼし。かしりの若いもの江戸の舟やどへかけなとりにいつて歸り、出ばんのわきにしやがんでめしをくつてゐる。料理番は今めしを食つたといふあんばい、やうじをくはへてすどりぶたをつんでゐる。女中、娘分はいきぶしようにかけて歩きながら、若いものをよんでゐる。おくの見通しには、今あがつた客と見え、一人せんどうとさしむかひで何かさゝやく。もつとも始めて、お屋敷と見えて、孫右衛門、よはひ四十二三と見え、色あさ黒くでつぷりとふとりじし、やしきでは、やうなら奴風なり。衣裳つけ、ゆふきあゐじまの小袖、花いろ紋こはくの帶をかひの口にしめ、木小くらのしまに、黒のちやまるのくゝらをけぬきあはせにしたはおりを着て、本所のおやぢがけつたしみのきせるに、ごたいそうに見えるさげたばこ入れ、いづれ大臣とみえる風なり。女中、娘分〳〵しのはをひく〳〵、だいのものでうしをはこび、ひとりの女中寄場からかへり、若い者とさゝやいてゐる。

蓑六「おあひかたは誰さんだエ。」

女中「ひとほしの在一人は小春さんよ。さしておいまさんにおすぎさんが宵どまり、おわきさんはしん川の治介さん。おいまさんも心まちがあるよ。そりやアさうとこんたア、おうたさんの文を届けたか。」

若「しろかね町の岡本へ出しておいた。」

女「よしく〳〵、おや小春さん、さあおはやう。」小春、よはひはいまだはたちのうちそと、紀の國やの板がしら、いのじといふおきなひはしたことのない子にて、至つてきりやうのよいといふではなけれど、あいきやうはゑくぼにこぼれ、水髪のひつつめしまだに、あかいきれをいくぢなくむすび、衣裳附はきやらすゝだけの上着、しまちりめんのむく、下にいたじめ二つほど重ねて、二重どんすのはゞびろの帶をすこしよこのはうへしめ、黒塗に紋のついたうぬぼれかゞみ、三つをりのかみ入にみす紙をまいて帶へはさみ、重つくるしく歩いて來て、しやうじのあなからのぞいてみて、ざしきへはひり、女中のそばへすわる。おきだまりのさかづきごとあり。蘂波介、女げい者一人は千代市、三味せんをついて、手拭でさをを二三どふき、絲をきうきうといはせ、二の腕のところをなめて引出す。上唄げに花ならばはつざくら、月ならば十三夜、いつれおとらぬするどしの、あなたへいひぬけこなたのにて、いつれまるかれ候ドン、チャン。」ト引きしまふ。

波「チトいたゞきたいネ。お杯はどけへかくれたネ。」

女「アイ爰にありやす。上げやせうネ。」

波「成

程この子は悪いくせだ。杯をもつとはなさねえ。」女「すヤ口の悪い。わたしやァ酒はたちものだ。」波「よう譃をつく子だ。さつきも茶椀でぐいとやつたを見ておいた。じやの子ぢやァねえが、うへ下の口で呑むぜ。たつたり呑んだりしたる禁酒ありたア、おめへのことだ。」ト、四角なしやれをいふ。女「アイわつちやァ酒をたつて、尻をきられるやうなものだ。」ト、まけずにしやれてゐる。孫「コウ波介、つかねえこつたが、てめへうちのげんくわにやア、高ぢやうちんがあるが、ありやアなぜだ。」波、すこしあいさつに困つて、「ヘ、あれかえ、あれは私がたべよつたときに、うちをまちげえねえしるしさ。それ(和)字がかいてありやす。」孫「ヤ、こいつはいい。久しくこつちへ来ねえから、いろ／＼な珍事が出来た。鬼小僧がほゝづき、山のでんがく、うなぎやぢやアいてふやがいつち古からうし、折介といふ女げいしやなぞはおほ笑ひだ。」眼介「文字捨さんの事かえ。なか町にやア珍介さんといふのがありやすね。」孫「さうよ。小あたり甚平はどうした。」波「ありやアこつちにやアをりませんが、おつなやつさネ。」孫「ウ、、えびすのみやの丹宗はたつしやか。久しく逢はねえ。このあひだ雨に降りこめられて、よんどころなく京之介がとこへ寄つてはなしさ。これはしたりまだ聞くことがあつた。やらうになつた子供があるぢやアねえか。」波「去年は大騒ぎさ。」孫「きついやつだ。時にこんやは少し怺急ぎだ。おとこにせう。まあようはあるめえ。あとでおもいれ呑んでいくがいい。」ト、はなしてゐるうち、中ざしき中をひつさらひ、女「ちとお二かいへ入らつし

やりましよ」孫「ヤ、よからう／＼。」波、千代「ハイさやうなら、御きげんよう。」ト、いとまごひしにわかれる。孫、とこう
こにねころび、卑人が川どこにあつたたばこを、たばこをのんでゐる。ほどなく小孫、お伴をといてかうぶへかけ、ねまきすがたに客のまくらもとにすわり、はおりをたゝんで床のわきにおき、すぐにねころびしばらくだんまり。
孫「でえぶふさいだやうすだ。色男のことでも思ひ出したと見えた。」春「おもひうちにあれば、いろそとにあらはるとやら、おめへさんの御推量のとほり、色男がくらうになつて、おまへさまのどへとほりませんが、こつちではかりくらうをしても、さきおやア何とも思ひやすめえネ。」孫「ずゐぶんさきでも思ひさうなことだ。」はる「ほんにかえ嬉しいネ。まあもつと此方へおよりなせいしな。」孫「イヽこゝなおきうつ、傍へよつたら、色男に叱られよう。」はる「ナヤどうしよう、わたしもいろをとこで苦労をするやうだと、どんなになつてもようございますが、そんなこつちやアありません。」孫「あんまりいろをとこのねへおめへでもあるめえ。此の頃噂に聞けば、紙治とやらいふ人と死ね死なうといふ中といふことだが、その人も此の頃おやア、女房子まで振り捨てて、儘にならずばいつそ死んでもしまはうとか、何とかいつてるさうだが、ふれうけんな人だ。しかし迷つては無理でもねエ。さういふいろをとこのあるおめへを、どんなに思つてもはじまらねえけれど、おらアしんじつおめへに惚れたよ。」はる「イヤ嘘ばつかり。飛んだ事があらつしやるからこはいよ」孫「ほんならおめへどうするこ」はる「死んで見せやすよ」孫「そりやアかど違ひだらうよ。」ト、なにかはなしのどうぶく、はしごのおとばたばた。孫、千代「こちらへ。」トあき

座敷の暗いとこへ連れて行く。客は紙治、としは三十一二と見え、中肉の中ぜい、すこしにがみばしりて、けいせいのすく風なり。衣装附はゆふきぞいらずじまの上着、ほうらんにまんのおはせばおり、二重まんまの帯をかひの口にしめ、左の手に二様をとり、ざしきへはひりすわると、ほどなく女中だいのものいろ〳〵はこぶ。ひとりの女中はこうしを持つて来てすわる。女「紙治さん、お久しぶりでお出でなせえしたネ。」治「アイ何かようがあるとつて、呼びによこしたから来やしたが、どうしたネ。」女「小はるさんはこつちへ出てお出でなせえます。」治「なじみか。」女「イヽエはつきおまつと呼んでまゐりませう。」治「なにまアいいよ。」ト、おまんをいつてあると、その中杯事いろ〳〵、あつちへやつたりこつちへとつたり、しやれ二つ三つあれどもこれを略す。治「もういいよ。忙がしかろう。そうしておいてみんなあつちへいきな。」女「何ようござります。」治「なにかまアねえ。」女「さやうなら、いつでもまゐりませう。」ト、出て下、ゆきながら、小春に聞かせる。小はるはとかくたつてうにおもト、すがたにもいおれず、イといつた作りで奥である。治「ナニ、客ならちよつと逢つて来な。」治「なにさ、つれが来なすつたと云つて知らせて来たのさ、おめへさんも言ついいうしやうだネ。」治「なにさ、さうおやアねえが、かのいゝをとこでも来たのかとおもつてさ。」はる「またあんなことを云ひなはる。もうよしておくれ。しみじみ噂もされへだよ。」治「それでもはまつと来たなら、うろたへてかけだすだらう。見るやうだ。」はる「なに、そりやア昔のことさ。」治「いつつけてやるぜ。聞いたらさぞ腹がたつだらうの。」はる「とうぞ腹を立つて来ねえと、わつちもたすかりやす。」ト、口と心は雪と墨、何かくせの最中、治兵衛はかりねの寂しさ、もしほかにいろなとでも来てゐるかと思ひすごし、とうとう立聞きをしてゐるていなり。それとは知らず、治「そんなら紙治がことは、思ひきる気か。」はる「アイもうとうから

さア、そのかはりにおめへさん、じやうがあんなさるなら、末ながく來ておくんなはいましよ。」孫「そんならきつと思ひきる氣か。」はる「アイ。」孫「よくさう早くおもひきられる事だぞ。けふは人の身の上、あすは我が身の上だ。こゝらがさとるとこだ。」はる「何を云ひなはるえ。まあもつとこつちへおよりなせえしよ。」ト、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。立聞く治兵衛は堪へかね、障子をけ放してはいり、たぶさをつかんでひきおこし、孫のかほを見てきもをつぶす。治「やァあにさんか、面目ない。」ト、にげにかゝるを、襟ひつかんで下へひきすゑ、孫「こりや身しらずのおほべらぼうめ。女郎にまことのないと云ふことを、やう〳〵今知つたか。女房子にも見かへた程あつて、成程じやうのあるしんじつな女郎だ。てめへの氣の違つたも無理もねえ。」ト、はおしめる。小春はひとり言氣をもんでしやくをおこす。治「あやまつた〳〵。あやまりました。今日といふけふ、あいつが根性の化のかはがあらはれました。エ、いぬめたぬきめ。あしかけ三年と云ふものばかされて、女房子まで袖にして、死なうとまで思つたが口惜しい。エ、どうしたら腹がいよう。」ト、ひたひぎはをはつたとける。拍子にかんざし四五本をれる。孫右衛門ひきわけ、孫「このうろたへものが、人にとかくあるものかえ。とはいふものの腹もたたう。かけかまひないおれさへ腹が立つ。まだそれよりてめへの女房のおさんは、身のおき所もないやうに、あそこに二日こゝに三日、ふたりの子どもが育てたいばつかりに、おはり奉公までして歩くも、あァ云ふ心いきの美しい女郎衆に迷つたゆゑだ。」治「もう〳〵、さつぱりと思ひきりました。」トくちにはいへど、こゝろでは、おもひきる氣、ちつともなし。「おも

ひきつたからは、てめへの方から書いてよこしたきしやうも何もかも、みんなけへす」ト、はふりつけて、「も
し兄さん、あいつがはうにも、わたしがやつたものが有りやすから、お前とりけへして、火にでもく
べて下さりまし。」孫「オ、よく思ひきつた。これ小春、治兵衛がはうからやつたものを、けへしてく
りやれ」はる「そりやア治兵衛さんあんまりで。」治「なにあんまりだ。そつちが餘りだわい。これてめ
へ許りは、さうしちやアすむめえぞよ。」トなみだぐむ。孫「小はるがさういふ心とは知らず、やしきのだんな
の大小をかり、やしきものになり心をひいて見るも、二人が中にあやまちでもあつちやア悪いから、
どうぞしやうもあらうと思つてのこと。だがかうなつちやア何も云ふ事はねえから、そのきしやうと
やらをけへして下せえ。このまもりぶくろか。これか〳〵。」ト、ふところよりだすふみのうはがき「小はる樣まゐる治兵
衛から」はる「ア、もし、そのふみはだいじのふみ。人に見せては。」孫「そんなら此のふみの客へ、し
んぢうたてる氣か。」はる「ア、アイ。」トむねい 孫「つとめの身でもそれ程までに」治「あにさんなんとえ。」
治「はて眞實のねえがつとめのつねだ。小はるなんにも云ふな。」はる「デモコレは。」孫「こりやしよむ
こゝにあるしたいトむねを「ハテうきよに鬼はねえものだによ。」はる「そんなら必ず孫さん。」孫「小春。」
孫はる「かきねて。」はる「おめにかゝりませう。」チャン〳〵をりから、おくざしきのめりやすきこえる。「をし鳥のつがひし言葉
きんのはし、おもぶえにしはふか川の、流れにわれはすみざくら、まだ春の夜もあけやらで、間夫に

わかれのかねのこゑ〳〵　四ツ明の拍子木「カチ〳〵〳〵〳〵〳〵。」
話に付く、小春は治兵衛に死ぬほど惚れてゐれど、女房おさんへ義理をたて、あきもあかれもせぬ中なれど、おもひきると見えたり。ねがはくは作者も、これぎりにしたきものなれど、互にほれやつてゐるなかゆゑ、やけぼつくひには火がつきやすく、まゝ不料簡をおこすものなり。つゝしむべく、おそるべきは色慾の一つなり。

其の二

夫れに引替へ奥座敷の世界は、燭臺に百目がけの蠟燭照り渡りて晝の如く、臺の物は列を正してならび、藝者の口はぎり〳〵と鳴竹のごとく廻つて姦しく、山出しの女中の顔は、白粉鹿子斑にして、猫じや〳〵の團扇の如し。行燈にぺん〳〵草のかげぼふしは、小人島のいてふの木かとうたがはれ、そのまんなかにざしてゐるいゞれをきはなる大臣は、本所竪川邊の通子遊名里暁。（としは三十五六ぐらゐに見え、いろ付氣味のわるいほどしろく、中ぎかすきにはすかけの小いてふ、衣裳附はいづれ御ぞんじゆゑこれを略す。五分なりんすいたところのないといふ風のにたさまに）〇一人は近所のやぶいしやにて遊宅、（これも年は三十内外、少しをかしみのある顔にて、淺黒くけいせいのよくも惡くもせぬトいふたちなり。）色世界は、げいしや、女中にて賑やかなれば、相方の子供は一寸ぬすみを賣りにいつたやうすなり。藝者、（三みせんを下におき、ばちで手のひらをたたきながら、心いきのいたこをうたつてゐる。）女中「文字音さん、今うたひなすつたありやすは、とんだいいねえ。ありやァ誰がこしれへやしたネ」　文字「な

にありやァ八幡鐘といふ、こつちの世かいを書いたしやれ本にありやした。」女「ほんにこつちのしやれ本が出来たとネ。」文字「アイ、とんだあたりさはりがなくていいよ。そのかはりにあなもなんにもねえ。」女「けへつていまぢやァ、あんまり穴をかかねえはうがようござりますよ。」里「なにしやれほんに穴がねえ。そりやァ小のの小町でも書いたしやれほんだらう。こつちは穴にたはむれ枝にふしだ。」里「穴かしこ〳〵。あなおやァ里暁さんがあかるかろう。」里「何くれえのさ。暗くつてもふじの下穴からァ、神奈川へぬけられるの、狐の穴には狸がすんでるの、しやうじの穴から風がくるの、目からはなの穴へぬけられるの、女郎の穴へは客がはまるの、大佛様の鼻の穴へは、からかさをさしてはひられるのと、云ふぐらゐな穴は知つてゐるから、まんざらすみのくらきはうへおつつけられて、ねずみのふんと一チ座をする程、やすいやらうでもねえのさ。かういつちやァをかしいが、おんばひがらかさで育つて、少しもの心をおぼえると、あそこの茶番こゝの書會、けふは北國あすは深川、先からさきへ歩いてゐたかはりにやァ、どこの世界へ出ても、あんまり人に馬鹿にもされやせん。とかく傾城やころおすにやァ、鳥居か木をこさねえぢやァいきやせん。うはべからァ知れねえが、おいらァこれでもするだう山水でさらしあげて、正銘まじりなしだ。よくかゑしあて御らうじろ。それ江戸つ子だ。」ト八も上通ひのせいか、高からずひくからず、中肉中ぜい、少しきりんにて、中背なすくたちなり、一人はやつさ いやァりのいなたてか、目の碁ろきにはらなかすうに、ならべてゐるをりから、そとには、おつと、としは

年は二十八ばかりの年増にて、この郭にてはいつち古く、よく人の世話をして、人の事ではかり氣をもんでゐた。里「その
ち、今宵きたりし運宅とは、またさらでもなき中なれど、人の世話もいたして、睦しきあけたやうなり。
や天人のあまくだりだ。いづれも美じるし〳〵。美をつくしても逢はんとおもふも無理ではねえ。」
やま、つぎ「フム。」ト、いつて笑つてゐる。そのうち、若いもの「ちよとあちらへ。」客ふたり小座敷に行き、みなみな
味をとる。女中衆もけいしやも、おほぜいいないとさこがしにわかれる。
里、ひとり床の上に寝ころび、たばこのみ、なかなか、いたこの本をよんでゐる。ほどなく、やま
まへり、里顔がまつてゐるま、をひつたくつて、そばへ寝ころび、ほんをかほへあてて笑つてゐる。里「でもさぶさ
えるの。色男のところから便りでもあつたか。」やま「わつちらァそんなものはありやせん。」里「そんな
ものはあるめえが、亭主があらう。」やま「かはいさうに、そんなものは猶ないよ。人の心いきもしら
ねえで。」里「おめへの心意氣がどうして知れるものか。それが知れりやァ、つらねへしやにならァ。」
やま「わつちが心意氣を、おめへさんに見せようか。」里「こいつは一チばん見た出しぐれだ。」やま「さ
あ見なさいまし。」トいたこのほんを明けて出す。里「なんだ。ひんと心に錠まへおろし、どんなかぎでもあきはせぬ。
これがおめへの心意氣か。心に錠をおろして、下のはうはあきどほしだらう。錠といへば、このあひ
だ堀の内に、おめへへ錠をおろした額があつたけ。それをあけてゐた女があつたぜ。あれはたしかいろ
をとこが出來たと見えた。女のこゝろいきは、みんなあのぐらゐなものだ。おめへなんぞは、なほの
ことだらうよ。」やま「かんにしておやり。わたしらァそんなっはきなものぢやァねえが、おめへ、ま
さかのとき逃げねえやうにしなさいし。」里「そりやァあしだのはいれだ。」やま「その口を忘れなさい

ますなよ。」ト、○○○○○○○○○、少しごゑにてひそ〳〵とはなしをしてゐる、かんじよのところへきたるに、つれの浮「里暁さん、寝山がらすか。」里「遊さんか、はひりなえ。」遊「寝たがや〳〵とおじやまだらう。」ト、はひる。里「お内がは。」遊「れいの長屋あるきさ。こまりやす。」ト、うはぎをすれば、里「遊さん、なんだえ。」遊「なんだえもすさまじい。おれをおきざりにして、どけへ引つこした。また間男をかせぎにいつたのだらう。悪いくせな女だ。」ト、われたしがいつまでとこをしたえ。」遊「いつか。それ五日の日だつけ。」里「これあれが内ちやア、私嬉けんくれはてゐねえよ。中なほりに一つ呑みない。」遊「ええなに、いつでもてん〳〵の悪い事はただへあ捨てておいて、人はかわいがりやすよ。憎らしくつてなりやせん。」浮「ときに、どこにもみんなさうだよの。」里「そりやはじめて〳〵。ここはま笑。」遊「ときに小春さんはかはいさうだねえ。」里「どうしたえ。」遊「けふ、藤治さんのあにさんが来て、小はるさんをかひたすつたとさ。それも小はるさんの気をひいて見て、まことの真実なら、うけだしでもしなさるれうけんだつたさうだけれど、小はるさんはそれとは知らず、たあにもなりさうな客だとおもつて、はれたふりでつとめてゐるを、藤治さんが聞いてゐなすつて、腹をたつてけへりなすつたさうだ。」里「まであとのめもとめられねえしだけへしたが、どうりで〳〵うになつてならねえ。どうしたらよかろう。それ酔いちやいなえ。うそでも此の頭にかんをつけて、いかいみとまれたで首をしめるやうに意見をいふし、もう〳〵事を死んでもしめへてえ。」といつて気をもん

で、又れいのしやくさ。餘りかはいさうだから、いままでもんでやつてるやした。かはいさうに、あの子も苦勞をするよ。男はその半ぶんでもねえネエ。」やま「さうさネ。」里「小はるといふは、紀の國やの子か。」やま「あい。」里「紀の國やに、このごろおいらが近じよから、一人來てるるはずだ。たしかおつたといつたつけ。」やま「なにおつたといふはありやせん。こゝぢやァおつたといふ名はつけやせん。」(これはすこしわけある事なり、川通はごぞんじ。)つぎ「もし遊さん、もうおじやまだらう。あつちへお出でなせえし。」やま「なるほど、こいつは一ばん氣が利かなかつた。さァおやすみ。」(ト、出て行く。おとはさしむかひにて、)やま「もし里曉さん、わつちやァ、此の間約束のことをしやしたよ。」(これはほりものをしたのなるべし。)里「フム、よくてめへのうでにほる所があつたの。おほかた古い佛だらう。」やま「これでお古いかえ。」(ト、ぐつとまくつて目のまへへつきつける。)里「おつとあやまりあやまり。あやまりの和中散。それにて漸う半分りだ。」やま「そしてどうすりやァ、みんな分るのだえ。」里「一つ指をきる事だらう。」やま「難波のむめの高札ぢやァあるめえし。」(とはこいつもひねつたやつなり。)そんならおめへ身をきりな。」里「朝鮮せいばつのきどりか。ウ、こいつはありがたやまの二軒ぢや屋。」やま「しやれどころぢやァねえ。どうぞ私をわらはせねえやうに、すゑながくとげておくれよ。」里「とげねえでどうするものか。」やま「嬉しいね。○○○○○○○。○○○○○○。○○○○○○○○いつそあつたけえね。」里「○○○○○○○馬鹿につめてえ。」やま「それだから○○○○

つおくれよ。」〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 ト永代寺の七ツ七分 ごん／＼／＼／＼、

其の三

月は遙か西へ落ち、烏啼いて霜軒端に深く、明方近くざしき／＼もしづまりかへつて、只いびきの音のみとなりゆけば、おき番の女中も火鉢のわきに居ねむり、いろ男の夢でも見てるかして、何やらわからぬ寐言をいつて居る。若者は二階へあがり、座敷々々をうそ／＼と歩き、早歸りにて客の歸つたあとへつけこみ、ぬきあしをしてひよいつとはひる。此のざしきの女郎おはる、この頃のつき出しにて、なんにも知らぬといふ風に見せかけ、いつたい江戸中をわたつて歩き、下ッはらに毛のなきしろものなり。歳は二十三にて、いたつて色白く、中肉にてとんだ男惚れのする顔なり。衣裳附はごり／＼する縞ちりめんのねまき、しろちりめんのしごきをしめ、少しかたのところを出して、寐て居るかほを見て、

若者喜助、としは三十二三、いろくろく、あばたにて、いたつておふむきく、すこしばかりたかく[illegible]色、つゞけて[illegible]たかく、くろじのはつきりあるつらはねだらの容貌、こはくの帯をしめ、女郎の枕もとに、こまいぬといふ様にて両手をつき、寐いきをうかゞつて、そつとおはまさん〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、おはまはめをさまし、ウ、、引[illegible]の[illegible]する。喜助なほもをこゞして、手をひつこませる。又しばらくすぎて、そつと手をひつぱつて見る。此の時おはま目はさめたれど、寐たふりをしてゐると、[illegible]「ウ、、だれだ。」トむかうをさすゆゑ、喜助は何くはぬか顔に、あたゝ〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、むかうをさげて行き、[illegible]なくなる。又しばらくすぎて来り、とんど 喜「おはまさん／＼。」ト、ゆりおこす。は[illegible]もひきつこい、はま、めを覚し、「ウ、、引誰だ。喜助どんか。なんだ。何ぞ用があるか。」喜「ハイイッツト[illegible]」はま「なんの用だ。」喜「ハイどうもイッツト、いひにくい。」ほ「二この人

はすかねえ、何だな。用なら早くいはつせえ。ひとのよく寐てるるところをおこしてからに。」萬「用は用だが、どうもまごかぶつつけぢやァいひにくいから、まあ云ひますめえ。」ト、顔をあかくし出て行く、故、よびかへして、はま「この人は、そんなことをいつてわかるものかな。まあなんだかいつて聞かせなつせえ。氣にもなるわな。」萬「とんだ御なしんだけれど、どうぞ。」はま「ウ、なにか、堀の内へ朝まゐりにいくから、いれかへものをかしてくれろといふのか。」萬「イ、エ、そんなことぢやァ御ざりやせん。」はま「そんなら小使がねえから、金を貸せといふのか。」萬「いんえ。」はま「そしてなんだな。」萬「そんならおもひきつていひませう。どうぞそけへ〇〇〇、〇〇〇〇おくんなせえ。」はま「この人ア、氣が違やァしねえか。ひよつとうちへでも知れて見さつせえ、おほかぶりだ。そしてこんたのやうなまぬけな男のおかげで、かぶつて見さつせえ、一生うまりやァしねえ。そしてこんたァこのあひだも、小湊さんのところへ朝廻りにいつて、枕で思入くらァされたぢやァねえか。朝まはりがしたかァ、もつと好い男に生まれて來さつせえ。こんたのやうなまぬけものに惚れるもなァ、めえた犬でもありやァしねえ。」萬「どうぞそんな事をいはねえで、たつたいちどでもいいから、そけへ〇〇〇〇〇〇〇おくれなせえ。後生だ。そのかはり江戸へ出たついでに、とらやのやうかんでもまん中でも、かつて來てあげやす。」そして下村のあぶらもかつて來てあげるから、どうぞ〳〵〳〵。」ト云つてをがむ。はまはふきだしながら「おさんどんが色

「恥かしやァしめえし、そんなもなァいられねえから、まアおまへよく聞いて見さつせえな」喜「そんなことをいはねえで、たつた一度いふことを聞いておくんなせえ。」ト、いひながら、おはまが[illegible]、おはま[illegible]

おはまをりから、[illegible]喜「喜助どん／＼、／＼」向うの屋根「おはう／＼／＼。」

[illegible]

富岡八幡鐘　下

跋

何れの處を意氣といひ、いづれの處を野暮といふや。いきとやぼとの仲街を、通りすぎたる一趣向は、則ち土橋の遊びにして、作者の筆の奔りには、乘切りの早艇も遲しとして、意味は六萬坪よりも猶ふかく、山開きをやまとし、三間堂の原を腹として、船頭のわる洒落は、裏棧橋の棒杭の如く、手のある娼婦のかき文句は、一の鳥居の笠木を越ゆ。されば持たらかされる客人も、未だ魂膽いひ盡さず、屏風の内の歡會に、別れを惜しむ八幡鐘、此の跋文のさいそくを、燒筆なしにふせぐものは、

ゑしの北溪

南品俺儞序

夫天、法界悋氣岡焼所分、我友有山手者、因彼焼餅、大於大木戸之莊丹餅也。其焼甚之深淺難
其不叶、嘗憶先達之書花容北州之魂胆、而未盡南驛之意味、亦是可謂後人之補以我所嘗矣。
於是問曰於俺儞、以託人旁有無之人情焉。其戯言妹々通々、畑無是南貌芽之走品海、自然
最當可圖之荒品俺、古今筆力響由腕、新刻招牌掛下坊、其使者已感、墨予作濃毒之序。

寛政己亥春

放蕩山人題青海舍

自序

夫れ南国の小句欄は、南京操にして義太夫の扮戯趣を仕組み、南国の鞍藏は、南品傀儡にして狂言の寓言思入を誌す。相似たり、なんぞ。答へて曰く、かれに三ノ切の愁歎あれば、是れに二ノ口の屁譚あり。章句欄中に楽をさすなり。高輪の小ボッカリには、長地にしてウキシンなるを、ヨハリと聞いて、レイ三重となる。忍ビ三重の客に、大三重をトッリガヘシ、色有り、地色あり。今戸それが楽屋まで、見通しの手すりにかけて、殺し文句をきかする事しかり。

時に寛政こつのとし、心ときめく春の永き日、花の江戸前に鈴木の館をくらつて、一杯機嫌にいふものは、月地萬年橋の西に、

青海舎主人戯述

南品傀儡

南海舍主人述

品川御殿に、イのあるとないとが此六の客、此の句の心を考ふるに、かの宗禪寺の落書の段に、侍の文字を分ければ人の寺、と、これらより出でし滑稽なるか。一日南畔に泊して、男蒲が艶言をきくに、たれかはけふのつまならん。仇し浮世の仇し身にも、四季の盛りはにくしむかし舞、と、三線山、漆洪樓とともに、まだ夜をこめてなく鶏ならで、問屋場にいなゝく荷附馬、騒々しく玉川をならし、高輪の十八町、牛の小便を引いて長く、當所のおもかげは則ち舟の如く中し、石橋通が二階は、動六おはけの間とも云ふべく、安房上總を一ト目に見わたし、有喜壽の森に一トはけに雲靆く翠がすみ、御殿山に御てんのなきは、八ツ山の一つあるゆゑか。よつて定めぬ旅客の浪枕すゑると見ては、百に飽いたといひし樂人も満足なるべし。山から里通ひには、丈の御見を結縁して、うら南東をきめ頭巾、顔をかくして行く人の淺葱づきんも、かぶると云ふは禁句なりと。茶屋の女が提げたる提灯は、二日醉の天窓の如くぶらつき、釣が浦にさゐれてし提置、衣干すてふ朝日影、匂へる山も、はや直亂

の灿ぼしらまで昇つて、滄海に映ろふさまは、影見世の腰張のごとく、泉岳寺の門をてらし、いよいよ輝く義士の英名、大木戸の牡丹餅、二つくらつて七間ゝに休む遠騎の供、店下に巣をはる蜘介は、後朝の客を待合の、辻々角々おのがさまぐに別れ行くは、くもの子散らすも斯くやあらん。夕の袖に残るうつりがは、朝に堺屋が襟をもとめて、たましひあとへ／＼と反る。百萬石もけんへきも、すり違うたる其の中に、四國のさる家中衆と見えて、餘程よろしき人柄の侍二人つれ、けふの非番を幸ひと、ひざくり毛にむちうちて、高輪のなじみの茶屋へ來る。森傳吾、年の頃五十七八、鼠内綸の小袖に、黒縮緬の綿入ばおり、紋所はすみ切角にだき茗荷を、しろいとにてぬつたりとならび、はながみ袋はもえぎ繻紗のきんちやくを、紫縮緬のはくろぐもにてつゝみ、尤も胴じめのついたやつ、大小はさんの太刀ごしらへ、何れもぴかぴかとのつば袋をかけたやつ。二夕重ばなをの中ぬきをはき、うちをのぞいて、「此の間は大きにお世話ぢやつた。」ト ほゝかむりづきんのひもときながらはひる、「多仲さん、サア上り給へな。」小島多仲、年は三十二三、中たけの男に、元ゆひたんとまいたやつ、黒ちりめんの小袖に、同じくわた入ばおり、白茶じゆすのだいかぐらの締める様なはゞの廣き帶、しゆざやの大小むらさきの下げをを、八はたゞるの四いら甫をはき「ヤアまあお先へ。」茶屋男藤七、朝ゆゑおもての格子をふいてゐたりしが、二人を見て たふさんをたらいの中へ入れて、あたまの手ぬぐひ取りながら、「イヤ是れは、よう御出でなさりました。サアお上んなさいまし。モシおかみさんエ／＼。」ト呼ぶ。女房しやうじのかけかへの間に、あさあしを入、ひばちいぢつてゐたりしが、是れをきいて目をむづ／＼しながら、「これは／＼、お二人さまながら、ようゐらつしやりました。モシあなたそこはきたなう御座ります。コレ藤七や、そこはマアさうして、お茶をあげさつせえな。モシあなた、眞平御免なさりまし。」ト、くひかけのめしを／＼ふく。藤七はたすきをはづして、茶をくんで、ふたり前へ「ハイ、お茶をあがりまし。」

丈「ナニかまはつしやんな／＼」　多吉「此の間おぬしは、赤羽根の通りを通つたが、どこへ行つたのぢや。なぜ寄らなんだ。」　錦七「左様でござりました。あの日は天氣がわるうござりますし、それに大きに急ぎの用が御座りましたから。へエ、、どこで御らうじました。」　多吉「あすこの楊弓に居つた。」錦七「それではやつぱり、およ申してもお留守だ、ハ、、」ト笑ひ「ドレ、オヤ、、こりや／＼。」ト、[illegible]の文を「お仲さまのところへ、御文が参つてをりました。」ト多仲にわたす　丈「おれが所へ文はこなんだか。」　錦七「イエ、まゐりませなんだつけ。」　多吉「ハテな。」　丈「[illegible]よつぽどあなたはおまで御ざります。これ。」ト、[illegible]森に一ろ、[illegible]　錦七「森さまとかいて御ざいましたから、どうもわかりませんが、噂の氣で見ましたから。」ト、いひながら　多吉「御礼ははや／＼」　丈「あなた方は、御ぜんはどうで御座ります。なにも御座りませんが、さら／＼とお茶づけはまあ。」　丈「イヤモウ。」　多吉「アノ此の間は、おとお運くはござりませなんだか。」　錦七「どうして／＼、怪しからぬはやかつた。見つけであかりをつかぬうちにいさました。はやい船であつた。」ト[illegible]　多吉「ハイ、よう御早くいらつしやりましたね。」ト、下へおりて「多仲さん、すこし御めんなされまし。コウとうじどん、此のをけをつけてくだせへ。」ト後の間へ行き　女房「なにしやる。」[illegible]　女房「水はあの引出から。」　丈「けさは[illegible]からおはやく／＼いらつしやりました。どつからおいでなさりますのかね。」　丈「なにさ、けふは此の人らが非番だやに

よつて、あさから出たのさ。もう多仲さんいかうかい。」多仲「よからう〳〵。」をりふしおもてへところのげいしやと見え、きうへだの小袖に、くろなゝこの半えりに、おしろいのあとのついた小そでに、ぬか袋を持つて湯へ行くと見え、かみもひつつめのしまだ、つげのくしのぎんむねをかけたやつ、ふみのほぐでくゝしまきのうへをむすんだやつ門ド口に彳み、けいしやおさ吉「お品さん、ゆうべはおやかましう御ざりやしたらう。いつそね、あのゆうべのがもちつとして、けさまでぶら〳〵しやす。」お品「乙吉さん、おあがんなさいまし。湯へお出でなさいますかえ。」女房「乙吉ツさん、一ふくあがつてお出で。」乙吉「アイ。」ト、客あるていゆゑ、ゑんりよして、「けふはね、おしやごしは東をんじまへよこ町でる町へゆく、休みで御ざいますッさ。又のちに参りやせう。」ト、ちよこちよこよこ町へ行く。女房「さやうならばもういらつしやりますか。藤七、お連れ申しやれ。」二人「大儀ながらお身いてくりやれ。」藤七「畏まりました。」二人は早氣もそゞろに、多仲は帯しめなほせば衣はせつちんへ行く、多仲「どうだ〳〵。」森「ヤレせわしない。コレ刀はおいて行かうぢやないかい。」多仲「イヤ〳〵、此の間もあそこで組がしらにあうたわ。」森「それならさすがよい。」御時節がらおやっかみさんお世話で御ざりました。」女房「さやうなら、御きげんよういらつしやりまし。それおはきもの。」お品「ハイ。」藤七「イヤこんたにやア知れめえ。」ト、たつて供のわきより出して、「ヨアいらつしやりまし。」お品「さやうならば、御きげんよう。」女房「モシ森さん、お羽織のおえりが。」ト、をつにやる、多仲、森「お世話お世話。」ト、おもてへ出て、八ツ山下へさしかゝり沖のかたをながめて、森「ア、アだいぶまだ沖がかすむわえ、降らねばよいが。」多仲「貴公はあすまでゐるであらう。」森「そい〳〵。」八ツ山下の上りにかゝきはになるこじき「ハイお旦那様がた、お慈悲に一ッせ

ふせさせまん」一読し、さまでさ、「さくへ、大酒だね二人ゝ」与一コレ熊七、すこし酒をやれ」
要十六二才、さしにさえられまい、まだ会いのます」与一すゝさの事わすれいで、ちよつと合点する
のおやぢ」
「まだそのは二階部を、おのしまでがやかしくとおりてきばる時分から、[illegible]のはけない来る
客、たけれい時もれた悪すの情だ、かきしゃくをそてすを、[illegible]
注でる、この田舎客にも。

けいせいのすきばらへ来るやかた客

[illegible]

れた。」喜「あの長八のべらぼうめ、おれがわらおなはいてうしやァがつた。こいつは鹽梅がわりい。」

集「サァやらかさうぜ。」喜「サァ〳〵。」三人「ヤツトなァ。」ト草集のなかをおしわけ〳〵、[illegible]お顔へ申しやす〳〵。」

ト、ふたりみの中をわけわけ鵜、きやつきやつ〳〵と飛ぶが如くに三人はしり行く、しやうあんへつける。此芝居しのあたりから、

若い者四助、たゞいまヤ塔様、よう御出で遊ばされました。サァいらつしやりまし。」ト、見通し連れて行く、坊主常帯れをあけて、

單、年は二十五六、黒いもあまりあんの小そで、白むくのあとをたゝみをしたざにして、きやうきん、[illegible]ど客なし、おなじ色じゆすの帯、かくばねのあふぎをもち、かごより此あんのなかうをしりめで見通し、

☓二四助へ「今晩は。」ト、いひ「子供お茶あげや。モシお駕はどう致しますへ」喜「ソレ〳〵、さういつて下さえ。歸りがけに山がくやへよつて、誰ぞにこいとつて、さういひつけて下さえ。大儀だとつてよ。」四助「畏まりました。」ト、見世の方へ行く。子供「アイ[illegible]シお茶を、」ヤ塔さん、よくお出でなんしたね。」

喜「どうした、てめへやけどはいいか。」ト、ちやをとつてのむ。おきだ四助「コレ何をしてゐる。姉さんにはやくさういはねえかな。時にサア一つお上りなさりまし。」まりの硯ぶた出し物を持つて[illegible]だいぶおおそくお出でなさりましたね。そして又とんだ所から、お駕に召しましたね。」ト、いふは、此の客切通しへんの者喜「[illegible]けふは、八町堀へ用が有ッて、歸りに直にこつちへ來たからさ。」四助「へエだうりで成程。」[illegible]はかりながら。」

ト、杯をさす見世に「アイ、[illegible]」子「ア す折ふし、見世に「四助どん〳〵〳〵。」四助「オイ〳〵。」ト、[illegible]手をはたき〳〵しながら

「四助、立つて「それお火がねえさうだ。」ト、いひ捨ててゆく。女郎朝[illegible]、年は二十二三、[illegible]ふきながら、[illegible]子も行く。故[illegible]客[illegible]

あんに、わから私の思ひのある小くで、一同「一塔さん、おそく來なんしたのに」ト貴客たちうたり、久しいもん
そうなをねまきの上へきて來たのなり
だ。またたき若衆何だらう。面白くもねえ。」此の客さん言わうとの所ところへ久しく來て、「そしてておめへ、
どうする氣だ。」甚太「ひるからので ごうも、そしてエ、もじれつてえよ。」トじれる折から、手 甚「コ
レヤ誰だ、ちよつと來や。ま、てめへか。四助どんを呼んで來や。」ト「アイ。」甚「ひるから來てゐる
と、まだね、湯をしまはねえうちからきんしたっけ。」甚「大方よびにやつたらう。」甚太「よしな
んし、すかねえ。」四助、いそがしさうに出かけて來て、「何で御ざります。」甚太「下々の中へ、猪を一つとつてくだせえ。
早くす。」甚「なんだ、てめへばかりひとりしようたつても、おらア今夜はおきにけへるよ。」甚「そ
りやよしかね。こんな夜はちつといつておいた事が有るから、おけるとよいうおきさんす。今夜はなぜ
だかおまへには、どうもおつだよ。」甚「おつもこつもいらねえが、いつでもきんなじおきやうをよむか
らさ。」此の客しきうに、此の女郎におぼれてゐる 茶屋お糸、何なわの米十「コヤ塔さん、よく海豚なしに
いらつしやりましたね。横木のさん、此の間は。」甚「はやく來たの。萬七はどうした。」甚「おかたす
どれ、よく來なんしたの。」甚「萬七はいましがた向までに」ト台所の格子二本棒「それでかえりまして」
へ出るところ。
甚「お糸どん、一つ香のみなんし。」甚太
御色でおさいたすね、お客か」甚太「家して おくれ」先さはまきに つて、

内へかへつてから叱られましてね。」ト折から、四助「イヤお増さん、わつからお目にかゝりやせんね。時にもし塔さん、ちとあちらと云ふところにいたしませう。」ト子供をよび「コレ、そこの物を持つていかつし。」トいひながらてうしを取つて、すゞりぶたで一つ飲む。四助「コレそしての、ちよつと耳を出しやれ」ト耳に口「あのの、座敷のの、樽のの、それ物を、湯の花さんの所へもつてつての、さつきの約束の物と、とつけへておくんなんしと云や。」子供「アイノ〜。」ト此のうち塔は一人、何かかんがへてゐる。四助とお増「ちと遅参しようかの。」ト子供は二階へ行く。お増「今いきいすから、さきへお出でなんし。」ト四助に口を「ちよつといつてきいす。」ト行　四助「お増とそれはわつちがもちやせう。サア塔さん、お出でなさいましよ。」塔「おさつや、いつしよにいかう。」ト、子供をつれて　お増「モシ何かは、私が持ッてまゐりますよ。」子供「コッチへお出でなんし。」ト、下座の土間の中の　塔「こゝか。」子供「アイこゝでござりますよ。」お増「コレアノネ、あなたに御ぜんをあげねえ。」子供「アイ、いまアにもつてまゐりますよ。」ト、行くと四助は二人つれ　四助「塔さん〜、そこかエ。」塔「うはさんかえ。へへんなせえ。」お増「こつちへおはひんなさりまし。」ト四助「モシ塔さん、今夜はお悪うおざんすねえ。」塔「いつでも此のくらゐな物さ。」ト、丸さんはどうしなんしたえ。おめへはそれでもじつがあるよ。コレお増どん、ナゼ丸さんを連レて来なんせん。」子供「塔さん、おまんまをおあんなさいましよ。」塔「成程、少し腹が北ばんばだ。はやく茶を持つ

て来や。」玉「はやく持つて来ねえよ。」玉焦「アイ〳〵。」トいひ ゆうら「塔さん、きせるを貸しなんし。」

ドつ「お聞どん、せんどの文を届けてくんなんしたらうの。」蔦「さつきにお届けまうしましたけど。」

ドつ「六ぞだなう。じれつてえよ。」玉「ナニサ、文をやつても、行のうちだから禁足だ。」ドつ「ぞや

うタアなんの事だえ。」玉「きやうのことさ。」ドつ「エ、そきやうせうなう。」ゆう「ム、ウ、で

えぶ塩日がお上りだね。」玉「あの子は、お茶はマアどうするなう。」ト、いふ所へ、わんを持つて 玉焦「アイお茶。」

ト、いふなかは、にもお花しなんて 井手 玉「マア塔さん、お上りのないまし。お前それやアなんの花だ。エ、もち花だの。」

皆さんほれになつた。」玉「今おまえここでひろひましたよ。」ドつ「お客のだらうに。」ゆう「きつい苦労性

さ。」今夜はたきぎにすやすやだと思つたら、あさつては正五九月だの、マ、此の茶にぬるい〳〵。」

こは玉「それにおよしなんし。」トおしげや、〳〵の、さしきに茶びんがあるはずだ。持つて来や。お

増どんもいつしよにいきなんし。」玉「アイ〳〵。」ト行 玉「ほんにあさつては目黒だつけ。忘れてゐ

た。」すきいい気だねえ。」玉「マ、お茶がまゐりました。」玉「ドレ〳〵。」むう 玉「此のもち花

で思ひ出しましたが、アノおまへさまのお庭に花のさいてゐた木は、なんで御ざりますね。」玉「せか

だ。石燈籠のそばのかえ。」玉「さやうで御ざりますわえ。」玉「アレはさるすべりさ。」玉「ヘエヘ、すれ

ならアノ南の仁王様にある 目黒不動の事なり。 木と、おなじ花で御ざりますね。」玉「それ〳〵、おなじ事さ。」

トつゆ「どんな木だねえ。」うは風「おめへのやうな木だと。」下つゆ「ヘエ、。」うは風「塔さん、おやすみなんしョ。」お増「マアおはなしなさいましな。」うは風「またのちにまゐりやせう。」トつゆ「あれさ、わつちがざうりをはいてさ。お増どん、けへんなんす時、知らせてなんしョ。」下つゆ、うは風「塔さん、御休みなんしョ引。」トヽ出て行く。お増「わたくしはもうさんじませう。みやうてうは左やうなら何ンどきに。」塔「萬七が來るだらうの。」お増「ハイ萬七をあげます。左やうなら御機げんよう。」塔「やすまつせえ〳〵。」

○綿座鋪は二人一座にて、下まちのちやうにんなり。いつたい小道具しやうばいのものかと見え、けふ目ぐろへまゐりしかへりに、しなかはへとまつたと見えたり。

しんざうたこの香「おれぬしは、なぜかとおもつたら、ゐなんすよ。おとんなんしな〳〵。」

客清、おきにはつちをとりながら「コウ興ばう〳〵。ちとおきて話さつせえな。」客興、しんざうその花、だまりんでゐるゆゑ、なみのよ「エ、モウアおきすともいいにしなんしよ。」○興、ねがへりのおとして「清さんなんだ。でえぶさえるのさえるの。」清「さえるものは阿房だ。」興「そけへいかうか。」清「來ねえ〳〵。」その花「アレサ、まアこゝにお出でなんしよ。爰でも話は出來ますよ。」なみのよ「その花さん、とつついてお出でなんしよ。」清「とつつかれては大さうどうだ。」興「寢てはなしもよからう。」清「となりどうしの紀の國大和としやせう。」なみのよ「いつそよしかね。わたしらがお客は、しやれて許りお出でなんすよ。」興「清さん、おめへをしやれるといふによ。」清「鈴が森の馬の骨ちやアあるめえし。ナア興ばう。今ン夜のでかしは海

昔の賤ひものだ。」豊「さうさ〳〵。あァいふ所はこゝ許りだらう。淸さん、なんだか今ン夜は、無性にあつたかなぼんだの。此の子たちがそばにゐるせゐかしらん。」高「それもあらうよ。そしてこゝは土藏造りだ。」豊「長太郎があたまと同じ事だの。」豊「ム、ヨ、土藏の馬鹿にしたこ。」豊「土藏の中座敷はどうだ。」豊「ム、いゝ〳〵。」兩人笑「ヨウ、[illegible]さつきとなりへ来て、ぱたし〳〵した女郎衆は何といふ。」[illegible]「[illegible]御さんせんか」と[illegible]女郎衆すゝる」[illegible]となり。」高「大だか小かだか笑ら[illegible]知らねえが、無らかになおむ[illegible]をしたうはぎを着て」[illegible]「浪のすさん、大方の[illegible]花さえのことでおざんせう」高「それ〳〵、そんな名だッけ」[illegible]「[illegible]こそ、まんざらでもねえ」[illegible]「とつたか、いつを性悪だヨ」[illegible]「と[illegible]の客はなんだらう、淸さん」豊「どうもわからねえ道具だ。[illegible]長が向夫へ持つて来た、[illegible]りぎりの[illegible]ほしといふものをだこ[illegible]おくにをしい物だ」[illegible]「しかしとんだねき物だ[illegible]、持あたゝその[illegible]いが、あらァ餅花を一本なくしたが、[illegible]八、[illegible]ねえこ[illegible]こしにいなはな[illegible]らたつと、すうゝにいつてきんすよ」ト出て行く。豊、高「ハヽヽお斷りにやァ及ばねえのよ。」豊「しかしかぐ[illegible]はおそれ〳〵。」道具やの小便をきゝたさになり」豊「おれはときに、此のもち花をなげだうとでよさう」高「[illegible]、[illegible]しただまではおかねえ。喰へ〳〵。」[illegible]「何のこんなに買はすことも[illegible]つた」[illegible]を[illegible]、[illegible]あらし[illegible]笑ふ。豊、「妙々、淸さん、茶が来[illegible]へ茶を[illegible]此の[illegible]を[illegible]て[illegible]茶を見て、

た茶が来た。」兼「きついもんだ。おめへたちはもうちつと早く来ると、飛んだうめえ物があつたに。」二人の女「お心ざしはお有りがたうおざんす。それでたべたも同じ事さ。」兼「もうねまつやぶかうじとしようぢやアねえか。」その花「モシエ、ちつとお休みなんし。」兼「寐ませう／＼。」兼「モウなん時だらうの。」なかの「八ツでございますよ。」兼「とんだ寒くなつたナア。」

○奥二階の座鋪は表より来てゐる侍の客、二人と一座のその外人ン、此の客と女郎の寐合ヒ、さして何もかはりし事なければこゝに略す。八ツの鐘なるゆゑ目をさまして、はなしをしてゐる。客「誰かきたさうな。」横本の「ナニサ、おれはらうかを拭くのでおぜえすよ。」客「コレ今ン夜の客は、ほんに坊主か。」横本の「ばうすでいつそすきんせんよ。」ト、かくとはしらず、客「どこのばうずぢや。なにかアの。」若者「ハイ、おむかひで御座ります。」ト、森、びつくりしておきる。「あちらへさういうたかイ。」若者「ハイさやうまうしました。」トいふ所へ、一座の客多仲「サアどうぢや／＼。夜は明ケるぞい。」合かたうは風「多仲さん、ぢつとしてゐなんし。」ト、はおりの紐をとつてやる。森、やう／＼したく出来上り、らうかを出てはしごを、「サアゆかう／＼。」トはしごをおりて見世へ出れば、若イ者ぞうりをあれこれと見て、若者「イヤ お帰り遊ばしますか。おはき物は。」ト、いひながらあれこれ見て「ヘイ。」トなほして「左様ならば、又どうぞお近いうちに。」森、多仲「イツそお世話／＼。」茶や男「アイお世話でごぜえます。」二人の女郎「おさらばえ。」ぐわら／＼／＼。うは風、らうかへ来ながら首をえりへすつこませて、「是れからは四ツまで朝寐をしよう。」横本の「又さうして、おゐるるどんに叱られなんし。」うは風「ナニあすはおひる休みがあると、さつき云ひしたよ。」横本の「それ

おやア嬉さに都合がいいよ。お休みなさんし」ト米八はしごのおり口にてわかれ「丹さん〳〵、こつち
へ来なさんし。なになさんしたのさ」　ムスコつこちへ来なんすと」丹次郎ぞくさい所より、
「アヽきれいだ」米「ほんとうにきれいな月をおがみましたんすよ。ほんにいい気だなう、おめへはこつちへ来たい
のを待ツてゐて、いい」丹「よしか、ヤアいいこゝろもちはらすところになるよう」米「おいらにてめへと逢つて嬉しいな」
丹「ここもやアまさか話が出来ねえかい。こちら来なんしな。エ、モウ夜が明けるよモウ」米「イイ
わな、夜があけても、けふはいるようかな」丹「そんならアアここになる
なア。下卅、それで明後日の理窟はどうだ」丹「そうおつしたよ。モシほんとになる
なんすかえ。天気はこうだ、いいかえ」丹「よくつてもるかえんしょう」米「どうしようかえ」丹「久
しいもんさ」米「おれでひでございます。この人、二人はかわりの仮にあるも、勝れば情
ある人心の往きかふ人の一日語り、いんの笑顔の鈴ならで、波のうねり〳〵見えわたる、いさり火
跳たの浦の朝まだき、ソレ〳〵見さんせ米八、山の、森にとまりし旅烏が、寝ぐらを立つて思ひ〳〵
に〳〵。

敍

東都の南に一つの驛あり。旅舍軒をつらね、倡家色をあらそひ、一片の雲介地をはしれば、旅客の魂も其土を賞び、品川海晏寺御殿山の高きに比て、其土湖の深きに譬へ、目黒の粟餅に夢の世をさとらず、目田の矢に光陰の早きを思はず、千里にかへるを足をとゞめ、一錢なきも心をのこす。是に於て親父の顔は、妙國寺の仁王の如く怒れども、息子の心は、小荷駄馬の走るが如くとゞまらず、是れ傾國の手柄なるべし。こゝに友人何某が机上に細工せし、南品傀儡なるものあり。これぞ彼の地を守の神の、穴の稻荷の穴までを、穿ちもとめし小冊にして、奇々妙々といつつべし。よりて我も序辭を手傳ひ、拙き禿筆のひやうしをとりて、其の機關の緒をとく而已。

京傳門人　兔角亭龜毛誌

南品傀儡終

青楼昼之世界 錦之裏 自序

山東京傳

一日書肆蔦唐丸来つて曰く、例の小冊案じはあるかやなしやと。予答へて曰く、まだあるべくもなし。昔し素見の遊客ふる顔に、安価合にうけさせてと筆を執つた所が、無いものは銭金とよい思案なり。昔の安在の客を欺き、年々歳々欠伸で、歳々年々廻向料しかもされば、一つぐつと裏へてみた。昔の昼の世界、夜の景色より花見とはうつて変つた姿じやが、此処は一つ新織なりと、其の真錦の裏と題す而已

觀琉球人入江戸日

山東京傳撰

附言

宋玉は好色の賦を作りて色情を戒め、紫氏は五十四帖に艶言を述べて色慾をいましむ、是れ皆佛の譬諭方便と異なる事なし。予屢妄の著述をなし、淫蕩を傳ふるに似たれども、必ず其の戒めを忘れず、喜怒哀樂の人情を述べて、勸善懲惡の微意あり。遠く譬へをとらば、幼童を賺し戒むるに飴を以てし、灸を以てするが如し。則ち飴は譬諭方便なり、則ち灸は仁義五常なり。然ればこの小册に、教訓の二字を冠しむる事、所以なきといふべからざるか。覽人宜察也。

青樓晝之世界 錦之裏

山東京傳戲作

九車鳥がア〳〵〳〵〳〵。明の鐘ゴン〳〵〳〵〳〵。紙砧の音トン〳〵〳〵〳〵。商人の聲油あげ油あげ〳〵〳〵。夫れ神靈矢口渡道行の文句に曰く、ないふことなら夜の明けぬ、國に生れていつまでもと云々、是れ戀々の常情をよく、云ひ叶へし妙言なり。浦島が玉手匣、鴉子の椀皿にはあらねど、明けて口惜しきはきぬ〴〵の、其の情を知れば昔から、詩歌、連俳、淨瑠璃、小唄、談義、説法、狂言綺語、川柳雜俳でなければ、富貴貧賤へだつた事なき老仁、日蓮記で無ければ、操芝居も見た事なき婆に至るまで、唐の大和の千萬人、口の下になる程云ひ盡して、今更いふも愚痴なれど、花火家と娼家には晝といふもの世の中に、絶えてしなくもすむものなり。

安永後一歳卯守、攝南河邊郡神崎之郭、吉田屋喜左衛門云有二妓家。

それが二階の朝景色、杯盤狼藉、廊下には懸盤に杯臺、茶臺の上に茶碗をのせ、さも居合ぬきの踏臺の如く、傍には輪切の乳柑の皮の下に、楊枝の折一本、目に僅はどでごんすと、云ふかたちにすてゝ有り。紙くずは物日の消帳の如く重ね、上草履は女護の島の入口にひとしくならべ、小便所の喝吐は、落花のごとく散り、假母室の火鉢は、螢火ほどに殘り、梯の下には立花たらひ、門に鹽たもり、雛妓の鼻紙に簸り、丫頭の前髪横にみだれ、長く裾短く臥し、昨夜の西施は今朝の無鹽、鼻のうき紫首垢の襟、あくるわびしきかうらきの、髪の毛の薄きまであらはに見え、お座のさめたる其の中にて、此の吉田屋のお職にて、夕霧のおいらんと聞えしは、神崎の全盛にて、木地から磨いた部屋の木調、夜光珠の晝見ても、光のうせぬすがたなり。朝がへりの客を茶屋まで送つてかへりしと見え、夕「ハリヤ、つめた。」しらがもとゆひのまゝ、振袖新造そらね、さむさうになりこみたまの下駄と、自分のげ「こりやもうさうだがきたさうだ。いつもの〔〕よ。」廊下にはねずばん多くの行燈をなげさうおして居る。夕「起介どん、いゝし足から血が出るよどうした。」ねぎ「臺の物の松の釘で、ふみぬきを致しました。」夕「オヤあぶねえ。」ト座へはひり、しがみ火鉢にかけてありしあかゞねくさいゆを一口呑んで見てこほし、火鉢の中をかきならして、「コレそらねさん下におきが出來たらうこゝおつと持つて来な。」そら「アイ。」ト下へ行く。夕、あたりを見廻し、次の間の戸棚の戸を四五寸あけて、額差しいれ「まだ氣づよりでおざりんせう。」トいふ所へ、やりての錆するゆゑ、びつくり戸棚の戸をびしやり、音なく来るやりて「おいらん、お早うございます。」夕は、戸棚へ身をよせかけてさあらぬ

一「見なんし、いゝ天氣でおざんすねへ。」やり「なにさ、くもつてをりますもの。きのふは[illegible]大き
にくたびれましたよ。」タ「さう／＼。」おたつき「ホンニ堀の内様はにぎやかでおざんしたかえ。」[illegible]結
め手拭はすでにかけさせて參りましたよ。」タ「ソリヤア、もう、おかたじけなうおざんした。」[illegible]
寸間見なんし、代用さんの寐たなりを。」やり「ホンニねえ。」トこなたを見れば、[illegible]かしはもちにして寐て居る。
其のわきにふりしんよぶね、同じくあしかの、たゝみの上 やり「此の子たちもなりばかり大きくつて、客人に
出るとはいやがるん、困つたものでござりますか。」タ「さつきから[illegible]ね言を云つてるいわ
な。」やり「馬鹿らしいねえ。」ト云ふ所へ、そらねは、火を入れて持ち來る。折から廊 客「静かにしてくれ、け
えぶんが悪い[illegible]「氣が違つたさうさ[illegible]がわりい事をしなんして、人の知つた事の
やうに。」[illegible]「きのはまだ[illegible]わたしのは主のおかげで、暗いうちから[illegible]かたま
りいしたわね。」[illegible]「いいむしだね。」[illegible]わしが初めなんしたらう。」[illegible]半分[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
「めしなはうさんにしなたら、どんなだいうな。」[illegible]「しう／＼だのぼうさんに似て來なんすだら
う。」[illegible]「どうかもう氣がせかれ、ぼうさんじみて來さしつたよ。」[illegible]「ホンニねえ。」[illegible]

にくうおざんす。こんなうのれんをはづして來た時。」たゞ二「あんなに口廣い事を云つたっけ。」重「ヤア此の町をよあてやかくすがいいのさ。」たゞ「意か斧ざん。竹村のあへへ、ひき奇りをぬき捨てて來たから、とつて來なんしよ。おだ夕様はどうしたの。」重「あの子は二丁めのまぶへふんごみやして。下で足を洗つて居なんすョ。目はわたくしをひつかきなんした。ちよつと見なんし、血がでんすわな」そで「わたくしが縞をおやぶんなんすし、又お針業に小言を云はれんすわな」トすきなことを云つて居る。客は多勢にてさいはいたんまりで居る所へ、實氣だろう〳〵とし、にはい、こァ里まり、「馬鹿らしい。おもへかたァ静かになんしな。どうで呼び申さねえ客人だから、こつちのれうけんの通りにするまでは、ぶしつけが有つちやわるうおざんす」ト是れよりむつかしいろ手を入れる。こいつは高くして夜具、安くして着物へいろめいた〳〵と見えるなり。此のとなりの部屋お勿女郎、今迄きたと見え、かじみに向つて顔がひつかつて居る所へ、わざろつない、下より仕舞せの布子のよごれて黒光りになりるやつに、夜具のあまいろになつた細帯を締め、目をこすり〳〵、寝ぼけた様なつらなり。禿「つなじやか。」つな「アイ。」重「いい處へ來た。たばこを吸ひ付けてくりや。」つな「アイ。」トまた此のさしきには火がなきゆゑ、やりて部屋から吸ひ付けて來て出す。重「エ、こべら棒らしい。火がきえたわ。」ト茶を汲ませてたゝく所へ、茶屋男いそ〳〵きたり、「もシおいらん、雪駄がおたばこいれをお忘れなさつたさうでござります。」重「床のなかにあるか、見ていつてくだせへ。」男「ハイ。」ト立ちかけ「こゝにござりました。」重「まだこんたのうちに居さつしやるか。」男「左様でござります。」ト立ち去つた後ではくの所へ、また茶屋女きたり、「もシおいらん、御文をお出しなされまし。」重「けふは人がいくか。」女「遣はしますか。」重「そんならちつと待つて下せ

ユナ。ヨレこんたのとこの、いつもの肌の香々はもうねえか。」主「まだございます。上ゲませうか。」
主「そんなら文を書くうち、持つて来てくだせえ。後生だヨ。」扠下には、地をかきにして文字をあらはにて、吉田屋と筆太に地抜したるなうれんを半分
まきあげてあり、こちらの半窓には、かこひあげてあり、に簾をかけ、きんかんの[illegible]コレだ
あそばしながら、膝をいつてもらつてゐる、[illegible]
つとして居ねえか。手めへのやうにいこく〜のはねえ。」「そこに立つて、一吉や、おれはヲヤ奴島田
はよしな。」「誰うすにいつてくだせえ。おいらんがさう云はしつた。」今一人の「あのつらはおれだよ。」
今一人の「エ、あのつらを、」「頼きさまなまのやつ。おれが先へ来たわ。」「此の子どもいらア、ようあら餅
おかし。」
毎晩いかやらふ、ちつと静かにしねえな。」文こまかの[illegible]
男を、下宿屋の[illegible]
はなに[illegible]
でさくいやうで[illegible]こんな六丈員はとれませんし」主「文助暇物者はとれでいいか」「エ、此の生貝は昔
と貝だ。」「此奴アいい地鮒だ。」[illegible]「いい魚でございます。」男「旦那さん、生海鼠も些とお取ん
なされまし。」「此の生海鼠は[illegible]でございます。」男「車をもつて入レさつせえ。」男「たつた魚か
あれなら、たれよに高い。」[illegible]「しきのあけ、でございますから、安うございません。」ごかく
[illegible]
[illegible]
[illegible]

きこつかみそうにしなと、おなたたき皿の大館なり。ふりしんあしかのよぶね皆あみだうどか、油やのきふきくのさたなみのこ四帯、こりはそつくろ、おもしろい所々に雪のきえ残りたる如し。夕ぎりは無心をいつてきつた客のところいい来た遊寄の文をよんでゐる。川竹じしんきらおをふけ、はうきを持つてうしろからのぞいて居る。

「此の所の二人のすがた、さも文郎の寒山拾得のごとし。」

とふね「ゆうべ見えたんだかるたが、夜着の袖から出なんしたよ」　夕「それ見なんし。」　と「おめへがたァきり／＼湯へはひつて来て、牀の間やれんじをふききよ、何もかもごみだらけになつてあるわ、いつでもおすこらかくきらしいよ。」引きまゝいなぶら、しまふの灰のいたまりを拾ひ出し、文殻をかぶる雪の来る。　と「雪のや、湯にだれか居るか見てきや。」　雪「今見てめぶりイしたが、ことしい人は誰もをりイせん。」　川「おいらん、お出でなんせんかえ。」　夕「わたしはもおつとして参じよう。ちつといま、考へて居ることがおざんす。」　川「コレあしかのさん、おておが湯へいつて来るうち、おいらんの膳もわへておが膳もしておかうし、お茶もわかしておかうかし、それからアノ、よあ／＼それをきり／＼しなんしえ。雪のや、ぬかを入れてゆかたを持つてあのじやう。そしてからアノにうんく、へいつてし、書付をとつて来や。早くしやヨ。ちちがあかねえと聞かねえヨ。おいらんが餘り氣をよくしやるから、みんなすみなくつてならもんぢやアねえ。」

頭注、かきつけと云ふ事のわけは、後編四十八丁に記し、依面こゝに書かず。

トいひすて湯へゆく。○湯へゆく跡、つとの所へつげのくしをまかとにさすは、髪のくせを直すためなり。そのあとへ小まものの屋、あたまへかんざしを二三本さし、背をかたにいけて来り、案内をのぞき見て　小間物屋、おたきしこ居たつたのつくりものがおいをした按いに「おいらんえ。此の笄はこんだ挽かせやしたか、とんだ甲がいいから、取つておきなされませんか。」ト見せると、夕、とつて目にすかし見て、「ネンニこりァいいよ。死ぬほ

ことしいが、今はちつと相談が出來ませんから、あしたまで賣れずに居たら、持つてお出でなんし」
やす「アイ、左様ならもし今日中に賣れずば、あしたもつて參りませう。おめへさんの氣にいらなえ
とおつしやつたが、しかざをこつちへつかはさると、やすく上げられます」[illegible]
んせう」ト[illegible]、明、「わたしが此のおう日がかいに、うきがでんした」ト[illegible]「[illegible]て上げま
せう」[illegible]「モシ、此の[illegible]をついで來ておくんなんしな。どうぞ早く、お頼ん申し
ますよ」[illegible]「かしこまりました」ト新造は、これからいろをとこと、[illegible]して、[illegible]一指の[illegible]はまだ
下さんせんかよ」[illegible]「あすは出來ますよ。紋所は[illegible]ひよくだつけねえ」トこれで、[illegible]かに云
つておくんなんしな。馬鹿らしい、[illegible]しているも、しらないで」[illegible]「ちよつと浮里さんの所へいか
ねばならねえ」[illegible]「浮里さんのとこには、たしか借つてけがあるよ」[illegible]
ことは此のうちへ、[illegible]八寸を出し、[illegible]
[illegible]おれがくしてこの[illegible]のおくの引出にかねがあるから、一寸持つていつて、おあしをか
つくさや。[illegible]の引出にあるぞよ」[illegible]
に[illegible]
[illegible]
[illegible]

う、こゝへ出しな。」夕「貝のはしらを取りにやつて、帆立貝で煮ようぢやァおざんせんか。」丑「取りにやりんせう。」夕「行平鍋はどうしたナウ。」丑「だれかとうに破つてしまひンした。あしかのさん、今朝のそうざいはなんだへ。」あしか「たしか芋に油揚でござりイすヨ。」丑「おそれるね。」夕「あやまりいす。」トいろ／＼食の好みをして、やう／＼朝まんまをたべてしまひ、夕はわる／＼長くうがひをつかひ、楊草に三ぷくたばこのんで、すぐに湯へゆく。かぶろはゆかたを持ちついて行く。そのあとへ田まちのごふく屋来り「きのふのひな形は、お氣に入りましたか。」丑「いつそようおざりイす。あれにきめんせう。」ごふく「むくはやつはり。」丑「ともむくにしておくんなんし。そして こんどは、禿物の丈をもちつと長くしておくんなんしへ。」ごふく「かしこまりました。」トゆく。丑「モシ／＼。」トよびかへし「序にわつちがはきかけ〔頭註、はきかけとはすこしはしの事、此の里に限りし言葉なり。〕にするきれを、なんぞ見つくろつておくんなんし。」カウト、そして紫鹿子のえりを、一トからげよくしておくんなんし。」ごふく「かしこまりました。」トいふところへ、禿一人きたり、「八十兵衛さんの、おいらんがちよつとお出でなんしッサ。」ごふく「手めへはどこの子だ。」禿「車井さんの所の子サ。」ト、夷屋や臺屋へゆく。夕はほどなく湯から上り、浴衣で顔ふき／＼来り、「聞きなんしたかえ。バゝち里さんの客人は、つかまつて来なんしたさうだね。」丑「さうでござりイすとさ。およッたァすみんすめえ。夜舟さん。身ごしらへをするやうに、何かを出しなんし。」夕「あしかのさん。髪ゆひのお吉さんが二階へ来ちやアゐねえか、見て来てくんなんし。お針部屋も見て来なんしよ。若しまだこざア、中郎の人をたのんで、呼びにやつてくん

なんし。」中間と云ふは、内所の小づかひをする下男の事なり。是れも此の里にかぎりたる言葉なり。「雪のや、おはぐろをとつて来て、それから胤屋のかよひをもつていつて、板を一本ンとどりつけと、〳〵ことすきと黒元結を取つて来や。ついでにわる紙とたばこもとつてきや。夜商さん、歌舞伎を出したら」[illegible]
しかうけはいふなそとりたろ、[illegible]。雪はおはぐろをもつてきて[illegible]夕、川は[illegible]ざふをさ
わたへのせ、[illegible]を火ばちのひきだしの中にしまはし、[illegible]にむかひてねをつける。[illegible]
け、妹の間のふたへ[illegible]下て、[illegible]これより人の[illegible]
べし」と[illegible]火入れの火を[illegible]火鉢へ入れながら
ねえ、はあおなつて口惜しくつてはありませんよ。[illegible]「それでだつてもおめへ、手しようも見ねえ事がなんと云はれるものか。胸でかきあてるて気がつけたんしたに」
「なんでもかつ[illegible]うにちがひあるまいせん。ゆうべのやうすが、さうでありますもの」
[illegible]
けび川「オ、アツ、〳〵。」花「そゝつかしい子だヨ。」けび「わたくしは、月水蟲がかぶつてなりません。
[illegible]ヱ、今身のうへを見て[illegible]けれんしたがね、悪い星にあたつて[illegible]。どうせう。」[illegible]「いつもそふうだよ」[illegible]「おおめへ、かゝさんかさつき逢ひに来たおかやねえか」[illegible]「もうかへりしんした」
雪に[illegible]お茶を一つくだされまし」[illegible]手をあたゝめながら、熱いやつをすゝり〳〵「いかゝましい。中町へいつて来たが、さつぱりかけがねえ。これがやア此のものへは、蜜柑で

こせへた猿を見るやうに、首でもくゝらにやァならねえ。かけびあのでたも、かつかうのわりいもんだ。」けび「みんなさう申したつけ。」牛「人の氣も知らねえでしやれるよ。なんぼしやれても、まだやきばの道で、いきものはとほらねえ。おれが水あげをしてやらうといふに。」げび、ざうげまきゑのくしで、頭をなでつけながら、ざう「わり「しつたか。蟲がいいわ。」牛「何蟲がいい。なまびのむしがいいが、聞いておきれらア。」ざう「わりイ酒だ」よつたら供部屋へいつて寐さつせえナ。」ざう「けび川さん、ふうじ紙をもつて來てくんな。そしてたんすのなかのものを、もちつと磨いてくんなんしョ。」牛「ホンに、もちつとみがきなせえ。賣藥店と女郎衆のざしきは、簞笥がたらねえとしんかうがうすい。」ざう「ぎう吉ッどん。男の手でなくつちやア、わりイことがあるから、のちに文の上書を一ツしてくだせえ。そして田町へいく者があるなら知らせて下せえ。治丹坊の三百丸を買つて貰ひてえ。」牛「大かただれぞあゐのあせうのこゝへ行」ざう「わつちやア女郎さんのとけえ。淋病の藥をこせへてやりてえが、けふは間にあひませんこ」りんびやうのくすりを手製にする事は、どこの二階でもする事なり。予きるおいらんよりこの秘法を傳はる。あまりたはけなれど、こゝにしるす。○黄連、甘草、丁子、山梔子、隈篠、燈心、梅干黒燒、阿膠、松子、女陰毛三すぢ黒やき、以上十味等分に煎じ用ゐる。三すぢだけが大笑ひなり。ざう「そりやアさうと、今日はいくかだなァ。」花「いくかでおざんすか。」けび「わつちも知りイしない。」折から、おもてには、いろ／＼のあきんど通り、さまざまのよび聲きこえる。▲さんばさう／＼、なんきんあやつり。▲鏡磨ぎ／＼。▲さくら草／＼／＼。▲針

だれ釧がれ。　はし二「モシエ、あれはりがね〳〵が來いしたから、十二日でおさんせう。」ヤヤこもそう
が來たよ。花散さんごらうじいし。」およつと上りつはなこもそうさんす。」「どれ。」ト立つて見るうちに　は下の方へ行きさ
ざる故、てはにあるすゞりよみを取つて、おまこかね「頼まれましたが、此のくわんけをおつとおつきなさすつ
んじへうつしこ見て居る所へ、下より中居來り、
て下さりました」ト、いやな顔を見する。中「いくら程やるのだよ。」中「一ツ十おばかりおつきなさりました。」「ヤア
か、今だきしておかう。」ト云ふ所へ來る中居「けび川さん、こつちの御座敷に皿が一ツ來てをりやせう。見て
おくんなせえ。」中「おきるいません。」中皿「おかへがたは、ありえうそんな事を云ひなさるな。此のおう
も、こつちに皿がふたつ有りやした。わたしらがあつかりだから、無くなつちやア迷惑でござりや
す。馬鹿らしいこと」ト云ひながら小皿を一ツ出し、「しつたかしらねえわ。」トはぐらかすなりから、廊下にて座敷持の女郎うはき木、少し心わ
るいと見え、白ねのはなしを、ねはぐるお　とこしらは、けごきせたを、売に用寺り、ウ「ヲコとあのの、あきんどやへいつて、すゞの香箱との、下
の下駄屋へいつて、鼻ぢあと表を買つて來や、そしてかへりにお針部屋で縮をもつと貰つて來や。
あつと氣をあかせやヨ。」ト、こいつは男の支度と見えたり。一揃から洗ひはりまでは三の輪から來り、かし本では炭屋　なくいた本をかたみ、余ればおやは代ものを見せ、文づかひは所書をつけより
日本で出しやしたる、一潟をしまひます〳〵」ト二階中、こなたの夕霧が座敷には、女髪結お吉來
をくらふときは、ふれる　り、髪を結ふ。夕はみな付の唐詩選をよ
みながらいは「大道直如髪、春日佳氣多」すヤばからしい。此の子はよくすひつけてくりや。」お
せこ皆。
いらん、まだ際だかなさこれますかえ。」ト上をとつひで日ぎりがきれんした。」上そりやアようござ

ります。」ト いふところへ、ちや屋の下女もみかきれで目をふきながらきたり、「モシおいらんえ、此の間の扇をかいてくださりましたか、たび／＼客人の方からとりに参ります。」 夕「なんぞ好みがあるかなウ。」 女「おまへさんのお名さへあれば、」 夕「なんでもいいかねえ。書いておきんせう。」 女「おたのん申します。」ト女、 夕「ぜんてえおめへさんにやァ、てがらよりしのぶがよく似合ひます。」 夕「それでもしのぶに結ふと、いつでもお茶を挽きますから、縁起がわるうおざんす。」 ト、この中川竹たばこつけて吉にやる、さらぬ手ゆゑ、紙にもまきかへて吞む、 吉「雪野や、これをこほして来や。」 ト、はんぞふをつき出す、はんぞふの中には、おはぐろのつぼきれ八ぶんほどあつて、まんなかにへにかへはきてふたたよぼあり、わるがねとみす紙のくづ、ふきがらたツ六ツあり、これんじには小をでかけて干してあり、所々にのつきたるきらしの手ぬぐひなり、あらひ粉くさきやつも干してあり、此様なく髪もゆひしまひ、吉は外へゆき、川は手水にゆき、あとには夕ひとり火鉢のまへにしよんぼりと、えりにかけし手ぬぐひて物案じ姿にて居る、楊ばしを半ばしにしたやつ、もえしきりてけぶる、此のとき中の間の時計九ツ時、夕にあたりへ気をつけ立たんとするところへ、茶屋男来り、「モシおいらん、晝狐さんがお出でなされましたよ。」 夕「ホンニかへ。今がうきさまいくから、マア雪野を先へ連れていつて下せえ。」 男「ハイおはやうお出でなされまし。」ト、いひすて行く、川来る、 夕「モシエ。」 川「かしてくはへて馬鹿らしいねえ。」 夕「どうしんせうねえ。」 川「わたくしが胸におざんすから、気づかひさずといつてお出でなんし。夜舟さん著物をだして上げまうしな。」 夕はぜんかたなく着物きかへる。上著は白なゝこに紫のふき、おとしのきのより糸にて縫ひ、むくは緋どんすの胴に、へりはとびいろのそう八丈に、同じもやうを色いとにてすかぬひ、こゝはびやどんすにひおりあんの裏をつけしゝごきをしめ、後見にもかつてえもんをなほした所は、源氏雲の中に、四季の草花を極彩色の縫にしあげ、もん所は藤の丸、むらさ見せても、むさしもんぎとみえるおいらんなり。 夕「ゆきのや、となりの浮里さんのところに、居つゞけがあるおやァねえか。」

亀「おゞりイすヨ」 夕「おれがきう云ふと云つて、『おめへのところの子供をかして、てうしを一ツけへさしておくんなさえ』と云つて来やァ。モシエ、おたのん申します」 亀「きつかひなさりイすな」

夕「ふたりますえ。」ト云ふ所へ、銚子を持つて来る。夕、杯洗でぐつと一ツのみ、其の勢ひで出る。中の間には、亭〔illegible〕新右衛門ふたりつそばに、〔illegible〕板を本帳へ移してある。〔illegible〕ごまく〔illegible〕のことなり。 三分の印は二、一分は一、米は一、これなり。 夕を見て、「おいらんおはやいの。」

トこれをいける故 夕〔illegible〕「だんなさん、ゆうべはおありがたうおでりイした」 亀「すきだと聞いたから、持たしてやつた。けふは何か店の衆の出番か。」 夕「イ、エ、浮客屋の客衆でおざりイす。」 亀「フゥ、ちよつとうしろを向いて見せな。オ、でえぶ髪の風か人がらがよくなつた。サア／＼客人が待つてゐようはやくいきな」 夕「あいつて参りイせう。」ト、しんを同道して二階へ行く。夕がうしろ姿を見おくり、一夕客も〔illegible〕ぶつい たやうに」 亀「さやうさ、だん／＼よくなりますよ」 此台所のけしきは、料理番の仕込みにいそがしく、井戸の車の廻る音、〔illegible〕米をつく音かしましく、かぶろは大ぜい、長ばんだいをとりまいて、〔illegible〕

〔illegible〕 亀「〔illegible〕三河島の湯へ、お出でなさつたか。」 亀「此の間めふ行やしたか」 亀「おめへも行きはさ」 亀「ゆうべ茶屋にてやひをよんで、一座點をいたしやした 突出しの白粥ものせとのたてて、と云ふ何かしたが、どうだらうね。」 夕「イヤ、何うくのがおもしれへ。」こいつァいきやせう。」〔illegible〕 亀「ヤ、こごつたか、どうだなう」とつと

はいいかの。」トニ「とかくどうへんでござりまして、」喜「ソリヤアこまつたもんだ。早くよくしてえもんだなア。」トニ「ハイ。」ト喜「マア飯でもくつていかつせえ。」トなりからならねんのらわ しきまん〳〵の物貰ひはひる、辻占道心「南無薩婆呼咩伽吃盧枳帝騎三摩羅三摩呼咩。」喜「あの子や、そこへしんぜろ。」と一文なげ出す。そのあとへ四ッ竹、こつじき「すまふ、とりイ、にイ、て、しらアふぢイけんウだア、チョコチョ。」口くせらう人江「するちやうこうけいに枕をならべしいもせも、いつのまにかはへだアつらん。」喜「ア、うるせえ。」ト、る所へ、又やりて「月花さんのかぶろがござりません。どうぞひとりお貸しなすつてくださりまし。」女郎「このぢやうとぶりから借りた子は、どうしたの。」やり「ひつで帰しました。」女「こなたの知つた所に、やとふかぶろはあるめえかの。」やり「きふに心あたりがござりません。」喜「どうでけふの間には合ふまい。」しにけみせかから かぶろ「任場やアノイ、人ひ引く。」五色の絲とやうじを持つて来さつせえ。」トいふけこゝかける女郎かつかひなるし、根てこ出にはお女郎「浮造やアノ〜。」かぶろ「アイ〳〵。」女郎「コレヨ、楓屋へいつての、その一本と百くの方にて、のたばこ箱を、紙でつゝんで水引でいはへて貰つて来や。又太神楽を見てゐめえよ。」といひつけ、こたつ前花のほしとこするなり 女郎は廊下 「ゆうべの三味せん番は、だれだナウ。ばちが見えねえとつて、こし中をふいてゐるところへ、ト、いふ所へ夕、いきをきつ「モシエ、けふは内の首尾がわりいとつて、すぐ元業がこごとをいふよ。」トかへり、川が耳へ口をつけ、にけへのイしたよ、ト、せへつれえ。」ト川、客軒をいけ「そりやアよかつたねえ。」久今まで水戸尻の池に

なりやしいすよ」川（ひそか）「コウシ、ばんには、かへつて人目(ひとめ)がおほくなりんすから、きのふにしやくのおこつた顔で、次(つぎ)の間へはひつておやすみなんし」夕「さうしてもよふござんせうかねへ」川「わたくしがいいやうにはからひますよ」ト、人をうかがひ、かの座敷へ[illegible]し色男を出し、[illegible]伊左衛門といふもの[illegible]それがもとにて不首尾となり、[illegible]人目をうかがひ[illegible]折わるく出をあれこ、けふ一日このばせおきたるなり、伊左衛門婦屋の中へ這入る[illegible]持つ人心なり、夕小声にて「さぞ退屈しなんしたでおざりイせう。わたくしが自身にしては、目にたちんすから、いひ付けてはおきんしたが、ひもじうはおざんせなんだかへ」伊「イヤ、川たけがその〳〵気をつけてくれるから、ひもじくはなかつた。それに小便も気をきかせて、[illegible]へ蒲團(ぶとん)の綿(わた)をむしつて入(い)れ、音のせぬやうにしてくれたから、なにからなにまで困つたことはなかつた」トいふ顔夕つく〴〵みて「ホンニおまへさんを、かういふはかない身にしたも、みんなわたしがとがでおざんす。かんにんしておくんなんし」ト、いだきしめたるまりや〳〵す、「悪(あく)な事をいふもんだ。あまねく世の中の女郎買ひ、金の深由ある中は、女郎の真実(しんじつ)は現(あらは)れぬ。[illegible]かういふ身になつて、はじめておまへの心こいつ」ト、この時 時計八ツ時 もはやひるみせ出 中の間の 中あぶみ流の本調子のすががきを弾く、二階は賑かになる、折からこの座敷、うき草 夕その心はとゞいても、同さんせんはわたくしが頼ひ、人目(ひとめ)があるから、人なみに笑(わら)ひ顔(がほ)もしてるんすが、おまへさんの事(こと)を思(おも)ひ出(だ)しん

すと、いつも死にたうなりイす。」鴻　えぼ「三條院、こゝろにもあらでうき世にながらへば。」みやこ「戀しかるべき夜半の月かな。」にはまツト、戀しきおもひイしたよ。」みやこ「散らさぬやうにおとんなんしネ。」えぼ「和泉式部、あらざらむ此の世の外の思ひでに。」伊「今一たび勸當のわびもすみ、此の二階へも晴れて來て、逢はるゝやうになり度いものぢやよ。」久「ホンニよいばん逢はれんした時は、たくさふさうに思ひしたが、此のごろは此のやうなはかないことさへ、思ていの心づかひおやおすんせん。」「さうさなう。」えぼ「うしとみし世ぞ今は戀しき。」みやこ「たしかこゝらにおざりイしたよ。」えぼ「そこにある、取つてくんなんし。藤原義孝、君がため惜しからざりし命さへ。」久「思ひなほして、たまさかにお目にかゝりイすを樂しみに、ながらへてをりんす。」伊「ハテ死んで花實が。」久「咲きもしんすまい。」伊「命あつての物だねさ。」ときは「ながくもがなと思ひけるかな。」えぼ「ドレ、きんがちにしなたすなえ。」伊「とは思へど、まだ丸で八年と云ふねんなればな。」みやこ「いかに久しきものとかは知る。」伊「もしそれまでにひよつとマア。」えぼ「右近、わすらるゝ身をば思はずちかひてし。」久「それを思ふと、しんに悲しくなりんす。」伊「ハテ、たとひ此のうへどのやうに。」たに「身をつくしても逢はむとぞ思ふ。」久「そりやほんでおざんすかえ。」伊「これさ、聲が。」えぼ「たかしのはまのあだなみは。」みやこ「かけじや袖のぬれもこそすれ。」〇かかるところへやり手のおよく、「やうすは殘らず見とゞ

けたこと、聲かけて屏風引きあけ、一頭目あやしいと思うたが、今朝程ちらと見つけておいた古傷ゆう

ち、とほけた顔で氣をつけたが、あんたにたがはず此のしだら、わたしが顔をふみつけて、なんで役儀

がたつものぞ、此の通り内證へゆき、旦那さんに申しましたら、これ若い衆や、此の男めを引きずり出し

たがよいわいの、とわめくを聞きつけ、若い者、われも／＼とかけ來り、にぎりこぶしの雨霰、むご

んやな、伊左衛門があたまの上にふりかゝる、夕霧なみだもろともに、中をへだてて身をそしまず、

伊左衛門が身をかこひ、「こりやむごたらしいぞいの、皆の衆請たしやんせ、伊左衛門さんにとがは

ないぞ。この人さんをぶつならば、まづわたしから先へぶちころしてしまはんせ、聞きいれなくば是れ

からぢや」と、そばにありあふ鏡臺が、かみその箱に手をかくる。やれてはあかでておしとゞやうとする夕

霧さん、大事の代物、おまへにけがさせてなるものかいと、もぎとる其の間に大勢よれ、伊左衛門を

たぶさつかんで引き出す。かゝる折から思ひがけなき、次の間の長持の内よりも、すゝ／＼と夕霧どの

心實見よたこと、十段目の大星もどきに聲をかけ、ふたおしあけてぬつと出でたる一人の男、若いも

のゝ利腕つかんで投げる上を、倒る一人をば力にまかせておしたふし、こちらも蹴りあちらもけり、は

るけるく／＼と頭ならかして立ちたるは、心地よくこそ見えにける。やり手はそれと見るよりも一さす

お前さんは、浮世さんのお客人、いつの間にどうしてやゝ其の中にことごふもかくはせ此の男、伊左

衛門が前に手をつかへ、「いまだ顔をばお見知りなきゆゑ、御不審に思召しませうが、わたくし事は京都の出店に居り、番頭を仕る算右衛門と申すものでござります。此の夏用事あつて此の地へ出で、大旦那にお目にかゝり、うけたまはればあなたさまは御かんだうとの事、これはしたりお若い事なれば、一ッたんの御あやまちは仕方なし。御心底もなほりしならば、御勘當のおわびも申し、二ッには是れなる夕霧殿に、左程まで御執心なさるゝも、是れ赤縄のむすびしならん。心ざへたゞしければ、遊女とても苦しかるまじ、夕ぎりどのの心底、誠か實をとつくりと正した上にて、眼引をして目出度く祝言させ申さんと、扨こそあとの月より、鄰ざしきの浮里が客となり、律儀といふかへ名を呼び入りこみしが、猶も實否をたゞさんと、今日わざと居續けなし、先ほど茶屋に申しふくめ、かへりしていにもてなして、人なき折をさいはひに、是れなる長持に身をしのび、屏風のうちのむつまじきことを聞きとゞけ、夕ぎりどののまことの心を見ぬいた上は、今日中に亭主吉田屋喜左衛門に逢ひ、身受の埒を明け申さん、其の手附金は則ちこゝにこと、懐中よりさいふとり出し、伊左衛門が手に渡す。受取つて中をみれば、縞の財布の一ぱいまし、是れは錦のさいふだけ、耳をそろへし五百兩、金にそへたる一通あり、いぶかしと開き見れば、何々、其方儀心ていなほり候ふよしきこえ候間、今日より勘當ゆるしさふらふものなりと、書きしはたしかに親の手跡、「ヤ、かたじけなしありがたしと、伊

左衛門夕ぎりもろともに、手を合はせてふしをがむ折からちやうど中の間の時計七つ時、道路目録畢

一是れより錦の表とへんず。夜の景色のはなやかは、今まで多くあり来りし小冊で御らうじろ。

青楼昼之世界錦之裏 終

[illegible]之巻

後叙

夫れ熟く大門を視れば、實に鬼貫が句の如く、骸骨のうへを粧うて、花の郭の喜怒哀樂、迷へば眼中西施を出し、悟れば鼻中臭氣をいだす。迷ふも悟るも、有漏路より無漏路へ送る茶屋が提灯、人間わづかナソレ五十間道。一切の衆生身の用心さつしやいませう、亦人間の渡世利は心氣の一住。

時寛政三年辛亥春正月食二雜煮一之日。

京傳自跋

郭の大帳序

我嘗て傾城買の趣ありといへども、未だ遊びの足ることを知らず。客は妓のわけ知らず、妓は客の穴知らず、知らず知られぬ中間、其の中庸をとつて、以て今京傳一冊に述べ、予其の草稿を閲し、筆をとつて曰く、奇を蝕なし。

笹葉鈴成

自叙

天地一大戯場とかや、堤八町の花道あれば、大門の鼠木戸有り、分ある客を見附柱に、雛妓を以て中の町につけさせ、大盡柱も其の因あり。軒に酒ぐ春雨は、下座あつらへの見世清掻、送り拍子木のおよんだよんだに、初霞の引幕をあくれば、茶屋の床几に連ねし雛妓、小三板のたらぐし大名、渡りぜりふの口々に、あれ〳〵向うへ妹妓が、見えるわ〳〵といへども、見れども見えず聞けども聞えざるは、傾城買の道なり。妓の見清は大盡の襟下につき、客の三保の谷は紋日をのがれんと前へひく〳〵、互にえいやと引く力に、はなうけのはたごとより、ふつつときれしきれ文の、それにはあらぬ此の一結、其の名をよんで郭大帳、大帳勿論大町の唱へにかなへば、小草の妓へはあな川岸ンこ

山東京傳誌

郭の大帳

山東京傳著

木舞臺三間のあひだ、眞崎のけしき、玉やと云ふ茶屋のかゝり、右の方石の鳥居とつけ、また に文塚とほりし碑あるべし。すだれ上るしかけ、山田三郎上下いしやうにて、上のかたに居る 若十衆一人仕丁のなりにて手をつき居る、かざりにて幕あく

山田三「それがしは御花山吉田の家臣山田三郎と云ふもの、主人梅若丸、さいつころより行方知れず。此の頃せけんの噂に聞けば、此のあづまへ御下向のよし、御跡をしたひ當地にくだり、御行方を求むれども、今において其の實事分明ならず。これによつて梅若君の御身の上を祈るため、吉田家の重寶都鳥の一くわんを、當社の神前に納め、一七日が間御祈念をこうして、奉幣なさんとのため、今日それがし參詣いたした。此の邊の神主かたへ申し傳へておかうと」

仕丁「委細かしこまりましてござりまする。遠路のところ御苦勞千萬。まづ神主かたへ御入りあつて御休息あられませう。」

山田「しからば案内。」

仕丁「いざお入りあられませう。」

ト かぐらになり、兩人入る。下座岩戸になほす。さる島惣太しのびのなりにて、玉垣を切りやぶり出る。

さる島「さていぜん山田めが持參なしたる都鳥の一くわん、あいつをこつちへとりのまちとすりや、金にありつくと云ふもの、こいつはおもしれえちよほ一だ。したが此の姿ぢやア手重い、どうぞ姿がかへやうが、ありさうなものだなア。ヲヽ折り惡いあの人聲、ソレこそ」

ト 松の木のかげに隱れる。おくよりさいぜんの仕丁、みきどくりと茶わんをもち、ついこのみながら出で、

仕丁「アヽ、うまいぞ〳〵。とんとかんろのおやゝ。何でもこれから七日が間神事が有るといふ事だが、こいつはおいらが福德の三年目、するぶんはじこてたち廻つて、さいぜんをしこたまのめ、千住じやれとお目にかけよう、こりや面白さつねだわえ。」

ト 行きにかゝるを、だしぬけに惣太うしろより出て、えりをつかんで引きよせしめ殺す。

仕丁「ダア、。」

さる島「きじも鳴かずばうたれまじ。」

ト しらはりゑぼしをはぎ取り、是れを着てあたりをみまはし行きにかゝる。さいぜんより山田三郎うしろにつけてゐる。ト〻出で、

山田「くせもの見つけた。」
さる島「何がなんと。」
ト両人よろしく立ちまはり有つて、ト、惣太山田をあてこきり幕へ入る。しばらく有つて山田おきあがり、
山田「遠くはゆくまい、さうぢや。」
トあとをしたひ、花道の方へゆかうとする。茶屋のすだれのうちにて、囃子やおけいせい稲鶴が声にて、
いなづる「かぎりなくとほきあづまにすみだ川。」
山田「なんと。」
いなづる「たえぬ流れをいつまでか渡らん。」
トいふをきつかけにすだれあがる。稲づるうちかけいしやうにて、手にたんざくを持ち立つてゐる。
山田「これは。」
トおどろく。おくよりいなづる、客待ち、江戸が浜の鳥や、女げいしやおゑん、新造まひづる、そのづる、たち出で、
みな〳〵「ヤンヤ〳〵。」ト笑ふ。いなづるは恥かしさうにうちかけをとれば、下は白ちりめんのしごき、よそほきのなりになる。みな〳〵すわる。山田三郎たんざくをとり、上下のひもをしめながら、
三味線「イヤ、これはいひわけもなく、思ひがけないおいらんの今のお歌、とんとあつぱいがはまりまして
ございます。おれでけふの趣向のちやばんがはえました。いろ〳〵あやまり入りましてございます。」

いたする「ちよつと見な。いつそ恥かしうござんす。」傳吉「コレ三味子、賣事師の出田三郎は、きついのであつた。手めへたちが此の眞崎のけしきを、芝居の道具だてと見て、茶番をすると聞いたゆゑ、いなかもんに吹つこんで、だしぬけにきもをつぶさせたのだ。」トいふ所へ、さいぜんのしかけの[illegible]「サア五町さ。おきやアがれ」五町「ナントだんな、わたくしが仕打は、秀鶴でござりませう。」傳「でかしたでかした。仕丁になつたのは誰だ。」三味「あれはこゝのれうりばんの傳介と云ふものでござります。」傳「ヤ、あぢなやりをつた。」[illegible]「サア〱皆春のにする事だらうぞ。」[illegible]五町さん、かほをふいて來なんし。」そのぶろ「大こくまひのやうざんす。」三味「又ぶしやれを云ひなさる、おできどんにいつつけるよ。」[illegible]「イヤもうとんだ面白かつた。」[illegible]「いなかさんのかゞらが、下座にとれたうちなぞは、遊びませんね。」傳「おもしれへ〱。」此のうち出しもいろ〱出で、五町、三味子かほをふき、きものを着かへて來り、いろ〱酒事あり。傳、なるほどかう見た所は、どうも云へませぬ。」傳「日本ン一のけしきさ。」[illegible]「そして、おいらんのとこへ、ちよつとごらうじいし。なにか鳥が飛びいすよ。」[illegible]「あの鳥はなんでえすねえ。」[illegible]「あれがまにすむど都鳥さ。」五「みやこ鳥とびや明のかねえ。」三味「おやまるおぐちだ。」いなか「それよ、いせ物語におざんす鳥さ。」[illegible]「なぜくちばしが赤うござりますね。」[illegible]「くちばしの青イうちはいやこどりさ。」三味「モシ、そのくちばしの青イについて、妙なはなしがござります。さる所にせむ

して、きんのえんとある、客人がここのまちへきて、その客人の国にいらの江戸がゑがあつた所が、と
んだいい男で、二歳でんをきがいいて、親がようござりやすとある時かの丈蔵のしゆかうで、そのい
ろ男をささかきのやうすにしたてて、これは商売をはり、着物もだいなおもさせ、さるうち
へ鎌倉にいつた所が、一つはゆくつて、女郎を皆かでしまひうちかちきたへかゑやうす。こいつはし
めたと、丈蔵は心のうちでをかしく、きまうに入つて見れど、かの男はだんだんと安くとのあつかは
れる様、よこしいさんくなつて来て、床が寄まるやいなや、こぶゐを呼んで手ぬぐひをしめかして
頭へ、商売を取つてたつとかほをふき、はのおつかむさい着物をとかは、下には八丈のうらえり、いべ
ろふの帯やまへではてんで、初めにひきかはのていきな形にこり、四世三味線をひいて、三つぶと
んのうへにあけあからで、何がゑだれ国とかいふやうな、おもやすいうまい唄、文蔵がふしに藤吉が
唄こいふはだでうたひまけにれぞ、おひらかな鐘けとなれ座敷に、今夜の客はすつむきみ、おもひ
の外嬉くさつにぬきんでるた所、その歌を聞きつけ、野風がものそけば、あひかたの客、座敷の様子には
うつとりほりしいろ男、ここにあだな声で、ひきうたつて居るのゑ、口惜しいね、すつぽりとだまさ
れたした、こんなつまらぬ事はおつせんにも一つとうぞきしやうとおきかせたんとここと仰ばら
ここで、だんだん可堆女郎ら、是れな聞いてより集まり、この客をとりまいて、いつたやら松がさがい

いゝ「イヤもん太郎が名残を聞きたい。」のと、らんをいれる所へ、らうかをかいせむし大盡のあひかたの女郎通るゆゑよび「もしえ、此の客人にすつぽりかかれやした、口惜しいね。」といへば「ほんにかえ、そんならわつちが客衆も、そんなことでおつせう。」と、手前のとしきへかけて行き、脉のうちによく寐て居るせむし大盡を、無理無體にひきおこし、せなかをにぎりこぶしでくらはせながら「此の中のものをお出しなんし／＼」「は、どうでござります。」トしかたではなす。鶴「こいつはありがてえ。」鳥「こんななんぎな事はあるめえの。」よび、その「馬鹿らしいね。オホ、／＼。」トわらふ、おくよりでんがくかやき立てを出す。五「マツこれは、一本げびる事だらう。ア、からい、がうぎにからしがきいた。」鳥「でんがくはからしの味噌にして、とかく口にいるのそんなり。」鶴「ム、、でかす／＼。こいつは書きぬきだ。」たつ「こんななんぎな事はござりますめえ。」その「ばからしいね。オホ、／＼。」鳥「わたしもしん手を一ツ話しやせう。此の夏かりたくが中洲へうつると、ないしよが寄合をつけて、亭主たちのさうだんに云ふには、「おいらもたび／＼いやけで、お互になんぎのことなれば、こんどは云ひ合はせて、晝いくつ夜いくつと、きつて賣るがよからう。」と相談きまり、それ／＼のうちの名ある女郎を呼んで、その通り云ひ聞かせたれば、みんなおほふしようち顔で云ふには、「どうもさうはなりんすめえ。それではわつちらがかほも立たず、吉原の名がすたりんせう、をかばしよの女郎衆ぢやござんすめえし。モシエ、今までよし

原の女郎衆のきられたためしがござんせん。」と口々にいへば、なかでもあんまりおかしな亭主まかり出で「ソコそのやうにみんなわりいれうけんだ。昔、中洲おやア高尾こへきられた、こいつはどうだ。」亭「コレサおまへ妙に按じやした。」亭「ム、、いいはなしだ。」此[illegible]いしやあるめへ、三味せんがさ[illegible]、みか月の、それと見るまにいるよのの、尾花がよねきとわたやら、[illegible]さうおやあんまりけれど、あのおらくもが恨みだや、[illegible]、[illegible]」[illegible]三味よ、前のつりをたさねえか。」[illegible]「なにさ、こう儲がたかつたわな。[illegible]このあひだ幡八[illegible]やで、だいぶうちのけいを出しましたよ」[illegible]「とうにしら玉が座敷でおこし[illegible]しら玉はきついやつで、あの[illegible]のしんさうだしはめへらしい。」[illegible]とうもいい女郎しゆうれえ。」[illegible]「あそこのわかい衆も、たいしひきのある女郎だ。見世びらきのとき着た黒ひおうぎの名鳥のおこには、いい着物であつた。」[illegible]「あれは野州の[illegible]とかいふ[illegible]つたのさ。」ふしぎもこそを、[illegible]きく中[illegible]「すてきと、わよつとこらうじやし。おやしきそうにござりますよ。」[illegible]「どれもひとむれとはる。[illegible]「どうでもこでるが、いゐ男ぞろひと云ふも[illegible]大明神だ。」[illegible]「どうかはおでれえたわな。」[illegible]「どうでもこつるが、いゐ男ぞろひと云ふものだがね、[illegible]なふりむいて通りやす。」[illegible]「[illegible]きついみんな[illegible]郎なこつたね。」[illegible]ちよつと見たんし、あとのふりこでの女中は、かはいらしうござんすね。」[illegible]「まつはの喜瀬川といふはたいはだ。」[illegible]天王寺の萬[illegible]うといふ所もござりやす。」[illegible]「[illegible]ふんこらしてもねえ。」[illegible]「コレ角のおまてなしきは

中三「こなた、身うけをされるおやぢはねえか」善「まゐつたと申します。」三「うらやましい事でござりやす。」玉「おいらもしこうはだれなかし」善「さうでござりやすねえ。此のおゐら中の町で、五明の湖月とおほきにはなしした、山口巴屋には、花扇、七越なども、今での傾城だよ。おらアまだ鶴が座敷を見ねえ。よく出来たさうだ。いまおやぢついものになつた。」三「にしきぎやこれらさきたごといふ、惜しい女郎が出るとこ、二丁目のにしきぎ、松葉のかふた、さき川、松の井などといふかい手が出来る。女郎衆もたいねへもんだ。」玉「紅は丁子やから、つきだしが出たね。」三「はやく見たうござりやすねえ。」三「さびしいさうだよ。さいふ御前さんで見てきるいましたが、いしやうは地が緋で、いろ縫のぬいで、はご紋盡しの模様さ。」とんだようござります。」三「かどの玉やら、いつでもにぎやかなうちだなう。」玉「たが誰さん、歌うらさん、玉菊さんの三人まいで、紫夕さんがでさしつても紫夕とはあげません。へやからよしんざうしゆも、ひとあいきうがよくつて、いつはの二階が丁子やといふものさ。」尾「扇屋はもう、見世がでるではねえか。」玉「三芳にあとからでますよ。」三「ぶあそばせんやうでんすねえ。」玉「よほどでるうちがありやす。」三「すかはおにほどうした。」三「ねしとつもへか、定つて出なんすさうだね。」三「いま女郎がだん／＼なくなるの。」玉「左様でござりますよ。」尾「わかなやの白玉も、だいぶしん手をだすさうだ。たはらやのよしのは、わか松やへいつたさうだの。」三「あの芝居へ、

宗十郎がはひつちやア、話せやすねエ。」昇「しばるといへば、かほ見せを見たか。とかくさかひ町がいいさやうばんだの」三「ヘイ昨日、代地の梁里さんの桟敷がござりまして、さかひ町をみました」藤の「そうか丑月やに、ことといふ伊勢屋がきついものさ」三「そりやアせんまやらのことあがいいとれ、にきつ見せうでござんすねエ」三「一見にいきやんしなア。そして帰りにすぐに、ぜひ〱と所へいふなんしと」いふ所、ところで行くさきに、行きやれ」三「なる程こいつは、一寸きれいのことじやうなのへ出しなさい、それは両か、左交、ことなし」三「しんぜた。それで、書くもゆだよ。あの出、ござい、評判はどうだ」三「まだ善悪わかりやせぬがのう。ホンニ土橋の介二とかいふが、だんなにお目にかかりたら、よろしく申し上げてくれと申しました。わたくしは参りませんが、ついたくしは両座と近年にない仕でございました。さかひ町ほとほりのれんのさじきが、とこ軒替、ふきや町は品川れんのさじきが、丁軒替、まんだらさうなことさ」昇「さうでありましたら、品川と云へば、惣助がいかいはにぎやかであつたかの」三「だいぶ人が出ました」昇「又おほかたよう助奴や、おさんも十かしやましたらう」三「ふんだん女郎ばかりで、おほぜいさう〱帰りました」三味線では、ぺつとり入れたさうで、此頃は品川の夢ばかり見て、ゆうべもねごとにいつて、女房にさめられたのを、咄時にとつてる間いたとさうして、けさおけやまでの噂でも評判でござります」三「おつ

レ公は、人のことばかりいつて、喰ひがくしはうらみだぜ。松坂の女郎を二ちやうとぼして、二ちやうあなとほさうといつて、よわらせたさうだ。」 三「ヘヽ、おきやアがれ、べらぼうめ。」 □「これはきはきにくい公事だねえ、鶴聲さん。」 鶴「モウ一二まいだかせたら、もつとばけが顯はれよう。」 三「さばの悪いしやれだ。アハ、アハ、、、。」 ト一座わらふ。 三「此のあひだ、我物がいいのを出しやした。」 □「こいつは聞きてえ。」 三「さる客人の座敷で、客人が云ふには、「これ我物、このごろはどうぶふせかいだ。」「只色氣とくひけでござります。」「こんなら、上下からもちゐろ。」「アイヨ、まつがやのきやく雲隠といふものさ。」 「イッは出來やしたね。」 □「ウ、いい\/\。」 □「此のあひだはだいぶ俳諧が世に出ました。我物がとこにも定會が立ちます。いつみやのこゑん、井筒やのせつぺい、松やの魚民なぞが、いつでも利うんをいたします。」 兵衛 トはなしのうち、調子のあまはし方忠 □「おくでバつとやらかしました。もうおかへりがようござりませう。」 □「それがよからう。」 三□「チト幕がながすぎようの。」
鶴「そんならいきとしよう。」 まひ「おいらんのとこへ、てうづにお出でなんせんか。」 トみな\/\したく出 その「す、こぶいいねえ。」 三味「おあへと道ゆきだ。」 その「しつたかイヤヽ。」 ごん\/\來おもてへ出る。 まさ「アレ鴈がとびんす。」 鶴「ア、水底に書なうつす鴈のゆくとき。」 □「なんとなり鴈とんだる鴈のゆくへかな。」 鶴「だいぶ酔つたわえ。」 たか「す、あぶなうござんすにえ。」

其　二

よその人相は春の花を散らせど、吉原の人相はいきて働く花をさかせ、若いものがゐてもんとうに犬を番せば、忽ちもとの花の咲きそろうて、某人衆上より落つるかと、よほどうかれの色見えて、とふへはまる素見あれば、犬につきまとうて皿をはりあげ、茶屋の男はおそろしものにつまみだされんことをおそれ、見番の男がなおもの小わきにおいこみしに、安藝三郎太郎が三味せんと見ゆるそれしを、昔はぶらもむかうの人とよびしが、これも今はそれ〴〵の家名を呼ぶ事となる。さすがに見番には、千両ならずけびきさう、まさかふたばこの小かけはなけれど、西のうさを一枚持つて来つてしやいと云ふは、こよりまきしやうにをかしき女郎のつかひなるべし。まことにうき川竹の流れのまにまに、はし人のうかれをすゝされる恵りしおもらゐ、女郎に幸く宗に面白く、するほどけつくかけりわれ、なさけやするは我のみならず、ひそかし北州の千年花園の苦界十年と廻りあひ、いつかは人のつまとこれとも、誰が花ぞはかなにその道であつたと云ふもおれにして、宵を散らし〴〵にいつくゆか、消えてたくなる苦水の身の上、別して辛さは役所のつとめ、三味せん枕の間座で、二上りのすがたまを、こゝに知られぬしくれの宵、みせを知らする鐘にには、ひと通く顔の鏡の前におもてあなされては、中ほ、八今もた、よばれ、蝸牛、それ〴〵に鋼を直しつらなりたる、そのたにはうけ親しふたで、よそがあつ

べもあり、長々とふみ書くもあり、何か耳こすりしてさゝやくもあり、くさざうしじやうるり本讀むもあり、きせるをとほすあれば、火いぢりするあり、はりひぢあればたてひざあり。こちらのすみでは、かぶろに百人首教ふれば、あちらでは、疊たゝいて鼠鳴きするあり。いろ／＼さま／＼の中に、部屋持のなにがしと云ふ女郎、振袖新造が呼びつぐに、誰さんでござんすと、立つてかうしさきへ顏を出せば、外にはかうしのはしに忍び姿、風呂敷頭巾に顏かくし、小聲にて、「おれだよ。」といふに、こなたは命と思ふ男の聲なれば、聞きちがふ筈もなく、「よく來てくんなんした。」とそゞろに嬉しく、今までしやくをおさへてゐた手で、かうしのうちからかいなをとこの手をぢつと取り、「モシエ、晝程ふみをあげんしたが、屆きんしたかえ。」「サア其のふみのことについて、内の出憎いをいろ／＼につがふして逢ひに來た。マア手まへのかゝさんの病氣はどうだ。」「アイサ、ゆうべ弟が參りしたが、だいぶよいと申しいす。ぬしのやつてくんなんした藥が、さうおうしたさうでござんす。このごろはかてゝくはへての苦勞ばかり、聞いておくんなんし。杖にも柱にもと思ひんしたあふみやの旅人衆も、沙汰なしに立つてしまひなんした。憎いといつちやござんせん。それはさうと、主のかけのはうは、どうぞかたの附けようはござんせんか。二兩や三兩はわつちも、どんな都合でもしてあげんせう。なんにしても早く二階さへあけば、ゆるりと相談もできんす。中町でばかりお目にかゝりんしては、

どうも氣がおちつきません。わたしはこのおちがやうなはかないものに思はれなんして、さぞいやでござんせうに一ツリやこつちおかしな云ふ事だ、そんなことを云つて、おれを困らせる氣か。此の頃もこつたのお前の事について、いろ〳〵こゝろをいためてゐる。おれも世が世なら、十両や二十両の金にさゝつゝ身でもねえが、今の在にはつまる習ひとはよく云つた。此の頃は其の世でか、やりてやまけしが、の顔が、しやうがのぼゝすや、まんまのやうに見えて、よるも時々うなされる。内ではおやぢがむくむく、茶屋ではかゝがふるれる。ふさいでばかりゐるれば氣色も悪く、今夜も頭痛がしてならぬがなぜか一トばんでも逢はぬと、氣にかゝるから出て來た。これ見てこゝといふそれをすこしとつて見すれば、なんぼ夫でもやうけ〳〵、おもひなしか顔もやせて見ゆれば、女郎はみなさあれどうのかたれかので、一トト目見るより胸もいつぱいに、思はずはら〳〵と涙をおとすこゝまでもなしよつて三味せんをひいて座たふの鵜しんでう、ただこる附けて出し、それと知れども、遠慮なしんと知らずがほ、かの男は力を附けてこゝしや、其の様にふさぐことはねえこ かうしたの人の目がほね忍ぶも、ちつとのうちだ。たがひにふさいで居ればいつかまたあつた風が吹かうわるいとしいへば、女郎にあおた涙で、かうした氣のの字書きたがら、一生をおう云ふ身にしたのも、みんなおつてが悪うござんす。わるどめをして居つゝけにおいたり、何かしたのら、今此の思ひ、いつそくらがへでもしたうござんす。一トこ そりふし二階に

玉琴が、座敷あたりと見えて、いつ音がじやうるり、唐綾が琴にて、「ア、いかさまさうでやすナア、戀もまことも世にあるとき、人の心はあすかがは、かはるはつねの習ひぢやもの、逢はずといつそいんでくれうか、イヤ〳〵、逢はずにいんでは此の胸が、晴れぬ心の中にも暫しすな、ゆかりの月のかげにはゆかに聞めるかうしまきに、ふたりが身のうへ、かの客はきせるをはたき、「又おそくなつては内も悪し、歸るべきもぶつきうぢや、そんなら歸るによつ」と、いひ捨てて行かんとするを、「マアちよつと待つてくんなんし。云ひ殘したことがござんす。」「又久しい物、云ひ殘したとは何の事だ。」「マアちよつとお、待ちなんしよ。」「それではいつまでもはてしがない。やり手も見つけては悪く思がつへ。マアそこを放しや。」「マア待ちなんし。其のやうに急ぎなんすは、外へ行く所でもござんすかえ。そんならどうともしなんし。」「コレ成程わるぎなものだぞ。」「ハテバからになるのは女郎の習ひざんすわな。」「そんなえような氣があれば、こんなに苦勞はしねえ。ばかなべらぼうだ。こじれつてえ」といふはしたいには、かうしがへだて隔方なきに、振りきつて行く。呼び歸すのも歸るのも、ただいもういにこつたる中、はたから見てははたはけらしいが、其の身になつては無理もあるまじ。これぞ色里の譯知りでは、女郎のまことも珍らしからず。すいた男もすかれぬも、入れ代りたちかはり、のぞく夜見世の月宮殿、白衣黑衣の天人が、かなもと左十五紋、一夜になくすその樂しみ。見たつる

客の中にわりこむは、山の手つうと見えるふたりづれ、ひとりはまがひ八丈の長ばおり、ひとりはくろとびのはおり、かうしにかほつけて「コレきふう見さつせえ、どれも浮氣らしい面だの。」「ムヽ、すゞみになつてゐるのしんが、胡蝶を買つてふられた女郎だ、いつも／＼建具やのかゝるこを見る樣に、かうしをたよつてゐるもの氣がねえ。コレ與ぼう、こゝに吉原通の知らねえけりやならねへ事が有るぜ。ちやうどやのしんぞうは、それたばこぼんをひかへねえにョ。」「こいつは氣がつかなんだ。」「ソシ角の新造で唄ふうたびだすと、いつでも鐘門ッだ。かどの玉やおやア、いくら殘つて居ても、ひけ前に見世をひかせるョ。それだからおいらァたび／＼見はぐる。こいらア素見通の極意だ。」「コレそんなに顔かつしてゐるな。顔へ赤イものがつくによつて知つたかぶり云ひすてて、どぶをとびこし、又わかなやの見世をそゝる。かゝる所へかの鶴吉、烏江、いなづる、えひづる、そのづる、五町、三味子、おふくゝはしが忠兵衛、むだゞち／＼に眞崎より歸り來る。まがきより、「もうおかへりすや／＼おいらんよ、けふはお寒しみまんしたね。」ト言ふてシヤ、おいらんのとこへ、なんでみやけをおくんなんしたら」ト言うこうさん、いつそきれえざんすよ。」いま、だいぶまじめざんすね。」三ぢおめへおたのみ申は、一ッちやうでゝとほさせたといふかほだ。」「重田がきれすにさ。」言ふ直すかね。三味ていたそうよ。」三人みなお前が一ツ、二ツ、三ツあがるといふだろ、へ、すつていにとりつい　サア早約束のもの、指

つて来てくんなんしたかえ。」せき「人形か。つい忘れて来た。」せい「いいむしさんすね。」トふりむいてはしごを
おりにかゝる。せき「コレ、みた山さんによくいつてくりや。」せき「知りイしないわア。」ト下へゆく。やりてふき「ヤ
かゝる。
お早うござりました。」いな「いつそ面白うござんした。」まひづる「こてふや。おいらんがはきものを、れ
んじへもつて来ておきやア。きり／＼しやよ。ながしてくれめえよ。」これトみな／＼いなづるがざしきへいり
る。ネヤ、取りて大きにわきになる。此の所座敷のやうすいろ／＼おもむきあれども、まへの貞綺のかたににたれば
こゝに略す。かくて程なく、なけもすぎ、とこ納まり、たいこもち、げいしや、ふきもいとまごひして帰る。駒日があひ
いたけ、しんざうのまなづるなれば、下ざしきへ床をさまる。かぶろはおいらんのくしからがいをはずしてふき、
から赤い箱へいれ、りやうてんの花簪を抜いて、れうしのふたへのせてしまひ、下へ行く。さの間にはしんざう二
人。トたいこのきもの　まなづる「モシイ、むら／＼るさん、おめしなおあんなんせんか。」まなづる「つきやひん
なそたいれてしまひ
せう。」トたばこへ火をたて貝をかけ、すゞりぶたおくりものなぞひきよせ、まき「ふたりおやア寂しいね。誰ぞ
けし箱からぎん（の）さかばし、かよくの金もんのつきたるを出し、
くればようござんすね。モシイ、これはなんざんすね。」せき「そりやアおよしなんし。蛇ににたさかな
ざんす。」トいふはすば　しりの事。まき「わつちやいや。よしいせう。」トいふ所へはやづる、くろもじの
やうじをホヽ／＼かみながら、はやづる「こんや
のやうなじれつてえばんはざんせんヨ。」せき「じつかえ。」はや「アイサ、きやうさんさんと、なのぎく
さんと、ひとゆふさんと、夕なみさんといちざで、ばうさんざんすわな。」まき「ちつとおつき合ひな
んしな。」はや「たつたいまえい山さんの所で、きやまさんと食べんした。」おやヽ／＼きつい何もねえこ
つたの。えい山さんの所に、かくやのかう／＼がさんす。もらひにやんなんせばいいね。」まき「ぬし

やすかはちやの客人は、どうなさんした。」はま「もう構ひんせん。今おやアもういつそまんざらだね。」
ま「きつい調のねえこつたの。」ま「今時情をたてるは、やぼさんすわなあ。」ト實下たて、[illegible]
不実さゝに立つて行きなさんなお[illegible] ま「いそがしいとつちやねえよ。松のうちは丈こくまひのやうだ。」ト行
びのとけ[illegible]を噂なさんし[illegible]あんどうの火をかきたて、[illegible]
いれおほつ[illegible]ちつとおかしなんし」[illegible]長々とした文をよむ。ま「やさいのときさん、しん
ていきたる。
になるもんだね。」ト寝まき[illegible]來る。[illegible]「これはにぎはなさんすかえ。」[illegible]「まだわきゝんせん。」すゝ「じれつてえね。」
ト小よりをして、ど[illegible]「キンと、やさの吉さん、お前は、正月袖を着なんす氣だえ。」[illegible]「わつちや
ひ[illegible]にむすび
うはぎは、おかしちやにお揃のすそ模様、むくはふむいろと思ひんす。」[illegible]「なんと思つてか、で
たふじみなんすね。」[illegible]「その代りに、もんはこれ／＼をつけんす。」[illegible]「いやだなう。」[illegible]客人のうは
きになり、慰れたりまれるの、[illegible]なんであいつ[illegible]て、[illegible]を[illegible]時
うつかいいなつてうつに行[illegible]下[illegible]に[illegible]やさ[illegible]になしてゐた[illegible]こう
にや。
り、[illegible]「行つ[illegible]氣が通りなんだね。お邪魔になりんせう。[illegible]うらやましいよ。」となりもまん
ざらでねえネ。」鳥「マア話しねえナ。」まひづる「お話しなんしな。」やさ「ナウいはれると、いつまでも
[illegible]たくなのいな[illegible]「[illegible]なんぞとおはせ[illegible]花が散るわな。」[illegible]そんな殺し文句をいひなん
[illegible]な」[illegible]て[illegible]なん[illegible]、[illegible]おいらのとこで、[illegible]ノネあつせえす。[illegible]ノ
[illegible]これやは、[illegible]おいでなんした。アノネこれはちつとでござんすが、[illegible]ノネおあん

なんしトサ。」トげんじ豆くずまふちうを持ち来る、鳥「ムヽ、おいらんに、おありがたうござえすと、よくいつてくりや。コレこゝへはひつて寐ねえか。」ト手をつかまへるをふり放し、やそ「しつたかしりいせん。きついぶしやれやうだね。」トいかにもいでてゆく、まひづる土瓶のあるいちやをついでのむ。鳥「おれにちつと呑ませや。」トいふゆゑ、ちやわんをつぎで二つほどはじいてやる。鳥「ト、つめてえ。」しやうじをすこしあけてかほを出し、鳥の「おたのしみざんすね。」鳥「だれだ。にしき野さんか。サアはひりな。」錦の「そんなら一ツ服のんでいきんせう。」トつまにみすがみをもちそへてつくばひゐる。まひづるたばこ附けて出す、まひ「頭痛かえ。」錦「いつそのぼせんす。」鳥「そのおめへの小びんの梅ぼしでちやアいりてえ。」錦「にくい口だよ。どうせうネ。」トよぎのうへからきせるでたゝく、まひ「たしか小がらしさんと、ましの戸さんと一座だね。」錦「これ〳〵が来てゐんすから、まだはつのはうへはいきんせん。モシイおやすみなんし。」トいひなぐりにしてゆくにあとへふりそでのしんたがづる、「まひづるさん、ちよつとかほをお出しなんし。」まひ「何の用だえ。どうしたのだえ。」トそらとぼけてらうかへ出で、ふたりこそこそとはなし、なにかまひづるはむしやうにうなづいて、ふたりともにどこへか消えてなくなる、作者の京傳もなにしにいつたか毛頭知らず。鳥口はひとりとこのうちに残されたれど、じたいうぬぼれてゐれば、なは気がつかず、まくらもとになげちらしてありし三味せんをとつてつめさきでひき、歌「人目も知らぬをとこなら、うらみも戀もあるまいものを。」折ふししんとしめつたるとなりざしきの女郎「忘れもよもやなんすめえ。ぬしが三人一座で初に来なんした時、まんざらでねえと思ひんしたが、わたしが因果、いつそ其の時思ひきつてしまへば、ようざんしたに。」歌「なまじあふみの水かゞみ、うつして見ればみなそこは、かたいかた田の石山と。」女郎「なんのこつたえ。そりやア

こつちからいふせりふだ。ヤレわたしが此のむくへ、へりをとつてあけんせうの、ヤレ女房にならうの、ヤレかゝさんに逢はせるのと。」[illegible]きつうのせたにわしやのせられて、思ひ過しはわれからさきよ。一つまへおびしどけなりふり。」[illegible]「マア、そつとんだふさいで來た。歸らう／＼。」[illegible]待らなんし、女郎のばちもあたりんす。ソリヤあんまりでごさんす。」[illegible]「たとへあはずと三井寺の、かねては思ひるるさきの、月のひら野はゆきのくれ」[illegible]コレ泣かずとよく聞け、此のやうに氣強くいふも、實は手まへの身のうへを思つての事、おれといふものがあつちやア、客もつくめえ。まつたうぶんされたぶんでゐる。ハテなんといはうがかといはうが。」[illegible]人のうけさも七十五日、うき名さのざくの出ほしゝます。」[illegible]ソリヤほんにか。」[illegible]はてさうだやかまし／＼。」[illegible]嬉しうおざんす。」[illegible]たとへどういふことがあつても、アレ、あのとなりの歌のとほり。」[illegible]下名はひとつにもとの水。」三味せんをきいて、ちとごと。[illegible]ヤ、あのこつた。となりのあのやすなかりで、こゝまで口舌をするならきこえたが、こつちでうたつて、となりでくぜつをされてはうまらねえ。此のまひゐるは何をしてゐるか、ハヽア聞こえた、道理でよひにをとゝきとしやァがつた。トかんをつける所へまたつる來る[illegible]何をしてゐた。」[illegible]おいらんの客人のつれしゆが來てゐなんすから、用があつて。」[illegible]くそでもくらへ。よくいつはいかいたナァ。」[illegible]所へ、二階より[illegible]來る。[illegible]「サア夜がからりとあけた。どうだどう

トいはれて鳥目心せき、まひづるをつきとばす。むだしかうつ柱に頭をうちつけて、かうがいをへしより、竹門から出るあきんど「あゝあぶらげ〳〵。」

郭の大帳　終

洞房妓談 繁々千話 敍

前に繁々野話とよぶものあり、古今の奇談を載せ、其の言夜話々々として、世におこなはるゝ事、亦繁々たり、此に繁々千話と題するものは、洞房の妓談にして、オス、オス、オスの方言なり、もし世に壊木屋の吉八如きが、是れを聞て消すおもとかゝ、千話々々々々となるならば、書肆の幸ならん乎

山東居 京傳 述

江左第門ノ北ニ。華街幾ク追塵ニ。美人憐ム白玉ヲ。佳子擲ツ黄金ヲ。
嬌態千夫惑フ。姝顔萬客臨ム。洞房何ノ處ノ曲ゾ。羅郭孰ガ家ノ音ゾ。
傳フ隋ノ朱脣ノ韻ニ。遏メ雲ヲ皓齒ノ吟。晝ハ思フ翡翠ノ席ヲ。夜ハ娯ム鴛鴦ノ衾ヲ。
豈有ニ風流ノ薄キ。當ニ看ル妖艶ノ深キヲ。鄭聲ト兮衛色ト。恐クハ是レ古モ猶レ今ノ

洞房妓談 繁々千話

山東京傳

青樓の花街、飾窓の宜、進脩、車馬、富貴を作りたり。女郎のためにみえばうする事、昔も今もたがふ事なし。かの明暗闘に、色男芸者で首を振るやう、といへる、其の情を穿ちたる句なり。今廓門に入る通客を見るに、志身に美服を着し、口に美食を喰ひ、諸藝に疎からず、よく當世に貫り、萬事に通じて、能通が當世、漸安が容貌も、我が物にして、大坂の傾城や、江戸の團子よりも、はるか諸を濟ず、金のなる木も鉢植にし、嫌な女さへぶつてしめた顔するは、ばうは、みな姉女、嫌女、丫頭、供見、親のつけた後見までに、たやすからず思はれんが爲に結び附る事にして、素より我が身に相應せざる事なれど、或は金銀の約束を間違へ、又は知らぬ事も知つた顔して、人に心を見らるゝ事多し。これ眞の通客にあらず、通に似て非なる者なり。これを未だ通といひつべし。當世此の徒多し。爰に何屋といへるにて有りけるが、大きなる女郎屋の二階座下、座敷にて何やらん、誰れたることありし相談と見えて、皆やむすに　正助「コリヤア御もらひなすがよい[illegible]

「あいさ、つまんで申しませうか、マァかうでござんす。あの五節さんとあやめさんと色事の分は、わつちもとうに知ッてゐんすし、みんなも來てしやくりんしたけれど、わたしが目にかゝらぬ中は、知らぬ顔で居んした。五節さんは梶の葉様の客人、梶の葉さんはこつちの座敷の新造衆ではござんせんか。夫れにあの雛形さんが、ゆんべよつて來て云ひなんすには、此の色事の分はわつちが取持だから、あやめさんには何ンにも云ひなんせずに、どこまでもわたしが悪いから、わたしをぶつとも叩くとふして、どうぞ五節様を、あやめさんの客人に、貰つてくんなんし。ひごろ兄弟ぶんのよしみは、爰でござんすと云ひなんすけれど、夫れあんまり手前勝手でござんす。雛形さんとわつちが兄弟ぶんで、常日頃ういも辛へもいひやつて、喰つてしめたてえ程可愛いけれど、兄弟分の雛形さんの云ひぶんを立て、座敷の新造衆の、顔の穢れるはかまはぬかと云はれては、内所へ聞えてもよさ、二階の女郎衆が聞ィても、わからぬ者と思はれんす。」五「大きに御尤もナすぢだ。」あ「是れと云ふもせんたい梶の葉さんが、ぐうたらべいからおこつた事サ。それだけなほおし付けられんせん。」五「ホンニ御尤もでござりやす。」あ「それだによつて、主の内の客人で、氣の毒だけれど、いつたん五節さんは二階をとめねば、どうもすみんせん。ハテ爰の二階ばかり、日は照りンすめえ。あやめさんの働きで、是れから、中町で逢ひなんすがいいのサ、それは大目に見てつかはしんせう。兄弟ぶんのよしみは

よしや、是れはこれだから、雛形さんの贔屓は、聞きとゞけられんすめえ。」馬「聞けば聞く程、御尤もでござりやすのさ。」亀「ハテ世間にいつくらも有る事だものを、やかましく云ふのがおやァござんせんに。いろが悪くて云ふと思ひなんすなえ。」馬「何サお前わかつて居るこつたものを。」亀「其のうちみんなの前も目立つやうに、手足の二三本もはひれば、又わつちも料簡がしようござんす。」馬「手足が二三本はひつちやァ、わつちらにやァなほびつくりでござりやせう。」亀「洒落おやァござんせん。」

ト此うちの亭子のびてをつれる。此りきとのなんにて、まゝあなきうだ、しかと思ひ、トヽ、めきに座に来かとなる。折からこの亀の内にこゝをきこと云ふ中三の女の座敷へ今宵座敷には客人来て居れど、ねこゝの客とわけありて今下座敷に客をとしとの、こゝにとり、これにつに行、にこ、下座敷へ来り、忍び入らんと思へど、わるな処と気か、見て居るゆゑ、行きつもどりつ、やう／＼と間をうかゞひとなりのあいて居る座敷のかげへ顔をあけ、

雛、小ごゑにて「あの、今茶やの男と、何か話をしたがなんだ。」亀「はつをいつてきんしたのサ。」馬「出る気かへ。」雛「ナニサ。」トぐつとしてのくにあて「から手めへといふものは、わかられねえもんだぜ。こんや座敷にも、客が有ルおやァねえかえ。それに、初の客に出る事はねえ、馬鹿なつらだ。フゥ聞えたァ。とうに聞れたといつたが、手前又、アノ虎月とやらを、新造けへにしてよぶのだな。初の客もすさまじい。あふつと目にかゝりやせうが、度々だから、こんなことであらうと思つた。」雛「ホンニぬしも、きつい焼もち気でござんすねえ。もう云ふわけでござんすに」ト、いひきうにすゐる。馬こゝに「イヤ／＼。そんなわけは聞きたくもねえ、おいてくれ、おきにしろ。」トつきとはなす、雛あふむけにたふれ、しのぎ二三本をれるやうす／＼おきたり「エ、モジ

れつてえ、聞きわけのねえひとだよ、どうしようナア。」ト少い大きなこゑをしさうにした「いゝアね、わけをね、お聞きなんしよ。どうしてそんな氣が、ござんすものか、氣が違ひなんしたさうだ。」男「エ、やかましい。」トいひはなし「氣も違はねえでどうするものか。聞かねえでもわかつて居らアえ。」トこつちも大きな聲をしさうにしたが、違をはじかり頭をとつて耳に口、「コレ今夜のしうちで、萬事がわかつたわ。もウ是れぎりだ、ちくしやうめ。」ト枕をふり上げる。女郎は男の手にすがり耳に口を付け「マァ、わけをね、聞イておくんなんしョ。」トこれより兩人囁いては居れど、あたりをはゞかりたがひに耳こすりで、くつせいなおふ耳こすりの口論、其の身ぶりをしけれども、こゝに違ひはなし、室の内に手あやまちのできたやうに、氣なしにふたゞびするとすこししづまれば、琴なき聲で「ホンニござのみじかい。わけも聞かずに、腹を立てなんす、そしてどうすりやいいのだえ。」男「知れたか、いたこの文句を、づぶでぬかしやァがる。そんならわけを聞イてやらう。」琴「わつちも相應に蟲がござんす。客人はあるし、主は居なんす。初に出る氣はござんせんが、常世話になる茶やがよんどころなく、わけをいつてたのみんすから、茶屋の義理ばつかりで、出ようといつてやりんしたのさ。虎月さんをよぶのに、ぬしの來て居なんす今夜に限つて、呼びんすものか。なんぼわつちが、智慧がなくつても、其の位の事は知れて居ます。證據のため、此の鄰へ牀をとらせんすから、よく見て疑ひをおはらしなんし。」男此の理にふしようぶしようをれる。琴なけた枕をなほし、みだれたびんをかきあけ、をれたしのぶをとりあつめて、自分もねる、後は寂として音なし、いつたい此の男、そら琴が外心なきは、しようちで居れども、かんしやくも戀路の景物なり。所へかの初の名代の客、馬骨、トいふはんか通來る。此の客れば、わざとした仕打なり。なかなか手のあるやつと見えたり。豫てそら琴が手とりといふ

事を聞き、いざや我をいつところして見せんずと、間左に晦市をはらひ、有名代はけつ〳〵もたりしが、懸けたる黒の
ものと、ぐつとのみこんで來る。是れうぬぼれ大尽様ぶるなり。衣装づけ萬事のおく〳〵、ゐ分もすいた所で、里の
所たりあんの小袖、本八の下着、二ツつい白羽二重に、なにりもようの付つたる給羽織、黒のつかの宗代よ
りまつ先へ、〳〵しはじめの教所、うしろ三所に男色にした給羽織、丸も前下りのはしを少し印付け、紺
行案のブロフヤンの帯、ふた川住入れの、ミン変ははげたばこ入れ、〳〵しき頭巾を、一文に
見れば、これ〳〵といはぬばかり、ぐつとそつてあゆみ來り、まづその方をみもやらず、のれんをくゞる。
氣助どん〳〵。」廻シ方「二階はみんなふさがつて居るから、下座敷によつ。化助がすけひまかでないので、
いそがしくてならねえ。まだお座敷をこしらへねえ。よつここへおいれなさい。」トこういつてざしきへつれゆく。
番頭「だいぶ塵圖だの。」ト座敷、「すすくらいわつ」ト、唯今方から持つて參ります。」
「ちうちんのらふそくの火でたばこ吸い付けるつ。茶「愛はけつく、下座敷の方がようござります。」ト、庭を見て「此の石はいい石だ
青の野面だ。あの燈籠は住吉だが、錆がつくとよくなる。植物はどれも、藪柑子の鮮緑日だ。たがれも、
ねうちはねえ。」ト口をふさぎ程なく運しなた、片手に國墓を持ち、片手に杯臺、小指に徳利をひつかけ、
一度に持ら來る。續いて名代の振袖新造來る。それより運しかの數偏一度に來ぬしかば、客夢はふし
ようぶりように來り、お定まりの一杯すむ。馬肴が座敷の仕打、ちよつと茶を呑むにも、茶の湯の手
つきでのみ、酒を悪くいひ、紙入から夢爪を出して、見せびらかし、猫の悪い事許り故、客夢は始終
無言にて、〳〵、黙として出で行く。後は女藝者、二三組來て、かれこれと時うつり、おさんなる
かな、客夢がたのみにより、馬肴が床、むの前へ、皆々歸る。さて馬肴は遊し床の中にはい

ぐら、薄雲の煙草くゆらせ、獅子のかうの見る様に、口と鼻から煙をふいて居る。 [illegible]
それに、はやのまゝくれないぞ「エ、モ、じれつてえしやくのおきやァ」ト立ち出づる廊下にて [illegible] りだ通りこんで居たるが
廊下鳶をしなんすなえ引ッ」ト来るかけ　名代「どの松さんだ」二首尾の枝さんの松さんサ」いつそからか
ひなんさァナ」ト立ち行く。これ今、むかう座敷に [illegible] 二人百萬遍の中ほどに、念珠とられ
たやうに、車座にたほり、火鉢をとりまいて、バチャ〳〵と、むだ口をたゝいて居る。 [illegible]「いい
おやらさんがでんしたノ」 [illegible]
ござんせん。硯蓋物のたべかけでござんせう」 [illegible]「またさんでつくりしんした」 [illegible] また誰ぞさう思ひな
う　おすてなんしな」 [illegible]「あきつい苦労性だよ」 [illegible]「ホンニ此のおうの笄は、きウついでできさうな
もんだネ、鳥待さん」 [illegible]「小間物屋とんだ風をひいてるのんすッさ」それでまだ持つて参りんせんか」
ッサ」 [illegible]「じれつてえナゥ」をくんでくる。 [illegible]「後生だよ、いつでもだよ。又にきつおやァ届ねえか」
花「ナァニあつかァござり「ササンヨ」いつそこぶい茶でござりイすヨ」 [illegible]「サァ此の子はやっさぶい、
茶といふがあるものかや、オホヽヽヽヽヽ」ト笑ふ [illegible]「ヨシ〳〵おれにも頼まれてくりや。どこぞの客
人にの、かての紙を一まい、貰つて来てくりや。そのかはりあした、兄弟ぶんをとり持つてやるわな」
花「アイ」ト [illegible] らひなから行 [illegible] これは常やもあかなれとまだ年若なり。 [illegible]

らゥリと来りい」「風萩さんえ、よしかね」をかしくつてたまりやァいたしいせんに」ちやんとわつちを、しま
ひにようこしんすな」あの坊主に出るとがは、しんせん故え」出られねえといつてやりんしたら、かう
いつて申しんすわな」生きかはり死にかはり、恨んでやるッサ」「おあへあの坊さんの、あだなを
知つて居なんすか」「イヽエ」「玉眼入りの義圓と申しンすとさ」「ハアなぜねえ」「あたまが丸
くッて、色が黒くッて、目ばかり光りンすとさ」「ホンニさうだよ。たゞあねえに色が黒イねえ」
色の黒イ方はやるとしッて居ますかねえ」「それッてさうとお聞きこんし」せんどの喧嘩がよだすみん
せんヨ」「ドウなすそは、萬で〆くイ伊勢屋の内と、角文字さんと、神風さんと、おあへさんと、四つ巴
でおつなましたら、分がわかりさうなものでござんすねえ」「此の子は時々、おつな事をいひ出す
子だよ」「三ツ鐵輪といふは聞きたが、四ツ鐵輪といふを初めて聞いた」「矢手籠しまつ早ヤ」「花衣
さん花衣さん」「緋綬がお出でなんしッサ」「はあ」「今ァ、参りンすヨ」「今追ッてしかすら」をあ
すれ、むかふにあけようと」「エヽモ、じれッてへ障子だヨウ」「ヱットウ氣をよくしてあけなんし、氣が悪
くなければことあかねえヨ」「鳥待さん、それやァなんだえ」「エいたことを書いた本さんすえ」「そつ
かあらつとあんごお聞かせなんしすえ」「誰が書いたか、いつて讀みんせんヨ」あれどうをかきたて、
「わしも一トの庭に咲く花なれども、蝶の逢まし八重に咲くき」「蝶が死にもし死んだなら、嘆くますぞ

や後の事。」「色にするなといはんすけれど、花ぢやの若木ぢや散らぬ内。」「葉手にするなといはんすけれど、これはたがひに目にも立つ。」「きつい頃日のお前と云ふもんだの。」「後生でござんさあな。」「後をおよみなんし。」「人の浮氣を笑うたわしが、今は主のに笑はれる。」「年と今宵ととりかへほしや、長し短し儘ならぬ。」「主に逢うたるその翌日は、なまけ姿でうかうかと。」「辛い中にも又顔見れば、儘よく\で日をくらす。」「手鍋さげよと口ではいへど、實はのりたや玉の輿。」「そりやアいつそすかねえ氣ぜんの文句だよ。」 トこれより後は、客の噂になり、いいの悪いのいいたのすかぬのと、座をはづしてはなす。折柄廊下をちやうちんなやなやく\いはせながら、馬骨が座敷へ來り、屏風ごしに 「參ッてもようござりますか。」 皆まだそら契も來らず、まちわびたりとして居たるなり 「よしく\いいが何しに來た。」「犬悅樣が、又こちらへ御出でなされました。」 とシく\愛でござります。」ト云ふほどなく來る。

「犬悅」と云ふはよほどよろしき醫者の息子、是れは馬骨が朋友にて、京町に馴染があれど、今宵惡いと見え、すこし癇癪にて此方へ來りしなり。鸞羽かぶりのきめ頭巾、諸事御坊主と見せる風俗。廊下をなみこ、

「ハ、アかけて來た姿の見ゆる上草履、紀逸點々々々。」ト云ひながらきたり「馬骨子、足下の得樂は如何。」「不佞は大ドロンコに及ぶサ。」紀毛のことばに、醉うた事をドロンコと云ふ。是れ醫者の仲間にてよく云ふ、しやれ言なり。馬「おめへ、なぜ今時分きた山の武者所だ。」犬「大いなる情頭ありさ、ぐつといつた所が兩三個の客があるといふやつサ。貰つて座敷へいれろといつた所か、平氣でうしやアがつて、調情弄舌をまじへて、ちかんの如くとりあつかふ

から、ぐつとかけだしさ。あの妓もくらはれねえやつだ。おれも只頭嘆息した。あいつア柴胡湯の性だぜ。」馬「いつかうなものだの。かうおめへはほれて居るか知らねえが、あの傾は、果物點の俳諧をする氣で、慾心にばかりかゝつて居るぜ。ふてかしのねえうちくひやく／＼。」大「どうして見ても慾心家だよ。いつたいあすこの内の、老杉板がまづきさだ。」（ラウサンバンと云ふはたういんにて、やり手の事なり。馬は此のことばいつかうわからねば、）「何がどうしたと。」大「イヤあすこの内の假母の事ヨ。」馬「ム、やりてか。コウ吉ばうが、いいのを出しやした。なんと云つたと思ふ、あのやりては、弔ひ道具の龍頭といふつらだッサ。いいぢやアござりませんか。」大「奇々妙々。ときに婦人、おれは兼てゆくばかりだから、長袖を揚げてもらひてえ。」茶屋女「ハイちやうしうさんとまうす女郎衆はござりません。」大「おきやアがれ。振袖新造のことヨ。」女「ハヽヽ、オヤ／＼わたくしは又、女郎衆の名かと存じました。かしこまりました。」（下女たつてゆく）馬「腹アたちなんヨ。京町のおめへの傾も、首ばかり美しくつて、野じめの鱸だ。」（見かけはよけれど、[illegible]）大「うさアねえ。浦の昆布巻さ。（[illegible]）そして朝なんぞ見ると面も斑だによ、よく見ねえ、[illegible]の[illegible]と云ふ面だ。」馬「あれおれてえ／＼。」大「ぜんてえ此のおうのばん、あいつと理論した時、[illegible]の顔もおこつたが、されどうかどうしようかと、すまぬ心の中にも、しばし退いて考へ見れば、今されちやア黄金を厭ふに似るから、待て暫しと思ふうち、あつちから呑れてきたから、こつち

もをれてしまつたが。もウ殆んどあいさうがつきた。」馬「日光蠟石の硯尺おやアあんめえし、をれるりをれねえのと、そんなこたアまゝのかは。今夜のしうちを幸ひにきれてしまつて、こゝの内でけへねえな、未練をだしなさんな〳〵。」七「ときに足下の今夜の世界は。」馬「まだこねえが、なるほど手のある女郎でござえす、座敷のうちが妙サ。」七「かねて佳人才子の聞えあれば、さうであらう〳〵。」馬「すつぱりわつちが書いて見せよう。」七「おそろしい〳〵。足下の宰我子貢ではたまらねえのさ。」馬「したが名代は、此の廻シ夜具でおそれるナア。是れ見ねえ、夜具は錦の色揚だ、錦の色揚と云へば、此の郭より外にやアあるめえす。分散女郎の古夜具と見える。コレ枕にやァ引出もねえ。此の紋を見な、金箔で石塔に付けようと云ふ紋だ。」七「妙言々々。」たわるじやれをいひ居る所へ、大悦にあぶつたふり袖、馬骨が名代の所に来り、座敷のすみにこんまりしやがみ、しおにとなられたやうに、だんまりで居る。馬「コウ、お前たちア、ちつとこつちへこねえか。」大「夏がようすヨ。」馬「金魚鉢を叩へだしたやうに、とかく暗い方へはひりたがるぞ。」馬「なんさんすとえ。」七「モウいつてしまつた。」一人の新造の耳へくちを付け「あの客人は水さいの龜に似てるるナウ。」馬骨がかほをつく〴〵見て「ホンニよくにて居さつしやるヨ。」馬「さつきから、だれに似たの、かれに似たのといふが、身がはりにでもたてる氣かさ。」七「此の子たちもおつつけ、一個の名妓になるだらう。嗚呼梳櫳とでかけたい。」ト、ふし[illegible]下折を、女げいしやとほるを見て、馬「悦さん、おめへ今の藝をしつてるか。」七「今変を通ツた女業か。」馬「ウ、藝者ヨ。」

夫「我未だこれを知らねり。」　且「あんな悪黨者を知つちやァうらみだ。さつきから郎下をいつたり来たり、用もねえに光るが、ありやァたしかに、鷹を買つて二日めでござえせう。」　夫「ム、さう／＼、こりやァ見てたからう。その鷹も人の質におかいたのを、うけさせてもどつたのだらう。」　且「うさうなえ。」　夫「コヽの婦人茶といふ所を一ッ吃してえ。」　且「お茶でござりますか。」　夫「ム、」　且「持つてまゐりませう。」ト立つて　夫「でえぶ郎下がさうぞうしい。何だ。」　且「ありやァ江戸町へ隠れていかしつた客人を、つかめへてきんしたのさ。」　夫「其のおもそひは君子なり。」トいひながら　且「どこへいきたえふは」　夫「小簾にいくのさ。」夫は儒者なれど、吉原の俗語をあそこここときりおいて、覚えてゐる故、しつたぶりをしたれども、無性にいひたがる。馬鹿にからつきりの文盲故、このことば一向にわからねども、きいたふうの事なれば、ただをしかたに、何の事だとききも返せず、たいがいにすまして、　且「一噺ふんしにいくのか。」　夫「いんにや小便にいくのさ。」ト云ふ所へ女茶をもつてくる。立つて帰てやつとみえ　「ア、馬の小便と云ふ茶だ。」トむりな所へまで俗語をつかふ　且「すぐにお休みなされまし、餘りこがれ」　夫「ム、其の何當て承知の幕」　可東「峯に一はけ夕霞」とうなりながら、小便をして来て、それより大門は寝もしまひ、茶屋の女ら暇乞して帰る。二人の振舞も、二かいへ下びさうなしに行く。又郎には馬骨とこのになり、將棊の駒みつにのになつたやうな心持にて、よほど時移れど、まだ空事は来らず。からではないはずだがと、胸の中は筆の鞘で、奉書の巻紙をきるよりもじれつたく、あまり退屈なれば保養のため空小便をたれてきて、もう、だきたらねば、欠二ッ四ッしながら、廻し屏風の唐紙をこすり。

馬「こいつも東江流だな。ナンダ、のぶながゐやちうのくさツサ。としど〳〵あきのところにうまゐ、ウ、。ときにト。此の所よつぽりよみなに〳〵なにのあとゝゆゑくちわらちにこトすこしかんがへてまた大きなこゑでト、つかひをよこさすにかいにゆくだらう。」と大間違を獨りつぶやく折から、客琴は盛粧艶服光彩動人の風俗。巧様新裁。皆隨時變易。見者謂是時世粧べし。羅帯に懐手して、せり出しの奥州を見るやうな身振。すこし髪の毛のみだれて、顔へかゝりしまで艶はしきなり。一體茶屋への義理で出たことなれば、まさか捨てゝもおかれまいと來て、しやうじをさらりと明くゐ。馬骨はうつかりとして居たるかびつくりして、きせるをはたき、宿衣をひきかぶる。客琴よりそへて「モシエ、もう寐なんしたかえ〳〵。」

馬さすが狸ねいりは、古風と思つてはゐれど、どういふはりあひざか、ついねたふりをしたゆゑ、急におきられもせず「ウ、フウ〳〵。」琴「もしい〳〵。」と氣がつきてそこらを見れば、いまはたいた煙草のふきがらが、火いれのうちにまだけむつて居るゆゑ、これにて狸といふことしれてはゐれど、わざと、また「モシエ〳〵寐なんしたかえ〳〵。」馬「ウフウァ、。」

琴はあまりおきぬゆゑ、さいはひにして行きにかゝる。○これはあまりしすごしたとおどろきあわてゝ「コレ〳〵、モウ覺めた〳〵。どこへ行きたまふ。」

琴「心持よく寢て居なんすから、おこし申しては見んしたが、あんまり心ねえやうだから、いつて參りンせうと思つてサ、きつい寐なんしやうだねえ。」馬「あまりお出でが遲いから、せめて夢にでも見

ようと思つてサ。」琴「何方ぞの夢を見なんしたのかえ、ホンニ初から名代でお氣の毒だねえ。しかしお馴染の所が惡くッて、さう事なしにお出でなんしたのかえ。」男「決してさう云ふ事でなしサ。いつも御全盛と云ふ物だから、しらせんと思つて、はつ名代を承知で來るくらゐだものを、是れにて諸事御賢察サ。」琴「ホンニかえ、御志はお有り難うござんす。」ト、隣の方を見て笑ふ。隣座敷にて、かの色男とおさきに上る新造と、から紙の引手のとれた穴から、のぞきみてわらつて居る。男「コウ、耳をだしな。」新造「なんでござんすえ。」男「アノ客人は、大黒舞のこび八に似てるによ。」新「ホンニ似てをりんすヨ。」男「かうぎにかゑのねが上ッてるぞ。」琴「靜かになんし氣がつきんすよの。」ト、二人いきを殺してのぞき居る。琴それとは夢にもしらず、「お前のこつたから、定めし色も戀もあらうが、馬骨流はそんな事はかまアねえ法だ。色は色、客は客だから、ぐつと大まかに見るのサ。其の上は互の腕づくに有るこつた。」琴「ホンニさうでござんす。なんぼ此方がほれてゐるが負けだといつても、分も聞かずに打つたり擲いたりするは、惡洒落でござんすのサ。」ト、隣の男へあてていふ。男は覗いて居たるがこれを聞き、煙管でうつまねをする。琴よそきの袖でかくしひこれに笑つてゐる。男それとしらねば我が身にかけて「こつちのはたけにやァそんな事はねえのサ。わつちらァ氣にくはねえ事があれば、手をおろさずに、口でさばくといふ奴さ。こりやどうでござえす。些と河岸をかへて、おいらが樣な者も喰つて見なせえ。又おつな味の魚だよ。どうら程廣いさとだか、馬骨を組みとある五郎丸がねえ。目ざす敵はまアお前だ。」琴「わつちもどうぞほれたうすが、主が主にせきのね

え程、ほれてゐなんすから、其の上にはほれ所がござんせん」馬「少しむつ一ナンシヤト。お前だァぶあお
な本よみをするのだ」琴「すホ、、、、そりやァじようだんね。お氣におとめなんすなえ。そしてね
しやァなぜ遅くお出でなんしたえ」馬「けふは金でえ、柳橋の大夫が所の稽古會だから、ちつとばか
し聞いて、夫れから早く來るつもりで有つたが、向島の權三が所に、ちつと用が有つていつたわな。
ホヽ、米田屋の文鮮も、かはいい事をしたナウ。けふ武藏屋に與四郎關取や、額親方や、勘五郎等が
開中のてやひを、二三人連れて來て居たから、大坂や水戸の勝負を聞きながら、一杯呑んでかへらう
と思つたら、蔦屋の平藏が寮で、誰か呼ぶから見たら、品川の村田のお熊と左達サ。宿のけいしやを
大勢ひきつれて來て居た。村田でも其歌が出ちやァ松山だ、全體手取だものを、あれはこつちの生ま
れだから、氣しやうがいい。何かまた例のお熊が、大酒をはじめさうだから、そつと外して、それか
ら三朝が所へよつたら、土橋助次が來てゐる。金升や萬や姿見煎餅が來てゐて、大酒落にしやれて居
た。助次が俺を、深川へひいていかうと云ふ腹で、水を向けたが、おらァこつちへくる氣だものを、
何いくもんだ。一昨日土橋の新尾花へ唐料理を喰ひにいかうといつて、二三人神を連れていつたが、
中にお勝をよばうといふやつがあつて、口をかけた所が、龜屋の出番をおくつて、アサリ河岸までい
つたと云ふから、それぢやァはじまらねヱと、仲町へ引道具にして、梅本とお目にかけて、今雛松や

お留と云ふ、親への鳴物があつて、ちよびと詰込みの囃子幕で、遊ぶつもりであつたが、並び大名の神あらが、渡りぜりふでうたせやァがつた。一體おいらァ吉原で育つたから、深川へゆくと水あたりがするヨ。ネヽ二さつき堀の芳野屋のまへで、佳六にあつたつけ。今時分どこへいくといつたら、代地の甲子にお參りますといつたが、大方お文淨瑠璃だらう。文魚が江戸節は黒ものだナア。それやアさうと、仲町の親父はどうだの、俄の世話で揚げもさけあへ、久しく逢はねえ。墨河は頃日、金川の別莊へおいでねへなといつて、言傳をしてよこしたつけ。じつは昨夜こようと思つたが、茶に呼ばれたおらついこなえだ。今夜も三升が所に、香會があるといつて呼びに來たが、ことわりをいつて、こゝへ來た、又明日は赤坂の熊さんや、仲町連でもつて、眞間へ紅葉を見にいくはずだが、太夫、江戸藝者めらがいくだらう。それだからおめへ、明後日、よかァしまつて居てくれねへ。おめへ義太夫はどうだ、好きなら住太夫でも、此の村尾でも連れてきよう」ト、當時名ある者をならべ立て、心安いやうにはなす。空琴はこいつとんだきいたかぶりと思ひ「それはまア、おしやうすいろいろな人に、お近付があるなんすねえ。それまに嘆くおつきやひなんしなやア、お遊びなんすにも、隙がござんすめえねえ」「イヤモウつきやひがまで困りやす。時々こゝうお前、そう堅く遠くへさいでる事もねえ。もつととんねいな」「へ」わつちもよめてねへけれど、あんまりそねへに、毒の着でやひそしなんすわが、だから、もつてえないつて、まぶしくつて、どうも

よられんせん。」馬「コウ何もさう捻つてくれる事はねえ、〇〇〇〇。コウ酒落ぢやァねえ。」ト、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇 琴「アレサマア、お待ちなんしよ。」馬「なぜ。」琴「なぜといひなんすけれども、そりや人ちがひでござんせう。なにもつきやひで、そんな事をしておくんなんすはござんせん。品川だの深川だの、江戸藝者だのと、引手あまたのお方だものを、女とねなんす事にやァあきてるなんせう。わつちらがやうなかずならぬ女郎でも、とぼしておくんなんす心いきはお有り難うござんすが。ト、ほんにつかねえこつたが、もしえ、池の端の錦丹さんなんぞは、さだめしお近付だらうね。」ト、外の話へ散らす。△うまらぬ馬さだめにこれも通人ならんしながらもらぬといふははおとおもひ、し「随分サ。心安いのサ。」琴「ほんにかえ 神田の與吉さんはえ。」馬これもしらぬははぢと「アイその人か、そねえに必安かァねえが、ずゐぶん知りやつて居やす。」琴「ほんにかえ。伊勢町の米俵さんなぞはえ。」馬「夫れは別して心安イのサ。」琴「かみさんをお入レなんしたさうだねえ。」馬「さうさ〱、持ちやした〱。」琴「どつから來なんしたねえ。」馬「あれかえあれはね。」ト、此の所ぐにや〱にいつておきぐらかしてゐる 琴「小田原町の半藏さんはえ。」馬「これもずゐぶんつきやひやす。至つて心安イのサ。」琴「ほんにかえ。」馬「ふだんつきやひやす。」琴「オヤほんにかえ。ほんざんすかえ。そんなら主の弟の、魚街さんはえ。」馬「あれは又兄弟同然サ。」琴びつくりして「ほんでござんすかえ。」馬「わつちとはあひ口サ。氣があつてゐやす。」琴「ほんでござんすかえ。しんにかえ。」馬「しかも今日來が

けに、兩國で逢ひやした。」ト、きよく〳〵と空嘆もいはず、ずつと立つてゆく 鼻馬 てうづにでもいつたかしらんと思ふ中、番頭とおぼしく來て、 番頭「モシえ

ちよつとお目に懸りんせう。」 馬「だれさんだ。なんでごぜえす。」 番「外のこつてもござんせんがね。

ぬしは魚街さんを知ッて居なんすさうだが、さだめてそれを知りつゝ、おいらんの所へ、御出でなん

したのは、何ぞ譯もござんせうが、御存じの通り、魚街さんはおいらんの所へ、久しく御出でなんす

客人の事だから、おまへさんお氣の毒ながら、今宵はひとりお休みなんしておくんし。それをはじめ

から存じいせば、おいらんも出なんすのおやァござりいせん。」ト、いひすて出て行く 馬 これはしたり口から高野へ參つたかと、後悔すれどせんかた

なく〳〵、今さらまつきいうたはいゝけれ、實はしろ人だといひなほしもならず、「ア、早く夜があければいいと、寐

下へ出て、れんじのそとを見れば、むかうの屋根に、はや一番がらすが來てとまり、馬背でかほをまけれはふらしく、

よこめで 烏「アホウ〳〵〳〵〳〵。」

見て、

是れぞ所謂未至通の徒なるべき乎。

洞房妓談 繁々千話 大尾

馬骨は何れの所の馬の骨なる乎。馬骨は一人の名にして一人の名にあらず。馬骨馬骨を見て馬骨なることをしらず。馬骨馬骨を見て馬骨なる事をしらば、馬骨馬骨の名をのがるべし。しかいふ。

寛政ふたつ戌の春日

京傳自跋

仲街艶談序

暖簾風に翻つて家名人を招くと、残口ら現になれば、賢を賢として色に易へよと、門口の賢仁が忘言をいひ、夜毎日毎に通ひ来る客は、妓女の譯知らずしらず知られぬ中裏の、小指も及ばぬ曖昧を穿鑿し、一切遊びの十二気、三気の翁を合はして、一部の書をなす、其の高樓のはたは、揚抜きの足代よりも高く、聞いた風土の辭と、穴存込山と筆を採るこ作者は當春突出し流麗、譯も白歯の雑術言、前の新客に負けぬ気で、トッチリトンと抱く三味に、気は二上りの騒唄、馴染の客の相の手に出て居る妓女を、一寸こつちへ借駒の、ちよん／＼幕の樂しみも、朝には茶屋の三下りを喰ひ、居候の權八さんとなる事、嗚呼恐れ入相の鐘に夜分と替り、御先眞闇となられん事を慎み給へと、己が革羽織も顧みず、寸聞出番のおくりかへり、予も此の書のふせ玉となり、帳場の脇に居て、客様のはしに是を記し、御連れ申します御客だヨヤと爾云ふこ

時に寛政十一のはつ春

山東住息子書

自序

天地一大戯場とかや、さん橋の華道あれば、見通しの本舞臺あり。大暖簾かけたる鼠木戸あれば、表に櫓あり。式三番の翁蕎麥あれば、八疊敷へ三人のわり込あり。手の有る妓女は直して客を留場あり。是れによつて見物の艶次郎、寶物と共に魂を失なし、世帯の廻りじかけの違ふ時は、親仁勘當の帳元となり、お冷飯をくはす勸善懲惡のあたり。金銀を陳皮のごとく拋げ捨てるやにさがりは、石部金吉罸あたりと是れをいはんや。潘安人がいろ男も、張孟陽が醜男も、淫女の媚なるも、終ち老成の早がはり、是れみな天の作者の正本通り、豈是れを恨みんや。身のための寢言長口述、さやうに、夜番の柝木カチ／＼／＼。

赤松仙が石をうちて羊のとし平代橋の長き日

三多樓主人　戯家　述

序

東の世界を日の本といへば、人皇の御宇に神功皇后、洲崎にて髪を洗はせ給ひ、弓を鬢差にして、絃を小野川元結にしめ、矢は鉾と成り、旗は仕樣の腰帯となし、鎧の錣で鐵漿を出し、武内宿禰に翁蕎麥をうたせ、龍宮の名玉は華火の筒から吹き上げると察し、一の鳥居の高きに旭輝き、二軒茶屋の雛板に庖丁光り、三間堂の通し矢にトキの聲を發す。罾の網に白魚を寄せ、五百羅漢の家根で鴻の鳥が遠見し、六萬坪の裏浪に用錢を吹き、五匁五分の線香で陣取りをなし、八幡太盡と成りて一郭を構へ、羽織、素足に三絃ふのからで貴ふさせ、既に富賀川の深みへはまられんとする、其の阿奈を搜し、仲街艶談と器小冊に綴り、小春の眠りを醒し、終りは紙治が紙屑籠へ入られん事を知らすこへて、から筆を採つて、

紙花を貰ふひつじの春

東風亭　如柳　誌

品目

一、すつぱりかいた狂言のひつかへし幕

一、すつぱりてうす悪口のひやし幕

一、すつぱりきえる口舌の世話幕

發　言

金の鯱より辰巳に當つて一つの女護有り、大磯となづく。爰に來りては、色香に近寄らざるときまじめなる君子も、忽ち鳴子の音に魂を飛ばし、八兵衛となく權七となく、浮れて通ふ安房宮、秦の始皇が奢りもはだしで鬱氣の捨場、所がらとて曲巻安坐も目にたたず、若者の生存在、船頭は諸侯の如く客は陪臣に等しく、八疊敷へ三人の込み、屏風と屏風の背中合はせに、夜もよから太平樂をいふ有り、貧醋とした日蔭あり、おかれて遊び、突き出されて歸る客あり。御客だ〳〵お連れ申しの一聲には、魂先へ階子を上り、聞いた風恐れる濟來を頭ひ、燒印の有る間夫の枕に、御分嫌なる夜著ふとん、送り舟の勇みたるには、西施の美女を伴ひて、五湖に竿さす范蠡が昔もかくやと思ひ、異淵の匂ひは萬客の鼻を貫き、廊下鞋をもつて歸る道しあれば、上草履を火箸へむすび附けて提げて來る船頭有り、宵泊りつけた客の來ぬ間に盗みをうる有り、馴染の茶屋へかくれて外の茶やへ行き、尻のわれる有り。とつちりとんだ新手にはまり、朝には親仁のゆづりし家と藏を棒にふり、野暮にせしめられるも、是れ皆女色の迷ひなり。ア、愼むべきは此の道ならんと、悟りがほにいふものの、捨てがたきは此の迷ひなり。色にそやされ、こんななりにならされたと云ふ人物は、和漢にはてかぞへがたし。且恐

み恐るべきの妖洞なり。

深泉遊子

仲街艶談

戯家山人著

八幡入相ボヲヲン〳〵、折から本町邊の紙屋のむすこ治兵衛来る。噂もとのくどりから、顔ばかり出すと、女「オヤ紙治さん、サアおあがんなせえしナ。」治「いゝかへ。聞いてくんねえ。」女「わたいらが内に、出て居なせえすよ。」治「そんならちよつと逢ひてえもんだ。」女「小春さんをよんであげやせう。マアあがんなせえし。」トいひすて小春に知らせに行く。小春といふは紀の國やのおいらんにて、こゝでの夜おしらなり、かねてふかき中にて、死ね死ならといふ言ひ合せてあれば、女の知らせをとび立つやうに思ひ、ざしきを明けてこゝにきたり、春「きのふ心まちをしてゐたに、なぜ來なはんねえ。市場の富倉へでもいつたのかえ。なんぼおんみつにかくしても、みんなわたいは承知のまくだよ。」治「ナニサマアかレ、そんな元氣ではねえわ。しよ會か。」春「イヽエ、新川の大兵衛さんっこ今夜しまつてゐると、いつてよこしたから來てゐるが、外の客ならしやうもあるが、太郎はとかくおめへの事を、何だのかだのといつてゐるから、どうもこんやは都合がわりイよ。」治「そんならすぐに、今夜はけへらうが、手めへにきふにはなさねえけりやアならねえわけが有るヨ。」春「久しい物さ。又ふところが寂しいといふ事かえ。」治「ヤアそんな物だ、耳を出しな。」何か咄して「ト

いふもんだから、少〻これがなけりやアつまらぬとか何とかいふもんだから、どうござあしたまでに、さんだんな頼みのこんぴらだ。地べちまで、くめんのわりい時はわりいやつさ」婆「おめへはとんだいいきぜんだの。耳を出したに ト小声にて「てき〳〵しにくいかたちだが、どうするものかおめへの事だもの、はなちいて見やせう。はなしてえ事もあるが、太印の目にかゝつちやア、くめんのじやまだから、早く歸つておいらの趣来ねへ。それまでにくめんなしておかうヨ」婆「そんならこゝおさらばだ」

豊「又道とよりなしなはんなヨ」婆「よくこゝでもくらへ、ト、いひすてゝ立ち歸る。小春は今の〳〵事をどうして
すつぱりかくしん手が有りさうなものと、ふらうしてと、此の所いつから無言にて、太兵衛が來たら
出たる狂言にはいしこそめかまへだね、ふところへかほをつつこみ、錢をよまうといふみえにてゐる。此の間より
るべし、ア、おそれ〳〵しむべき事　きいたふうのえん大郎手合も、忽ちこゝろきれて、つまらぬ身かうとな
にあらずや、トよんだまどめだね。

深き川のお客はたえずして、しかもちもとの客にあらず、かつきれかつなじみて、久しく來る事なしといへど、神無月の御さうだんにて手鍋さげ、しみつたれとなる有り。玉の輿にのり、御しんざうとなる有り。しつかい浮世は大からくり、忽ちかはる人の身の上。中むかしの頃なるが、色のみなとのはんじやうに、出ぶね千さう入り船も、戀のおもかぢとりかぢの、さつさおせ〳〵と、きほつて來たる一ッさうのたゝなし小ぶね、深き川の仲町、濱本のさんばしへつけ、「はまもと〳〵」の聲に女立ち出で「太兵衛様お早う有りますゑ。小春さんがいつそおまちかねで有りますヨ　サア御出でなは

いましこ一トふりおやうちんをもち先へたち、チンチ、律の調子にうかれ、濱本のくずりをはじると、
娘ぶんが立ち出で、御定まりのせりふ有りて、是れよりちんちき大さわぎとなり、座敷のしやれには
あごのかけがねもはづし、こくうおてんのおきさまつくりとなる、座しきのおもむきは、あまりさう
ざうしくして、書き取れぬゆゑこゝに略しす。とゞどういふじやうりにか床をさまり、女つゝ茶わん
に茶を二つくみ、ちよいとつまみ持ちきたり、たばこぼんりうへに置き、すてぜりふありて、あとさき
しわかひ、客は兵衛、字の下あたりの米問屋の若いもの、とし三十七八のすいきやうに、せいたかく、いろ白にて、にがみばしつたる人物、鐵おなんどあつくのむきのひとへもの、花いろなゝこの羽織、紺ぎぬのたびをはき、
りうもんのおびへしかもしんぼおりを、たゞしごき、もとに置き、[illegible]、しま龍小倉、年は二十一二位、う
に、しかおおおなもの若く、自のおもたきをさせるに、大あぐらをかきたばこをのんである。
りそれまでにすらりとしたかうぞく、ふちごあいのきて、花いろ[illegible]すの帯を結び[illegible]所に、[illegible]な地たゝ[illegible]に至[illegible]
ほつれを直してあるこ　女「どうしたこしやくでもおこつたりこ」客「イヽエ、あつと苦勞が有るさかさこ」女「そりやく
ゐうも色事の苦勞なら、やつぱり樂しみだらうヨ。」客「ナニ、わたいらは色事と土用ぼしはした事
はござりせん。」女「おきにしろ。ソリヤおれさまがたいふせりふだ。手めへのやうな五六度もせんだ
くしたふるかはぎおりが、そんなせりふはおちがこねえ。なんぼ人前のいゝ事をいつても、紙治とい
ふやらうにやア、てめへもがうせいのほせて、しかけられた側で、いんな損料屋のやりくりといふこ
とを、このおら胸はとうに承知だ。まんだそれに知れつゝしげく通ふも、手前に迷つたからだ。

かういつちやアのろい句だが、人の笑ふもかまはず、雨が降らうが風が吹かうが、やき印の引きりまくらをしねえけりやア、寝たやうにやア思はねえわ。こらほどに思つてるるおれを、じつらしくかきころばし、どうめゑつたかうめゑつたも、みんな紙治がしおくりをするやうなもんだ。何と一言もあるめえが。」春「そねえにあぢに思ひなはることはねえ。わたいがくらうといふは、きのふとつさんが来て、かゝさんが大病だから、くすり代やざふ用が入るが、おれだつて天びんぼう一本で、稼ぐ商賣だから、金なんぞは夢にも見た事はねえ。とかく便りに思ふは手めへばかりだから、どうぞ四五兩くめんをしてくれ　出来ずば年をきりかへねばならねえと云ひなはつたが、おめへがわたいが身のうへを、いろ〳〵に思つてくんなはるお心だから、どうぞおめへの所へいきてえもんだと、年をかぞへて見たら、モウらい年だがね。今年を切りかへられては、是れまでせわにしてくんなはつた、おめへへ義理はかけるし、といつて又おめへには云ひ悋し、いつたところが紙治さんの事ばかり、うたぐつてるなはるから。」太「それで云ひにくいといふのか。ソリヤア門ちがひだらう。そんな事を聞く者は外に有るだらう。」春「わたいもお前さんのするりやうのとほり、紙治さんには迷ひやしたが、親かたさんがこんぢうも、末しじうの事を云ひなはつて、切れろといろ〳〵意見をしてくんなはるし、茶屋の噂も悪し、わたいも考へれば考へる程、つまらねえ事許りゆゑ、治兵衛さんの事は、ふつつり思ひ

切つてしまつたから、必ずわたいがやうな智慧のねえものでも、たんとか何とか思つて、かはいがつてくんなせえし。」太「なるほど手めへは、がうぎにきれいな事をいふが、たゞさう口おだてはどういふ狂言か。さう味くはばかされねえ。そんな事はぐつとおきなそばだ。」春「おめへもうたぐりぶかい事を云ひなはる。今のりくつを承知さへしてくんなはれば、お前のすきになりやせう。うたがひなはるは是れだらう。」トうでのほりものを出し、「治平さんと切れるしようこには、此のほりものを消して見せやせう。」ト、かねてようゐのもぐさをとり出し、すゑけんとすれども、こわきやく一も二もくはぬ、うたがひぶかいをとこゆゑ、太「コレ小春、ほりものを消しなぞは、モウふるいしゆかうだ。そんなやきなほしぢやァ、おらは呑みこまねえヨ。」春「ソシテどうすればいいえ。」太「おれに無心を云ひかけるなら、目のまへで治平をつきだせ。さうしねえけりやァ、いままでばかのむきみにされた、おれ様の此のおつらが、お立ちなさんねえわ。是れがいつち近道、ぬけうらの念ばらしだ。サァどうだ。しんこではねえが、つき出して置いてむしんをいへ。へんたふはナ、何とだ。エ、と、敵役でなければ、今のうき世がいくものか。」小はるはいつぱきならぬ、往生づくめも男の爲とくわんねんし、目のまへで切れんとかくごをきはめて、春「ソリヤァわたいが、ねがひさへしようちしてくんなはれば、ずゐぶんお前の胸のはれるやうに、目のまへですつぱりつき出して見せやせう。」太、すこしうれしくなつて「こいつはおもしろい狂言だわえ。サウさへすればおれが顔も立つといふもんだ。かほさへ立ててくれりやァ、十兩が二十兩でも出すわ。」春、まづしく

ともと思ひ出来た「そんならなにさ。直しにして待つてゐなはい。治平さんを呼びにやり、すつぱりつき出して、おめへのかほをたてやせうが、わたいがやうな手も足もねへものでも、これほどまでにしんになつてゐるから、ふびんと思つてくんなせいし。わたいひとりでこんなに氣をもむに、ちつとはおちつかしてくれても、よささうなもんだ。何でもあしたの朝は、すつぱりかたを附けやせうから、マア寐なはいやし。」ト、[illegible]自分も「是れが有つては邪魔だヨ。」ト、太兵衛が[illegible]たぐり出し、「のぼせてゐなはるから、いつそあしがつめたいヨ。」太「見れば見るほど、迷ひのたねだ。」ト、小佐が顔を見る、[illegible]を見れば切りたての白ちりの下帯しどけなく、[illegible]の色白くきめこまやかなるを見ては、下に女ぎは安いものと、じいうになつてゐる。太「それでは○○○がわりいから、もつと○○○○○なはい。」ト、[illegible]うにかうるかをかけしこととくなり、[illegible]太兵衛がからだはかつをのましめ、いかうのろくはなけれどさん尺をさされてゐる　此の所の妙喜作者しばらくあづかりなり。又そのとなりざしきの屏風のうちは、善六、きん川あたりの酒問屋のはんとう、としは三十四五、ぜうぶりよくとりこいろくろくいつかうな男、見たふしに見せると、どちら女だろなしろものにて、いつかうとりえなし　もあるかたのこいねずみのひとへもの、たかのはのもん所、帶は小くらじま、花いろかたびをはき、住よしばりのきせるにて、一ぷくちよいとのみはたいて、善「是れエ、わりやア、どこのか、へか知らねへが、いいかと思つて、宵から大きなつらをしやアがるが、コレ〳〵苦界の身だと氣をよくすれば、はうづもねへすりこぎめ。誰だと思やアがる。善六様だぞ。ほんのこつたがぎやつと生まれると、するだうの水を呑んだしようこにやア、大いそ一トとほりの夢は見つくしてゐるぞヨ。わいらがやうな奴は、八幡さまへ男けいしやが、ごま經を

あけはしめえし、わり合できらすじるなくらやァがるくせに、きいたふうなしやァがるな。此の善六さまなぞはナ、何屋の料理番はあま口で、どんな物を出し、何やのはから口で、出しものがどうで、あすこの内ではらふそくが何挺入ッて、水油がいく升入ッて、炭がいく俵いつて、白前の子どもは十二匁の内を、茶やへいくらとられて、子どもやへはあごをいくらとられ、床やの損料が、此のでゝるな床でいくらする、あすこの内にやァざしきがいく間あつて、せつちんがどういふかつ手に附いてるまで、御ぞんじな通人だぞよ。」「エ、シエ、マア静かにしておくんなせえやし。わたいが悪かァあやまりやせう。あんまりでござえやすに、な大きなこゑで、なんだ静かにしろもすさまじいわな。ぬかんなこの子わかれか、きんじよの夜ときなしやアしめえし、うぬがたび／＼座敷を明ヶやァがるから、金の真似を一とほりいふのだ。」「エなるほど座敷を明ヶたは、わたいがわるうござえやすが、おめへ、もうあだに思つてくんなはることたァござえせん。このごろとやらしまつたしんこかなんぞのやうに、この内の手めへも、かつかうがわるうござえやすわな。」「エ、かつかうがわるイとは、誰にいふ太平楽だ。かつかうのいいわるイと、きの多い女が、くしのはんなみをするやうな事をいやァがる。てあれの親はなんだ。夜蕎麦うりかふかしたてさつまいもでも賣るやつだらうに、人がいへばいふ事だと思つて、かつかうだのべつかふだのと、すきなねごとはおきにしろ。なんだ呼びだしだの引きだしだの

と、山だしが聞いてあきれるわえ。」ト、所へ、やかましくまきじたでしやべる故、女郎も呆れかへり、だんまりでゐるこの客をのせてきた舟やどや女がきて、おためごかしになだめると、なほ大きなこゑで、八「コレ八や、手めへまでがむかうづらへまはり、なんでおれをへこませるのだ。つりと引手に五せつくの樽じやうゆで、ちや屋のかたを持つのか。是れまでわれにも、それさうおうに目をかけておくぞ。夫れになんだ。おためごかしな。しよにんなやつはおつき合はねえ。舟で歸らにやァ歸られねえ所ぢやァなし。ちつともふじやうのふのじもねえわえ。」ト、おこりちらして太平樂をいふ故、内中がよつてたかつて、だまかして歸してしまふ。とあとはひつそりとして、となりざしきのわらひごゑ、はじめてきこえる。ほどなく夜も更けわたれば、今までらんちきさわぎのざしきも、たゞまちいびきにかはり、せんどうもしやう／＼が出ばんに出たごとく、とつちりよつてたふれ、わからぬねごとをいふころ、帳場のわきのしかみ火ばちにかゝつてゐる、しゆちゆうのやくわんはちん／＼とうなり、おきばんの男は一人つくねんとしてゐる。小春は太兵衛にむしんをひつかけてあるゆゑ、思入れかきのめし、もはやはなしもとぎれ、とやかうする内夜はからりと明け、客はみんなかへつて、子どもどうしのはなしごゑが耳に入つて、春、目をさまし、客「コウ太兵衛さん、おきなはい。モウ五ツだよ。」ト、ゆり起され、夕のつかれにてやう／＼目をさまし、のびをしながら二階を見れば、からりとして男がふく時分、かねて朝なほしにして、治平をつき出させるつもりゆゑ、はおりを呼びにやると、女もおきてきたり、けさはまだなんにもございやせんと、ひたしものとふわ／＼と、しやうがをみそでやいたやつの三つものでのみかける。小はるはかたすみにて文をかき、治平をよびにやり、すつぱりきやう言をかく。娘ぶん「小春さん、湯へいつて來ねえな。」春「アイ、太兵衛さんいつて來やす。おしつけかの人も來やせう。わたいがじつかうそのじやうはりだか、待つてゐてくんなはい。」ト、八文字やの湯へ行く。人れ違つて紙治來り、となりざしきへ入る。尤も小春が外心なきはしようちなれば、あひたいのやりくりにて、きあらぬかほにてはおりを三めえかつたり、なにかしてさわいでゐると、ほどなく小春は湯からかへり、だんまりにて紙治がそばへすわり、何かはじまらぬかたち、治「コウ小春、だんまりのうつむきは、九だん目の小なみのきどりか。よしてくんな。手めへの

やうなかはが、そんなまねをしては、きりおとしでふしようちだ。」春、いつかうあいさつなく「ア、いつそしやくがいてえヨ。」ト立つ。治、ぐつとかんしやくごゑ「是れエ、、なんのこつた。用があるの、しまつてゐるのへちまのと、呼びによこしやァがつて、何だしやくがいてえの、腹がへつたの錢がやすいのと、とんだやつぢやァねえか。」春は愛が狂言の山といふもの散、そら／＼しく「紙治さん、あんまり氣のつよいこわいろをつかひなはんな。いかに錢の出ねえ口だとて、太平はおきにしなせえし。」ト、ばつと強くいふ。重「うつてかはつたけさのあいそづかしは、何でもしさいがなくてはかなはねえ。わりやァおれがやうなしみつたれにくつ附いてゐても、しよせんはじまらねえと云ふかたちだから、切れてしまはうといふ料簡で、今のやうに氣強くいふは、切れるといふなぞか。」春「何だえ。なぞだえ。なぞ／＼なんだかわからねえヨ。わたいがなんぼじやうをつくしても、おめへのはうにじやうがねえといふもんだから、切レやすよ。」重「手めへはなんだかわからねえ本よみをするな。じやうがねえのかぎがねえのと、ひとりものが物忘れをしやァしめえし。コレエ、われと切レたといつて、野がけみちで煙管をおとしたほど、ふじやうはしねえわえ。」春「おめへもふじやうをしねえけりやァ、わたいもふじやうはしねえのさ。何もわたいにそんなにあたんなさる事はねえ。」治、なみだぐみ「かたみこそ今はあだなれだ。たがひにとりかはした此のきしやうを、はだみに附けてゐれば、ふたり一所にゐる心と、離れてゐても、たゞしやくでもおこらねばいいと、手め

へがことは片時も忘れた事はねえわ、人のいけんも聞き入れず、おやおやおふくろの目をしのび、深くなつたが縁のきれめか。親のかんだうゐさふらふのはかない身のうへでも、やつぱり戀しく、ひどい工面の心づかひ、あげくのはてにつき出され、此の治平がかほをつぶし、それでわりやア濟まうと思ふか。」春「アイ〳〵、すまぬ心の中にもしばし、わたいが心は、とうからすんでをりやす。」亜「イヤヤどうでも、われは此のおれを。」となりざしきの、いふこと聞える。「先はきりつめぬしへは立たず、心二つに身は一つ。」「ぐちとたふだは女のだうぐ、なぜに男はつらいやら。」治、こゑのふるへをかくしながら、「コレ小春、とても心のかはつたわれに、なんにもいふ事はねえが、とりかへしたきしやうは、このとほりだ。」ト、ずた〳〵に引きさき小春にぶつつけ「おれがきしやうをかへせ。」ト、こはいかほ。春「わたいも其の通り。」ト、引きさきまるめてしまふ。亜「ア、今日と云ふ今日、人中で面はおかくも、いつてかへらぬ不孝のばち。」ト、にらみたちあがり、なみだながら「小はる、もう逢はねえ。」ト、にはしごばた〳〵、あたりちらしてかへる。春「アノこはいかほを見な。」つぎの間より太兵衛、けいしを持ち出て　太「それでこそ、おれがかほが立ッた。是れからは日本ばれだ。」ト、鼻紙入れより三兩出し、紙にひねり、「サア小春、是れをマアとつておけ。たりねえ所は、吉田やまでいつてよこせ。」春「アイ。」ト、いつたばかりに、懐の紙へちよいと挿み、先づしあこのうさ〳〵とおちつき、「いつ來なはる。」太、少しかんがへて「あすあさつてはかうだから、しあさつて來よう。」春「ほんたうかえ。心待ちをしてゐるやすよ。」ト、いふ所へ、下より舟やど來り、久「ハイおふねがよろしうございます。」

是れより第二ばん目始まり、さやうに。

小はまやのとなり、富岡といふはけ茶やにて、小春はかねて治平に逢ふつもりにて、太兵衛がかゝるときに、兄弟分に頼み、おんみつに文をやつておき、よびこまりをつけてある所へ治平来り、とかづき事あつて跡をとまる、治ねころんで小ごゑにて「昼の狂言は。」春「すつぽりといきやした。」ト、膝の中、顔はむになり、小春すゝ酒付てのむ。治「コウ小春、おれにも一ッぷく呑ませや。」春、すひつけ持つここのまさる「いゝかえ。」治「ムヽ、」ト、春、はたく〳〵たばこ入の中より、兵衛をかいてもらつた金をだし、「治平さん、きりふのはなしのものを、爰へ入れておくよ。」ト、紙治の紙入へ中へかねをいれる。治「ムヽ、どうもそいつがなくつちやア、こゝろがおち附かねえ。」春「そこにたんさア、あしたにもさういつてよこしねえ。」

ト、話してある所へ、小春が兄弟ぶんのおつた、これいつはもうたふのうまさで手水に立ち、廊下を通りながら、つ「おひさでござんす、くすりが来たら、お世話だがの、おつたあつくだせえ。」ト、いなか〳〵来る。暖簾のうちより、春「お蔦さん、ちつとはなしねえな。」つ「オヤ紙治さん、まじだね。」春「お蔦さん、ひるまはおかたじけ。」ト、いふ所へ、女、てうしをもつてきたる。治「一つ呑のまつせえ。」つ「此のごろは、酒はモウいつかうでござります。」春「一つ呑みねえ。たつて引きだわの。」ト、いふ。女「ござえます〳〵。」治、かみ入より一角とり出し、「サアさかな。」ト、だす。女「ハイ是れは。」トいただき、てうしを手にもつておいて、ちよつと下の方でやり、つ「こんやは神だか、いそがしいと出してはねえヨ。これはおありがたうござります。小春さん、よろしう。ハイおやすみなはいまし。」ト、立つてゆく。治「おつたさん、あふつきりとせうぜ。ついでくんねえ。」春「よしねえ。呑みねエ、もしねえぜ。」蔦、てうしを持ち笑つてゐる。治「いゝわな。ついでくんねえ。」蔦、わざとこぼれる程つぐと、小はる呑ませるにてたゝきおとす、

治「とんだきちがひだ。」萬「それ見ねえ。」春「わたいらは、このごろは大ひつてんで、さし物もみんなやつてしまつたしぎだ。ころされてもねえ。」島「そのはずさ、みんな紙治さんといふ色男が、むかうづらだから、はだかになつても樂しみだらうヨ。」治「おつう合はせるの。おめへもじよせえはねわエ。」春「たゥあしたア、きはり用事でもつけて引ッこまう。これぢやア出られねえ。」島「コウおつたさん、ちよつとうしろをむいて見せな。お前のかみは、とんだすいたかつかうだ。」春「だれだえ。」萬「おつよさんだヨ。」島「コウおつたさん、お客があくびを二三十もして待つてるだらう。早く行きねえとはいふもんの、しよじおめへでなけりやァ話せねえ。」萬「治平さんが又世事かえ。久しいもんだよ。小春樣、あした鳥江町へ文を出さうよ。」春「いつしよに状つかひに、持たせてやらうわな。」萬「モシ紙治さん、此の子もおめへゆゑに、いつそふさいでゐるから、ちつと元氣の出るやうに、おちつかせてやんなせえし。」トいひながら、つゝ茶わんにたぐいとあふり出て行く。（治、てうしをとり、「アヽ、なんだかからだのと思ひまはすほど、眞に死にたくなる。息つぎにぐいとあふらう。」春「よしねえ、御前も惡い酒だよ。ソレよりは一家しうでも賴んで、早く内へはひるやうにしなはいナ。さうすりやァわたいもつとあを引いて、一つになる氣だが、ひよつとおめへのかゝさんやとつさんが、ふしようちの時はどうしようと、それがいつそ案じられるよ。」治「たとひ二タ親が不承知でも、こらほどこつた二人が中だもの、死なばい

つしよ。」ト、目になみだ、たがひにしんめりとなり、うつぶき物思ひの折から、座敷も静かにて、おもてのかたにてのべの書置をかたる。「よく〳〵あひほれのじつくら
べ、よひはひぞりてよなかのくぜつ、ないてしのぎのかうがいも、をれてわかれのきぬ〴〵に、ほど
けしかみをむすぶ手の、袖よりおくのいれぼくろ。」治「世間の義理を思ひ廻せば廻す程、中に何かつ
まらぬ事ばかり。」春「若しもせかれたその時は、是れまでせわになつた親方さんの、義理をかいても
迯げやせう。」治「コリヤ、それはたがひの胸のうち、うちあけられぬ邊の人目、マアそんなめえつた
はなしはよして寐よう〳〵。一ッ時のびればひろい世界だ。又花の咲く事もあらうヨ。」春「なぜこん
なに、わたいを迷はせなはつた。」ト、紙治が○○○○○○治「俺がこんなにみれんになつたも、みんな手めへの
此処えふたうゆゑだ。」春「ソノびはえふたうには、たれがしたえ。にくいなう。」ト○○○○○○なるべし。
作者曰「ヤヤおつな心もちになつたヨ。」予もとなりざしきにゐたるが、此の妙言にたましひをうしな
ひ、うつゝになつて筆をすてぬ。

猶後篇續いて著はし、御覧に入れ奉り候。

仲街艶談 巻

跋

神僊とは何ぞや。霞を喰らひ虹を呑み、飛行自在なる事を得、長壽際り無きをいふにあらずや。今戯家の親玉が著述なす所の深泉は、美食を喰らひ酒をのみ、飛行自在は豬牙と駕、されども闇を行く者稀にして、琴高鐘離權の仙術も、黄金術に及ばんや。近ごろ山人辰巳仲街に至り、神をぶら提灯と倶にぶらつかせ、いたこ曲の美聲には、お先　暗筋夢中となり、而して此の妄言を作る。嗚呼百増の豬牙早しといへど、廻し方のハイ御迎へは、是れを遅しとせん。通となく癡夫となく、樂しむも戀、苦しむも戀ならずや。粋ほどけつく指の輪の、はまりやすきは此の道ならんと、予もきいたふうに、是れを後に記す。

寛政十一己未歳正月吉辰

我樂多庵　東　邊　木　述

玉の蝶序

繪雪者不能繪其淸、繪月者不能繪其明、繪花者不能繪其香、繪泉者不能繪其聲、繪人者不能繪其情、然則言語文字、固不足以盡道也、嗚乎斯書、目前卿氣上在其境、筆下偶之、妙哉奇哉。

猪　貞　居　題

題言

振鷺大人謂へる事あり。凡そ遊びを盡して江戸猪を病まずんば、男子の部ならずとは、慙愧を發而後悔を知れとの教へなり。予芭花館の蘇鐵山を名月の額面に照らし、鼓鞍樓の曬衣臺におかるならねど醉ひを醒まし、懐中ともにきゆ棧橋の霜、身上同じく傾く後朝の月、思ひを運び情を盡す。豈臆說の新語と夜を同じうして語るべからず。さればとて無他金を多くつかひ捨てよと云ふにはあらず。一章一句なりとも感ずる者、身に反するの戒めともなれば、戯作者流斯かる本を作る所以の法なりといはんや。時に是れ若葉の春にむかひ〳〵する、松葉熨斗の初文、封じ紙にしるすものは、

魚米菴振鷺亭先生門人

關東米

總目次

第一齣　和歌町迎へに來る話

第二齣　葉橋送り舟中の話

第三齣　表神樂宵泊を附ける話

第四齣　曾蘇次晝仕舞の話

第五齣　古市場朝直しの話

第六齣　新市場初會廻しの話

第七齣　眞地三味線をひく話

第八齣　裏神樂四明きにゆく話

第九齣　守美へあひるを追ひにゆく話

第十齣　船打場露ぢ四ッ切の話

右通計十編　全一紙

一料理代直段附合印　　常の仕舞の外朝直し別につく、ご病わか町舟宿より一つ多く附く、

よびだし
和歌町　八ッ迄へ附　銀七十二匁　一切　十二匁

よびだし
[illegible]橋　朝直し附　銀六十匁　一切　十二匁

よびだし
表神樂　一つ二朱　晝どまり　金三分　宵どまり　金二分

會蘇次　一つ二朱　朝直しとも　同斷

古市場　一つ二朱　朝直しとも　右同斷

新市場　一つ二朱　朝直し別につく　金二分

眞地　金二分　一つ一分

裏神樂　晝夜一分

宇美　晝六百　夜四百

船打場　一つ百文　泊六百

年中月次もん日は租北國に準す、但し山開キ祭を大紋日とす。

玉の蝶

關東米

第一齣

（古市場の朝直しといづれ
新市場の朝歸りといづれ）

暁の鐘ボーン〳〵、鳥がアノ〳〵。古市場のみかけ屋夜あけのてい、下に船頭「やいあけたぜ」おきやがれにはとまりの船頭枕ならべて寢て居る。船頭「ちよつと見通しへいつて見や。筑田沖へへしと繩舟が出た。いいなぎだ。お客を乗せこんで、三枚洲へ大鱚をとりにいきてエなア」船頭二「、おらあけさ、舟をたてに出ねえきやアならねえ、いま〳〵しい。」船頭三「遊んでゐるよりいいだよ。おらが親方なぞは、上乘をしてきても、いつこくをいふもんだからお客がねえ、此の頃おやアすでいひますよ。ヰのみ竹を一ツ本貸しやな。大繩をつけてくんねえ。」船頭四「ハイ〳〵、恐ろしい數だア。ゆうべはまけきつても、道具をふいてしまつたら、ちやうど七つさ。いつそねむいよ。」船頭五「昨日はいつ出だつたがいな」船頭一「けさはおめへ、ゆうべの雨でかゝつおけさ。見なせいし、此の小鱚が五十

五文だあな。」料理番「三十位ならいいが。吸物はむすびざよりにしておかう。なま貝をよしてト。車海老を長蓋のつみあはせにしよう。」肴屋「けさはべたに銚子びらめさ。」料理番「けふ日の野締ぢやァ二階へは使はれねえス。總菜にとつておかう。二百の位か。」肴屋「二百五十のかひ出しさ。」料理番「二十。」肴屋「チヨツまけろ。」かしば、門口にしほをまきながら、「畜生め。」犬「ワン。」女「お舟が出來ましたよ。」ト、階子の上り口の手すりへ手をかけこいふ。此お客はゆうべもこたと見えて、うれしさうなかほで二階を降りてくる。女らうはねむたさうな顔で、あとからおくつておりる。女、札を見わけてはきものをなほしながら、「ハイお近いうちに。」女郎「おさらばえ。」ト、いふより早く二階へかけあがつてゐる。かしば、みよしをとらへゐて、客をのせながら、「おあぶなうござります。」ト、もやひをといて舟を突出す。女、あがり口に立つて見て居る。「せんどん、いつて來なよ。」是れはえんぎに、船頭へとこの内でもかう云ふ。船頭「あばや。日傘でもかさねえか。」ト、みざをを取直しながら「きせる手に持ちひさ立てなほし、これまで聞かんせ無理なこと。」ト、いたこを唄ひながら、ろへ手をかける。舟河中へ出ると、客、あとをふりかへり見て、ほゝかぶりをしながら、「ゆうべは妙だつたよ。」ト、はなしあつてゆく。又向うから二人船頭のちよき一艘いそいでくる。是れは皆もののまだ青い客にて、退世のおきぬ間に、朝まゐりの顔でぬけて出る、是れをあさ参りといふなり。舟かしへつけ、船頭「みかけ屋ア、みかけ屋ア、」ト、よんだ故、かしば、さし出し、迎へに出て、つれてあがり、お客だよ。つれ申しな。」女「オヤ丈介さん、とんだお早いねえ。」ト、はしごをあがりながら、「アノ子は今お客をけひし申しなせいしたよ。おさかなの出來るうち○○○○○○○○○○○、寢てお出でなさいましな。」客「さうしてもよいかな。ちくるるめ。」ちくしやうめがあさつぱらからういてゐる。女郎はおほとしまにて、たわいなく寢てゐるところへ、なじみゆゑすぐにつれてゆき、おこす。女「モシおきぬさん。モシ丈介さんが來なはいましたよ。」女郎「ウ、ウ、ウ、何だな、ねむくつて

ねむくつて、[illegible]いで[illegible]ねしなさい、[illegible]たうので、今夢に見てるたよ。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇」[illegible]目で[illegible]すと眠い目にあたる

ま、[illegible]らいなどか[illegible]ぢやな[illegible]、[illegible]うつとしいねへ。[illegible]上げていかうねへ[illegible]

る[illegible]で[illegible]寺参のお客は、むさい、虫がやと見えて、ひよくごろがまちもがつてるふうかい、

[illegible]と気がみだいにのめくてるわ[illegible]、その[illegible]やうとの、[illegible]上うかむやういつて[illegible]いたものはせ

うしたな。[illegible]来たおつ[illegible]あいしんじつなことか、[illegible]白[illegible]ふしようながら[illegible]

て[illegible]いおやねへから[illegible]はいくらあんまり[illegible]まだはやくおらで四尺おやかい、下帯もたいふの

おや[illegible]。[illegible]とんだいい[illegible]だねへ、その[illegible]のいかはこんなにわかりいよ。[illegible]のとのには、とせ

みんな色か[illegible]へ[illegible]上[illegible]のじろきよしたといふもんで[illegible]いわや[illegible]、[illegible]にいつしはどうし

なはつた[illegible]出[illegible]にも来なさいねへ[illegible]が[illegible]へなんして、[illegible]に[illegible]しれ[illegible]いつかりあ

また[illegible]しが近[illegible]されから、かぶんなすつたらうと思つた。[illegible]かしたいはで[illegible]たへ[illegible]一人ではうおやあ

るとな、それ[illegible]たにみなのをかぶせでしまふわいな。[illegible]その[illegible]はのもとで[illegible]には、よつてこしらへてゐる

れいな[illegible]いいさんだんだねへ。[illegible]の[illegible]は、[illegible]のと[illegible]ついやか[illegible]い[illegible]よおや

いつもの[illegible]ぎのつコート、何もかも[illegible]アンナ、[illegible]べやうぶを入いておくれ。いかにも[illegible]いよ[illegible]

[illegible]、[illegible]の[illegible]、[illegible]の、[illegible]、[illegible]、[illegible]に[illegible]、[illegible]よ[illegible]

ご[illegible]に[illegible]いたゆゑ、となりの音に氣をもめど、よくねて「お呼びなさいましたか」。」客「歸るッ[illegible]ゐて○○○○一枚、客は[illegible]女、下からくる。なこしらへてくれろ」女郎を[illegible]「よしか[illegible]うただよ」客「用があるから」女「お出でなはいましたな「部屋の仕切をとらねばならねへ[illegible]いかう」女郎「いかうも氣がつきえ。だが歸するのか。」[illegible]ト、客の肩へ○○ついてて、客「そんなら火と茶とおがいをもつて來てくれろ。こけが翁齒婆へいつたやうに、手ばかりたゝかしやあがる。」ト、しつたかぶり[illegible]女「すきなことを云ひなさいますよ。」ト、[illegible]こはく。入り代つて出入の按摩、朝 あんま「おれうぢはようがしう。」客「ひとあんまいかう。」あんま「ハイハイ直し[illegible]あんまのむこい[illegible]ト、目を[illegible]女「あんまさん、落しばなしなし[illegible]やうに色氣とおもくいけ[illegible]すいの。」[illegible]むごいことをおつしやる。是れでも女には目も鼻もございません。[illegible]鼻はあり/\」[illegible]をかしいあんまさんだ[illegible]。まァ湯が出來たらう、はひッてこよう[illegible]、ホヽと大いくとまでしてゐなせいにした。[illegible]な氣をもつ[illegible]ここに又隣に入り[illegible]夕べ[illegible]かへ[illegible]、なり[illegible]この台詞を[illegible]客「サァモシ、さしあがりたりそれ[illegible]やす。」ト、[illegible]「よつぴていでんぼふ[illegible]をないびり、今は[illegible]はねとは打出[illegible]やした[illegible]よう でこざりますどうでございます。[illegible]さねまけのやす、おまのやすまつ[illegible]其それも如才なし[illegible]諸事解つたよ。[illegible]「解つたといひなすつ

でも、どうだか」「であるまい、せきこまれ、此の寄やといふ因果な事を聞かつしやおれもやほらしいよ、腹にうみ
つけて貰つたいきな身へ、疵をつけるが悲しいといつて泣いたを、すつぱかけてめつたきさせず、酒ご
しきしまつたよ」　「ほんに何ぼ何でもあう〳〵、茶おやすねへか、よく〳〵を気をつけやんな、言うたもの
やすねへよ、ソレ名を隠して通り、何のわきの下のほうに、刺青とほつてあつたを、一つたりとは言さら
したわさ。おれもすぐにあれにほらした。リンごうだ。」ト、じまんらしく、うでをまくつて見せると、藤蔵
と、かうでいく〳〵しをしておめへばかりさすなつけなせつこと、おの子ではらねへおやぢ、おいも出す
られたのは知慧がねへなあ」「まあいつもはいうとは云ふがり、いはつたから商業とはつて、おはつ
てがら、その切わとへ貰おうと云ふよ」「まあねへ〳〵、消したらすむまいし」「さういつたらよか
ら、入牢させて、お石の腕をまくり出して見ておうと、血をたるそうにいはしまはないなれ、腕に見すはお
おまくへ、ちおあんたいうたらいふおけもんとはおのれうた。ところでどうで一ぜんかつ、てまいて、ござら
つところへ、ちけきはせうがあとけんもつあるんぞいいまし、さきはいつてよくなおさ晴れもしねよこ
「海が見はらしたけりや、嵯峨町のひのはんのとこへ行たつけ」ったんとかおつしやい、と言ね、
まア、おめく〳〵、その場の前に立つて、やうじを使つてゐるは、権八おやぢねへ、へ、と権こう
碑ござんし、いつぞま鏡よく、表かけこをする、[illegible]、朝にかかりて、[illegible]藤

[illegible]んでしやれふうな。」女「もシ權八さん出ますよう。」されば、あさなほしの二階のけしき、あさひらみに[illegible]ねじつくひをはじめ、からざしきはからりと明けはなし、内の大かみさまとお針と、ゆかたの引[illegible]客な[illegible]出た子をだいて[illegible]、廊下をとをば走て歩く。ゆう〳〵の起番[illegible]アレ〳〵あの人がほつたて尻で、跡をさ[illegible]の身は、の若い者[illegible]ひきがへるの出額といふ身でござりやす。」客「こいつはいい、コウひとつ作ぁねえか。」若い者「へ〳〵。」ト[illegible]をおろしてすわると江戸が[illegible]南[illegible]若い者は[illegible]「コウおんぼどん、その子に種まんだうは。」こふいな[illegible]行く[illegible]を[illegible]「[illegible]から額[illegible]」ト、いふ[illegible][illegible]とき〳〵か[illegible]ますから[illegible]きて来る[illegible]シ、權八が呼びにやんなさいやしたか。」[illegible]折[illegible]人の[illegible]權八[illegible]ヤアこれは[illegible]やド、[illegible]ジャ[illegible]」[illegible]達者[illegible]權八さ、お石もおつと下があるといいな。」[illegible]たてものでござりやす。おまへさんがたのやうなお客でなくてはむきませんよ」[illegible]「さうさ、形がちよんとさまつて、もちものやなにかが分らずかねえで、[illegible]氣まへがよし[illegible]世事があつて男もよしか[illegible]が有る[illegible]」[illegible]これではねねば、きさが無理と云ふもんだ。」[illegible]、ことゝは女郎がやすいさうだか、みんな難くいだのに」[illegible]なるほど」[illegible]おらァなぜか、一輪々々に色がへるよ」[illegible]はて[illegible]三味[illegible]をあける[illegible]ひかすともいこつたぜ。」[illegible]これも御祝儀[illegible]を[illegible]、その種まきの[illegible]まきて、なるほどえき

かのすゞのねも、盡させぬみよのことぶきを、うたうてやがて扇を納めけり。」長五「チヤヽヽ」鬢五「ヤ
ヤヽヽ。ト此の女郎はなかなか端たぜ」けやあしねえか。硯を持つていつて、すゞつて来てくれな」
「鬢結さんが来て、待つて居ますからいつてさ。今おいでなはいますぶ」ト いふ声の隙で、長五「お針
さんたちと、それ手をくんでいか。」ト いふ声おして、鬢「さアけいこはおやめおやめ」長五「さ
くなびつにりたさるから、見物が手をたゝきます。」長五「をかしたい」ト いひながら、鬢をおかせて聞つたね。顔を「おとなせん
起きなやアねわからうだの、鱸へ行くなら、此の手紙を内川屋へ届けてくんねえ」長「見せや な
んだ内川屋に誰さま、どんなやつこさんだ」長五「色男さ」しかけをしてもらふつもりさ」長「し
かけも気がつえ、せりあげ、しやち、がんどう、ぶん廻しと云ふ道具立の算段なら、しかけの理は
黒まくにやぶだゝみのやうで、搦繰忍び三重で出るのおやアねえか。あそこは繪看板でおまんまんく
だらう、馬鹿た面な」長「ばかにつらかあれば、あそこや、幕は、本場へ下屋敷をかつて隠居しや
す」長「あてらだの蛇だのと、てめへむきみ賣の娘が、道理で水をしほつて、いくらとあておかつて
賣るぜ」長「やかましい」長「さうごうべのお話の山の趣向は、どうでござります」長「山の
趣向わいわれなぶれはどうだ」長「やくわんでも茶釜でも、モシこゝで出させねえけりや、おめへ
でもござりませぬ」ト しやくる故 長「お石、その手を出して見しや」長五「なんだ馬鹿らしい」わ

へおやア明りんせん」かね「ソレ／＼うま／＼」ト、いふ故、少し見せたがり気をもみ、[illegible]「イヤ、消にはまつ」かね「それはけしたが、こいつア大わらひ、きつい盛だぜ。」お石「なんぼうたつ」けす氣はづらになしおの重箱だらうか。」お石「[illegible]」[illegible]可愛い男の名だもの、めつたに消しちやアならねえのさ。」ナゥおとらどん」甚「[illegible]おもしろい、だの男衆だいと、お前でさへはるものにネイ、おへねえおらしなお客だよ。」註に曰く、買ひちらすものをちらしな客といふ、このごろのはやりことばなり。かみ「此奴は立たねえりくつだ。」客「ほりものさへ消したら、立たねえことはあるめえ。」かみ「これを消せば、とんだはなしだ。」甚六「消すのはきさねえのと、じぶのうと碁消しつぼのたばけんくわならアあるめえし。」甚「どういふりくつだの」ト、[illegible]三味線箱へばちを頬杖について笑つて居る。あぢに 客「出して見せてくりやれ」甚「なにやす」[illegible]見せてくれねえ[illegible]、[illegible]立たねえ。」甚「ハ、もうひとこいよ、わつおやアいやだといふのに」ト、いひながら[illegible]、[illegible]世話をやかしたこるし[illegible]お石さんえ、[illegible]ト、よほど見通しに[illegible]かへるもいゝ」ト、[illegible]まよせえ」[illegible]甚「寝なはるなら、[illegible]の上へおはりなせえし[illegible]合羽[illegible]

なぜ[illegible]しよ[illegible]もあやまりによ[illegible]とんだたゝりもあ[illegible]、あ[illegible]衆らの
介さん、[illegible]かへて、[illegible]噺[illegible]くびにいきは[illegible]「いやふ[illegible]うなぎといふとこ[illegible]
はどうで[illegible]田屋へいつて、[illegible]とし[illegible]れさせう[illegible]大[illegible]だまら
ねえ[illegible]雑兵どもいつたんひきとりとしやせう。」ト、箱を 兩人「お石藏、よろしく申して。」ト、いと[illegible]
二[illegible]「[illegible]お[illegible]ではな[illegible]うな[illegible]「さらば、[illegible]たさうだが、か
る。
[illegible]なら[illegible]二人[illegible]の[illegible]一下[illegible]なはつた
[illegible]、[illegible]北[illegible]たせいし[illegible]じや[illegible]ほう[illegible]
[illegible]それに[illegible]見[illegible]くれ[illegible]とい[illegible]ました、[illegible]
[illegible]わたしがよ[illegible]いつて[illegible]はこざいません[illegible]
なりりへへもかつかうがわるうございます。なんのじやないもなくつて。」ト、たしなまされ 客「いいわ、
[illegible]なら[illegible]一[illegible]、もう[illegible]ここ[illegible]
[illegible]聞[illegible]とわつて[illegible]行水[illegible]した[illegible]
噺[illegible]ふ[illegible]高い[illegible]、だ[illegible]大盡といひ、[illegible]い[illegible]ざうさい[illegible]右の旅人客
は、[illegible]に[illegible]達[illegible]、[illegible]所[illegible]頭も、金を遣ふ[illegible]土[illegible]は早く知り、[illegible]たやう

なれど、どこやらに畑くさい所があるなり。けいしやの買ひ過しなどして、舟宿で勘定の時、帯附の數が違つたなどと、きたなびれるたちなり。さて同じやうなれど、古市場はふせ主にて、なじみの舟宿でなければ、四明から初會をあげず、新市場は初會をはしをとると心得べし。但しふせ呼びだしといふ。

第二節

○表神業の背酒りといへれ
倉橋夫の書仕舞と

客作頃、年は四十餘り、酒ずきよりにでつぷりとして、諸事大ふうなしこなし、三寄古のたきまに、花色すゞの帯らしやのふさたくろをさげ、見通しの柱によりかゝりて、もつたいらしく、あけあぐらの、[illegible]これもあんのもつこうふんどしが、ちらりと出てある。いつもはおりずきのけいしや買ひにて、いきなり三組在組つつよくて、料理番にも折ふしはずむ故、出し物もどんとにぎやかにてなじみ寄りたがり、見通しをはつてりかへしてきわ[illegible]気分、あゝおなんどふとりの羽織を「そこ、[illegible]皮太夫もかけてやりやせうねへ」[illegible]来り[illegible]ざつ[illegible]おつかりて、袖だゝみにしながら、[illegible]

舟にけぬきがござりやした。ヨウ、だきらふそくとしねへ[illegible]いゝ所へ、女房おもて、[illegible]来り中りのから者にて、口が掛ると、女にとほして、病気で引込んでゐるといはせておいて、[illegible]長屋でありまい、殊に寄とへなればこそ出る、と云ふ顔で見通しへ出る。あとから船頭の肩をかりて[illegible]手で[illegible]、[illegible]のふつれ[illegible]しく

るとつて、よくうそをついたの」ト、せなかを一つぶつはきて、世事をつとめにつこりとして、件の[illegible]いつこいすわる。こゝらがなじみはありがたきものにて、火ばちを引よせて、[illegible]

すどりぶたのかまぼこを杉ばしで焼い「アンと口をおあきよ。リア」[illegible]「馬鹿をするな」けむいわ[illegible]ト、火のついてる奴を、灰の中へつつ込む折から[illegible]皮太夫「イヤア、これはお久しぶり。先の御きげんよう。」時にかう

三絃箱をさきへつん出してから來る。

ぶせいだやア、いい女郎かひにはなれえめえ。」ト、もうお 伴頭「あいしなしか。こさア小二朱半ばらひた
ぞ。」長太夫「又悪口ゐ。」絲蔵よつてぶつたふれてをりますゝ」伴頭「大呑ゐとしようぜ。」ト、道々わる口でおはらひをなげる
蒸て、枡をはふりなげる、 長太夫「ふさりましたが、なんにしろ先づいたゞけ、酒でこゐをやりましたゝ」
咄をいとふ故うけはつし、
伴頭義太夫「悪は女子のしやくのたねゝ」やうろり ト、一同じ 長太夫「イヨえらい。大将うまいことゝ」伴頭「いつけんい
きやせう。」長太夫「一番ころきりだよ。」伴頭「チエイサイ。」長太夫「リウか、リウかノヽ。」まレトどうた
どうだ。悪井戸のやほけんさまめか。」女、ちひさ「むけへだよ。どうせうたう。」伴頭、ソ、茶わんでて一直ま
してやりませうか。」伴頭「ウ、。」ト、いつた許り、是れをきかぬふりで羽 絲叢者、皆々三絃をひやうしに叩き はやりうた「麦ついて小麦ついて、
お手に豆が九つ、九つの豆をかぞへ見れば、おやのさいしよがこひしや。」伴頭「いけさうだノヽしい。」
長太夫「たいかふ記ノヽをあるりやせう。」伴頭「それもふるい。」長太夫「此のお客はなにをいつても聞き
あいたと、湯屋の番頭さんだやあねえか。」しをおり、みなノヽ、 一筋「おれがおきをはめるおやえいが、
チヤリイヤ。」伴頭「ヲシをとりな一ばん。おつとふるしくさいか、しらじんくなうたつてくんねえ。」
長太夫「義太のうちは、おれがやらう。ソレよしか。つりどうろうのあかりをてらし、よお長文はゐだ
いよの、おたきのやうすこまノヽと、女の文の跡や先、テテン、たノヽではかどらず。チ、トチチン。」
是れをきゝかけに、船どう立「さつさおせノヽ下の關までよ。おせば新潟のさままある。」チヽノヽチヤ、

すア、[illegible]「[illegible]／＼、[illegible]おびがはづれたよ。」ト、作頭の膝へ[illegible]皆々「ワハヽヽヽ。」「どつと、をどりを[illegible]
[illegible]「[illegible]」[illegible]「シヤ[illegible]／＼／＼、[illegible]」[illegible]「ハイかんなりもおちました」
「ハヽヽ[illegible]」[illegible]「[illegible]つと[illegible]ちら[illegible]」[illegible]かくて皆々箱をしまひ、作頭が小べん所へ行くともを
[illegible]のがい[illegible]所へ[illegible]「[illegible]の左[illegible]さんや小[illegible]」
[illegible]よめたやらぬ[illegible]」ト、[illegible]、後[illegible]
[illegible]不景氣な[illegible]「さういつてもい[illegible]にした所は、[illegible]せいなもんだぜ[illegible]」
[illegible]、[illegible]承知か[illegible]しようのならま[illegible]やら／＼[illegible]」女「[illegible]」ト、[illegible]人むだ
[illegible]「諸事お[illegible]でなくちやあ、[illegible]がきれね[illegible]」[illegible]お[illegible]殿、[illegible]
[illegible]「[illegible]お[illegible]頭に[illegible]遊びがあるか、からだに[illegible]ねへ[illegible]
[illegible]ト、[illegible]行く、跡から追ひかけに行く。▲是れ[illegible]此の[illegible]件、[illegible]した[illegible]の時、[illegible]
[illegible]「お[illegible]つおあんた[illegible]子どもし[illegible]お[illegible]のみでも。」客「なんでも美しい所
がいい。」女「にぎやかでござりますから、いい子どもしは皆きれ[illegible]ました。お氣の毒だねえ[illegible]」[illegible]「は
やく開いて來ねえな[illegible]」[illegible]「[illegible]おりしでも[illegible]うかね[illegible]」[illegible]「[illegible]」ト、となりの[illegible]、[illegible]
に[illegible]いてゐるが、いきなり[illegible]、いふゆゑ、をんなは、このきやくをやすくふんでよせ場へ行く。はじまら
[illegible]からしれ、あとに[illegible]だらぬ[illegible]をいひあふ。

常「藏おさなぜんなぜ一所に飲んでゐおめへさんが惡うございやす。障子の二三枚もふみ折つたすへ
で、おみなにあんなに借をさらし、さわがせたする。あそこの内へ氣の毒でならねへ。そへ前のまけ
んを拾して、亭主にお出でなはおがやに、やけをおこして、こうちへかけ出して來なはつた處が、
土地連れだから、亭主かおやまもにや、こんこうちおやす觸合だけ、よかでしやせん、ねたとい
ふことでございますれ。」主「あいつらは、あれがかけ出した時、はだしでおつかけて出て、とめさう
なもんさ。何よも、何仕事もしておいでも、遠くいつたかい、墓迎へなかける事ねえ、ノ女郎
と利口すんぺ賀もやゃがる事はねえ。」常「そりや、おめへさん、ねつから分らねへ、あすこといふ
もんだすすこのやせん。亭主はふきだして、お仕とをとりやす。お迎へはあたりめへさ。商賣でい
ことをこつちへ來ていつた所が、押えりやせん。當好いかない。」常「そこへ來たから、それをわかるい
よ。先づとつつきのよみ地屋、まつ菓屋、うた島、こけら屋、竹屋、花村、こんたの茶見世まで、一と
直つゝはあんな上つた、大通裏へ來るんには、其はおかう裏を通りぬける、横にしさみ横町へ出るな
米屋にさしかゝれば、大つのおかみるといふ事して知つてるさ。」常「一紙くつひろひか、水ひろひ
を見ながら中をおひたさう、わるい酒だこが、比の客なにか爭ひさうにする所へ、錢持を二三重ねて持つて來り、ちやつとおすいたは
いさんた、おめへぞうと見たやうだよ。」常「ばくれん錯顛だからそのはずさ。こつちら達の方へかか

処が出来て、船頭のほねが折れねへでいいよ。」トすこし話の所へ、女郎、出かゝ「お丸どんこ」女「お出でな
はいましこ」のはけた大年増なり、髪なこすつて通る。尤もしくた玉出のしほをかいで女郎にこ、耳のねからまたこ
女「ハイおつかうきこ」をちよつとはねかへしたばかり、ひとつきしまひて、きつづき 船頭「おいそぎだから、すぐに牀へや
りましやうしねへ。」ト、いふ故、女郎はつんとしてたつ、客、子供も一「アノ上なりの客は、鞋袋をおやらつかし
てさわいだが、どこの作頭だ、ていすうらしい。」鞋袋が見えになりやす、越後屋、白木の作頭は、馬に
つけてあるかへ。」上につちらでございますよ。」ト、先に立つて、煙草盆を持つて牀へつれ、客のはきものと
めしたくらかに、ありをおつまの上「コレおつとめ」女「おたまさん、お出でなはいましよ」る。ト、いふ女郎へ、此の客をと至り
田前をなげいたす、この頃はさるばかりに長を取締りするやうをねまき帯して、余らない紙入をふところより、お下
の頭なにて、この頃はさるばかりにあるしまぐんないの夜着の袖に入れてある、あつた枕を二つ出してならべ、お目にかゝる
たゝの札をよく見ておく。是ればかり一度 作頭「上なりはだれだ。」おもてきさんかこ」女郎「こちつとは
買つた女郎を、はなしの種にする故なり。作頭「いつてもよしか。」ト、これの牀へくる。作頭 作頭「あてて見せよう。隠居さんだら
なしがあるよ。」ト、は夜着を頭へかつぎ
うが。ここへきたふじさん、じぶくりさん、じぶくりの三年さや、八人ッきこ」ト、作頭の鼻の孔へこよりをつつこむ。作頭「ハ
ナッサ、シヤミ。」女「アイモシたばこ。」ト、あいた口へいれてやり、すひつけたばこをきせるで出し 女郎「おたまさん、お前
かな買込へか。」作頭「ナアニ、あいすけへると、すぐにこつちへ初会に出たのさ。」とまりつはうだらう、
はやくけへしていいよ」ト、小ごゑで 女「お玉ぼう、否まねへか。」[illegible]「アイヨ、のむから今夜わつちをたい

ここにかつて、寝かしておくんなせいしよ。」[illegible]男はそれやさうと、この祭(まつり)だなう。
つねもよ」　亭主「おめへなすいい」[illegible]をおそんさ持つて居るから」　亭主「どうだ[illegible]ここ
そ。おめへ共また頭(かしら)は限分さんかい」　亭主「ヶ、聞きね、ての頭分ときに、ぇぇ、とがぶつたさうだわ
なに、亭主けんにのはいきうだなう」　亭主「[illegible]、亀道もあけたが、取りいい客で
目[illegible]を自分ですることを嫌つてくれたおな。[illegible]さやしいよ。そんなに違ひすこしもねえさ
うたが、髪(はっ)[illegible]の内(うち)に胸(むね)もいおあつて、ついしつ話が出(で)たことよ」　亭主「[illegible]足(あし)でお過ぎたなら
だい」そんなおもの、せたと一緒にした[illegible]様となら」　亭主「ぇ、あれやとさへ取上すつ
ほかしておお客だわな、[illegible]しいやみをいつけへつてから、ふりつい来なわねな。さう
されはぇ、と出るつて、勘定ぞであやさつて手紙を出し、お気やしたが、おまかたに来たんだらうよ」
亭主「そりやもつと悪いなうぅ」　亭主そのあだから、このころ[illegible]のお客があるのですぇ、やかまた
やだい、わざつてはあるのさ、手紙をやつたら、返事(へんじ)に承知したといつてよこしたと聞いたそうさ。どうし
こ、なんこのまはすまつ」　亭主「やりまい、それでもおやじは[illegible]、うらやましいよ」　わた
いらばそれは悪いわけ、[illegible]別はよしさ、胸に来るきの話から、わたい
らずおやんなくしておいんつて、「[illegible]」と云ふしんで、[illegible]

ついしくじつたと思ひなせいし、このごろおやァ福清から出な。ソレ上方の新子の子を、拵へし来て
はよぶさうさ。わつおやァしゑしくじつ腹が立つて、思ひだすと泣き出しさうだよ、それからの、イ
こニャもう云ひやすめえ。あとくさらしだ」 作蔵「何叉うぬがやうな狼に。」 女郎「ムウ、お前にい
やァしねえ。だまつてるなせいし。」ト股をつめり「といふものだから、はかなく仕舞ひでもなけりやァ
外聞も悪し、冬牀も中の上にしても、しかへねえけりやァならねえ、いつそ生恥をさらさうより、死に
ていわな。どうせ此の祭にやァひどい法を出さねえけりや、ならねえといふもんだ。」 作頭「白木稲荷
の狐が、しやくがおこつたときさ。」ト、作頭心の内では、かけるなとなかしく思へども、流石不便なれば、からもしにやらうと、おなさけ用をしながら、いゝきのしれいる 傳五「す
すあつかましい、たぬきさんだよ。もシおもてさんがいつそ気をもんでゐなはるから、夜札をはつて
やんなせいし。でさうんといひなせいしく」ト、こそこそいふ 作頭「八まんの橋のやうに、ゑへけのねえもの
は贔屓だこた。」 女郎「すやきついしやれさ。」 傳五「いいしやれてのふりをして」ト、どうとせなかを、つおもふさまくらはしてたちのきながら、
「ァイたんとさましておあんなせいし。おもてさんおやすみ。」ト、出て手前の牀へはひる、客は寂しく待わかれてはらを立て、帯を締めかけて出か
かるゆゑ 傳五「はやいねえ。」ト、口ではいゝど、おくり出す故、客はとめられようとおもひたあてがはづつて、牀の理窟もなく、はやらしくとかゝる。 作蔵「お玉はいたらきも
のだよおなう。」 女郎「アイサ、そのはずさ。アノ子なさア手があると云ふもんだからね。」 作蔵「おれも
まんざらおやァねえ。」 女郎「ヘエイほんにか、よかつたねえ。」 作蔵「どこのかものがひきまゆを、か

んと二の鳥居の鎚木のやうに、八の字なりにしてかんがへてゐるやつさ。いつきびだ」ト、[illegible]石で五十貫目もこ
すつたかゝとをもつて来て、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇[illegible]「[illegible]きつきり[illegible]」[illegible]なんかこつた」
[illegible]少しもあたいを[illegible]、平気にて、
[illegible]「何をさ」[illegible]「馬鹿アいへ。此のふけいきにいやだ」[illegible]「いやだもやアねえよう」[illegible]
[illegible]「おへねえきれいだ」[illegible]「そんならば[illegible]ふけいき[illegible]」ト、[illegible]ふさぎになり[illegible]」
[illegible]しやく
かおもしろ[illegible]、〇〇〇 女郎「なんだかいつそ悲しいよ。」ト、またうつむきになりて、ひたひをふと
[illegible]はなごゑにてなきだし
[illegible]「いつそくたばつてしまへばいい」[illegible]「[illegible]」[illegible]「[illegible]、むかしから今夜おいらと、
[illegible]、おつかなく[illegible]「[illegible]」[illegible]「[illegible]へいへばいいかの」
[illegible]「[illegible]、にくい[illegible]」ト、伴頭の〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。見こはしにて聲色「金がなければ[illegible]いなう」[illegible]
[illegible]
儂「一夜に五十両つかふも、一朱でしまふも遊びなれど、右両人の取扱ひを見るべし。この伴頭
にひふきの[illegible]となしたり、それはんであたまくらはされたのあかね故、やはらかなやうでしん
のつよく、いぢが悪く、女郎の身には取りにくき客なれども、ぼいしやなどは嬉しがり、娘分
や女が心安だてをして、今から[illegible]女房となるからあだたよ、まつてとけしかけます

やせうなどといふ、[illegible]高いことが承知かと思ふと、[illegible]

身の道具のごとく、南一箸ではなく茶屋と子ども屋と出割で[illegible]

安宿もきのどくがつて、はおりの一つもすゝめたがるなり。[illegible]神楽は、[illegible]

實つて見たいもの。[illegible]の音[illegible]のよきことは後篇にゆづる

第三節

[illegible]

身[illegible]の下に、[illegible]

八上[illegible]は、[illegible]のかいたのでなくちや、よかるくないやうだ」[illegible]

かりに、[illegible]と[illegible]があるから、わたしがおきやせん」[illegible]かれけんかへてたと[illegible]

[illegible]、たいそな十六文」[illegible]

[illegible]、一おやかしめへた。[illegible]あた[illegible]

たいさん、ぬしもひこしいものだなう。茶を呑んでいきねえ[illegible]

られ門の[illegible]やうなたなけては[illegible]よ。[illegible]がいそがしいから、ちつと目にしてきかせて、か

れでもでもごうさをしてお[illegible]ればいい」[illegible]でゐへこそ物前だといふに、[illegible]はからかじ

つて居ります。おたふく風で。」[illegible]小遣帳(こづかひちやう)は、つけたこと[illegible]

ト、いふ所へ古市場の[illegible]若者、[illegible]

[illegible]と申しまして、[illegible]

[illegible]よろしく」[illegible]

出す。若い者は[illegible]をとつてかへる。[illegible]道楽(だうらく)ものの内(うち)に、[illegible]銭金(ぜにかね)[illegible]

[illegible]又此の御[illegible]

[illegible]小介(こすけ)さんの[illegible]大(だい)さんに[illegible]

と待ちね。[illegible]

[illegible]

えりをながめながら、何やら物おもひなるそのすがた、[illegible]

[illegible]

[illegible]

いねえ。ふさぎらす。コウお前(めへ)の、端(はした)りだかの、酒(さけ)をちよつとゝつてくんねえ。」ト、帯へ挟んで[illegible]

[illegible]

[illegible]せがむさんで、若い衆を相手に、一つ呑んでござらうかいのうねヱ。」ト、奴かの色男といふは三十二三にて、女[illegible]真實に承知[illegible][illegible]中作切の[illegible]男の[illegible]「[illegible]にはけ物が來やしたらうねヱ。」客「[illegible]のついでかけか。」女房「ソレあんなことをおつしやるなよ。せつかくあひに來なせいしたものを。じやけんだはなア。」女郎、跡をいひさうにして、遠慮していは[illegible]日頃で[illegible]女房は[illegible]人の氣を[illegible]んで、[illegible]ことにいつ[illegible]六郎、[illegible]此のかな物をごらうじやし、心と云ふ字に錠前をおろした所、仕出しださうで、堀の內樣の話にも出つてござりやすが、ぴんと心に錠前おろして、通り者の女房と、三味すん箱の錠前のやうに、しまりがなくてはいけやせん。これからつゞはたちのお客ではなし、お前さんがたの仲間の[illegible]をござらんじもねえが、このごろのやうに氣まゞれなさつちやア、茶屋子ども屋でもあぶながります。內の御用もいきなさるやうでは、第一世間がすみやせん。それだからさんざしの霜で、すべつたことのねえきもつぶしや、[illegible]で小便をすることを知られまや[illegible]へは、わるく評判をいたしやすのさ、[illegible]はひふ「おなかさんちようし悪いこつたが、主人のからだでござへす。めつたな氣を出しなすつちやア[illegible]みやせん。おふたりのながらゐものゝ道行おやアあるめいし、くつつきたがるもあこぎは悪い。細く長くなさりやし。ヲシわたいらがしよたいで金をかけたらのは、大神宮樣のお棚と總嗣子は

つもりだが、忠さんの内の御歯黒壺には、どれだけ金がかゝるぞ、トまだ[illegible]いふでもねえ[illegible]所へ酒が来た「おかんなしや」[illegible]二階へお出でなさいまし」[illegible][illegible]たれてゐたつとは、おばなしもあるもんだから「サア、モシイ。」ト、煙管たばこ入をもつて、色男を[illegible]だんばしごへ引上げる。二かいはて[illegible]二かいへあがる。あとから内の船頭二人、さけさかなを持つて[illegible]只今内のおかみ[illegible]なりました」いさみの船頭「こゝの内の出し物は、どうでござります[illegible]」ト[illegible]「モシ旦那、夕家鴨[illegible][illegible]二百めことか[illegible]申しま[illegible]二つで一本になりますから、[illegible]出来ます。[illegible]といふものは、家鴨より外ごちそうはせん。そこで[illegible]

きせるづゝを持つ風か、氣のつきえ。」ト二「おれに貰つたのよ。やはらかものおさせるづゝのこれは粗末
こし一おだいなきア、なんと厭い帯はきかけき、そのかはの商賣にはあかのうござい。ま。此のお客は肉
盤のよごしもくつて見たかの、枕木だこが出來てる。此のお客はこべりへ手を出して、淺草でしかも
われなぜい、特に、來るめへでおうきさ惚れやすこたれ客につけねへ客衆は、もやつてあるよその癖
や、おかでにしてつたはるに、はき物をぬがなきいやせんさんばしのあがりおりや、みよしへ手を
かけて艫づこが身などか、ぶきにぶる／＼しやす。又のつけたおかたは、猪牙で檜垣を大髷にの
つきるとき、つつかけこぶおち上げたり、寒かつたのするなると、前のうすべりを上つてかけなさる。汐さ
きとそこのとこに、褐をきかしておしやねえやうにしなさるから、大きに有も早うございやす。やれぶ
ねのすだれを、やはにまきあげすと、手輕く屋根へはふりあげなさるのさ。二階持がしへつけて、
るゞひを買ふなどもの穴だらう。」いきこ「旦那、何とかおつしやる。」とし時にお重箱がみけ。」
暗風をないてゐるりませう。」ト二あつち氣どめに、風呂敷はおまくらもとへおかり。」主「コレ、
そこの戸をたつていつてくんなよ。」ときひつしやりとかんだにつしまくたよふ。」トい、大窓を南
悪くして下へおりる。あとはうすぐらくび　客「何しに來た。」　文字「何しにきたえ。金ができたから持つて來
そうぶの中にはいりしましむかい。
たのさ。」客「いいふねえか。うぬが金を。」ト、何か…とかんしを…、枕をとつて…なかの髪をはりつ…して、是でけたふす。女

時に、この[illegible]ゐいて下[illegible]あがつてきたり、「なんだネ、ヲヤお仲さん、どうしたのだエ」長さん、見てお出でなさる
事はござりません」ト長「側もいはずといひ、[illegible]、あとで[illegible]下さ」ト長「そんな髪をしてすつてられ
るものか。ちよつとわたしがむすんでおかう。」ト、ためいきをつきながら、がくや鏡臺を取出し、びんざしを
とり「おそろしいふけだよ」ト長「いつそのほどきなからね」ト長「[illegible]、お前樣がたは困つたらん
だそこい、[illegible]髪で、果れてもいゝが、いけれねえ」ト長「髪にくせがつきやしたよ」ト長「ホンニ、つき
とりでもしてゐなさるだらう」ト、[illegible]「これでもいゝかえ」ト長「はゞかりだねえ」ト、かたに
下げ」ト長「[illegible]しのこしが折れなまつた」ト、[illegible]
すゐよ」ト長「それでも髪がつかねえでこまつた。するきり[illegible]」ト長「あたいは[illegible]見
ゑるだらうねえ」ト長「どうともこれから前樣手しだいさ」ト、[illegible]下[illegible]
取かすつたことを、けふこつちで聞きやしたが、あつちをなんといつて出てきたんだえ」ト長「病氣だと
いつてよ。それから用もあるから、よいしやばかりで繕らうとかへるふゐで、そつと隠れて三軒なか
ら、おつこ見て目をかけたが、あいつらも氣づいて、跡をつけて買つてしまつたさうで、見番へ聞き
にはひつたが、一家内でひつこんで座なせいねえと、どこも同じさうけだから、名代屋どもの子をとられ
て、實家はこのでこ角に繕藏がこ、へよつて、籍をはなして見番へ聞きにいつて貰つたら、これも、病氣

にあげられねえ」といふからの、よもや絲鞋がいふ事に、おれには嘘もつくめえし、若しほんの内へでもいつたかと思つたが、おふくろの病氣もぶさたにしておいたからいき憎し、とんだつまらねえ目にあつて歸つた」「きのふぜひ〳〵こいといふ手紙を出して、よくつりよせやアがつたな」「なに、それで分りやした、それぢやア腹のたちなさるも尤もだ、かういふわけさ。きつと今夜おまへが來なはるはすだからと、睨んで通しておいた理窟さ」「それにやア、トあいつらは水をさしやアがつた。おつきやすゆうべひまで、内に待つて居やしたよ」「ヤ、、それでよめた」「又お鉤のむね氣だらう」「これたの下まはしも、（おか町ではまはし下にはしたあり）ゆだんがならねえぜ」女郎「聞けば聞くほど口惜しくつてなりやせん、絲鞋さんはけいしや衆のこつたから、中にたつてし憎いこともございしよが、なんの茶屋に居ればと、、あそこのみせまはあんまりけんきんな奴らでございすわな」一頃わつちがかゝりあひしてゐる時分は、ヤハイハイをしやアがつてからに」「エいいわ、おれが都合がちつとなほれば、みんなにやつておいて一番あらつて見る」女「エヽノあまあらはここに包んでおるが、いつかふのましものをとつて懐へこれをまはれば四枚ぐらゐ（總花は四枚なり）は出來やす、どうしてからあそこの内へ、もういきたこんなぁ」おれたいま茶屋一軒はひりこまれるぶんのことさ」主「さうした所が、おれが顔が悪くうれ、あると、ふまれたから、晝で手めへは出すめえよ」女郎「こつちへおいでに來やすれた、いかにしてもあそこのやつらが

憎うござりやす。ついぞ世話をやかして、外の茶屋へかけ出しなさつた事もなしさ。是れまで勘定日までには、きつと揃つて、おきなさつたものを、なんの一トもの前やふたもの前おくれたとて、こんなさうよな事になさつちやすみやせんやナかつたが、いゝエそれはこつちの愚痴と云ふものだ。まだ身宿が通ひのいゝ中といふもんで、うけこんでゐればこそ、帳場では不承知な者だこ。ほんにね、身宿衆といふものは、お前こかし離れいふもんでござりますが、こつちの方では、まあつといやな事でござりやせん。けふおまへさんから聞くたぶんにもで、お顔さんに挨拶をやつていきやすから、花雨様だらいたとかなんとか、わつちやよく云つておきなさい。わつちや、是れから歸つて、年季が入れて、なふにも商事にやつりやすから、商賣をするしはしたせいしに、まうさう／＼手前の世話に成りはなつても、おれは本望にはならねえさ。手前へまのいおつかいに氣が、身のふしだらはせといふものだ　ヱ、勇なふの命にかけるつもりで、出世しようなぞといふ氣は毛頭ござりやせん。わつちやア、このまゝらを云つても、さういふ事なら本望だと思つてをりやす。可哀さうだと思ひなさいますなら、もしやの時までかならず、あきれてくんなせえまし。」と、今さらいふでもねえが、男見離でも女見離でも、こんなに罪物に出た世に思ればこそ、思へばはかなくなりはなつたぞ。」女郎「ほんにお前樣の氣もちでは、すこしがないも思ひにちうらうが、なまけたとつて色戀がなのもので、なつかしい男の除にとりせう、いまうく／＼

ふさぎはやめにしやァ」女郎「ネエシ、こつちでかうして逢ふも、氣がかはつていいわな」男「それはさうと、傳馬町の客はよくしておけばいい」女郎「此の相着はこしらへて貰ひやした。お前の下着にもちやうどいいし、おいて行くから着てくんなせいし」男「着て出ざァ、傳馬町のがやかましからう。舟で歸るに風でもひいちやァ悪い。今日でなくてもいいよ」女郎「ナニサ、節句には丁字屋の方をうけやすからいいよ」男の肌にきかへさせる。「然しはまの帯をといて」男「てめへはマア、怪しからずやせたぞ」女郎「ましてまぶちがあつてみだよ」女郎「ホンニおめへさんも、いつそ顔がむくんでゐやす。氣がもめても無理酒はよしてもくんなせいよ」男「かう苦勞なしちやァ、氣でも違ふか死ぬだらうよ。なぜこれはこんなにつまらなくなつた國らん」女郎「今さら氣でもかはんなさると、わたいはほつてもとりこんでねえわやァ」おかねえにおごい、はぎしりをしてぐつと　したをしふめ　拾六ツの鐘　ゴホン　男「汐さきだから降らねばいいが」

傳　世話になりたる客が色客に、ないしよで舟宿へ遊びにくる事、實に帳中の祕なり。和歌町の子どもならば、客を茶屋へつれて行くにも、知らせずして來ては、河岸から先へあがり、見番へ一寸寄つて届ける。その客は茶屋へあがつて、知らぬ顔で口をかけるが祕事なり。兼橋の女郎に舟で通ると、茶屋の女どもが河岸に出てゐて、見られては悪き故、竹輪の汐見橋へ舟を着けてあがり、舟橋まで送つておいて、歸つた狀遣ひなどといひしよに、見番へ顔出しをするなり。尤も

はれての送り迎へ、又は客が内宿へよびにやるにも、芸者、女郎が一人ついて来て、泊りてゐるなら、其の時は舟へ送物をいれる。但し送り迎へは共橋、行灯前に限る。夏は舟へ日傘をいれ、冬はおこそ頭巾、足袋をはくなど、気がかはりて舟中趣あれども、此れは粋道にあらねば、悪橋[illegible]はくはしく意妓口にのべたれば、参考すべし。さてよくよく[illegible]といふは、何ごとく女郎の方から、苦しい金を工面して、すつかり[illegible]に来たを不足にされて、あのたての段まごむかれ、かうがいもおつぺしより、ぶちたゝかれたがよつくよく恋しくなりて[illegible]、客を引くこひかれしは人に語されず、馬鹿をなしてと思へど、我が身に[illegible]の有に[illegible]に共に[illegible]して、[illegible]、[illegible]段を悟るべしと云々。

大抵御覧序

東西東西、是れなる江戸の三景、大抵御覧あられませう。最初が[illegible]ましたるは、三囲亭と名に高き、今をさかりの今戸のおり殿、次なるは中洲の景色、見世物、芝居、あづま風呂、ま[illegible]里、四つ目屋、永楽屋のかけ行燈に灯を點じますれば、夜分の[illegible]とはありまする。次なるは高田馬場に、落葉をうちてらうぎたる、三千丈の新富士山、[illegible]三家の勝地、相違ならざる自筆の實景、首尾ようまゐりますならば、作者は喜悦の思ひのこ、本屋は大いに[illegible]のこ、お[illegible]の人のいへ[illegible]のはしにかゝれかしとこと、[illegible]に[illegible]朋誠堂にて、[illegible]の世話さこして、夜が物あから[illegible]、[illegible]釜の前にて[illegible]も序す。

似山往來

日來遊二京河朔一侍之刻、浮二舟三叉江上一、吸二待乳山頭一、樂湯掛湯疊十尺、織殿高樓蹈二坪一、是彼相考、西郊新富士、今度無二出來一焉、貴下翔二翔書肆際一、識多錦花、拙者爲二貴下一敢變レ之、有二大抵御覽一而、可レ洗二溜書一、仍遂二吹噓一侍、頓首謹言。

月時　　　　　　　　　米 樂 宿 躰

進上　　書林某兵衞殿

返翰しばらくこゝに畧す。

大抵御覽

朱樂館主人

こゝに淺草軒間寺といへる古寺の末社あり、こゝへて諸國行脚をなし、こゝを住居にもとより定めず、此の浦近に一二年もし、數間抱へてはなく〳〵に、下つふきの畫を轄にいたる、時分もよしと其西太郎、昔しこゝにみすもの〳〵、鐘の音も歸へまでくれば、一杯のみたる間輪にまかせ、堅いふくれけ神石目に、髪の毛結をあふいと、唯きかれし新直、直赤に成て一苗と延、それこそと筏をつき押えて、河原のうへをこえ出つる、新の目に名をばかり、こゝで何子が一寸と氷を出して逸話し、此の軍人は呼びかけて、名所をも尋ぬれば、こゝは牛島中の御前、あれこそ白鬚こなたの森、常々をひとに隅田川と、時刻うつてはやれたしせ、もしその中にぶらついては、早苗も歸れる身にのみ、ゑつ〳〵とそれをだにせば、ついけと來りて向ふへ上り、また河をいくふる逸なくて木にうかへるあの鳥の、名をば何ぞと尋ぬれば、翁のまうに御宗一個であり、とうつらやつて、かの畫で繪にと、言ひ捨てにして酒を呑せよ、これさゝ〳〵と呼び取り、よし無と手直見、風つまつていたる酒壺の

小石、これなどのおかつくぐ〳〵と見れば、是れこそ足を縛石、青石にただ白き筋、くるりと廻る一筋は、摂墨な石おや此の石を、硯にしたらばよからうと、捻り廻せば側より、最前一緒に乗合ひ、山伏わよつとさつ首さし出し、乾覚醒眼かんだへれば、博望見てこれこそは、河童これは故ある石、御岑へ下さることりと、頭陀より出す十二銅、首ひねつてぞ居たりける。しばらくあつてかの[illegible]、僕下なうつて、これは不思議、こゝなる近所に織殿の、正しく有ると聞きて候ぞ。行かんとつくり見まはせば、河東美人天帝女、機のおもしに置きたる石なり。機織女に賜はりしと、天より是れを落し給ふに、見當違つし此の河原に、落ちたる物と見えたり。と、當りも有る文見通しの法師、殿乞ひして別れゆく。博望あとにて思ふやう、長の旅行に持ち歩行くも、さりとは厄介捨てならず、直谷つめのはむきもよし、これを織殿へ届けんと、まつたこゝもとと尋ねつゝ、待乳の山へ至りければ、夕こゝくれば、あやはとり、きりはたり〳〵と音する家を、立寄つてうかゞへ見れば、門たかく高樓かけはしはたれ座敷、玄関構への真正面、三橋亭といふ額を、高くかけしは故あるさま。おそ〳〵覗いて案内をこへば、「御上りなさい」と内からいふ。すつと座へ通りければ、「これ〳〵」と案内して、跡から出るは浴衣に前垂、菓子など出してにこ〳〵と、お茶など出す素手の白きは、翁心にも少し心をうごかせば、御吸物でも御膳でも、何でもかでもふりどつて、十九ばかりのぼつとりもの、あた

りを見れば天人の、あとしんだれやら麗はしき、娘と一所に、三絃箱、あそこに置後こゝにありやす、空に花ふり音樂きこえ、一段な座鋪を見物すれば、げに物干でも有りさうな所に、庭とは思ひもよらず、左へゆけば大きな洞穴、千尋の底に人聲あり、聲をしるべに下りゆけば、漸くあかるき所へいづる。こゝは御勝手に取込、お縫の道行見るやうなと、獨言して見おろせば、池の邊にたて廻せし、座敷の數々端軒の客、江戸の豪華を感心して、表の方へ立ち出づれば、最初這入りし玄關にあらず。五百機たてし三條の口に織物、七夕のいとなみとはいひけれど、いづれもしれぬ風情あり。あふいで上にあやはとり、くさは手の下も手際な手つき、げに手もたゆくぞ見えにける。博望こゝぞと懐より、最前の石とうでゝ、これ天帝の御娘、七夕の支機石とて、機をおさへる石なるぞや。我諸國を廻りし時、幸にりて吹き流され、天の川原へいたりしが、天帝此の由を聞しめされ、いそぎ〳〵と給はりしが、り、此の御殿の軒までも、参りし申し上げ、御感の餘り、此の石を賜り、急ぎ故郷へ持ち歸り、三橋亭へ届けよ。』と、石より重き仰せを蒙り、則ちこれを届くるなり。石の形は人間に等しく、めぐりし筋は帯に似たり。筋ある帯地を織り出し、三筋縞と名づけなば、日あらずして百萬を積まん、努々うたがふな」と、辯舌甚しく言ふに、此の家のあづかりなるべしと見えける男羅り出て、ねんごろに一禮なし、いろ〳〵款待しいたはり、「今夜一宿あるべし。」と、ひたすらいへ

ど博堂は、やむなく辞退に及びければ、これより向にうちの世にて、中洲のわたりへ送りける。これより段々二人の熟み、倩妻鳳岸の有様まで、詳しく配慮なしければ、次に幕田の富士の趣き、一見なしける南洋の由来、口記にとめたる一説を、則ち左にしるすになむ。

千早ぶる神代のことにやありけん、朝紅道々夜寝、常世橋の上より、鶉のささの葉に憩ひ給へば、浅草川の川下、あたご江の川上に一つの洲あり。則ちこれを中洲といふ。この洲おほは〳〵のごとし。薬丸なる瓢箪にて、これを掻き廻し給へば、忽ちにはく〳〵凝りて新地となる。枝に咲さうなる地面かなとて、四神波東のたまひければ、々道寮日く、両の世張に命じて、種々の遊所を仕込ませて、たかさ三尺の一つた畔に、四季折々にだらんこと宣はしより、四季家の生実魚あり。離り、すみやのこなたを頼もしく招く。きみ〳〵たる来市は両洲にあゆめり。ふきみ〳〵せめ客衆は此処にこむ。唐和の中子衆は四、足の数に入らず。魚蔵の案内はことにおろして出る。素はしく旅人を慰源で送る。これらが図二つの墨坂にしれず、これらは芝富川辺屋、森家の庭前にうがりけは、瀧崎道行さして賣のれたり。下々中の出屋だいく〳〵宴富、盆富貴やいる富横屋に、夢に見てつゞく嫡子か、柱波やかん濁いとおかしく、常絃やよく舞ひつゞくく来る。上り星ここはよみ六角嘆、三人なり衣裳を着、は

生類を見さいなと、松が門のとつさくさ、いく萬年屋家々の、榮えはほてしもなら茶見世、さだめて神慮に叶ふべし、されば夏も早く過ぎ、此の[illegible]またの[illegible]はだかみし、白髪たる老翁あり。汀に居てさゞ波がんと、釣をたれてぞ居たりける。

尊御た靖、この翁をつく〴〵と見給ふに、白髪亂れておごの如し。唯口許のなか〳〵と、年さて居るとは知られける。尊、翁も膝元へよらせたまひ「翁の年はいくつぞ」と、問はせ給へば翁返り、「これは、此の翁、膝の朝世に、年もいくつか忘れて候。しかし蒼海變じて桑田となり、中州變じて浜辺となる事、凡そ十四五度までは覚えたり」と申しければ、尊又も背中をたゝき、いつの神代の生まれぞことはせ給へば、翁がいふ「天照七代地祇五代、是れ皆翁が出生後なり。翁聞より夏と守すれば、此の江の邊に數萬年、住居をなして候」と、日をかく〳〵いひければ、威權夏に川遊の事、こつるで讃の求まずと、八百萬の神々も、年々變ですゞしめんと、神樂の數をぞ作り給ふ。

聲祝うた。

皆ばうた、社氣をのゝ鑑で、ふいと社氣を付けてさせてやる〳〵、そさせてにならしやんせよゝ夏に夜に唯翁をつけて、うい〳〵來るたら姉でつきや、睦なとのや、[illegible]とりてにたらしやんせよ。

秋は月見に約束しても、人にまたせしまじ〳〵と、うそをつくこヨサ、イつきてにならしやんせよ。冬はゆきの夜さござさむかふと、いくど火鉢を氣をつけて、出しかける。ヨサ、イ出してにならしやんせよ。

とうたひかなでしより、年々ふえし乙女子は、

千代吉　歌吉　若吉　おあひ　おてる　佐野吉　おかの　鶴次　しけ吉　學吉

吉次　政吉　伊勢吉　美濃吉　おぎん　菊次　かね吉　大吉　宮吉　おます

おたみ　富吉　おゆき　小吉　此吉　梅吉　初吉なり。　藤本堂　十寸見堂

これ天乙女の世話やくなり。ますみを號して辰公といふ。されど神慮に叶ひしは、ほつとり娘のお幸なり。これなん常磐津文字繪といふ。神樂を奏す乙女子の親玉といひ、常磐津のゆかりによつて、玉松亭といふ。舟かく〳〵と呼びかけるは、

玉松亭　布袋屋　八幡屋　海老屋　銚子屋　三升屋　相模屋　藤本屋　丁子屋

それより五月二十八日、川邊に出茶屋建て並べて、此の川面を見おろせば、吉野兵庫に川一高尾、東に川瀬ぎ竝べて、淨瑠璃、長うた、こわいろ、をどり、人形つかひ、猿廻し、數萬の提灯綺羅星の如し。玉屋、鍵屋の玉火、流星天をも衝きぬく風情なり。でんがく、しぎやき、蒲燒酒、西瓜の立ち

うり、瓜、夏桃、あなたこなたへ漕ぎちがふ。さてまた陸には砂場そば、にしき稲荷に大佛餅、いくよ餅、蛇目鮓、ゆで枝大豆に唐もろこし、錐のたてどもなかりけり。うしろに見ゆる大のぼりは、大坂下り早崎京之助、蜜柑といへる人間の鳥かわからぬ上竿奴あり。こなたは鶴一身ぶりこわいろ、小供狂言、硝子細工、其の外種々の見物に、諸人の足をぞとゞめける。汀の出茶やは九十三軒、

伏見屋　小松屋　山吹　夷屋　備後屋　二葉　太田屋　若松屋　丁子屋　いせ屋
奥州屋　桐屋　松よし　大和屋　若葉屋　上總屋　長崎　藤よし　扇屋　成瀬屋
林屋　伊豆屋　相模屋　さゞ波　松坂屋　鶴川屋　明石や　笹屋　湊屋　三河屋
桔梗屋　大村屋　蔦屋　菊本屋　千年屋　大和屋　福富屋　宮城野　市川や　駿河屋
丸屋　小島屋　高麗屋　紀伊國や　丁子屋　武藏や　幾田屋　若菜や　相模屋　龜甲屋
さゞ波　扇屋　鶴屋　松よし　大和屋　若菜や　若松屋　いせや　増見屋　八ツ藤
越前屋　奥州屋　桐屋　森川屋　上總屋　今村屋　山本屋　平野屋　相模や　をじまや
若竹屋　金井屋　龜屋　中村屋　いせや　加し浦や　いね田屋　ことぶき　八橋
伊豆屋　松村　梅松　松枝　小川屋　岡田屋　藤屋

毎日毎夜此の所で暑さをさくる、諸人の往來は盡きぬ此の繁花。さて又こゝに鹽湯あり、名つけ

てあつき湯治といふ。これは此の頃此の所で陰神陽神、庭たゝきといふ鳥に、ひよんなることを習ひ給ひ、陰神大きくあつくなり、無性にのぼせ給ひければ、御のぼせを引下げんと、藥湯を以て御洗足つかひ給ひしことよりして、終に此の湯ぞ始まりける。そも〳〵此の藥湯のはじまりは、先祖は樂調經といふ唐人醫者、此の湯をやたらに浴びければ、百四十九歳をたもつたり。今又長崎梅見まで、段段家に傳來して、これを朝晩あびければ、ことしで九十八歳なり。これを世上へ廣めんと、たうとうこゝに風呂をしつらふ。保養湯は三氣、つぼ風呂といひ、又清淨湯ともいふ。藥方は、

　ふんじゆの枝　にれの枝　くはの枝　もゝの枝　やなぎの枝

また痛所持病には、吾妻風呂にて浴するなり。一名黄帝のうり家風呂ともいふは、上り湯なし。その藥方は、

　藿香　大黄　芍藥　縮沙　川芎　甘草　當歸　輕粉　莪朮　藁陸　升麻　茯苓　木香　良姜

　滑石　沈香　防風　檳榔子　丁子　紅花　肉桂　人參小

それより按摩導引八ッ子の瀧、これ則ち上り湯なり。又みたらしの瀧といふあり。これは神風や御裳濯川の流れを汲みて、筧を以て是れを落す。これにて湯あがりの口を漱ぐ。又香ひをきかせてのぼせを下げ、又若き女四五人居て、浴する人のとりあつかひをして、此の湯の講釋くはしくするなり。

尤も俗へ通ずるため、しかた噺にさせるがよし。いはれをきけば有り難しと、諸人此の湯を信ずるもの多し。よし又不慮に穢るゝとも、跡にて此の清淨湯にて清めるとは、さて氣のついたることどもなり。此の湯いく風呂はひらうが、晝の四ッからくるゝまで、勝手次第のことなれば、その引附の案内の茶屋、それ吸物よ肴よと、座敷へはこびつ下げつすれば、つい取落す吸物わん、三ッ椀菓子わんわん〳〵と、いふのはこれやえのころ島、ひたものさはる手にあし原、枝もさはらば落附きの、吸物好きな樂しみも、秋津すき〴〵蓼くふ蟲、蟲養ひの御保養には、こゝにまさつた事ぞなき　けにや昔もかかるためし、唐の帝の温泉宮、ちつとはそれにも似た物烏、烏のぎやうずゐする樣に、ちよつと入つてはききめが見えず、湯めぐりならぬ水のほとり　めぐりめぐれる群客は、又とたぐひは夏の遊び、偏に此の地にとゞめける。

東武城西高田のうま場の側に、長四郎といへる隱士あり。みづから郭橐駝に比して、種レ樹ことを以て業とす。少時より富士淺間を信じ奉りて、年ごとに夏秋兩度づゝ詣で侍りしが、既にして大先達と稱す。春秋つもりてこゝに七十、古來稀なる信者なり。年來此の山に攀づること五十五度、山の中腹を廻るを中道といふ。なべての先達中道をするもの稀なり。長四郎中道をおる こと三十餘度、時にふれて山の上に、おどろ〳〵しうあれて、あらゆる行者ふるへをのゝくの刻も、大先達長四郎侍る

と、たからかに名乗れば、忽ち山おだやかに晴れわたりて、一點の雲なし。まことに淺間大ぼさつのこれや妙慮にかなへるなるべし。今や志千里にありといへども、心のほつする所のりをこえず。ただ鉢植を抱いて伏櫪をうたふ。さすれば杖をひくとも莽蒼に過ぎず。ことし安永八己亥のとし、近きわたりに戸塚村稲荷山の別當寶泉寺の境内に、淺間大菩薩を勸請せんと思ひたち、諸人の髮毛を爰に埋みて、二月二日より富士行者何がしらをはじめて、かたはらの山をきりたひらげ、その土を以て新規に山のかたちをきづく。それより老若男女を論ぜず、うぶごはふところにいたるまで、われも／＼と土をはこぶ。力すぐれし壯士は、十人前も一人ではこび、或は一もつこう或は二もつこう、又やごとなき御前も、紙につゝみてそれ／＼に、多少を論ぜず土持して、だん／＼つもる一簣の功、終に九仞の山となれり。山は八葉洞のごとし。駿河の富士に直寫し、山をなづけて新芙蓉といふ。それより大江戸四里四方、我おとらじと寄進するは、石の鳥居に黒木の鳥居、石壇、垢離場、手洗鉢、其の外何くれそれ／＼に、皆人たのみをかけ、念佛聲のたえまはあらざりけり。鍵、中腹、絶頂の社壇の經營、日ならずして既に成就なしければ、扨こそ五月二十八日、何がし院法印くれがし院の阿闍利、あまたの權者打ちよりて、山の開眼を終れば、新たにたてたる神樂堂、天津乙女もいそがしく、日のまひ足のふみ所も、しらのふかげにくれ残る、あかいはかまの柳ごし、神樂の太鼓度拍子は、いつもど

んどとなるがよし。諸人の信心菩薩の妙處、長四郎が本意とはつき給ふ。ありがたしなどもいふばかりなし。此山を領する御神には、中腹に小御嶽石尊大權現、麓に淺間大菩薩なり。そもそも淺間大ぼさつと申し奉るは、大山祇命の箱入御娘、よい子の木華開耶姫、こゝに跡たれたまふこと、また人皇れる所なり。まことや孝靈天王五年、近江國琵琶の湖、つい一夜子をはらみしより、駿河國の富士山、ひよつくりひよつと誕生せしも、今度の富士の出來事も、思ひまうけぬことなりかし。扨頂上は乾の峯、かゞやく日像ふしをがみ、未勒が嶽の烏帽子岩、南無當來導師、ぜし／＼巖をふみたらし、いさむ心の駒がたけ、聖徳太子を安置せり。こなたの峯には毘盧舍那佛、旭の大黒薬師が嶽、心の塵を打拂ふ、不淨が嶽の不動尊、さいの河原の地藏尊、六道のつじに返る魂な、險しき峯を踏みわけたる、役の行者の跡を尋ね、わけゆく山の其のかたちも、妙法蓮華經が嶽、その儘うつして富士詣で、貴賤男女の差別なく、行きかふ袖はみな月の、もみにふり袖つゞら笠、九折より險し山、汗をかく袖廣袖の、ひろい世界と申せども、こゝにや足のとまるまで、こなたにつらなる山のうへ、毘沙門堂の側に、牀几並べし大和茶は、幾代ふる木の松のもと、枝は茂れど麥藁の、邪魔にはならぬ日よけなり。見わたせばむかうに目白、早稻田村、ながるゝ水は猪のかしら、末せきかねし關口の、瀧のしら絲音たえず。爰に實の子を汲みたての、ひやつこく吹く涼風に、ばつたり暑さを忘るゝなり。

拔十五日より十八日まで、日夜をわかず羣集なし、みな人念ずるねぎごとの、偏に丹誠こり場よい、落ちて流るゝ水茶やは、守宮が娘でもふりかけたやら、衆人愛敬これぞ柳のかげならねど、しばしと人のたち止るは、口で岩が根日でしら歯、此の場のしぎ燒やきたてを、持つてくる間に手をとれば、にくいおさん五田樂ぢやと、それから段々團子のくし、櫛の銀むねあかさんと、げに鄙人の洒落さへも、所替ればしなのそばゝ、としも二八と知られける。池の汀のかけ行燈、蜘手にならべし腰かけは、心の駒下駄ふみならす、茶汲女の立姿、みれば三河の八橋なり。鄰は大ていひえの山、二十チ許りの中年增、鹽尻つきのしをらしく、名さへおふじといふなるべし。こんなおふじが唐土にもあろかと、はる／＼来ぬる毛唐人は、徐福にあらぬ茶一ぷく。これなん不老富士の藥。茶がまの下にて燒きこめしは、誠や狂言かくや姫、父の翁にのませしより、かの郭橐陀に比したる翁、千萬年の齡を保ち、かの蓬萊を背負つてゐる、龜の甲より年の功、おいずしなずの藥をば、居ながら持藥に呑む料簡、是れをたゞとりの翁といふ。

此の册子は、借金の山がすまひの老翁の畠水練、水邊の見た事もないよしなしごと。譃言は八百八百萬の、神代の遊びのことより、くちにまかせしあて仕まひ、ゆめ／＼ほんにしたまふことな

かれ。

四國の去多彦しるす

大抵御覧終

大抵御覧

新宿○學問序

紀南子の學問を著はして、雛妓に見せざるに、雛妓是れを引つたくりて、突然にして逃げて了ふ。書肆またうしろから捻を付いて奪ふ。薪氏これを側より彫刻して、序をかけと手を束ねてせがむ。其の醉耳遣に晝のことし、さア書きましよと起き直りて、筆をぞ採りはとつたれども、どう焦當に堪へずして、げく／＼睡れば、つめつたり叩いたりして、やたらとせむる。なんの如才が御座らうと、ちよくらしつかり半分ほど序す。

例野外惣子書

新宿◯學問

秩都紀南子著

發端

つら／＼此の里の來由を尋ぬるに、野邊は果てなき武藏あぶみ、露ふみわけて絶間なく、甲斐路に通ふ旅人の、道の小休み晝休み、さしも怪しの草のまろ家、やう／＼三四軒ありしによつて、四ッ家の里とは名づけしとぞ。或時里人ぶら／＼と川へせんたくに行きけるが、あまりのあついて日が暮れたれど、ふしぎやな水底より、光を放てる一物有り。こはなにゝよつて能く見れば、是れこそ夜光の玉なるれば、さてこそ玉をころばし／＼、くらき闇路を苦もなく歸り、朝夕玉をなでさすれば、ふしぎや此の玉自然にうごき、一人の美女と化し、往來の旅人をとゞむ。人々これを聞き傳へ、みな此の美女を戀ひしたふ。されば世上にかうやうの女をさして玉といへり。所は武藏の多摩郡、川は則ち玉川といふ。むかし天人此の所に、分別もなく天くだりて、この川水の清きにめで、とある汀に玉子をうめり。これ玉川にて光りし玉なり。人間是れを拾ひし後、玉子の光一向見えず。さらに行くへも知れざ

れば、なうかなしやその玉子、行くへいふこと知れざれば、飛行の道も何かせんと、月宮殿の白衣をとりだし、人をたのんでぶちこみし、薪へとりきと賣りはらひ、やけをおこして此の世界へ、七寶充滿の寶をふらす。是れむだ遣ひの濫觴なり。七月八月と月かさなり、しきりに天を戀しう思ひ、天の羽衣となり出さんと、胸算用をして見れば、借りたる金は一由旬、その利はまた半由旬、月宮殿のかの白衣に、もはや出すべき工面もなく、たゞばうぜんと呆れしが、今は仕様もあらざれば、おさんや羽衣ながれにけり。もはや此の上是非もなく、里人を賴みつゝ、われとわが身を賣代なし、十萬年の年季をいれて、姿はかはる河竹や、此の羽衣のながれしより、流れの身とは名づけけり。彼の天人より買ひもとめし簫ひちりきをとり出して、里人是れを吹きければ、其の音をしたひておきたの天人、吹く度每にあまくだれば、段々是れをとめ置きて、軒をならべし旅籠屋へ、手ん／＼わかちてかゝへける。さてこそ宿は異香くんじ、雲集をなしてまいたう／＼、おれもゆかうわれもゆかうと下界の大通人ぞうまで、みな／＼天女の手管にかゝる、名づけて有頂天道といふ。

出立

里をかアよまひ引、無有「ヲヽ雷尾ぢやァねへか。」雷「コレハ無有先生に露時雨子。」無「ハテ珍らしい對面ぢやよなう。」雷「その對面がきついことゝ。」無「さもさうず／＼。シテ、何所へ。」雷「何所と定

まるあて所もなしさ。」無「黒仕立に菰屋かぶり、闇の夜の目印にやアええが、どうも人がわるいぞ。」馬「見かけはわるくつても、人はすとんだこともいよ。茶屋に下りとつちやアけちりんほどもなしか。下らうといつても茶は下がすか。しらきちやうめん、何ときれいなこつちやアねえか。」無「おきやアがれ。」無「シテ、ぬしたちやアどういふぶらつきだ。」壽「けふ花の會で、無有さんに御目にかゝりましたが幸ひ、どちぞへといふ謀叛で御ざりやす。」無「そりやアとんだこつた。サアハ一所に。」無「木端の里に馬はあれども。」無「指を思へばかもはだし。」無「イヨおちく類む。サア是れから大灘だ。」無「これ息子、おれが行く方を通らつせえ。」無「南無さん。」無「そりやアこんな物もいはれねえ。」無「ソレ又駕よヤッサ、コレハサ。」無「エ、ぞんざいな野郎だぞ。」無「くそわらおでかけやアがるから。」無「はねがいつたがかゝりやした。」無「イヤたゞおつとだぞ。」（二階より二人のねえ、ばかりにて）「わたしがやうなおたふくに、ほれたおまへの氣が知れぬ。」無「八や、めんべはよふくぬけたなア。」無「馬鹿なつらおやアねえか。まめいりのねえ念佛鼠を見るやうな、いつまで留してゐられるもんだ。めんびやア追分の市がとけへいつての、それから仟田屋のぼいたア、思ひいれいぢめてやつたよ。きかつせえ、ねりまえ大根を見るやうな雨の腕に、まいわねえ暇名を、十七八ぼつてゐやアがるから、俺がからみぬいてやつたら、せつながつて、みんなもう死んで、今生きて居るなア、御ぞんぜねえとぬかしたかな。そこでおれが、此のごろほり

たてのあらほとけを、三人見出して、むてえにいびつたら、俺が名をもほらうとぬかした。」松「恐ろ
しい恐ろしい。」八「そこで俺が、とんだ思付きをして來たよ。」松「そりやアおもしれえ。どうじぶく
つたのだ。」八「聞かつせえ。夜著とぢ針を十四五本引つくゝつて、むしやり／＼とつゝいたら、きい
きいぬかしたわナ。八といふ字をふんまたがつたやうにほつて、墨をいれようといやアがるから、俺
ア死人からと、一所に扱はれちやアてえきだから、光明丹をいれて、逆修にしよう。」といつたよ。」
松「ええ／＼。」八「そこでごてれつめが、ぬかしやアがるにやア、「わつちが腕だとつて、らんたふ場ち
やア御ざんせねえ。」と、泣きつ面をしてほつきやアがるから、どしやう骨をのし掛つて三ツどやして
灰ふきから大蛇の出るやうな、一ぱいをならべぬいて來たよ。それでもあいつが背中も、がうせいか
たい背中だ。今にこぶしがいたくつてならねえ。」松「はて馬鹿な。」ト、いふ跡よりそろり／＼と、武左衛門「新左衛門
殿、以ての外の廣街で御座る。」新五左衛門「イヤ累年降霜の節はか樣で御座る。殊更貴所には御老足と
申し、旁以て少しづゝおひろひなさい。」武左「モノ公には、是れまでいづくへおこしなさるゝな。」
新五左「イヤ玉城と申す倡家で、明石と申すめしもりを。ハ、、、、。」武左「イカニも／＼。兼々彼が芳
名聞き及びました。就中かのうかれ女、大酒をいたし氣儘氣隨、諺に申ス一國とやら一城とやら、
いたすげにござる。」新五左「イヤ左程不遜にも御座らぬ。兎にかく金銀を塵芥のごとくまきちらすれば、

すんどようなびきます。武左殿はいづかたへお越しなさるゝ。」武左「拙者儀な、紀の國やにて、何の染之助とか申す妓をもとめました。一座に上諸白のじやするのと、あだ名の御座る傾城が出ました。」露「とんだへんちきだねエ。」露「ナニ、ニヤ、あんな石こつは煮ころばしにしたやうなやつらか、よくされるもの よ。第一爲になるか、又勤めよしか、口てうれんは云ひ次第か。することさへして仕廻へば、九ツ前にもう歸るわさ。とんだ女郎は嬉しがるのに。」露「なりといひ詞といひ、あれをよくする女郎は、イヤモウ一ト口もくへねえぞ。あんなのがふられざア、今度の世にやアのろまに生まれるがかすりだ。コレ息子、ぬしもまだ身なりが野夫だよ。先づその大たぶさをぶつとすくなく、あぶらべつたりもざつと付けて、本田くづしにいはつせえ。まづかう心得たがええ、月代さつと髭ていねえ、梳き念入レのさつとめひといふ所だ。」露「何でも總體いきにして、一ト言いふもむだ矢なし。穴いいのすごい所お見せつけさつせえ。」露「しかしまだ〳〵、よつほど修行しねえけりやアいかぬよ。是れからおれがそろ〳〵と仕立てよう。をしい事だ色男の埋木、花をさかせて大通の、仲間入りをさせていゝと、身は似た山の高つはり、火のみやぐらを跡に見なし、大道かゞやく茶屋の行燈、風に薫るはとめ奇楠にあらで、風鈴蕎麥のけぶりほかり〳〵。

茶　屋

「おかみさんどうで御ざります。」「とんといいかなかふ小言ばかり。是れはく、御揃ひなすつて。」「どつち風が吹きやしたか。」「こいつはきつい物で御ざりやす。」「ときにあなたも御機嫌よう。」「コウレおみや御茶など。」「こな女部も善二とお噂を申しやした。」「そりやァ有りがてい。しかしおくなる噂おやァあんめえ。」「とんだまはり氣でおざんすねえ。」「時におみはう。ちつとみねへうちとんだ美しく成つたの。」「おかみさんが御出でなんしたら、お目にかけようと云つて、ひくの菓で此の頃、よい日みがいて御ざりやす。」「おいて下さいよ。」「おみはう。ちつとこちへ來や。」「アイ、おかへさんがた、なぜ久しく御出でなんせんえ。」「イヤソレデモ、まだ眞の事は知らぬ。おれと○○ねえから。それともおみはうでもこ。」「眞にかえ。」「イヤ女郎がひもとんときまぬか。」「いやでおざんすよ。」「いやであらうよ。そりやァ眞の事を知らねえからだ。」「見せるがな。」「ト雷尾斗、あんまりつかくものをいはつしやんな。おみがよこつぼうでわらつてるぜえ。」「おかへさん、今時の娘にやァ、そんな野夫は御ざりやせん。もの此の頃とんだ深い色をとこがさ。」「なんのこつた、おんなじやうに。」「ハテナ、油斷のならぬこつたの。」此の所へ亭主「是れはいらつしやいました。」「ホ、ウ御亭主。御歸りか。」「婆娑以來だの。」「ホンニ左様で御ざりやす。」

さていおみかぎり成されやう」一寸[illegible]しいこと、柄杓と云ひて[illegible]一寸入[illegible]かた北[illegible]か

品川、しかし霜がれには、遠方は御無用で御ざります。まして露時雨さんなどは、お宿で大ていお家

じ成されやう」[illegible]の品川へ、其の様にさゝぬよ」[illegible]とか[illegible]

さつ[illegible]上りませ。もしお[illegible]な[illegible]上りまし」[illegible]これは御馳走[illegible]時に御亭主殿、ぶり

たに[illegible]たゞませう[illegible]「[illegible]これは有りがたう」扨これは恐れながら[illegible]お掛

「お時[illegible]」[illegible]が[illegible]随分[illegible]御酒で御ざりまする」[illegible]「そこで[illegible]當代の[illegible]二

[illegible]其れは[illegible]これでは又一杯[illegible]扨[illegible]南干

に旨いもの。此の様な御酒は、[illegible]一寸[illegible]いへば蟲が[illegible]ござんこう

[illegible]有りがたう御ざりまして、時に[illegible]ござりました事が御ざりまする[illegible]

ト[illegible]「[illegible]と安々はお話し申されました[illegible]三澤には、此の頃は申さぬ」[illegible]いふ事の

醉では[illegible]の所へいまた[illegible]なくては[illegible]ちがひのは[illegible]申すもの[illegible]

「御馳走でござりまする」[illegible]八百うんばなうたの[illegible]乙月[illegible]

今夜はこの顔でいつてゐる」[illegible]さつき[illegible]申しました、[illegible]

[illegible]いつものいるか[illegible]いつて引[illegible]来[illegible]

におなりなせんせう。」五「なにサ、そこらアぬからねえ。例の辯口で敲き廻す。又内藏さんにも用が有るし、マアいつて來やせう。」と出てゆく。無「ハテええきみだ。」雷「そしてこよひは。」女「玉城さ。」雷「インニヤあいつは御めんだ。」女「さうおつしやらずに、いらつしやいまし。外へ御出でなせんしたが知れると。」吉「ソリヤア難波さんの角が、十五六本ちはえやす。」雷「イヤもうあきた。」女「おめへさんも情なしだぞ。さやうなら桝坂か、吉本を聞いてござえ。」吉「畏まりました。」行りに、しばらく　吉「桝坂はおさし、吉本に春風さん、織井樣、さはら木さんはどうでござりやせう。」雷「よからう。」吉「さやうならば、直に御出で成されまし。」と立ち出づる。女「サアいらつしやいませ。」無「行くべし〳〵。」と三人打つれ出づる。女「左樣ならば御きげんよう。」

二　階

吉「アイ次兵衛どん。」若者次兵衛「アイ二階へ。」三人打つれて登るはしごの衣紋坂、右か左か、一「イヤまつこれへ。」と、ずつと通す。無「何、ぜん公、爰はだが部屋だ。」吉「春風樣の御座敷でございます。」一「何かいきなこつたい。シテ牀にかけたる一軸は。」雷「周齋が赤壁の景だ。」吉「活花は梅に寒菊、感心な事だ。その外和漢の茶器品々、湖月に古今萬葉集。」雷「いづれ風雅の佳人と見えた。」雷「ナニサ、こいつもおへない茶人だらう。」此の所へ子供茶持ち來る。無「ソリヤコソ、くすぶつた茶わんが出た。」吉「また無有樣の悪

口が始まつた。」ほどなく杯臺その外いろ〳〵、三人の膳かた出る。例の通りさかづきすむ。「コレ雪姫でも彈正でも、茶を一ツもつてこい。」「ヲヤ怪しからねえ。」「ヲヤもし、御召しかへなされませ。」三人の女郎行く。「無有さん御覽じたか、きつい栗鳥だネ。」「いづれもいかいことよ。」「しかし露時雨子のは美事なことだ。ときにぜん公、なんぞもつとくへるものを欲しい。是れこんなものは皆無喰へねえの。」「かしこまりやした。」ほどなく皆々いできた。「なにさん擇りなから。」と杯をさす。「おけんせう。」「まつ〳〵。」吞かつちりといはれて、杯をさはぬへさす。「これはどうだ。きついもんだ。初會とはいひながら、人によることだ。ぐつと崩して吞む氣は内藤宿か内藤宿が。」「イヤ、エ、たべんせん。」「ナニ在郷の身のうへで。」「ナイたべる時はたべます。」「よしよし、おきらひなすつたの。さう嫌はれちやァたまらねえ。」と、無上なやみと吞む。小聲に「きはらかさん。ゆうべも又さんが來なんすとつて、玉川屋まで來なんしたが、赤坂へいきなんしたとさ。」「あんまり又さんも、つまりんせんよう。」「ナニヨはなすのだ。ちつと聞きてえな。」「何聞きなんすこつちやァ御ぜんしねえ。」「色をとこのはなしか。」「イヤアそんなものでおざんす。」「コイツハやけるわい。」「もしさみしいが、だれぞ呼びやせうか。」「下に文五郎としげ太夫がをります。」「ソレハよい、みんな呼んでこい。」ほどなくげいしやどや〳〵。「これは〳〵。無有樣に雷尾樣、イヤ露時雨樣まづは御安泰の御ようだい、恐悦至極にぞんじたてまアつります。」文五「まアつります〳〵と何を釣

るのだ。」宝七「鯛をサ。」しげ太夫「えびすぢやァあんめえし。」雪「みんな久しぶりだ。」熊「早速ながら。」しげ「たへませう。」その内たぬき殿やらつしやい。」文「こいつはいいぞ。」熊蔵「一目先生弾きたまへ。」雪「どつちの目でえ。」熊「どつちのこつちのと、一ツ外アねへぢやねへか。」文「コイツハまた目だ。その序にひかへせえ。」「うれしやさらば舞はんとて。」しげ「モシ北國ハナ。」馬「聞いてくりやれ。この中も本所の仙草がとこで、難波町の五柳に逢つた所が、今から藏前の山魚が所へ、河東ぶしの稽古にいくと云ふから、おれもちつと蘭州が會の事で用も有るし、又家櫻をとつてこようとおもつて、それから行つたがさいごの助、サアはなさばこそ。三日三夜ぶちながしの、大手こずりさ。しかし遊びは名にしおふよしはらのことだよ。」しげ「そりやァとんだ事で御ざります。そのうちには金龍山の織殿などといふ洒落が御ざりましたらう。」馬「オヽ、一昨日だつけか。柳橋で駒と濱成が、二人づれで通つたから、「何所へ志して行くのだ。」と聞いたりや、「織殿へゆく。」といふから、「俺も一所にゆかう。」と、みなと屋から猪牙に乗りの、汐先にぐつと會所まで、かう一がいにいつたが、何か織殿でいけぬ藝者な、二三人よんで呑んだが。」しげ「いけぬ藝者とは、似たことも有るものね。」馬「これは御めん、あやまつた。イヤモウしんにさえなんだよ。白駒は酒をやめるし、濱成は茶許りいつてのますが、どうも面白くなかつたが、いい所へこゝの舞曲が來て居たよ。何か俵屋の春日野に、帶をねだられたとやら

いつて、巨城が女房と來てるたから、呼びかけたりやァ「これはいゝ所で逢つた。扨々お久しい、結城中で矢口の後日をしたとき、逢つた儘だ。」とつて、それから大吞さ。」「ム、そりやァちやうどいい所で御ざりました。矢口の作は、平木辨内どのとやらの作だと申しますが、とんだ智恵者さうで御ざりますね。」「あいつは遠國へ、智恵の賣出しに歩行くわな。此中もおらんだの、えれきてるとやらいふ物をこしらへて、おれが前から火をとつた。一度體から火をとつておくと、のぼせがぐつと下つて、どんな女郎にも、あつく成る氣遣ひがねえ。」「ほんに辨内で思ひ出した。稻野や林右衛門は、このごろになるかの。」「エ、たしか伊勢へゆかうとやら、いふことで御ざりましたっけ。」「あたけもおらやァあんあうし、もうえどかけんにすればたしか今月なかば時分に、藤やへ行く約束をしたが、」と、何から何までしやべりつらね、ほんと旅せし城跡は、時鐘はづれの空だめなり。露「そつちでばかりはなさずと、こつちでもちつと話しやせう。」「いやもうそんな噺はながして、少長の身が見てえ。」「中々おたがひに二十年も見ねえ、いやらしい。年寄のくせに。」「年寄だ。それでも夕部かはいいと云つて、抱き付いたおやぢぢやねえか。」「まア、蟲のいいこと。」「それもう色目さ。」「すかねえやう。」そとつけ「こうしまう。」「ほんにまア、夜どほりのまねをしねえもんでおすへんすよ。」としつたかやう。」此の時、出る。「すまねえ、御膳はいかが。」「御膳を上りましよ。」「お二人樣ながらなつと。」いや、酒を吞んでは

とんと一粒もいかぬ事。」熊「そんなら是れで飲まつせえ。」
といふノヽとりふふ「文公、氣はねえか。」文「ようござりませう。」とくふ。新「よう何かをくひなんすぞ。」文「知
れた事さ。先づ當時くはぬものは、四ッ足で駕舁と火燵やぐら。」熊「なりくだもので、首つくゝり。」
しげ「魚類で、木魚と土左衛門。」文「マアざつとあんな物さ。」雷「まだ〳〵もちるゐでくへねえのは、
疝氣もちとはひとりもち。」文「アイその外、何でも下さります。」新「ナニばからしい。」文「さて此の
口序に、此の所へ出ますが、それ坂東に名も高き、市川流のつらねごと、彈いて下さえ。東西々々。
夫れ史記の本紀に曰く、舜の側に象耕す。象は是れ獸にあらず。」熊「コイツハ堅えぞ。」雷「堅えは
ねえが、やつぱり狸だ。」文「ハイ邪魔が入つた。折角使ひかけた物を。」しげ「淋病にならうぞ。」文「さ
アまアよう引こ」熊「どうした〳〵。時にもう何時であらう。」新「もう引ケすぎでおざんす。」しげ「い
これも退散は。」一同「よう御ざりませう。」雷「しばらく〳〵。」露「マアみんな一杯づゝ。」一同「イエもう
よう御ざりませう。わたくしもうおいとま。これからまた總州へまゐります。」熊「それは御苦勞。」
熊「明朝は何時にお迎へに。」熊「例刻々々。」一同「さやうなら、御きげんよう。」春「モシ誰様もお休み
なんし。」熊「ソリヤそろ〳〵追出すわ。」雷「ソネエニ寐たがらねえ物だ。夜はまだ長いよ。シテ身
が女房共はどけへいつた。」雷「ナニカ女郎衆が居つかねえ。」熊「居りつけねえからさ。」新「よう口を

ききねんすぞ。」雲「その筈さ。山下に三年。」雲「八幡山に四年。」新「さう見えやす。」春「サァむだをやめにして、お休みなんし。」新兵「サァお出でなんし。」と、二人をむりに引立てゆく。春「サァお休みなんし。」雲「まだ早からう。」春「なに早くはおざんせん。」と立て切る障子、引き廻す屏風のうちへぞ。

○　○

翠帳紅閨に枕ならべし千とせの夢、となりの八こゑも寐耳に水、水さす人も朝には水飴となり、夕にはやみ雲となる。はしごとはあすもながしにすや／＼と、たゞ一睡のまよう槿花、又たまられた物ではなし。雲「もし／＼ちつと起きなんし。○○○○○、○○○○○○○。」雲「○○○○○○○○○○○○○。」春「○○○○○○○○○○○○。サァ烟草を呑みなんし。」雲「たゞ眠だ。」春「○○○○。」雲「○○○○○○○○○○○○○○○○○。」春「そんならいつ来なんすえ。」雲「二三日中に。」春「いいえ、日をきめて御出でなんし。」雲「そんならあさつて。」春「待つてるいすよ。」雲「承知々々。」春「そして獨りおいでなんし。」雲「なぜ。」春「なぜでもさ。ほんにさつきも云ひした通り、初會からとんだやつだと、おさげすみなんせうが、夜ごとにかはる川竹の」雲小ごゑにて「つらい勤めのそのなかに。」雲「ぬしのやうな客人には、勤めのやうにも思やしいせぬ。ホンニ末ながく、お通ひなんしておくんなんし。どうした縁か知りいせんが、ぬしにちよつとお目にかゝりいしてより。」とうつむく。雲「ナァ、忝

たら茶に淡雪だの一字何のことでおざんす。人にはゞかり氣をもませ、シテ來なんすことはいやかへ。ゑ、嘘ではねえ。」「夜さりから來なんすか。」「是これがこねえでゐられうかい。」「夜の中から嬉しいね、そんなに茶ばかりいひなんすな。しかし勤めはうき身なれば、定めてはかないやつだらうと、思ひなんすも無理ぢやァおざんせんが、うたがひなんすことによりいます。勤めの身にあらうことか、腹かしい事をしいしたが、ぬしがさういふお心なら、あれまでことをわけはしいせぬ。今更つもりなんすほどお恥かしい。」「ヲヤ〳〵わかつて來た。ソシテ何が恥かしいことだ。よく積つても見なんし、初會からあられもないことを申しいして、親にさへかくすことを、みんないはしてそのうへで、なんぼわたしがいやだとて、そりやあんまりでござんせう。いやならいやと假名でいひなんし。いやともおうとも云ひ切りなんし。聞いてわたしも料簡しいす。」「マアよく〳〵らにもせよ茶にもせよ、俺が迷ひの心からは、まんざら嘘ともおもはれず。ヱ、かたじけない。」「ヲヽ、うれしい。」〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、ネヽ二命もなし鳥の、つがひはなれぬ思ひ羽は、繻子と緞子の妹背山、中を流るゝ一ト重帶、枕がものを言ふたらば、さうといはまし岩ばしの、夜の契りはかはらじと、常磐の松の村時雨、跡よりはるゝ冬の夜は、明けがたちかく成りぬらん。

きぬ〴〵

閑暇に聞やふところ、働なしとは一寸ぶんのうへ、獨りぶつ〳〵やけを起し、聲はり上げて、樓より
樓ふといへど、どうしたと云ふ人もなく、いねたとすれど相手なければ、雲雀とあくびのかはるがは
る、とつちを聞いてもこうへの聲ばかり。折ふし廊下に足音あれど、わが座敷にならず、となりの睦言
聞くまい事と、寝つかれにならず、うかがいやみを見るやうに、ふたりのうへに寝た
り越すにより、すわりいても、あいとも、いやす、いかゞ身をして大通と、襟にかまへの我慢高慢、つくと見
それとなから、隣では睡もふうたの寝たい、あたりのさはりもなりけく、ましこ葡萄尾や、あれまつく
つらいて見すと、ふうさつ〳〵と」と思へば遠處、おらが傾城とは、今がたやう〳〵來てあの通りさ
男いつもて、禿もちゅうせん、よう寝かけこんでござり。」と、新造いつもといふやうが、寝
床の内へまくって、案内では人の座敷へ這込むもしこ、まつ初頭のとに、とんとねつ翻だれば
いふといへば、雪の邪魔おむやうな見つきで、廊下中さいやゝなる、そのくせ淨ならしして、ひ
えるめしやうがある、それに振子の花をでも遺言にして、其ころう晴れやかな。めし雙は何を
あやかされて、もう禿たと思へば、今夜はとんだ面白い遊びをしやした。」それはよう云ったん
かわしいの騒ぎこそ叶いして、よしたらにまかまし申しえやせん」はてな、人の難なら三年もって
いまいしい歩のき、おて、とめかしけには、早うおぼこんす。ママうつとおやすみなんし。二度お志は

ありがたい。お志を無にするぢやアねえが、此の間にゆるりとあるつて、やすみやせう。」「ほんにみんながよくするもんだ。」「なにの事でおざんす。マアおいでなんし。」「よしてくれえ。みたうもねえ。手めへがつらア見るとぐつとむねくそだ。」「あんまり一図だね。」「勿論の事、これからアいひてえ事を、のたくり出すのだ。まあこゝらへ來て、儘されるやうなとんちきぢやアねえ。こゝらでいふは、馬の耳を澁團扇であふぐやうなもんだが、後學のために、もつたア聞いておくがええ。」「無有や、いふはむだだわな。ぜんてえ通なものと、物をいふすべを知らねえから、おつかながつてよつつかねえのだ。」「そのくせ高えつらアするけれど、しやつ面へ三間階子をかけても、はじまるめえ。」「しかしこゝらでこそ、たくさんさうにいへ、本所の方へでもくら替をすると、たいてえ嬉しがる事ぢやアねえ。」「なぜえ。」「水場ぢやア、手めへらがつらアのき場にしておくとな、助け舟がなくても、まづあんどだわ。」「ほんに、此の内へ來て、いろ／＼なばけ物を見るぞ。」「コリヤアふくろふにけえどりをさせて、此の女郎共と一所に、兩國へみせものに出したらはやらうぞ。」「イヤとてもこゝらで、小言をいふも餘りおやけどだ。氣はづかしい。さらば息子を起して歸りませう。」「此の所、小休る」「何ぜん公か。おそかつた／＼。露時雨子支度は。」「もうようごぜえやす。」「そんなら必ず待つてるいすよ。」「アイ此の間に。」「誰様もお近い中に。」「ハイ正月の上

さばかりの有る時に、ふとこんじやもして、父おせみに成りやせう。』と、ふられた背中に喰いせば、ふゐとゞゐかす階子をぼたく、ぎりくざりぐいらくくく。』月落ち烏啼きいたので、天龍寺の鐘の聲す。

有宿の學問 終

序

二上りのいたこに曰く、手鍋さげうと口にはいへど、實は葉のにも玉の輿こそ、兄子供なり言ふこたえて、其の手鍋提ぐる人か、亦二世の契りを結ぶ心意氣を、すべて皆おいたる作意の趣を、河東川の瀬の見通す、抑山家に、團磨の古石に三年、忍ぶ玉に、君子に中島町の小路に入る、嗚呼、河東の冷理番の四日、其清新の如き詞を、知る者、此の末に其の如くなりと、序に一言記す事爾り

閑　東　来　志

自序

色好まざらんはといへる、日本の放蕩家、傾國とそゝのかす、漢土の狂費家。貴妃が淫婦、無鹽女が醜女、薄情愚意心實も、悉皆皮一枚の戯れならずや。蓋し義理一遍の通情は、結句心のもめる種。割つて見せたき女郎の腸、呑込み姿の江戸ッ子の根生骨を、醉道の眞水に晒して、一寸南鐐一篇の書を著はし、金の鯱看板打つたる、諸君子の覽に呈す。元來戯謔の書と雖も、聊か悟道の捷徑ならん。ハテ足下人間一生盧生が夢、樂しみ僅か二十年。ナツレおちかい内と云爾。

于時戊午春初仕舞翌日於三河樓見通

式亭三馬採筆

凡例述意

○先に當名の諸先生、東坡南品北郭、西都の遊里、小說を著述し、滑稽妙文普く海内に賣ふ。其の穴を穿つ所高くは高樓の梟、癡客無実に至り、低くは麹町の井戸を淺しとして、混底那落園の主の天窓に屆く。こゝに於て短才の小子等、書せんとする筆頭に文およばず。依つて今諸君子の英言を顧みず、名家の糟粕を嘗りて、予が分に應じたる新市場の世界を著はす。丈くだくだしく替合せざるは、覧者の増穂言を希ふ而已。

○此の書の趣、女郎一人に三客の意味を穿ち、嘘と實の迷語を示す。然りと雖も、東曲通の覧に呈することにはあらず。

○郭通の目より見ば外國夷狄の如くなれば、言語もおかしき[illegible]にかはつて、にはかなまねしと耳立てば其の誹りを改めず。

○御年来、私等の頼ひ、その儘に出して、片言の誤りを正さず、唯有姿になして三太郎權七に與ふる而已。

睡蝶哩樓主人 戯著

已上

[illegible]

發語

戀別の後朝、ハイお迎ひに別れの鐘、間夫と女郎に惡まるゝ、鳥が啼く吾妻なる、辰巳の里に舟はされど、君をおもへば歩行よりぞ、行くも歸りも心から、俤の目先にちらつく、ぶら提灯の火と共に、おぼき眞闇行當りばつたりと、お座鋪子供衆の斷りに、一身のねぐらに迷ふも、おのがさま〴〵氣風にや有りなん。爰に一場の娼家あり。所謂斤橋赤町裾櫓、おの〳〵列國を分つが中にも、古石新石の繁昌、此の里惣別客品有り。平代橋と共に長々し夜を、一ト切遊びのいと短きに、遊子純通、サッサ押せ〳〵の猪牙舟に乘じて、闇雲たる有頂天へ昇り詰め、終には違ひれまの眞中を取り外し、トッチリとんと身を落せば、食客の權八さんとなる事、是れ則ち水道の粹は、身を喰ふ喩への如く、夕べに千金の角座敷、朝に◆男山の重ね著するも、通と不通の譯合ならず。兎角世界に竹田近江が積り細工のごとし。爰に葉れ來る遊人は、中通已下の人物にて、棧留青梅の店者は、屋鋪通ひの初嗣築より、年に二ッの出番を誓ふに、聊か二星の契りにや比すべき。彼の放蕩家の呉王。姑蘇臺に西施をして、チョン〳〵菊の樂しみも、かくやあらじと未至通の貧君子。價安きをもて喜見城の思ひをなし、適々兩三個の妓舞を揚ぐれば、昔の謝安が東山に新狂言も是れにはしかじと、脂下りに高ぶり、

身を溫湯の湯氣にあがつて、黄色な潮來に湯香を恐れさせるの徒、潮來を以て兒くゼハエフタウを度し、猪牙を以てよくスヤツハりを渡す。此の世界の風土といへるは、長襦袢の細身指し、黒縮緬のはつち兄はしまりといへる、やゝしき女の青樓風を廢し、或は剛い手拭を常にかけ、花色緒子の帶、其の甘に結び、或は前垂掛にまとふ、丸顏の大與者。客人か、將船頭か。船頭とも見え、また客ともみゆ、くすりに宿主の顏を譲し、二上りの騷頭、なしごげんの程もなう、又ぞや内の御首尾の程と、女のうき目の口紅替は、萬客得むとなめられて、行く客の緣のは絶えずして、而も元の客にあらず。流れに浮ぶ川竹の、且切れ、且結びてと長唄が、もとの文にはあらねど、實にや賑ふ繁花の地。爰も名にあふ難宿の、大磯小磯化粧坂、わけて名高き手越の宿、遊びの濁江、情の渠、戀迎の端に漕ぎ寄する、一葉の情なし小舟、新市場の橋の下、潮へ高ふじとする處に、逢か古市場のかよひ來る、贈り舟口舟、瀨落、互に相れ合ふ舟と舟、客と客とが見合にすて顏。胸にぎつくり、ぼつたりと落すぶら提灯、今宵に遠いにと闘と闘ふまたれテヤコソノ\/\/ー、折から時を、四つ時の拍子木と猪と別れて、チリトン、チテトン、チン、鐘も内直に音而巳聞ゆる。

四ツ明の部

品　目

「手ごはくかかれる段
「うまくかかれる段
「しんにもてる段
　附、おくてん遊び三人一座の段
「女郎ひとりに客三人手くだの智恵競

石場妓談 辰巳婦言

式亭主人著

[illegible]「[illegible]〳〵」[illegible]「[illegible]〳〵」につれて、バタ〳〵トン〳〵たる料理番の俎板も、良音なくして、[illegible]の[illegible]をなす[illegible]、[illegible]の返詞、障子は[illegible]〳〵と響きて、[illegible]の[illegible]廊下に[illegible]まつて、[illegible]部屋の[illegible]「お客だよ」の[illegible]、忽ちに[illegible]とかはつて[illegible]に熱[illegible]頭」の[illegible]、[illegible]、客は[illegible]を[illegible]し、[illegible]に[illegible]を馬場と[illegible]、連中[illegible]見通しに[illegible]、[illegible]子の[illegible]に[illegible]く、[illegible]の[illegible]合は[illegible]て、舟[illegible]の[illegible]へ[illegible]込み、[illegible]の[illegible]せ、[illegible]春の時分、[illegible]に[illegible]の[illegible]、[illegible]用心[illegible]」の[illegible]に[illegible]て、[illegible]に聞ゆるは、たしか

鎌倉古市場二川屋の二階と見えて、客と

娼妓のさし向ひ、[illegible]とした手管の意話

客人[illegible]、[illegible]

あり、中がきつひきの裏返しにうき下小もんきがへ、八丈のぶく小紬の下着、はッながら黒のはんえり、らせんしまりつけりさん牛角、青梅におなんどし子の帯ぐる／＼と前で結び、遠州仕入れたかおりのたばこ入れ、尤も中へは丸角仕出しの前田刻引を入れ、こしらへは惣白銀きせそきつぎの銀ぎせるで、うす舞をくゆらせぐつと上ゲあぐらで居る。

次郎おとま　俊の内の夜九なり、但し子供やによりこ、枝がしらといふ家も有り、青楼ならおしよくといふもの、前しきれはいはずと御ぞんじならんが金の為巳上に、中どしませいすらりとして少々りきみのある姿、あゆうへだの三すじ立てのこり／＼するやつ、下着はしまちりめんのせいらへ、青梅はへちりめんに白ぬりのはんえり、尤もこしりはどんす、黒の二重どんすの帯をしめて、あんどうのそばにすわり、片手ついて片手はきせるのぶらさがるを、[illegible]、[illegible]

[illegible]「コゥわけをいひな、なにもふさぎのすがやァねえ。なんのこつた、庖丁を引ッたくられたちゑこ町りか、小糸絵の虎がやァあんめえし、口上書を出して、蔵前へすわつてるやな。ア、おもしろくもねえ」[illegible]「おめへも又あんまりでござえす。かはちや畑へ凧をおつことした様に、おつにからんだ事をいひなさいすな。又穴の穴までほつて聞きたくば、わけを話してきかせやせう」[illegible]「しれた事よ。穴を掘るのはらねえのと、水場の施主か、堀抜井戸の地主が、聞いて呆れらア。ふさぐ／＼しいこと。誰がふさぐ／＼しいか訳も聞かねえで腹を立ちなはるが、ねッから気がしれねえ」[illegible]「よしてくれ。くそ落付きにおちやなしかけるな、面白くもねえ。かういつちやァこてえさうな噺だが」[illegible]少し歩りでしやべりとする處へ、隠し方の女、南部嶋の婦人に黒と黄のくわら帯をしめ、前だれは浅葱色にすそへ[illegible]をぬはし、[illegible]といふ字を白ぬきに染め出したるは、此の男の揃ひと見えて、少し酒にみのかゝりしむ[illegible]ならへ[illegible]のひも、右の方へだらりと結びきり、あたまは大[illegible]結びのすそびんちよいと白のかんざし、さはつたら落ちさうにさし、[illegible]むわのつけの[illegible]つかゝら／＼かけり、[illegible]廊下をとび／＼

に来ても「ま、そんなぜえな、廊下を濡だらけにした。誰だかわえぞ」ト「ヤおとまさん」、藤さん
のお話が致しますねえ」ト「コウお八重坊〳〵、一寸来さつし」ト「お八重どんが、ちつと端して行き
ねえ」ト「何で有りますネ、もつと面白い事でもお聞かせなはいまし」ト思ひ、新子を割る、其処しやすき
つきさけへいつロ」「雪の下の箱輪で見たはたッけ」ト「ハイ今日は汐留かに西田様の方へ御取りに参
りましたよ」ト「よくふえてねえそしかし変の内のばアさんと稲者の目でから補流が、此の上達だアな有
いましたね」ト「最のなかぬ日はあれとかねえ。藤さん此の間はいつてお逢なしうございますよ」ト「定めて
何がにでせう」ト「大有るとおとわれネ、それにこつちの仕打がいれば、かない、ようでお気にやアいらね
はおうしはのでネ、別がなんなしたってなア、ヤアれがにえねど」ト「コウ一つ呑まねえか、妾に硯箱があるからの〳〵のしつしの
をつし」ト「イエもう有りがたうございますが、こよひはいつそ過ぎましたから」ト「ハイすきでも
いいわな」ト「ねるだらうねえか」ト、「一杯いけ」ト「ここふ」を……」ト「いいこのやアおとまさん」、おはい
かりでご座いますネ」「来よりも、一ツ杯分んで下へ置く、ホンニ此の間と御相に嫁に取れ、其処といふ御用も
やはりそれよりは、此の長兵衛、のぼしになれとも、流石
ておかげにはお旅にいたしまして、いおあけなさいますと
めとしたでせうにそそむやアござりません」ト「是れで網道なはいましよ」ト「ハイ此の間は、とんと御酒がよわ
ト、光ト丸を、……ない
ト「ママいいわな、……ト醸して行きなさい」ト、……てゐるみんな黙てりましたい。藤さん是れはいおと

ふさんよふろしう。」トたゝいいつ「そんなら休みな。コウおれたちはいつものとほり早いぜへ。」二「ハイハイ、いつも承知のまくでございます。ハイごきげんよふう。」ト、ちやわんをはた〳〵、あとにはふたりなにかつまらぬかたちにもたれけり「コレさつき富貴園の鶴しが来て、手めへを障子の下へ呼び出して、何か隠密に囁しやつて行つたのは、なんでもいつかの大智屋の傳に進ひねえ。」三「おめへがおちに囁すだけ若いわな。何もかまつたこつちやァございません。」一「ムンニヤ其の譯はとつくに御存じだ。ありやァ大方鳥居町から乗つて来る黍之助といふ野郎が来て、お定まりをやらかすのだ。彼奴も又しがねえ野郎だ。ナニ男らしく貰へ引きにわたらねエ。外の茶やから名ざしてくれば、といふ濁来文句もいゝめえましい。忝くも藤さんのおまびなすつたあえつちよを、盗みとかゝられちやァ面白くねえ。なんぼ手めへも枕だこの入つたもんで如在ねえつらァしても、サウうまくは化かされめえ。そりやァねエおちやつぴいだ。富澤町の朝市から、ほろ萱ゞ五百に買つて天道干へぶらさげる様な、古革羽織でも、かう又おれが天眼鏡で、待てエエと一番怪しめられては、何がなんといふ場もなく、成程かう〳〵いふ理窟の狂言でござえすと、嵐が立をする様に、平つたくあらはせろ。御勿體ねえこつたが、おいらァやりてが目たく玉と姉ばゝアの胸ッ糞を根付にして、視眼嗅鼻を緒〆に付ケ、化の皮を引つぱいで、提げ煙草入にこせへて、浮世をぶつと薄色に呑込んでゐるしやうがには、なにはどうだ角はかうだ、附木板のへぎ残りはちや、

ちんころの雛菜になる。拂扇筥が菖蒲刀に化けるの、料理場の鮑ッ貝は、一膳飯屋の出來合ひ卓袱に、しかも料理茶のはゝちになると、こいらァちよつくら、むくおきのうがちだ。チヽト世界にあかるいもんだらう。ナァどうだ返詞をしやな。只うつむいて何にもいはずのお半さどりもたゞうるせエ。そんなしうちは切落しへ落ちるとも、棧敷運のジャノ〜はこねえよしてくれ。そつくりと大のくその袪え庭へ置きにしろ、たとひ左交と五瓶が近松以來の筋手をかいて、千手觀音が化身して働かうが、びくともいふ男ぢやねえぞ。何のこつた、おきれ中返りなして、葺屋町川岸へ轉わされ出さず、ばかしい。」ト、[illegible]

[illegible]

ト「こんな事をおめへのいひなはる事を聞きやアしめえし、一句ご尤もさ、けれど又わたしがいふわけをまアつとは聞きかけてくんなせえし。それやアおめへあんまりお情ねエといふもんでごぜえす。わけも聞かずに腹をたてなはるから。」○「おきやアがれ。」いたことをでかに燒きたほす樣なわけもへちまもねエ。きいておれ、上「ハテそんなにしかられず聞きなせえし。何ぼしかれいわれいふお話だつて、相應に蟲といふ物は持つて居やす。ヨシカエ、今おめへのいひなはる喜之さんといふ客人は、わたし

の人だこくやの源さんが連れて來て、初の時からしてちつと譯のあるこつて、船宿衆とも噺し合ひに、いつそ義理だらけで馴染になりやした。それだつておめへと是れ程の中だから、何も外の客人へは、是れ程も實を盡した事はごぜえせん。マァそりやァうつちやつて置いて、此の初仕舞をたのむにも、しつてるなはる通り手もねえ身分だから、客人はさつぱりなし、誰といつて相談してくれるお方もねエゝといつておめへにゝ」　与「なんだおれに相談しかけても、所詮できねえと、見くびつこしたやりくりか。ほんにこつたが古市から新石切つて、者が幾人、子供が何人、その内よび出し、是れ／＼がふせ玉、出居衆がどれ／＼、あすこの内の娘分や妾のお針は扱おいて、どこの内ぢやァ火入炭團がいくつゐる、蠟燭油はどれ程つかふと、しがく所の穴の穴まで知つてゐる。朝は大島町のむき身賣の出端を切ツかけ、日が暮れれば白魚の篝と一緒に一年三百六十日、内にねる夜を遊びと心得、夜管の半よりの天鵞絨ずれに首筋ないため、尻の先へ豬牙舟だこのいつた男だ。是れ程につき合うても心いきは呑込めねえか。こんなに安く見られちやァ、猶此の腹がおすわんなさらねえ。」　ト、ちつとすれに顏をたつゝ、太平をならべる一躰此の男は前にいふといつてもしやべり出し、さめての後は常のごとくなれば、おとなもふだんのことゝしようたして、とつみわけもきもせず、擬にかその〳〵に言下に、意味無盡のかき文句をあらはす。此のあくたいすなはち女郎の寶よりなせる事にて、大詰となればつひに一つのおとし穴へ落ちんる、はなはだおそろしきやつなり。　与「おめへの樣にばんいちにあつくなんなすつちやァどうもわからねえ。ぬしの心いきはどうかうといはねエでも、如在ねえといふこたァ知り切つてゐ

さす。これだつて又こつちの心も、些とは酌んでくんなせえし。こりやア、わたいが逆はれたのかはしらねえが、新内場の兵部屋とやらに、わかつた子供衆が有つて、お前を深く呼び申すときゝやした、それを聞いちやア、なんぼはかねへ身だつても、ホンニしみ〴〵と腹もたつて、くやしく思つても詮事苦界といふもんだから、道楽の露顕をよそへ向む心にござんせん。よもやさういふ訳でもねへ、こんな手もねへ女に生つて、嘲してくんなはる心も有るかと思へば、いつそじれつたく、すぞこんなしみつたれに生まれて来たかと、心でわたいを恨んでをりやす。」ト、なき声にて、涙をはら〳〵と たれおへてなにし泣沈しなり、目を拭ふ。うは「ムヽ、そんな事を聞かねへ、まだ有つたにもしろ、手前へはなうぞときれいな事ばつかりならべたてるが、イヤそれなら喜之助が名を腕へほつた、ありやアどういふ訳あひでおれを出し者にする。それ〳〵見れないやア無ッはらしい沢山ある。うでをはるとも、かぶるとも、勝手にしろエ、もうゝんなアめ。」ト、そりやアおめへでもねへ云ひぶんさ。此のはり物のわけもよんどころねへ義理にかゝつて彫りやしたが、是れだつて根をたんでゝ見りやア、みんなおめへにつくす心でござえすわいなア。」ト「ソリヤアなぜ。」ト「ハテ初仕舞を頼むツても外と違つて人も多けりやア、つい六両と七両はいることだわ、それに又いつかもよつく噺した、とつさんの病気で今につはりむつかしくつて、人参の代や何角れ療治入用だから、年々に書入れてからと工面してくれといつて来やした。

ツレにおめへの方へは来年行かうと約束はするし、どうもかうも思案につきて、金故これな不義理をするも、とつこんやおめへの働きざかりさ。ホヽ、ニわたいおちつとは不便だと思ひなはるなら、腹を立たずと堪忍してくんなせえし。」ト、もの思ひ藤もさすがに岩木ならねば、この一言に胸ふたがるなり、「おれだッても、すゑ始終、屁をひり合ふといふ中だから、腹をたつでもねへが、彫物のことはどうも／＼いめへましくてならねへわいふ事よ、一体又鳥居町から来るやらうが、さつぱりと気に喰はねへ。ふしぎう云ふ理窟なら、十両や十五両でもたて引きにもおれが出す。その代りにやァ喜之助をすつぱりと突出して見せてくれ、一年早くこつちへとりやァ十両だしても気持がいい。」ト、段々りくつにのぼせてくれば、[illegible]は舌を出し　ミ「さういひなはるほど、どうも其の金はもらはれやせん。」藤「其のはずよ、金ァ遣はせねてへ。えつらじやつぱり引込むのがいやでもあるし、又喜之助が方へのつらも立つめえ。」ミ「とりやァおめへ愚痴ッぽい、今も離した訳あひだから、どうも心がすみやせん。」上「すまぬ心の内にもしぼんだ、なんでもすつぱりつき出すといふ証拠を見せやな。」上「証拠といふはマァ此の彫物を消して仕舞はう[illegible]して、それやァどうともかつ手にしな。しかしこいつを消すにはあせもでかけにや行くめえ。」ミ「きついしやれさ、さういはれて消しかねるものか。」ト、かねて用意の[illegible]、色と意とに[illegible]、[illegible]は[illegible]、目の[illegible]　上「ヲヽ、あつかつた、サァよく見なせえ

しや[illegible]ト、まへ〳〵「ム、よし〳〵違へねへ真中だ。[illegible]ですつぱりとわかつたが、ついでにきつち[illegible]の腕を見せやう」[illegible]うでをま[illegible]しちまうんだ[illegible]、よく改めて[illegible]なせえ。ト、はなつさき〈つき出す。[illegible]紙入より[illegible]州どんすの金子入[illegible]出して、[illegible]な[illegible]出し「ソレまあ是れをとつて置くがいい、あとは明後日持ツて来よう。もしまだ用が有るならば、内富までいつてよこせ。[illegible]内へも大事にしろと云つてやりや」「な[illegible]ん[illegible]。[illegible]て[illegible]「ム、[illegible]がうぎに使がふけた、[illegible]れ[illegible]まう[illegible]。[illegible]、[illegible]の[illegible]「[illegible]、[illegible]八丈に[illegible]、白[illegible]。[illegible]たら[illegible]まで[illegible]、[illegible]前[illegible]「しやかの[illegible]だつ[illegible]を[illegible]ぶ[illegible]た親の意見でも、ほれたお前がどうまあ思ひ切られるものか、[illegible]おか[illegible]ト、[illegible]「[illegible]。[illegible]まか[illegible]とも[illegible]んおけ[illegible]よしなさ」[illegible]おかく[illegible]なんか[illegible]人んねまな」[illegible]子[illegible]を明けんとすれども、がロ、じれッてもの。「なぜこんなにあかねヱ、いけぼう〳〵しいしやうじだぞウ」[illegible]ト、ばたアリあ「すや藤さん、なぜだんまりでお出でなはるヱ、根みでござえますよ。」ト、懐手でひざ[illegible]り[illegible]、[illegible]、[illegible]出[illegible]角[illegible]だんまりのい[illegible]「[illegible]、[illegible]だれだ。」「[illegible]だれだもすさまじい、とつぴんなやんす。」[illegible]「ム、奴か。」[illegible]たら[illegible]、大部屋[illegible]ねえヨ。」[illegible]大[illegible]つい[illegible]しやれ[illegible]

ト、きせるでたゝくまねをする。[illegible]「夫れでも、半代囲子よりははゞかりとがいいと、掛取に頼んだおやァねえか。」角「イやはづかしい、いろんな事を云ひなはるねエ。きつい悪口だ。うつちやつて置きなはいましョ。」ト、したを出す。[illegible]「す、ながい舌だ、只今舌の上へ長刀のやうな客人をのせて、水車のごとく、おしやべりを出します。コリヤ[illegible]、アイ、といふやうな氣味の悪い。化かされ客が、まぢ／＼して待つて居るだらう。」三「エ、こりやかましい、チエト相談が有るからだまんなせへし。やかましくツてならねへ。」ト、まな[illegible]廊方へかたくまでる。[illegible]「ア、あやまりノ＼、あやまつたのかんざしだ、モウねるよノ＼。ナニサお角さん今夜の客人は初めて。」角「イ、エ。」[illegible]「裏かへ。」角「ムウヽエ。」[illegible]「なんのこつた、大川やの伊吾か大薩摩の朝比名と来てゐる。」三「アハヽヽ、ハヽヽ、ホヽヽヽ。」ト、隣の部屋は誰だなう、とんだやかましい。」角「アリヤァお百さんの客人さ、三人一座で、くせとして廊下声だから、いつそいやがつてゐるヨ。」三「なんだかおそろしくしやべるなう。」ト、杉戸のすきより三人のぞきみるに、曰く、

後堂貧客三個交席段

中座鋪三人制牀にて床納まつて、未だ女郎の来らぬ體。眞中の屛風の内に坊主天窗をくびッ切れ夜ぐへつつこんで、やに下りにふんぞり返り、煙のわくがきをよんで居るは、醫者の内弟子と見えて、口には張仲景が聲色をつかつて、内経は醫経下引草、傷寒論国字解などをそらんじ、何事もよく考出

たかゐ性にて、切の抜き[illegible]蘭言[illegible]などを、しツたかぶりにならべたがるくせあり。

片達 黒八丈の[illegible]な[illegible]に、上着は[illegible]色の[illegible]、[illegible]七ツ頃[illegible]
小紋のふとり[illegible]下着に、花色に[illegible]

仕通 [illegible]

[illegible]

こいつに楽屋方言のセン

[illegible]

東五郎 [illegible]

しやうにみる物ヲつらまへて、おもたいくちの
しやれおぐちなどをやらかしたがる風なり。

[illegible]

道「トキニモシちつと古いせりふだが、「やれ[illegible]」はどういふもんだの。 [illegible]

にぶるまでまた来ねえとは、あんまり、ほん[illegible]しい[illegible]

[illegible]

[illegible]、如斯不利ときは巴丈を配剤といふ場だの。」 土「ざきに手めへしやれだネ。」[illegible]

つも「孫右衛門」を「孫三」として、「すまり」が「孫右衛門へ」此のとほりだ。」 土「ふ、いいきびい、いいき

[illegible]がん首ですくつて香ひが[illegible]川柳をさ。」[illegible] ト、ふるいことをいひた [illegible] 「てうけい」は有りか[illegible]

圭「有りやす、」トいふ「いめえましい、所せん此のがら／＼おやァ噺し合ひがわからねへ。」ト、個らをつかまへて、わきるはとませるをはたく　圭「コレ片達さん、ちつとこつちへ来なせえ。」片達は側し枕の四角ではあたまがいたむ故、ふとんの下へ入れて、其のト、ふとんの上て枕とし、坊主あたまは髪がおたなどと、ひねりねて見たりしが、おつ、頭をおきてこちらの屏風へ来り「ハ、ァ此の屏風はなんだ妙畫々々宋紫石、沈南蘋はだしといふ畫だ。こいつァくじどりにさせる繪だわい。和漢まぜこぜちくらが沖だ、節分の晩にやァチト恐れるス。トキニ、『せいざ』を『やつかい』に吃したせるか、スユ『しぶたら』と出てえが、所せんモウ幕は切れめえ。」ト、酒多くきいろな聲にてあたりをきよろ／＼と見まはし「ナツト有り／＼こいつァいい。奇々妙々絶倒な趣向だ。」ト、混ぶたのわきに用きのこして置きたる、妻の来わんものぞひやつこになつたやつを、むしやうとすくつてある　圭「何だ／＼ちこいき出としよう。沙汰なしには、おほキにうらみだ。」圭「がうぎと」をせたけるもんだの、たれがやァ『かくやつかい』と見まるれいご」圭「こいつあの畑にやァねえこつたの。そこらはべつとす、ソレ俗ぶつとかなんとか別世界にして、諸事色情にはなれたもんだ。ソリヤアさうと此の妓婦はどうた、根ッから氣がしれねへ。足下は不佞が婦人を、とくと熟覧したか。おそらく醜女、彼の俗にぶふしみッたれだらう。」圭「ヲイ彼奴ァござらんでもねェが、わつちがのは首ッつきが婢だ。吐逆さん御前見たか。」圭「けに、繡工の鳥が南風をくらつたといふ首だ。」圭「ム、いい／＼妙言々々。コレ此の枕を見さつしゑ」道具女郎は廻してなきはね、ゐりまりらの古いのを出してある、圭「運し枕の名代に、野薬の客へ思に着せて、出さうといふやつだ。」圭「ム

ムいい／＼妙計／＼。甚哉洒落の大いなる」「實に當世可畏だ。」「ヲヽこの比翼紋を見ると、すこし氣障

だの、金箔の古も今斬うなつちやア霜枯の藥罐あたま、燒原場所附といふ見立だ。」「ムヽ、いい／＼

妙計なさること讀まねえと、腰をうたせる紋だ。」「そりやアねえと云讀けきうかの紙切へ、と、わざわざ

こつけたやうだ。」「是れでもたき殺した狐だらうね。」「しかしこいつらで「これは」のやう、掛軸の

地震、雪隠、かつこうた雷、といふつらだらう。何分恐れるに」「さア、いい／＼妙計々々、何でも

さしる役に用ゐて、あいつが懸河の辯をふるつちやア、どんなやつでもひやうに江戸繪圖の川といふ

物を形どつて、一ぱん捻ると見るのを、高も立板へ詰め小便をするが如しだらう。」「其實達作だ、廣徳

へ記されあそれねえ」「そこの奴の内も、あんなまぶな子供はねえぜ。」「そしてだし物がいいなぞとい

ふ手でもあるが、おいらにやアそつは難しねえ。」「世の酒しみと、茶のしほ、ぢやいいと、粋の落書を

見りやア、野暮びのあいそうかしたが、いいかねとこつた。此の虚の世界をおしまひな。」「是れは

めヽ。これつれのおしやべえ。又あの「眞太郎」がやアねえかこ」「ヘエ、ぞんぜ、承りて、さ」「土話

貴する時は六人目に風の事で、略三個の離坂とまる中離の歸りから、くつと花村へ雨はぜらした。そ

こでおつのきたが事があるらんだ、いつらが「いか」をトこしたやつはヤアかうでござる」「さア、あのおそ

よ、継めてをあのこうくと、「目さなてこ、床の内は初會にしては、わたらく妙手なるべし、九目も

おかねえぢやアうごやせん。そのくせ國色尤物、イヤア至ッての佳人さ。」芸「ム、有りがてえ〳〵。」ト大きにつりが來てなしやうと首をふり廻し、黄いろなこわいろが段々と高でうしになる。此の内東吉は一向これ片ぱうにて、何ともいはず、片達がくびをふるふたお雌風へうつるを見て、をかしけれどもわらひをかくし是をはた〳〵しこゐる。　そこで兩座面につらなる歌妓幇間、こいつまた虚延を交へてド、ト、ナソレ二階中が引ッくり返りの大ぜん〳〵。流石の大達高堂土佐の大仕掛を見るがごとく、イヤモ愚僕大略斷、諸事夢のごとく〳〵ご閨房へ入りやした。」芸「そこでおめへの名句確論がありやしたらう。」ト、しつたかぶりにおいまつはすれども、何かさつぱりわからず、さすがだんまりでも居られぬゆゑ、ム、ありがてえ〳〵妙だ、ム、いゝ〳〵トばかり合はせおどなである。東吉は初會先刻より大これぱうにて、目の内でいたこをうたつてゐたりしが、芸「その世界ら、いゝが、今宵はどうだ、モウだいくつの筋だ。」芸「初會廻しはとらねえ所を、むりにあがつたから、こいつは覺悟のめへだ。」東「おほかた女部屋かあんどんべやへ、おッかたまつて、出しッこのおでんしら寢そばイ〳〵で、しやれてるだらう。」片「但シハなめかたでも初めたらう。」東「ま、まない寒い、ナア一トちんぼうふり出してえ物だが、コウとてもかうなつちやアナ、彼の。ナソレ。」芸「ム、なにか。」よし〳〵片こうきくらいを出しなせ。」ト、芸「こりやアおそろしいだ、そんならこいつから先へ。」東「シイこりや。」芸「山をふさいで見えあり、チ、チ、チ、チン〳〵〳〵くりやんト。」芸「此の所黒幕忍び三重。」芸「大臣柱に松の立木有り。」東「蛙の啼く音寐鳥の笛チ、チ、〳〵〳〵カタリ。」ト、ッ、ト「七兵衛」を高くまくりねえ、しかし「幕」を取つてまつ裸もいゝ。こいつア「ばちや」「かあいた

くすか、現角う[illegible]ねエ[illegible]　は[illegible]めるだれでも此の頃は「[illegible]ま」だから、ト上「けまん」をうめるつも
り也と「ずうき」[illegible]とくみんのとき事、とは實の事なりト「こいゝ」ヤふり「じつしん」おもしろし／＼」ト、なまて、[illegible]あたりと
りまえしたるだ[illegible]の[illegible]を、[illegible]引[illegible]た[illegible]、[illegible]
風をのせ二階子を[illegible]し、[illegible]ねるわ[illegible]ねをしてとし[illegible]はね[illegible]
これらの[illegible]さ[illegible]、[illegible]上の[illegible]で、[illegible]
ておくれなと、さま／＼のあくぢヤリあれどもくはしくはこゝに畧す。

○一體此の里にてはわるじやれ遊びの人物多く、此のくらゐの事たび／＼なれば、内所にても[illegible]の
みかまはず[illegible]されども[illegible]に[illegible]／＼と[illegible]、二人の女郎もお[illegible]來の、[illegible]何でこせえます[illegible]、
とんだお客だの、[illegible]してもれ[illegible]。[illegible]とおやらかしても、一向聞きつけずに、[illegible]騒く故、
[illegible]の[illegible]し方、若者[illegible]、目をこすり／＼出て來り、お定[illegible]に女郎を叱つて、むり
むたいにおかし付ける。[illegible]する内、夜もはや明方にちかければ、こちらの座鋪にとり紛れ、
いかゞなりしや跡はしらず。

[illegible]「[illegible]の[illegible]／＼[illegible]、[illegible]よく[illegible]」ト、[illegible]目を[illegible]
[illegible]一[illegible]に[illegible]つけた、[illegible]時分[illegible]「[illegible]まだ」ト、[illegible]
「[illegible]」[illegible]／＼[illegible]／＼[illegible]「一[illegible]かにしなせ
え」[illegible]下を[illegible]だ[illegible]「ハ[illegible]藤さん[illegible]、[illegible]ます

よ」◯「ウヽニヤ早くもねえ、下へ行つたら帳頭をおこしてくんねエ。」◯「ハイ〳〵。」ト、はしごをはたはたおりながら下をのぞき「八ビン〳〵。」だまつてゐるゆゑ大きなこゑで「はアおきなせす、ん、エ、おそう〳〵しいぞ。おめへはいつでもごねぶやける。おれはエ權七さんだ。」ト、帳頭、おきて来り「なんだやかましい。かんにんしねえ、まだ歯もはきねエ。」ト、目をさまへていふは此の頃のはやりなれど、其の意味作者には來り。「ハイおふねがおおろしうございます。」ト、のぞいて見「おとまうんバア、もうこゝぞあり、」したを見「何こだすかねエ。」して其の門番長吉もしたく〳〵、サア行かう〳〵、コレそんなら、夕アのことをわすれめえヨ。」◯「合点こんで居やすから、わるくはしやせん。そしておめへいつ來なはる。」◯「コウトあしたは何だによつて、エ、。」ト、しばらく考へ、ム、あさつての晩來よう。」◯「そんなら宵じまひを付けてまつて居るヨ。」◯「すまあつかましい。」◯「エ、いらぬ世話だわな。」トいふ。◯「アイタ、、、、まだ歯もはまねエ。」ト、歯をふさいで、また目◯「エ、うんなといふに。」ト、ふいて、◯「おめへほんたうかたこ」◯「やかましい、どうともしろエ。」ト、はしごばた〳〵、若イ者はきもあけなれしくで戸をあける。おちかいうちに。」ト、くじりがたかく〳〵、若イ者もへずいのり、かいものか若イ者もやひをときこゞ一つとつきだし、ハイごきげんよう。」◯「おさらばエ。」◯「ウハイ」「八幡鐘」のゴオンと共に寺々の鐘、月落ち鳥啼いて霜橋に白く満つ。宵の口に朝直しあれば、首尾の苦にするしやつ立ちあり。寐も不寐も悉皆是れ、朝河岸の満つ、寺の鐘聲。ハリ〳〵馬鹿の音にして、其の傾城の心の内、明の鳥も憎くも、憎や可愛や裏表

○観音の巻（心）は其れの花嫁の香込みするたに、しかもさる宝を握り、頭巾をかゝるに[illegible]
わ[illegible]遊び[illegible]道を進ば[illegible]るのだなと、高慢をはきたがる風なりと[illegible]
かく[illegible]〳〵「[illegible]己」とされる[illegible]の[illegible]、[illegible]此の鬱語をこゝろ入[illegible]、[illegible]
[illegible]
○[illegible]たる三人一様は[illegible]、[illegible]自慢に気[illegible]く、[illegible]人の口[illegible]
[illegible]、[illegible]を[illegible]しうとし、[illegible]に[illegible]とふそはる、[illegible]
髪詠のだみそにあるべし。

遊蕩の部

[illegible]は[illegible]、[illegible]なり[illegible]
[illegible]ともとを[illegible]にて、[illegible]八[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
よとはことばせて、ふと　[illegible]「どうか雪でもふりさうな景色だ」のコト、いひながら上田の羽おりヲぬいで、[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ならひなり、いつも喜之助合口とて、ほふなのせこ来り、羽織を肩へかけながら、どうらうの掛物を見て、「モシこりやア太郎でござえやすね。」喜「ム、宗理に書いて貰つたから、花溪に澤庵の讃をたのんだ。」導「どうぞお讀みなすつてお聞かせなせえ。」喜「ム、かうさ佛は法を賣り、祖師は佛を賣り、末世の僧は祖師を賣る。汝は五尺のからだを賣つて一切衆生の煩惱を安んず。柳は緑花は紅の色々か。歌に水のおもによるよる月はかよへども心も留めず陰ものこさず。」「ヘヽ、ト妙だらう。おらアよつ程よく出來たと思ふ。」トすこしむへて導「こいつア面白い。ム、なる程違へござりやせん。是れはどうか、道理先生とやらのいひさうな、せりふでござえす。モシさつき摩利支天河岸のこつちらで、物をおつしやつたのは、わつちもどうか見申したやうで。」導「ム、あれやア友達だが、一ト頃小橋へつき合つた事もあるが、此の頃は河岸をかへて町へ行くさうだ。あんまりさえねエやつさ。」ト、はなしの折から、廻しの女來りておきまりことをすゝ、船頭は網打場と出かけて迹付喜之助引出しの門を掛りてありければ、引出し見るに玉帳あり、廣げて見ようとする處へ、おとまはそういつて使ひながら來り此の體を見て、「オヤ喜之さんなんでござえす、あつたに見るもんぢやアねえ。こつちへおよこしな。」喜「いゝわな、見せねえ。」ト、ながうぎにいそがしいの。是れぢやア病氣を付けるも尤もだ。」ト「よしなせえ、きついしやれさ。」ト、玉帳ヲ引つた聞より文一通ヲ隠れ、喜之助手早くとらうとするを、おとまは「よしなせえ」とたがひにうばひ合ふとたんに、中よりひらひら落ちる。喜「オット妙々、文がらの中の切れが殘つた。」ト、手に殘りたる文のはしをさしたしてよまんとする、とまれて手ヲトらへはなしやア「だがなれぼ、いろ〳〵さまざま」とすれども、喜之助は離さんとしかれども、はなされず。喜「なんだかなかしくかく

すだけ気がしれねえ。」ト、わらひながら、「ときにさてはその折からくれぐ〜申しかたあゐなく〜鳥居町の喜之助事忠ぐ〜まちがひなうつきだしの狂言になされ下されかし。くれぐ〜も。」ト、よみ下す内、色青ざめ、しくわつとせきくる涙。おとろし、ひとまをはつめて手をふるはし、しばらくして涙のごひ「エおとまさん。」とくすまぬなかほしや、何思ひけん物さはらう。〔illegible〕まは調なくたてうつむい「コウ是れにやア大かた、ふかい道理の有るこつたらうが、きやかういふしぎにこあ分けたけり、こゐる〔illegible〕なつるやア、どうかうの訳も聞きたくねエ。が浮世といふものは面白いやうな、悲しいやうな、はかね。物ハいひながら、おれが體もこんなだやア有りあえと思つたが、けふの今で愛想がつきた。さりきやふつつり思ひ切る。」トすべぼりと手ぎれいに、紺宿前でつき出しねエ。女が去年中たのひに祝つた此の片腕。よこ二睡りのあるい文句だが、蚊が喰らつても字のあたりは無でさすつて辛抱するだれに引きかへ此の頭はそつちの腕の彫物は、とつくに消したと友達の噂。よもやとは思つても、やはつたく改められもせず、ひよつとたき付けられたのだやア、見くびられるもしかねえから、だんまりで今日まで居ましたっこゐかうなつちや、逆へねエ。喩ひまんざらで有るにしろ、こつちから突出すべえ。」ト、そばに有り合ふ火鉢の中より、黒焼たつかた裳、とき出し、あて明きけにすると、〔illegible〕雨戸にすかりに。「コレ申し喜之さん、そりやアあんまり短気でござえす。こつちの心もしらねエやうに。」トとつくりと気を静めて、わたいがいふ事を聞きなせえまし。」「さつかまわしいっ短気もさんきも起らねエでどうするもんだ。」ト、うつむいて目をし

涙ぐ折から雪に大一 ○「わたしや出雲にとり残されて男冥理につきたのか。」 ○「ホンニモウわたい程苦庄の廻りいたこ労性な者はねへ。其の手紙の人譯も委しく咄せば、おめへの腹立ちも休まるこつたけれど、此様に又物事が行き違ひになつちやァ跡のまつり、定めてお前は、わたいが憎くッて成りやすめエ。」 喜「しれた事だァ。」 ○「それだつて、おこ」 喜「やかましいわい。」 ○「譯も聞かずに腹立てさんす、夫れはいわずおやだまらんせ」「松といふ字は木扁に公ヨ、きみに離れてきが残る」 ○「今更おめへァ何に突きだすの引くのといふことがあるもんでござへすか。おめへばつかりを頼みにして、くるしい世事をつかつたり、つらい苦界をおくッて居やす。又彫物の事も、サアいひなはるを聞いちやァもつともとも何ともいはれやせん。一圖に思ひなすつちやァ腹もたつから、よつくりとやァ聞きなせえし。成程つれ衆のいひなはる通り、よんどころねエ事があつて。」ト、いひかねて只もおろ〳〵「おめへに、けふいはうか、今云はうかと、思ひ出してもどうもあんまりしがねえこつたから、つい一日々々とおくつて、今更云ひだし悪いこつたが、その彫物はけしやした。」ト、聞くよりそばなる煙管取り、おとこがたぶさを引つつかんで、つけ打にふりあげる。此の内始終兩人だんまり。となり、「ぶたれたゝかれあへられもまれ、よごしにされて又つきだされては、何處で立おましよわしが身は。」 喜「ァ、是れもやつぱりおれがこけから発つたことだ。むづきたねエ古狸め、雨が降らうが槍が降らうが、内の首尾をば小女に頼んで、そんじよそこそこと拵へごとして出て

くろのあ、お袋は内に居てあんじ、おひまもたんと下さへ暮して、風引かぬやう頭巾をかぶつて行きやれの何のと、お慈悲にあまえてつき上り、貝婆の間も通ひたく、是れ程までにのろく見られちやア、まつぽどおれもうはきなもんだ。ま、と思ひだしやアいつぞや、新市場の橋の下で行き逢つた男の内は、新川邊の客だといふこと、而も手前の處へくるさうだ。アあいつもまの元はひかるやうだが。」ト、少し一ふ、思れもいつたつてつまらねエ、兎角不孝の罰だと思ッて、つきだされてあきらめよう。」ト、きれい書をやぶりたて、あくたいもなく、まぞ仕掛の○よりつらい勤めもおまへを便り、だれをトうなだれて、あとさきの思入ればかり、兩方ひつついてゐる。邪慳なことばかり。「ひそ〳〵聲にて、喜之さん、やアかういふ譯を一ッ聞きねえ。たとひどんな目にあつても、わたしやア一日もございませんと、耳へくちをよせれど、さういふふりむかず。○よりは「心がらとはわしやアいひながら、ひんな苦勞をするわいな。」ありに喜之助が耳もとをとらへて、川藤兵衛ありましたが、面しろをかしくはなし、後すうに先振に逢ひたること、思ひもおさへに心づくし、いんな金からおこつたしき、わたいも大事くらうだよと、定めてきまいのことより何れあさましい此の内こつそりとし自分なれば、御つとまはりいたことにまでされて、作者にもわからず、但し此の密事は君子の御するもじにあらんか。

「わたしへばかりのこと苦勞をさせて、わしは苦勞をさせぬかいな。」鳥うたはれし鐘にはであれ、夜昔にもたれし思案顔に一つらやはかなや勤めの身なりや、心ない事うたがはれ。」と隣でうたふいたこの文句を聞きな、あんなわたいが心いきだヨ。」喜「おきやァがれ、しれたもんだ。藤兵衛がかか

金を取つて、おれが名當で仕舞札を下ゲさせ、其の上であいつヲつきだして見せようトハ、なんぼなれでも心もちが面白くねエ。人の寶の十兩で、仕舞つたつらも何のたのしみ。お爲ごかしのしうにんもいやだ。こウ〳〵何にもいつてくれるな、其のかき文句もおそまきだナ」〇上り「かくのだますといはんすけれど、わしにかかれるぬしぢやない」「ハテさう疑りなはるならば、おめへもの面ばれに、藤兵衛さんをすつぱりとつきだすから、跡でわたいをつきだすとも、どうともしなせエ。さうしたら腹の立つこともござえすめえ。どうで又おめへにつきだされちやア、とてもあきた浮世だから、生きてゐる氣ぢやアござえせん」〇上り「ちゐもきりやうもない私のゐに、心つくしどころだになる」

喜「箆棒な事をいへ。その狂言の跡のでる内、金も命も寂滅だわ。けふ有つて翌ねえ命、去年の影物も今年の燒原。どうのかうのと一ッ寸先は闇の浮世だ。」ト、すこしヅヽあたり文句はいへども、先刻のみ二十日に二、やうすはわかり、段々と心かうちて料倚してみれば、なる程といふ氣もつき、よもやといふ迷ひも出で、又かはゆいといふ情はかかる深きなかみなれば、いふもさらなり。されど中直りの切り小口もなければ、たゞやん〳〵とあしらつてゐる。〇「三味の緣さへ三筋に分る、なぜにわからぬぬしの氣は。」三「は、獨りしあんを極め、のべ紙にて小よりシこしらへ、小ゆびをゆはへてかけ出さうとする。喜「すそをとらへて、コレどこへ行クのだ。」三「チットあすこまで。」喜「あすこも爰も一寸でもやる事アならねエ。小指ヲいはへてすゞの香筥、むかしのこつたとしにしろ。淺草裏とは違ふだらう」ト、きもなくてられて縛つてとらず、それそろ枕もとへすりいだし、屏風のかげへくすね置きたる料理場のうすばヲもつて、れほどけし髮とり上ゲ、かきなでゐる隙にふつつり切りて、何氣なくふところへすわり、亂三「ア、大儀がかゆい」ト、首を

ほろ〳〵とふれば、切「サァどうぞ堪忍して是れを取つてくんねェ。」書 横目でじろり黙つて居る。丹「お心にや叶ふの一族、折角おれたいお胸はらし、どうぞ納めてくんなせえ。」書「いやだ。」丹「なぜェ。」書「なぜでも。」丹「そりやァ近頃比興でごぜえす。」書「比興でも何でもいやだからいやだわいな。」ト、横の方を向き黙つて居る。丹「いふまいとおもつても仕舞はうが、そんなにむごいことばつかり云ひなはるから解りやせん。」丹「うつかりと出ついたのだから、惜しげなく切つて見せたが。」書「ナニ、そおめへもしちつくどい、モウ是れほどの事とかで、堪忍してくんなせえし。何の因果かこんなねエに、ぶたれてもどうしても、しんそこ惚れ[illegible]書之助[illegible]ねエ、いつそじれつてえ。見ればみる程此のかほがにくいぞヨ。」ト○○○○○○○○、折ふし二上りで「ぶつらた〳〵もしかるもおまへ、情けらぬしばかり。」書「、こゐなはこ愚痴に迷つても、此のうつ〳〵しい、しやうつらから。チヨツいめえたしい。」ト、引きよせて○○○

[illegible]

○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○。ナレあつかましいこりやァなんだェ。」ト、書之助が[illegible]出し○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○、○○○（唯兩人）「ト、さない。」の聲ばかりして○（ぬれ六、の）[illegible]鐘[illegible]作者「こいつは「ヱヘ、。」

宵立の部

若イ者夜具包を肩にかけ、片手に蝋燭を二三挺持ち「コウお澤どん。」女ふり返りて「オヤなんだ。」若「お虎さんとお靜さんと口をかけてやんな、一チ座の衆がお出でなすッた。」女「フムかうと、今夜は二人ながら出て居なはるヨ。廻しでもよくば、舟宿衆しでえだ。」若「お馴染だからいいわな。」奥座敷で手の音「チョン／＼。」若女「アイ、引。」亭主しよく臺ヲおもさうに引きさけて、「吉兵衞どん見通しはあいたか。」若「イ、エふさがりでござえす。お初會のお三人は、中の八疊へいれ申しなせえ。」惣「ソレお手がなるよ。」大ぜい「アイ、引、ハイ、引。」はるか見通しの隣座敷客(長五郎)としは二十七八、中さびの色男、めんちうにだめをはらぬ実に、太織さいとうじまの下着、黒の襟には半えりはど廣なるに、花色繻子の帯ヲメ、くさべかはの半くつに、花色もめんの下タ足袋ヲはき、なめしがはの三日月形のたばこ入れに、くりからの金物ヲ打チ、鼠か張りの煙管をひねくり、大あぐらでゐる、人柄は、仕事師のかしらと見えて、月代中ばえ當世はやりの丸びたひ、細いてふのまきノ半ノなゝにした處は、いとこの丁場でもくつと口チきけさうな風なり。かゝへげいしやつる吉めりやす「云ひたき心かず／＼の、胸にせまるを云ひ残す、めいさくゆらすそのふしに、わすれぬ君をたゝみさんこ。」大ぜい「ヤンヤア。」長「サア一ッいきな。」つる「とんだ口早にチトお押へ。」長「マア／＼。」ト杯をなげる。つる「猪牙で来なさい、にたりはおそい。ままふさいでも網といふ古い酒落かチ。そりやふさりましたハ、、、、。」男げいしやたる次「但シめつかちの、ナ、ソ是れはどうだいよし何も御存じならんか いよお取上げといふ處カチ。そこで一ッちぐりをお肴。」エ、お取上げ／＼お取上げ名代。」二「ソリヤ

やなんだ。」二「千鳥蕭名代スッ。」一「すや／＼ホヽヽヽ。」大ぜい「それならお取上げの駄賃かェ」

と、オヽ、カノ戻りがけの駄賃、オットまたらしかろう。」與「ハヽヽヽヽヽ。」喜「こいつア

葬い。」ト、杯ヲとつて」喜「呑みほして杯を ナ、そのあねさん／＼」「さやうなら [illegible]

して、一ッぱいいたゞきませう。」ト、三みせんを抱へて 一「ドレ／＼おしやく。」一「[illegible]おそれやす。」

うすエ[illegible]めし」とおれが申た物を、すエだんなさ」ト、[illegible] 土蔵へねえまんま中だ。」二「[illegible]し日ッかおちた

やアあやまりますねエ。」一「ナヽ此の子は[illegible]ふざれた事をいんなんわかかとつひんちやん」一又

おかぶの難人かえ」二「えヽ、ト夫れにいはすかえらあ、ナ二」二「おれが心も、ちこ／＼ですかねえ」一「[illegible]

たまたかふしやす、湯島の時分がかれるのに、いつも変いねエの。そこの身振に二丁町にも有るのさ」

二「[illegible]に逃れます」一「此の所作事にて[illegible]三人わ[illegible]廊下[illegible]

すうさら御機嫌よう[illegible]「こうおとまさんは又遅しでございますかエ」一「ム、又かも／＼だ」一へ

ヱそのやすみしうございませう」と[illegible]は気がつきますネ」ト、[illegible]杯を飾る[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

「酒はねェか。」さゝ「よしねえ。」喜「ナゼ。ひさしいもんだ。」さゝ「毒だといふのに。」喜「ばかァいやェ、好きな酒をばやめるぢやないが、茶碗酒をばやめさんせといふ潮来があらア。夫れだから俺ァぐい呑みはしねえ。てめへこそ時々癇癪で青るぢやァねエか。」さゝ「エ、きついしやれさ。」喜「まだ歯もはえねエ。」さゝ「よしねえ、いゝきぜんな。」喜「ナンダあんまりしかるなエ、此の頃は久しくきからねえわ。」さゝ「しれたことサ。誰がきがりを承知する物か。コレよくこんぢう裾研ぎへ行つたの。」喜「フゥゥ、こまやしいねえ。」さゝ「サニしいねェ事が有るもんか。隠しなはんな、よくしつてるよ。」ト、こそぐりかゝる。喜「ア、あやまつた／＼、ム、ありやァなんだア、エ、なによ。友達のつき合ひで、せうことなしに上島へ行つたのだ。だがかな棒ひいた。」さゝ「誰でもサ、ほんにむだァのけて、此の頃も子供屋のおばさんがしみ／＼と意見したよ。夫れだつて又、人の意見を恐がる位なら、こんたにはだかにまでなつて、是れまでおめへを呼びとげる事はならねえわな。どうするもんか、かうなつちやァわたいも意地づくだから、たとひくらげへされるッても、はなれやァしねエ。いつぞやも何やかや、あんまり考へたらば、いつそ氣色が悪くなつたから、用事を付けて引込んで居やした。さうするとモウ愛の内を始め、なんのかのとやかましく云ふし、モウ／＼何の事も思はねえ。なぜこんなにはかねェやら、何角に付けても此の頃は、一日も早く行きたくッてならねえ。またも便りになるのはお巻さん許りだ

すたッキャンニもウあの子は兄弟ぶんとは云ひながら、いつそ情があるよ。」ト、しんのはなし、長吉[illegible]
「真かはこを睡び、愚痴な事アいやだ、てめへらしくもねえ。どうすりやもんだ。なんぼ又えこだうな事を付けなたら
ぬかすがさいご、やてえ骨をたゝませて、ぼつた、こほろぎの寝処にして、女郎の有ッた古跡には、
ぺんぺん草にかやつり艸、角力取草、女郎花の花の盛りを見せてやるべエ。」ト、ア、大きな声をし
ながら[illegible]「何をいふも借だらけだから初まらねえ。そりやアさうと、こんだう[illegible]
んだ事をとうしてくれた。いつか中の櫛としのぎも、色々面工して見たが、てつこにおひねへから、
[illegible]う利上げてくゝり付けた。」ト、何にしろ今年は初市ひつてんだから、さつぱり出来りにできねえ。
「旦那の事もれたいが春込んで居るヨ。それについてはなしがあつたつけ。おめへもしつてる、ト[illegible]
川の客人の、」「だれ」「ソレ藤印さ。」「ム、あいつがどうした。」「此ごろ内度々くるから
いろいろとつうくつしてノ、ヤア耳をだしな。」ト、いふこゝろばかり[illegible]「ム、うん」ト、いふかたちだから
[illegible]う五両トツシリ外に金南貳分もらつたが、此の頃は金八どんが居ねえから、おめへがくるのを待つ
てゐたよ。是れでこうも借方ちつとはすゝもなすやうにしねえ。さうしねえと、又此の節おめへの所
へ行くにしても、[illegible]つてもらねえぢやアねエか。」「ム、其奴は面黒い。そいつが有のキヤア餘程いい、
實にすりや此の思はれすれねえ。」「思も何もいらねえ、こりやアするの[illegible]のこつた積ヤ。しかしおめへ

早呑込みだから氣になるヨ。夫れを又むだ遣ひニしなはんな、命から二番目と云ふ金だによ。」三「べらぼういふな、うはきらしい。コウトあいつが所へ是れと、ム丶、かうだから、此のたらず前は、又こつちに、さんだんがならア。いゝ／＼。」へ、少しず「是れかいト、わけさげをして皮羽織を引きだきにやアならねえ。」三「おめへ有ルおやアねえか。」五「アリやアふだん著だ。」三「そして未だ鳥居丁から來る客人にも、チツトばかりあてゝおいたが、コリヤアどうも初仕舞の客だから、ちつとしにくい。」五「でもぶいゝ鳥がかゝつたナ、何か喜久とやらか。畜生めニ金持にやア何がなる。」三「貧乏人にやア何がなるだ。ホンニおめへかゝさんの病氣は此の頃はどうだえ。」五「まだよい／＼だア。わりい時にお袋の病氣だから、一チベヱ鹽梅しきがわりい。」三「おまへまは能くあがんなはるかえ。」五「ム、ちつとづゝ喰へるさうだ。」三「さうだおやアねえ、おめへもちつと氣をつけなせえ。内には誰を付けておきなはる。」五「ムゝやとひばゝアをしてもおれなじこつたから、町場へ出た跡にやア、痛をかいてる野郎共や、建前からおッこちた居候や何かにあてがつて置くから、どうでろくな事はしねえのさ。」三「たれがやアそつはり氣が付かねえなう。」五「ナニ氣がつくもんか。こつた喧嘩をしちやア酒を喰らふことばつかり考へてらア。」三「それについても、早くおめへの所へ行きてえヨ。こんな時が女房の役だのに、何をいつても金にかはれた身の上だから、しかくの仕様もねえ。正直わたやア、實のかゝ

うんそれだからよ、おれは、気にかゝつてならねえ。あつちこつちを黙つて見ても、おめへも[illegible]
もう／＼おれははなれ／＼をやつてはゐられねえ。[illegible]、おれも焼酒でもしまう[illegible]
聞いた[illegible]なほる、[illegible]
[illegible]つて[illegible]だ[illegible]此所で[illegible]己が気でもつまらねえやうだ[illegible]いつも[illegible]
うこ[illegible]。[illegible]お[illegible]への[illegible]て[illegible]見た[illegible]
れもふさぎこ、し[illegible]ァ、ふさいだ[illegible]、ふすまの虫や赤蛙だ。おれもその御袋も承知だから、[illegible]
引つこまして見てるこ」ト、きげんをきうしたら、色恋な人が来て、けしくりばつかり有るだらう。
[illegible]事の[illegible]有る[illegible]、[illegible]懸く備へつ[illegible]、[illegible]見[illegible]
[illegible]たり、[illegible]で、[illegible]
思はね[illegible]たる[illegible]
[illegible]
[illegible]
ありたける。
[illegible]情のねえ。まだ咄が有るから、はなしやァしねえ。」ト、ゆすぶれどもしやアノ\とした
こそぐりたり、いろ／＼して[illegible]つまいしてをれ。今夜は[illegible]。」[illegible]

上面があるか。又こつちかぶりだらう。」長「しれたこつた。」三「夫れだから、猶ね[illegible]んならどうとも勝手にしろ。」ト、うしろを向いて、脊中合はせ、ちわをする間もはや四ツの鐘。　船頭「ハイお迎へでございます。」

韓直の部

管准の部

追而後編に奉入御覽候。

通向は出来かねども、お數餘れるをいとひこゝに不書

(作者曰)予おとさが出所をかんがみるに、定めて本所邊の片外れに、御目印青紙の[redacted]と刷毛青の水油有りの障子を立てたる、九尺店のろぢ口、本道外科と割りて書いたる醫者の表札、さんげ〳〵の梵天と共に、雨曝しとなり、屑家葺の棟割に蛇の這ひ出る流し元、大やさん鐵棒を引きずり、火の用心と觸れしばし、鄰の飴賣の向うの辻占者に届けれ、はつち坊主の木魚、花賣の火打筥と朝飯をあらそひ、神儒佛も入込みの大長屋に住む親仁といへるは、屑ハイ〳〵にその日を送り、夜はよもすがらおでん白菊鹽梅よしも、内の上面は鹽梅わるく、母親の賃仕ごとも、お花荒神松のりやのテリの間を見合はせ、いとけなき時にめけたらたん切大ころばしを口にほゝばり、南京小紋に鳴海絞りのつぎ〳〵、油揚の卸きを引つぱり、うどんやの汁つぎをもつて、醬油

を六好色女の贈與、ふりを書きの小説なりとも、十五といへる春のこそ、紀伝が中風の陽に、終には食にかへられ、それ故畏つてひとふたの作えり、高麗の二階屋をたてるといへども、心は味來そうしなはず、ここに新たにとたる新川の作噴、馬喰町の息子株を廃して、かかる貧困の棺架に置ゆる物を籠す。望なんか、赤なるか、露宇を立しはえ、覆つ、色に患窓の外とはいへど、進ふといふも、頭るといふを、色三日頭不調に成るへども、世界が通者に、りとさつもしてお見なれし。

石場妓談 辰巳婦言 大尾

跋

大寺主人戯作の妙任せに、古今著作を察り、是れを新手に持つて、上題となす、愚が作なき時、ふせたりと雖も、更にすぐる底跡もなく、物投げあるゝ味だにあらず、これを聞にたくらぶる皆精には、智も在りも嘗能を寛んだらう、ところでありきもの古ならぬ、を能く通ず合へるは、脳新古一番ならぬと言ふ、真の幽の目じては、泰時を中仁も珍らしからず、変の作りの風流なるは、赤松仙孔平の手際か、何にもまあ、森に一部の俳けも知らず、猶これが能く打振り、道野草にもてなすといふ而已でまして、五十五貫目、内一巻中に讃にしるす事しかり。

鈍々亭主人祭和樽述

邪慶なくして市塲の跡寺、或は口中に歯で結び、下無くして噺に、悉く傾城をあやなすとは、是社書の道ならんか。這箇先生、ふら提灯の光を頼てゆふしけふしの口跡を探り、諸事の趣向をふきする道、かまひ居ねの着付を見通す、其のしやれたる事、本通の雛の体裁に割しく、ずらく止に書の一連に傾ける、ゝゝゝとおんふの勤を認め、例で三馬子へ贈り申し候ひぬ、

式亭門人

楽山人馬笑

[illegible]

三派の水清まば以て朝歸りの口を漱がん。永代の水濁らば、以て陸北の足を濯はん。清むと濁るは客と船頭、晝の顔水に乗り出すあれば、竿をつき出す八重垣に、是ぞ幸ひの引潮あり。ひんたるの生簀に、徳のどうノ〜の後督にして、船頭の心底を見しらず、五尺力の纜物は錦頭の懷包に隠して、道斥の毛氈を敷る。今の瀬蕪剃の勇しと競ひ、きのふの再會けふの玉章、御歸らせの跡をこてゝり、あじみ智州の誰斷、貝御身の上不大切、勝手次第の出來合女房、必ずノ〜御はこばせ、御なじみの上るでは、わからぬ事もわかるのも、通と不通の中綱〜、旨くは例ぞ古市場を、復稱しく茲に、全部一本籤を立て、二川屋々々々と云爾。

ソレ御馴染の

四季山人

七年ぶりにて小本を作

附言

明の瞿宗吉が煎燈新話にブッツケたり、船頭深話と題號を、ヨビダシならでツケたる而已。趣向をモトヤハにあらず、一寸外題にツケタカリ、秀句にトボシた許りにて、彼の御トシミたる、辰巳婦言の跡をツケ、彼是が御ムカヘを防ぐ。女郎一人に客二人、一座ノモメの入ミスマシ、一部始終をストアチラヘト、全部仕舞の札をさげたといふ。

○青樓のしやれ本は遊子方言、契情買指南にはじまり、田螺金魚が虎の巻に冠たり。辰巳のしやれ本は美地の蠣殻、辰巳の園に始まり、而後蓬莱山人歸橋中古に申したり。其れよりつゞいて諸名家の戯作、年々に増り、月々に倍す。予が輩いかんぞ能く穿つことを得べけんや。青樓辰巳の小冊、毎部の趣向ことふりて、皆相似たり。故に先年先人の糟粕をねぶりて、辰巳婦言一冊を著はす。幸ひに世に行はれり。尤も古市場の小説、他に類書なし。依レ之則ち後篇を作して、以て外場所通の一笑に備ふる而已。

○文法は前編の如く鄙俚片言を以てす。たとへば、

「さやうではござりませぬ。」を、「さうぢやアござへしねえ。」「御出でなされませ。」を、「おいでな

いまし。」「このべらぼうは」を、「こんべらぼア」

右のごとく畧語する事多し、推してしるべし。

辰巳婦言　後編

おなじみ　四季山人撰

船頭深話發端

そも〳〵深川婦言の、都の異しかも名も、大磯小磯化粧坂の、意計にはあらぬ物ばかり、下町の宿と呼せる、貧心濡旧の蝸牛あり。門前町に浮色を嫌ぎ、実意を補ふが其の中にも、兼て名高き市場の繁昌、今更筆に云ひも盡きず、寄れ来る若干の顧客を、迎への船と遊ぶ間、差延びたる行逢川、彼处に連の牡蠣殻に、廊下に束ねたる冊子を思ひ、此地に出すます節は、屋形樓でや叩きけん、遠に望む永代橋、字余りの潮来曲と倶に長く、佃島の火見櫓は、造板の家作に似て高し。されば漁舟に鮮魚を漁り、枝蔵に名酒を湛ふるとも、事でか及ばん。蝸閣の結構、酒池肉林の歓楽を、夜にあつむる繁昌は、實に大福會の金蔵の、財を費す土地にして、色界の別境、昇平の楽園なり。さも此の風土を鑑みるに、嘘と實の汐境にして、はまれば深き川竹の、流れの身なる浮沈みを、彼あはれけんしる

顧れば、突き出さるゝ平再遊びは、誘ふ水の水心なしらずつらく想ふに、客は端なく、嘲婦は氷なり、恋の爭拂、情の取持、神のふりそう悪しければ、傾城の涙、客の謝を覆し、つひには一生なおやまつに任な、其の粧ひの様々なるは、出内千両を費して、逆旅の曷開昆、充満坪へ放り捨ばせば、人情千両を擲つて、金屋の河内へ贈る。郎ぎ故蕩の発りは若何、さゝき一首の娼洞なり。たとへばら、きれいよと、しみへけられては、一瓢玉手下人杖なることを忘れ、……じれッてえキヽとれ々の惑言を聴けば、半點の朱唇、われ願の管わるやとおもふ。是れを和漢にこじつけて評すれば、一夜明暉を花と喚して、淫聲の悪劇曲を開きすれば、朱子伊川も、魂を……お連れ申そうにと侍はれ、宰我子貢も神を……お近い内」に落すべし。佐子行橋格に眼を止めて、四神含がお浮雲うと見送り、……この好言揚燈もいまだしらず、初會に出る娼の絶面面は、愛も頭は、及ぶべからず、口の無為に無臆者、閉いて居る妓に小間あり。片道送った黄頭郎は、范蠡が五湖に似て、又後刻の子門は、要嗜が油門に一散。こゝに哀れなとゝあるは、「朝鬼」の俊堂、中身の隆頂と共に、無別を惜しむ。絶交れて未熟の雛女が思ひ、寒愛妓の紙王紙な心、只是れ光寛にふらず、無難にあらず、愛則愛之吾生の情、最愛と思ふ花魁の念力は肖含まで届き、可愛と思ふ客の執心は、九族界天、艶容に戀慕む浮嚢の客に、倍奪れての後悔あり、金に枕懲れたる慾心婦は、實に思はぬ手鍋を提げ、

ろ。此の時既に落魄たり、ただ能く[illegible]の所謂、能い月日の下を羨む事勿れ。

苦界、[illegible]、[illegible]貧富。

[illegible]の年齢をへて[illegible]なんとせう、まゝならぬ。ドドンチャン。」

船頭深話

第一齣　自榮鄭橋至古市場話

（黄昏刻の光景を看るに）維れ時春王正月、松すぎて五七日のころなり。大川につなぎたる舟のかずかず、あるが中にもふなばりの松かざりを取りのこしたるに、奴凧のからみ付きたるは、是れ辻番の親仁に、骨がらみの意見かとをかしく、實に繁昌の大湊、出舟入舟先後を爭ひ、漕ぎ入るゝ押送りは、水がらくりの百足の如く、漕ぎ去る舟の水あしは、一休がしの字かとあやまたる。英鄭橋の橋番は、御膳むぎめし溫かいを喰つて、六人前の葭錢を費し、箔代建立の羅漢は、小サキ笠を著て、雪踏なほしの定見世に離れり。當日守護の錫杖、旦那さまごほうしやの聲は、英鄭團子のなうれんとともに、川風に吹きまくらるゝ丁子茶の裾をとらへて、黒縮の頭巾たもとにぶらさがりし突袖のきりゝしやんは、掛りの女なりと見しはひが目か。高尾の茶見世へにつこりとして「オヤをばさんお休み[illegible]かれたる捨てぜりふあり。かかる所へ新堀花水橋のたもとなる談義場の油蟲、餌ひあひの子供大きい、むきみ殼あさりの出市まじりに、桶を一荷の坊主持ちにして、からかひのぞめき

詞に、「ナアエノ」の詞くせあるも、聞なれて一しほなつかしからず、建長寺の七ツ坊主は、下界世の三體詩と拍子木を懐にして行き過ぎ、扇が谷の番替りは、はさみ箱の杵のさきに、下駄と辨當をぶらさげたり。辻觸れの番附ちらへくばかりにて、かし帳の丑、こいによめがたき時、洲崎を過ぎるとまた鳥あれば、かぶら堀を越える夜鷹あり、其の交加の千差萬別、東南へ走り、西北へ去る。はや鶴岡の晩鐘に、四方の郎門戸さして、髪結床も舟人も、又明日と々間暮、鎌倉雪の下新堀にかゝりたる、花水橋へ漕ぎかゝる、一片の蘆葉船。(作者云ふ。前篇辰巳婦言にて皆さま御存じの客(長五郎)此銘二分程のさかやきには、けはへつたいと長くして、三日市柳の下の五郎が牀で、さらひたてのひたひ、尤も水髪なり。衣裝付ケ、上着は結城つむぎのおとなしきしまがらにて、下へ本八丈のはち／＼したる大縞を二ツかさねて、花色繻子のはゞせまき帯を結び、贊長といふ二字を銀と眞鍮のひふくの金物に打ちたる三度笠、大津さげいせいしつのたばこ入れ、「るりこん」の合羽も、「半えり」「見返し」はお定まりのびろうどチヨひねつて、此の頃拂底の「黒らしや」にてこしらへ、出入場の若衆手拭に貰つたそろばんしぼりを肩にかけて、「あんかう」「ふとん」をかけて小脇のこゝろうた。(但しこれは字あまりのそゝりいたことも、そゝりぶしいいたこ落しともいふ。

「わしが色男は、神田の八丁堀の酒屋の御用さんでござりやす」ト「また／＼」「はいたと朝の六ツ

かゝ[illegible]となるから、晩の六ツが[illegible]、本町か石町か、裏店小店、雪隠の後や、掃溜の隣な
燗鍋ちろりとつくり提げて、御用はよろし、〳〵、御用は。」是れより[illegible]「[illegible]と、ぶうてあるく、
[illegible]此の[illegible]江戸[illegible]結[illegible]んだね、おれ
へ[illegible]やけな住[illegible]たぜエ。」[illegible]一々やけだお酒やけだか、やけ酒をのみ[illegible]て居たい、[illegible]開か
[illegible]し、赤[illegible]やうな喧嘩の中直りだつて、[illegible]の[illegible]で文やらかしに[illegible]これだ[illegible]ア、義理
にも[illegible]なるめえ」[illegible]そいつは大吞みだ[illegible]しかし[illegible]の[illegible]は、昔[illegible]近来[illegible]よくし
[illegible]
[illegible]
[illegible]二人[illegible]
[illegible]
[illegible]
たりへ鐵といふ字をいとぶせにぬはせて、びろうどの半[illegible]「す、イ頭がつやアねえかい。」△「親方〳〵なに」[illegible]
[illegible]
ふはせ[illegible]ぜけへいきねえ[illegible]んだ[illegible]、向うか[illegible]跡から行きやすぜ。」ト、おこ
[illegible]一通だ、[illegible]御帯らうたな、行つてきや[illegible]名[illegible]つけ[illegible]てく
いや[illegible]のむぜ。」[illegible]いつてきやせう[illegible]石場の
まへへかゝるに、三年屋の角から二三間めの二階で、か「心つくしておくりし文ら、ぬしは茶にして枕紙、ま
[illegible]

たはやぶりつ、くづはござい〳〵、（つはたまりませんかな）まだ〳〵くづはございの笑ひさ。トアナナ、アナノ〳〵ちよいとき
なせえ、ヤレコリヤどつこい、錢がなか買よおけ、質よおいて酒のめ、あまりで女郎買へ。ソレ〳〵、ソレ〳〵〳〵〳〵〳〵ソウ引。トなぜと大さわぎがきこゆる。〓「ヨウ〳〵この長二階はがうぎだぜ。」古市はふせだまばかりだが、新市場はふせもありやすが、しでえげえとび出しがたんとでござえやす。古市も内にアつて、表二階もするけれど、マアおつちの長二階といふものは、子供部屋さ。それだから正月も松の内に行くとよんだおもしれえね。わつちらがしれになつて、いろんなことをなして遊びやすよ。そして内所ぢやアね、藝者があつまつて茶番をして、さわいだり何かアするから、とかこてへられやせん。」〓「そいつらが遊びに除けて居る處へ、しよひの客がきたら、怒ばつちやア居ても、うんざりだらうね。」〓「ソリヤア違へねえ、コレごろうじやし、ふ景氣だといつても、此の河岸をみなせえ、べたぼたアさ。」〓「ホンニナア、どこのうちもぎつしり舟がついたぜ。」もはや日もとつぷりくれて、古市の橋をくゞると、向う河岸の大和屋の内から、大の字のぶらぢやうちんで、二三人の客をおくつて出る。この客は唐棧の小紋風呂敷を脊負つて、かたへかけた手拭のあまりを風呂敷のむすびめへはさんで、はおりのひもをしめながら出るは、何れもきんとあにふとりかつむぎの羽織、人物は新へなまけた川の掛取と見えたり。こゝで「白いもすのまがたアがアれた。ア、ヤアレヤアレ彌兵、〳〵、あぶねえぞあぶねえぞ、まア爰で一番ひよぐるべい。」ト、小便をしながら酒のきめごはといふあくびを二ツ三ツ「ア、〳〵〳〵引チツト早かつたア。とぼし迎ひへときちやア、おツそろしくいそがしい、チヨツいめえましい、左明にすりやア

よおかつた[illegible]と思しむか、しは、[illegible]○「また未練なやつさ、ボイ、フヮ[illegible]ト、も早につら
まりながら、船「オットまて／＼壹人ヅ、こい／＼、あぶねえぞ／＼[illegible]ヤどつことしよ、ア、掛聲ば
の中へはね込み[illegible]船、[illegible]長五郎が船は宿作多屋、[illegible]「ナイ當[illegible]どう
つかり氣がきいてらア」大智屋 富貴岡、猪作舎と[illegible]二川屋へ河岸へつく。[illegible]やれ船と[illegible]ヨッと[illegible]綱を」
するのだ、出すのか、[illegible]ねえ／＼」[illegible]おかだ[illegible]棒を入れ[illegible]「二川屋[illegible]、二川や／＼[illegible]
[illegible]ト、長五郎は[illegible]舟を、[illegible]、山口稲荷[illegible]舟はシ[illegible]
ト、返事をして、河岸揚の若者がんぎへ參り、[illegible]若者「どなた。」[illegible]「だれでもいいおけろ／＼」[illegible]
[illegible]片手[illegible]をさし出し、
まへさんおなじみでござりますか。お初會なら、お座敷も、子供衆もござりませんが、[illegible]「だれだ[illegible]
んな[illegible]「ア、こんなたちやア分らねえ、引つこまつせえ／＼」[illegible]すや山城や[illegible]
やア御祝な[illegible]、どなたかと思つた、ヤアお静かに。」[illegible]「此の男を、ホンニコレしつかりさつせえ。」
ト、[illegible]「コウ早くきこつし」[illegible]ヤ[illegible]ちきに參りやす」[illegible]待ちてゐる[illegible]ト[illegible]
[illegible]分[illegible]すや長さん、よくお出でないました
[illegible]「ア、おりきとおいせよ。」た、河岸あけのわかい者は、
[illegible]火をはさんで[illegible]よろしく申してくんねえ」
[illegible]來たの。[illegible]おらが内なんざア七夕

にしておくがいいのさ。」船「またいためるもんだ、おれがきたくつてもお客がこねえものヲ。」廻し「オヤ倉どんか、よくきたの。おめへよく道をわすれねえの。」船「アイサ聞きながらきやした。」廻し「フムそうだらうヨ、此のごろはおめへの道は[illegible]だといふこつた。」[illegible]よしねえ、[illegible]たりふんだりもいい加減にしねえよ。あんまりいぢめると蟲が出らア。」若者「ホンニサ、かはいさうに。」廻しむすめ分「エ[illegible]おきれのおしが出るだらう。[illegible]かぎりか、お四日ぎりか、何日にも顔出しもしねえで、そして。」[illegible]、うるせえ、マア行つて来て聞かう[illegible]はしご[illegible]長さんのお座しきはどこだ。」出し物を持つ[illegible]「倉どんお座しきか、つき當りで左へまがつての、抜裏から新道へ出て聞きねえよ。」[illegible]「レクしぶりだと思つて[illegible]、おはまえるねえ[illegible]此の火鉢はまつ内に火があり[illegible]ヤンノヽト[illegible]「今に持つてくるだらう。」廻しお八重「長さん、おまはんまアきつい[illegible]いますね、今夜はどういふ氣でお出でなさいましたネ。」[illegible]「どういふ氣できたのだ[illegible]珍しい氣でお出でなすつたネ。」[illegible]

[illegible]何トあんまりじみるから、[illegible]をこう[illegible]長さんたら誰といふ事なしだからマア[illegible]にやりませう。」

[illegible]待たッしョ、誰がよからう、コウト、つかねえこつたが、三馬が出した辰巳婦言にやア、日ツかち
の春次が呼んだ[illegible]あれ[illegible]はいゝやうに故人になつたさうだ。[illegible]やうす、久しいものだつけ、今で又
あつかも[illegible]ひとつ[illegible]が出来やした。」[illegible]「松藏さんか。」[illegible]「[illegible]」[illegible]ほんにさうだつけ。
僕の土地に[illegible]兎角あり[illegible]ちの謦者がた[illegible]の。」[illegible]「[illegible]、悪い評判だネ、松藏さんが聞いたら氣にす
るだらう。[illegible]お八重さん／＼、指和屋で呼んで見な。」[illegible]ト、立つて見通しの[illegible]戸を明けたる窓で「指和屋ア指和
屋ア」[illegible]遠くて、[illegible]二軒は、指和と一丁[illegible]内から[illegible]と聞ゆるなり。[illegible]松
藏さんはゐねえか[illegible]松藏さんはゐるかよ、松藏さアん[illegible]と、じれつてえ。」その内さ[illegible]
ゐるなら早く。」ト、戸を立てはひらうとする。 [illegible]「倉やモウ一組よんでくりや／＼。」 船「むかへと一ト組でいゝになさい
やし。[illegible]ハチ何でもいいから呼んでくれ／＼。」 八重「呼びますかえ。」大聲で「指和
屋ア、[illegible]時太さん[illegible]、時太さん[illegible]」[illegible]時太に、[illegible]
しれ[illegible]大きな[illegible]松藏さんと、時太さんをはやく[illegible]いゝな[illegible]見と[illegible]
[illegible]見せるといふ[illegible]に見せねえか、うぬ[illegible]腕づくなら見せ
よう。」 八重「ウ、こいつァおもしれえ、おれが又うでづくでとつたらどうする。」ト、ひつぱり合二階[illegible]
火䌫箱にこしらへたかすなたばこなり。「こりやァおれがもらつたよ」」 船「どこをおしやアそんな音が出る、こゝをおした

ら「此子が出るだらう。」ト、お八重がしりをつねる。 八重「アヽ痛えよ、エヽふけえきな、艪を押しやア舟が出るがきいてあきれらア。」 某「ホイたいと来れえうちに好い口になつたの。」 八重「アイサごめんよ。」此の内舟漕杯事あり得なく松蔵。時太夫。三木蔵。彦「どろ〳〵とおしかけ、らうかのまんなかで、」 時「ハイ松太夫時蔵参りました。」 松蔵「コレなにすいはつしやる。」 某「なおさん名をはきちけへた。」 三木蔵「よくみれば、いい松蔵があたまで。」 彦「チヨット舞台へさはるぜ。」 三木「ホイこれはしたり。」 松「はげ作る御同然か、ハヽヽヽ。」かはいさうにまだはげもしねえに。」 彦「ア、絵馬々々しい。」ト、あたまを隠し、しやう事の外かしい。 松「たゞちよと物が承りたうござります。」 娘分「なんだまい。」 松「此の御近所にましの屋松蔵さまと申々、色男はござりませんかな。」 娘分「アイイ、エヽいろ男はしらねえが、めつかちならございやすよ。」 松「おきやアがれ、また喰らッたア、アハヽヽヽヽ。」 三木「これも座になほり、一ぺんすらいと見て、」 時「イヤ長さん。」 松「これはおめかいぶりでお目に。」 四人「ぶらさがりました。」ハヽヽヽヽ。ときに笑ひ、 八「どうだ／＼。」 四「扇をばち〳〵しながらからだをゆすぶつて、イヤモウどうとまうしましても、どうは此の通り三味線に有ッて、やつぱり芸者を仕りましてござれば、そこでもつてからにやはり、エヘンかたのごとく。」 松「ア、やかましい口だ、コレかたのごとく藝者をいたいてゐるか、又なぜおのしやアかたのごとくで、かたのごとくだよ。」 時「ハテわるく聞かッしやんな、松蔵かの。」 某「松蔵さんは女房でももたしやんしたかえ。」 某「ウンニヤ松蔵が目玉か。」 某「ウムおれがお目玉か。」 某「やつ

ばかりな、ソレかたの如くだよ。」ト此奴ら同類だなア」ト、にげ出すを追 長「アハ、、、、、なぜそんな

にいぢめられる。コウ一ッきあきやしな。まだ顔がきまらねへ様だ。」ト、[illegible] 松「まへッといふ場

をマアやらかせ、ホンノこれ鏡の出ねへ酒だア、」トいふとあの子の顔があかいつらを、」[illegible]

エ、なんだよゥ、きついしやれだ。」[illegible]ト 三「おいとこさん、おいと〳〵、おいとト、、、」[illegible]

[illegible]、顔を 三「ホイ〳〵ア、待わどほだ。お盃のおあきはござりませんかな。ハイ〳〵是れは〳〵。」

ト、盃 「しよじ酒の事だ、塗さて三味線を法度にして、酒ばかりといふ法にしてえ。コレ女子共銚子も

て銚子をもて。」 長「まやあきれけへるよ。そんな口をきくと罰があたるよ。」 三「トニ筏があたつた

ら熱湯をぶつかけよう。」 長「たかつたら煮て喰ふがいい。」 三「煮て喰ふ罰も好き〳〵だの。」 三「コ

い雛をいはつしやる。」 長「お八重どんよしねへよ、いい年をして性なしいことを申し上げるの

[illegible]」 三「罰があたるもおそろしい、ネエ旦那。」 長「うきやねへ。」 [illegible]をきたがるといつちや

あわりいかの」 長「又一まく幕出るよ。」 三「コレよくつもつても見なせえツサ。繋しやといふとなア、親

のばちと三味せんにばちがあたつてゐるから、此の上のばちはおりア有んめえとおもふ。」 トこはい[illegible]

大ぜい「アハ、、、、、オホ、、、、、フハ、、、、。」（作者曰）此の内にげいしやの[illegible]、大ていいふむだあれたあり。さりながら[illegible]をあけてしまれ

る所は、どなたも御存じの事ゆゑ、こゝにくはしくせず。又ゑ、げいしやの[illegible]文句といふは、げいしやを

[illegible]おまこになりました。[illegible]をうつてあの子をつれて引込

ますナ、まア一寸おはいりなさいまし」ト〳〵此の八重を出はらせたいも、毎にかんじいたし　長「お八重さんおとよさんをは
の両人ともいなさみなれば、はなまだつた紋切形なり。よつてこゝに略す。
やく出し申したに」　八重「今にきなさるよ、長さん今晩はたつしとおわるいネ」トいふ。ことに出し今の客が有
しいる内代といふ所を深いなじみなればいゝと散さ
しいうなしひなりかしくおるなり　豊「また健しかに」　長「なんでもいい、来ても来ねえでもい
いわな」雨もふられえ業をこしれへて、おつたかに寝て帰りやア、これでいいおやアねえか、ナアお
いとさん」　豊「やしよた世事をはしまつたことゝいふ所へ長〆おとよ　衣裳付、まるあか日のぱつとしたあさおなんどちりめ
んに折鶴の大小をちらしにつけた裾もようのうちかけ、上着は紫鹿の子、下着はこまかいさん、ふないろのかのこ
を著せ、こつくしにてありあんどんしほばんに白しまするゆへ、黄八丈まきおりのまびをしたはゞ廣の
帯をしめ、白おりの長ぬもじにて、髪のかたちは辰巳婦言の時代にあらず、近六年此ごろあたりの仕出しにて、義さ
しを長くしてうしろをひつつめ、たぼは上のほうへあけて、水がなにふつくりと少し出し、まげの一寸くつとあげて
中のひくを大しまだ、まへ髪をすつかりとたてに切つて、かんざし　豊「長さん」ト、まづはなつて火鉢の
おさへた姿は、仕出しにもおたまはありて辰巳仕入と見えたり。　長「ないでですわり、
「アヽぞく〳〵してならねえ、松蔵さんおめへ頼んだ事をどうした」　豊「なんだつけネ」　長「ソレお
めへさんがさア、さういふ情なしだわ」　豊「何松蔵に頼んだ事はあてになりやせん、私に。」　長「ト
まうしてもやつぱり。」　豊「せんじやう常のごとし。」　長「それやアさうと今夜はよつぽど不景気だつちや
アねえ」　豊「ナゼ」　長「なぜとつて聞きねえ、まはしかこれだものを」ト見せる。　豊「ヨウ引」
豊「そんなら晝間つからの客人もかへ」　長「モシいい闇をおとつんなすつたネ」　豊「せめて花にでもあ
たりてえ」　長「又よく〳〵ばるやつよ。」ト〳〵「アハヽヽヽ」　豊「長さんおめへ待つてゝてへんねえ、いつ

[illegible]下すつて話しもあるから。」ト[illegible]何か[illegible]いいわな、うつちやつて[illegible]

[illegible]。「[illegible]のまうまう、長さん[illegible]上げませう。[illegible]」ト、[illegible]此の[illegible]

[illegible]此も彼方もよかろう[illegible]

[illegible]あんたはいませんか」[illegible]よかろう[illegible]なんぞ此の頃[illegible]は出来ね

[illegible]もう赤い[illegible]かなんかれたでもございません[illegible]此のあひだ御[illegible]

前引をこしらへまんた、おまへ上へ[illegible]

[illegible]いて[illegible]

[illegible]とひざをむしやうにゆすぶりちらして、

おまへの[illegible]で思ひ[illegible]いかぬ女郎たら、打遣れ打遣れ、障[illegible]

いいのさ。恥かしいとでにくどいに見なせえ、三分にやまはる[illegible]いはれないこと[illegible]歯なら

ば、筆にいはせる、さ、なんでも好きにいはせる[illegible]

を引くのは御[illegible]なれ。」[illegible]

はきにぬしにエ。」𠆢ナゼナゼほれた、わたしが身の因果。サアサヤレヤレ、ソレソレソレソレ

[illegible]うぬうぬうぬうぬ」[illegible]おとこさんへ」[illegible]三味せん[illegible]、うつちや

つて[illegible]に傾城[illegible]であるか、[illegible]つる[illegible]一[illegible]ございません。

ゴッ、ッ、ン、チッチチン、ッ、ツン、シン／＼。」松(時に富三弾)其の外大ぜいうちをあるきながら、松は住吉明神
さんの御神木、見事に青々と。」「沖にたゞよふ帆かけ船、霞たなびきちら／＼淡路島。」「かよふ千鳥
の女夫連、ふたりが中は二世も三世もかはりやせぬ。」長 おくられながら、はしごをおりて小便所へゆく。大ぜい「きよめの御
手水御手水。」長「これから〇〇〇〇〇〇。」皆「あり難こ」小ごゑ「竹に柳は八幡さんの御神竹、み
ことにのびたときに、いびる其の竹どうぢやいな。」「雪がつもりてしば／＼旭さす」「解けさんすのか
わしやうれしこ」大ぜい「ふたりが中は二世も三世もかはりやせぬ。」女「ア、さう／＼しいよか。」松「み
じよらが下宿はいつれだや、コリヤ。」長「松こう此のごろ月夜河岸で見かけたつけ、あの日にやア何
所へ行つた。」松「ハテネからうと、エ、ソレ／＼十日の日に、空の門の初毘羅参りでござりました、ソ
レ手前といつしよに。」時「ム、あの日か、あの日にやアネ、モシをかしい事がございました。」松「シ
イこりや聲が高い。」女「ハイこゝでございます。」ト、よしきいれて出し、まくらのお定まりをとつて、紙
はてある屏風をたてゝ、あんどうかきたて、女「お羽おりな」長「此のまゝでいいせ。」ト、たすこ わ「サア／＼行つて慾はらつし、も
ウふし／＼。」大ぜい「さやうなら此の間に。」ト、皆々はしごをおりる。(長)は上着をぬいで枕元へなげ出してよ
して蒲團にわたす。(船)は長五郎がきものを袖だゝみにして枕元へなほし、金入から金をだして紙入をふとんの下へ
はさみ、たばこを吸付けてはなしてゐる所へ、(八重)ほんのう／＼茶を一はいのせて、火入を片手にもつて、しやう
じを開け、「コウ／＼おとめどんか、道川岸の傳さんが來たぢやねえか。」女「ム、きたよ。」八重「いい蟲

だからヨウ〳〵、おれがさういふッても、ヨウおッつけ晦日だから、かたァつけておくんなせえ、宜しくおたのみ申しやす。」といひねえな。」チツトこの位なこたァいつでもよからう。」女「さうでヨウ。」[illegible]は此の[illegible]客人、[illegible]日の翳りをとつて、[illegible]器量までさが[illegible]なし[illegible]押しをつよく[illegible]えたり。女「コレでえぶ悪しく言ふな、かはいさうに。」長「イヽエヽ、ちよつと訳のあることでございます。」女「モシ今夜は宵立になせえやすか。」長「ニ宵立がやアねえ、お帰し申しちやアおとまさんへすまねえ。所詮おとまりだ、ねえ長さん。」女「マア様子にしやうよ。」長「ハイさやうなら。」[illegible]身やどは下嬉しき[illegible]〳〵、[illegible]一人一座の客

作者曰 此の一條は[illegible]花木香で出合[illegible]中[illegible]一つづゝ持つて居る[illegible]〳〵[illegible]但し此の著書は[illegible]の御方様、コレ[illegible]町彼下[illegible]

[illegible]どうするんだエ。」[illegible]いつア、からつきり土地をしらねえから、塩梅しきを頼むぜえ。」[illegible]是れは別[illegible]ここまで[illegible]イイもうやしえ、わつちアおめへ、間合んでございやす、アイおたのん申しやすよ。」エ、とはうもねえ、壹人引の車引か、こけが湯へ這入りやァしめへし、闇とお頼ん申しやすだ。」エ、人をつけ[illegible]にしたら」ト、此の[illegible]を[illegible]、人をつけえにしたら、とはうもねえ[illegible]何をしやアしめえし、これが[illegible]と何でもかでもこりといひにかゝる事あり。[illegible]

[illegible]ヱ、あんまりさわがしいな。てめへッちやァ場所を踏みつけねえ様で、かつから悪い事をしらねえ。ヨウあれさんうつちやつておきねえ。あいつらにかまひなさんな。ヨウ〳〵それやァいゝが、長親方が座敷ァここだ。[illegible]ハイ奥の二階でございます、此方へお出でなはいまし。」ト、先に立つてゆく。女「なん

だかへらほうに長いぜえ。松や愛の部屋ァみや、いい居抜だぜ。戸障子から屏風唐紙、寝道具までお
らア。鍋釜ァ持つて來ルと、そつくりいゝぶんなしだ。」直「その氣で樽代の弐百はおれが方へよこし
やこ」松「すりや恐ろしい、そんな事ァ、弐百やにして置くべエ、エヽ、人をつけえにした。」ト、いひながら、ら
ふのかへく「たゞきたな、何だか踏付けたア。」直「さまァみや。」鐵「いい氣味だア。」松「待ちやア、
子種を踏んびしいだ。どこの馬の骨だか、ゝ、とはうもねえ。」長が座敷のしやうじをあけて長「長さんお一人かえ。」
長「屏風の内にて」ト「何だ。」な「どなたかお連衆がお出でなはいましたヨ。」長「誰だ、こつちへ這入らつし。」
「親方跡からしけ込みやした。」ト「みんなよく來たな、此方へ這入りやな。」人「アイ。」松「長さ
ん前ぢやア氣がつまらア、何所ぞ小屋ァ變へやな。」直「てめへ足場にかゝつてくれ。」鐵「をばさん
にさういやな。」ト「をばさん、馬鹿ァ云やな、トルやはり文庫をつらめへて。」な、さしばゝァが
相應でおぜえまさァな。」立つて行く。長「まアこゝで呑むがいゝ。コレてめへツちやァ文煮奴で湯桶
酒をくらつて、引導前にはづしたんだらう。松や手めへでえぶいいべゝを引張つたな、ゆかん場から
そつくりだやァねえかノ。」松「ア、コレ親方よしてくんねんし、ちゝんぷいゝゝ、七里けつぱいゝし
かも此のべゝの質利けつぱいだ。」鐵「なんだつて、おめへ葬禮とあそびの出ぞめだァ。」ト、けなしの内女きたりて
「サァもしおまへはんがァ、こつちらへおいでないまし。」松「すりやしめたぞノゝ。」鐵「おめへどうし

よく働きさんだぜえ。[illegible]いい子だ、おめへにやア[illegible]をやらう」[illegible]「さうだネ」

[illegible]此の子もかへ[illegible]人だなア。[illegible]人なら佛のまけれねへやうに、[illegible]へ廻ればいい[illegible]。[illegible]「は[illegible]

[illegible]け生靈[illegible]」[illegible]を、格子[illegible]「[illegible]はいねえ」[illegible]はあんしだといふに[illegible]

[illegible]立て「そんなら親かた[illegible]一人かえ、女はどうしやした」[illegible]あの方の事さ[illegible]女房の

[illegible]の連中の酒[illegible]「今夜は連しだなア」[illegible]出人やア出來ねえ」[illegible]休みねんし」

ト、三人女を先に[illegible]

[illegible]

[illegible]小便に行ったらとんだ

寒くなった[illegible]ソシ[illegible]〇〇〇〇〇〇[illegible]風をひくからよく着て

居なさ[illegible]」ト、[illegible]〇〇〇〇 長「ナニおいらア酒の勢ひで寒かアねえ、小鬢から爪先までほか〱すらア。」

三「きついあまのじやくだなう、そんなら是れおらアどうだ。」ト、〇〇〇〇〇〇〇〇 長「オ、引〇〇

[illegible]わかったか、[illegible]立派な口はきけねえぜ」[illegible]〇〇〇〇〇〇〇。[illegible]長[illegible]

[illegible]はでも[illegible]來たの、いいお働きだ[illegible]「ぐらはうめえ、是れ式な工面が出來ねえで、[illegible]

[illegible]だらうよ、[illegible]梯子を上[illegible]仕舞の目を見た[illegible]「ム、見た、て[illegible]で

こぶさかるナ、人をつけえにした、顔見世の紋かんばんおやアねえか、がうぎと大道に出たなア。おり札を五六枚貰ひてえの」「持つて行つて門口へ張んねえ、疱瘡除と雷さまの呪ひにならア。」「うさアねえ、雷もてめへにやアかなふめえ。」与「すさまあきれるよ、よろしくまうしてくんな。」ヨウよしか、おとまといふ名があるとの、おこりが落ちて瘧除になるわな。」与「ヨ魔除、おきやアがれ、○○除が聞いてあきれらア、おらア、あの札の五六枚だけも金があると、おつりきな仕事があるけれど、」与「おめへもけちなことをいひねえ、十や二十の金をなんにするものか。」与「べらぼう兵へ、たたとりきつまの守だ。」与「そりやアいいが何だか不景気だヨ、いつそもうきさで／＼、氣色がわるくッてならねえ。」与「久しいもんだア、モウ聞きあきてらア。」「久しいもんぢやアねえ、ことしらの仕舞だつても、おしつさんなんざア子柄はよしさ、きれいもんといふもんだから、お客は澤山あるし、それについちやア下の受けもようござえす。」下とは二かいに居て内所をさしていふ事なり「それだからわたいも負けねえ氣で、けふまではり通して居るけれど、ホンニしみ／＼とつれえこつたわな。」与「そりやアその筈よ、あの子はこゝの内中での闊人だといふぜ。夫れにてめへのやうなむねき者ぢやアねえ、世事がいいといふもんだから、女までが思ひつくわ。」与「アイサわたやアむねきな者さ、是れでも今まで通りやした。」少しかんしやくにて「なんのいさくさアねえ、思入レ情は情ではり通して、うぬが氣いつぺいにして

内へ損をかけず、相應に賣つて其の上にする事なぞは、急々としておきやァ、どんな閻魔さまの前へ出ても、いひ分はあるめへわな。」辰「おきに否を拔くといふだらう。」ミ「しやれたんだ、人の氣もしらねえで。おめへもしつてる通り、こゝの内は子ども部屋はひとつの樣でも、新部屋と前部屋と二ッにわかつて居やす。新部屋の數がしらは、おしつこんで前部屋の數がしらが惣だから、ソレどつちもこゝは張合はにやァなりやせん。女郎のつき合ひといふものは、表向きはよくつても、心のうちはみんな角突合ひさ。わたいらが内はまだ中のいい分さ。此の春の仕舞札だつても、ヤァかうだわな。元日は休みかえ、ソシテ二日三日四日五日六日と七種まで、だれがするかへと間があつて、十五十六と二日さ。此の内といふものは氣が氣ぢやァござえしねえ。他所外の子の樣に、平氣孫左衞門ならそれでもすみやす。わたやァ此の氣性だから、一人でも餘計に仕舞せて貰はうと思ふから、じれて癇癪もおこして見たり、くやしくつて泣いてもみたり、陰ぢやァいろんな量簡をおこすはな。ホンにわたいが氣でもあんまり馬鹿氣たこつたと、氣下氣をしかつて、この頃のはやり歌ぢやァねえが、ひんと心に錠をおろしても、つい御無でもしれが出やす。」上「ハテ、そんなことを思つたつて始まらねへ話だ。それも素朴な内だと思つて居やな。おいらが今斯うやつて居て御抱へで候の、出入場で候のと、なんだか勇みで暮す樣だが、親方仲間の子分隣りとやらで、仲間の奴等に引立てられるから、ほんのうちには

大それた事に、たれも忘れも苦界だとおもやす、なんのきつい出入はねえ、ま一あへとた、辛抱するがいい。在大力ではれしやれけれどもさ」と、深く時節のくるを待てば、押付けおつに首尾を見かせて思入れ瞬嫌ましようや」」と、自前でも抱かれまやうにしや」と、すこしでもくんねへ、そうは言ふものの、まへ、強くおわしやとうたると、とかたんとお、文句を言はれて居るのか、しかしようたつもやいいなれけれなう。おひやくさんやお前さんを聞くにつけても、いかだ、前車のくつがへるに後車のいましめとやらだ。」「いつそ観り客がどうしたと、まづ其の人でえぶ陣道だと、維にあとはいつも」「太閤記の論本に有るやすね」「それや、さうと、あつちの客が待つてるだらう、早く行きやれ」「ていいわな、今夜はここだわいなく落合つた晩だ」「何人ある。」「ム、すつぱと押しのかに林田が客人、それから坊さんと是信伴のやうなふうなをいが有るわな」「ム、けれた、最合の新造にしても楽だから、えんな嘱楽か」と、しれたことさ、初會だによつこ「とさものか」「さておいたら、まめ一ふく吸付けたか」「ム、吸付けてくれや。鐵砲で」「ここ、こいつわたし、大林煙草を入れた、一寸下情の寝の根を出し……

下をいれて喫中をつ、火入れをとる……一寸で備のね、吸願だ……

いにさ……「そこのおさんか、煙のながら変へ一つ」と、火入を出す……

とさなら……

そのついでに後来にから、……に火を一つ……、……に来を……、お茶を上げ……

ここな水がいい。」「いかなこつても。」「とんだ氣違ひだねえ。」折ふしうらかをもとた夫通り、あとよりこんにやく島以て御存じの、おとよばアさまおつかけてきたり「すイ／＼元太夫さん／＼、おめへ見通しへ出なさるか。」「アイ。」「アノお客は鄰座敷がこれものだから。」ト、手で呑むまねをして「あんまり騒々しくねえやうにして、お頼んまうしやすよ。」「アイ／＼、承知々々。」「ひよつといぎこぎもあつちやア。」「すツトのみ込みやした。」ト、別れの作者いはく、おきずくにいぎこぎのなきやうに心をくだき、唯彘をくらうがる本此のばアさんの持ちまへなり「誰だ、元太夫が聲だの。あの男も古い人だ。」「アノ元太夫さんの穴つくしの淨瑠璃は、いつそをかしいよ。」「ム、何か諦の穴で落すやつか。」「抑穴のはじまりはといふ語り出しで、外記節やりやすをまぜて。」「あれはおとはやが手をつけたのだ。」「さうさ／＼、夫れを今おやア與市さんが、義太夫に直したのさ。」「まづ元太夫が座しきへ來ると、少しこぶみながら這入つて、夫れから女をつらあへて惡口を云つて笑はせて、ツシア出し物を見當りに逃ぐりたかるが轍だぜ。」「ホンニ違へござえせん、どうもをかしくつていいねえ。」とかくするうちに火を入れてきたり、らうそのそとにて「今も聴えてるな伊のどん、今に敵をとるによ。くやしくて／＼とりつきてえわ。」ト、障子を開けてはいり、火入れを出す。けん次郎水をくんで來る。「ナアおあかり。」「ありがてえ／＼。」ト、息につき「おめへナぜそんなにくやしいな。」「それだつてもそ、マアお聞き、三十番勝負で賭をしたら、とつぱうして負けたから又うち直したら亦まけやした。腹が立つて／＼、なりやアしねえ。」「弱いなう、ナニまけることがあ

るもんか。」しかし伊之どんは強からうよ。」三「何をかけにした、おほかた大福餅、あつたかいとなんばんだらう。」娘分「御免よ。」三「そんなら薩摩芋のふかし立てを、ふかし／＼喰つたとき、おやアれまかな。」娘分「きついしやれさ。」三「船宿衆ぢやアあるめえし。」美「山口と常陸屋はなんばんが無くつてわりいなう。」娘分「アイサよく御存じでおそれ入りますよ。」

〔作者曰、山口、常陸屋はふうりんそばの家名なり、山口といふは日の暮れすぎに早く来り、そののちに常陸屋ひけすぎのころになれば、菱屋といふ夜そばうり来る。是れは此のころ別けてはやりたり。

一説に曰く、ひしやのそばは、ねぎにあぶら揚などを、あしらひたるなんばんの仕出しをして、女郎のはらにすつぱりを持ちこむゆゑ、皆まちかねて是れを買ふなり。外のそばやにはなんばんなし、もつとも○夜そば○さつま芋○大ふく餅。

右の三種は冬より春へかけて、此のことにかぎらず、女郎やにはやる事おびたゞし。

〔娘分と引きちがへてまはしの女、○お八重、ほんばゞとりのせいらすぢの上着に、あゐおなんどのもゝ山おりの帯をむすび、關東じまのまへだれ、丁子茶の二寸はゞのひもを一重は帯の下へまはし、一ト重は帯のまんなかでしつかりとむすび、あたまはばいむすびに銀のごてんぼうをさし、八重といふ字へ五三の桐のちらし／＼を下げたる、銀のかんざしをうしろへさしてはしごから上つてくる。こなたの明き座しきには、床を犯すわかい者、しかみ火ばちの火をじふのうへひろひこんで、ざしきをはき出しながら、若イ者「お八重どん、船宿部屋に久七どんが居るなりの。」八重「久七どん、久七

どんはとうくに歸つて仕まつた、轉さんがおいそぎだとつて、とほし迎へで歸んなすつたわ。」△「ホ

イそいつアおへねえ。」[illegible]ト、下へおり[illegible]「ヤア〱、おめへした八行つたらの、さやば町の山城屋に、

迎へ舟をよこせと狀遣ひをやつて[illegible]ねえ、今ッイわすれた。」ト、いかなら[illegible]「おとまさん一

[illegible]作者[illegible]いづれも[illegible]折々[illegible]「アイ今行くよ。」[illegible]「それ見たか上使のお入りだ

な、早くいきやすかれ〱。[illegible]「そんなにいやがるなら出て行きやせう、親分が來ねえで

[illegible]三行半おやアすみやすのよ。」[illegible]「長でも半でもかまはねえ、判人嚢の緖が切れた、きり

[illegible]と出[illegible]しやアかれ、[illegible]夫婦喧嘩の紋切形はこんな物だ。」[illegible]「[illegible]稽古して置きやせう、

[illegible]心持はどんなだらうの。」[illegible]「なか〱わるくもあるめえ。」[illegible]「その氣で行つてこよう。」

[illegible]元の紙をとつて、屛風にかけておいた打ちか[illegible]廊下へ出ながら「コウおめへ未だ話があるから今夜はとまんなせえしよ。」

[illegible]の聞き役か、[illegible]見せやれ。」[illegible]「[illegible]此の釜、[illegible]客につられ

[illegible]が聞いて呆れるよ。」[illegible]ト、いひすてて表二階のはし[illegible]「ム巧者にしやれらア、一昨日うせろ、

[illegible]なと[illegible]表二階[illegible]作者曰[illegible]

[illegible]女郎の寐る所もなき[illegible]女郎[illegible]

[illegible]それは[illegible]二度や三度[illegible]

[illegible]

れば、まづは不可ならんか。しかし女郎の氣性にもよるべし。○這の刻既に戌時拍版(王縞町の番人)カチ、カチカチ、カカチ。(此の里の通人御存じのぢいさま)「しる粉な能うございや、雜煮なようございや。」(大きな聲の人。)「あァんまはァ引り。」

第二齣

(下座舗の光景を看るに)客二人の割牀、四五度のなじみ客 傳吉 年は二十五六色白にて十人なみの男なれども、をしい事には下駄とひたひと手ぬぐひのかぶりやうと、此の三ツにきをもんで、むしやうに齒ばかり白くしたがるが、此の人のきずなり。友達には傳ばう〳〵となぶられながらも、芝居通のきいた風にこりかたまつた氣性にて、素人のくせにわざ〳〵芝居者をまねたがり、平日役者の名に様をつけて、樂屋のやうすはぐつとしりじまん、いつも巳待の聲色連中、夏のうちはすりがねと、聲色二ツ日かはりの夜あるき仲間にて、ちよつとぬけがらで小便するにも、我をわすれて、わる見えのぎつくりなどをするくせあり、割印のすわつた顔見世の手ぬぐひをば、湯にも入レずに大事にしてゐる、おさきなる人物なり。此の夜は旅人客におぶさつてきたわるがみと見えたり。初の客。徳兵衛 としは四十ばかり、でつくりとしたうすいものある近在の旅人客、江戸の問屋へ仕切を取りにきた逗留中のしやれなり。尤も此の里にはかやうなる旅人客多し、故にはやり歌などは、大概の江戸者より早くおぼえる。此のたぐひの客は、板古ぶしを本に書付けて國へもつて歸るふうにて、げいしやの直しぎはいたつてきたなく、女郎のむかへ早きをかなしむ。廻しの時などはなじみ構はずの名代をとり、とかく〳〵を云ひたがるものなり。いつも船宿のかみさまには、黒ごま一ト袋が國みやげにて、立ちぎはの勘ぢやうには、錢相場むづかしく、小錢で一文も餘計につりをとるが此の人の國風とみえたり。(作者申上候)此の所は、二人わり牀には雙方の詞、大きに入り組みまする故、(傳吉)が牀は○印をいたし、(徳兵衛)が方は△印にいたして、兩方をわかちます。さやうに御よみわけ可被下候 ○(傳吉) どぶねずみに紋付きのもめんぶとりへ、やうかんいろのづきんを帶にメて、夜著へはひり、あふむけになつたり横になつて見たり、ふとんにぬひつけてある敷紙の間へ指をいれたり、きせるのやにを通したことよりを、たばこぼんへ横にたけこんで、あまりの紙をかんで天井へふきつけ、夜著のうらを手でさし上げて見たり、眼をあいたりふさいだりしながら、枕へ、ト手をやると、油でべつたり、ホイといひながら屏風で手をふいて居る所へ、あしおとがするゆゑ、びつくりして早々にしまふ。ほどなく、おさま「きたり、オ、さむ。」トいひながら○○○○ると(傳)目をぱつちり、「コウ今までどこにゐなか町としたのだ、まだこねえでもいいのに、さりとはおはやしの朝幕だぜえ。ソ

「しお囃子なら、つッかけ」「かけいりとしねえ。」つゝかけかけいり、はやしかたの手にあり。樂屋番の幕もやアねえか、夜着の中は大幅簾なりやアあつたけえよ。」女郎にはがくやばん引きまくをかぶつてねるといふやつなり、されども一向わからぬゆゑ、こゝには[illegible]ミ「廊下をあるいたら見なせえし、こんなに鐵冰になりやした。」傳「オ、つめてえ、こいつア雨落だと孤といふ所だ。」雨落と清水[illegible]「なんだか根つから分らねえしやれだなう。」ト、寢ばなれて、傳かたはこ人合せを時鳥のかま佃人につかけて、「サア。」と出す。(傳)「オイ。」「なんだこどもしの出があるのか。」[illegible]ト引をひいた「ト五ツ」ねけへの客人が歸るのさ。」傳「ム、ならび大名ががうぎと騒々しいぜ。あんまの笛[illegible]をきつかけに、階子がドロ〳〵だから、こいつア一ト狂言かけさうだ。モシ徳兵衛さんでもふお静かだネ。[illegible]「お芝居つては遇ぎやしたか。」打出しの事をすぎたかともはねたかともいふなり。モシちつとさゝつてもようごぜえせう。[illegible]たつとまゝるへいかの[illegible]に行かへいか[illegible]」〇[illegible]こいつア「木[illegible]お納まらねえ。[illegible]なさるお聲がしねえから[illegible]何だか狂言をおつに書きなさると見えて、彦兵衛さんの[illegible]て居るから、チットは[illegible]せりふ。」といふ法にしやせう。」彦兵衛[illegible]彦兵衛。ナニ彦兵衛サ、うつちやりだアネシ。彦兵衛跡から來るてつたけ[illegible]同志に來[illegible]だアからネシ。」〇「[illegible]小サヤ[illegible]おひねりでんぼふだ。コウ鄰のやうな客をとつたら辛いこつたらうの。ありやアまあ何が面白いのだらう、只とほ

しかすりといふやつだらうが、おんなじ蠟燭屋ならお店がよからう、第一れこしきが光らア。おめへ達も斯うして毎日々々異類異形な化けものを相手にして居るとはいひながら、間にやアノ男は好いた男だ、どうぞこの客を呼びとげて見てえとおもつても、客が「おらし」ちやア蛤の貝ではじまらねヘ。おらしとはさかなをくひちらし、なじまぬ客をいふ。辰巳にて行はるゝ詞なり。又平右衛門ともいふ。さういつてふんざらでもなく男が氣にいつて、世事があつて子供部屋の噂にもなるやうだと、かんじんの金がうとし、ホンニおつなもんだよねヘ。しかしおめへあんまり不躾だが、おめへなんぞはマア、こゝの内での「眞」といふもんだから、眞といふはたてものをいふ。客人さは山のたくさんの事なりソレいつも「わく詰」だらう。」ミ「ナアニ根つからお客はございやせん、ナニおめへわたいらがやうな者に、どんなお客が來てくんなはるものか。おめへがたのやうな後生心のあるお客こそたまたまにも、來てくんなはるから、どうかかうかお茶アにごして居やす。」傳「よくいつてくんなせえ、コレそれ淺葱の頭巾を殺ぐ場だよ。其の口の下から本名とふうせば。こゝのうちでも「わりわり」割床、大入の事といはせて、壹人ではり附いて居ながら。」ミ「がりがりだか、はりはりだか知りやせんが、川さらひからこつちへ、とんだ隙さ。しん地へ船をつけて陸をあるくのだから、昼の客人はいふにおよばず、てえてえなら外へ行きなはるのさ。それだから昼の内は、からッきりお客はございしなんだ。シタがわたいらはいつも裏でよかつたよ。きつい親方思ひだネエ。」ミ「ありがてえてえ、ホンニさうだつけ

の。半丁の七さんのうへから上ッて、㊂の札を引替へにして、艣をあつけの、そして其の札を、船頭の腰へ下げたから、ぐちやアねえ川さらひの日傭といふ身だつけ。」ト「船宿衆や藝者衆も大きな違へさ、ネエ。」ト、いなかた傳吉、たばこ入れを取る。「オヤ五大力のかた物だネ。とんだいいね。モシ今おやアひらひらの五大力なんざア、きのきいた子はさしやせんねえ。わたいがいふ事にやア、錠のひらひらをさす氣なら、思ひきつてへうたんかんざしが、のまつていいと云ッたら、みんながわるい日な子だといつて、大笑ひをしやした。わたいが氣はおつにひがむ氣さ。惣別娼妓屋の者は、神佛ばつかりいぢつて、鹽だおだ口茶だおだのとさわぐけれど、私に限つちやア、つひしか願掛のたの字もねえのさ。ナニおめへてんでんの親にさへ見離されて、こんな苦界な態をして居るものを、神がうちも悟つた事だの」トいふことに、五大力のかなどこがお目にとまつて、こいついればしくじりと思ひ「さはさりながら苦界の樂しみとか何とかいふ事が大有りだらうぜ。サア其の咄がイヤ聞きてえ聞きてえ」ト、これわいろ。「アイサ外の子供はてんでんにかつをこしらへて、いつとはいへることをはしていふ是れ巳のはやり詞なり とんだおかんノヽだが、私らア正直藥にしたくッてもごぜへやせん。そのはすだアな。三文が働きもねえから、一家一もんに見かぎられ、こんなざまさ。」ト、傳、イヨいふもんの紋盡しありがてえ。道理でおれがやうな、きなが者を客にとつたぜ。」ト、いひながら、そつと五大力のおなをうけたら、ごきげんをとりこむ「それやアさうだが。おめへはどんな男が目ずきだ。」ト、どんな男エ、わたいの氣性をあてて

見なせへ。」傳「まちねへよ、流石におめへの事だから、ソレ生靈棚の茄子へ葛だまりをかけたといふ、生つ白い野郎は直さま首にするだらう。（つき出す事をくびを切るといひ、かぶつたことをくびになつたといふ。まうせんをかぶるより出たる方言なり）ト、ト手代敵の色悪ではいかねへと、和實荒事はそつちにあるから、マア太刀打をする者はねへの。まだ半道か、さばき役だらう。マア〳〵こゝらでござえせう。」三「きついてん違ひさ。」傳「ハテナおれが役割は道はねへはずだが。」三「私はおめへのやうな敵役が贔屓さ。」傳「すヤこいつァ「じれ〳〵」だらう、アノおれがやうな、お下でもか、アノお下なア。（お下とはいなり町をいふ）イヤよつ程ど人を茶ァよしかにするぜ。」「これやァ中賣の子だからさ。」傳「何だ中賣、コウおめへ何うして中賣といふことを承知だ、堺丁邊にかこはれておやァねへかえ。」三「生まれ古郷だからしつて居やさァ。」傳「ヤヤそいつァ前丁子菜狐の脚ちやんきりだ。」三「けしからねへ、そりやァ何の事たえ。」傳「ソレモウおも白狸の腹皷でもあるめえおやァねへかえ。」トキにかんまりお堅へ附合ひだ、チット横に寝釈迦と仕てはどうだ。」ト、もぢ〳〵するイごうだつけ。つかねえ事だが、先をくゞつて板しばりおやァねへが、内中へ惣花以ての外なりそソシテおめへなぞは、ソレおいらがやうな者は、お情とかなんとかもあるだらうが、何分お懐がた、けねへから、断うしてくんねへ。ソレ今夜百疋出しての、是れを二階廻しと河岸番へ割振つて、御覧人前龍藏ぐゝとお目にかけるわ。ソレ今度来て料理番方にやりやす、こゝらが法の附けやうだぜ。

それから随分な大せいけ。此奴がうるせえ奴よ。其の跡で帳場の先生ハア内へはいつ這つてもいい

おやアねえか、ナニトどうだ、奇妙きれてつ、おそろ観音妙智力だらう。」ト、鼻紙ぶくろの金入レをわき

[illegible]

わたやァ嫌でござえす」「なぜ」「お前やんなせえしなさ」[illegible]壹分ばかりと心[illegible]今

に来たらやらう」[illegible]

た、お前○○○は[illegible]出たなう、○○○○○○○○[illegible]一寸行つて来やせう

わなア」「何所へ行く」「河岸番をよびにさ」「[illegible]いいわ」[illegible]一寸[illegible]ト、[illegible]出しなが

ら、まくらもとに何か書きつけ[illegible]行つて来やす[illegible]下はた[illegible]有吉

[illegible]

れて洞もなかりしが、小「イヤこいつとんだけつまつだわな。まう今夜は女郎おんぶの船賃こ[illegible]

[illegible]

[illegible]特に白旺が河岸番まはんこれもまんしと、[illegible]處がいやうに[illegible]で差引き

[illegible]一枚はき無手[illegible]ト[illegible]

[illegible]

芝居でふだんにいふことばづかひの覺帳
百十六文の札錢を　小づのといふ候
百三十二文のが　大づのと申候
二十匁を　あたまといふ也候
二十五匁や　本直といひ申候
三十五匁の事をば
百五十文を　ちぎ長半といひます候

きさ「心の内でふき出し　オヤまア呆れたふうたきいだわ。あいつが牀へ廻る事は」心の内「まづ今晩は是れ限り」〇かくとは夢にもしらずたる時に、傳吉は〇斯なく割牀の一座へ酢を買ひうける〇吉「徳兵衛さん此の通りだ」ト云徳「何事だァ」吉「ヱはしりかなしさ御推察だっ」ト云徳兵衛がおきてあいかた「これはいたって おとまさん、オヤおとまさん當なはんなまか、こうもつとおはなしにお出でなさえなっ」吉「いつでもお邪魔だらう」ト頭をたり折から徳「徳兵衛さんおかへりはどうでござりやすっ」ト云吉「吉どんか一ぷくくらひなよウ」徳「またおたきさんのかぶし言かっ」吉「その通りだ、ちふか、ヤ、今夢でおつ消る」「さうしてくれさえよ」吉「ハイきさんなら直し行をよこさせやさう」ト出て　吉「よび返しして」ア、これ／＼吉や／＼、鱈昆布の大平だんべい。預ケせえよ、おい

らァ塞つたァから、モノ起きるがつれえ事だァ。」兵「それでもお連衆がし」重「モノそれよりおたいう

つちやすれたァ。」〇兵「イエ／＼わたしなら同行としやせう、同じくさ／＼」重「ハヽヽさやうならし

打忘

△兵「コウ／＼おめへの、此のお客さの、今度から連れ申して來てくれなよ、頼むによ」重「すイす

イそれだつておめへ、わしがたんは連れ申して來たくつても、お客の氣がすゝまねェおやいきやせ

んに。」兵「すゝまねえはおめへ働きがねえ、それが働きといふもんだァ。おめへ親方の飯を五六百年も喰

つてゐるんだらう。」重「イヽ、またつた四文錢百年さ。」兵「口はへらねえ。コウさういへばの、どうだ此

の客は來さうもねえ顔だよ。來ざァおれが幽靈になつてとり殺してやらァ。」重「すゝきねえこつたい、お

休みよ、ゝ出ていびけて」兵「そこおめへ、わたいがこんなおしやべりの、さつぱりけたしだから、お氣にや

すいるめえか、無理にとけすゝめねえから、來る氣なら來てくんなよ。」重「す、來るぞ、來ざらにや

すこんなにはァ、能くしてくれめえ。モノ晝日からでもおつけしけるだァ。あにはァ是れ一年にい

くたこびも上下だがなしねえ。モノ年内にも極月さしえらに來て十五日許逗留のしたァ。」一「その時さ

は何處へ行きなはつた。」兵「歳暮を引つかけてあじまアするもんだ。」兵「うそばつかり。おめへ世

事はいいたう、その世事なぞたいに四文ばかりひつかいてくんな。まつはこいいた。まァ、ておめへ來

てくんなはるか。」兵「ハヽヽうたがひ深い。モノあすの晩げえ來べいに。」兵「よしねえヨ、來たらどうす

ろといふお客に來たためしなし、つけ裏に來るお客は久しくつゞかねえものだ。其の内にもせきこんで來るお客は樂しみになりやせん。お客にもいろ〳〵が有りやすら、出席に金をつかつても惡くいはれたり、つかはねえでもヤレコレと内中によく思はれたり、世事上手が過ぎて憎まれるもあれば、だんまり坊で可愛がられるもありやす。ほんにお客の上手下手で、たとひ割花にしても、惣花よりうけのいいことがあるから、一ト通りおやァ行きやせんねえ」　すゞ「なるほど掛引ごとだァネエシ」　よね「すゞさんおつに感心したはるネ、おめへは顔に似合はねえ氣がいいなう。成るほど人にはそつて見ろ、馬にやァ」ト、何か思ひ出シ「ナホヽヽヽ、マァ斯う向きなよ」　すゞ「ヲノ馬さ乘つて見るちふ、ドレ馬さ乘るべえかな」　すゞ「〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇見なせえし」　よね「おやッ、かたがしやうきに賴ませしこんだァの」ト、けいれんなどをする。　大「あふむけになり頭をじろりとねこ、ふつゝとにつこり、枕の外にしたる者でなき」
（歸雁鏡の光景を杳るに。）書へは鏡）（あを三人割眼……下着の上……手ぬぐひで帶を……ふとんの中からはかだ……此の位にかつて、あふむけに向かひ……の二重文字を書いこみたり……ご字を書くものは、おいらが組にやァあるめえ」　三人なら歸……かり置いて……暗にもならず……日ばかり開いてある……女郎は……」トレ見せや、態ァ。馬鹿金が半分でもねえ。あの野郎はきついぜえ。こんなうの消口を見たか」　男「ム見たア」　男「あだの手業ぢやァ障子や傘へ切り拔くのはお茶の子だぜ」　「こんな面ぼァ、安くし

やァがるな。そんならおれが書く字をあてゝ見ろ。待てよ、〳〵。」ト、いひながら、杉暮のきせるで、あんどんかうしへ、蘭といふ字をかく。長「ム、ウそりやァ何だわ、凧にあるハテ、ソレ、蟷螂だ〳〵。」松「それ見たか、おさきめヱ。蟷螂といふ字はナ、斯うして〳〵、正月の正の字だァ。」長「せきこんで、おもしれえ〳〵、おれがあてべヱ。そいつァな、坤や東の門に門たつて東や東や蘭や蘭といふ字だイ。才六め。たわけを知らねえでつまる物か。」たぶ大「すホ、、、、」ト、條りに手なきあそび故、女郎あきれて見てゐたるが、松がおひ方、吉がおひ方、鐵がおひ方。「サアモシ此と寐なせえしな、いつまでさうして居なはるんだ、あきれほがとんぼう返りをしやさァ。」松「その序に階乗をすればいゝ、エ、人をつけえにした。」鐵「嘘アねえ、自身番の惣寄合五人組が揃つたぜ。」松「店受が来たらすぐに佛を出さうがあきれらァ。こけが念佛かうをしやァしめえし、やみとしやにかまへて居るぜ。」鐵「なにしに何も致しやせんが、講頭が極引の通りぶつかけ、二盛の煮轉しで、青ツてくんねんし、おたのん申しやすエ、ベロ〳〵〳〵〳〵アバァ。」ト、したを出しべつかつこうをして女郎の前へ手をつく。大ぜい「アハヽヽホヽヽ」〇トひつくり返つて笑ふ。今「いつそ氣さんじだねえ、アハヽヽ、ア、、」とよ「わたやァもう腹の皮がよれるやうだよ、ホヽ、ホヽ、ホヽ、ホ、をかしい。」ト、二人ながら、なみだをふきながら笑つてゐる。松「コウおらがかゝァを見や、色氣じみて居るさうでまじめだァ。あげさげが胸につけへたか。」よね「まじめでもようございやす、きついお世話さ。」松「きついお世話、おれが制人だものを。」よね「ぜげんがおきれらァ。」松「どうし

たと」さつ「云つてしまひやした。」吉「あとから追ひかけよう。」吉「よくしやべるなう、此のやうにかまひなんな。」松「ナニおれがこつたからいいわな。」さつ「ねつからよくねえのさ。」松「下めんかな。」さつ「おたがひ長左衛門さ。」鐵「ア、やかましい口だ。」今、すみ「アハヽ、おさつさん、おめへよくまけねえの。」さつ「ナニまけるものか。」鐵「ナニおさつさん、甘さうな名だナア、こいつア濁かだらう。アア耳が痒い、コウあたまの鶴を貸しねえ。」今「鶴とはなんだへ。」吉「エ、ソレつるをはしよ。」松「手鳶でもいい。」すみ「ねつから知れねえわな。」さつ「是れか。」ト、かんざしをぬく。鐵「ム、その耳をくじりよ。」ト、取って顔をしかめ「どいつもさはるな〳〵。」ト、耳の穴をほじりてくびをかたむけ、「ア、かゆかつた。」今「耳がかいといい事を聞くとさ。」吉「ねつからきかねえ、どうぞ月ありか徳虎でもくたばれバいい（月ありとは口なしかし、徳虎とは損料貸をいふ、口なしを月有りと轉じ、とくとらと轉じたるはやり詞なり）そゝれらをサア皆寐べいぜ。」松「待ちや〳〵、一ぷく。」トあんどうで吸ひ付けながら「コウみさつし、魚油だやアねえぜ。」○みな〳〵牀へはひる。鐵「きいろな聲で寺は駒込吉祥寺イ、茶の湯座敷の奥の間でエ、ひざをたゝいて吉三さんウ。」すみ「おつな聲だなう、お今さん聞いたか。」今「アイサとんだ上手だよ。」さつ「オヤお今さんおつなものがはやるねエ。」吉「ありやアの、からくりのいひ立てからはやり出したアな。だん妙な手つきをして黄色な聲でいひ立てをするから、とんだをかしい。」今「ほんにか見てえもんだネ。」（吉、鐵、今、すみ）四人〇〇は何ごともなく〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇（おき松）（おさつ）此の二人〇〇はかけ合ひのおしやべりにて、寐ずにしやれてゐる。さつ「〇へ這入つた

お定まりだが、今夜は寒い晩かねエ。」松「ウンニヤ若しさむくば、鐵砲の方へ沈みねえ、丁度いい加減な湯だ。」三「ワアイきつい行き過ぎさ、私はモウかつ／＼とするからさ。」松「おめへも綿溫石でもいれたか。」三「わた溫石とは何だエ。」松「三馬といふ作者が引札を書いて弘めたのだ。」三「ナウしりやせんワ。そりやアいいが、おめへハどうもみた顔だよ。」松「みた顔だたアでえぶあたらしい事ないひ出したな。そんなら俺もあたらしくいふべエ。此の頃アこんな顔が流行らア。」三「ごめんよ、だれでも誰にか似て居るナウ、おすみさんわたいがお客は誰にか似てをるなう。」三「さうさナウ。」三「松が顔か。松が顔はナ、馬鹿ばやしのひよつとこか橋際の羅漢さまにある面だ。」松「アハヽヽヽヽヽおヽヽヽヽ。」松「でもおめへに似ねえで仕合だ。」三「ソレ／＼思ひ出したは狀遣への、ソレ向う河岸から來る人に似て居らアナ。」三「ムヽさうよ、ホホヽヽヽ。」松「でえぶ笑ふな、俺ア又身替りにでも出されると思つた。」三「ナゼおめへはどつちの方だ。」松「あつちのはうよ。」三「あつちとはどつちだ。」松「あつちとはこつちのそつちよ。」三「エ、しやれなさんすな、わたいがあてて見せう。」松「こいつアおもしれえ。」三「すつぽりといふところがなんでも橋を渡つて來る所だ。」松「べらぼうめ、船で來らア。」三「嘘ばつかり。」松「がうぎと安く見るな、ちやんがア引。ワン／＼／＼、喰ひ付くぞ喰ひ付くぞ。」三「アヽ、怖いわな、何のまねだな。」松「是れか、これはかはばおりの怨靈、ひはえふたうり

ふんばりあまり、裾はり女郎の。ヒウドロ〳〵〳〵、ワヽ〳〵〳〵、ソレ喰ひ付くぞ引」 三「エいやだよ、モウ騷々しいわな。おめへの連衆はみんな氣作だなう。」 松「氣作をごらうじてお茶を上れ、ワヽ〳〵〳〵喰ひつくぞ、もヽんがア引」 三「ア、モウいやだよウ、うるせへといふに。」 松「ナニうるせへ、そのはずだア、おらアこれでも本町の番頭だア。」 三「本丁のばん太郎だね。」 松「店者だよ。」 三「店ざらしがあきれやす。」 松「おれが番太郎の店ざらしに、おめへが今戸燒のあねさま。ちやうどいい夫婦だ。」 三「アイサ道理でおめへのあたまはかぼちやの火入れのやうだ。」 松「火入れを抱いて革羽織は用心がいい。」 三「ごめんよ、表向は革羽織でも、お心の内は羽二重でござえす。丈夫向きだから買つてみなせえ。」 松「なんだ羽二重、だうりで口がたつしやだ、齒が二重なら舌も五六枚は受合だ。」 三「エヽ、にくい口だなう。」 松「ウンニヤ可愛い口だわアんぐり。」ト、口を大きくあいてみせる。 三「ホヽ、モなんだなう。」 松「ナニトいい口だらう、行く氣があるなら飯について見ねえ。」 三「よくしやべる事だよ、おめへ口がくたびれやアしねえか。」 松「ナアニ今來ル時わらぢと脚半を等分にせんじて呑んだが、ソレわらぢに喰はれたからそこで出來た口まめサ。」 三「すやあきれけへるよ。」 松「あきれも歸るのはいいが行きがけにやアいそがしい。」 三「ナゼ。」 松「あきれ千里を走るさ。」 三「それやア地口かなんだえ。」 松「ナヽんだお法師のお客をかきの種さ。」 三「わたしやア客をかくことをなしにしねえよ。恥は常不斷かいて居

る〳〵。」と「お客か、お客は斬うかくらんだ。」ト、せなかをつゝき「イ、いた、いた、それぢやア虱のやうだね。」「此のお客は虱だと思つてゐやアいゝのさ。」「いてえ爪だなう、」「ほんに不性者だ。」「此のごろ琴を始めたからよ。」「上へ住の字がつくだらう。」「ヲヤ住ごとか、それでかゆい〳〵いひながらアくと掻き、「ヲヤ此の子は色氣のねえ髮をひつたなア、ナア、臭い〳〵、ヱヽ臭い〳〵、髮はまんなかまんなかまで〳〵〳〵、此の子の髮はごぞいといふのだ。私のうちの禿を持つてしたのだ。」ト、いふおたすけのお客は、このわたいにかぶせるわな、いひ出し髮の開帳だよ。」ト、そいそうに「あゝそりや、そのやうな髮の神樣があらばそれでござい。」「なぜ〳〵」「ソレ、其ひとの神は正直神で、正直な願ひを叶へて下さる、だもの」ト、向いて見たら、道へおとして、それで〳〵真見の神の荒神で、いひ出し髮の開帳だよ。」トいひ置いてかういふのはこれでございと、彼方と持て、お神のおいふうんもねのことも、愛者のお顔をすかしてほかの上から、眼が起ないには、いつと歸の道すたが、こりいつそ上げにした。」ト、ほたなにでもまたきりいつたら色に氣がなかつたかしまふといふだらう。」「先へ歸つたら色に毛がはいたら生者がくつだ。色事の先をしちまふ」て見ると、それで毛がはえたもんだ、お客は禿の事よ。此色がある色に嫌はれやしない。しかし禿はそんなもんだよ。」「かしこまりました。」「きいた寝て居たかい。」「そんなら何といふんだえ。」

ね「ハイ／＼寐まり／＼ましたが、寐まりや／＼、すやむつかしいなう。コウ、そりやアそうと、しゆしうかにしねえ、外でやかましがらあな」ト小声になつて「初会だけれど、おいら三年もなじんだのだこゑだなう。」松「わんこゑだ、おらア犬こゑだ、ワン／＼／＼。」すア「エヽモウ世話のやけるなア。こんなにわたいがふざけるんだから、お気にすんだら来ていへんなせえしよ。」ト、うへの手をせなかへ廻しにかゝる。松「すア、いたいたいかしこまりました。」すア「またとぼけなせいす。」松「ナニとぼけおやねえ。どうりや、寐なけなう。」ト、いくつぶくりいだふらなを（はた／＼音）ト、（つばをはく音）ペツ、（吹きがらへしみる音）チウ、（引つ）まばけ遊びに引きかへて徳兵衛は、おとゝまをまてどもこぬゆゑに、よんどころなくふとんの上に寐ようとすれども、目はさえたりこゝろはおちつかねば廊下をはた／＼、はなうたもつて小便所のはめを、まどのにらみつけ、だら／＼だら／＼ひまくひまはして、うとあつ、どうの火の用心をよみながら、足下駄の音は、寐しづまりしこたまにひゞくころ、ぶらり／＼ともどりの廊下へ来り、目をこすりながら、いさみ来る中のざしきを、のぞき座しきとり違へ、しやうじを明ケてはいれども、やつぱりおのれが寐しまに心に、（上ツ）ガイヤヤア、酔つた口がねばつてならねへ、なんでも今夜はいたゞいた晩だ。よつぽど評判はわりい。（いたゞくとも、つけたとも、はたさともいふ芝居のつけ音なり）徳兵衛さんよく寝るの。ト、いひながら己が床と心付て、屏風をおゝれは内には二人せるよりびつくり、「すやこいつァ大間違へだ、御免なせえまし。おれが床だと思つたおイ。」起「ハはおれ何だ、何だ、屏風をことわりなしに明けやァがつたはどこの馬の骨だ」ト、はりこまれて「ハイ私、イヤとんだ麁相を」ト、いひながら、うろたへまなこにせきこんでこれからの屏風をくいと明ければ、これにも同じく大間違への女郎と一所にとびおきて、目をこすりながら、「何だ／＼、どうしたとうした。今時分何を捜すのだ。松か。」すア「松おやアねえ、誰だ。コレおれさまはどこの人間だ。ヤア

下に居やたア何まごつくのだ、此子がしはおいてくれ。何にだか暇つから分らねへぞ、みんな起きろ、起きろ」ト。大きに不調法いたしました、トこト…の違へましてこ」ト、顔を横手にして、しやう 松「ヤイまちやアがれノ＼。己は是れ折角お静まり遊ばした所へ、ナニとみすれがふんごんだ」 もすこしむ ハテそれだから御免なせへと謝らア。是れほど謝つたらいひ分はあるめへ」いひぶんがなけりやア申し分がやつとこさとあるわい。コノ一トほん二文のふかしぎでもいゝう、みんなが持物の用心しろ、廊下があうるぞ、ぞ」…わひもんなうな無面目なやつらに、御話官はおだもしいが、夜な技裏だとおもツておるか、大屋さんの御絵目にて、紙くひあひ、物もらひ、木ひろひ一切入るべからず。損料貸日なしかし、此かへ断りなく貸借無用の表札は、井の印となるべてあるわ。此のすき宵が生盗人め、くやしくば相手になれ」…これここへ下されば出やすれるいから、マア堪忍してだまんなせへ」よ二人ならつけやつて置け
此の言葉を聞くより…二三人、…
ないこゝの下から這へば、乗坊主の人おどしに、たゞ過ぎたることをするな。生盗人だの盲だのと、高慢中に、…なまで四文の料遊び…ならべ立て、悪言のかずかずを責るぞ。買つてやられたものかはねへ、…前切小切りきつたりかつたり、元直のしれた木葉やらうめ。こいつ…の人喧嘩中、

こゝで安穏にやア、すまされねえわな。」ト何をうぬこト、とびかゝつて、すでに撲らうとなすれば、大ぜいわけ入、両方を引きわけて、傳吉はとなりざしきへ入れ、これらの座敷へも大ぜい来り、両人をなだめる。此の内に吉はおとなしき故、だまつて聞いてゐる。度胸もねえくせに、目ばつかりたゝきやアがるあ、何しはゐずりか腰抜か、萌葱の蚊帳でも吊やアがれ、何も後生と思召し、猪熊の縄をさまつて胴存中のくりからも、龍と剱との料簡すりやア、振り習への大纏で、野郎め、わるくからみやアがるな。下手に出半鐘を打ちやアがると、百日鬘の引導か、足澤山の厄拂ひぢやアねえが、ちよつくりつまんで、おつちへ、くだぞ。一ッ拍子を、とつはくるかさいごの助、百に四文の利も非も聞かねえ。何處へ出してもおさきの松さん、喧嘩が喧嘩屋庄兵衛なら、親分が中ッぱらの中左衛門だ。わいらア男を見損つたか、屁の幽霊め。」「へヱ、とはうもねえ。」皆々「コレサおめへさん方が、さうおつしやつちやア私共がついてゐて、すみませぬ。こゝはまア御料簡。」中大「いツ、さうだ、もういゝかげんにして寐なはるがいいわな。」甚「うつちやつておけえ。ておへッちが知つた事ぢやアねえ。コレ此の土地おやアな、佐治屋の吉さんや茶勘のお象さんなんぞが口利きたア、おいらアふだん心安くするから、雌もこゝの内へあたるのぢやアねえ。殊に今夜らハ、長親方も居るから、随分精癪をおつへして、犬子犬子で蟲をさすりやア、あゝえッたれた駄々をぬかすわ。コレエノイ、中の字のさめ引きをしつた小藏なら、目のおかを「じよれん」でさらつて、鼻へ三本の棒杭をうち、口の詰留めをして、耳のそこ

り、聞きつあかれ。」とんだ土左衛門じやアねえか、あんな野郎に[illegible]つけて、両の番口へつき出してやるがいい。」と言ひながら、ひやうたくれめ。」うぬも亦四文と出[illegible]此の只今の名[illegible]、[illegible]のころだ。へ、痛いのかい。」まア〳〵、[illegible]でも聞て置いたから、ようございます。」と、[illegible]とても、おまへさんがお手にはかかりませぬ。」まアもしえ、皆さん、そこへおよりで申しなせえ、[illegible]ました、ヘヽヽヽ。」[illegible]、おまへの御[illegible]、只今は大きに、ヘヽヽヽ、ヘヽヽ。こぞお[illegible]

[illegible]

けなんばん。」

第 三 齣

（[illegible]下手より二人さし向ひ）[illegible]出るは〳〵と思ふて[illegible]だ」

「[illegible]藤兵衛さんを内から[illegible]」[illegible]新川の[illegible]

た、さぞおかた附けのほせだらう。」ミ「ナァニ流石に一番番頭だから、さうしかたなくも行かれまいのさ。」
其「やつぱり来るか。」ミ「来るのさ。」其「ナニしきりしすがたおやァよろめまい。」ミ「あの人だつても、
其の位なしおくは有るわな。此の間も来た時、「とても帰参は叶ふめえから、算を見世でも出さうか。」
といつたッけ。何だとつ、内ぢやァ段々下の者が取り、くり上がつて出世するから嬉しがつて居るとさ。」
其「ムウ、ふつほど明けたと見えるな。その亡念はみんな下めへのかゝだへ移るぜエ、恐ろしい罪つくり
だ。一生涯や二両ぢやァねえ、何百両が取付かうも知れねえ。ヤレ恐ろしや〳〵。」ミ「夫れなことはかつ
て此の商賣が片時も勤まりやァしねえ。だれだから女郎の行末といふ物は、能うはいかねえものだ。
わたいらァお花荒神松か、のり賣にでもなるだらう。今ッから覺悟して居ませう。」其「かはいがつての
跡つぎにでもなるがいゝ。」ミ「ネ、ニヤかはいがつて程の働きがありやァいいわな、實さう思ふが悪
商賣だァ。一年には勘定したらいくらの金高だか、身につく詞も多きな事だが、夫れでやつぱんと
いぜッとくるしなア。是れだけ悪鍛だアな。おめへマァ聞きねえよ、わたいらが内あたりの女中衆は、
お定まりの給金といふ物が、一年でタッタ二分さ。」其「フム安い物だなう。」ミ「お給でも覺えがあらァ。」
ミ「ナァそこだわな。総花からかけて、お定まりの外の貰ひ物が、大抵大きな事ぢやァねえ。いつか
も、廊下で、おさはどこれの捨へを拾つたから、一寸見たが、正月の内ばかりもざつとみて五両くら

と有りやす。ハテよく／＼ひまで、もういひのすくねえ月だつても、月に宗介はありやせうか。御尤りかいとつもると、まうぞつと十五兩故には、なんでも無くありやす。だれにじめんじて見りやア、わたいらが寺につい（ては、縮れいさうだらう。勿論お客次第とはいふもんの、道へはござりやせん。」「それだがてんでによい／＼もんだなア。こゝらのなは、てしやア大屋のかぶよりはいゝわえ。」「中宿をこしれへてがつに出合つたり、（いつかとこ色男つことなり、此つ頃に旦ではやり詞なり）中宿にきものを借りられたり、がつに取られたり、其のうへに送遣ひがあらいときてるから、こゝでたえるのにあちやアござりやせんかえ」「料理番なんぞは工面がよからう。」「そでんぐの辛抱づくさ、御んだら藤さないといふものゝ、間地をかへたり、よそにおあへ蔵造りで、街へは作頃を置いて、遊びをさせながら、こつちへ通ふのがあるやす。それは皆だが、わたいらが内は、是れでも子供をばいつとかはいがる内です。惣菜をば旦那さんが自身に煮て、もうこ喰はせなはる。惣別の事にとんだいき渡つていいますから、こんながてんでんにはけわ道になり、やつぱり親の利口だけれど、あしくされても断わるだけは断りねえきやすならねえから、どの道いかが仕合だねえ。ソシテその惣菜がをかしいわな、今時分なら鳥ねぎさのきをれる事ばかりさ。いもにばかとか、またはえ根とかいふもんで、聞にござりあなどといふ役が這入つて、生つたやうなる家さ。」「まア此の近所はえんなさういふもんだらう。」「まア内によつて色

色が有りやすわな。」三「富氣闘の内ははで者だといふ事だの。」三「ハテナ、彼處はお逸さんがきれいで、はで好きだ。それだから、今内中の子供衆も琴や三味線をしらねえ者は恥のやうになつて居て、子供部屋はとんだにぎやかだ。」長「さういふ噺だ。王智屋の内は店者のよく來る内だの。」三「アイお店の衆と新川の衆は何處の内へもよく來るが、とりわけあすこはお店の客が、たんとごせえす。わたいらの内おやまをかしいよ、此の頃は内中が拳はやりだ。」長「拳とは本けんか。」三「アイサおこつさんと、おいよさんが、中でも一ばんつようごせえす。お鹿さんがまけ腹をたつて、ヲヤもう一けん行かうとせき込むのが作式で、をかしくつてなりやせん。子供部屋へかたまると、見附け次第に拳で、馴染のお客だと座敷でもかまひやしねえ。」長「おつな事がはやり出したナア。でえぶ奥市場もひねつて來た、安くはされねえ。しかしまた歌詠ではあるめえ。」三「歌詠はわたいらア。」長「ソレおめへが。そつくりと棚へ上げておけ。久しいもんだが今年から金をためる算段だ、ナニ手めへにも苦勞はかけねえ。この中しやれ本をよんで見たら、きつかり當つた事があるから、ぐつと仕法を替へる氣だ。」三「ナゼ、何と書いてあつたえ。」長「今の客は初會に惚れられた氣で、裏から女郎の物を引きたがる。今の浮世は女郎の方から取るのを、色男だと思つてゐるとあるから、おれが氣性で、いめえましくッてならねえ。これからあんまり度々は來ねえぞ。」三「其の氣で外へ行くがいい。」三「費でもくらへ。」

ふけすし一人の間もからすにつれて、ねぶさ[illegible]トン／＼／＼[illegible]に気をつけられ、ねこかされたる妓樓は、バタ
を立ち出づる、客をおくりの(けいこの音)[illegible]かけ出す(廊下の音)
バタ／＼。(ねむたい禿の)「おさらばよ。」(くぐりの音)(くゞり グワラ／＼。「おちかい内に。」ト、(おき番が)ふだのついたるざう
りをた[illegible]し[illegible]
ヨ[illegible]、[illegible]／＼／＼／＼。「お船が宜しうござります。」(船宿が)かゝ(船宿)が摩もろとも羽織を春中へ、[illegible]
ぐんを着て手拭を片手に[illegible]
アワ[illegible]、[illegible]ウ[illegible]」寝ぼけた[illegible]の唄。宵は待ち寐ね夜中に恨み侘び、しのゝめ告ぐる[illegible]の聲、言信
な連の背中へとんと打ち込んで、誰に思ふ、主様に。(口さみせん)ツルツ、ンウツン[illegible]白一齣宵泊之部尼
チ[illegible]ン[illegible]ン[illegible]ン[illegible]

第四齣　正月えびす講過ぎの世界

朝東の光景を眺むるに、ゆうべのがやくに引きかへて、ひつそりかんたる座しきのさびしさ、[illegible]
見通しの鳳凰におとづれて、[illegible]の音いそがしき面上。足跡はひまなき二階の廊下、客をかへし
て寝しきあれば、別れの跡の物思ひ、喜怒哀樂の一とおいりも、はやりの起すそばよりも、寝しは寐
を引っ包み、廊にかけたる其の所へ、あわたゞしくはしごを下りるは、吳服屋の手代と見えて、色白
くれびたひ、みすおだちのさんとめに、もえぎ裏のてんつるてん。黒ふとりの帯をしめて、あたの手ぬ
ぐひをとりながら、とろめんあるびろうどの羽おりを、ぬけさうに着て、[illegible]どうおやく／＼えらう早
い手廻しだね。」[illegible]「すや源四郎さん、今時分にどう思召して。」[illegible]イヤわしは[illegible]今晩ある参りを顧
うて、遊うに来たおや。[illegible]はゝ部出でおやおや、何所におやい。[illegible]補急おやく[illegible]いんまのまに戻

らんと、そらう開合がわるいこ ナントきびしいせがみ様ぢやあるまいこ」 直「ソシテおまへさん、陸をお出でなさいましたかえ。」 唐「陸ぢやノ＼。 ナンデモやつきもつきと走つてこましたこ」 来り そのうちに女房出て今寝をかしたとみえ、まだ顔もなさず青い顔ですわり 女直「源四郎さん何だえ、とんだ時分にこ」 唐「とんだかはれたか知らんが、トットきやむちやおやわいの。 ヤコトそしたらヤノ迎へ船をおこす様に、はやう云うてやつてこ」 直「ハイハイかしこまりました。 マア お座敷をかた付けようこ」 唐「ヤアコレノ＼なんのいの、えいわノ＼、だんないわい」など杯臺三ツ物てうし持つてくるこ 女「まだ何にもございませんよこ」 唐「何があるぞいこ よくノ＼のお店者てなお来やせんわいこ ハヽア かまぼこよ、こちらのあてが梅干ぢやな。 まづ朝茶の腹へやるわいの、オットきたりテこつよけいしやくのこ サアのまんか」 女直「わたしは朝のうちは酒だちでございます。」 唐「なむさん仕舞たこ サア牀々、わしが遅いと跡な泣がきこ うわるいぢやこ」 女直「そこ 藝者衆でもお呼びなせえしな、朝はえんぎを祝ふもんでござえす いつでもそゝくさしなはるよこ」 唐「ハ、ナえんぎぢやエ、ハッしらん事ぢやサアこ 金はをしませんから、なんぼでも呼ぶこつちや、私が戻ッてから呼ばんせこ ひまが惜しいわいの、入用はこちへ付けておくぢや。サアノ＼牀はどこぢやノ＼。」 直「ハイお牀がよろ、」 女直「オット合點ぢや、来なされノ＼。」 ト、さきに立つてゆく。 女直「なんだなう、いつでもあゝだよ。」 △これなよんの開の一ト切りあそび、なまなかはんかの銭なきよりも、はるかうへこす楽しみなるべし。それに替り新川藤兵衛、此の節親方の手前をかぶり、歸參もかなはぬ事なれども、いまだ何商賣とあてもな

く、身浅をへらし「アヽおらアまア寝忘れた、ナウ夕部は起き番か。」女「ハイいつそねむくッてなりませ
ん。起き番でいいといふ日は十日ばかりでございます。」鬢「ム、金比羅の朝参りか。そりやいいが、
湯といふ所はどうだか。ギャット迎へようか。」女「此の火鉢で尻焼といたしませう。」ト、こうしをとつて火ばさみ[illegible]日で
焚いて、鬢「扨人れの朝っ[illegible]ナア是れで暖くがいいにヤレ髪がでえなしだ。」女「ナニどうせ結び直しますか
ら。」ト、煙草をとつて鬢「持髪でねえ事だらう。」其の内へおとよこんで女「オヤおとよさん、おりかさんが参
りましたよ[illegible]」鬢「ほんにか、そんなら行かう。けふは何に結はうか、やつぱり島田にし
ようか。」[illegible]「おまへさんが丸まげの舌出しに結ひなすつたが、アレも人が結はねえだけびねつて好い
やうに見えますね。」[illegible]「あんまりは結はねえなア。」鬢「コウ今おらアこつちの風といふと、かたつはし
まげの一を抜へあけて、島田の中を低くして、一體にまげを太くするおやねえか。」[illegible]「さうさ、元結
頭なしに毛髻にするからね。」[illegible]「それでさ。」鬢「ム、そしてアノ丸まげの間に鹿子の様な物のあるのに、
あれやなんといふ。」[illegible]「なんだらうねへ。」女「お侍らなせえし、エヽそりやア輪出しさ。」[illegible]「あのや
ア滅多に結はれえのさ。」女「おとよさんにはいはぬりは似合ひませんよ。」[illegible]「それだがさういふわ
な[illegible]けたんだのお[illegible]、ノウさきさんが来たらしらせてくんな、此間たのんだものを、アノ人は
どうして[illegible]くれたか。」鬢「い[illegible]ものを、時は聞きえせんよ、私も黒忠さんに頼んだが、あの

ふんと、えゝいう開合(まあひ)がわるいこ ナニトきびしいせがみ様(やう)ぢやあるまいこ」亭「ソシテおまへさん、陸(おか)をお出でなさいましたかえ。」亭「陸(おか)ぢや〳〵。ナンデモやつきもつきと走(はし)つてきました。」（来り、そのうちに女房出てたいへん、まだ顔もなほらずまず青い顔ですわり）女「源四郎(げんしらう)さん何(なん)だえ、とんだ時分(じぶん)にこ」亭「とんだかはれたか知らんが、トヽトヽヤむちやぢやわいの。サコレそしたらヽノ迎(むか)へ船(ふね)をおこす様(やう)に、はやう云うてやつてこ」女「ハイハイかしこまいました。マア お座敷(ざしき)をかた付けなう。」亭「ヤアコレ〳〵、なんのいの、えいわ〳〵、だんないわい」（杯(さかづき)三ッ物てうしなど持つてくる）女「まだ何(なん)にもございませんよ。」亭「何(なに)があるぞい。よく〳〵のあほ者(もの)でなか来(き)やせんわいこ ハヽアかまほこよ、これらのあてが梅干(うめぼし)ぢやなこ まア朝茶(あさちや)の腹(はら)へやあるわいの、トツトきたのテもつよすいしやくのこ サアのまんか」女「わたしは朝(あさ)のうちは酒(さけ)だちでございます。」亭「なむさん仕損(しもう)たつ サア脉々(とく〳〵)、わしが遅(おそ)いと跡(あと)な浪(なみ)がきつうわるいぢやつ」女「そこ藝者衆(げいしやし)でもお呼(よ)びなさえしな、朝(あさ)はえんぎを祝(いは)ふもんでござえす いつでもそゝくさしなはるよこ」亭「ハ、けえんぎぢやエ、ハヽしらん事(こと)ぢやナアつ 金(かね)はをしませんから、なんぼでも呼(よ)ぶこつちや、私(わたし)が戻(もど)ッてから呼(よ)ばんせこ ひまが惜(を)しいわいの、入用(いりよう)はこちへ付(つ)けておくぢや。サアノ〳〵、脉(とこ)はどこぢや〳〵。」亭「ハヽお脉(とこ)がよへ、」亭「オヽット合點(がてん)ぢや、来(き)なされ〳〵。」（ト、さきに立つれてゆく。）女「なんたなう、いつでもあゝだよ。」

ムこれまよんの間の一トト切りあそび、なまなかはんかの錢なきよりも、はるからくこす楽しみなるべし。それとは替り、新川藤兵衛、此の銀親方の手前をかばり、歸参もかなはぬ事なれども、いまだ何商賣とあてもな

く、手盥をへらし こゝへやくそれは「ハヽおうせを宗忘れた、アノ夕部は起き番か。」女「ハアいつそねむくッてなりませ
ん。起き番でいいと言ふ日は十日ぶかでござりますよ。」男「ム、金比羅の朝参りか。そりやいいが、
酒といふ所に、どうだ明日ぁ ト迎へにようか。」女「此の火鉢で風焼といたしませう。」火ばちへ トいひてうしをとつて
敷いて帰らう。」男「寝入れの跡つ 藪を敷い」ア是れで帰るがいいレ髪がでえなしだ。」女「ナニどうぞ結び直しますか
らじ。ト、 男「持髪でなる事だらう。」女「オヤおとよさんか、おりかさんが参
りましたよ。一あけ 「ほんにか、それなら行かう。けふは何に結はうの、やつぱり島田にし
ようか。」「おまへさんが丸まげの高田しに結ひなすつたが、アレも人が結はねえにけひねつて好い
やうに見えます。」女「あんまり根結はねえなの。」男「コウ今やッてこうあの気といふと、かたつはし
たけの一を後へあげて、島田の髷を低くして、一盤にまげを太くするぢやねえか。」女「さうさ、元結
頭なしに毛髪にするからネ。それでさ。」男「ム、そしてアノ丸まげの間に唐子の様な形りあるのは、
あれやなんといふ。」女「なんだらうねえ。」女「お侍うなせえし、ヱ、それや、輪出しさ。」女「ありや
子達がに振袖にたまのさ。」女「おとよさんにはいはおりは似合ひませんよ。」「それだがさういふわ
なア、ありたんにおめへ、きうさまさんが来たらしらせてくんな、此間たのんだのを、アノ人は
さうしてくれたか。」それもへ時は聞きませんよ。私も黒坐さんに頼んだが、あの

たに出来る物だやァねえ。」「藤さんおめへけふは居なはるだらうの。」甲「どうしてもいゝ。」「生きるとも死ぬとも片をつけたもんしない。生殺しおやァ取付きやすい。」甲「取付き世帯に取付きも有りがてえ、マァ一杯ついで下っし。」ト、杯をうける。（女）硯ぶたのかまぼこへやき火ばしをちよいとあてて出す。甲「きつい慾ばりさ。」甲「しれた事よ、十六文がつまみ菜を買ふにも、十文と六文と二度に買へば量りが違ふ。むきみを皿へ買ふは損、水をしぼつて目籠で買へば、いゝ杓子も徳がつくと、倹約と勘略とを等分に加減しても、よりか戻つて尻へ抜ける。能く\/よく金鉢があたらねえ。おらあこんなことだが去年の極月、早帰りの朝だつけ、永代の橋を渡ると、十許りの野郎ッ子が、簡ッ籠を背負て草臥さうに休んで居る。簡を見たらばまだ白魚の簡が見えた。そこでチヨッチヨット過ぎかゝ。兄イその荷は一荷いくらだ」と聞いたら、「能く売つて二百が物だ」ト。俺も思はず無常を観じて、涙がほろりこぼれ。それから腰の銭を入れて、小三百もある銭を、遣らう。』といつたら、流石に取らねえ。「成程こりやァ尤もだ。そんなら俺が皆買はう」と、その荷を川へ放したら、惜しさうな顔をして、頤いて持つて行つたが、藝者に投げた壹分よりは、うれしがるのが大造だ。夫れを思へば設け悪いも金、遣ひ安いも金。世の中といふ物は人我我人で、なんたお分らねえもんだよ。」「そこやうさね。」「久しいもんだ、またお談義がはじまつたア。あんな事をいふ時はの、耳をふさいで居ねえ、おいらァはやく逃げて行かう。」「べらぼうめ。おひねえ後生

嚢だ。」上「わたいは嚢じみた事はきらひさ。ツシテおめへ、湯へ這入んなはんねえか。」圭「いやだきたねえ、わざ／＼穢す様なもんだ。」上「そんならよしなせえし。人は人と思つて、氣を付けるのに。」三「化物は化物と思つて這入らねえのよ。」女「アハヽヽ。」（作者曰）女の笑ひにアハヽとたつた三ツばかり笑ふもの多くあり。これよん所なくあいきやうに笑つて見せるはなし、上へた上ハ調子にて、跡も先もなくアハヽとわらふものなり。どなたも氣をつけて御らん可被下候。三「口はへらねえ。」嘉「口がふえちやア米がいるぜ。」三「すゑしやれだらうだ、其の氣で行つて來よう。」下「出てふく」圭「俺も行かうか。」女「何處へさ。」圭「王島町の湯へ。」女「向ふ河岸の湯かえ。」圭「あすこの作頭はばアさんだの。」上「ヘエ、よく御存じだねえ。」圭「時々入込みな事があるよ。」女「ナニそれでもじツから女湯だと申します。」上「どうだかツすこつちの事なら俺はとくはしい者はねえぜ。つかねえ事だが、子供部屋アどこの内だやア、どこだといふことに餘程錢を打遣つて、ツシテ氣をつけねえおやァしれねえ。」上「そのはずさ。私どもまさへあゝ／＼には。」圭「しらねえ筈よ、會代倉、富貴闇と、こゝの内と、三軒の子供部屋は、表二階よ。其の内にも本部屋、前部屋と、二ツにわかつて、雨方に板頭のあるのが二川屋一軒さ。土習中と、古部屋、此の二軒は、下に子供部屋がある。遊びつけねえ奴等は、新市場も古市場も、みんな呼び出しだと思つて居る。去年の秋から新市場も同じくふせ屋になつた。仝體またふせの方がいいわさ。そこで藝者も呼出へ呼ばれると思つて居るが、おほきな間違へだ。あツちはあツちで別にわか

つこ、古市の見番は指和屋に葉佐屋と二軒で、ソレ指和屋の板頭が松蔵か、葉佐屋の板頭が毛登太だだわ。夫れむらさつトうから出すと、とんだ珍説があるけれど、ひよつとにくまれ口になつちやア興がねへから、これな口もとを云つて居るがいいのさ。深く悪穴をならへると、難題へさはつて、見物が面白がらねへこつて、酒をのみながらいつぱいにきいた風をならべて立てゐるゆゑ、女もあいそつに手こずり、ハイさやうさ、さついもでごりますなどと間をあはせてあるところへ、同じく女来りて「ナニおいしてござんせん、お国さんが待つて居るよ。」客「ナニさうだらう。そシ行つて参りませう、おめへこゝに居ておけ申してくんな。」女「すッと承知。さしま藤さんおまはん居ひたれをなさるね、ふんしのわりい。」客「うさぞねへ、序に此のしめしを上り口へてくだつし。」と出すを、こうしやとして渡いはひに誰ござりけて貰はう。」客「羽織染かえ。」客「諸事女さ。」女「誰にいたしませう。」客「誰でもいい。」此の内もはや酉して肴も出来、そろこわするうちはおりけいしや梅吉来ル。いよ／＼座しきは大酒もりなり。きやうた「いとさん変へござんせ、桶屋ごとしよんまいか、ソトいれて底つく真似しよんまいかソリヤ。」「こんな中ぢやがけなるいか。」「いれて底つくまねしよんまいか、アツチヤまぬけ引。」大きに「すねへ。」客「上方のおきせんぶしをすつぽり受けとつたの。」客「あの歌のね。おきせんといふ事がどうも知れませんから、此の間上方のお客に聞きましたらネ、江戸で云ふ馴染や色事の事だとさ、アハをかしいネエ。アハ、、、ハ、、、。」女「夫れで解つたネ、私がおきせんは程あるぢやないが。」客「それで俺が馴染か、こいつア解せねえわい。サア

やるべい。」ト、梅吉へ杯をなげる。此の内始終杯事お定まりに畧す。かゝる所へあひかた〳〵おとよ身仕舞をして、今湯上りのうす化粧、鼠色縮緬とおぼしきをてらし、それとも面うすく〳〵れなかにして、潤みの初日の出、これがために光かりをうばはれ、眉は見通しよりのぞむ安房上總のごとく〳〵、眼すゞやかにして品海上にすめるに似たり。口もとのかはいらしさ、につこりとわらひながら白き歯をすこしあらはしたるは、蛤町の貝をふくみたるかと思ふ。させいかつかうすらりとして、すこし中肉のおしたてとく〳〵、よこ顔じまんにすましたる目元は、米三条三をごたまぜのはりあつて、つむりは前打のあるべつかふ物のあみだざし。衣装付きらきらすりめんの無垢、下着は白ちりめんよ三ツがさねて仕立ておろしの儘で、しつけの絲をとらずにおとなしく着こなし、貝どんすの帯くしまだに結び、小杉の紙を紙入れに巻きて帯へはさみ、白ちりめんの長いほど、白ちりのふきだしにて、かけまくもりの紐をみせるなどは、いたつてきらひとみえて、た分さすがみと「摩利支天河岸だとさ。」ト、すてぜりふにて　藝者「イヤおしな。すこしこゞんでまんなかでつまをとり、さしき〳〵きたる

とまさん御だなゝ。」　三「アイサ梅吉さん親ッはおたちはしつたばかり。」　梅「ハイおるすへ今朝つばらかい。オヤおとまさん一寸こつちらを向いて、アヽいゝねエ、一りかつかうがいゝ。そうよく出来ましたこ」

三「おれがきざんだつ。」ト、いひながら藤兵衛がわきへ。これみなぞ、これはヘン、これだれといふ趣で、下あつた本らす、なるほど書林にもこれは藤とうむき、にいつこゝなしみのさきるいと、みつがいまなにて見るほど、持たつく〳〵思はれ、こいつを十二匁にしたらどうだらう、三分にしておかうと、思ひ内におれば、色まおにあふはうよと藤兵衛が目つうさ思はずと、トコリ「此の肉のきわさいろ〳〵おれなた、餘りなかごと御たいくつ、殊に此の本の丁數も見りとせねばあらましこゝに畧す。　うた「おしき筆との候んぞ。」　どぢ「ヤンヤ〳〵。」　藤「奇妙〳〵。」

梅「すればこ」「しやきりと致しませうか、アヽ、高い藝者だこ」ト、三味せんにこを　しまひつを出し　「コリヤ家來になさいまか、ソレお先箱〳〵。アハヽヽヽヽ、ハイありがたう、藤さんまた。」ト、さわぎながらうかゝ出に行く　の出しものをかたづけて、暉燭を引きまはすと二人　藤「コレてめへ今朝ちらりと聞いたらば、鳥居町の喜之介が、夕部から來て居るさし向ひの中で

おやァねへか。てめへもしら〳〵しいもんだ、よせ夕部から俺に隠した。定めて隠す理窟があるだらうの、

第一今まで酔のこんにやくので、突き出さねえがまつ怪しい。こりやア大概聞えて居る。獨りつくづく考へるに、おれも今だやア内をばかぶつて、一トしきりの藤兵衛おやアなし、うつかりあいつか突き出して、あぶもはちもとらずでは、うぬが殻のつまりと思ひ、あれ程までにも絲道のついたのを、たゞ合の手でぶじくない、おれが前をば一ト筋らしく、心は二筋三筋の絲で、二挺三絃ながながと、ズン/\だら/\引きずつて、あぢに三絃を引きかけるな。」三「あぢもこはだもいりやせん。つき出すことは矢より早いが、引きしぼつたは譯がありやす。なる程かくして居た事は、わたいが悪うごせませう。ナゼ又そんなら隠すといへば、アノ喜之さんも此の春から、親御の前が不首尾になつて、大屋とやらへ當分預けられて居なせえやす。サアそこでごぜえやすぜ、わたいも此の内だやア、やせても板頭もして居やすけ。人にも跡にとられるだけ、こゝでわたいがせつねえ場だわな。ナゼといつて見なせえし、淨るり本でもよくいふ事だが、人は落目が大事とやらで、喜之さんも心細くなつて居て便り心で來る所を、いかに情なし商賣で、嘘が元手の勤めはしても、わたやア性が江戸ッ子だから、理にはづれた事は出來やせん。今にも親の腹立ちがゆりて、喜之さんが内へ歸つたといふ事を聞いたらば、そこでこそ綺麗に突き出して、すつぱりとお目にかける氣さ。此の節つき出してみなせえし、内外の者は云ふに及ばず、あたり近所でわたいが事をほつても陸には云ひやすめえ。ナニダあれでも

たて引きか、横ぞつぽうか知らねえが、おつな捌きな女だといはれたら、お客の減るのはいゝにはねえが、おめへも共につぶれやせう。ソレもわからねえ人ならば、とつくに此の事は咄すのだが、御如在もねえおめへだから、一人ですまして置いたのさ。是れでわるくはどうともしやせう、未練でながすとつもられちやア、癇積が納まらねえ。ふ甲斐ねえ娼妓だと思はれるのもくやしんばうだ。神や佛が口をきくなら、云ひ開きをして貰へてえ。わたいがお客は祟りがして、ナゼこんなにしくじるだらう、くやしくつて腹が立ッつ」ト、うつむいてじゆばんの袖をくやしさうにかみながら、きせるをとつて屏風をぶちやぶる。三「コレ氣の違ッた羅宇屋の様に振廻すな、やにがかゝらア。其のせりふ聞きもあきた、二番せんじはごつとしろ。此の屏風の繪を手本にして薄彩色に書くがいい。つべこべ利口に云ひ廻して、人をば壁の落書おやァねえが、一心命と彫つた名も、手前の腕の人別帳へ、居抜きを買ッたしやうがには、無理八百も何のそれ、店賃と見てすゑしてやるわ。モウ一も二も論はねえ。所詮未練な根性骨で、突出す事は氣もねえ事。緣を切ろとも切られねえとも、勝手次第だ。ふんばりあま、鬼め、お化め、蛇遣ひめ、兩國へでも出やァがれ。」ト、片手をおばとつきとばす。おとまもあきれて物をもいはず、藤兵衛が顔をまもりつめて居たりしが、屏風の外にのこしある銚子の酒を茶わんへつぎ、つゞけて五杯をぐつとほし、顔をしかめてむねをたゝきながら、三「あれ程譯をはなしても、聞分がなくはようござえす、どうする物だな、ハテおめへ夫式な事ァ仕兼ねねえわたいでもございしねえ。勿論譯の分つた人ほどせく事も又強いのさ。そんな事もこんな事も、こ

つおの體を覺悟すりやア、面倒なことも六かしいことも、こはい事も、恐ろしい事もございやせん。もウなんにも云ひなはんな、とつのつまりを見せやせう。」ト、手をたゝく。アイ引と女來る。女「お呼びなはいましたかえ。」三「変だヨ。」女「ハイ。」三「コウお八重どんか。お前どうぞの、此の牀をの、下の八疊へ敷いてくんねえ。」女「ハイ八疊の鄰にネ。」三「喜之さんだよ、いいよ。ソシテノ杉戸の方へとつてくんな。」女「ハイ藤さん、でえぶにが蟲でお出でなはるネ。」藤「ムフ。」ト、わらひ「一ツぷくのまつし。」○藤兵衛は始終だまつてすまぬ顔である。おとまは酒に醉うて眞赤になつて、ひぢりめんのきせるつゝではちまきをする。そのうちに下の座しきへ牀をとりかへ、みな／＼下へおりる（見通の方には）まはしかたお八重、ほうばいの女に何かおんみつにさゝやくをきけば、八重「それからどうした。」女「熊さんに貸した著物だから返してくんなせえとかみさんに云ッたらの、かみさんは知らねえといつたわな。」八重「そんなけちな事があるもんかな、なんでもかした著物だから、歸すことが出來ずば、これを持つて行くと斷ッて、鍋釜でも引きはづして來ねえ。大方藥調か外本へ置いて有るだらう。」女「どうもさうは出來ねえわな。」八重「ナンノけちな根性だぜ、夫れだからいいやうに扱はれらア。ハテさういひねえな、中宿をして貰ふからには、つけ屆けも云ひ分なしして置きやすッサ。」折ふし手がなる「アイ引。」「思入れ哮り立つてやるがいい。」ト、いひつゝ雨方へわかれる。これは按ずるに、此の女さる處に色男ありて、中宿をこしらへたるが、中宿のていしゆに無據著物をまげられたいきさつとみえたり。（下さしきには）（喜之助）衣裝付略さきだつてより内の首尾あしく、勘當までにはなけれども、當時縁者に預りの身となり、うつきをはらすけふの居なかし、（おとま）むりのみの五六杯に大きに醉つてひおりめん

のきせるをはちまきにして、牀の外へすわつてゐる。（喜之介 先刻より、何かぎつくりのいきまつあると見え、腕まくりをしてきせるをひねくり廻して、りくつをならべてゐる。）「ハテかはつた夕部の調子と今朝の挨拶、すつきり何だか氣がしれねえ。コウ何が氣に入らねえで、そんなにぞん氣にあしくするのだ。今朝となつては一遍も顏出しはせず、内のやつらもあんまりだ。花をもらつた時ばかりちやほやするが人間でもあるめえ。勘當されても痩我慢で、仕舞扎もさげさせる、女に揃ひもしてやつたが、今朝等の事もよく聞けよ。朝直しに迴しが有つて據なくぬけられずハ、お仕著通りの言傳に、さみしくとも待つて見ろとか、藝者でも呼んでろとか、云つてよこしていいはずだわ。身仕舞をする片手間で、顏出し位はしてもよからう。おれがひがみか知らねえが、まはしの女まで面ッつきが氣にくはねえ。けふは表に出ましたの、奥の内へ行きやしたのと、船宿から呼び出させて、茶屋をおごれ、芝居が見てえと、手前の面を楯にして、してえ三昧ねだり次第、全盛文呼び寄せるが、見くびつた仕方だけれど、いふなら兄弟の俺だから、いつもあいらを船で歸して、其の上に丸めた紙も握らせて置く、其の心いきも汲み分けずに、けふ此の頃の不調子は、あんまりしねえ慾張りあらだ。コレしや何だか野暮だが、肝心の料簡が大をする、首でもくゝられえ用心しろ。額口のほつれは、灸點屋の看板か、天窓繪を筆きにしろ。」藥の客に痴氣もねえはず、顏つうに積む氣はおかたじけ、面ァ見るのもおれや、……きのい……勝手にうしやァがれ。」（先刻よりも口説の調ひ、いまゝいまゝ、座敷にもゐなさたまらず出して、つゝばしになつてゐたが、をたた

たいて居たりしが、たゞもう夫れで仕舞かえ。私がしびれは京へ上つて、あくびは大和廻りをして居やす。狐を持つて來る坊さんか、十色菓子などならべたつて、むしやうに獨りで息せいをば、もんではつて十六文、あんまり安く出なはるね。とても又わたいらがやうな、内端なお無垢な氣のきかねえ、うんのろに馴染んだのが、そつちの御不肖、買ひ冠りさ。おめへのお心に宜しく申しておくんなせえし。江戸ッ子の聽とやらも、おほかた潰れて居なはるだらう。癇癪さんへもお序に、口は隨分まめだから、案じなさんなと云つてくんねえ、お勝が茶を煮て待つてゐだらう。コウ誰ぞ水でも一杯くんねえ、色男の御酒を頂いたら、身にしみ／＼とうれしく醉つたわ。」ト、聞くより喜之介くわつとせき立ち、むねんのおもひに、物をもいはず、おとまを目がけて立ち掛り、つかみつかんとする樣子を、抱て止める船宿親し女「モシ／＼喜之さん御尤もでございます。これには樣子もござりませう、マア／＼しづかに。コレおとまさん、どうしたもんでござえすな。」喜「ムヽヽニヤこりやア喜之さんのが尤もだ、今や始めてのお客おやアなし、假初にも足かけ三年だ。お客に對してふしだらがあつちやア、先づ差當つて船頭が、旦那はおろか親方までいひ譯のいの字もねえ。モウこれからはたとひ喜之さんが料簡しても、おらアいやだ合點しねえ。コレ板頭か棒頭か、板前か釜あへかはしらねえが、こ喜「コレサ忠どん、おめへまでがなんでくれちやア。」トいふと、忠「何のことだえ、目おかしの箸か向潮の元船おやアあんめえし。ならぶもすごまじいわえ。お客に船どうはならぶはずだわ、合點しねえ。山

「モウ忠どん、マアこれだれぞ来てくんねへナ。」ト、女ふたり喜之介と忠を引きとめる内へ、おし出すこなると、こちらへ台所より二三人出て来り、しやく／＼はる忠をこちらへ部屋へ入れ行きし跡には女郎も大ぜい「喜之さん、必ず短気はお出しなさんすな。おめへさん方は不断お稽中がよくって、どうしたもんでござりやす。」「お鹿さんも、お八重どんも、皆が打遣って置きねへナ。」「コレお上さん、マア黙んなせへしよ。」「ヱヽ、やかましい、おめへッちも分らねへ、なんぼ誰に賣物でも、勝手にぶたれて済むものかな。可愛い男にぶたれたのは、憎い男にさすられたより嬉しいとは、むかし噺だ。そっくりと、こんもり高に置いてくんな。何も絡んだ事ぢやアなし、氣にいらずば見立替へさ、なじみもへちまも入りやせん。物云ひ節が悪くって、氣にさはったらどうするもんだ。わたしやア名代のわがまゝ者、酒のわるいは正札付きさ。突き出したくって當りやアしねえ。突き出されたくって騒いだのだ。御免も下面も入らねえわな。もし旦那さんが捻ぢたら、口返答もしやすめへ。ふて寝の用事も付けやすめえ、船頭衆まできいた風だ、辰巳へ上ったお客だって、辰巳上りもいけへかましい。喜之さん縁切榎だよ、さう思っておくんなせえ。」喜之「コレサ、まあ。」「ヱヽよしねへな、又たお歸る未練はなへ。」「喜之さん、おめへみたいに是れほど云はれて、たまって居てすみやすか、アハヽヽヽヽ、ハヽヽヽヽ、おこう、思ひきられねえ所か、むりに思ひ切ってくんなせえし。わたしやア七十五日わるく云はれると思へば、きつい事はねえ、おさらばよ。」ト、立って向ふへ行かうとす

なれ、頭分、そんななどと寄り合つて口がいをときながら、座しきにとぶてなくと言五ム、その狂言は呑込ん之介は給參物をもいはず、たばこをのみながら、それをさすつてかんにんしてゐる。だ、モウ論はねえ何にもいはずさ。おれも男をすつぱりとつぶしたから、やつとこそつとこ料簡して居る。利も非もしらねえ人でなしに、物を云ふもけがらはしいから、我にはいはねえ、コウおめへ達も一座に居た懸合ひだから、野暮な咄も聞いてくんな。今更過ぎた事を云ふぢやァねえが、べらぼうにされたおまけに、べらぼうの一代記を讀んで聞かせよう。惣別客の心はひとつで、十人が十人百人が百人、皆うぬが氣ぢやァいゝ男だ。夫れでなければ面白くもねえといふもんの、又女郎とても其の通り、まづ己惚が先に立つ。其の己惚の功じた上が、迷つたり迷はせたり、生死の場にもなる、突出すもあり出されるもあるやうになる。元はといへば、皆外おやァねえ不孝の罰だ。常々立派に口も聞いたおれが、今おめへ達の見るめへで、赤恥をかくも不孝の罰。是れといふも平生から、親の意見も上の空にして、慈悲があまればあまる程、内に居るのがうるさく成り、鳥獸にも劣つた奴にだまされるとは露しらず、のろくなつたが一生の誤り、世はさま〴〵といひながら、あいつが腕の卵塔場へ逆朱に彫つたおれが名を、火葬にされたがまだ仕合さ。施主がかはつて土葬なら、無緣になつた其の上に、又穴掘にさらされて、先祖代々おれ一生、名のしたびるまで、汚れを殘すに、まだしもこれが日附重寶さ。思へばこれも信心する、八幡さまと支天さま、ついでは表の耶摩口稻荷のお蔭だらう。

何もかも親の罰だとあきらめれば恥かしくも悪くもねえ。ヤ、世の中はおつなもんだ。忠に船を拵へろといつてくんな。そゝなんにもいはねえのさ。」女「イエそれぢやア済みません何でもある。」喜「ハテはじまらねえこつたわナ、へこんで帰りやアあの子もよかろう。折角今までの馴染甲斐に、あの子のお名に疵は付けねえ。」ト、懐中を出し、はした銭を、片手できせる筒へ入れ、とり直して懐へ入れ、帯をしめ直さず、形銭を内所へ預けたまゝ、心の内でしたくをしてゐる。上「はい、しばらくだまつてゐな。」すや「ほんに名の火あぶりで思ひ出した。起請に添へた髪の毛をこつちへ返しておくんなせえ、ひよつとうなされちやア蟲の毒だ。」喜「首にかけたる守袋より二重三重に包みたる起請と切髪をとり出し、引札同然の此の起請を守袋へ大事にして肌身はなさず持つて居たが、今ぢやア却つて恥かしい。最う一返お役に立てろ。」ト、なげ出してわたす。あとはけふとつて中を改め、[illegible]帯にはさんだる紙入れより、喜之助が方よりとりかはしたるきしやうを出し、[illegible]三「サアおめへの起請も返すから、紙屑籠の足しにでもしなせえ。」喜「何。」ト、かつたくつて[illegible]引きさき捨てんとする所を ねこさま上「はなせ、[illegible]ア、コレ夫れは用。」三「ム、なんだと。」三「用に側にもおぜこしねえ、切れたおめへにきつい お世話だが、引裂いても罪のない人はなし。紙の内の慰みに、ソレ一返読んで改めて、跡は勝手にしなせえまし。」ト、心ありけのあとまいことば、口をしくは思へども、起請なれば喜之助一納め、[illegible]上「袖に[illegible]喜之さんマアおまいと私どものいふことも。」喜「ハテ物をもいはず、廊下へ出でんとする 上「[illegible]をきてしてこい、離しねえ。」[illegible]「ちつとは聞いておくんなはいまし、私どもおかしりながら、こんな事にさせ申しちやア、どこへもどうもいひ訳が立ちませんに。」上「おめへマア旦那さんにおよ[illegible]と。」

な「アイ。」ト、壹人はかけ出してゆく。三「となりの杉戸の方にむかひて、わたいらァ外の子供衆と一ツ釜にみなすつちやァ、チツト當りが違へやす、お嬉しからう藤兵衛さん。」ト、聞くより喜之介ふりかへり、一「ナニ藤兵衛、ム、藤兵衛とは新川の」船頭「ハテ四の五のも入りやせん、すみ濟ましも胸にある。おめへも喜之さん私も忠だ、ハテマア何でもお出でなせへやし。」大ぜい「コレ忠どん、おめへがまた。」船「エ、やかましい、さるぼうめら。ばかのむきみの惣菜で、芋でもくらつて屁でも放れ。」ト、廊下をばた／＼かけ出し、はだしになつて表へ出で、山口稲荷をよこにみて、がんぎをとんで／＼川岸へおり、もやひのつなを、片手でひかへ、船頭「モシおあぶなう。」喜「たゞだんまりにて船へうつる。」ト、跡よりあわてゝ家内の大勢、娘分を先とし、どや／＼かけ／＼はだしでかけ出で、「モシエ喜之さん、さうなすつちやア。コウ忠どんや、なぜお前お留め申してくれねえかな。」船頭「爰始まつてつひぞ聞かねえ。」ト、ひとりでもやひの綱を解キ、一ツ本ンさしてのり出す。あとには大ぜい、川岸ばたを橋手前まであるきながら、申しわけやらいひわけやら、大ぜいの聲「ベチヤクチヤ／＼／＼／＼／＼。ガヤ／＼／＼／＼／＼／＼。ベチヤクチヤベチヤクチヤ／＼／＼。ハイさやうなら／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼。」ト、いふこゑばかり。（作者曰）此のおなじく／＼／＼／＼／＼といふ文字を横から見れば浪のかたちになる、是れ則ち古市場の道具立でムムり升。今船は新市場の中程へいたる。懐中より起請を出して上の包を引きほどけば、みす紙を五六まいかさねて、紅筆にてかき付けたる文字あり、仔細ぞあらんとおし開けば、跡や先なる女の文章、

用事のみしめしたれ。扨とふけふしの事一々御はら立ちの御心のほど、かねがねかくごの前に御

座候。此のわけ合ひはどう／＼も申しわけもなき事ながら、少々のあやあることと御すゐにも
御さつし下されかし。くどうは申さず候まゝ、今一度御腹だちを御かんにん被成候て、何とぞ
何とぞ此の所書の許へ一寸御はこばせ願ひあげまゐらせ候。とてもこなたへは御入らせもあるまじく、また
忠どの事もきつくはら立ちのやうすにさつしまゐらせ候。これとても無理ならぬ候。たゞ何事も申譯の
かず／＼御おもじのうへにて、めんぼくもなく御恥かしく存じながらも、此のわけ一通りを申し
上げたく候へば、何とぞ／＼書き添への所まで御入らせかならず／＼御まち下され候やうねがひ
上げまゐらせ候。其のふしにてかれこれともに筋の立ち候事に御座候。氣強きなと思召しのほどいく
へにも御はづかしく、たゞ／＼おもふにまかせぬ身にし候へば、しみ／＼じれつたく、心のうち
にてふさぎをりまゐらせ候。しんにけがらはしき畜生とも思召して、一たび御たち歸りのうへならば、
委しく／＼わが身むねの中御あかし申し上げ度、それのみ念じまゐらせ候。わからぬ奴と御つもらせも
あらんなれど、かやうにまでも申し上げ候へば、ぜひ／＼一たびは御歸らせ、神かけ斷りまゐらせ候。
筆すゐながら此のわけを忠どのへも鳥居町の八五郎さま、きやうもじ様へもよしなに御申しわけ
下されかし。申し上げたき御事も此の中にて候へばあら／＼しめしまゐらせ候。めでたくかしこ。
第一ハ・・・このやこれ今の様子とは、雲泥の相違。ムさはさりながら彼奴が心底、よもや斯うとは

おもへども、夫れといはれぬあの場の一埒。只何事もおとなしく、つき出されたのが後篇の種。とはいへ、まだ〳〵どの面で、又三編目に、ア、イヤ〳〵〳〵互の心の眞中へ、ぴんとおろした錠前も、明けていはれぬ胸と胸、ナニ〳〵處は七軒堀。」トひとり手をくみ、思あんのてい、ごふはらまぎれの　船頭思「此の意趣ばらしは今夜を過さず、理みちで行かずば腕づくで。」折ふし新市場の二階　こわいろ「ハテなんにもいふな、人では無えわ。テヽテテ、、、、、引こ」（わかれ三重）

是より第五齣

辰巳七軒堀おとま親里の世界

來春三編にいだし奉入御覽候。

附言　抑おとまが性質行狀善なるか、かつ惡なる乎、いまだ知るべからず。前編長五郎に偕老の約を契つて二客を廢し、後編藤兵衛に同穴の情を通じて箇の壯夫を倍乗す。畢竟する處正に是れ「きれてみれんでトツチリ頓」に立ちかへるの心なるべし。吁薄情浮虚一三昧。

船頭深話　大尾

前編ノ二書盛ニ行ハル于世ニ其ノ蕭洒亦殆ト盡セリ焉雖モ然リ觀ル者尚未ダ以テ爲サ足レリト

故ニ搜索シ其ノ餘春ヲ以テ獻ズ河東遊戲之士ニ云々。

船頭部屋序

船頭部屋とは何ぞや。風の夜明のふる市場、石にたつ矢の虎よりも、念力通す猪の牙の舟の、爰に臥猪の牀なれば、假に部屋とも呼ぶならし。されば家鴨は枕筥から飛んで出で、柏餅は船打場なや夢六らく、河岸番よく艪をあつかへども漕ぐ事を知らず。起番よく夜船をこげども後朝の草履を違へず客遊びの子の送り舟は傘をさして一本綱をわたるより速く、ぶんながしの迎船は干潮にながるゝ木瓜よりも遅し。チヨツト作者の俥船はするけるにあらねども、其の後編のおそなはり、やうやくつゞりて三篇目、おふねができましたようと云爾。

山下亭上に於て醉中毫を採つて

猪牙散人述

見番凡例

○船頭部屋と號するは、舟頭の寐る處にて、亦子どもの客を送つて出た後で、色よりかはいい抱火鉢の眞な話をするなれば、船頭深話のはやり子に、後をつけ後篇の南一片三編とす。

○前篇の二書に古市場の穴を穿ち、風俗言語の趣は盡したれど、おとまが眞實を主とし、聊か流行をくにふ、前後巻考して其の花實を知り給ふべし。

○おとまが客吉之助、長五郎、藤兵衛、三人の達引、此の本にそのいきさつをわけて、全部三冊にまとめあてしまふこと尤も客のもあやひは、娘分、船頭、并に作者の掛りあひなり。まずきつい苦勞性なり。

以上

船頭深話後編　二篇目

辰巳
船頭部屋　三篇目

鳥居町舟宿の套

七軒堀親里の套

鶴个岡山本の套

船頭部屋

猪牙散人著

發端

昔鎌倉の傍に手越の里といへる花街あり、戀を賈ふ肆として、その名も古き市場の繁昌、今復毫に云ひもつきず。そも巽の風土たるや、明の珠市に彷彿たれば、市場とは稱びなせるか。爰も都の辰巳とて、名物は鞘茶の梅干に、累代閣子の角とれて、酢いも甘いもかみわけた、彼の喜之助が息子株は、唐の曼川、晉の謝安が風流に倣ひ、男がよくて金もつて、呉部の張魁、頼兼公、高雄の茶屋に憩ひて、比日の眼を暁かこしし。店物の藤兵衛は、頗る瓜州の蕭伯梁に似て、豪風見通しを賑し、長五郎が強みは金革を衽し、比翼簁をしいて死すとも厭はず。實にはまればふかき深川に、うきかはたけの白人はあまたあれど、白門樓が女侠を學び、おとまが能く二個の嫖客をまはす事、宛も筥まはしの見ゆるの如く、意と素見はつめたけれど、あつたかい大ふく餅、お客にぶつかけたればんそばイそば イヤと云々。

鳥居町舟宿の段

神や佛がうそつくならば、ほれた證據をどうかこかいな、その惚れやつた起證をば、互に衣裏へかけ袋、喜之介おとまが戀中は、あまい艪杭のやうなれど、火繩をつけて枕箱とす、娯しみ又その中にあるべし。

こゝにおとまがいろきやく喜之介は、船頭深話のきりに見えたるごとく、おとまにつき出され、くやしくは思へども、これをきすつて朝がへり、鳥居町舟宿八五郎がさんばしよりあがり、かし座のひあはひからあしばやにかつこみ、いきなりにこたつへもぐりこむ。此の舟宿のにようぼは、辰巳で傾けいをしてゐたあけくなれば、じよさいのないふうぞくにて、そうどうとのへつつひ、からかねの茶がま、しんちうやくわんをこたいきうに、ちつぷかつぷといはせながら　おうた「すやおかへんなさいまし。」　ていしゆの八五郎「おはやうございやした、きつとおするけだらうと思ひやした。」　ト、なむめうほふれんげきやう、めうほふれんげきやう。」　ト、葛西之父村から出る寄付大の大きなかけものにむかひ、どてらにうづらがはのしごきをしめ、やうじをまけにさし、いけぞんざいななりで、めうほふれんげきやうをへしといつてゐる。喜之介はこたつやぐらにひたひをおしつけ、おとまとわかれたものおもひ、とはしらずして　うた「喜之さんしつかりおつかれと見えますネヱ。」　喜之介「ちつと考へる事があつて、かうやつてるのさ。ひよつと二河屋の女がこめいもんでもねへ、きたら居ねへやうにしてくれな。」　ト、中じきりのしやうじを立てきる。船頭忠は河岸あげをしまひ、あさめしをくつてる、障子ごしに、　喜之介「忠こう、おとまが今朝のあんべいしきはどうだらう。」　忠「イヱたいへんネ。」　喜之介「かんげへて見るに、おとまがくらひよつて、いつたばかりでもなし、なにぶんすまぬ心いうちにもしばしだ。」　うた「もめでもありましたのかへ。」　喜之介「イヤ一向話にならず、大ふ印、ヱヽ忠こう。」　忠「ヘイ、イヤ思ひれふんぞつてやらうと思ひやした。」　うた「こんたあつき申しても姐

何したのだ。」ト、二番目が出ねへぢやア分らねへ。ト喜之さんに[illegible]「さうよ、いまいましい、[illegible]
忠こうさ。」ト「おじやせいもなくつて、おめへさんなにより腰をおたちなさりやした。[illegible]も
どうしたのだらう。[illegible]いけふすぐしいおまへ、こんどあふのが命がけだ。いつぞや河屋の河岸
をかへようか、その忠こうさ。」ト、しやう「なんと長棹一本ばかり、引といふ目にあつたおやま[illegible]」
[illegible]にべ、引」ト、いひながら[illegible]一句も出ず。折しも[illegible]る三河屋の女あるじ
[illegible]、「おしかどん[illegible]引。」[illegible]忠どんたんとおまへさん[illegible]直しに茶漬でもやつてある
おえし。」ト、しやれながら、しるをすふと、又しやつくり、せん[illegible]おしか「すヤアいいい。」と笑ひながら「おかみ
さん此間は[illegible]おしかどん、よく出かけたの揚場かへ。」ト「[illegible]西河岸まで[illegible]
ふ、ちよつと[illegible]申しました。その喜之さんはおかひなはいましたか。」[illegible]「河岸から直に帰りなす
たよ、[illegible]。」[illegible]「喜之さんのこつておまり申します、つひぞねへ今朝いつそ腹をたつてお帰んなは
いました。もおれ藤兵衛さんといふむづかしいお客のおちやひで、朝直しとなつて、おとまりさんも
帯びて[illegible]はいましたかへ。[illegible]おかひもございましたのさ。」どうぞお出でなはるやうにさ
[illegible]申しますさ。」[illegible]喜之さんのだいつ子も久しい[illegible]だよ、お出でなはつたなら
う申さうかへ。」[illegible]どうぞお頼み申します。」ト忠どんつれ申してきてくんなよ。」[illegible]「おかすかへ

いさ」うた「オヤ忠どんの鼻の下におまんま粒がくつついてるよ、モをかしいよ、ヘヽヽ、ホヽヽヽ。ハヽさやうなら、おかみさん。」ト、いひすて、出でゆきたるあとにてしやうじをあけうた「喜之さん、おききなはいましたかえ。」喜之介「ヂッファアッア、引聞いてゐて氣がくさつた。いつそのくされ酒でものまう、忠こう魚太へいつてなんぞのめるものをもつてきさつし。いめいましい。」忠「御酒でもあがらずばと、ふるいせりふをいふでもネヘ、いつてめゐりやせう。」ト、投[illegible]町の魚太へゆく。うた「喜之さん、おまはんマアどうかしてお出でなはるやうだよ。」喜之介「なぜ〳〵。」うた「お顔つきがいつものやうでございませんからサ。」喜之介「そのわけといふは、夕ア新川の藤兵衛とおちやつて、いきはりづくの朝直しだから、ソレむづかしからうわさ。此の節藤兵衛も店をかぶつてるひがみから、菱垣のてんまを見るやうに、とかくぶつつかりたがる。おとまはせわになつた客の事なり、麁末にもならず、おんばが榮代をわたるやうに、氣をながく遊ばせやすなどと、おれをばちやかしておき、うつてかはつたあいそづかしサ。充満坪の煤はきするやうに、あくたもくたをまけ出して、起請にそへた髪の毛をもけへせといふから、こいつ藤兵衛がせくなとも見たが、イヤ〳〵おれがうぬぼれはこゝだ。悟れば起請も反古一枚、髪の毛そへて紙屑籠へうつちやるよりは、とやつてしまひ、色氣をすてれば誠のお客だ、耶摩口稲荷もせうらんあれ、此の初午の仕舞にも見通しをひつくるけへし、にぎやかにあそぶがすぎで、見えにも千兩一分貳朱、三

分五厘ひけはとらぬと、一番成田屋をいふ氣になつたが、イヤノヽ此の節不印の身で、くやしんばうとおもはれてはと、なんにもいはず人ではないわいと、五大力の源五兵衛きどりで、平氣でかへつてきたのサ。」うた「そりやァ大變でござりましたネイ、さういふ事なら二河やの女におあひなはればよかつた」貴之介「あつては内のおたりもあるやう、癪でもいつてはわるいからさ。」うた「おとまさんもあやまつてよこすほどで、お文をよこしなさりさうなものだに。」貴之介「その文がチツト解りかねる、きれてしまつて舟へ乗り出し、とりかへした起請を川へながさうとおもつたら、上包においつが手でこれ見たに、ト、くす紙の六枚に紅筆でかいた文を出す。うた「なにかおもしろさうなお文だ、ドレお見せなさいまし。」貴之介「イヤそれからの御しうじだ。」うた「アレサお見せなはいまし。」貴之介「ナニ見すともの事サ、文句はしれた大安賣り、多少によらず御用向とかなんとか書いてありさ。」ト、おやかしながら、火はちへくべると、ぼつともえたつ。か、きんをしまひかゝつて 貴之介「ドロノヽノヽノヽ、おとまさんが高尾で出ようといふ所だ。アハヽヽヽヽ。」うた「ヤレをしい事をなすつた。」貴之介「ナァニけがらはしい。」ト、おもひきつた顔つき。此の文の文句は船頭深話にあればこゝに略す。うた「おとまはんの意いきがどうもわからねえよ、女に持たしてよこしさうなお文が、きれてしまつた、おまはんの手にわたるといひ、燒きすてておしまひなどは、どうもあやしいネイ。」貴之介「あやしくもねえ、おもくろくもねえ文さ。チツトかゝんだ事があつてつき出したが、七軒堀まで來てくれろ、筋道をたてる事があ

ると、書いてあつたのサ。」うた「それでは大きに譯がありますさあ。七軒堀はおとまさんの親元、七軒堀がかんじんの文句でございますわ。」喜之介「さては左うかといふ、ふるてや八郎兵衛ぢやアあるめいし。」忠「オヤ書置ぢやアあるまいし。」喜之介「無事息才ぶてんの書置サ、八五郎さまとうもじ様へもよしなに御申しわけ下されかしとか書いてあつたつけ。」うた「それではアノ子がわたくしらにも、頼つみなはるといふもの。なんにしろ七軒堀へお出でなはいませざあ、わかりますまい。おもしろくなつてまゐりましたトイ。」ト、いふ所へ、船頭忠魚太のをかもちをもつてくる、おうたはどうこ火ばち、しんちうのおかんをつけ、なべ鳥をかけ、下しほちりれんげなどみごとにならべて、うた「お一ツあがつて御思案どころサ。」喜之介「猿丸太夫奥山にといふ身で、トかんげへて見てもいい智慧も出ねえ、忠こう一ツのんでわけて下つし。」忠「ナア二四の五も入りやせん、あやまつてよこしたから。のつこんでいきなり見通しへまつすぐ、イヤ三河やの廊下はまがつてをりやしたつけ、ヘ、、、、。」うた「それぢやア おとまはんの顏を、ふみつけにお出でなはるやうでわりいから、先づ七軒堀へおもひさしサ。」喜之介「うんのろにゆかれもしめえ、うつちやつてしまはうか。」うた「ハテかはいさうに。おとまさんもないしようを通すにやア、何か深いおはなしえひがありませう、おまはんも又、足かけ三年のおなじ穴ぢやアございませんか、短氣にうつちやつてしまふは、惜しいぢやアございませんか。」喜之介「ナア二袂にいれた葬禮の強飯を、おつことしたともおもはねえのさ。」八五郎「なるほどうつちや

りやすいものだが、お待ちなせい、今朝のおこりは新川の藤兵衛（此の藤兵衛は辰巳婦言よりのなじみにて、おとよが一客なり）さんとやらだらう。しかし酒店の番頭衆で、大ふうをきめてゐ、お店を出ちやァ天たうぼしの河童棚から落ちたはうろく、なぜはうろくなら、ほた餅でも焼くばかりで、せつこんでも下は出やせん。よしんば年季をぬき、見世でも出さうが、アノ子の氣でそろばんぱち／＼、まじめになつてどうして守つてゐやせう。鳶長がはじめかいの色きやくで、建引とか、いさみとか、はだえひとか、氣ぐれるとか、いふ所でございやせうが、まかりちがつたら、地めんをかせいですごすとか、もしもなけい年季のうちどう風がかはつて、おふりを喰ふめいもんでもなしと、小股にきり出してゐるかもしれやせん。照降町おやァございやせんが、顔をふんだりさしやつたり、下駄傘の商ばいらく、でもふりなしにしておくか、どうらくものさ。チヨツト湯へいつてゐるめやす。」ト、いひながら（やはた屋の湯へ出てゆく。此のていしめいり、こくなさうなれど、心にとまりもめにこ、奥にはむこゝろきしはかうぁれば、わざとはなせしなり。）与「すツツトお替りの目か、お銚子様には先づ／＼これへはどうでおりますゞ」早奈「おきやァおれ、あんまり地口が悪いから。」ト、南一花をする。○○「しるにたつてには飲めませんさけ、おつとうきやせう。」ト、さすがざしきをしてゐたそれしやのは、社にかけてある三味線をとり　チヤン　めりやす「おもふ事かなはねばこそ、うき世とはよゝあきらめた、むりな事を、りチヤン。」○○「ありがてい／＼。」○○「おつとおうたひなはいましよ。」ト、はなさぬやつがらず、○○「神や佛がうそつくならば、ほれたしようこはどうかこかいなさ。」

ト、うたひながらさかづきをとる。うた チヤチヤン ト三味線をかたへにおい、てしやくをしながら「古風なやうでも起請はよつほど意いきのいい文句さネイ。」ト、いひつゝ又三味線をとりて「おりないひわけするすゑの、ばからしいほどいとしうてならぬ〇ホンニ此の唄の通りおとまはん、おまはんへ起請のいひ譯がしたからうと思つて、いつそかはいさうでありますよ。」喜之介「ナアニあのべらぼうめが、」うた「むごい事チおつしやるよ。だまされると思つて、今から七軒堀へいつてごらうじやし、起請の譯がわかりませう。ハテ一旦は藤兵衛さんの顔を立てずにもおかれず、心にもねえあいそつかしを申しやしたが、此の上はといふお苫はんの意いきが、おもしろいとこがやアありませんか。」喜之介「いはれを聞けばありがてえが、突き出されたとこへゆくと云ふもうんのゐらしい。」うた「ハテないしよを通した文があれば、おまはんのひけにはならず、譯を聞いたうへ濟みすましはお胸に有ります。」喜之介「じよせいのねえおぶへの云ふこつたから、行つても見ようが他所行きはなるめい。」うた「ハテおまはんにも似合はねえ、藤兵衛さんに用事をあびせて、寺參りとかなんとか、さんだんが有りませうわサ。」喜之介「どうせひまなからだなり、あばれ丹前で乘り出さうか、忠こう鷹橋まで舟をこしらへさつせい。」忠「また百足屋としやれやせうか。」ト、ろうすべりをかつぎ出す。喜之介はおびしめなほしはおりをきる。うた「オヤお襟がかへりません」喜之介「オツトきついせきこみやうサ。」うた「ちつと性をつけてあげまうさう。」ト、どうせなかを一ツくらはせて、はおりのえりをなほす。（劇場のしやぎりの音）ドロン／＼ドコ／＼／＼

ドコ〱ヒヤイトロ〱〱〱。

七軒堀親里の段

女乞食共大勢「おやんなさいやしな、おやんなさいやし、御繁昌のお家さま、お嫁子様の御初産でエござりやすわな、お祝ひでィござりやす。こんな時でなくちやァ、お貰ひにやァまゐりやせん。とらせてやつてくださりやしな、おくんなさいやし〱〱〱〱〱。」ト、門口にしやべつてゐると、見世のものはきき耳つぶしてゐるゆゑ、三味線なら、一本はりあげ、こうしをゐるは甚だいきでをいだ出し、「大ぜいおやァござりやせん、此の人數へくだされて、たつた千兩か二千兩、一萬兩ともゝ入りますまい。けつこうなお藏づくり、鼠穴でもありさうだ。大御新造様、御隱居様おそろひなすつて御はんじやう。お心よしの胸氣もの、御嫁子さまがおいとしい。お質屋様かしらないが、流しておしまひなすつたら、七夜の祝儀も出さねえで、ろくなこつちやァござりやせん。初めてのお孫さまでござりやす、疱瘡をおしまひなさるまでやァまゐりやせん。若旦那様アおほふうに、女郎買ひばつかりなさりやすから、若御新造様ア御心らうはおさだまり、店さらしの番頭様、お開ひもいにはお情ぶかし。お若いしゆも抜けがけに、遊びにお出でなさる事もしつてをりやす。一時ほどしやべらして、まじめなつらでけつかるが、お氣の毒だからもらひやすめえ、いま〱しいふけイきな。ベチヤクチヤクテヤベチヤガヤ〱〱〱〱〱〱〱〱〱。

見世のものはもてあましてゐる所に、小ざらしきりの札がとんでゐるを見つけ、出して見せるゆゑ、みなあきれつてチヤホヤと立ちさる。あとは大わらひとなる。（喜之介）は折しもこゝにさかゝりて、ガヤ／＼いふをみゝにとまり、〇につくい口をききをるが、又よく聞けば尤もだ、こゝの息子もおれがやうに、女郎買が好きゆゑ、おいらが耳にも入り、人非人にさへさげすまれるやうになつては、世間の人の思はくはどうだらう。勘當されたおれが身もおなじ事、親の意見もうはの空、こんなにあそびあるいては、番頭はじめ氣をわるくし、みせの者もうはきになるやうでは、あいらが云つた通り、身上の磨滅しただゞ、おれが心一つから、女房子を泣かせるも、不孝の罰、非人にも劣つたか。ト、心づきはつきながら、おもひきられぬ悪縁にて、おとまが内にたづねあたる。見世はがらくたものをならべた、見たふし屋にて、おふくろはぼろやをすると見え、おやおはふるくさをきたつてゐる。喜之介はふたおやに近づきになり、いろ／＼はなしあり。喜之「おとまが文に、こゝまでたづねてくれろといふには、譯もあらうしと、お近付ながらめゐりやした。」おやぢ「御しんせつな旦那だ。」おふくろ「あけすけにわたいがおはなし申シやせう、おとまが病氣でひつこんでゐる時、見舞にめゐりましたら、泣き事ばつかり申しました　板頭になつて人めへはいいやうなものの、部屋のつきあひは張るし、苦しくつてならねいから、いつそ死んでしまひたいとて、かはいさうに泣きましたよ。」ト、なみだぐみ「とりとめたお客はなし、お名聞といふはお前さんと、藤兵衛さんと、長さんといふ三人許りだと申しました。藤兵衛さんに年季を抜いて、かこはれる所でございやしたが、ついお店をしくじつてから、おめへさんをやかましくせきなさるが、新子のときからせわになつた義理もあれ

ば、どういふはりえびにか、おめへさんへたいそうしかたすあいものでもねえと、氣をもみきつてをりますナ。」ト長はむねにぎつくりあたりしが、起請もほかにしたことはあしかくし、いい氣なかまにた「なるほど藤兵衛はわつちより前の名題だから、義理と下帶ははづされねえといふ場もありやせうサ。」よね「お目に懸つてお噺し申していはそこでございます。譯のなかでおめへさんも、此の春から、お内のめへがおわるいさうなり、その所へもちこんで、切れるのつき出すのといふ事はもつていねえ。勤めをするほど、義理といもじは外されんといひました。喜之さんが内へはひりなすつたら、そこでこそ、きれいにきれるともいはれしやせう。よね「藤兵衛さんの方はつつておきやすが、長さんとは女房やくそくもして、藤兵衛さんに聞かれ、ほりものは消しは消したが、情をたつてあひやすから、三人おち合ひなすつた時、いきはりづくで、けんくわにでもなつては、板頭もしてゐながら、お客の見わけもしらねえかと、帳場の前へもすまねえ、部屋のさわぎになるがくやしいと、ソノ氣だからやきもきしてをりまさア。その中でも、もしやのすゑにも、たのしみにおもふはおめへさん、尋ねてお出でなさる事もあらうから、お近付になつてお けといひました。それにはてめへの口にはいひにくい事もあり、商賣人のやうにもねえ、やつぺしまだ娘子どもでござりますから、、、、」喜「わつちも三年ごしのなじみなれば、料簡なくてもはこびやせん。」ト、あとはいはでこの噺にまぎらし、勘當の身なればいまだ皆もいはざるなる長「モシ旦那、おめへはアノ見世にある古葛籠を買

ひにござつたといふものだ。」おふくろ「とつさんおめへひつこんでゐな、モシ壺でございますから、ひやうげた事ばつかり申します。」おやぢ「旦那、何か下直にたとへるやうだが、ハテ年明きめへの古葛籠でも、ひいちやうには、れんじやくといふ親御のえんがきれちやァ、とんだやくなしになるものさ。」ト、ふるかねの中にある五とくをとり出し「モシ此の五徳は一本足がかけてをりやすが、たとへといはゞ藤兵衛さんと長さんの、二本の足をひかして、おめへお一人でも、たちもしやせうが、まるつぶしにもなりやすめい。三ツ鐵輪でうつくしく、おとまが顔も立つやうに、旦那おたのみ申しやす。」おふくろ「おとまはひとり娘でござりますが、此のおやぢがだうらくで、他人の金にさせるよりはと、うち賣つてしまひましたが、今おやァかはゆうござります。」おやぢ「なんだ娘を賣つた。べらぼうめ、親をつらうとつて買人があるものか、モシ二そく三もんのがらくた道具屋だから、しろうと衆は見たふしやといひなさいやすが、人のしんしやうを見たふすではございやせん。見たふされるやうに、もちくづした物だから、先づへつつひの尻がくさつて、ながしのはうへゐざり出し、腰張まではひつぺがしてあるから、紙屑籠は腹アくだし、はつかけ庖丁、足のきかねえ組板、でくのばうの手桶、目くらのわさびおろしや、鼻ッかけの阿彌陀さま、へちやァねえかたあものを買ひこむやうなもの。先祖代々のつたはりものだとある事ゆゑ、いい物かと思へば、くすぼりきつたくり位牌、〆ていくらがものもなけれど、代物にし

てふんで見るは、商賣冥利、おとまがやうながらくたでも、おめへさん方に掘り出されりやア、お道具にもなりやせうが。」ト、はひふきかつち「まアのけたらよけべいかどこへいつた。」喜之介「成程おめへのいふ通り、見たふされると思ふがわるいが。商賣屋といふに心がつけば、かびかぶりもあるめえが、ほしいとおもつた道具なら、直をつけて見る気だが、手附をうつた藤兵衛が、まるくいけばいいが。」

［illegible］藤兵衛さんとこのおかつきになりやしたら、まるくをさまることならば、五とくのやうにならりやせうね。［illegible］長がとこのおどうだらうか」喜之介「三長たあおれが事か、どなたゞたれだに［illegible］喜之介に、ト［illegible］「三長とよびなすつたァおめへかえ。」河屋）節下っか便所で見申しにおかほだ、喜之さんといふはおめへだネ。」ト、とぼけ［illegible］すと［illegible］「さやうならキツトきせるを下において聞いてくんなせいし。キツトおたのみさござりやす、おとまがことさ。三年このかた名跡こんで、友達や子分にもうめへく思はれる程だから、せつぱ女房にしねへおやす、組合へも立ちやせんから、おめへさんのみえしくもねい事なら、きれいにおとまをわつちにおくんなせいし。」喜三二「一時でもあずかつたかたしなら、おとなしく名代をこなお返しになりとしやせうわ。」喜三「見通しでもらひかけやァしめいし、革羽織の紐を見るやうに、まあついけた挨拶をしなさらずと、いやならいやでようござりやすわ。吾妻ッ子のやうにもねえ。わ

つらちやうがゝへをしてゐるやすから、なんかんおにぶをいふでもごぜいせんが、おめへの出やうがおもしろくねえ。鷹橋へ引つかけた車力ぢやァねえが、横つたふしにひつかけるのだ。金比羅さまが羽團扇つかひをするやうに、高慢はよしにしや、癪だよ。石尊さまの大太刀ですつぱりはらつた貌だらうが、三河屋の帳場ぢやァ、糞のごとくゐつてゐらァ。野郎はちつと下卑てるが、おめへが藝者を一組よびやァ、こつちやァ二組三組もみこみに口をかけ、座敷をする女どもや、かしば箱廻シいきわたりよくしておきやァ、大纏のばれんよりやァ、ふりまはすも手がるいよ。極樂の東門の建てめへ、龍宮の火の見やぐらの足代までかけたのと、見えをならべる、さんしたな野郎たァちがふによ。しんなはなしあひをするのだ。モウこれからァおとまがからだには、箱入りのびんつる尊者ではねいが、しまつておき、手もつけさせる事ちやァねえ。腕づくでもなく、みゝづくでもなく、縁づくだ。いさくさなしに二親ならべ、のし水引で貰ふのだ。とつさんおふくろ、マァさう思つてくんねいし。」おやぢおふくろは顔をそむけてだまつてるゆゑ、喜之介はがてんゆかず。さては長とおとまもぐるになつて、おむな新手をかきまはすな、めつたな事はいはれぬとかんがへてゐる　長五郎「此の臺所唐人め、たばこばかりくらつて挨拶もしねえ、口がきけざあ松茸か赤貝でも出しやァがれ。いい子のふりはよしにしや、どんたくれめ。いめいましいわエイ。」ト、たばこぼんをとつて落間へはふり出す。けんくわしかけと見てとつて、　喜之介「高があそびのうりもののかひもの、斷りなしに御勝手さ。」ト、きせるをしまつてそこそこにはづしかゝる。　長五郎「喜之さんちつとおまちなせい

しつ、お届けものがありやす」ト、柔らかに声かけられ、たちどまつて何だと見れは、おとまが七満にそへたる文ゆゑおしひらいて見るに

またくちよつとしめしたく。御まへさま御かへらせのあとへ、長さま御出でにて、とくしんづくにてうつくしくきれ候まゝ、くはしきわけは、長さまより御聞き下されかし。けさほど藤兵衛さまにせかれてつき出し申し候やうなることにて、さぞかし御はらだちもあらんなれど、おんまへさまの男をつぶして、男をたてさせ申す致しかた、御目にかけたく、藤兵衛さまを山までつれ出しまゐり居り候まゝ、長さま御事を少しも御うたがひなく、山本まで早々御出でまちおりまゐらせ度候。かしこ。

長吉「よみさげはなし、にこ日となり、此の文の文句では長さんおめへはこ」ト長吉はりと思ひきりやしたのさ。斯う許りではわかりやすめい。わつちら金毘羅さまへ大願があつて、一生好きの女郎買をたちやした。しかしこれまではりやつて、藤兵衛に引つこぬかれちや、あいつにけされたお苫が腕の長といふ名がすたりやす。此の意趣がへしに藤兵衛がつらをふんで、おとまがつき出すはなしまでもして来て、おめへのお出でをまちうけて居りやした。けんのみでぶつつかつたは、おめへのお気をすこし引いて見たのさ。情のあんなさるを見こんで、おとまがおせわをおたのんまうしてい。おりよバわいを申しやしたは御めんなさいやし／＼」ト、おたの手ばかひを取つてひきつこをすゝめる長吉「長さんなんにも申しやせん。誠に新手さ。」

ト、つむりをさげる。おふくろ「ヤレ／＼どうかとあんじやしたにサア／＼お煮花。」おやぢ「とぼけきつた御つさんも娘がかはいさ。」ト、そばにある五とくをひつくりかへし「此のとほりまるくおたのみ申します。」長五郎「ときにモシ藤兵衛をつれ出して、おとまが胸ははなやかに、つき出す所は山の耶摩もと。座敷をへだつて見物しやせうぢやァねえか。」喜之介「前篇につき出された、その後篇の意趣ばらし。」長五郎「藤兵衛に見せつける。諸事きやう言の出もとで。」喜之介「のみのすくねとしやれやせうか。」長五郎「サアめるりやせう。」（靈願の鐘）ボオン。

鶴ケ岡耶摩元の套

皆「ヤイ、ハマリヤンでえりウでえ引／＼。」いたこ「なりたやさんのおかいちやうなら、はやりやんすでござりやす。サアササ、サ、／＼、ちよいときなせ。ヤレこれコレハイどつこい。」藤兵衛「ひつくりけへるほどさわげ／＼。」男藝者四人「ソラさわげとのおゆるしだ。女藝者どもの尻をまくらせて、惣をどりとやらかさう。」おとま「血みちがあがらあよしねえな。」梅吉「ソラさわぐなとサ。」宗吉「だまつてしやれるがいい。」松蔵「女藝者どもまァさわがねえとよ、どうしよう。」時大夫「藤さんはさわげといはつしやる。おとまさんはさわぐなとか、こいつァむづかしいわえ。」三木蔵「さうさ彦兵衛、いい智慧はねえか。」彦兵衛「チヨツトうちへいつて、かゝあに聞いてこようか。」三河やのお八重「いさくさなしに酒

としねえな。」船頭熊「ヤットいいちゑが出たの。」皆々「アハヽヽヽ。」松蔵「尻をまくらねえかはり、梅吉と兼吉にくすべりの飲みつぶりのみをさせよう。」三木蔵「梅吉でも兼吉でもより取りみゝかきが四文四文。」八重「おてうしがないよチヨイノ〜。」女「およびなはいましたかえ。」ト、いそがしさうに来る。てうしを出しながら八重「そして大どんぶりへ水ウといふ所だ。」女「ハイノ〜只今あげます。」トゆく。時太夫「あげますの介六はどうだ。」三「ハヽヽぶなまでいふの。」なまなかまゐえ物思ふ。イヤ此奴もなまにえだ。」芳「なまにえといふもなアよく酒のむぢやアねえか。」松「何とおいはつしやる。しかし地口のにえッこじれたか、藝者の身にとつちやア、寝てもねつかれえせん。」藤兵衛をりしもとなりざしきへ、きくかはやへ、藤兵衛がきを耳、喜之介がこゑにて、「泉水築山を見たところは見通しよりのあやすぜ。」三木蔵がこゑにて、「おざしきはせめいが、二人一座で廻しをとつたとおもやアいいぢやアねえかネイ。」おときはふたりがこゑを聞きつけてつつと立つを、藤兵衛「どこへゆくのだ。」おとき「おてうしにさ。」ト、絵かは立つて行く、（藤兵衛）は喜之介へあてをつけたとものありさうに、おしはいなしやれるなかに、「みんなはなんと思ふかしらねえが、色男気どりで遊ぶ奴は、おらおきいきらひだ、云はうなら蝋といふものだ。」三「なぜ蝋でござりますよ。」藤兵衛「ハテ色さへなまつちろけりやアいいかと思つて、手も足もねえくせに、ひかりたがらすこ花を出す所も目鼻があかねえ、おめんらくな所がなんと蝋だらう。」三「いかさまネ、そんなお客は鼻花をふつてとはいきせてやりやせう。」藤兵衛「そのまた蝋をのみたがる蛙のやうな客がある奴

よい。」彦「ハテネ。」藤兵衛長左郎にあてつけていふ「蟇といふやつぁ、中はらで飛び出したがるが、錢がないからしやあしやあとじくじく、グウのねも出ねえ奴さ、やにでもなめさせて遣りてい、蛙のやうな客もあるだやあねえか。」彦「けいるのやうなお客には、仕合とまだ出た事はござりません。」藤兵衛「生ごろしの蛇といふ子もあるものよ。爲になる客にはかまはず、ぬらりくらりと穴ばひりをしたがるかいるは、蛇にのまれてゐるたアしらず、蛇もわれしらず蛞蝓にとけてしまふ、えらいべらぼうハ、おれもよつぽど御くらつしやうだ。」八重「おとまはんマアなんだえ、誰がへびをつかひますえ。」金「赤がいるなら付焼きにしてかんどこでもふつきらせやせう。」梅「其のなかでもなめくぢりは色男だネイ、わつちやあまるのみにしてえよ。」彦「イヤむまくいふぜ。」皆々「フハ、オホ、、、アハ、、、ハ、、、、。」ト、をかしくもねえ事を大わらひにするところへ、おとまはつきそでにつまをもち、すこしこびみすがたにてきたり、ぶにんさうに藤兵衛がそばへすわる。藤兵衛「なけいてうつだ、よくとけなんだの。」おとま「さはり用事になつたからさ。」藤兵衛「ひさしいものよ、蟲がかぶるなら一ツぺいのみや。」おとま「わつちやアけふから酒だちさ。」藤兵衛「のみやアがれ。」ト、さかづきをなげ付けると、おとまがむらさきちりめんのひざへざつぷりかゝる。おとま「すやきついしやれさ。」藤兵衛「でいぶ平氣孫左衛門だの、その筈よ、と惚けてゐるざアなるめえ。ゆうべおれにいだめこゐされ、ぜひなく喜印をつき出して、おれにむまく見せかける、その慾ばつたつらァ見ろ。もとでもねえ智恵をふるツて、わいらが相場をくるはせても、買ひこむやうな藤兵衛が

やアねえ。髷の一が出すぎりやア廻シがあるわえ、チョットよび出しやア、どの客だとさとつてるながら、大目に見るのだ。長印をも切れるといつたが、突き出す事は憚からうが、はたらきのねえ根性情で、坂頭らすさまじいわえトサ。ぶう〳〵をいふのではねえ、利害をいつてきかせるのだ。垢のへひつた腐縁、ちよきめにたりめにたやまめトサ。こむづかしくひねるでもねえ、喜印も長印もいりやせん、藤兵衛さんおせわをお願ひ申しますと、ほんとにいやアすましてやるわさ。」[illegible] おとま「ついでくんネイ。」八重「すヤそれでかア。」おとま「いいわな、ぐつと一つぎねえ。」[illegible]「藤兵衛さんあげやせう。」喜兵衛「何だあやまるのか。」おとま「あやまらねえ。盃サ、ちやんとあたらしかからうネ。ハテ一旦おめへの顔をたつて、喜之さんをつき出したらいいおやアねいかえ。それにしおこぜいをいけたはるは、店衆のあくかぬけねえのだ。おじよさいもねえと申していが、おめへもよつぽどなけい氣だ。わたいがやうな情りねえ、いつこくものにだだんたおめへに[illegible]。おめへのおはふうにあぶらげを喰ふ子もこぜいせうか、わたやアあきれけへつておうらいだよ。こうちからちがりやす。盃はさしあて、ドレ座敷をかへてのみなほさう。」トいな[illegible] 藤兵衛「藤兵衛はきれてやる、[illegible]「喜之

きさん、長さん、二河やで落ち合ひましても、おぢなものでものをも申しませなんだが、あらためてお近づきになります。モシ喜之さん、ゆうべおとまが氣をひきにきやしたが、よもやおめへを突き出しはしめえと思ひやしたのに、のつきつた事をしやした。しくじつてる藤兵衛を、たつた所はかたじけねいが、譯のある喜之さんを、藤兵衛にかへて突き出すには、此の仕返シがあらうかと、わるするりやうから、聞いてお出でなすつたらう。今おとまをきれた譯は、私も親方へ歸參がかなひました。夫れとしつて、りつはに藤兵衛を突き出シたは、さすがにおとま、喜之さんの起請、長さんのほりものまで、むね氣をして、けさせやしたは、店もののやほと御免なさいやし。手代敵の藤兵衛が、實にかへるも勸善懲惡、貸本で見やしたが、しやれ本のやうなホンノ遊びでござります。」喜之「さすが御支配人ほどあつて、きれはなれのいいおさばきやく、大きに承知いたしやした。」おとま「出入りいさくさなしにすんだ上は、けしてしまつたおとまが腕の、二人命の一點は。」ト、手ぬぐひにてふきけし「ひとり命はのつぴきならぬ、そのうでつくにあるこつた。」ト、おとまが手をとつて喜之介がひざへつきたふす。喜之介「どうらくもモウ是れ切り、なにかのお禮は二河やで、お八重さきへいつて指和屋の板を買ひきつておきやし」男げいしや皆々「ヤンヤヤンヤ、一ッしめませうシャンノ\。」藤兵「わざつと。」ト、しうぎを置く。岩にあそぶやよろづ代の、龜はみなかみきよむなる、鶴の羽がさねて千秋の、枝をならさぬみよなれや、ばんぜいらくとこ舞ひをさむ

ツ、シツンチヤン。

船頭部屋 大尾

船頭[illegible]後[illegible]部屋

やまあらし自序

山嵐と題號するは、東秀が古詠を襲ふにあらず、一日街上に、豪猪といふ畫掲戯を見るに、畫工巽齋が付書し、首に粉、一點をつなぐ、是れこの冊子に相似たり。よどまさバ、文面に古文の看板を出し、不信錬修末序番となりて、猫貝を鳴らし侍るてふたぐひの和語を並ばして、俗眼を惑はすといへど、實はかの種にして、人を化かす術もなく、人を嚙む害も無し。讀んで益なく、讀まねで事かけずと、大東二十八二が徒のかたえ笑話に護られんを恐れ、看板に豪猪なしを、錐の毛をもて筆をゆひ、筵のつの屋にしるす。

第一

川竹の流れに縁ある藪醫者は、唐と日本のごもく言葉、枕も向けぬ北へ行くと吉原をさみするは、浪人者の武者片氣、喃せばとんだ間違のほつたん。

淺草時代　茶店段

第二ナシ

第三

神と佛の色事に女房がやきもちは、御七五三繩ゆうてつまらぬ八功德池の水かケ論、おとせばわれる茶わんばち屋の說話。

裏店世話　別房段

淨瑠璃

いつきん〳〵の酒取物語
つとめするみは常々愁憂

とめて
とまる

春待屋室咲
花兄屋梅太郎

菜葉蝶

第一番目
二たて目

やまあらし

傳柳亭種彦

一 淺草の段

安養世界の人を救ひ、天竺の觀正様、觀世音菩薩の御誓願空しからず、東都の東北、つゝ淺草の精舍は、參る人あれば もどる人あり、僧門あり武家あり。萬葉家の歌人は、とわたる雷門を遊び、諸佛は地獄變相と、玉光が奈落を思ひ出し、神道の衆講聞く、おやおの徒は、龍雷の口傳としおこごいない ひ出す。されば中に風の神が袋もつさまを見て、一ト人者の背中をけがす身振なりと笑ふには、佛工もあづからざる事なるべし。老女が池の願ほどきに、竹筒てふものへ甘酒をいれて沈むるは、閑寂をとわらふかと思はれ、鳩の豆うる女が、楊枝うりたるが、棹をもて烏追ふは、高鳳が書をよむに似たり。おいくが評判娘にのこり、因果地藏の緣起は、七八お駒に喩說す。粟島の前にゐてうち語ねば、熊谷稻荷にあつらへを責るこぼやはなし。小町も奴婢につかふべき娘、喜撰の茶を汲み、ひかる君も從者とすべき息子業平橋をいきる。藤屋巴屋を始め、軒をならべ棟をまじふる料理茶屋、はしごのとえ

とんやむ時無く、かまもとの湯氣さつと立つて霧ふかきに似、孔明が矢も爰にとり得べく、そうどうこの火わら〳〵ともえて、良秀が不動尊ゑがく下書ともなりなん。河豚の鐵砲は冬ばかりとし、どぢやうはをどりこは橘町の群をいづ。松江の鱸を潮にしたて、首陽山の蕨蛭子爰にゐまさば、はまやきをくらひ、琴高も爰に來らば、ほそびきをあがはふべし。夕岸の鰺は、兼好が聞かば食がらん。生田川のおをくび、函谷關のかしはめんどり、三千世界をごたまぜにし、無いものとては鯨の丸やき白魚のあら煮はかりたらんか。かかる繁榮の鬼にかなぼう、頃は三月空うら〳〵として、千里に雲の立居なく、二十軒の茶屋が牀几に腰打ちかけ、あれこれとむだ云うて居る男は、もと本所邊の息子株にて、名を梅太郎と云ひ、うちは諸國狀さしに狀たつぷりと、けこみに金網をはり、店のこどもの顏は、おほえぬのがあるべらるなれど、このあひだはちとまうせんのきみにて、春の日の長きをこゝにくらすをりから、同じ茶やに這入るは、おさだまりの町內、俳名を春夕といひ、もつともたいこもち半ぶん、駕にのる時は唐本をいれ、うちに一抱子がかた本をよむたち。不佞足下賞にといふ口癖もつともしけし。梅太郎が顏を見るや「梅さんこれは古いやつだが、しやば以來だね。」と腰をかくれば、梅太郎も笑ひかけ「いつ見ても元氣はいいね。春夕さん、おめへにはちつとあひたかつた。」「アイ、わつちもさ。」ト、かく云ふは一體この梅太郎、さるうちの室咲といふ妓と、龜鶴のちぎり淺からず。

此の風聞を聞かんとの事なるへし。春夕は新渡の園で、細口からあふぎながら「其の事さ。これへだ公の嫁の所へ参りやしたが、ぜひ足下を引導して、格子まで来てくれろと云ふ事さ。そして玉章をことづかりやした。何か急用だそうだ」と、ふくれかへッたはな紙ぶくろを探して見て「ホイ〳〵、こいつお邸屋の棧上へおいて来た。惜君子足下、不佞の草庵へ駕をまげなせえ。」「そんならさうしやせう」と、胸算ごのみの優談を長つゝへ入れるところへ、とろ〳〵とお屋敷と見え、二三人通りかゝる。春夕はのびをして「ヲヤ〳〵、いづれの深窓にやこ。實に絶世の佳人だ。だれに眼帶をのゐるす。こいつは氣がわりい。こへつかふのつくゐ物に、小まちがけの萬年もとひはあどけねえ。髷は澤村曙山か。なる程こゝいらだらう。森之が墨蹟、小倉山莊の色紙よりありがたいの。イヤ又あとから年増が来るぜ。たうねすみにあやかりくは少しくなゐ邊ぎて、火鉢から出さうだ。もの思ひすがたで、百度あるいのさしなかには、不佞が詠みおりやす。先のかれが良人か、きやつに悪々してゐやす。そこでそれが精根となつて、胸中火動の種だ。賢者もをもちゐても治しがたいわえ。ちかきさいがしてどうもいへねえ。實に浮気深窓のよきほどだ」といふを、茶屋の女聞きながへて「何、なんがらくがんなとありました。わりいふくだ。こつちへよつてゐや」と云ふもをかし。「よくいろ〳〵な事を云ふ和尚だ」と、うなつねだらで聞ければ、春夕はしやべりやます」ときに梅ごん、一笑の說話がありやす。足下も知つてる

る、それわつちが二丁目の妓の、べん／＼だらりでもつまらねえから、一點の赤心あらばと、たんだいを云ひかけやすと、一夕閨中にいつてから、見なんしとかなんとか云つて、燈下へおのが玉手をさし出すと、不佞が名をほりやした。そこでしんせつは嬉しいが、おらあしよせん死ぬつもりだと眞顔でいふと、甘んじて刃をうくべしと云ひやす。予藥王樹はつたへざれど、なんでもかれが胸を見すかすに、昔の五漣點ではねえが、どうもさうするはずは無しと思ふやさき、雑戸等が風説を聞くと、われに臥具をあてがふ心ださうさ。そこで足をひいて、京町へ新造買ひにいつた所が、木人石女に物がたりするに似て、こおろしが嫗ァかりるか、らうがいやみが牀をぬるやうに、暗いとこ許り嬉しがるから話せねえさ。何二丁目からは、今來いの晩に來いのと、ひとり子のはうきうを受取つたよりは、もうちつとうるせえを、うつちやつておくと、後朝に不意くつかまりやした。お定まりの振袖で、どうでもするがいいとぬからぬかほで、河東〽なるもならぬもすゞしめの。」と唸つてゐやしたが、たうどう大ごんを少々むさぼられやした。」などとせきこんで話すに、梅太郎は「うゝいい。あきがていい。あるやつさ」などと、あひづちを打つて居る中、はや新寺町邊へ來る。東どなりはかざや、西どなりは門口に、池上永代千日講の札をうち、くろ／＼とぬし籠につんであるは大工と見え、この間が春夕がうちにて、表出格子三尺のひらき、うちは小僧一人。もつとも梅太郎は、たび／＼こゝのうちへも來

るゆゑ、甚だ心安くあいさつなしに上へあがり、そこらを見廻し「ホヽウ、のり入れの腰張は、目錄、のぬけがらか。髪結床なら津川うまゐといふ所だ。貸本やが小冊の袋、てえけえ役割が定つて居るからいい。床の間は澤庵か。こいつあ心もとねえ。もり口ぐらゐのものだらう。和尚も少し道具家だから、上ぐらゐの、しかものべとお目にかけたらう。」春夕は此のうちたばこぼんへ火をいれて來り、「もうわらをたきかけるぜ。足下もでいぶ口がわるくなつた。」と机の上からふみをとつてやる。梅太郎受取つて「うすやうすのりのはうゐのしをりになつてゐるからいい。」春夕はうしろのはうから、わたしをいつぺんなで「梅さん、私がよみやせうか。しかしちくしやうめと云ふ、私註がへへるだけよけいだけ。お前の破も實にいつ個の墨客だ。どけへ出しても松花堂と見えやす。今日のはせきこんで書いたと見えて、からくさのやうな字があるぜ。それで弘安の年號があると、池上から輪が出るになどとしやべるに、梅太郎一心に讀んで居て「やかましい和尚だ。」と小ごとを云ふをり、表から「御免なさいまし。表町のいせやから參りました。只今一寸お出でなさつて下さりまし。」「ホイ、こいつはいかざあなるめえ。おめへ直に藥箱を持つて行つて下せえ。梅さん其處に鴈皮紙があるから、なんとか返簡をおいておきなせえ。」となりのかおやで、不動樣の夕立にあふやうなおとをさせる。と、おきややはのしやれを云つて出て行く。梅太郎はあとにのこり「小僧どん、茶をくんな。」と、二日存んでふゐ

なひろげ、扇をあごへあて、こゝをしきつてかうせゑてと、云ふ身で讀んで見るに、この日ごろせかれて居る梅太郎を、隱してあけしことあらはれ、新造にさげるいこしもとにするのと人もめゆゑ、いつそのくされくらがへとふておほせ、あすはそんじよそこまでさがるから、しよせん生きて居る心はなきとの文てい、扨はわれ故と、といつおいつの思案の所へ、一春夕老人は在庵かねと、表からぶらぶらはひるは、こゝのまたとなりに劍術やはらの道場を出し、古學もちつと讀め、じまんに表をたけがうし、内をやはらだゝゑになし、あしたいくさが始まると云ふやうに、汗水をたらせども、小人に店債をせつかれ、蘇秦張儀がべんをふるつて、いひわけをするもをかし。「イヤ、これは梅太郎樣。春夕老人はお留守かね。」といふに、梅太郎も折節こゝの内にて心安くせし故「先生今日はおやすみか。」と笑ひかくれば「ハイ、今朝愛宕へ小太刀ととり縄の額をあげまして、それから須臾休みました。」とは、つきもなき話なり。梅太郎も世事物故、心のくつたくをかくし「さう申せばおまへさん方は、そんな重い物をおさしなさつて、腰が重くはござりませんか。」「ナニサ、幼少よりさしつけてをれば、左樣も存ぜん。」と、四角ばつて答ふるに、梅太郎はわきざしを取つて見て「しかし私どももさして見たうござります。こいつがあるとわたし舟と假橋で、二文かばひができるし、この事を三年早く思ひつくと、親に苦勞をかけませんに。時に先生、夕方からはなはどうでござります。先生ふしんさうな顏

でゝ上野飛鳥ならかくべつ、夕方から花とはいふまでござるなどと云はれて、さつても箱根からこつちに、皿屋敷といふ田見世が出たれば、野暮いせの賣りもはやるさうだと、心にをかしく「何よおまいさん」町の事でござりますに「エヽ、其の町とかなたとか申すは、吉原の字ではござりませんか。イヤ、帶刀いたしたものの、參るべき地でござい無て。郭はけぶりの色とも書き、花と柳の巷とも見えまして、かの色の名を事と致し。と、なにやらむづかしい事をならべたつる故、與太郎はだいく／＼かうに、本田の娘のをこの名はあながら見るより、もうちつとあきが來て、「私どもはそんなことは、何たか聞いてもわかりません。四角な字でよめるのは、目と云ふ字ばかりでござります」といふた、いれぶりを仕ながら小ざうが聞いて居て「喃さんえ。私も此の間四角な字を一字おぼえました。一諸に朝はきいて「かうと、きさまの四角な字で知つて居るは、當と云ふ字か當の字かそこで見たから」小ざうよじのて、「イヽエ、さうぢやァござりません。大たきさんの障子で、品と云ふ字をおぼえました。

二、心中の段

野良町に孔雀茶をせられたる花良心容は、遠陵屋舗の嬢の如く、伊左衛門が遠ツ懐ひもこゝに止みたん。○さあらて聲と下ると、瀬左兵衛が執娘は、江陵の意氣地を知らぬのか。そもさはいへ今娘子の

ふる事まれにして、萬客へもよろしいやうにもつてまゐるは、たとはば願人坊主の御鬮に、凶の出た事も無く、淺草市の手桶に、死といふ字の書いてあつたためしなし。商賣がらの空語なれば、だますもとは質なり。錦の被、羅綾の襠、天よりふらねば地よりもわかず。皆客の懐が當なれば、苦勞さんすといひ、つまりいせんといひ、しんに聞いておくんなんしとうつたふれど、訓解すればくれろの一言に止まる。夫れを聞くを客とも大盡ともいはんか。花と柳の街の賑ひ、ことふりたれば更にいはず。空手振のれんの染色にあかるく、修行者暗にせきやう日をおぼゆ。春の日もはや呉竹の、ふしみ明を見れば、大きやかなる提灯茶屋の縁に禿犬にからかひをるは、何れの妹妓色男に逢ふてふ、眞猫のほた／＼ならんと、樓のいとゞ心惡し。其の中にかた／＼の棚は、一斤々々のとつくり所々に並べ、行燈には袖の梅、うで菜ありの書つけ、飛行油、妙ふり出し、御鬮はみがきのかけ札ある貴人家より、雛妓のあわたゞしく走り出づるは、地色の届け文のなか宿なるべし。子供のひつはりおやお客の羽織にすがり、ばァさんのみせ先、あそんでいきなのしりごゑにやはす。客をさしてあの子といふは、にさいへのはむき、女郎をさしてばァさんと唱ふるは、年増へのしこなし、若者とのいきこさは、背上りの間違なるべく、七福神の寶づくし書いたるかべに掛りある三味線は、琵琶ならぬぞ殘念なれ。寂寞たるかげ見世は、煙草の火うす寂しく、時ならぬすががきに、鹽花ふつて格子をたゝき、

門に附木をたくあり、しよく顔にみす紙をちやすあり。おまんまとんかゐくうの錢をかりられ、大ふかしと化ければ、かんましとんで百一斤と稱る。八ッ打つて內原への暇乞に時札のかはり、過ぎ通りし、しまひ札のへかざるは、未だ金のたらざるなり。じやけんだたうの流言は、大虚にも聞かす。折ふし向うから來るはいきみと見え、さき若い衆にかつはきんもつと、つゞらの內へおしかくし。

ト書　味噌こしもへとおしもんで、八やらう見や、あのあねさんは味噌こしで買つた豆腐か、白こはかためもつこうとみてゐるぞ。跡から來る谷一人、格子の前へ立留り、四角ばつたつらに、白あばたがあるから、あきやゝがれ。せいくらべなら横にきたさえ。かけつくらならこれけるかみえ。なととそめきあるくは悪しく。さしやうやく、世間ひつそりとしずけくなり、稻荷の神燈かすかに殘る。此の頃あたりの裏にびやう打の腰障子をたてしは、這入口にぬり下駄二三足、亭主はどてらでくらがりへ齒文を書いてゐると、表から同じになだけの男一人、八ッ七ッぐらゐと見えて、ひぜんの跡のある子を連れ、親方内にかいと上へあがれば、女房茶をくんで出すを、一ト口呑んで下におく。時に親方、これ一たん話しやした奉公人はこれでござりやす。まアこつちへあがりな」と云はれて、薪木箱のあけ板の上へ坐れば、女房すゝはぶたの鍋ものくれると、蓮根を鼻紙へのせて「これでもくひな」とあいさつに出すを、だまりんでかぶりをふり、涙ぐんでゐるは、かはいや年一ぱい二兩ぐらゐの奉公人なり。

「モシ、あのせんどの奉公人も、とつておくんなさいやしな。江津へていしにやつておきやしたが、あすか。四切の二〆おやァ、くはへてゐてもをさまりやせん。もとかたあらつておきやしたが、ふみ玉なぞおやァござりやせん。此の間貫平なざァ、川へふつた女が亭主もちでも、をかたからはれてぶつつかつたうへで、二年を貰はうと云ひやしたつけが、どうしやしたか。」亭主は證文をまきながら、「フヽ、そりやァ藝者證文でへへつて居る女だらう。おめへその江津なァ近地へふんねえ。五切の四〆だぜえ。ふせとちがつて廻しがねえから、かずはあがらねえが、ぬすみもたァありやす。ソシテあつちはにぎやかさ。尤も八ツむかへめへだが、せんどあちへよつて見やしたが、札がきれてゐやした。」と、かつにのつて咄せば、表から來た男も、喜世留を廻しながら、「そんならさうしやせうかえ。」亭主は火鉢のふいごをいごかし、「おめへ直ぐ金をかりねえけりやァ、四匁だアな。うははがてえ〳〵金の利にひけやす。中どこが五日に五百、上どこが八百サ。三味線も一ト勘定百五十で立派よ。」などと商賣むきの咄に身のいる處へ、二階からおりる男は、こゝの内へさがつてゐる女郎の客にて、さうおうに心づけもする故、「マアようございやす。」などと、捨言葉ありて歸る。さて此の客を送つておりた子供四人あり。一人は楊國忠が肉障にもすぎもののふとつてう、細腰を專らとする楚王も、かぶりをふるやせ容、まさのかづら手にもつて、千早振てふ髪の毛のはけしは、まみえを矢筈に引き、米か

ゑへ梅干をはり、此の内、こぎこんのきいたのは、年二十一二、色青白く、草たばねの白歯は、春待星のむろ咲と云ふ花魁なるが、梅太郎とかりそめならぬ中となり、夫れがくらがへの種根にて、こゝの内へさがりてゐるなり。是れも今の客のおそうになりしと見え、楊枝をかんでしたながしへはふり出し、とうこの鐵臭き湯でうがひする折ふし、表のかたを小聲にていたこの下の句ばかり「蓮のうてなのあら世帶」此の聲むろ咲の耳へ入るとひとしく、「ア、ラあやしい」男の聲なきして、てうづのふたにて表へ出で、「梅さんか」「かのをとこ「室咲、コレ」「是れをきつかけに此の道具ぶん廻すと、

本舞臺三間の間かき落しの土手、此の上に常磐津連頭よくならび、よき所見合になり、石の地藏、廻りおとし、土手を木にて、すべて淺草田圃の體、蟲の聲一つ鐘にて道具とまる。

時に向うばたくくにて梅太郎出る。あとより若い衆一人、吉といふ字のはんてんにて、六尺棒を持ち、花道の中ごろにて、

—□「梅太郎。」

—△「大門口からかんばつた。」

—□「むろ咲はどけへこかした。」

—□「おいらにわたして。」

一「かんねんしろ。」

トぶつて掛る。とゞ兩人をむかうへ追込む。引違へて又ばた／＼にてむかう喚走り出で、梅太郎につき當り、びつくりして顏を見合はせ、

梅「そなたはむかう喚。」

一「梅太郎さん。」

上るり　ちりに行く、うき世に思ひおく霜も、いのちも消ゆるあだし心も今は又、離れぬ中の梅と菜、義理となさけの中たんぼ、うち連立ちてあゆみ來る。

中せりふ「せかれた時の悲しさは、一寸睨すも立ちかくれ、いつか世間をいろ／＼と、ほんの女夫とならでかや、この手をしめてしめかへす。それも格子がじやまになり、心でむなぐら取りがちに、かへりも千代喜はよさんせと、一日あはねば氣にかゝり、文のふうじの上書は、男の筆にしのぶ摺、道のくになるあさあらし。」

トむまい最中へ、このあたりの口ききらしき男、稻村のかげよりとんで出で「みつけた／＼。殺しはしねえ。また所のやつかいだ。それだからこゝを、心中地藏とわりい名を付けた。ふう

○わざい。ぜんてえ心中ではやるさうだ。其方此の間しんだもこなた衆だらう。

二、かこはれの段

一寸したことがかうじて芥川棹三郎宗蔵は、とあてのあるを幸ひと、郭の方へもわたりをつけ、本町本棚へは、昔とつた杵川の叔父を頼み、これ切りの願ひも、母は耳へたこがいつてとりあはず、果ては今の職業へぶつかりしに、そこが子故に迷ふ夜のつる、ついた親は一文も、捨てゝしまつて、玉祭りしつうじん櫓に、初松魚くふやうな性質なれど、それでよむ事ならばと、ちゞ箱に似た物取出して見ますれば、なんとぞての腹をさぐつたけうとの、叔父の高慢に梅太郎もまあこゝで、室咲かのたうには、近所の亡きへ親父の心、はゝき木のありとは知れて、先うたうず囲ひの身分となり、風雅でもなくしつれすぎた跡は、もう、とまなしの山の宿とか山谷とか、所はしかと忘れたれど、先づ木戸をはに離ずれしの梅花、土蔵二つ目へ、鍵の如く通りの人がうつり、菜に蒸汁まぜひかゝは、住ふとく聖密く眠りたるたる真宗師にて、其でも瀬に書道茶、門に古き連歌引きはへて、価値果の画にて雨[illegible]わと云ぬ住のやせぬは、かけしをやとくらべて見れば、なかなか天とにごれる地ほどの違ひ、こゝにこの尤き宗匠は、此い先に有徳福と名をとりし俳諧の、元来梅太郎が女房にもあらず、其の因縁を尋ねるに、近所の隣の同人となのりしが、寺町の得かも山田の霧道に似たりとて、たゞ是よりして俳道の道人の

縁をとりて、耶輸陀羅女の下略なりとぞ。此のおやしゆかの神道者と男女交合せし事を、かゝアの鈿女命ほの聞きて、いきのはたたちにもなしかねまじき面持して、野郎よばはりのやきもち、こごとは八ッの御耳をふりたてて、聞いても居られず。朝夕の飯にはおはれ、神風の伊勢屋よりは、流れのさいそくにおそれ／＼なまなすと、手にとる鈴もならぬしんだいの、おもにゝつけ上食客の卜者、表へ出て人の當卦本卦はうらなへど、己が身に幸福の至らざれば、机をうつて嘆息し、今日は曇つて人があつまらぬと云ふ事は、天けんがまぶくて丫がかまらぬと云ひ、雨が落ちてくれば、サア水はれたとのことばは、己が要とする神相要書、梅花心易にも見當らずと。こゝの間にゐお口ありて、這入口に孫店一軒、ない袖のふつてくらせぬ放鳥賣、おやぢが向うの鰻屋の仕出しをみて、不審に思ふも尤もなり。そも／＼この裏は、囲物又は茶屋土弓場の女など居る故に、玉ぞろひと云ふ處にて、孔雀長屋とも、辨天長屋とも異名せり。這入口は狹けれども、眞中に空地ありて、かぎの手に新道へぬけて、角に稻荷の社、麹五吉、源加一、てんこう、のり吉など云ふ札八九枚もあり。かのむろ咲は、本町より男女五六人もつけおかれ、あき地をすぐに小庭となし、裏でこそあれ造屋の創意、茶房がゝりに備後の五分べり、葦簾の御座、さらし竹の緣頰折りまはし、土竈には鼈甲地錦をからませ、鳳尾草玉簪花をあひしらひし、石盤は靑苔衣に似てねうちあり。床の間に棊局、象戲盤、玉琴、三絃などを

らべしは、一體潔癖と見えたり。室咲もやう／＼七夜のとき〻名のお町とあらため、急に白徒めかす
とすれど、又どこやらにぞんざい言葉がやまず、氣の大きいは、あら鐘ならぬあらがねを、土塊の如く
つかへば、人の齒を商賣に下るかゞこんの後まめ場所となり、けふも開かれつめかけるは、長屋中で
鐵棒のおなること、仇名をとつただいのおしやべり、亭主はもと肴賣にて、今は夜かごを商賣にし、
夜晝かせぐまめは、鬢髮の足早く、日なし二七のふた口入れ、米屋は溝川のていせうをとふ、九
尺二間はおさだまりのかんりやうく枕見るやうに、燒印のある戸のかたはらに、鰯のかしらの殘りしは、
伍子胥が呉門の面影を思ひ出し、壁へだつる隣は、あきやがゝつてぶしの尾ッぽたまりもなく、喧嘩壇
には說教の無い表名が三間まい、うわだと蒸かけたる德利に、ござ花をさしは、内儀で死んだ
先の佛へのはなむけなるべけれど、飲酒戒をやぶれといはぬ許りの仕かた。冬はかとや炭團に寒さをし
のぎ、夏はあがりはなのへつゝひが邪魔になれ、いつそに蚊帳をつるもそかし、されどこのおなるは
器あるし面にて、ゐすになれば買ひ食ひのあかんの皮を、以て身て所へはふりこみ、せかけ目をふ
やされたるはかわになれらず、頭かくして尻までかくしつゝもなれど、流しの瓜の種へ、するほうで
水をぶつかくると同じただへなり。扨亭主がもどれば、お前足ついでに水を汲んでと、降りさうだ
から干物をとり込めこみと、あだかも奴僕の如くひつつかひ、おらア一日かせぐものだ。手前其ので

らるゝことはしてもいいつ」といへば、おなる大きにいかり「エヽ、てめへもしこなしすぎた、おきやアがんなせえ。あぶらむしこそはひれ、へつつひと戸棚もおれが物だ。お前のもちやア、へやこの二のうでを見る様に、ほりものだらけのはんでえばかしだ。かついで出て行くも大笑ひだ。おめへそしてあしたけへすといつた袷はどうした。ナンニはたらきもねえくせに、おきにしなせえな」と、これだかにのゝしり、何誰の良人はどうだの、くれがしのだんなはかうだのと、まゝ子いびりを並べたて、あげくのはてにはつかみやつて夫婦喧嘩。仲人はもちろん店うけまで駈出す事、月の中に指を折り盡すべし。たま／＼袷の丸洗ひをあてがへば、百足がわらぢをはき、蛙がはらの灸すゑるよりおつくふに思ふなど、このともがら裏屋にはまゝあるものなり。おなるは上りはなから聲高に「おさんどん、又居ねむりか」と、捨言葉をいひながら上れば、お町は提灯屋で定紋をかかせたをごけへかたづけ「イヤおなるさん、よくおいでだね。なんだかいつそ寂しいよ。さんや廣島へ茶したしをかけやす。今日は何をおごりやせう。モシ今まで大きな聲をしてるなすつたね。よく私どもまで聞えたよ」と、一ぷく吸付けて出すと呑みながら「なアに肴ァよんで見やしたのサ。あぢはのぢめでたけがねえから、いけなかあ是れでもいいが、つけへものだからよさうといひやしたら、内でくふにえへをかへといひやすが、こいつもだうらんでくへやせん。是れはしにがひなり。あの肴屋もしみつたれになりました。「

「おやおや、わたしどもは、鐵といへば一色だと思つてゐましたがねえ」おなんは鼻の穴から煙を出しながら「だしがねはにまでかんぞうだのかしまだのと色々ありやす。しかし買はうと思へば、せんだいの川のうちでも、ほりトはこまけえが、いつちうまいね。夫れはそれだと、わたしが隣の小間物屋のお杉さんね。ぜんてえおひやしきのおまえんまたきだつたさうさ。それようかくさうと思つて商賣下の頭似をして、一ッぱかりあるはり物をみせびらかしたり、湯へ行くとも湯女も、ていねえにつかふうちは大窮くだね。さうしたとつてあの子なざア、けびきつてゐるから、長屋とはつきやア見えやせん。たゞそれにをかしいのは、房州生まれだからだらうだか、すそ縫せつける間、さんたかわかもねえ、飲とうたふが師さやすしなせえといへど、このおなから、元は長屋の上披にて、線香の灰のあるゆるのに、かゝつてゐるくわんすでしも湯をつかひ、しつぽを切つた鐵で、おでんあんばいよしを買つて食つた中間にて、悪帯ものんで浮世節をおくにも、頭蓋がこさんと、頭たきをする事などあり。お前はにつこり笑ひながら、なる程世間にはいろいろなものがあるねえ。又わたしどもなぞア、あかいふ事くするうちと思つて、まゝでも心づかひをしいすが、とうかまゐるとしたやうなおはのとふつたり、馬鹿らしいお口癖になつて、叱られまいと言ふに、南無三口が滑つたと、度氣の毒になり、なまじにそのやうなきになはのたまふと、いひまじくなひをして居る處へ、噂をいへば影とやら、小

物屋のお杉、「おにぎやかでござります。おや／＼お町さん。今日はでえぶおやつれだね。大かたゆうべ旦那がおとまりで、寐ぐらゐはおやうぶだらう。」「おや／＼いやだねえ」と、なんの事か知らずにだふもあるやつなり。おなるはだんまりで居たりしが「よゥお杉さん、おめへよんべやどゐくといひやつたの。おらアよく聞いて居たぜ。」「何さわたしらが所の松さんは、此の間は氣でもふれたさうさ。からつきし内にやアゐやせん。そりやアなにもやくのやかねえのと、云ふ處おやアありやせんが、がきや子供のねえおやアなしで、わけをいひやしたのさ。」おなるはすこし鼻へかけて、「何おめへのちわ喧嘩も久しいものさ。」「此の時お町は手を一ツ拍ち、「おやうらやましいね。」と、あどけないも、それしやなり。此のかみさまもかく云ふはまけをしみにて、いつたい屋敷につとめて居る中より、芝居端で今の小間物屋の足になり、をばごのみつりの柳茶うらに金絲紋、飛金もうるの帯ぐらゐは持つて來りしが、夫れも貝物と變じ、一年は二度のしらはに土弓の出なとなり、今もいほじりまきにすると、丁金のをれたかさし、四寸的が煙草入となつてゐるなど、かかる中なれば、人よりはりんき深く、たとひ火の中水の底と、燒豆腐燒くやうな文句も、いひ合ひしならんか。おきんは煮花を持つて、「はい出來ました。」と出すを、お杉はうけ取り、「すやあたまがごゐだらけだよ。」と、ふいてやりながら、「おきんどん。お前まへさしへうきが出たよ。びん附をぬつて火であぶりねえ。おめへいくらでかつた。フゥ

八兵衛が「かたの字八おやァ高え、月重七分がこのはつちやァねえ」とは、勧学院の雀なるべし。すぐ三人のしやべること、朝市のせりものはものかは、この馳せつかう事にもかきとれず。既に日本心に至り、行きかふ路次下駄かしましく、木つきは越後の山にこだまを流し、槙木割にはやきのしたに、身の力をあつむ。あき人の聲さまざまにて「ふるほねおもちやと取りかへましよ」「もうのすけかへ」「とりかへ八兵れんぼで居でこざい」「お前はにぼたを存んでるたいしか」「おやおやいい所へきたよ。茶漬茶碗を買はねえければならねえ」「さんやよんでくりやァな」「おたなびつとつて」「お前うん出いつでも、狗の遊びやうが入ねえ」「いたしかつけてあけませう」と、台所へいでて「おれへきやらなァいくらだ」「そつらのあるつきやいいのよ。茶わんはお屋にわらごへやこれながら」「二百五十でござります」「これちやァたかえ。百三十二文にしな」「よこしなしをよしこ」「なんぞお下もいでも、出りもののこゝきせたの」「田舎へ廻るもひさしい洒落だ」「こういふはおさなだ」とかせと、お隣と二人にいひふくされ「もうすこし御贔屓」を、指で口に進げいだせば、こういふはをの下ァ板へいけつまつて、むさんなるかな向へあたり、間行のとんぶの六向の間、おのと横ぶすれれてしまへば、おそる三門口に見て居たりしか、お前さんく、あの茶わんはあすが目ねえはるで、こうれたと思ひさせたきねつむかねをつけたも、これなかれこしまひやしたこと前はできぬし」「これならかつてがいいと」

つたもかえ。」おなるは、「あい、知れたことさ。」お町はしあんのありさうなかほで、「ほんにかにねえでよかつたねえ。」

此の末の原稿、背尾とは妄說、かけこの無い所は、此の小冊お氣に入り、書房の米櫃をうるほさば、後篇はいかなることや著く、こゝでしまふがナソレ狂言の。

やまあらし　終

昭和二年十一月二十日印刷
昭和二年十一月二十三日發行

（非賣品）

近代日本文學大系
第十一卷

編輯兼發行者　東京市麹町區内幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社

右代表者　東京市麹町區内幸町一丁目六番地
野中次郎

印刷者　東京市本所區番場町四番地
井上源之丞

印刷所　東京市本所區番場町四番地
凸版印刷株式會社本所分工場

發行所　東京市麹町區内幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社
電話銀座　七八三番
二一八八番
三六八六番
振替東京　五二二九八番

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02994 8742